

イングランドにおけるガーデニングの歴史

アリシア・アマースト著

“*They set great store by their gardeins*”

Sir Thomas More

彼らは自分たちの庭園をととても大事にした

サー・トーマス・モア

第2版

ロンドン

バーナード・クオリッチ社, ピカデリー15番地 W.

1896年

序文

私がガーデニングが好きで、また庭園に関する古い文献を勉強することが好きだということを知っていて、パーシー・ニューベリー氏は、1891年の春、彼の書きたいいくつかの論稿について編集することを勧めてくれた。その論稿とは、エリザベス王朝に至るイングランドにおけるガーデニングの歴史について書かれたものであり、1889年に『ガーデナーズ・クロニクル』 *Gardner's Chronicle* [1841年創刊の園芸新聞] に掲載されたものであった。そして私にそこから先の歴史を書いてはどうか、という話であった。私はそのテーマについて大いに興味をかきたてられ、新しい資料もたくさん集めた結果、当初の計画を大幅に拡張することを決心し、続きの歴史を書くだけでなく、その前の部分についても全体的に再度詳しく、改めて原典に基づいて私が得た情報を参照しながら考察することとした。したがって、まず第一に、ニューベリー氏に対して、彼の論稿と注釈を自由に使うことを快く認めてくれたことに対し感謝申し上げたい。

この本はイングランドの庭園の歴史について書くことを目的としたつもりはない。それはとてつもなく楽しい仕事となるであろうが、そうではないから、多くの有名な庭園について以下のページにおいて触れられてはいない。ただ、例外的にいくつかの実例については、庭園の様式が年代を追ってどのように変わっていったかを説明するために紹介されており、また様々な事例があることを示すためにその他の庭園についても列挙されている。むしろ著者の希望としては、ここに扱うテーマの広範さから見れば不十分なものと承知の上、この本が庭園を分類して、それがいつの時代のものであるかを確定する手引きとして何らかのお役に立てればと願う次第である。多くの場合、ある庭園について正確な年月を

特定することは常に困難なことと思われる。それは建物に隣接している庭園というものは、極めて早い時代から存在していたことが多いのにもかかわらず、その変化というものが、たとえ少しであったにしろ、あまりにもゆっくりとしていたがため、現在の姿が一体いつ形作られたか明確に特定することがほとんど不可能であるからである。ここで多くの友人たちに感謝の言葉を述べなければならない。彼らはとても親切に、庭園に関する情報を教えてくれたり、また図面や写真を提供してくれたり、あるいは公的、私的コレクションとして所有している写本を閲覧できるように手配してくれた。

同時に英国学士院会員の J.G.ベーカー氏が校正刷り段階の原稿全体を見てくれたご好意に対し感謝の気持ちを込めてここに記しておきたい。校正刷りの訂正は、私の友人であるマーガレット・マッカーサー嬢が懇切丁寧に協力してくれたおかげで楽に進めることができた。私の感謝の気持ちは次の方々にも捧げられることになる。スキート教授とジェームズ・ブリテン氏は15世紀の写本に出てくるいくつかの植物が何であるか特定するお手伝いをしていただいた。R.E.G.カーク氏はラテン語で書かれたものを解読する時に助けていただいた。マイケル・カーニー氏は17世紀末までのガーデニングに関する出版物の参考文献一覧を改訂するにあたって助けていただいた。残念なことは、1699年以降の続きについては私がこうしたいと思ったほどには時間と努力を注げなかったことである。その理由は、数か月の間、私が海外に行っていて留守にしたため、かなり急いでその部分を仕上げなければならなかったことによるものであった。

アリシア M.T. アマースト

ディドゥリントン・ホール ノーフォーク

1895年9月

第2版序文

第1版はあっという間に売切れてしまったので、多くの点を書き足す間もなく第2版を求める声が出てきた。とは言え、いくつかの修正がなされ、その主なものは、初期の写本から引用したカンタベリー大修道院の配置図の一部を入れたこと、第1版では誤って使われてしまったブロムウィッチ城の図ではなく、正しいインゲストリーの図に差し替えたこと、そしてガナーズベリーの図を付け加えたことである。

第1版で見落とされていたミスプリントについて、わざわざ指摘してくれたすべての友人達に感謝の意を表したい。これらの点については修正に努めた。また参考文献に何冊かの本の名前を追加するにあたって助けてくれた関係者に対しても負うところが多い。

アリシア M.T. アマースト

1896年7月

訳者はしがき

英国における園芸の歴史に関して、学術的な著作として最初に書かれたものは、アリシア・アマーストの『イングランドにおけるガーデニングの歴史』（1895年）とされる。しかし、その古典的な重要性にもかかわらず、日本では今まで一部の専門家を除いては知られることの少なかった文献である。幼い頃から庭いじりが大好きで、園芸家、植物学者として名を成したアマースト（1865～1941年）は、社会的に有用なガーデニングに強い関心を示し、環境の悪い都市地域において煤煙に強い花の栽培を推奨するとともに第1次大戦中には市民農園や校庭の活用を推進した。

訳者がこの本の出会いは、都市計画協会の機関誌『新都市』に「田園都市は誤訳か～農地としての garden に関する覚書～」(平成13年12月号)を執筆した時に始まる。加用信文氏の『イギリス古農書考』（御茶の水書房）を参照した際、そこに本書が名著として紹介されており、英国の古本屋から原書を取り寄せた。本書の特徴は、中世以来の修道院や王室の会計簿などから丹念に、どのような植物が実際に栽培され利用されていたかを実証的に拾い出していること、そして様々な文学作品などからの引用によりそれぞれの時代に人間と植物がガーデンを通じてどのように関わってきたかを生き生きと描き出していることである。ただ、著者自身が「長たらしく、退屈な」と認めているように、菓草、野菜、果物の名前を延々と書き連ねた本書は、学問的価値は別として、一般の読者にとっては相当の忍耐が必要とされるものである。

したがって、随所に出てくる中世英語、ラテン語の翻訳の難解さもさりながら、今さら100年以上前の本を和訳することにどのような意義があるのか躊躇した。ところが、本書が現代においても学問的価値が高いことを認識した英国ケンブリッジ大学出版会が、2013年に本書初版の復刻版を、2014年にオンライン版を出版したことを知って、造園史、緑化技術等の調査研究の一助になればと願い、翻訳に挑戦することとした。翻訳にあたっては、公益財団法人都市緑化機構の全面的な協力を得た。特に同機構の柳野良明専務理事には植物名の翻訳をはじめ、本書全般にわたり専門的な助言を頂いた。一般に植物名の翻訳は難しいと言われており、中世に遡る本書の翻訳は柳野氏の助力なくしては不可能であった。また、ラテン語に関しては、川添信介京都大学名誉教授（現福知山公立大学理事長・学長）のご指導を頂き、英語に関しては、畏友大野喜朗氏がオックスフォード英語大辞典（OED）の膨大な例文を参照しつつ支援してくれた。このほかにも、ブリティッシュコロンビア大学名誉教授デイヴィッド・エジントン氏、中山理麗澤大学大学院特別教授・前学長、横山俊夫京都大学名誉教授をはじめ多数の方々のお世話になった。ここに心から感謝申し上げたい。なお、翻訳はできるだけ正確を期するよう努めたが、大小の誤りが残ることが予想される。誤りがあれば、それは偏に訳者のみの責任に帰するものであり、賢明な読者諸氏

の指摘を待って逐次改めていきたい。

以下、翻訳にあたって留意した点を列挙すると次のとおりとなる。

(1) 今回の翻訳は 1896 年 6 月の第 2 版に拠っている。著者の序文によると、1895 年 9 月の初版はあっという間に売切れてしまったので、いくつかの図面を差し替えるなどの修正を加えて大急ぎで第 2 版が出版されたとある。その意味で第 2 版が著者にとっての決定版と言えるであろう。

(2) 訳語については、本書の中心的用語であるガーデン garden について予め読者の理解を得ておく必要がある。ガーデンとは基本的には「囲われた土地」のことであるが、ここで注意すべきは、ガーデンの意味するところが歴史的には実用の場から鑑賞の場へと変遷してきていることである。日本語においても、古代では実用の「庭」と鑑賞の「園」は明確に区別され、「庭園」は明治半ば以降の比較的新しい言葉とされる（白幡洋三郎『庭園の美・造園の心』）。

言葉というものは、それを使う集団の関心が強いものについては、表現が細分化する傾向がある。同じ雪でも「津軽の雪 こな雪 つぶ雪 わた雪 みず雪 かた雪 ざらめ雪 こほり雪」（太宰治『津軽』）と表現される。したがって、英語のガーデンを日本語にする時に、一律に庭園と訳すのは適当ではなく、農家では庭とか畑、修道院では初期の頃は庭、時代が下れば庭園、貴族の館は庭園などと使い分けをした。同様に、ガーデニング gardening は農家や修道僧の農作業、素人の庭いじり、庭師や造園技術者の仕事を訳し分け、ガーデナー gardener も農民、園芸愛好家、専門の庭師、近代の造園設計者などと、その文脈に応じて使い分けることとした。そしてこの幅広い意味全体をカバーする必要がある場合で、一つの日本語を選ぶことができない時は、英語をそのままカタカナ表記にせざるを得なかった。また、英国とかイギリスという名称は連合王国 UK 全体を表す国名であり、大ブリテン島の中央部を占めるイングランドの和訳は存在しない。この結果、本書のタイトルは、『イングランドにおけるガーデニングの歴史』という単に英語をカタカナにしただけのような不器用な姿になっている。

(3) 翻訳で主に使用した辞書は『グランドコンサイス英和辞典』（三省堂 2001 年）及び米国ミシガン大学のインターネット版『中世英語便覧』 *Middle English Compendium* である。『ジェフリー・チョーサー全著作の語彙集』 *A Glossary for the Works of Geoffrey Chaucer* は、中世英語の一端を知る手掛かりを与えてくれた。たとえば現代英語 break という動詞は、breken65 回、breke20 回、brak11 回などスペリングごとに使用頻度が掲載されており、それをヒントに『中世英語便覧』を検索すると見たこともない言葉の世界が広がっていた。これは、訳者にとっては大変な驚きであったが、同時に、このような作業を繰り返すうちに、文字で表現される世界には言語間、時間的な意味の変遷、転記の誤りなどは珍しいことではないことがわかった。

(4) 本書には一般には馴染みのない、植物名、人名、地名が頻出する。植物名について

は、学生、研究者が利用しやすいように、初出の箇所に原語名を付記し、また広く知られている和名があれば、フェネル [ウイキョウ] fennel のように併記した。なお植物名索引の作成については、全体の編集とあわせて今井一隆都市緑化機構研究部長にお願いし、読者の便宜を図ることとした。

人名については、生没年、出身地（イングランド以外）、人物像などを英語名とあわせて訳注として付記した。一代限りの敬称であるサーSir については卿と訳されることが多いが、世襲貴族の尊称である卿 Lord と区別するため、サーについてはサー・ジョンなどとした。

英語の地名の読み方は不規則な上、英和辞典に載っていないものも多く、オンラインの発音サイトから聴き取った。英国の地域単位であるシャーshire は辞書では「州」と訳されているが、米国の州 state ほど独立性が高くないことから、たとえば Oxfordshire はオックスフォード州でなく、オックスフォードシャー州とした。これは淀川を Yodogawa River とするのと同じ感覚である。

ちなみに、今回の作業を通じてインターネットの威力、偉大さを改めて実感した。たとえば、iijs. vid.が何を意味するか皆目見当がつかず、万策尽きて単純にこの文字を入力したところ、あっさりと iiij が数字の4であることを示す中世研究の文献にヒットし、4 シリング 6 ペンスであることが解明できた。嬉しさのあまり、早朝にもかかわらずインターネット分野の大御所、IIJ の鈴木幸一会長にメールしたところ、「随分、ペダンチックになりましたね」と冷やかされてしまった。

(5) 本書の一つの特徴に、文学作品の広範な引用がある。これらのうち、シェークスピアについては、駄洒落の翻訳がユニークな小田島雄志氏の訳（白水社）に敬意を表しほぼ全面的に依拠した。その他については、和訳のあるものは適宜参照しながら作業を進めたが、各章冒頭のエピグラムや文中の短い詩などについては、行ごとに原語と日本語の対比が明確になるようあえて直訳的に翻訳し、原文を併記した。

著者が付した注は、原著ではページごとに*、†、‡などの記号で下部にまとめて記されているが、翻訳では、注の付された本文のなるべく近いところに記した。短い注は文の中に括弧書きで、長いものは文の区切りの後に置いた。訳者の注については [訳注] 等として適宜加えた。

最後に、改めて4年にわたるこの作業を支えていただいたすべての関係者に御礼を申し上げます。

竹歳 誠

目次

序文.....	i
訳者はしがき	iii
目次.....	vi
第1章 修道院のガーデニング	1
第2章 13世紀	31
第3章 14世紀および15世紀	41
第4章 庭園に関する初期の文献	63
第5章 チューダー朝初期の庭園	82
第6章 エリザベス朝のフラワーガーデン	112
第7章 エリザベスとジェームズ1世時代のキッチンガーデニング	135
第8章 エリザベス朝時代の庭園に関する文献	162
第9章 17世紀	176
第10章 ウィリアムとメアリー時代のガーデニング	207
第11章 風景式庭園の夜明け	225
第12章 風景式庭園	250
第13章 19世紀	272
(参考資料)	297
1. 図版一覧	297
2. 人名一覧	300
歴代国王・女王(即位年)	300
ガーデニングに関する作家等(五十音順)	302
3. 植物名索引 (作成中)	335
4. 参考文献	336

第1章 修道院のガーデニング

“Forsitan, et pingues hortos quae cura colendi おそらく、私は豊かな庭のことを歌っているであろう
Ornaret, canerem, …” どうすればこの庭を美しくできるであろうかと

Virgil, Geor., iv.118.

ウェルギリウス『農耕詩』第4 118~119

[正しくは118~119]

イングランドにおける庭園の歴史は人々の歴史とともに一歩ずつ歩んできた。平和で豊かな時代には庭園は増加、繁栄し、戦争と混乱の時代には沈滞した。この国を支配した様々な民族や統治した支配者が異なれば、庭園にもその影響がはっきりと刻み込まれてきた。したがって、イングランドにおける庭園の歴史をたどる時、どういう人々が庭園を造ったのかを常に視野に入れておかなければならない。それは、それらの人々の国民性や外国との同盟関係が庭園の上に足跡を残しているからである。

ローマによる征服以前において、英国（ブリテン）では庭園の名に値するものは存在しなかった。古代ブリトン人はオーク oak [訳注] を崇拝し、ヤドリギ mistletoe を神聖なものと扱い、タイセイ [大青] woad*の染料を体に塗ったことは知られている。しかしながら、これらの植物あるいは他のいかなる植物であっても、彼らが栽培するための努力を何かしていたのであろうかという、そのような事実はまったく知られていない。この国における園芸の歴史がローマ人が来る前に始まっていたなどは到底言えない。他の科学分野と同様にこの分野においても、ローマ人ははるかに進んでおり、彼らが他の国に追い越される、あるいは追いつかれることですらさらに数世紀の時を要した。

*ベーカー氏によるとタイセイは英国には自生していない。

[訳注] オークはカシと混同されることがあるが、英国では落葉樹のナラ類である。

古代ブリトン人は現代人にもなじみのある野菜のほとんどを栽培していた。大プリニウス [23~79年 古代ローマの将軍・博物学者] は、ローマにおいては「庭（ガーデン）とは貧しい人の耕作地そのものであり、下層階級が日々の食料を得るのは庭からであった」と語った。金持ちは庭園の豪華さや華美に耽り、野菜や果物は莫大なコストをかけて自分たちのために育てられたが、社会が全体としてその恩恵を享受するということにはなかった。ただし、今なお広く一般的に使われている野菜のほとんどは、すべての階級の人々にとって普通の食べ物であり、そしてその多くのものはローマ人によってこの国にもたらされたものである。そのうちいくつかのものはこの土によく馴染み、極めてしっかりと根付き、ローマ文明が衰退しても生き残ることができた。その興味深い一例であるセイヨウイラクサ stinging-nettle の一種は、言い伝えによると貴重な鉢植えのハーブとしてローマ人により持ち込まれたものであった。

タキトゥス [1~2世紀頃 ローマ帝政時代の歴史家・政治家] が1世紀に書いたところによると、英国の気候はオリーブ olive とブドウ vine を除きすべての野菜と果物に適している

述べている。その後ほどなくブドウでさえも栽培され、ある程度成功したように見える。西暦 280 年頃、皇帝プロブス [在位 276~82 年] は英国におけるブドウ畑の栽培を推奨したと一般に信じられている。プリニウスによると 1 世紀半ばまでにサクランボ [セイヨウミザクラ] cherry が持ち込まれたとされるが、この果物はこの国では土着していたから、これは多分若干改良された品種のことなのであろう。

英国におけるローマ人の庭園はヨーロッパ大陸のものと同じように立派なものであったと想定することはできない。この国の庭園は、プリニウスの別荘やローマ付近の皇帝の別荘に見られるようなテラス、噴水、そして彫像が配置された手の込んだ庭園のように造られることはほとんどなかった。しかしながら、イングランド各地で発見されたローマ人の家や別荘の遺跡は帝国の他の地域で発見されたものと極めて似ているため、それらに付属していた庭園もイタリアやガリアのものでできるだけ同じような形で設計されていたであろうということは疑いがない。イングランド南部には、ローマから 17 マイルのところにあった「ラウレンティナ別荘」と同じように、イチジク figs とマルベリー [クワ] mulberries、ツゲ box とローズマリー rosemary が安全に生育できるような場所が数多くあった。そこでは「スマレ [ニオイスマレ] violets [訳注] の香りのするテラス」、這いまわっているブドウやツタ ivy、あるいは動物や文字の形に風変わりに刈り込まれた木の中にバラ roses が一杯に埋め込まれている生垣は場違いとは見えなかったであろう。もし英国におけるローマ人の庭園がこのようなものであったとするなら—そしてそれはローマ人による別荘、モザイク模様の床、風呂、道路、橋の遺跡を見れば疑いようもないことだが—、わが島国において同じように美しい庭園を再び目にできるのは、そこからるか 1000 年以上先のことであった。

[訳注] 香りのよいスマレは、ニオイスマレ、スイートバイオレットと呼ばれ、本書第 4 章 *Plants from "The Feate of Gardening"* の植物学名の一覧表 (p.76) においても、Violet (*Viola odorata*) と記載されている。日本の固有種 *Viola mandshurica* とは区別されるが、本訳においては単にスマレと訳す。

ローマ帝国の没落とその後の蛮族の侵入により、ガーデニングに対してもほかの平和的な芸術と同じく致命的な打撃が加えられた。英国におけるローマ支配が終わった後の嵐のような年月の間に園芸に関するほぼすべての知識は死に絶えてしまったに違いない。完全に同化し順応してしまった植物だけが適切に栽培されない状態でも育ち続ける強さを持っていたのであろう。

ラテン語に遡ることができるいくつかのサクソン語の植物の名前により、どの植物が寒さの中でも生き残ったかを特定できそうであり、あるいは少なくともアングロサクソン人がローマの植物の名前の多くのものに通じていたことを示しているとも言えよう。以下のリストはアール氏 [John Earle, 1824~1903 年 オックスフォード大学教授 (アングロサクソン語)] による『植物の英語名』*English Plant Names* によるが、これらはラテン語を語源とすることを明確に示している。

ラテン語	アングロサクソン語	英語	[和名]
Amigdala	Magdula treow	Almond	アーモンド
Beta	Bete	Beet	ビート
Buxus	Box	Box	ツゲ
Cannabis	Hænap	Hemp	麻
Caulis	Caul	Kale	ケール
Coliandrum	Celendre	Coriander	コリアンダー
Cohœrophyllum	Cerfille	Chervil	チャービル
Castanea	Cisten beam*	Chestnut	栗
Cornus	Corn treow	Cornel	セイヨウサンシュユ
Crotalum	Hratele	Yellow rattle	イエローラトル
Cuminum	Cymen	Cummin	クンミン
Cerasus	Ciris beam*	Cherry	サクランボ
Febrifugia	Feferfuge	Feverfew	ナツシロギク
Ficus	Fic beam*	Fig	イチジク
Feniculum	Finul	Fennel	フェンネル [ウイキョウ]
Gladiolum	Glædene	Gladden	グラジオラス
Lactuca	Lactuce	Lettuce	レタス
Laurus	Laur beam*	Laurel	月桂樹
Linum	Lin sæd	Linseed	亜麻の種子 (アマニ)
Lilium	Lilige	Lily	ユリ
Lubestica	Lufestice	Lovage	ラビッジ
Malva	Mealwe	Mallow	マロー [ウスベニアオイ]
Morus	Mor beam*	Mulberry	クワ
Mentha	Minte	Mint	ミント
Nepus	Naep	Tur-nip	カブ
Papaver	Popig	Poppy	ケシ類
Percica	Persoc treow	Peach	桃
Petroselinum	Petersilie	Parsley	パセリ
Pirus	Pirige	Pear	梨
Porum	Por leac	Leek	ネギ
Prunus	Plum treow	Plum	プラム
Radix	Raedic	Radish	ラディッシュ [ハツカダイコン]
Rosa	Ro-sē	Rose	バラ
Ruta	Rude	Rue	ヘンルーダ

Sinapi	Senap	Mustard	カラシナ
Unio	Yul leac	Onion	タマネギ
Ulmus	Ulm treow	Elm	ニレ
Vinea	Win treow	Vine	ブドウ

*Beam とは、ドイツ語の“Baum”バウムと同じく、生きている木のこと

サクランボ、キャベツ cabbages、レタス lettuce、ネギ leek、タマネギ onion、ハツカダイコン radish、バラ、パセリ parsley のような何種類かの植物はこの国で栽培され続けていたであろう。ただし、ローマの時代に英国で栽培された多くの植物種は、チュートン人が侵略した時代に完全に失われてしまったので後の時代になってイングランドに再び持ち込まれなければならなかった。ヨーロッパ大陸においてもローマ帝国の解体後に同じような状況が生まれ、園芸の復活はキリスト教が拡大し、修道院が設立される数世紀の後まで待たなければならなかった。

この国においても園芸の復活は同じ理由によるものであり、イングランドの歴史の初期においては、疑いなく修道士たちが、社会のいかなるほかの階級の人々よりも園芸に関する優れた技術を持っていた。なぜなら彼らの生活が置かれている環境というものがその優れた技術を維持する方向に働いていたからである。すなわち彼らは静かな生活を送り、ひどく戦争に邪魔されることもなかった。またほかの建物が破壊され荒らされた時にも、修道士の建物は大事にされた。彼らの多くが技術と知性を有しており、本からだけではなく大陸との交流を通じて、どのような植物を育てたらよいか、どのように育てたらよいかを学ぶことができた。

大陸における庭園に関する最も初期の記録（ローマの時代以降）は 9 世紀に遡る。カール大帝 [在位 768~814 年、800 年からは初代神聖ローマ皇帝] の時代、サンジェルマン・ドゥ・プレ、サンアルマン、サンレミの大修道院の荘園のリストの中に、様々な庭についての記述がなされている*。

* M.B.ゲラルド編『サンジェルマン・ドゥ・プレ大修道院長イルミノン土地台帳』パリ 1844 年 *Polyptyque de l'Abbé Irminon*. Ed. By M.B.Guéraud

ほかの場所、たとえばピカルディーのコルビーや、コンスタンツ湖に近いザンクトガレンでは、庭が実際に存在していたことに関して、かなり明確な記録が残されている。コルビーの庭は大変大規模なもので 4 つに分かれている、と言うか明確に 4 つの庭に区切られており、それを整えるために、鋤が使われた。その鋤は、毎年一定の賃借耕作者が寄進を求められたものであり、別の賃借耕作者たちは、修道士たちによる草取りや植栽を手伝うために 4 月から 10 月まで人を出さなければならなかった (* M.B.ゲラルド編『サンジェルマン・ドゥ・プレ大修道院長イルミノン土地台帳』パリ 1844 年)。ザンクトガレンでは、「庭」“hortus”

は長方形の囲われた土地で、中央に道がある。その道の一方の端には庭師の家と農機具や種を置く小屋が位置し、そこから道は延びてきており、その両側には、9 か所、同じ大きさの細長い苗床が配置されている。「薬草園」“herbularis”はそれよりは小さく、壁沿いにぐるりと植物で囲われて、中央の道の両側に苗床が4 か所、そしてその中に植えられている植物は丁寧に記録されていた（†『考古学研究所ジャーナル』第5巻 *Archaeological Institute Journal*）。

イングランドでは、このような正確な記述というものは、どの庭についても残されていないが、いろいろな修道院の記録を注意深く検証することができさえすれば、11世紀および12世紀において、さらにはそれより以前のいくつかのものについても、庭や果樹園が存在していたことを証明できることになる。

庭は修道院にとって最も基本的な付属物であり、それは野菜がその住人が毎日食べる食事の大きな部分を占めていたからである。したがって修道院が建設されると同時にその周りに庭が造られたに違いなく、そしてこれらの庭は、当時の王国において、庭という名に値する、多分ほとんど唯一の庭であった。とは言え、そこに植えてある植物の数は極めて限られており、そして多分、大陸で栽培されていた多くの植物はまだこの国には入って来ていなかった。修道士たちが海外から植物を受け取っていたであろうと思われるのは、大陸の修道院と何らかのつながりが保たれていたからである。そして自分たちの修道院や教会のために宝物を持ち帰った時、その庭が忘れられることはなかったであろう。しかし、植物は主に薬として持って帰られ、それは乾燥した状態で輸入されたと推察される。それは英語のドラッグ *drug* という単語が、アングロサクソン語の動詞“*drigan*”、乾燥させる *dry* から来ていることから明らかだ。

この国で修道院が設立されて間もなく、伝道修道士たちは大陸に住むチュートン人を改宗させるために出かけて行った。アール氏の指摘によると、古英語と似ている名前のドイツ語名の植物のいくつかは、語源が同じというのではなく、それらの植物の効用に関する知識を携えて行ったサクソンの伝道師たちの言葉に由来するということである*。

*オオバコ属 *Plantago* のドイツ語は“*Wegbreit*”、アングロサクソン語では“*Waegbræde*”。カモミールの古ドイツ語は“*meghede*”、アングロサクソン語では“*magede*”

庭 *garden* を意味する古い単語は“*wyrtzerd*”、植物の場所、あるいは“*wyrttun*”、植物の囲い地であった。また、“*ortzerd*”や“*orceard*”の形は、私たちが今使う英語の *orchard* 果樹園と同じだが、その意味は、今では果樹が植えられている囲われた土地に限定されている。“*Wyrt*”または“*wurt*”はあらゆる種類の野菜やハーブを表す単語として使われ、現代の単語である植物“*wort*”と同じであり、これはセイヨウオトギリソウ“*St. John's Wort*”すなわち“*herb John*”というように多くの植物の名前の接尾語となっている。時には特別な植物がほぼすべての囲い地を埋め尽くしたので、キッチンガーデン [台所用菜園] は、時折「ネギの庭」“*leac tun*”とか“*leek enclosure*”と呼ばれた。リンゴ園のことを昔は“*appultun*”とか

“appluzerd”と言い、今でも“appleyard”と言うが、サクランボ園のことは今は cherry orchard、昔の言葉では同じく単に“cherryzerd”と言った（†庭師の会計簿 Gardener's Accounts, ノリッジ修道分院）。修道院の庭の一部は草で覆われ、そこには花は植えられないでグラスヤード graszerd と呼ばれ、同様に回廊に囲まれた空間はクロイスターヤード“cloysterzerd”と呼ばれた。現代の言葉であるガーデン garden は、このヤード zerd という言葉の別の形である garth あるいは yard であり、これらすべては囲まれた土地を意味するアリア系の語源から由来している。

このように初期の段階、さらにはこれに続く何世紀にもわたり、庭には主に実用的な目的のために植えられ、野菜やハーブ類は薬用や日常の食用のために育てられた。花の咲く植物はその美を鑑賞するためだけにほんの例外的に植えることが許された。とは言え、明るく可愛いらしい花は庭の囲いの中に必ずしも居場所がなかった訳ではなかった。バラ、ユリ lilies、スマレ、シャクヤク peony、ケシ類 poppies などこれに類するものは、すべて薬として使用され、ゆえに除け物にされることはなかった。

花の持つ美しさはほとんどすべての人が喜ぶものであり、最も混乱していた歴史の初期にあっても心を和らげる効果を持っていたであろう。ウィリアム・ルーファス [ウィリアム 2世 (赤顔王) 在位 1087~1100年] について素敵な物語がある。この物語により、彼の王政は、いわば東の間とは言え、波乱に満ちた治政の間に起きた多分ほかのいかなる出来事よりも、より優しい光に包まれたものとなった。後にヘンリー1世 [在位 1100~35年] の妻となるイーディスすなわちマチルダ [1080頃~1118年] は、ラムゼー女子修道院で教育を受けたが、その尼僧院長は叔母のクリスティーナが務めていた。彼女が12歳の時、赤顔王は彼女に会うことを望んだ。ある日、院長は国王とその家来が門のところで中に入れるよう求めていることを聞き動揺した。この善良なる女性は、子どもに対する良からぬ企みを心配し、イーディスに修道女のベールを被せてから扉を開けた。国王は「バラやハーブの花を見るふりをして」中に入った。この荒っぽい国王がこのようにして花を検分している間に、院長の指示により修道女たちは庭を通り抜けて行った。ほかの者たちに混じりベールに包まれて現れたイーディスが通っていくのを国王は黙認し、そして静かに国王は出て行った*。この話は院長によってアンセルム [1033頃~1109年 カンタベリー大司教] に伝えられ、それをエアドメア [1060頃~1126年頃 歴史家・神学者] に話したので、この素晴らしく絵画的な場面が歴史の中に刻まれることとなった。

*ミニャ『教父学全解』159-160巻12節「エアドメア」427ページ Migne, *Patrologiae cursus completus*, “Eadmer”、同じくドウ・アシェリ『拾遺集』第2巻(パリ1723年)893ページ D’Achery, *Spicilegium*、フリーマン『ウィリアム・ルーファス』第2巻32ページ Freeman, *Wm. Rufus*

「実際王はバラや花をつけているほかのハーブを検分するために私たちの修道院に入って来られた」

“Rex siquidem propter inspiciendas rosas et alias florentes herbas, claustrum nostrum ingressus.”

クリスティーナ院長が回廊に囲まれた庭をバラやハーブの花で飾る一方、ほかの修道院も

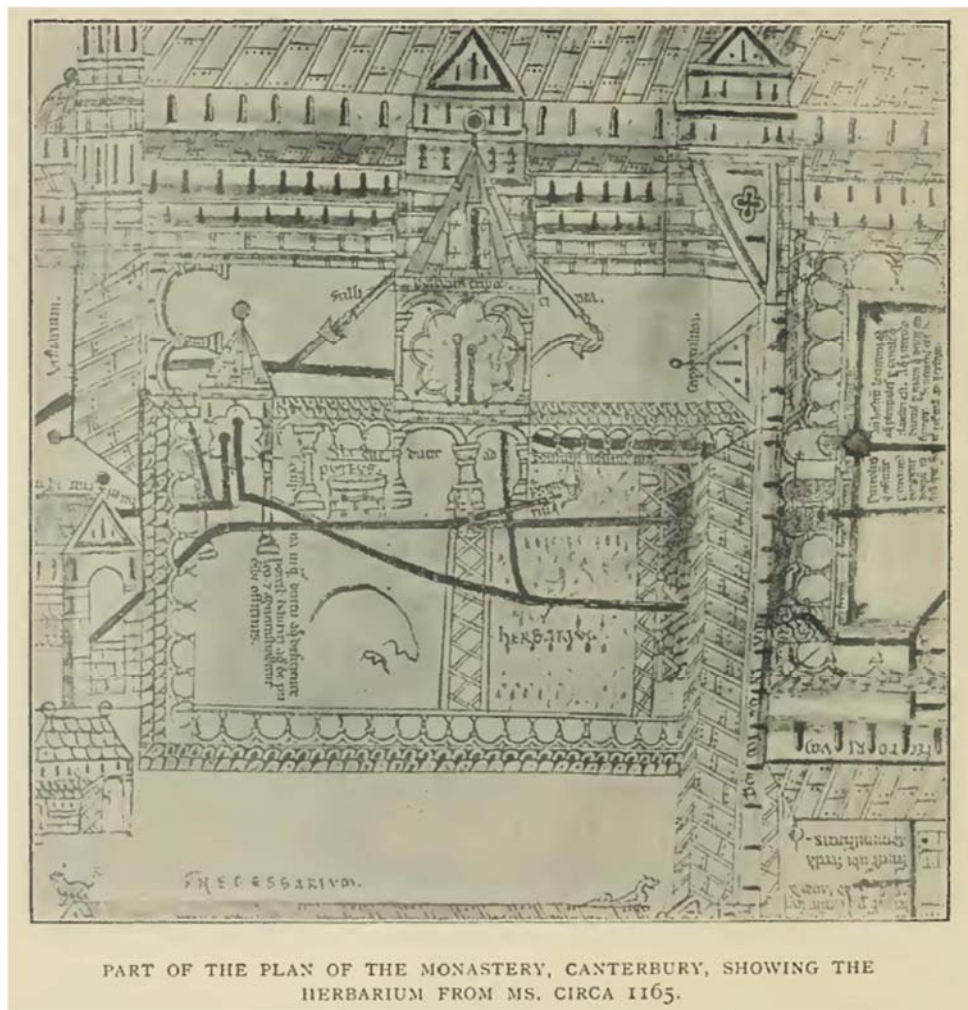
同じように美しく飾られていった。イーリーの筆頭大修道院長ブリスノダスは植栽と接ぎ木の技術でその名を知られ、大修道院の周りに果樹園や庭を造ることによって大修道院の価値を高めた†。

†ゲイル『ブリテンの歴史』1691年、第2巻第2章「イーリーの歴史」 Gale, *Hitoriaæ Britannicæ*, 1691. “Hist. Eliensis,” Liber II., chap. ii [『イーリーの本』 *Book of Ely Liber Eliensis* は12世紀にイーリー大修道院で書かれたイングランドの年代記・歴史、全3巻、著者不詳]

イーリーにはブリスノダスの時代（12世紀）の前から庭はあったようで、それは次のような風変わりな話からイーリー付近にはある種の庭が存在していたことがうかがえる。それは聖エセルドゥレーダ [イーリーの創設者・女子修道院長] の墓に刻まれている数々の奇蹟のうち‡、一人の少女の手がどのようにして治ったかに関連している。彼女はある聖職者の召使いであり、「日曜日に庭でハーブを摘んでいた。その時、手に木の棒を持って、法に反してその棒でぐいとハーブを摘み取ろうとしたところ、その棒が（少女の手に）固くくっついてしまって5年もの間誰もそれを引きはがすことができなかったが、聖エセルドゥレーダの功德で（少女は）救われた」。聖人は679年に亡くなり、この話には歴史的価値はないものの、この奇妙な伝説を語り継ぐ意味があることに疑いはない。

‡ダグデイル『イングランドの修道院』第1巻473ページ（新編）Dugdale, *Monasticon* (new ed.)

この国における最も初期の修道院の庭の眺めは、カンタベリーの修道院の建物の配置図、すなわちその鳥瞰図からわかるようなものであったと思われる。それは1165年頃に作られたもので、エドウィン [カンタベリーの修道僧] の大詩篇とともに綴られて、今はケンブリッジ大学のトリニティカレッジ図書館に保管されている。



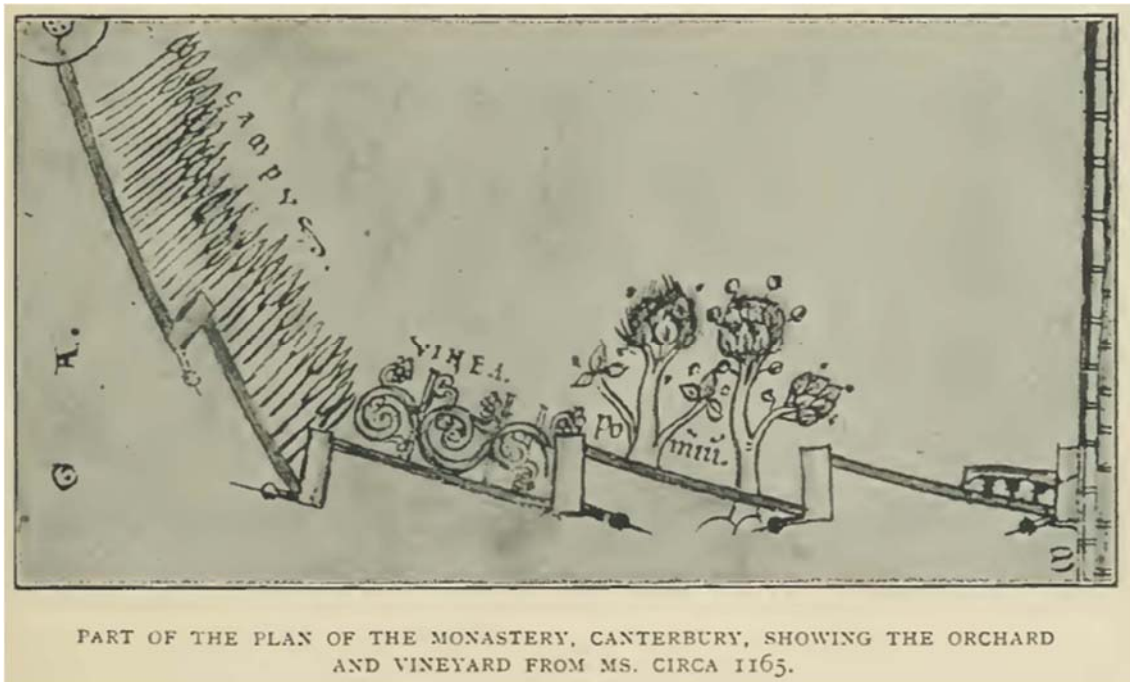
[図1-1] ハーブ園が描かれたカンタベリー修道院の配置図の一部
(写本より 1165 年頃)

これらの図面は修道院の水道及び排水システムを記録するために（おそらく技術者のウィバートかその助手らによって）作成されたようである*。その一枚にはハーブ園が宿舎と診療室の間のスペースの半分を占めて描かれており、それは回廊によって囲まれている；他の図面には、壁の外側に果樹園とブドウ畑が広がっている。最初の図面には養魚池の近くの壁の内側に樹木も記されている。その後の時代には養魚池の向う側にさらに壁が建設され、そこには後に古い女子修道院の庭として知られることになる場所を含み、その土地は1287年から1368年の間に数区画まとめて取得されたものであった。大回廊の西側には別の果樹園および大司教の宮殿から望める庭があったはずだが、これらは同じ時代に存在していたにもかかわらず配置図の範囲の外とされた。と言うのは、これらはトーマス・ベケット [訳注] の生涯の最期の場面（1170年）に関連していたからである。

* 『カンタベリー・クライストチャーチ修道院の建築の歴史』, ロバート・ウィリス師, 『ケント考古学』第7巻 1868年 *Architectural Hist. of the Mon. of Christ Church, Canterbury*. The Rev. Robert Willis, M.A.,

F.R.S. *Archeologia Cantiana*.

[訳注] 大法官 (1155~62 年)、カンタベリー大司教 (1162~70 年)。ヘンリー2世の聖俗両界の支配に反対して殺された。



[図 1-2] 果樹園とブドウ畑が描かれたカンタベリー修道院の配置図の一部
(写本より 1165 年頃)

しばらくしてベケットの殺人者へと変身する騎士たちは「庭の大きなサイカモアカエデ sycamore の木の下にマントとガウンを投げ捨て鎧姿に刀を腰に着け現れ」、そして武装した男たちは果樹園に集められたが、これは教会の方に飛ぶように逃げていくベケットとそのお供の坊さんたちが、いつもの通り道である教会の西端にある果樹園を通らないで、回廊の後ろの小さなドアを通らざるを得ないように仕向けるためであった (*『カンタベリー歴史記録』スタンレー主席司祭 *Hist. Memorials of Canterbury* Dean Stanley)。

このような初期の記録はほとんど今に残されてきていないが、修道院の生活は急に変わることはなく、また多分 14 世紀の庭は 12 世紀のものとほとんど変ることはなかったであろう。これらの庭に関するより完全な知識を得るためには、文字による説明が始まる時まで 2 世紀を費やさなければならない。14 世紀になると研究に必要なより多くの資料が入手できるようになる。これにより詳細については想像によって補うしかないが、これらの庭の管理に関する概要は明確になる。

修道院の中の各部署は規則正しい秩序立った方法で運営され、管理者により統括され、各部の会計は誰が行うか、誰が管理の責任者であるかなど予め決められた義務を果たすこ

ととされた。そこには庭師 Gardener または別称 Hortulanus、Gardinarius、あるいは庭の管理人 Garden Warder が置かれたが、それは施物分配係、聖具保管係、音楽監督その他の管理者が置かれたのと何ら変わるものではなかった。

いくつかの事例では、庭師の会計簿が保存されており、ガーデニングに関するその他の記述が様々な記録文書の中に散在している。現存する 2 つの非常に完璧な文書としては、ノリッジ修道分院とアビンドン大修道院のものがあり*、これらは間違いなく大多数の修道院における庭師の会計簿がどのようなものであったかを示す適切な事例と言えるものである。アビンドンには 4 つの会計簿があり、一番初期のものは 1369~70 年のものである。ノリッジのものはもっと数が多く、約 30 巻に及び、一番初期は 1340 年、最後が 1529 年であり、15 世紀初頭の状況がよく表わされている。

*ノリッジのものは写本のみである。アビンドンのものはカムデン協会により発刊されている。リチャード・エドワード・ジェン・カーク『アビントン大修道院管理僧会計簿』1892 年 R.E.G. Kirk, *Accounts of the Obedientiars of Abington Abbey*

これらの会計簿からは管理部門の収入支出、修繕費用、少しばかりの生産物を売却したことによって受け取った金額がわかるが、栽培のプロセスについては明らかではなく、栽培されていた植物を特定することもできない。

他の管理人たち、あるいは管理僧と同様に、庭師は仕事の手伝いをする「助手」を抱え、また労働者を雇うことが認められ、その支払いのための資金は管理部門の所有する小さな土地、あるいは貸家の賃料から賄われた。ラムゼー大修道院では†、庭に 2 人の「助手」がおり、その支払い（西暦 1170 年頃）は「それぞれパン 14 個」と 2 エーカーの土地であった*。しかし、各種の少額の賃料や庭の生産物で余ったものの売上金、それに庭を管理する管理部門所有の土地で作られた穀物の売上金にもかかわらず、会計簿は右の貸方が常にバランスするという訳にいかず、収入が支出をカバーできないことは珍しくなかった。

†『ラムゼー修道院記録文書』ウィリアム・ハート、修道院管理人名簿 *Cartularium Monasterii de Rameseia*, Wm. Hart. List of Monastic officers.

*ダラム修道院では支払いは「庭師ロバート・キルヴールに年間 5 シリング」が、その他のこまごました少額の支払い約 5 シリングとともになされた（『ダラム家計簿』, サーティーズ協会 *Durham Household Book*, Surtees Society.)

初期の頃、修道士たちは比較的良好に働いていたように思えるし、ともかくより注意深く管理していたようである。それは、庭の支出が賄っていたことからわかる。しかし、ノリッジでは時が経つにつれ、管理部門は次々と借金まみれになっていった。1429 年「支出が収入を上回る、8 ポンド 2 シリング 8½ペンス」、1431 年の赤字は 13 ポンド 16 シリング 8¾ペンスである。そこで新しい計画が始まり、庭はウィリアム・ドレイパー何某に貸し出され、彼はそこで農業をするため 40 シリングを支払った†。

†記載例：－

1471年 収入「ジョン・プルーマーに20年間賃貸された大庭園から25シリング、今年は6年目」

1487年「ロバート・カステールより大庭園の農場に関し26シリング8ペンス、彼に10年間賃貸されたもので今年は2年目」

このような状況はこれらの会計簿に記載されている期間の最後まで続くことになった。以下に示すところのものは、これらの書類からの写しであり、大部分はラテン語から翻訳してあるが、引用符の付いた単語は原文のとおり表記されている。

最も初期の書類、西暦1340年のものを完全な形でここに掲載することとする。

クラクストン修道分院長ダン・ウィリアムの第14年における同志ピーター・ドゥ・ドニッチの庭の会計簿

収入－

前会計からの繰越残高 73シリング8ペンス

統制賃料、すなわちネドル通りに1店舗所有のアダム・ギルバートから18ペンス－「木の束」枝と根、28シリング2½ペンス－「細くしなやかな枝の」「ヤナギ類」「osiers」(の)若い小枝、13シリング4ペンス－「材木」、9シリング8ペンス－干し草、36シリング10ペンス－豆、15ペンス－ハーブ、13ペンス－ニンニク、11ペンス－リンゴと梨、13シリング4½ペンス－「ビャクダン?」「Sandice」(*Sandal wood?*)5シリング6ペンス－卵、14シリング－「麻の実」、1ペンス－蠟、9シリング7ペンス－「飼料」、2シリング－「縄一巻き」、3シリング

収入合計 8ポンド19シリング6ペンス

雌牛1頭、雄牛3頭、27シリング－子牛数頭、8シリング2ペンス－ミルク、65シリング9ペンス－飼育のため預けられる雌牛1頭の飼育、2シリング－合計102シリング11ペンス

総収入の合計 17ポンド16シリング1½ペンス

支出－

使用人の賃金に13シリング－彼らの手当てに10シリング－「小間使い」の賃金に14シリング11ペンス－手当てに2シリング－同じく特別な手当てとして20シリングの支払い－いわゆる「使いの子ども」への支払い年払いで2シリング3ペンス

支払いおよび寄付－

庭師のO〔後述〕に26シリング8ペンス－宮廷の使用人および関係者の寄進に関し、思召しにより2シリング11ペンス－施し物として2シリング2½ペンス－オックスフォードの学者に2シリング－修道院の副院長に2シリング－ハーブを刈り取った食糧保管係に2シリング－施物分配係に庭に対する10分の1税 *tithe*〔後述〕として12シリング－国王陛下に対する10分の1として1½ペンス－枢機卿に¼ペンス－寄進および「祈願の時のカスタード、パンケーキ」「*flaunis*」に13ペンス(=*flaun* = *custards, or pancakes, at rogations*)－修道院長の収穫人に6ペンス－ジョン・ドゥ・レヴェリントンに6ペンス。ジョン・ドゥ・バーニーの大工に6ペンス。主教の「きこり」“*boscar*”(=*woodman*)

に6ペンスー手袋に7シリング。ー合計60シリング³/₄ペンス

草刈りその他ー

牧草地の草刈り、作物用および中庭・通路用、3シリング5ペンスー女子修道院および使用人のためのスープ用エンドウ豆 peas、3シリング3ペンスーカラシの種、3シリング3ペンスー豆 beans、2シリング2ペンスー女子修道院の豆とバター、15ペンスーサクランボ、8¹/₂ペンスーミルク、16ペンスー飼料、12シリング11ペンスー合計28シリング³/₂ペンス

除草および雇い入れー

除草および「手伝い」、30シリング2ペンスーラルフ・ブレントーほかの手当て、牧草地の土手の仕事および溝の清掃、12日分、8シリングー1日当たり8ペンスー彼らの飲み物代ほかの費用12ペンスー大工1人への手当て、材木を削りその他もろもろの物の修繕、2シリングータイルで屋根を葺きその他の仕事をしたタイル職人に3ペンスー合計41シリング5ペンスー「小さいカワカマス」およびロウチ [コイ科の魚] ストック用、2シリング5ペンスーラード、獣脂、ロウソク、8ペンスー鉄製の鋤、[木の枝などを払う]「鈍鎌」の修理、3ペンスー斧の修理および新品の「手斧」1本、7ペンスー「?小さいタマネギ」“skalurons” (? *escallions = scallions = small onions*)、1シリングー家畜の肥やし、3シリング3ペンスー鍵、4¹/₂ペンスー診療所用「イグサ」“Juncis” (= *rushes*)、10ペンスー「レーキ」“tribul” (= *sieves or rakes*) 2本、鋤2つ、家畜の堆肥用熊手2本、鉄製の新造品、12ペンスー大鎌1本、1ペンスー「穴掘り道具」、1ペンスー木製物差し1本、3¹/₂ペンスー土手用の「粘土」2、10ペンスー(長柄の)大鎌の「歯の部分」、1ペンスー綱(あるいは紐)、1ペンスー土製壺、1ペンスー4350枚のタイルと運搬費、10シリング2ペンスー主教から任された牧草地、すなわち「ル・ハンドヒル」、2シリング2ペンスー「漆喰屋」“limours cenonette” (? *whitewashers*) 3人、11ペンスー「ネズミ捕り屋」“raton” (*rat-catcher*) に渡した1ペンスー羊皮紙、1ペンスー合計、24シリング5ペンスー庭師用の修理した長靴、2シリング6ペンスー修道院長に送ったワイン代として、同胞に対し瀉血 [訳注] および聖レオナル祝祭日などの時に要した各種費用として11シリング10¹/₂ペンスー各種香辛料およびアーモンド、2シリング7¹/₂ペンスーその他費用、8シリングー“Wardecorgard” [不明] に2シリング6ペンスー合計、20シリング2ペンスー全費用の合計、10ポンド18シリング¹/₄ペンス、この結果、収入が支出を上回った分は6ポンド17シリング11¹/₂ペンス [訳注] 中世においては、瀉血をするのにふさわしいキリスト教聖人の日が定められていた。

西暦1402年 庭師事務所の同志トーマス・ルートンの会計簿 アレクサンダー修道院長の第22年 ミケルマス [聖ミカエル祭9月29日] からヒラリー [聖ヒラリーウス祝日1月14日] までの間

収入ー

前年からの繰越分、43シリング10ペンスー梨とナッツ (ヘーゼルナッツ“avelanis”)、4シリングーリンゴ、16ペンスー葉物野菜、15ペンスー乾燥した木、18シリング3ペンスー「削りくず」“pro faggots and Astel” (= *shavings*)、11シリング3ペンスーヤナギ willows、9ペンスーハーブ類、2シリング3ペンスー雄鶏と雌鶏、18ペンスータマネギ、3シリングーヤナギ類、3シリング4ペンスーネギ、6ペンスー「オニナベナ」“tasel” (= *tease*)、5シリング10ペンスー地下貯蔵庫支配人に売却さ

れた木、35 シリング 4 ペンスー “lawyr of crabthorn” [サンザシ hawthorn?] その他、地下貯蔵庫支配人に売却されたもの、35 シリング 4 ペンスー “pro lawyr of wythis” [ヤナギ withe?]、10 ペンスー 合計、4 ポンド 18 シリング 7 ペンスー 収入の総計、7 ポンド 2 シリング 5 ペンス

支出ー

まずイグサとその運搬に、5 シリングーニンニクとタマネギ、2 シリングーカラシの種、8 シリング 6½ ペンスー豆、3 ペンスー豆の植付け、12 ペンスー羊皮紙、3 ペンス。使用人の 1 人に対する手当、10 シリング 6 ペンスーその他の使用人に 10 シリングー「彼らの上着 (チュニックス)」、8 シリングー庭の作業労働者への支払い、2 シリング 4 ペンスー「オニナベナ」に関する他の労働者への支払い、3 シリング 5 ペンスーオックスフォードの学者に 18 ペンスー修道院長の御前でちょっとした気晴らしなど、2 シリング 6 ペンスー女子修道院のミルク、2 シリング 2 ペンスー食糧保管係にナイフ代、2 シリングークリスマスの寄進、3 シリングー庭師の長靴、15 ペンスー鋤、シャベル、その他の道具、13½ペンスー贈り物、6 ペンス

総支出の合計、3 ポンド 8 シリング 1 ペンス

以上の結果、収入が支出を上回ること、3 ポンド 14 シリング 4 ペンス

西暦 1403 年 同志トーマス・ドゥ・コープスティの会計簿からの抜粋、ミケルマス、ヘンリー4 世の第 5 年、アレクサンダー修道院の第 23 年目の同じ祝祭日まで

収入ー

「ギンドロ」“Pro albell” (= *abele, white poplar*)、8 シリング 8 ペンスー材木、6 シリング 8 ペンスー「? 荷馬車一杯の野生リンゴの木とオーク」“pro crabdractis and ok” (? *crab draughts, cartloads of crab-trees and oak*)、3 シリング 9 ペンスー「オニナベナ」、6 シリング 8 ペンスー「スゲ」“pro star” (= *sedge*) およびヨシ、16 シリングー「ユリ」“pro lillys” (= *lilies*)、½ペンスー小さい庭に、8 ペンスー譲渡された牧草地、37 シリング 8 ペンスー収入合計、10 ポンド 3 シリング 9 ペンス

支出ー

借金、59 シリング 4 ペンスータマネギの種購入、12 ペンスー釘と鍵、6 ペンスー国王陛下の 10 分の 1、1½ペンスー手袋、7 ペンスー「レーキ」“Pro tribul” (= *rake*)、鋤ほか、3 シリング 9½ペンスー庭師の OO、26 シリング 8 ペンスー使用人の手当て：その 1 人に、16 シリング、その他の人に 15 シリング 2 ペンスー彼らの上着、8 シリング 10 ペンスー会計日に 12 ペンス

支出合計、8 ポンド 8 シリング 6 ペンスー借金を含めて 11 ポンド 7 シリング 10 ペンス

支出が収入を上回るどころ、24 シリング 1 ペンス

西暦 1427 年 (全体) 同志ウィリアム・メティガムの会計簿 聖マイケルから聖グレゴリーまで、ヘンリー4 世の第 6 年、ウィリアム修道院の初年

収入ー

ハーブ、「ネギ」“lekeys” and “Porrettes”、4 シリングー木の束 faggots (“fasciculis”)、チダケサシ *Astill* および「ヤナギ類」“ozyerys” (= *osiers*)、8 シリング 2 ペンスー食糧管理係より牧草地、20 シリング

ー門の間の庭、12 ペンスー収入合計、33 シリング 2 ペンス

支出ー

前年からの借金、68 シリングーカラシの種、7 シリング 4 ペンスー施物分配係に、12 シリングーキリスト臨降節および四旬節直前の日曜日のミルク、44 シリング 3 ペンスーニンニクと豆の植付けと除草、2 シリングー必要な時々の作業員の雇い入れ、15 ペンスー庭師のための薬、2 シリングー修道院長の臨席の場および聖レオナル祝祭日その他の場で、3 シリング 2 ペンスー使用人に対するクリスマスの贈り物、18 ペンスー家、道具、「棚」の修理および板の購入、5 シリング 4 ペンスー庭師の長靴、12 ペンスー使用人トーマスへの手当て、12 シリングー使用人ジョンへ9 シリングー彼らの上着、10 シリング

支出合計、70 シリング 10 ペンス

支出総計、借金を含めて、6 ポンド 18 シリング 10 ペンス

以上、支出が収入を上回るどころ、5 ポンド 5 シリング 8 ペンス

西暦 1484 年 同志ジョン・メタンの会計簿、リチャード 3 世、ミケルマス第 1 日から、およびリチャード 3 世、ミケルマス第 2 日、ジョン・ボンウェル修道院長。

前年会計簿からの繰越

収入、3 シリング 5 $\frac{3}{4}$ ペンス。まず修道院長から、一区画の庭に関し、16 ペンス。この区画は大きな「溝」“fosse” (ditch) により区切られた同じ庭の「果樹園」“le ortzgerd”に接続されたもの。ー豆の売上、「燃料」“eldyng” (= fuel) として使う同じ豆の茎、6 シリング 10 ペンスータマネギの売上、16 ペンスー収入合計、繰越とあわせて 4 ポンド 7 シリング

支出ー

10 分の 1 税のみ。なぜなら借家のいくつかは、「ホームストリート」にある庭の敷地の上に建てられているからである。学者たち、同志ジョン・ヘルゲイおよび同志ウィリアム・ゲドニーーロバート・クックに対し女子修道院のためのエンドウ豆と香辛料で作ったスープ、6 ペンスー「衣揚げ」“frixures” (= fritters) ー修道院の中庭の芝生から「苔」を取り除く作業をした労働者の仕事に対し、6 ペンスー庭をぐるっと廻る大きな溝の清掃、あわせて庭師の「財務係」“scaccarium” (= exchequer) の脇にある小さな溝の清掃、18 ペンスー (何人かの労働者への支払いについてはその名前も記載) ー「接ぎ木」“gryffing”、4 ペンスー耕作ほか、10 $\frac{1}{2}$ ペンスーメイタマーケットのセントジョン教区のトーマス・マイリスおよびヘンリー・コビラーへの支払い、これは庭を 3 回草刈りしたこと、および修道院の中庭を「2 回」“bina” (= twice) 草刈りしたことに対し、3 シリングーサクランボの庭 ortocersor (= cherry garden) 用の“wyndowstal”1 つー [麦などの脱穀に用いた]「からざお」“flagello” (= flail)、1 ペンスーカラシの種の収穫と脱穀をする労働者へ、7 ペンス

支出合計、4 ポンド 7 シリング 7 $\frac{1}{2}$ ペンス 収入が支出を上回るどころ、2 シリング 10 $\frac{1}{2}$ ペンス

項目の中には毎年変わることなく出てくるものもあり、たとえば使用人への支払いや仕事着、長靴、手袋など。手袋は珍しくない項目でビスター*、ベリー、ホーリーアイランド

などの場所の会計簿の中に見られる。多分それは除草用の厚手の手袋だったのであろう。

*ブルムフィールド『ビスターの歴史』Blomefield, *History of Bicester*

庭師の O もまた常連の項目で、それは毎年の祝祭日の支出である。O というのはその場で庭師によって歌われる賛美歌で、「おお、エッサイの根よ」“O Radix Jesse”で始まる歌である [訳注]。アビンドンの会計簿には「O Radix に 6 シリング 10 ペンス」と記入されており、別の機会には (西暦 1388 年)、もう少し長めに「O Radix に対する贈り物の費用として 16 ペンス」“In expensis factis pro mitten-exennia ad O Radix XVIId”と書かれている。この「おお、エッサイの根よ」は 7 つあるローマのあるいはグレゴリオ聖歌の偉大な O の中の 3 番目にあたる†。1 番目のおお、知恵よ O Sapientia は 12 月 16 日に歌われ、この日は今でも一般祈祷書カレンダーに印が付けられている。有名なキリスト降臨節の賛美歌「おお来たれ、おお来たれ、エマニュエル」“O come, O come, Emmanuel”はジョン・メイソン・ニール (1818~1866 年) による翻訳で、13 世紀頃に書かれた偉大な O の 5 番目のラテン語の詩を訳したものであり、この賛美歌の 2 行目は庭師の O を言い換えたものである。

[訳注] 旧約聖書でエッサイ Jesse はダビデ王の父で、その根から子孫が広がりキリストが生まれる。

†『考古学』第 49 巻 エヴァラード・グリーンによる論文 *Archæologia*, Everard Green, F.S.A.

もう一つ注意すべきは、これらの会計簿等では 10 分の 1 税 tithe [収穫物の 10 分の 1 を教会に納めた税] が控除されていたことである。「庭の中の、果樹とすべての種とハーブについて」10 分の 1 税が初めて制定されたのは西暦 1305 年のことであり、この支払を命じる布告はサリーのマートンにおける教会会議で発出されたものであった‡。

キウィルキンズ『教会会議』第 2 巻 278 ページ「マートン」1306 年「また庭の中の、木の果実とすべての種とハーブについて」Wilkins' *Concilia*, “Mertonense,”

“et de fructibus arborum et seminibus omnibus et herbis hortorum.”

[訳注] 本文では果樹 fruit trees となっているが、ラテン語原文の arborum は属格なので「木の果実」と解する方が正しいか。

項目の中で違いの出てくる主なものは普通、購入された道具や修理中の道具についてであり、「鋸」、「ハーブ用のナイフ」、「手斧の修理」、「庭の塀の補修」、「門の錠前と鍵」その他、時には庭での収穫が不足した時に買わなくてはならない果物、リンゴ、サクランボ、豆、タマネギなどである。しかし庭師の管理下にあったこの「大きな庭」が唯一の庭という訳では決してなかった。ほかにも管理部門を所有している多くの者たちが庭を持っていた。

ビスター修道分院の遺構および記録から編集された図面によると、様々な庭の相対的位置関係、すなわち大きな庭、キッチンガーデン、果樹園とあわせて修道分院長、聖職者、

診療所、聖具保管係それぞれの庭が示されている。そしてこのように明確に区分された庭が各種あるということは当時のものとして格別数が多すぎるということではなかった*。一般的に修道分院長は自分自身の囲われた場所を持っていた。メルサでは「修道分院長のものと呼ばれる庭」と「大修道院長の広間の庭」の2つがあった†。

*『ビスター主席司祭の歴史』J.C.ブロムフィールド *History of the Deanery of Bicester*

†バートン大修道院長『メルサ大修道院年代記』第3巻, 242 ページ *Abbot Burton's Chronicle of Melsa*

シュロプシャー州のハーモン大修道院では、修道分院長に対して「気晴らしのために僧坊の中に一定の広間があてがわれ、……そこには古くからの「ロンゲノアの庭」と呼ばれた庭があり、それは前述の広間に付属し、あわせて鳩小屋も同様に作られていた」(†ダグデイル『イングランドの修道院』(新編), 第6巻 112 ページ)。

ノリッジでは、庭師に対し、修道分院長から、「庭の区画」すなわち彼の特別な利用に供するために確保されている小さな土地への支払いがなされた。この「小さな庭」、すなわち「門の内側の庭」はノリッジでは食糧保管係に貸し出された。聖具保管係、管財係、音楽監督および「業務管理人」“Custos operum”はアビンドンではすべて独立の庭を持っており、庭師に対して庭の賃料を支払っていた。ウィンチェスターでは庭師への支払いは、「修道院の庭師ロベルト・ベイジング」“custodi gardini conventus”として受取人の会計簿に残されており(西暦 1334 年)、そこには施物分配係の庭の草刈り代金も残されている。またこれらのほか、「業務管理人」は「ル・ジョイ」と呼ばれる庭の費用を支払っていた。診療所の庭では、修道院の病人のための治療用のハーブを育てていたから、その庭が重要であるのは当たり前のもので、そのためこの場所は使いやすいうように、診療所あるいは病院の近くに設けられるのが一般的であった。

どこの国であっても、異教徒であろうとキリスト教徒であろうと、またすべての時代において、花は葬式、結婚披露宴などの儀式において重要な役割を果たしてきた。中世のイングランドもその例外ではなかった。教会での礼拝、聖職者の任命、ろうそくの飾り付け、祭壇の礼拝の時に花を使用することは極めて普通のことであった。

修道院の壁の内側でこれらの花を提供するための庭を管理することは聖具保管係の仕事であった。アビンドンでは、庭師の庭を借りるのに 4 ブッシェルの小麦 [1 ブッシェル=36 リットル] を支払ったとの記録が残っている*。

*アビンドン会計簿 R.E.G. カーク：

「1388-9年、聖具保管係については、彼の庭に対して4ブッシェルの小麦。ここではどんな[報酬も]デナリウス銀貨で受け取られることはない。なぜなら外面から[何への報酬かということが]姿かたちによって明らかなるもので受け取られるからである」

1388-9, et de iiij bussellis frumenti de Sacrista orto suo, nichil hic in denarijs quia recipiuntur in sua specie ut patet extra.

ノリッジでは、聖具保管係は複数の庭を持っていたようで、そこの事務所の会計文書をほんのざっと見ただけでも「セントメアリーの庭」と「緑の庭」の2つの名前が書かれている[†]。9世紀には早くも、ウィンチェスターに「聖具保管係の庭」“*gardinum Sacristæ*”があり[‡]、それが今日では、大聖堂の北翼廊の東側にある小さな土地が「パラダイス」と名付けられ、聖具保管係の庭があった場所と記されている。15世紀に作られた門戸は今なお現存しており、そこは囲われた場所への入口であった。

[†] 聖具保管係の会計簿 写本 ノリッジ

1431年 「セントメアリーの庭の草取り 2シリング」

1428年 「‘緑の庭’の草取り」

1489年 「風で吹き倒された梨の木の幹の代金 11ペンス」

庭師の会計簿 1472年 「聖具保管係の庭の農園に対し 2シリング」

[‡] ウォートン『イングランドの聖職者』第1部 209ページ Wharton, *Anglia Sacra*

このような庭についてその名前が出てくるのは、ラムゼー大修道院長が1114年から1130年の間に、ロンドン市内のある土地について何らかの合意をする必要が生じた時であった。その土地というのは、三位一体修道分院の土地に隣接しており、修道分院長は「大修道院長の礼拝堂および礼拝堂の前の庭に対する要求を取り下げること」を承諾した（§『ラムゼー修道院記録文書』第1巻133ページ）。このような「聖具保管係の庭」は修道院の敷地の中だけにあったのではなく、多くの教会や礼拝堂に付設されていた。アビンドンの庭師は「聖ニコラス教会の隣の」庭を院長に何年かの期間貸していた（Ⅱ1413年会計簿, カークによる）。サマセットシャー州ウッキー荘園の中の礼拝堂の庭はバースとウェルズの司教の所有物であり、1461年から62年にかけての1年間におけるその土地の管理人の会計帳簿の中に興味深い記録が残されている（Ⅰ『ウッキーの教区および荘園の歴史』ホウムズ著 *History of the Parish and Manor of Wookey*, by T.S. Holmes.）。3人の男たちが日当2ペンスで4日半雇用され「礼拝堂の庭を耕しきれいにする」と書かれていた。

ヘンリー6世 [在位1422~61年] はイートン校の教会に素晴らしい庭を残した。彼の遺言にはこう書かれている。「教会の壁と回廊の壁との間は38フィートとすること、そこには一定の木と花を植える場所とすること、それはその教会の礼拝のために必要かつ便利であるから」、そしてそこは「便利な塔を備えた十分に高い壁」で囲まれていなければならない*。教会に隣接したこのような庭の実例はほかにも多数ありいくらでも列挙できるであろう（*ニコルス編『イングランドの国王と女王の意思』1780年, 298ページ Nichol's *Wills of the Kings and Queens of England*, Ed.）。

すべての重要な行事では、行進の時あるいは礼拝の時に、聖職者たちは花の冠を被っていた。これは特にロンドンのセントポール寺院での習わしであり[†]、1405年6月30日ロジャー・ドゥ・ウォールデン司教 [~1406年大蔵卿] がそこに任命された時、彼と大聖堂の

聖職者たちは厳かな行列を成して歩み、赤いバラの花冠をまとっていた[‡]。

† ポリドール・ヴァージル『発明と起源の歴史』第2巻 Polydore Vergil, *De rerum Inventoribus*

‡ 『ロンドンの聖職者の歴史』ウォートン著 1695年(150ページ) *Historia de Episcopis et Decanis Londiniensibus*, by H. Wharton

これらの「聖なる冠」“*coronæ sacerdotales*”、すなわち祝祭日に聖職者が身に着けた花輪の使用は何世紀にもわたって続けられ (§ 「儀式における花の使用」『19世紀』1880年 “*Ceremonial use of Flowers*,” *Nineteenth Century*)、宗教改革の時代まで広く使われたことは様々な教会事務員の会計簿から明らかである。ただし、このような記入例の数がそれほど頻繁という訳ではないのは、教会に付設されている庭というものは、当然のことながら、基本的には普段使うくらいの花は十分に供給できたので、買わなくていけないのは、大きな行事や特別の祝祭日で、いつもより大量の花が必要な時に限られていたからである。

たとえば、セントメアリーヒルでは、その会計簿にはいくつかの記入項目を見つけることができ、教会の近くには庭があった (|| ニコルス, 『イングランドにおける風習と支出の実例…教区委員会計簿等から』1797年 *Illustrations of the Manners and Expenses in England…deduced from Accounts of Churchwardens, Etc.*)。

西暦1483—1497年 セントメアリーヒル 教会管理者の会計簿 ミッドサマ [ヨハネ祭6月24日] のカバノキ、8ペンス — パームサンデー [イースター直前の日曜日] のツゲおよびヤシ、1シリング — Polis on Estirevyne、10ペンス — 聖体祝日の花冠、10ペンス — 聖バーナビの日の1ダース半のバラの花冠、8½ペンス — 聖バーナビの日のバラの花冠とクルマバソウ *wodrove* の花冠、11ペンス — セントバーナビの日の司祭と事務員のための *doss. di bosce* の花冠2つ

1510年 パームサンデーのヤシの花とケーキ、10ペンス

加えてセントマーチン・アウトウィッチ、ロンドン、1524年

項目—聖体祝日のバラの花冠、6ペンス — 項目—ミッドサマのカバノキ、2シリング — 項目—セントマーチンの2日分のバラの花冠、パン、ワインおよびエール、15½ — 項目—クリスマス of セイヨウヒイラギ *holy* とツタ、2½シリング

1525年 パームサンデーのヤシ、2½シリング。イースターのスズメノチャヒキ *brome*、1シリング支払い。聖体祝日のバラの花冠、6ペンス支払い

このように教会を飾り立てることが、宗教改革の後では違法であるとされると、庭の土地がいきなり別の用途に振り向けられることはなかった場合でも、自ずとこれらの庭は使われなくなっていった。

1618年、ジェームズ1世 [在位1603~25年] はお触れを出し、一定の「合法的な気晴らしについては、神聖な礼拝の後に*」これを認めるというもので、「女たちが昔からの慣習に従い教会を飾るためにイグサ *rushes* を教会に持ち込むことを認める」というものであつ

た。

*フラー『教会の歴史』1655年. 第10巻74ページ, ロンドン Fuller, *Church History*

これらのイグサは単に床用のもので、祭壇や壁を飾るものではなかったかも知れない。それは、たとえば1580年、バッキンガムシャー州のウィングの教会管理人が「教会のコミッショナーに対して教会建物に敷くためのイグサ1束に」（†『考古学』第36巻238ページ）1シリング支払ったという記録があるからである。ダラムのセントニコラス教区の聖具室の帳簿には、1665年から1703年の間、装飾用のカバノキ birch とあわせて床に敷くためのイグサを購入したとの記入が何箇所かある。「聖霊降臨祭にあたって教会にカバノキ、1シリング8ペンス。ランスロット・ダンに対し教会の信者席の飾り付け用、およびすべての信者席に敷くイグサ用に1670年7月21日、8シリング」（‡ダラム教区帳簿 Durham Parish Books. サーティーズ協会）

コールズ [William Coles, 1626~62年 植物学者] が1656年になって書いたところによると「教会に花輪を捧げる習慣が私たちから取り去られてからそれほど経ってはいなかった。場所によっては、クリスマスの時、教会にセイヨウヒイラギ、ツタ、ローズマリー、月桂樹、イチイなどの飾り付けをすることはまだ行われていた」（§『薬草の使用法』 *The Art of Simpling*, W. コールズ著 1656年）ということである。しかしながら、これは随分先のことであり、今私たちが見ている時代では、静かな回廊の中で暮らしていた修道士たちは、教会と礼拝堂を飾るために、年々歳々、自分たちの技術と知識の限りを尽くして一番見事な花を作っていたのである。

さて、庭師の部署の話に戻るとしよう。彼の仕事は庭だけではなく、果樹園とブドウ畑にもその管轄は及んでいた。

果樹園すなわち「ポメリウム」“pomerium”では食用、料理用のリンゴや梨だけではなく、リンゴ酒（サイダー）製造のためにリンゴを生産した。天候が異常に悪くリンゴが収穫できない時以外は、大量のリンゴ酒が毎年製造された。これは1352年の事例であるが、その年、ウィンチェスターの施物分配係は自分の会計簿に次のように記入している。「リンゴ酒はまったくない、なぜなら今年はリンゴが収穫できなかったのだ」。“Et de ciserat [訳注] nihil quia non fuerunt poma hoc anno.” 1412年もリンゴが収穫できない悪い年で、アビンドンではリンゴ酒がまったく作られず、修道院の中には自家用にリンゴと梨を、たまにというのではなく頻繁に買っていたところを見ると、自分の消費する分すら十分にいつも栽培している訳ではなかった。もっとも年によっては十分、貯蔵できるほど収穫できることもあった*。

[訳注] 正しくは ciserat と思われる。

*庭師の会計簿、アビンドン、1388年「リンゴ酒の売却で概算13シリング4ペンス、そして果物、すなわちリンゴ、ウォーデン梨とナッツの売却で32シリング6ペンス」

“Et de xiiii. iiiid. De cicera vendita per estimacionē et de xxxiis. vi d. ob. de fructibus venditis, viz.: pomis

wardon et nucibus.”

ウォーデン梨 Warden pear は何世紀もの間とても人気があり、この梨は元々はベッドフォードシャー州にある [ウォーデンという] 同じ名のシトー修道院を発祥の地としており、自分の紋章に3つのウォーデン梨を掲げている† [訳注]。

それは一種の料理用の梨であり、どんな初期の料理本にも「ウォーデンパイ」、すなわちパステイー [肉、野菜、ジャムなどを入れて焼いたパイ] のレシピが載っている。ウォーデン梨は、通常、一つの別個の果物として認識され、たとえば「リンゴ、梨、ウォーデン梨およびマルメロ」というようになっているが、これはこの梨が一番よく知られている品種だからである。

†ダグデイル『イングランドの修道院』第5巻371ページには、それらはアボットの梨 Abbot's pears とも呼ばれていたと書かれているが、根拠は示されていない。

[訳注]『ウォーデン梨の起源』*The Original Warden Pear* の著者であるマーガレット・ロバーツによると、この記述にはまったくの根拠がなく、15世紀半ばにこの紋章が採用されたはるか以前より、イングランドでこの梨は人気があった。また、ウォーデンのスペリングは初め Wardon であったが、次第に Warden へと変わった。<https://www.wardenvineyard.org.uk/warden-pear/>参照。

果樹園の中にはかなりの規模のものもあったに違いない。ジョン王の時代 [在位 1199～1216年 失地王、マグナカルタに署名]、ラントウニイ修道院に与えられた土地には12エーカーの果樹園が含まれていた。果樹園が早くから存在していたことを証明するためよく引用される事例としては、1175年のアレクサンダー3世 [1105?～81年] の教皇勅書であり、これは「スワーリングの町とそのすべての果樹園」とともに、グロスターシャー州ウィンチェンリーの修道士の財産を没収したものである。

サクランボはローマ人により持ち込まれた時以来、この国において人気の高い果物である。サクランボの木 *ciris beam* はサクソン初期の時代においても栽培が続けられた。12世紀にはシトー大修道院長ネッカム [Alexander Necham, 1157～1217年 神学者・学者] の詩、『称賛すべき神の知恵について』“*De laudibus divinæ Sapientiæ*”の中で誉め称えられた果樹の一つであり、どの修道院の庭でも忘れられることのなかった果物であった。

ノリッジでは「ポメリウム」、すなわちリンゴ園や果樹園のほかに「サクランボ園」が存在し、これは別の所では“*orto cersör*”すなわちサクランボの庭と呼ばれたが、このようなサクランボ園があったにもかかわらず、折々に「女子修道院のために」サクランボを購入しなければならなかったことがわかっている。なぜならこの果物に対する需要が極めて大きかったからである。ネッカムが読者に対し「サクランボ、クワの実、ブドウは食後ではなく断食時に食べなければならない」(*ネッカム『諸物の性質について』*De Naturis Rerum*) と注意喚起のための助言をしたのは、多分あまりにも頻繁にサクランボが使われたためであろう。

さて次に第3番目の部署、「庭の管理人」について検討されなければならない。既に指摘されたとおり、英国ではブドウはローマ人によって栽培され、ローマ人による支配が終わった直後の断絶の時期を例外として、ブドウの歴史は連綿としてつながってきた。ハンブシャー州のヴァイン Vine [ブドウ] と呼ばれる土地の名前を見ればその伝統がわかるというもので、この名前は皇帝プロブスの時代にここにブドウが植えられたことから付けられたものである。10世紀当時、勅許状を持つサクソンのいくつかの土地においては、境界としてまたはランドマークとしてブドウの木、すなわち“Winestreow”が使われており、これらはローマ人のブドウ畑の名残ではないかと考えられるのである[†]。

†ケンブル『法律行政公文書』第5巻 *Kemble's Codex Diplomaticus*

1146年 エドモンド王 [在位 939~946年] の 943年 Lechamstide.
1177年 エドレッド王 [在位 946~955年] の 949年 Boxoram.
1198年 エドウィッグ王 [在位 955~959年] の 956年 Welligforda, &c.

ベータ [Bede, 673?~735年 アングロサクソン期の聖職者・歴史家・神学者] が8世紀初頭に書いたところによると、英国は「穀物と樹木に恵まれており、・・・また土地によってはブドウも育つ」とされた[‡]。

‡ベータ編『イングランドにおける教会の歴史』1848年 108ページ *Hist. Eccle. Gentis Anglorum*.

アルフレッド大王 [849~899年 デーン人を撃退] の法律 (§ *LL. Saxon*. Wilkins, 31 ページ *LL. Aelf*: 26)、それは主として既存の法律を集大成したものだが、そこにはいかなる人であっても「ブドウ畑または他人の農地に損害を与えた者は弁償しなければならない」と書かれていた。10世紀にはエドウィー王 [在位 942?~959年] はサマセットのパセンスバラのブドウ畑がグラストンベリー大修道院 [アーサー王の埋葬地とされる] に与えられたものであることを確認した。ブドウは10月に収穫されたため、その月は「冬の貯蔵月」“Winter filling moneth”あるいは「ワインの月」“Wyn moneth”と呼ばれ、これもブドウがどれだけ栽培されていたかを示すもう一つの証拠と言えよう。ブドウの剪定は2月に行われた。大英博物館所蔵のアングロサクソン写本の中の、ブドウを剪定する人の絵を見ると、カレンダーの2月であることがわかる。



〔図1-3〕ブドウを剪定する人 アングロサクソン写本 11世紀
大英博物館 コットン ティベリウス B.5.

〔訳注〕コットンとはサー・ロバート・ブルース・コットン [Robert Bruce Cotton, 1571~1631年] による写本などのコレクション、今は大英図書館などが所蔵。ティベリウスとは分類されている書棚の名称。

ネッカムはその著書『諸物の性質について』*De Naturis Rerum* の1章をブドウに充てているが、それは主に道徳的な立場からであり、実用的な意味でこのテーマを取り上げた訳ではなかった。ブドウの収穫にあたって最後の列のところまで来たなら、ブドウ畑の労働者たちは喜びの歌に沸き返るが、残念なことに彼らの歌がどんなものであったかが伝えられていないので私たちの好奇心を満足させてくれている。

イングランドの土地台帳、ドゥームズデイ・ブック [ウィリアム1世が1086年に作らせた] の中には、「ブドウ剪定人」“vinitor”のことはたった1回しか出てこないが、ブドウ畑の大きさがどのようなものであったかという感じは、多数のいろいろな地域で行われた約38の調査から知ることができよう*。その大きさは通常、「アルペンド」“arpendi”という単位で測られ、アルペンドとは約1エーカーか [約4047m² アルパンはフランスの昔の土地面積単位、今でも使われている地域がある] もう少し小さい面積である。最大のものにはバークシャーのバイトシャムにあり、そこはアンリ・ドゥ・フェリエル [1036~1100年頃 ノルマンの貴族] の土地で12アルペンドあった。ブドウ畑の中には古くからのものもあったが、新しく植えられたものもあり、ウェストミンスターのは4アルペンドで「新しく植えられたブドウ」“vineæ noviter plantatæ”、ウェアの別のブドウ畑は「一番最近植えられた」“nuperrime plantatæ”と記されている。ブドウ畑の中にはブドウの実がなるものもあれば、ならないものもあり、これらは「ブドウがなるもの」“vineæ portantes”、「ブドウがならないもの」“vineæ non portantes”として区別されている。エセックスの6アルペンドのブドウ畑から収穫できるワインの量は、良い年なら12「モディ」“modii”、すなわち約40ガロン [1ガロ

ン=約 4.5 リットル] であった。

*ケント、ハンプシャー、ウィルトシャー、ドーセット、グロスター、バークシャー、ハートフォード、エセックス、サフォークなどにおいて。

『ドゥームズデイ・ブック概説』サー・ヘンリー・エリス著 1816 年 37 ページ *A General Introduction to Domesday Book*, by Sir Henry Ellis

ノルマン征服以前に、イングランドにはこれほど多くのブドウ畑があったのだと誇らしげに語ったとしても、ブドウ栽培が盛んな国から外国人が流入してくれば、当然のこととしてワイン文化に新鮮な情熱が注ぎ込まれることになり、大陸の大修道院長や修道分院長とともに、修道院もいち早く自分の土地の古いブドウ畑を改良し、また新しい畑を作った。「ブドウ畑」という地名は、それを植えた修道士たちが死んでしまった後にも、長い間残された。たとえばグロスター近くの「ヴァインヤード」は、キャムデン [William Camden, 1551~1623 年 古物研究家・歴史家] が書いたブリタニア *Britania* [1586 年] ではブリッジマン家の居所とされ、町の西側の「丘の上」は、グロスター大修道院長の所有のブドウ畑であった (*ガフ編『キャムデン』第 1 巻 392 ページ 1806 年 Gough's *Camden*)。グロスターシャー州はブドウで有名で、12 世紀のマームズベリーのウィリアム [William of Malmesbury, 1090 頃~1143 年頃 年代記編者] は「イングランドのどの場所より量的にもたくさん収穫でき、また香りも心地よい」と書いた。と言うのもこのワインは「口当たりが鋭くて嫌な感じ、ということではないし、甘さにおいてもフランスのものに引けをとらないから」である†。†『(イングランドの) 司教の事績について』第 4 巻 *De Gestis Pontif. [Pontificum Anglorum]*

話を元に戻せば、「ヴァイン通り」という地名は、ロンドン、グランサム [ニュートンの生誕地]、ピーターバラその他多くの町に見つけることができる。多分、この後者の場所 [ピーターバラ] の名前は 12 世紀に大修道院長マーチンによって植えられたブドウ畑の場所を示しているのであろう。

‡ヘレフォードでは、南西に傾斜した斜面に「ヴァインフィールド」として知られる場所があり、そこではブドウのためにこしらえた段々畑が今もなおはっきりとわかる。

‡聖職者の会計簿 B. 1138, No.4. 司教の世俗的財産, ヘレフォード教区-公文書館 *Ministers' Accounts, Bishops' Temporalities, Hereford Diocese.*

1369 年、ルイ・ドゥ・コルトンの死により司教座が空席になった時、そして次の任命がなされるまで土地が国王 (エドワード 3 世 [在位 1327~77 年]) の手中にあった時、ヘレフォード教区の会計簿はレデスベリ荘園の中にブドウ畑が存在していたことを示している。同様の会計簿には、1536 年から 7 年にかけて (§王室会計文書 *Exchequer Q.R.*, ヘレフォード教区 No.133 公文書館)、その場所には以前ブドウが植えられていたことが証明されるとともに、それらがいかにゆっくりと消えていったかがわかるのである。しかしながら、わが国の気

候条件のもとで、ブドウ畑がなくなったことよりも人々を感心させる素晴らしいことは、ある時期、イングランド全土にわたり、これほど多くのブドウ畑が広がっていたことである。チェシャーほどの北の地域でも、本当にブドウ畑があったようには思えないが、12世紀にはブドウが知られていない訳ではなかった。と言うのもダラムのレジナルドによると、チェシャーのリクスチューンには、木造の小さな教会があり、そこにはブドウが這い上がっていたようである。

Ⅱ『ダラムのレジナルド 聖カスバートの美德について』サーティーズ協会, 1835年 307ページ

Regin. Dunelm de B. Cuthberti virtutibus. [*Reginaldi Monachi Dunelmensis Libellus de Admirandis Beati Cuthberti virtutibus*]

「カヌート王 [在位 1016~35年 イングランド王] が船でやってきた」当時、惨めな水はけの悪い湿地からイーリーが11世紀に立ち上がってくる様子を思い浮かべることは難しい。ところが回廊の周りの日当たりのよい斜面にはブドウ畑が大変な密度で植えられ、大変楽しげに歌う修道士たちによって手入れされていたので、ノルマン人はここに「ブドウの島」という名前を付けた。

また別の古い詩はこれらのブドウを次のように称える：－

“Quatuor sunt Eliae: Lanterna, Capella Mariae, イーリーの4つのもの：ランタン、マリアのチャペル
Et Molendinum, nec non claus Vinea vinum.” そして製粉所、加えて言うまでもなくブドウ畑のワイン

その「英語訳」は 1653年にオースティン [Ralph Austin, 1612頃~76年 ガーデニング・農業の著作家] によりなされた：－

“Four things of Elie towne, much spoken are	イーリーの町で多く語られてきた4つのものは
The Leaden Lanthorn, Marie’s chappell rare	鉛のランタン、珍しいマリアのチャペル
The mighty Milhill in the Minster field,	ミンスター平原の強大なミルヒル [製粉所?],
And fruitful vineyards which sweet wine do yeeld.” *	そして甘いワインを生み出す豊かなブドウ畑*

*ラルフ・オースティン『果樹に関する論考』1653年 Ralph Austin, *A Treatise on Fruit Trees*

イーリーはそこで収穫されるブドウのおかげで長い間有名であり続けた。司教の死によって司教の座が空位状態となり、荘園が国王の手に委ねられることがまま生じたが、そのような時に作成された土地の経営に関する書類により、司教の所有であった果樹園や庭と並んでブドウ畑の存在、そしてそこから利益が生みだされていたことが実証できる。主な記入事項としては、売却された「庭の葉物野菜」、「リンゴ」、「梨」および木の実、それと麻、ヨシ reeds も含まれていた。“rosery”の栽培農園という項目もよく出てくるが、その用語にはがっかりさせられる。その意味するところは湿地の中の“roseria”、“rosar”、すな

わちヨシあるいはイグサの苗床の場所のことであった。

†王室会計文書, 司教の世俗的財産, 91/95; および 聖職者の会計簿, 1132/9 (公文書館)

‡“リトルポート 受胎告知の祭日に‘Roseria’の年間賃料として 40 シリング”

西暦 1302 年 デュカンジュ用語辞典 Du Cange Glossarium ‘Roseria’=フランス語でヨシのこと = Arundo, Juncus。古いフランス語は rosière = “lieu rempli de roseaux” [ヨシが密集している場所]

以下は、ほとんどの荘園で記載されていたものの実例である。

1286 年 ダウンハム 9 シリング リンゴとナッツの現地売上

1286 年 リトルベリ 7 シリング 2 ペンス リンゴと梨の同時期の現地売上

1286 年 ダーハム 15 シリング リンゴの現地売上

1298 年 フェルトヴェレ 55 シリング 9 ペンス 庭の葉物野菜と果物、および牧草の売上

「島を除く、ケンブリッジの管轄区域」内にあるサマシャム荘園には、ブドウを生産するブドウ畑が存在したが、やはり本命はイーリーそれ自体であった。1298 年には 27 ガロンのヴァージュース verjuice [ブドウから作った酸味果汁、料理用] “viridi succo” が売却され、翌年には 21 ガロン売却された。

その記入状況は次のようになっている。

「そして 109 シリング 8 ペンス、これはブドウ畑やその他いろいろな場所で穫れた牧草と葉物野菜を夏の間売却した代金。そして 25 シリング 3 ペンス、これは 2 箇所の庭とブドウ畑で穫れた果物の代金で、ブドウのほか、21 ガロンのヴァージュースを売却したもの。そして 10 ポンド、大酒樽 9½ 個分のワインの売却分、前年からの残金」

1302 年の別の記述にはブドウのほかの果物としてサクランボが出てきており、サクランボもブドウ畑で栽培されたが (*「ブドウ畑のサクランボの売上 20 ペンス」)、また同じ年にはブドウの剪定人の制服の費用と配下の労働者への支払いが行われており、賃金は穀物で支払われた。

†3月20日より7月18日まで—エドワード1世の第30年。「小麦と大麦—1人の‘ブドウ剪定人’の同期間内の制服代として2クォーター—1ブッシェル、8週間分として1クォーター。同期間内の彼の使用人の制服代として6½ブッシェル1ペック、20週間分として1クォーター」

[訳注] 穀量の単位1クォーター=8ブッシェル、1/4トン。1ブッシェル=4ペック、36リットル。1ペック=8クォーター、1/4ブッシェル、約9リットル。

イーリーの司教はホルボーンの自宅である「イーリーパレス」の庭に付設されたブドウ畑も所有しており、その場所は今「ヴァイン通り」としてその名を留めている。これらの庭の最も初期の記録はエドワード3世の治世に遡り、その記録はイーリーに保管されている。これらの記録は、そこに書かれているロンドンの通りや家の名前から見て大変興味深いものがあり、その中には庭が付設されていたものもあったが、それに対しては司教に賃料が支払われていた。

‡ 1312 年「Faryndonesin にある庭の・・・」 “In lez railles in gardino apud Faryndonesin.”

ただし、今私たちが庭なりブドウ畑なりその詳細を知ることができるのは最も初期のもの
のいくつかに限られている。それはこれらの土地が 1379-80 年から 1480-81 年にかけて
年間 60 シリングで貸し出されていたからである。庭だけの貸出料は 20 シリングであった。
1419 年までの会計簿はイーリーで保管されており、その続きである 1423 年から 1483 年ま
での記録は公文書館にある（§ 聖職者の会計簿, 司教の世俗的財産, 1135/10.）。後者のうち、ジョ
ン・モートン司教 [1420 頃~1500 年] の時、すなわちエドワード 4 世 [在位 1461~83 年] の
第 20 年、21 年には庭はとうとう再び司教の手に戻ったこと；帳簿には賃料の記載はなく、
「その庭は今年は司教の占有物として使用される」 “quod occupatur ad vsum domini
proprium hoc anno”と書いてある。

以下はイーリーの最も初期の会計文書の翻訳である：-

アダム・ヴァイナの会計簿。彼はイーリーの司教の庭師 (“ortolani”) でホルボーン
の荘園の地代の集金人。エドワード 3 世の第 46 年目の聖ミカエル祭 [9 月 29 日] から 47 年目の 6 月 7
日まで (1372-3 年) の間の記録。(その後、統制賃料と店の農場への支払い。77 シリング 6 ペンス)
庭の収益-16 シリング、タマネギとニンニクの売上。そして 9 シリング 2 ペンス、ハーブ、「ネギ」、パセ
リ、葉物野菜の売上。そして 48 シリング 6 ペンス、牧草地 “le grasgerd” の牧草の売上、そして 5 シリ
ング 4 ペンス、さや付き豆の売上、合計 79 シリング、そして 6 ポンド 6 シリング 8 ペンスはサー・ト
マス・ウィルトンより、収入合計 14 ポンド 3 シリング 2 ペンス。

支出-いろいろな教会等へ返金された地代

ブドウ畑および中庭の費用並びに各種労働者および女性への支払い、それはブドウ畑および中庭を耕し、
また中庭をきれいにし、雑草を引き抜いたことに対し、この会計簿に区画ごとに綴じてあるように、69
シリング 1½ ペンス、そしてイバラ thorns の購入、すなわち、大きな庭の周りに生垣を作るための荷馬
車 4 台分のイバラに 6 シリング 8 ペンス、そして同じ庭の周りに 121 [6×20score+1] パーチ perches
[5.03m] の生垣を作る 2 人の男への支払いとして 35 シリング 3½ ペンス、1 パーチ当たり 3½ ペンス、
111 シリング 1 ペンス

修理費用ほか-

土地管理人の賃金-会計担当者の賃金として 35 週と 6 日分、62 シリング 9 ペンス。少年 1 人の賃金とし
てブドウ畑および中庭の耕作、12 月末日から 4 月 17 日まで、イースターのお祭り、106 日分、17 シリ
ング 8 ペンス、1 日当たり 2 ペンス。同じ少年への支払いとして同じ期間、5 シリング。会計担当者の
半年分の支払いとして 13 シリング 4 ペンス。-合計 14 ポンド 18 シリング 9 ペンス。

少額支出 -ホルボーン
のセントアンドリュース教会の主任司祭への支払い、大きな庭の牧場の 10 分の 1
税として 4 シリング 10 シリング。すべての支出合計、15 ポンド 12 シリング 6½ ペンス。

その後、同じ (会計担当者) に 21 シリング 6¾ ペンスの支出委任、そこからホルボーンに所在する僧祿
の原資となる土地 Prebend の受祿聖職者 Prebendary であるサー・ウォルター・ドゥ・オルドベリーに

イーリー修道分院のブドウ畑の地代として、過去6年と4分の1年分、すなわち年間3シリング5½ペンス、すなわち主教が上記修道分院のブドウ畑を栽培していた全期間に対する支払いとして。そして同じく9シリング4ペンスが会計担当者への支払いとして、それは主教の死亡した日から数えてミカエル祝祭日まで16週間分として、1週間当たり7ペンス、上記ブドウ畑と前述の牧場の管理費用として。ーそして両者の黒字合計は60シリング3¾ペンスであり、それを彼はサー・ロジャー・ボシャンから受け取った。そして彼は満足して職を離れた。

(裏に) ヴァージュースーブドウ畑の収益として30ガロンのヴァージュースに対する同じ回答ー合計30ガロンーそのうち10分の1税が3ガロンーそしてパセリの種(“seminis petrosilli”)1ベック[乾量約9リットル]に対し、およびヒソップ(“ysop”)の種1クオート[乾量1.13リットル]に対し。ーそしてセイボリー(“savori”)の種1クオートに対し、およびネギ(“lekes”)の種1クオートに対し。

農機具ー鉄製の鋤(“vange ferree”)2つ、レーキ(“tribul”)1本、鍬(“howes”)4本、そしてランプ(“lucerna”)1つ、「農機具の刃」“shave”1つ、斧(“bolex”)1本、ろうそく用の箱1箱、香辛料用の箱1箱、後者は壊れている。

イーリー司教のホルボーンのブドウ畑はその付近で唯一のものという訳ではなかった。すぐ近くにはリンカーン伯爵所領の畑があり、そこからは50ガロンのヴァージュースが1年間(1295-6年)で売却された(*ランカスター王族公領会計簿第1巻 No.1 Duchy of Lancaster account)。もう少し続けると、スミスフィールドではエセックス伯爵のジェフリー[~1144年]によってブドウ畑が植えられたが、その土地は「ロンドンのトリニティ教会の聖職者」のもので、1137年に取り戻されたものであった†。

†ライマー著『協定』概要第1巻3ページ Syllabus of *Rymer's Foedera* [1101年以降のイングランド王室と諸外国とのすべての協定、条約、同盟等を集大成したもの]

今までに存在したと思われる修道院の施設の一部であるブドウ畑のすべてを列挙するなどということはうんざりするであろうし、中には単に名前だけだったり記録もほとんど残っていないものがある。たとえば、カンタベリー、ビューリ、ラムゼー、アビンドン、スポルディング、ベリー・セントエドモンズなどなど多数ある‡。庭師の部署においてブドウ畑がいかに大切な項目であったかについては、既に十分述べたところである。彼の仕事は、しかしながらそれだけではなかった。堀と池も彼の仕事であった。ノリッジでは庭師の任務として溝の清掃費用の面倒を見なければならなかった。この溝というのは、いろいろな庭を区分したり、修道分院長の庭を本体の庭から切り離す等の役割を持っていたものであった§。アビンドンでは庭師は堀の清掃費用を支払っていたことがわかっており、これら2つのほかラムゼーでは、庭師は堀および池の魚を捕まえるための網とバスケットを買っていたことがわかっている||。

‡アビンドンにおける1年間のヴィンテージの総費用は4シリング4ペンスであった。1388-9年のブドウ畑からの利益はー「ワインから13シリング4ペンス、ブドウから20シリング0½ペンス、ヴァージュ

ースから2シリング、ブドウの木から4ペンス」－アビンドン修道院会計簿、R. E. G. カークによる。

§ 1483-4年 「庭師の会計係 'saccarium' (=exchequer)に隣接している小さな溝とともに、庭をぐるりと囲む大きな溝の清掃に18ペンス。(1516年の記載には、「会計係にガラスの窓を作るのに20ペンス」とある)

Ⅱアビンドン、1450-1年：堀の魚を捕まえるための網の購入に合計で4シリング10ペンス、および魚を飼育するための生け簀1つの製作に3ペンス Et in welez emptis pro piscibus capiendis in fossato conventus 4s. 10d. et in facture unius tronke pro piscibus custodiendis 3d.

修道院の庭の管理の詳細について知るためには、その部署の会計簿を繰り返し見るとともに、この問題のビジネス面全体を見なければならぬが、そのあまり、別の側面、すなわち庭がもたらす喜びのことを忘れてしまいがちになる。しかし、何ということか！現存している庭の中で、これらの庭が一体どういうものであったかについて、何かヒントを与えてくれるものは実に少ないのである。分厚い生垣や養魚池だけが残っているのが一般的である。アシュリッジの庭のコーナーを囲っている壁は古い回廊の一部であり、その近くには分厚いイチイの生け垣で囲われたもう一つの小さな庭もある。これらの庭園は、ここが修道院であった当時とまったく同じ、ということではないにしても同じ流れに沿っており、修道士たちが世俗から離れた回廊中庭の世界を楽しんでいた日々からずっと変わらずに庭として維持されてきたものである。



〔図1-4〕アシュリッジ

同じようにニューステッド大修道院の庭には、ここに長年暮らしていた黒衣托鉢修道士たちの楽しげな痕跡が今もなお多数残されている。私たちが見ているこの時代は絶え間ない争いの時代であり、回廊中庭だけが、静けさと隠遁が許される唯一の場所であり、そして壁の内側に逃げ場所を求める人々にとっての唯一の場所であった時代には、庭の中で過ごす平和な時間がどれだけ愛おしいものであったかと思われる。おそらくソップウェル（セントオールバンズ大修道院の一室）の住人たちは早朝あるいは夕方遅く庭を散歩することを大いに楽しんでいたので、ミカエル大修道院長（1338年頃）は規則を定め、冬には「庭のドアは、朝の聖務日課、すなわち最初のお祈りの時間前には（散歩のために）開けてはならないこと；そして夏には庭と応接間のドアは朝9時までには開けてはならないこと；晚鐘が鳴ったらドアは必ず閉めなければならないこと」とされた*。

*ピーター・ニューカム師『セントオールバンズの歴史』468 ページ Rev. Peter Newcome, *History of St. Albans*



[図1-5] ニューステッド大修道院 鷲池・鏡池

（この名前は反射の鮮明さと真鍮製の鷲の聖書朗読台に由来。朗読台にはこの修道院が18世紀にここに創設されたことを示す書類が納められていた。池の大きさは長さ212フィート、幅104フィート。各コーナーには水の中に降りて行く石の階段がある。90ページ参照 [本誌93ページ]）

戦闘的なホスピタル騎士団 [第1次十字軍遠征の際にエルサレムで傷病者の加療のために結成されたヨハネ騎士団の団員]、テンプル騎士団、セントジョン騎士会ですら、園芸の改良にいくばくかの貢献をなした。十字軍の東方遠征の間、彼らはイングランドの庭のことを覚えていたのであろうか、そのための植物を持ち帰った。たとえば、リーブストンの素晴らしいスズカケノキ Oriental plane [*Platanus orientalis*] はその一例であり、それを植える伝統はテンプル騎士団のおかげとされている。これらの騎士団に属していた王国全体にわたる荘園の調査によると、その庭の多くのものが騎士団の所有であった。イングランドにおけるエルサレム・セントジョン騎士会の事務局、それはクラークンウェルにあったが、そこにはフィリップ・ドゥ・テム修道分院長の時 (1338年) の庭があり、ヘンリー7世 [在位1485~1509年] の時代にもなお存在していた (†ヘンリー7世王室行政文書, 西暦1486年 Close Roll, Henry VII)。またホスピタル騎士団も同様にハンプトンに、ハンプトンコートの中の庭園がある場所に庭付きの家を所有していた*。このような騒然とした時代を通じて、多くの方法で、修道院的な規律が園芸という科学を維持し、またその知識を周辺へと広めていった。そして実際にやって見せることで、神の教えを説くだけでなく、実用的な生活を通じて「働くことは祈りであること」を世に示したのであった。

*エルサレム・セントジョン騎士会およびテンプル騎士団、そしてシトー修道会も、庭の10分の1税を免除されていた。ーフラー『教会の歴史』

第2章 13世紀

“*The rose rayleth hire rode*

The leues on the lyhte wode

Waxen al with wille

The mone mandeth hire bleo

The lilie is lossom to seo

The fenyl and the fille.”

Springtime, MS., c.1300.

バラが彼女の行く道を飾り

明るい木々の葉は

思うままに大きく育ち

思い出はその色を放ち

ユリは瞳に心地よく

フェンネルとチャービル

『春の季節』 写本 1300年頃

ノルマン征服 [1066年] に続く時期、この国は絶え間なく海外での戦争に突き進むとともに国内では混乱が続いた。当時、庭を静かに楽しむ考えなどほとんどあり得なかったのは、ウィリアム1世 [在位1066~87年] とその息子たちが鉄のムチでイングランド人を支配しているような時であり、あるいはステイブーン [Stephen of Blois, 在位1135~54年] が「モード皇后」 [Mathilde Mahaut l'emperesse, 在位1141年の数カ月] に対抗して王位をねらって戦っている時であったからである。また、それは聖地への十字軍に人々が心を奪われている時であり、イングランドの憲法がゆっくりと作り上げられ、血が流され止むことを知らない闘争により自由が徐々に獲得されつつある時であったからである。

この困難な時代にあって、命と財産の安全のためには、できる限り外部から近づけないような場所に住むことが必要であった。丘の頂上に城が築かれ、あるいは防衛上適切な高い場所や、急な岩山の崖がない場合には、川や沼の背後に住むことにより安全を確保しようとした。これは修道士が求めた道とは正反対で、彼らは基本的には肥沃な谷間を選び、そこに修道院を建て、栽培用の果樹園、庭、ブドウ畑が造られた。封建時代の城の前面の緩やかな斜面には広い庭を造るスペースはなく、その住人たちがそれをあえて越えるような試みは安全ではなかったので、外側に何か庭なり果樹園を造る意味はなかった。そんなことをすれば単に乱暴な隣人どもによって荒らされるだけであった。しかしながら、このようなどこから見ても不利な状況にもかかわらず、果物の栽培をやりようとする動きは珍しくはなかった。

ヘンリー2世 [在位1154~89年] とスコットランドのウィリアム獅子王 [William the Lion, 1165~1214年スコットランド王] との間に起きた1173年、1174年の戦争に関する古い押韻年代記が信用できるとするならば、カーライルでは町の周り、城壁の外側に庭があったに違いない。作者と思しきジョルダン・ファントム [Jordan Fantosme, ~1185年頃アングロノルマンの歴史学者・詩人] はカーライル城の戦いを次のように記している。その一節を翻訳するとこのようになる (*サーテイズ協会, 1840年77ページ): -

“They did not lose within, I assure you I do not lie, 彼らは城壁の内側では負けなかった、それが嘘でないのは保証します、

As much as amounted to a silver denier. ドゥニエ銀貨の価値に匹敵するくらいに。

But they lost their fields, with all their corn しかし彼らは耕地を失った、すべての小麦もろともに
[And] their gardens [were] ravaged by those bad people, そして彼らの庭はあの悪人達により荒らされた
And he who could not do any more injury took it into his head そしてこれ以上危害を加えられなくなった者が思いついたこと、それは

To bark the apple trees ; it was bad vengeance.”† リンゴの木の皮をはぐこと；ひどい復讐だった†
興味深いことに、カーライルの庭がそれよりも早く、1131年に存在していたことがヘンリー1世の31年のパイプ文書に書かれているので確認できる。(印刷版,141 ページ)

国王の土地からの収入－「ウィリアム・フィッツ・ボールドウィンはカーライルの国王の庭園の古い農場に関し 30 シリングの会計簿を提出する。彼は(同じもの)を国庫に送付し、－そして彼は自由の身となった。そしてそのウィリアムはこの年の分として同じ庭園の農場に関し 30 シリング借りた。」

[訳注] コーン corn はイングランドでは小麦、スコットランド、アイルランドではカラスムギのことであり、トウモロコシは maize と呼ぶ。トウモロコシがヨーロッパに伝来したのはコロンブス以降と言われる。

パイプ文書 Pipe rolls、王室会計文書 Exchequer rolls、リベレート文書 Liberate rolls の全体を通じてあちらこちらに、12世紀、13世紀の王室庭園の様子を示す記述が少しずつ残されている。1158-9年にはロンドンにある王室果樹園の担当者「ヘンリクス・アボラリ」に対し、またウィンザーやその他の場所におけるブドウ剪定人に対し支払が行われている(※パイプ文書協会第1巻1884年 Pipe Roll Society)。1259年には、ヘンリー3世[在位1216~72年]はウェストミンスター宮殿の大規模な改修を行い、職人、大工その他への支払いの中に(§デヴォン王室会計の支出文書1837年 Devon Issue Rolls of the Exchequer)、「ローラーで庭園部分の土地をならす」労働者への支払いも何件か見られる。

エドワード1世[在位1272~1307年]の治世下においては、庭園の管理のための費用がいろいろ記載されており、ウェストミンスターのブドウ畑のブドウの剪定や、「国王の父であるヘンリー国王陛下の以前の使用人であった」「ロジャー・ル・ハーバル」への日当2¼ペンスの支払いも記載されている。1276-7年には、国王の森の管理人であるロバート・ドゥ・ベバリー氏に対し、国王は97ポンド17シリング7½ペンス支払っているが、「その目的はチャリングに隠れ家を作るとともに、そこに国王のキッチンガーデンを造るために必要な諸々の費用に充てるためであった」。ヘンリー3世の主たる庭園はウッドストック[オックスフォード近郊]にあったが、この庭園は彼が造ったものではなく、ヘンリー2世の時にすでにそこに庭園は存在していた。その中には「美しきロザモンド」の悲劇的な運命として有名になった「女性の私室」“Bower”を隠すための迷宮 labyrinth があった。

[訳注] この迷宮は、ヘンリー2世が愛人であるロザモンドを女王の目から隠すために作ったが、噂を耳にした女王がそこを突き止め、短剣か毒薬かどちらかをと迫り、ロザモンドは毒薬をあおって死んだというイングランドの有名な言い伝えがある。

ロマンスと謎に満ちた雰囲気がこの隠れ場所にはつきまとうが、実際のところは迷宮自体は珍しいものではまったくなかった。大昔から迷宮が存在していたことの証拠は存在しており、それらから、より現代に近い時代の迷路 maze の様子をうかがうことができそうである。最初の迷宮は地面に刻まれた曲がりくねった園路であり、その痕跡は今もイングランドのいくつかの所に確認することができる。これらのうち、サフランウォールデンのものは渦巻き状の溝がある最も衝撃的な事例である。キャムデンは当時ドーセットシャー州に現存していたものについて書き残しているが、それはトロイタウン、またはジュリアンの私室という名前のものであった (*ガフによるキャムデンの『ブリタニア』第1巻73ページ1806年)。

[訳注] labyrinth と maze は共に迷路と訳されることが多いが、本来は迷宮 labyrinth は出入口が一つで道筋も1本、迷路 maze は出入口が複数で道筋も複数ある遊戯性が高いものとされる。

1250年、ヘンリー3世は女王のために、ウッドストックの庭園に改良の手を加えた。ウッドストックの管理人に実施を命じたいくつかの工事の中には次のようなものがあった。「女王の庭園のぐるっと周りに2つの壁を作ること。その壁は十分に高くして誰も入ることができないようにすること、養魚池の近くには見た目にもふさわしく立派なハーブ園を作り、そこで女王が楽しむことができるようにすること、我が息子エドワードの礼拝堂に隣り合わせるハーブ園から前述の庭園につながる何らかの門を作ること」†。

†リベレート文書, ヘンリー3世の第34年, m. 6 – ウッドストックにて, 6月20日「私たちの養魚池の近くに上品で気高いハーブ園があって、そこで女王ご自身が楽しむことができるよう」“cum herbario decenti et honesto prope vivarium nostrum, in quo ipsa Regina possit spaciari.”

また1252年8月19日、再び命令が出され、「大ハーバリウム」“great herbarium”に芝を張ることが命ぜられた (‡同書,ヘンリー3世の第36年, m. 4.)。ハーバリウムという用語は、普通はハーブが育てられていた場所というぐらいの意味なのであろうが、この場合は、あずまや arbour のことを指す古い英語の“herber”、すなわち小屋とか隠れ場所“harbour”、という意味で使われているかのように見える。

同じ年、クラレンドンにおけるその他いくつかの工事の中で、女王の「ハーバリウム」“herbarium”が「作り直され手が加えられた」 (§同書ヘンリー3世の第36年, 7月9日, m. 6)。これは普通あずまやという言葉で理解される、囲われた場所であるかのように見える。14世紀になるとこのようなあずまやに関する記述は多く見られ、そこは芝を張るのが習慣とされた。これに対し、ハーバリウムは多分小さな私的な庭園で、ハーブが植えられ高い生

垣に囲まれていたのかもしれない。クラレンドンの庭園は柵により囲まれていたが（*リベレート文書, ヘンリー3世の第37年, m.13）、ウィンザー（†同書, ヘンリー3世の第37年, m. 17.）とケニントン（‡同書）のものは溝で囲まれていた。1260年にはウィンザー城の外側でさらに手が加えられた。庭師の家が取り除かれ、壁が追加して建設された。後に続く数々の王朝時代においてもウィンザーのこの庭園は維持され、時々改良され、果樹園あるいはブドウ畑が広げられた。庭師とブドウ剪定人に対する賃金の支払記録は公文書館に保存されている多くの家計簿に残されている。庭師は年間100シリング、労働者は日当2½ペンスを受け取った。不思議なことは、これらの庭園で生産されたものが売られていたことであり、すべての果物が王室によって消費されていた時代にあって例外が認められていたようである。1332年には収入として次のような記載がなされている。「6シリング6ペンス、城外の王室庭園の果物および葉物野菜の売上」（\$聖職者の会計簿第753巻No.9）、その他同様の記載がなされている。「ヘンリー5世〔在位1413~22年〕の王室執事でありウィンザー城の城代であったナイト爵位を持つウォルター・ハンガーフォード〔Walter Hungerford, 1378~1449年 下院議長〕の会計簿」（‡同書第755巻, No.10）（1419-22年）の中では、「国王のものであるその庭園の果物およびブドウに関して、この会計簿が書かれた2つの第2年（原文のまま）において生じるいかなる問題についても、彼は答えていないが、それはこの庭園から収穫された果物が国王陛下の王室に届けられ、そのブドウの実が当時王室にいた女性たちやその他の者によって食されたので、城代自身はそこからいかなる利益も得ていないし、得ることもできなかった、と断言している」。

ロンドン周辺には、ウェストミンスター、チャリング、ロンドン塔に加えて、ほかにも王室の庭園が存在した。市民が所有している小さな庭については、フィッツシュテファン〔William FitzStephen, ~1191年〕が、同時代に生きたトーマス・ベケット〔Thomas Becket, 大法官、カンタベリー大司教（1162~70年）〕の生涯の中で描いた町の様子から垣間見ることができる。その（翻訳された）一節は次のようなものである：-「郊外に住む市民たちの家々の外側のすべての横に庭が隣接しており、そこにはゆったりとし見た目も楽しい木々が植えられている」



〔図2-1〕町なかの庭 フランスの写本 15世紀後半

P.クレサン『農業カレンダー 田舎の恵み』より 大英博物館 ADD 19-720

〔訳注〕P.クレサン『農業カレンダー 田舎の恵み』Le rustican des profits ruraux P. Croissant.とは、ピエール・デ・クレサン『田園および田舎の恵みの本、あるいは農業カレンダー』Pierre des Crescens, *Livre des profits champêtres et ruraux* ou *Rustican*のことか。Croiscens との表記もある。

ロンドン近郊で唯一のほかの大庭園で、宗教施設に付属した以外のものは、ホルボーンのリンカーン伯爵ヘンリー・ドゥ・レイシイ [Henry de Lacy, 1251 頃~1311 年] の庭園であった。1295-6 年の伯爵所有のすべての荘園の会計簿が残されている*。すべての領地で売られた生産物のリストがあり、そこには麻、小麦、豆 beans、マメ類 pulse などが記載されているが、どの生産物についても売れるだけの十分な量が穫れるのはホルボーンだけであった。「グランテ・セテ荘園」では7シリング4ペンスがブドウの木の剪定および栽培のために支払われているが、ほかの大きな荘園、たとえばソーズビイとかポンテクラフトでは、庭園に関する記述は一切見られない。ホルボーンの会計簿はとても面白く、庭師や労働者に払われた賃金やブドウから作られたヴァージュースが何ガロンあったとか、売りさばかれた大量の梨やリンゴのことが書かれている。その他のものについては、多分庭園で育てられたものより種類が多いのであろうが、購入されて伯爵に送られ、そしてリンゴや梨の接ぎ木の枝が庭園の補充用に購入された。

*この誠に見事な長大な文書は、何枚もの用紙がつけられた長さ約3フィート、幅約15インチという大ききであり、公文書館に保管されている。ランカスター王族公領 聖職者の会計簿第1巻 No. I.

リンカーン伯爵ヘンリー・ドゥ・レイシイの財産の会計簿、エドワード1世の第23年および第24年、ホルボーン；従士 serjeant [ナイト爵位の人の下で軍務につき領主から封土を受けた] ウィリアム・ドゥ・ドニンクトンはエドワード王の治世第25年の年、聖クレメント法王の日にホルボーンにて、同じ人

(サー・ウィリアム・ドゥ・ノニ)の面前で同じ時の(エドワード1世の第23年聖ミカエル祭から24年聖ミカエル祭)会計簿を提出した。

9ポンドは庭園の梨、リンゴ、大ナッツ great nuts の売上、10分の1税控除後。2シリング3ペンスは庭園のサクランボの売上、10分の1税控除後。8シリング9³/₄ペンスは庭園のハーブと“Jeritis”の売上、10分の1税控除後。6シリングは庭園の豆の売上、10分の1税控除後。20³/₄ペンスはヴァージュース“in fobis”、10分の1税控除後。12シリング3ペンスは49ガロンのヴァージュースの出荷、10分の1税控除後。3シリング2ペンスはバラの売上、10分の1税控除後。4シリング6ペンスは庭園の葉物野菜、10分の1税控除後。2シリング3ペンスは庭園の麻、10分の1税控除後。4シリング1¹/₄ペンスはタマネギ、ニンニクの売上、10分の1税控除後。2シリング6ペンスはブドウの苗木(plancettis or plantettis?)の売上。(鹿の売上の受け取りもある)

支出-52シリング2ペンス、庭師の賃金と洋服代(年間)。次に60シリング8ペンス、従士の賃金(年間)、そして10シリング、従士の洋服代。次に43シリング8ペンス、アパートのケージ(?) Gaol of Flet の管理人に対し支払うべき年間耕作料。次に39シリング8¹/₄ペンス、これは庭園で働くいろいろな(人たち)への手当と、ブドウのほかハーブ、ネギ、その他中庭の費用や肥しを運んで撒くための費用が含まれている。そして5シリング7ペンス、豆2ブッシェルと麻、タマネギ、ニンニクの種は植えるためのもの。次に22ペンスはヴァージュースを作るのを手伝う(人たち)への手当とそのために買う塩の費用。また3シリング2¹/₂ペンスは、「ルール梨 Rule の insitis (=接ぎ木)2本、マルタン梨 Martin のもの2本、カルエル梨 Caloel のもの5本、プセ・プセル梨 pesse pucele のもの3本」が植えるために買われた。次に2シリング6ペンスは庭園の杭柵の補修費用。また44シリング4¹/₂ペンス、馬小屋から庭園の中の大きめの溝の北端に至る杭柵を支える最近作られた「土手」1つの費用として。8シリング0¹/₂ペンスは、カワマス (*luporum aquaticorum*) の餌として購入された小さな魚やカエル、ウナギの代金。27シリングは、「カルエル梨」100個、「プセ・プセル梨」100個、「ルール梨」200個、「マルタン梨」300個、(そして)マルメロ“quoynz”300個の購入とアムブル伯爵(アムズベリ・ウィルツ?)への運搬費・・・17シリング0¹/₂ペンスは、タマネギ1500個(と)1¹/₂分のニンニクを購入してカムフォードへ送るための費用で、その運搬に11シリングを計上。

これらの帳簿に記入されている梨の多くはフランスから来たものようである。「カルエル梨」“caloel”は他の土地では「カユエル」“cailloel”と呼ばれたが、これは[フランス語の]「カユ」“caillou”、いわば小石に当たるもので、それは形が似ているからで固いからではないと思いたい名前だ。「プセ」“pesse”あるいは「パス・プセル」“passe pucelle”も明らかにフランス語である。「サンルール梨」“S. Rule” pearはおそらくサンレゴロ St. Regolo、すなわちルール Rule にちなんで名付けられたのであろう。サンレゴロはアルルの司教でサンリスの第一司教であった。ロシエルはフランスでは梨で名高いが、ある年ロンドンの長官がそこからいくつか輸入し、ヘンリー3世に献上した。これらの多様な品種の梨、およびこれに支払われた価格に関する詳しい情報は、公文書館に収められている極めて興味深いその他の記録により知ることができる。これらの書類とはヘンリー3世およびエドワード1

世のために、異なる時期に購入された果物の請求書である。一番早い時期のものは多分1223年のものであろう。記録の初めの方は失われてしまっているが、名前不明な某国王の第7年という日付となっている。場所と日付からわかる内部資料により、その国王とはヘンリー3世と思われる。彼は当時まだ未成年で、その治世第7年の動きもはっきりしないが、他の可能性のある国王たちすべての第7年の動向というものはわかっており、この記録に現れた日付けとは一致しない。最初に記入されているのは4月20日、「ポア」という場所で、リンゴ600個を12シリング、100個のサンルール梨を10シリング、500個のナッツを2シリングでパリから買っている。ヘンリーはその時イングランドに向かって旅行中であり、そして行く先々の、「アルネ」、「アベヴィーユ」、「ガール」、そして「ボローン」で毎日パリからの大量の果物が献上された。4月27日、彼はドーバーにおり、そこでも引き続きロンドンに着くまで毎日、リンゴ、梨、ナッツが献上された*。

*「項目 5月6日ロンドン塔にてリンゴ200個に2シリング、そして梨100個に2シリング、ヘーゼルナッツ300個に6ペンス」 - 『王室会計文書その他事項481/40』

“Item le VI^{me} jour de May a la Tour de Londres pour ii c. de pommes ii s. esterlins et pour i c. de poires ii s. esterlins et pour iii c. de noix vi d. esterlins.”

[訳注] esterlinとはスターリング、ペニー銀貨のこと。noixはnoisetteハシバミの実、ヘーゼルナッツ。

1292-3年の同じ様な記録によると、その他の何種類かの梨の名前が出てきており、その一部を挙げると次のようなものとなる（†王室会計文書から抜粋 国庫歳入その他事項49/24. エドワード1世の第20-21年）。

覚書：ニコラスのヨーマン [自由農民]、果物商のジョンがオール（セイント？）祝祭日の前の次の火曜日に、カンバスから馬に果物を乗せて来た。カンバスからはベリック城に向けて船が……。まず900個のカルエル梨、100個当たりの価格4シリング、同じ荷物（で）500個のパ・プセル梨、100個当たりの価格2シリング。荷籠panêr (paniers?)と綱に8ペンス。馬の借賃とその費用、そして男1人の4日分の費用として3シリング6ペンス。また聖エドモンド祝祭日の前の次の水曜日に国王、ベリックの町から（城）へ700個のレーグル梨、100個当たりの価格3シリング、あわせて300個のコスタードリゴ、100個当たりの価格12ペンス。……運賃½ペンス

バーンウェルに滞在中の国王陛下へ送付、バームサンデーの後の次の月曜日に800個の見事なレーグル梨、100個当たりの価格10ペンス、あわせて900個のリンゴ、100個当たりの価格3ペンス。また1200個の栗“Chasteyns”、100個当たりの（価格）2シリング。荷籠と綱に6ペンス。馬1頭の借賃とその費用、そして馬丁1人往復の費用として2シリング1ペンス、合計13シリング11ペンス、以上。

国王陛下に送付、ステファン・ミューにより、キリスト顕現日の後の金曜日、1700個のレーグル梨、100個当たりの価格10シリング。加えて1400個の見事なマルタン梨、100個当たりの価格8シリング。さらに700個、100個当たりの価格3ペンス……

北部に滞在中の国王陛下へ送付、4500個の「ディエス梨」“dieyes”（あるいはドレイズ dreyes?）、100個

当たりの価格3シリング、加えて1200個の「ソレル」梨“sorell”・・・
ヨークに滞在中の国王陛下へ送付・・・6000個の「ゴールド・ノップ梨」“gold knopes”、100個当たり
の価格2ペンス。あわせて5000個の「チルフォル梨」“Chyrfoll”・・・

エドワード1世〔在位1272～1307年〕に対し、ニューカッスル、ヨーク、ポンテフラクト、ベリック、その他北部の各地において、果物が献上された。この日付は、ブルース〔Robert Bruce, 1215～95年〕とベリオール〔John Balliol, 1249頃～1314年〕の時代のスコットランドとの戦争開始の日であり、それはエドワードがニューカッスルとベリックで議会を開催した時であった。興味深く思えるのは、このような大事件によって当時最も知られていた梨の名前が明らかにされるということである。この会計簿に記入されているところの、サンルール、すなわち「レーグル梨」のほとんどを今でも見ることができ、また初期の請求書からわかるように、この梨はまとめ買いされ、その値段は100個当たり通常3シリング、場合によってはたったの10ペンスであった。「レーグル」に次いで記入回数および量的にも多い梨は、「カルエル」および「パ・プセル」であり、「マルタン」というものもある。これら4種類すべての梨はリンカーン伯爵の帳簿にも見つけることができ、その値段は100個当たり4シリングから8シリングとなっている。このほかにも、「ディエス」（またはドレイズ）、「ソレル」、「チルフォル」、「ゴールド・ノップ」の梨の記載があり、またリソゴ、「コインズ」“coynes”と呼ばれたマルメロ、「チェスティンズ」*と呼ばれた栗、および「大ナッツ」も記載されている。

*パイプ文書（印刷版1884年、第1巻）、ヘンリー2世第5年、3シリング、ソールズベリーにいる女王に送られた栗（castaneâr）の代金として。

特に目を引く唯一のリンゴの品種としてはコスタード Costard〔英国種の大きなリンゴ〕がある。何世紀にもわたって最も人気のあるこの品種の名前は、元々はこの果物を売る商人のことを指す「呼び売り商人（コスターマンガー）」“costermonger”という語の中に残されている。オックスフォードでは1296年、コスタードリソゴが100個1シリングで売られ、1325年にはコスタードリソゴの木29本の価格は3シリングであった（✦ソーロルド・ロジャース『農産物価格の歴史』Thorold Rogers, *Hist. of Agricultural Prices.*）。このリンゴのことを初期の著者たちは、ウォーデン梨と普通の梨を区別するのと同じように、特別の果物として描いた。グローステスト〔Robert Grosseteste, 1175?～1253年 神学者・聖職者〕は「リンゴとコスタード」というようにコスタードのことを書いた（✦スローン写本686「グローステスト先生が書いた農業の論文」Sloane MS. “Treyse off Housbandry that Mayster Groshede made.”）。もう一つの人気の高いリンゴの品種はペアメインである。初期の頃、これはリンゴ酒用に使用されていたことがわかっている。ジョン王の第6年、ノーフォークの東フレグ村〔100戸で1村の行政単位〕、小規模の役務保有によりランハムの領主であったロバート・ドゥ・エヴァミア何某は、聖ミカエル祝祭日に毎年、200個のペアメインと4ホッグズヘッド（モウディ

アス) のペアメインから作られたワインを国庫に納めることによりその土地を与えられたものであった (§ ブロムフィールド編『ノーフォークの歴史』第 5 巻 1378 ページ, 1775 年 *Hist. of Norfolk*)。エドワード 2 世 [在位 1284~1327 年] の第 9 年においてもその支払いは毎年行われていた。もう一つ別の梨の品種、ジャネッタール Janettar のことは、ヘンリー 3 世の治世第 36 年の衣裳掛の会計簿の一つに記載されており、それは「ロンドンの果物商ジョン」から「ソレル」、「カユエル」と一緒に購入されていた (*王室会計文書, その他古文書, 衣裳掛および王室の会計簿, 1/22. 公文書館 Ancient Miscell. Wardrobe and Household Account)。

[訳注] 役務保有 serjeanty とは (中世英法) 君主に対する奉仕を条件として与えられる土地保有の一形態。ホッグズヘッド hogshead とはワインの液量単位 (52.5 ガロン=240 リットル)。モウディアス modios は古代ローマの乾量で約 9 リットル。これらの 2 つの単位の関係は不明。

これらの普通に見られた果物のほか、特別なものとしてサクランボ、クワの実、セイヨウカリン medlars、さらには桃などがあつた。この最後の果物、桃が本当にイングランドにあつたかどうか証拠を示せと言われるなら、ジョン王がニューアークで絶望と失望のどん底にあつた時、桃の食べ過ぎとエールの飲み過ぎで死期を早めた事実からわかるということである († 『ウェンドーヴァーのロジャー年代記』 *Chronicle of Roger of Wendover*)。

以上引用してきた様々な会計簿は、どれもこれも同じようなもので退屈ではあるが、この時代の果物と庭園に関する情報源としてほとんど唯一の信頼できるものである。このように大量の果物を供給するには広大な果樹園があつたに違いない。国王御用達の果樹商が何千ものリンゴおよび梨を王様のためにフランスから調達したと想像することは不可能である。もちろん少しは外国から来たであろうが。14 世紀初期までにはこの国には多数の素晴らしい、古くからある庭や果樹園が存在していたはずで、宗教的使命によるばかりでなく、多数の世俗的な土地所有者のもとで栽培されていたのである。庭園は、当時創設され始めていたオックスフォードやケンブリッジの様々なカレッジの周辺にも造られつつあつた。ケンブリッジのトリニティホールは見事な庭園を保有しており、そこにはブドウや「ハーブ園」“herbaria”が創設間もないうちに造られ、ピーターハウスではそれより数年早く造られていた。ロンドン周辺の庭園もその頃にはすでに造られていた。それらについては古い賃貸契約を調べることでさらにいくつか知ることができるかも知れない。次の事例はロンドンの一地区内の庭園の数について一つのイメージを与えてくれる。それは 1375 年当時の庭園のための賃貸契約で (‡ 書簡集エドワード 3 世の 49 年 Letter Book. H. F. XIII.)、「庭園は市壁近くのロンドン塔地区に位置し、最近ジョン・セオーが取得したもので、北側にあるジェフリー・プッペが所有する庭園と、南側にあるウィリアム・ランボーンが所有する庭園の間にある」。果物と野菜の栽培が大幅に増加したことの証明として、ロンドン市内および周辺の庭師とロンドン市長との間で起きた論争ほど明確なものはなく、それは庭園の生産物を売ることが許される場所に関するものであつた。

1345年以前の長い間、伯爵、男爵、司教、ロンドン市民の庭師は、「豆類、サクランボ、野菜その他の品物を商売相手に」「セントポール寺院の教会敷地の門の近くにある聖オースチン教会の反対側の」路地で売ることを習慣としていたようだ。しかしながら1345年になるまでには、この青果市場は「歩行者、馬に乗って通る人々」の邪魔になるくらいに大きく成長し、混雑することになってしまった。「庭師とその使用人の下品で騒々しく迷惑な状況」が「名声のある人々が暮らすそのあたりの家に住む人々にとって」不愉快きわまりないものになり、また「聖オースチン教会で朝の祈りとミサを捧げる聖職者にとって、また神に祈りを捧げるほかの人たち、書記や一般の人々にとっても迷惑」だったので、市長と長老議員に対し善処し、市場をどこかもっとふさわしい場所に移転するよう請願が出された。この請願の結果、市長と長老議員が会合を持ち、命令が「当該庭師とその使用人に対して出され、彼らはこれ以降、前述の品物をその場所で売ることを禁じられ、それに違反すると罰せられることとされた」。しかし、庭師たちもそう簡単には引き下がらなかった。今度は彼らが市長に対し決定を覆して欲しいと請願を出した。その内容は、このようなものであった。「ロンドン市長殿へ 我々庭師たちは、伯爵、男爵、司教、ロンドン市民のために働いていますが、ここにお願ひするのは、閣下におかれては、ロンドン市の最大の守護者として、またロンドン市において古くから確立している慣習の最大の守護者として、我々庭師たちが平和裏に、昔からの慣習である同じ場所で、聖オースチン教会の前で、セントポール寺院の教会敷地の門の横に立って、ロンドンのその場所で、彼らの主人の庭園の生産物売って、従来からやってきたように収入を得ることを認め、今までどおりとして頂くことをお願ひ申し上げます。これは、庭師たちが前述の場所で今まで邪魔されることなくやってきており、そして彼らが主張するところによると、従来やってきたようには、一般市民の役に、そして自分の主人の役に立つことができなくなる、ということを考えてのことです。以上の件につき、再検討をお願いします」。しかし、市長は当初譲歩しようとはしなかったが、後には「長老議員との会議」を持ったようで、そこで次のように合意された。「市内のすべての庭師たちは、自由市民などの特別な人々と同様に、豆類、サクランボ、野菜その他の前述の品物を市内で売る彼らの場所を持つことができることとし、その場所は、聖オースチン教会敷地の南門と、同じく市内のベイナード城にあるドミニコ会修道士の庭園の壁との間の空間とし、これにより市長とこのために任命された長老議員により指定された場所で、彼らは前述の品物を売ることができることとし、その他の場所は認めないこととする」。

(*ギルドホール書簡集F, フォリオ111 およびライリー『ロンドン生活回想録』 Letter Book F, fol. cxi, of the Guildhall, and Riley's *Memorials of London Life*)

第3章 14世紀および15世紀

“And in the gardin at the sonne uprist
She walketh up and down wher as hire list
She gathereth flouers, party whyte and reede
To make a sotil gerland for hier heede”
Chaucer, *Knight's Tale*

そして庭園では太陽が昇る時
彼女は上ったり下ったり気の向くままに歩き
彼女は花を摘む、白や赤を取り交ぜて
自分の頭を飾る素敵な花の冠を作るため
チャーサー『騎士物語』

イングランドでは14世紀後半から15世紀初めにかけて大きな変化が起きていた。貿易と産業が発達し、園芸も復活した。ノルマン征服以降の年月の間に、征服者と被征服者が一つの国として融合していたが、それは平和裏に進んだものではなかった。しかしながら、今や私たちは戦争が海外で戦われている時代を迎え、国内は比較的平和な時代を謳歌していたのである。国内はと言うと、社会の貧しい階層の人々が領主に対して権利を段々と主張してきていた。領主に対し労役あるいは現物で年貢をいくらか納めさえすれば、農地を耕す農民という一つの階級が生まれつつあった。これらの小さな農家と荘園の周りに庭や果樹園が造られ、ここから、このような動きがガーデニングの進歩にどのように影響を与えたかを見ることができる。

当時の文献を見ていると、貧しい人々は主として野菜を食べて生きていたような様子に出くわすことがあり、次のラングランド [William Langland, 1330?~1400年?詩人] からの引用がその例として挙げられる：

“Alle the pore people pesecoddes fetten*
Benes and baken apples thei brougte in her lappes
Chilbolles and cheruelles and ripe chiries manye” †
† *Piers Ploughman*

貧しい人々はみなペスコッドを取ってくる
豆と焼きリンゴをスカートの裾に入れて運ぶ
ネギとチャービルと熟れたサクランボを一杯 †
† 『農夫ピアズ』

* fetch

[訳注] ペスコッド *pescoddes* とは何かは明確にはわかっていない。果物かも知れないが、本書51ページの「熱いペスコッド」という字句から見ると疑わしい。オックスフォード英語辞典ではエンドウ豆などのさや、の意味で“*peasecods*”または“*peascods*”の変異形とされている。(中世フォーラム：ジョージ・W・トゥマ名誉教授編。)

さらに続けて、貧しい人々は

“With grene poret and pesen to poysonn hunger
thei thought” ‡ ‡ *Ibid.*
また “Two loves of benes and bran
Y baked for my children” *
* *Piers Ploughman*

緑のネギと豆でもって飢えを紛らわそうとした ‡
‡ 同書
2つ好きなもの、豆とふすま [麦かす]
私の子どもたちのために焼いてくれた*
* 『農夫ピアズ』

シャクシギなどの鳥が使われた。庭の主な役目は詰め物と香り付けのためのハーブを作ることであり、ハーブは好きだけ使えた。たとえば、ある本 (*『ハーリー写本』4016、1450年頃、初期英語文献協会印刷、T. オースチン編 *Harl. MS, Printed Early Eng. Text Soc. Ed. By T.*

Austin) の最初のレシピは「野兎のハーブ」料理である。まず「キャベツ colys を用意し、それを茎からきれいにそぎ落とし、次にレタス Betus とポリジ [ルリヂシャ] Borage、ダイコンソウ auence、スマレ、マロー [ウスベニアオイ] Malvis、パセリ parsele、ベトニー [カッコウチョロギ] betayñ [betony]、スイバ類 paciencie、ネギの白いところ、イラクサの葉を用意する；半茹でにし、水分を絞り出し、小さく刻む。そして食卓へ出す」などなどとなっている。タマネギ、ネギ、ニンニクは幅広く使われた。肉または魚を、梨またはリンゴ、香辛料・砂糖と合わせて調理し、それにネギを細かくすり潰したものの、細かく刻んだポレット porrettes [ネギ green onions, scallions & young leeks]、丸ごとのタマネギかニンニクのソースを加えた料理はまったく珍しいものではなかった。チョーサーの「カンタベリー巡礼者」の一人である召喚人 [教会裁判所の担当者] のような階層の人々の間では、この味が広く好まれていた。

“We lovede he garleek oynouns, and ek leeks.” 我々はガーリックオニオン、またネギも好物であった

強い香りのハーブはどれも料理用として人気があり、どこの庭にも各種十分に取り揃えられていた。フェンネルは一般によく使われたハーブの一つであり、緑の葉っぱ、そして種も食用とされた。王室においては一か月あたり重さ 8 ポンド半のフェンネルの種が購入された (†衣装掛の会計簿 エドワード 1 世 1281 年)。また貧しい家では空腹の苦しみを紛らわせるために食べられたり、断食の日のまずい食事にちょっとした楽しみを得るために食べられた。『農夫ピアズ』には、聖職者が貧しい女に尋ねる場面がある。

“Hast thou ought in thy purs ?” quad he,	「お前は袋の中に何か持っているか」と彼が言う
“Any hote spices ?”	「辛いスパイスとか？」
“I have pepper and piones (‡ peonies),” quad she,	「コショウとシャクヤク」と彼女は答え、
“and a pounde garlike,	「それとニンニク 1 ポンド、
A ferthygworth of fenel seed, for fastyng days.”	断食の日用のフェンネルの種 4 分の 1 ペニー分」

古い医学の写本を見ると、この植物について次のような記述がある (§ 14 世紀写本、ストックホルム王立図書館所蔵、『考古学』第 30 巻より引用)。

†Fenel is erbe precyows,	フェンネルは貴重なハーブである
* * *	* * *
Good in his sed so is his rote	種として良し根として良し
And to many thyngys bote. ††”	そして多くの役に立つものとして
* * *	* * *

“Forkys y made of asche-tre	セイヨウトネリコの木で作った2股の支柱
That none of hem downe nou3t fall	どの1本も倒れることがないとは言えない
* * *	* * *
When they rype they wyl schow	収穫時期になればそうとわかる
And by the bollys thu schalt hem know	丸い形であなたはそれを知ることになる
The sede wt[ith]yn wul schewe blake	中にある種は黒く見えるだろう
Then thu schalt hem vp take	そうしたらあなたはそれらを拾い上げる
They wul be rype at the full	種は完全に熟しているであろう
At lammasse of Peter Apostull.”	聖ペテロの収穫祭の時には

サフランは驚くほど大量に料理で使われ、それに支払われた金額も大変大きく、1ポンド当たり10から20シリングに上った。サフランは主に東部地域で育てられ、ノーフォークのウォールシンガムは昔はその産地として有名であった。エセックスのサフランウォールデンの町の名はこれにちなむ。サフランの苗床には十分な注意が払われなければならない。ジョン・ガードナー曰く「苗床は注意深く作られなければならない、それは本当にもし成功を望むなら」。“Beddys” must be “y-made wel wyth dyng, For sothe yf thay schal bere.”そして球根は「穴掘り具」“dybbyl”によって位置を決め、3インチの深さに植えられなければならないと続く。

“Thay wold be sette yn the moneth of September	それらは9月中に植えられることになる
Three days by-fore seynt mary day natyuyte.”	セントメアリーの誕生日の3日前までに

庭に植えるその他のハーブの中で、キャベツ、すなわちケール kale は主要な場所を占めていた。これらは“caboges”、“cabochis”、“caul”あるいは“kole-plantes”と呼ばれたり、“wurtes”または“wortes”がキャベツを意味することもあった*。

*「アブラナ属...キャベツ wortes または cole または colewortes」ターナー『植物に関する小冊子』1538年“Brassica...wortes aut cole aut colewortes.”—Turner’s *Libellus*

ジョン・ガードナーは“wortys”をその意味で使った：—

“How he schall hys sedys sowe	どのようにして彼は種を蒔いたらよいのだろうか
Of euery moneth he most knowe	毎月について彼はよく知っている
Bothe of wortys and of leke	キャベツとネギの両方について
Owynys and of garleke	タマネギとニンニクのこと
Percely clarey and eke sage	パセリ、クレアリー [オニサルビア] とセージ
And all other herbage.”	そしてその他すべての葉物野菜について

彼は「キャベツ」“wortys”の栽培について1段落25行を使って書いている。注意深く種を蒔いていけば1年中いつでもキャベツは収穫できるだろうと言う。

“Euery moneth hath his name	各月にはそれぞれの名前がある
To set and sow without eny blame	間違いないよう日を決め種を蒔く
May for somer ys al the best	夏の5月が何といても一番
July for eruyst † ys the next	収穫の7月が2番目
November’ for wynter mote the thyrd be	冬の11月が3番目かも知れない
Mars for lent so mote y the ‡	四旬節は3月、そうすればうまく成長する
* * *	* * *
And so fro moneth to moneth	そして毎月毎月
Thu schalt bryng ‘thy wurtys forthe.”	汝、自らのキャベツを産み出すであろう
† harvest ‡ so may I thrive	

15世紀の料理本を見ると、キャベツのレシピは2つあり、一つはポターージュ、もう一つはペポカボチャ marrow、薄いお粥、サフランと一緒に料理したものであった。現存する大きな宴会のリストの中には、そのような野菜料理は、あったとしても稀にしか作られなかった。ヘンリー4世 [在位 1399~1413年] の結婚式の披露宴の3番目のコースには、「ペスコード」“pescodde” [前出: 豆のさや] と「イチゴ」が料理の一つとして出されたが、これは当時の食卓にあってはほとんど唯一の例と言える (*『2冊の15世紀料理本』T. オースチン著 *Two Fifteenth Century Cookery Books*, 初期英語文献協会)。キャベツは最も早くからこの国の中で育てられてきたが、次の一文に書かれているものは改良されたものかも知れない (+アイザック・ディズレイリ『文学の楽屋裏』Isaac D’Israeli, *Curiosities of Literature*)。「ドーセット州ウィンボーン・セントジャイルズのサー・アントニー・アシュレイ [Anthony Ashley, 1551~1628年 枢密院書記長] はわが国で最初にキャベツを植えた人物であり、彼の記念碑の足元にはキャベツが置かれている」。1627年 [1628年?] に遡るそのお墓は、現在、教会に行けば見ることができる。

14世紀および15世紀には、果物の種類は豊富になり、量的にも十分な供給が行われた。いくつかの新しい種類のリンゴや梨のことが当時の詩人たちによって書かれていることから幅広く知られていたに違いない。リドゲイト [Lydgate, 1370?~1450年? 宮廷詩人・修道士] は、白リンゴ Pomewater ‡、リカルドン Ricardon、ブラウンドレル Blaundrelle、クイーンイング Queening というリンゴについて語っている。

‡シェークスピア『恋の骨折り損』*Love’s Labour’s Lost* 「そして、*cælo*、すなわち大空、蒼穹、天空の耳に宝石のようにかけられ、白リンゴのように熟しておりました。」第4幕第2場 [小田島雄志訳]

“Ripe as a Pomewater, who hangeth now like a jewel in the ear of *cælo*—the sky, the welkin, the heaven.”

ガウアー [Gower, 1330?~1408年 詩人] は別の種類、苦みのある甘さについて語っている：－

“For all such time of love is lore	愛のそのような時間はいつもつらい
And like unto the bitter-swete	そして苦く甘いまでに
For though it think a man fyrst swete	それは男は最初は優しいと思うが
He shall well felen at laste	最後に行きつく先は間違いなく
That it is sower.” §	素っ気なくなる §

Confessio Amantis

『恋人の告白』

§ 『ロメオとジュリエット』 「甘っちょろいくせに苦い冗談だ。薬味が少々きつすぎる。」第2幕第4場
[大場健治訳] “Thy wit is a very bitter sweeting, it is a most sharp sauce”

ちなみに、チョーサーの「ミラー物語」の中には、リンゴを保存しておく昔の習慣について思い出させてくれる箇所がある、－

“Hire mouthe was swete as …	彼女の口は甘く…
… hord of apples, laid in hay or hethe”	…貯蔵リンゴの如く、それは干草やヒースの中に置かれて

チョーサーはある梨の名前を同じような表現で私たちに教えてくれているが、それは明らかに新しく輸入されたものであった、－

“She was wel more blisful on to see	彼女はこの上なく幸福な様子で見た
Than is the newe perjenete tree.”	新しいペアジュネットの木よりも

ウォーデン梨は各種料理の中で依然として一番人気が高かった。梨料理のレシピで梨と言えば、それは普通、ウォーデン梨のことであった。たとえば、「梨のシロップ漬け。ウォーデン梨を用意し、適当なポットに入れる」とか「梨のコンポート。ウォーデン梨を用意し、皮をむく」(Ⅱハーリー写本, 4016 初期英語文献協会)。ヘンリー4世の結婚披露宴では、この梨のシロップ漬けが二度にわたり出され、それは鹿、うずら、チョウザメ、ノハラツグミなどと同じコースに含まれていた。また、その戴冠式の際の祝宴では、マルメロの「コンフィ」砂糖漬け)と、そして「黄金色のリンゴ」“Pomedorreing”、すなわちこれはオレンジのことを意味するが、このような珍しい果物があわせて出されたのはこの日のような重要な行事のために調達されたものだからなのであろう。オレンジはおそらくもっと早い時期から機会を見てはこの国に持ち込まれていたと思われる。エドワード1世の第18年に女王が大きなスペイン船の荷物の中から、イチジク1籠、レーズン1籠、ナツメヤシ1包、ザクロ230個、レモン15個、そしてオレンジ7個を買ったと伝えられている*。

*『風習と家計支出』ベリア・バトフィールド編, ロクスバラクラブ 1841年 *Manners and Household Expenses*. Ed. Beriah Botfield, Roxburghe Club [本書は13世紀および15世紀の家計簿に基づくもの、バトフィールドにより、書籍収集・出版専門の協会ロクスバラクラブへ贈呈]

サクランボはとても広範囲に栽培されていた。その収穫の季節はラングランドにより「サクランボの季節」と語られた。このサクランボの収穫は夏の盛りにあたり、お祭り騒ぎの時であった。ガウアーは、これを人生の短さと比べている。

“…endureth but a throw Right as it were a cherry feast.” — <i>Confessio Amantis</i>	…ほんのちょっとだけ続く ちょうどサクランボ祭りのように — 『恋人の告白』
---	--

そしてリドゲイトもサクランボ祭りを比喻として使っている。

“This world is but a cherry fair.” この世はまったくサクランボ祭りのようだ

サクランボとイチゴはロンドンの街角で売り歩かれ、「熟れたイチゴはいかが」の呼び声はリドゲイトの時代ですら身近なものだった。

“Then vnto London I dyd me hye Of all the land it beareth the pryse 'Hot pescodes' one began to crye 'Strabery rype' and 'cherryes in the ryse' † One bade me come nere and by some spyse Pepper and safforne they gan me bede But for lack of mony I might not spede.” — <i>London Lyckpeny</i> .	そして私はロンドンへと急いで向かった ロンドンに国すべての宝 「熱いペスコードはいかが」と一人が叫び始めた 「熟れたイチゴ」と「枝付きサクランボ」 こちらへ来てスパイスを買ってと私に言う人あり コショウとサフランはどうかと私に勧めてくる だけどお金がなくて買えないだろう — 『ロンドンの文無し』
---	---

†=branch, twig

桃はリドゲイトによって「よりありふれた果物」の一つとして触れられていたが、栽培されている品種は質の劣ったものだけだった。

セイヨウカリン medlars も栽培され、食べる前に保存しておくのは、今なお見られる食べ方である。『代官物語のプロローグ』 *Prologue to the Reeve's Tale* において、チャーサーはこの習慣に触れ、代官の古い時代について語っている：—

“But if I fare as doth an open-ers* That ilke fruit is ever lenger the wers	もし私がセイヨウカリンのようにやるならば その果物はどんどん悪くなる
--	---------------------------------------

Til it be roten in mullock or in stre †.” 腐ってゴミや屑になってしまうまで

* a medlar † rubbish and straw

[訳注] セイヨウカリンは部分的に朽ちた後でないと食べられない。

『花と葉』 *The Flower and the Leaf* [訳注] における庭園と樹木に関する描写の中で、満開のセイヨウカリンが「ハーブの側に寄り添って」絵のように美しく描き出されている。

“And as I stood and cast aside mine eie そして私は立ち止まり視線を横に投げかければ
I was ware of the fairest medlar tree この上なく見事なセイヨウカリンの木に気がついた
That ever yet in all my life I sie それは私の人生の中で今まで見たことのない
As full of blossomes as it might be. あらん限りの満開の花を咲かせ
Therein a goldfinch leaping pretile その中に一羽の鳥ゴシキヒワが跳び込み
Fro bough to bough; and as him list, he eet 枝から枝へ；そして好きなだけ鳥は食べる
Here and there of buds and floures sweet.” そこかしこにただよう甘い香りの蕾と花

[訳注] *The Floure and the Leafe* 著者不詳の中英語の寓意詩 1470年頃の作品。

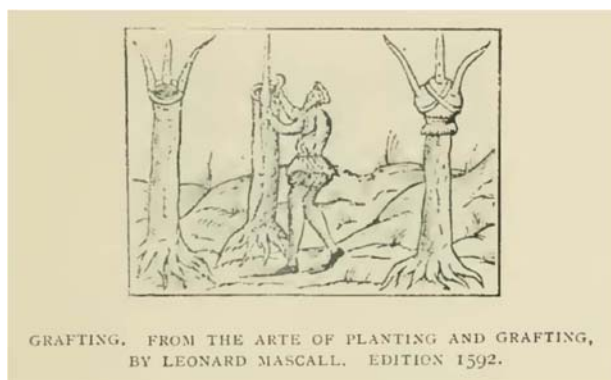
プラム plums については詩人によっても、また古い会計簿にもあまり書かれていないが、ダムソン damson とブリス bullace [両者とも和名インシチアスモモ *Prunus insititia*] がこの国で栽培されていたことはわかっている。ただし量的にはそんなに多くはなかったのであろう。『バラ物語』 *Romaunt of the Rose* の中でチョーサーは身近な果物について分類をしている：－

“And many homely trees there were そしてそこには身近な木々がたくさんあり
That peaches, coyness ‡, and apples bere 桃、マルメロ、リンゴがなっており
Medlers, ploumes, peres, chesteynis, セイヨウカリン、プラム、梨、栗、
Cheryse, of which many one fayne is, サクランボ、これらの多くのうち嬉しいのは
Notes, alleys and bolas ナッツ、小径とプラム
That for to seen it was solas.” (L. 1373.) それを見るのは幸せ (1373行)
‡ quinces

当時の庭師たちは接ぎ木に多大な注意を払った。梨をサンザシ hawthorn に接ぎ木する手法はごく初期の頃から知られていた。ジョン・ガードナーはリンゴと梨の接ぎ木のための台木は1月に植えることとし、リンゴはリンゴの台木に、梨は「サンザシの上に」と書いている。そして接ぎ木は9月と4月の間のどこかの時期に行わなければならないと言う。

“Wyth a saw you shall the tree kytte	鋸で木を切って
And with a knife smowth make hytte	ナイフで穴を滑らかにして
Klene a-tweyne the stock of the tree	二つにした木の台木をきれいにして
Wherein that your graft shall be	そこに接穂が挿し込まれることになる
Make your Kyttyng of your graft	接穂を切ったものを
By-twyne the new & the old staffe”	新しい物と古い物の間に挿し入れる

台木の上に粘土を被せなければならないが、それは「雨で濡れないようにするため」で、さらに粘土の上に苔を「ハシバミの木の皮で作った紐」で縛っておく。ガーデニングと農業に関する初期の著作者たちの多くはその論考の相当部分を接ぎ木に割いており、果物の色や香りを変える様々な実験が行われた。15世紀における接ぎ木の権威であるロバート・サル [Robert Salle] を引用すると (*スローン写本 122)、「もし自分のリンゴを赤くしたいと望むなら、リンゴの木の接穂を持ってきて、ニレまたはハンノキ aldyr の台木に接ぎ木すれば赤いリンゴが穫れるだろう」。「錐で木に穴を開け、水を使って何色に変えたいか、そしてそれを穴に入れれば、果物の色は同じ色になるであろう」(†同じ方法がポーキントン論文 *Porkington Treaties* の中でも示されている。この論文は、ハリウェル Halliwell 編により 1855 年、ウォートンクラブのために出版された。)



[図 3-1] 接ぎ木 植栽と接ぎ木の技術 レオナード・マスカル著 1592 年版

農民教育で最も基本的とされたのは、接ぎ木に熟達することで、それは、少し時代は下るが、次のような記述に実に詳しく描かれている。「農民にとって、必要かつ利益があり、かつ喜びともなるのは、梨、ウォーデン梨、各種のリンゴを栽培することである。加えてサクランボ、ヘーゼルナッツ [ハシバミ] *filberdes*、いろいろなプラム *bulleys*, *dampsons*, *plummer*、クルミなどもである。したがって、接ぎ木のやり方を学ぶことは有益である」

‡ 『農業書』 フィッツハーバート著 1544 年。スキート [1835~1912 年 言語学者] 編 1882 年, *Book of Husbandry*. By Fitz Herbert. Ed. Skeat

当時の庭園は通常四角く囲われた土地であり、その境界は石、煉瓦、漆喰の壁かあるいは分厚い生垣で囲われていた。そこには普通、2つの入口があり、一つは家から開けられるドアであり、もう一つは庭園から果樹園、牧草地に行くためのものであった。仮に、これらの背の高い生垣や壁が美観上あるいは目隠しとするために後々の時代に至るまで維持されてきたとするなら、これらが最初に作られた理由は安全上の観点からのものであったことは間違いないところである。



〔図 3-2〕 庭園の壁に囲まれた芝生の腰掛 バラ物語 フランダース写本
15 世紀後半 大英博物館ハーリー写本 4425

"I saw a garden right anon
Full long and broad and everidele
Enclosed was and walked wele
With hie walles embatailed." *

*Chaucer, *Romaunt of the Rose*, L.136.

私は直ちに庭園を見た
目一杯に長く広くそして完全に
囲われていて幸せに歩んだ
高い胸壁で守られて*

*チョーサー『バラ物語』 136 行

囲いの内側は端から端までよく手入れされきちんとしていた。壁に向かって全体をぐるりと土盛りで囲まれ、その前面は煉瓦、石で覆われ、その上には甘い香りのハーブが植えられていた。所々に芝生で覆われた腰掛やベンチが置いてある休憩所が設けられ、それは「分厚く敷かれベルベットのように柔らかかった」。庭園の中にはこんもりした低い土の丘がここかしこに作られ、「そこで座ったり休んだりできたし」、これらの「ベンチ」も「新しい芝生で緑に覆われた」。庭園全体をめぐる散歩道は砂か小石が敷きつめられ、雑草が生えないようにされた。リドゲイトは「すべての小径が砂により平らにされている」庭園のことを書いた*。

* *The Chorel and the Bird* 『農民と鳥』

[訳注]正しくは *The Churl and the Bird*。著者自身により、これはフランスの物語の翻訳とされるが、出典は明らかではない。

あずまや *arbour*、すなわち「自分だけの遊び場」のない庭園は本当の庭園とは見なされなかった。あずまやは壁の隅や分厚い生垣に守られた庭園の一部に設けられた。“herber”とも呼ばれるあずまやは、つる性の植物がしっかりと絡みついた木々で作られており、侵入者の目から見られないように作られていた。その一例が『花と葉』 *The Flowers and the Leaf* の中でこのように描かれている：－

<p>“And at the last a path of little brede I found, that greatly had not used be, For it forgrowen was with grasse and weede That well-unneth † a wight might it se: † scarcely, hardly</p>	<p>そして幅の狭い散歩道の最後に 私は見つける、あまり使われてこなかった所を なぜならそこは草や雑草が伸び放題になって ほとんど人影も見られることもない</p>
<p>Thought I, this path some whidar goth, parde, And so I followed, till it me brought To right a pleasaunt herber well y wrought.”</p>	<p>私は思った、この道はどこかへつながら、必ず だから私は進んだ、その道が行き着く所まで まさに心地よい、丁寧に作られたあずまやへと</p>
<p>That benched was and with turfes new Freshly turved, whereof the grene gras, So small, so thicke, so short, so fresh of hew,</p>	<p>ベンチは新しい芝生で覆われて 瑞々しく芝が敷かれ、そこの緑の草は イチイの木はとても小さく、とても分厚く、 とても短く、とても瑞々しく</p>
<p>That most like unto green wool wot I it was : The hegge also that yede in compass ‡ And closed in all the greene herbere</p>	<p>緑の毛織物の中へと進んだ心地でそれは 生垣もまたぐるっと周りを囲み そして緑のあずまやすべてを囲い込み</p>

With sicamour § was set and eglatere.
‡ went round it § honeysuckle

スイカズラが植えられスイートブライアーも

And shapen was this herber rooffe and all
As a pretty parlour : and also
The hegge as thicke as a castle wall,

またこのあずまやの屋根そしてすべての作りは
可愛い応接室のようで、さらに
生垣は城壁のように分厚くて

That who that list without to stonde or go
Though he would all day prien to and fro
He should not see if there were any wight within or no.”

立ち止まり、去ることを望まない者は
彼が一日中あちらこちら眺めようとも
見ることはないであろう、人影をどこにも



[図3-3] あずまや 同じハーリー写本より, 4425

人の目から遮断するという、あずまやの基本的な特徴と同じこのアイデアを、14世紀の詩「無慈悲な美しい婦人」“La Belle Dame Sans Merci”（*初期英語文献協会 第4巻）に見ることができる。

“And sett me down by-hynde a traile
Fulle of levis, to see, a grete mervaile,

そして私を格子垣の後ろに座らせておくれ
いっぱいの葉を見る、想像を絶する素晴らしさ

With grene wythyes y bounden wonderlye 緑の柳でもって見事に囲いを作り
The leeves wore so thicke with-out faile その葉は完璧に分厚く包んでいるので
 That thorough-oute myghte no mann me espye.” どこからも誰も私を覗き見ることはできないだろう

あずまやの周りの花は、『真珠』 *The Pearl* という名の 14 世紀の詩に描かれている：－

“I entered in *that* erber grene 私は入っていく緑の庭園の中に
 In augouste in a high seysoun 8 月の季節の盛りに
 * * * * * *
 Schadowed *this* wortez ful schyre* and schene この草に影を落とし、げに明るく、美しく
 Gilofre †, gyngure ‡ (=tansy) & grommylon § ジリフラワー、ヨモギギク、ムラサキ
 & pyonys powdered ay between.” そしてシャクヤクが、一面に点々と輝き
 * bright † clove-pinks ‡ tansy § gromwell

どの庭園にも水を貯めておく池の類が設けられ、多くの場合、精巧な装飾が施された噴水が一つ真ん中に、あるいはどこか目立つ場所に置かれた。58 ページの図 [本訳 55 ページの図 3-4] は当時の立派な庭園に普通に見られた噴水であり、それはレベッカの井戸 [訳注] を象徴するためのもので、そのような噴水が特徴的な絵画は 15 世紀の写本の中に多数見つけることができる (|| 参照 大英博物館 14. E. 2.f.77, &c.)。

[訳注] 見知らぬ旅人とラクダのために井戸から何度も水を汲むことをいとわなかったレベッカが、旧約聖書に登場する太祖の一人イサクの妻に選ばれる物語。

このような庭園に植えられた花の種類はそれほど多くなかったが、それらの限られた種類の花が植えられた数ときたら、それはおびただしいものであった：－

“Ther sprang the violete al newe, そこにスマレがまったく新しく咲いて
 And fresshe pervinke riche of hewe, 瑞々しいツルニチニチソウが見た目も豊かに
 And floures yelowe, whyte and rede : そして花は黄色、白、赤と咲き
 Swich plentee grew ther never in mede. 同じ花がたくさんそこでは育ち、野原には絶対ない
 Ful gay was al the ground, and queynt まさに地上は喜びで満ち、そして巧みに
 And poudred, as men had it peynt, そして点々と一面に咲く花は、人が絵に描いたように
 With many a fresh and sondry flour, たくさんの瑞々しくまた様々な花で
 That casten up a ful good savour.” ¶ 素晴らしい雰囲気一杯に投げかける ¶

¶ Chaucer, *Romaunt of the Rose*, L.1431

¶ チョーサー『バラ物語』1431 行

ツルニチニチソウ periwinkle あるいは parwinke は広く愛好された植物である。この植物は、庭園の日影の部分にある地面を覆ってそこを明るく見せるのに適しており、このため「地面の喜び」“Joy of the ground”というそれにふさわしい名前が付けられた。

“Parwynke is an erbe grene of colour
In tyme of May he beryth blo flour

* * *

Ye lef is thicke schinede *and* styf.

As is ye grene jwy leef.

Vnche brod *and* nerhand * rownde

Men calle it ye joy of grownde” †

* nearly

† Medical MS., Stockholm. *Archæologia*, Vol.XXX

ツルニチニチソウは緑色した植物

5月の季節に青い花を咲かせる

* * *

その葉は分厚く輝きそしてピンと立っている

緑のアイビーの葉のように

幅1インチでほぼ丸い

人はそれをまさに地面の喜びと言う †

† 医学写本、ストックホルム『考古学』第30巻



[図3-4] 噴水 英語写本“SPECULUM” 1450年頃 大英博物館2838

昔のあるバラードの中で、一人の高貴な婦人が「優秀なツルニチニチソウ」“The parwenke of prowess”と呼ばれた。その当時ツルニチニチソウは優秀さの象徴として使われたが、これはエリザベス朝時代のナデシコ類が「礼儀正しいナデシコそのもの」“The very pink of courtesy”として使われたのとまったく同じことである。

同じ庭園の中の黄色い花の中で、マリーゴールド [キンセンカ] marigold、あるいは昔の作家がゴールドと呼んだ花は人目をひくものと言えよう：

“Golde is bitter in savour.	マリーゴールドの味は苦い
Fayr and zelu is his flower	その花は美しく黄金色
Ye golde flour is good to seene.” *	本当にマリーゴールドの花を見るのは楽しい*

*Medical MS., Stockholm. *Archæologia*, Vol.XXX *医学写本、ストックホルム『考古学』第30巻
[訳注] 一般に日本でマリーゴールドと呼ばれる植物は、アフリカンマリーゴールド (キク科コウオウソウ属 *Tagetes erecta*)、フレンチマリーゴールドなどであり、中米原産で、和名はコウオウソウ。16世紀にヨーロッパに園芸種として輸入されたとされており、ハーブではない。キンセンカ (ホンキンセンカキク科キンセンカ属 *Calendula arvensis* L.) はこれらとは別属の植物でヨーロッパ原産。英国王立園芸協会 RHS でも、キンセンカは field marigold、キンセンカの仲間であるトウキンセン (キク科キンセンカ属 *Calendula officinalis* L.) は common marigold としている。したがって訳語としては単にマリーゴールド、和名表記として [キンセンカ] と付記した。

嫉妬とはこの花で飾られていること、とチョーサーは表した。「嫉妬とは黄色いマリーゴールドの花輪を身にまとうこと」

スマレ、それは先賢から学ぶところでは、「広く知られたハーブ」“herbs well cowth (+ =known)”である。スマレが栽培されたのは、その甘い香りによるだけでなくサラダ用のハーブとしてでもあり、「スマレの花」は生で、タマネギ、レタスと一緒に食用に供された。一種のブローチ [肉と野菜などを煮込んだスープ] の材料として、スマレがフェネル、セイボリーとともに記載されている (※『料理の方法』 *Form of Cury*)。

[訳注] *The Method of Cooking*、正しくは *The Forme of Cury*。Cury とは中世フランス語の cuire 料理するの意。14世紀の中世イングランドのレシピ集で現存する最古の料理本。オリーブオイル、ヒョウタン、スパイスとしてメース、クローブなどが初出。

また料理の付け合わせとしても使用された。「モナミ」というプディングの古いレシピでは、コックさんは「スマレの花を添えて出す」ようにと指示されている §。

§この素晴らしい料理のレシピは次のとおりである。「牛乳の濃厚なクリームを用意し、火にかけて煮て次にそれを取り出し横に置く。次に甘い牛の凝乳 [チーズの原料] を用意し、乳漿を絞り出し、そしてすり鉢の中で磨り潰して、同じクリームの中に入れ戻して一緒に煮る—そしてそこに砂糖とサフラン、そしてメイバターを入れて—そして卵の黄身を別に取り出して、かき混ぜて、鍋を置いてそこに卵の黄身をかき混ぜて入れて、そしてよくかき混ぜる、そしてスープを準備して：次に5ないしは7切れのパンを皿に盛って、スマレの花を飾りつけ、そしてテーブルに出す」

別の写本では、「スマレ」という料理のレシピもあり、そこには「スマレの花を用意しそれを茹で、プレスして小さくすり潰す」とある。そしてミルク、米の粉、砂糖または蜂蜜と混ぜ合わせ、スマレで「彩り」を加える。料理されたのはスマレだけではなく、サンザシ、サクラソウ、さらにバラさえも同じ道をたどり、同じように取り扱われた。「赤いバラ」というあるレシピは、簡単に「同じやり方で卵の黄身と一緒に混ぜてそしてさらにスマレのように」“Take the same saue a-lye it with the yolkys of eyroun and forther-more as vyolet”と書いてある。ローズ・ヒップ [野バラの赤く熟した実] も使用され、「サラセンソース」“saue saracen” [Saracen Sauce のことか] と呼ばれた特別の料理ではヒップが主な材料であった。このような花が普通に料理され食べられていたと知っても、その美しさや詩情を膨らませることにはならなかった。

[訳注] サラセンソースとは14世紀イングランドのポタージュ料理で、香りのよい赤いアーモンドミルクのこと。ハイエット著『ポタージュの流儀』1988年より Heatt, *An Ordinance of Potage*.

このようなショックな気分になったとしても、バラはやはりその愛らしさと香りで評価されるものだとわかると嬉しくなる。現代のバラ園が中世の庭園の所有者を驚かせることになろうとも、また様々な形や色があることが彼らを戸惑わせることになろうとも、彼らにとってバラと言えばあの甘い香り！その本質的な特徴である甘い香りが現代の最も見事なバラのいくつかには欠けていることを知って残念に思うであろう。バラのほのかな香りほど、私たちの心に夏の夢をいつも思い起こさせるものはないし、多くの人々が、チョーサーの時代以来、詩人がバラ園に近づきながら感じたのと同じことを経験してきた。その驚きの声とは：

“The savour of the roses swote	バラの芳しい香りは甘く
Me smote right to the herte rote”	私を感動させる ずっと心の奥深くまで

あるいは、バラとユリの花冠が空気を香りで包む時

“The swete smel, that in myn herte I find	甘い香りよ、私の心の中に私は見つける
Hath changed me al in another kind	私をまったく違う自分へと変えたことを

バラには、赤と白の八重咲きのバラ、一重咲きの赤白、そしてどこにでもあるイヌバラ dog-rose、またスイートブライアー sweetbriar があった。これらは壁に沿って植えられたり、一本ずつ庭園のここ、あそこと植えられたり、あずまやに這い上がったりしていた。赤の八重咲き（ロサガリカ *Rosa Gallica* のいろいろな品種）は最も高く評価され、そしてこの赤バラはまるで思い描くことのできる最も愛らしいものであるとさえ思われたので、15世紀初期の「アヴェマリア」の中に歌われることになった：－

“Heil be thou, Marie, that art flour of alle
As roose in eerbir so reed!” *

*Early Eng. Text Soc.

聖なるマリアよ、花の中の花よ
庭園のバラが真っ赤なように*

*初期英語文献協会

チャーサーは八重咲きのつぼみを愛でたが、それは一重咲きの花卉がすぐに散ってしまうのに比べ長持ちしたからだった：

“I love wel sweitie roses rede :
For brode roses, and open also
Ben passed in a day or two ;
But knoppes † wilen fresshe be
Two days ate leest or three”
† buds

私はこよなく愛す、甘い香りの赤いバラを
大きなバラ、そして開いたものも
1日か2日で散ってしまった
だが、つぼみは瑞々しいままであろう
少なくとも2日か3日は

赤または白のバラが2つの対立する者同士の象徴になった時、庭園の所有者がどちらの側についたかは、その庭園の中でどちらの色の方が優勢であるかによったことには疑いが無い。「夏の日射しに映える、咲いたばかりの鮮やかな赤バラ」（†チャーサー『鳥の会議』*Assembly of Fowles*. By Chaucer) か、それとも「瑞々しく褪せることのないイングランドの白バラか。根も茎も両者とも大いなる名誉である」（*政治的な詩 Political poem, 1460-71年 - 初期英語文献協会第4巻）。花輪や花冠を編む上で、バラはあらゆる花の中で最も一般的な花であった： -

“And on hire hed ful seemly for to see
A rose gerlond fresh and wel smelling.” †
† *Knight's Tale*

“And also on his head was sette
Of roses redde a chapelette.” †
† *Romaunt of the Rose*

そして彼女の頭には一杯にその場にふさわしいような
バラの花冠が瑞々しくそして甘い香りを漂わせていた †
† 『騎士物語』

そして彼の頭にも置かれていた
赤いバラの花冠が †

† 『バラ物語』

ツルニチニチソウは、つるに葉が伝っていくので花輪に適しており、多くのその他の花が使われた。エミリーは自分の庭園で「頭を飾る洗練された花冠を作るために様々な色の白や赤の花」を集めていた（§『騎士物語』）。しかしこれらの可愛らしい花冠は美しい乙女たちだけが身に着けたものではなかったことは、カンタベリー巡礼団の中の、とても好感の持てない召喚人ですら「彼の頭に花冠を載せていた」ことからわかる。毎年、1本の赤いバラを納付することは「免役地代」“quit rent” [封建時代の地代で、農耕を妨げる狩猟権など

他の賦役が免除される]の一般的な形態であり、クローブピンク、あるいはジリフラワー clove pink, or gilliflower の花や種^{II}が報酬としてしばしば使われた [訳注]。

II ビスター大修道院の収入の中には、リチャード2世の第19年、土地および家屋に対し「1本の赤いバラをヘンリクス・ボーウォルズ・ドゥ・カーリントンから受け取り...1粒のクローブの種 gariophili をロゲリウス・ドゥ・ストデーレから受け取る」-ダンキン『ブリントンおよびプラウリーの歴史』Dunkin, *Hist. of Bullington and Ploughley*. ほとんどの場合、チョウジ clove の種=貿易取引されるチョウジ香辛料 [天日干しされた蕾]。

“una rosa rubea recept’ di Henrico Bowols de Curtlyngton . . . et de uno g’no gariophili rec’ de Rog’ o de Stodele” . . . &c. -Dunkin, *Hist. of Bullington and Ploughley*.

[訳注] 契約関係を確認するために支払われる名目だけのわずかな地代を、ペパーコーン賃料 peppercorn rent と言い、年間黒コショウ1粒とか赤いバラが使われた。

ユリは庭園の中でバラに次いで重要な地位を占め、詩人の歌の中ではバラとどちらが多いかを張り合っていた[¶]。白いユリ [マドンナリリー] (*Lilium candidum*) は善良、純粋、あるいは美のすべてを象徴する役目を負わされていた。

¶ 「ユリ」と「バラ」だけがノリッジ修道分院の庭師の文書に記載されている花である。

“First wol I you the name of Seinte Cecilie Expoune, as men may in hire storie see : It is to sayn in English, Heven’s lilie.” **	最初に聖セシルの名をあなたに 説明してくれ、男どもは彼女の話からわかるかも それは英語では天国のユリと呼ぶもの**
** <i>The Second Nounes’s Tale</i>	** 『第二の修道女物語』

“That Emelie, that fairer was to seene Than is the lilie or hire stalke grene.” ††	ああエミリー、汝より美しきものがあるとすれば それは緑の茎の上に咲くユリ†† [訳注]
†† <i>Knight’s Tale</i>	†† 『騎士物語』

[訳注] Signet Classics 版 Than is the lily upon his stalke greene.による。

“Upon his hand he bore for his delyt An eagle tame, as any lily whyte.” ††	彼の手の上に乗せているのは彼の楽しみとする 飼いならされた鷲、白ユリのごとく††
†† <i>Ibid.</i>	†† 同書

キショウブ yellow flag と紫色のアイリス purple iris はユリと同じようなものとして語られることがある。古い医学の写本に既に記載されているとおり、「庭で育つ」ユリはミルクのように白く、野原や森に咲くその他の3種類は「サフランのように」黄色で、もう1つは「青紫」と描かれている。ただし、これらは「グラジオラス」“gladdon”、「アイリス」“yreos”とも記されている。ほかの花は野原や森から持ち込まれ、栽培される中で多分

改良されたのであろう。中世において花壇に咲いていたゼラニウム *geranium* はフウロソウの一種であるワイルドクレインビル *wild cranesbill*、あるいは小さなハープロバート [ヒメフウロ] *herb Robert* であった。マツムシソウの一種であるワイルドスカビオサ *wild scabious* とケシ類は、現代の私たちの庭で言えば1年草・2年草のような目立つ存在であった。しかし、多くの在来種は立派な見栄えがするもので、カウスリップ [キバナノクリンザクラ] *cowslips*、ラッパスイセン *daffodils*、プリムローズ [イチゲサクラソウ] *primrose*、ジギタリス *foxglove*、マーレイン [モウズイカ] *mullein*、セイヨウオトギリソウ *St. John's worts*、リンドウ *gentian*、オキザリス *oxalis*、マロー *mallow*、ムギセンノウ *corncockle*、ヤロウ [セイヨウノコギリソウ] *yarrow*、キャンピオン *campion* [センノウ、マンテマなど]、シマセンブリ *centaury*、スイカズラ *honeysuckle* などよく知られた植物が育てられていた。また庭の一角にはシャクヤク *peony* や背の高いタチアオイ *hollyhock*、トリカブト *monkshood* *flowered* の花が咲き、日陰の隅にはつやつやした葉のシダの一種のコタニワタリ *hartstongue* が生い茂り、細長い花壇の一部はナデシコ類 *pinks*、セイヨウオダマキ *columbines* で明るく彩られ、あるいはラベンダー、ローズマリー、タイムの甘い香りが漂っていた。チョーサーの時代の庭園の花を描写するにあたっては、チョーサーがこう言ったことを忘れてはならない。

“The daisy or elles the eye of day デイジーかそうでなければ太陽か
The emperise and flour of floures all.” 女帝であり花の中の花

デイジー [ヒナギク] *daisies* は最高に手入れされた庭園の中で真価を発揮した。よく手入れされた芝生と木陰のあずまやはデイジーで「点々と飾られた」。ここでチョーサーを再び引用すると：－

“Home to my house full swiftly I me sped 我が家へ私の家へと私は大急ぎで飛んで帰る
To gone to rest, and early for to rise 眠りについて、そして起きるにはまだ早い
To seene this floure to sprede, as I devise 一面に広がるこの花を見たこと、そう想像しながら
And in a little herber that I have そして私のものである小さなあずまやの中には
That benched was on turves fresh y grave 瑞々しく巖かな芝生の上にベンチが設けられ
I bad me shoulde me my couche make.” 私は自分で自分の休む場所を作らねばなるまい

デイジーはベルベットと見まがうような芝生を台無しにするとと思われるかもしれないが、私たちの庭園からそれが消えることはなかったようで、この小さな花を愛でる詩人と思いを同じくするのである。

“Si douce est la Marguerite.” 「デイジーは何と甘いことよ」

チョーサーが描いた庭園は理想化されたものとは言え、当時の庭園の様子を詩人の目を通して忠実に描写していたことは間違いない。緑の枝で一杯の庭園の中をエミリーが歩いていた。その姿を幽閉されている騎士はじっと見ていたが、その庭園は、多くの封建時代の城壁の眼下に見られたものと同じようなものであったであろう。



[図3-5] 庭園 バラ物語のフランダース写本 15世紀後半 ハーリー 4425

<p>“The grete tour, that was so thikke and strong Which of the castel was the cheef dungeon * * * * Was evene joynant to the gardyn wal.”</p>	<p>その大きな塔は、分厚く強靱で その塔が城の中心であった * * * * それは庭園の壁にまでつながっていた</p>
---	--

この恋愛物語に描かれる庭園に対して、歴史上の実在の庭園がウィンザー城の庭園である。スコットランドのジェームズ1世 [在位1406~37年] がそこに幽閉されていた時、その慰みに書いた詩が残されているが、それは彼の牢獄から眼下に広がる庭園のとても魅力的な描写となっている。

<p>“Now was there made, fast by the Towris wall A garden fair; - and in the corner set An arbour green, with wandis long and small Railed about, and so with trees set Was all the place, and Hawthorne hedges knet That lyf was none walking there forbye That might within scarce any wight espy.</p>	<p>さあ、ここに造られたのは、高い壁で守られた 美しい庭園；そしてそのコーナーには 緑のあずまや、それは長い木、短い木の 柵で囲まれ、そしてそこには樹木が植えられ すべての場所に作られ、サンザシの生垣が組まれ そこには誰一人通り過ぎるものはなく 稀には不思議なものを見出すこともあろう</p>
<p>“So thick the boughs and the leaves green Beshaded all the alleys that there were, And mids of every arbour might be seen Growing so fair with branches here and there, That as it seemed to a lyf without, The boughs spread the arbour all about.</p>	<p>大きな枝が豊かに広がり葉は緑に輝き そこにあるすべての小径に陰を落とす、 そしてどのあずまやの真ん中にも見えるであろう かくも美しく育って　ここあそこに枝は広がり、 それは人ひとりいないように 大きな枝はあずまや全体に広がっている</p>
<p>“And on the smalle greene twistis sat The little sweet nightingale, and sung So loud and clear, the hymnis consecrate Of loris use, now soft, now lowd, among, That all the gardens and the wallis rung Right of their song.”</p>	<p>そして小さな緑の小枝に止まるのは 小さなかわいいナイチンゲール、そして歌う こんなにも大きく澄んだ声で、神に捧げる賛美歌を 神の教えを説くため、時にやさしく、時に大きく すべての庭園と壁は鳴り響き かれらのさえずりによって</p>

第4章 庭園に関する初期の文献

“And all was walled *that wone thouj it wid were* そしてそこは広いがすべてが壁で囲われ
With posterns in pryuytie to pasen when hem list 必要な時には秘かに通るための裏口があって
Orchejardes and erberes eused well clene” 果樹園と庭は大変美しく使われた
Pierce the Ploughman’s Crede, c.1394 ピアス『農夫の信条』 1394年頃

ガーデニングの歴史についてさらに先に進む前に、今まで見てきた時代にまつわる関連文献についても振り返っておくことにしよう。サクソン時代、およびその後数世紀にわたるハーブと花に関する知識はすべて古典の作家たちが教えてくれたものであった。テラフラストス [Theophrastus, 紀元前 372? ~286? 年 ギリシャ 逍遥学派の哲学者・植物学者]、ディオスコリデス [Dioscorides, 40 頃~90 年頃 古代ローマの薬理学・薬草学の父]、ガレン [Galen, 130? ~199? 年 ギリシャの医学者]、プリニウスそしてアプレイウスの著作により、サクソン人が持っていた植物に関する基礎的な知見が形作られた。アプレイウスの『植物誌』 *Herbarium* はディオスコリデスとプリニウスの著作を基礎としており、そして主としてアプレイウス（紀元 4 世紀頃の人物）を通じてこれらの初期の作家たちのことが知られることとなった。この植物誌はアングロサクソン語に翻訳され、大変人気が高かったに違いないと思われるのは、この写本が少なくとも 4 冊存在しているからである。4 冊と言えば、このような初期の時代の本などほとんど残っていない中で、大きな割合を占めていることになる*。

*これらの翻訳は次の文献の中に記されている。コケイン [Cockayne, 聖職者・言語学者] による『初期イングランドの薬草および植物知識』 *Leechdom and Wortcunning of Early England* 1864 年、アールによる『植物の初期英語名』 *Early-English Plant Names* の中の注釈 1880 年—写本の原本は大英博物館コットン・ヴィテリウス 103、年代は 1000-1066 年頃。ケンブリッジ大学トリニティカレッジ、O. 2. 48、14 世紀。またハーリー写本集 [大英図書館蔵] Harleian 815、『医学書』 *Liber Medicinalis* の中にも。(ハーリー写本 5066、『サクソン植物誌』 *Herbarium Saxonicum*. カタログの中にそのように記載されており、そのような番号が付されている写本の中にはない。1804 年の時点ではそこにはなかったという注釈に D とサインされている。)

これらの写本に見られる植物の名前は大変興味深く、また後の時代の植物誌で使われる名前を特定する上で有用である。もう一つ役に立つアングロサクソン語で書かれた植物のリストは、アルフリック [Ælfric, 955~1020 年 大修道院長・文法学者] が書いた『文法』 *Grammatica* の中に見つけることができる*。ここには当時知られていた普通のハーブのほとんどが網羅されており、対応するラテン語表記も記されている。ラテン語は常に正しく翻訳されていた訳ではなく、著者の知らない植物について、身近に生えている花の名前で代用されていることもある。

*『わが国の古物に関する図書に見られる語彙集』ライト（による写本の編纂）1857年 写本 大英博物館
コットン・ユリウス A ii, *Vocabularies in a Library of National Antiquities*. Wright

イングランドにおけるこのテーマに関する最も初期の作家と言え、聖職者であるサイレンセスター大修道院長のアレクサンダー・ネッカムおよびリンカーンのグローステスト司教の二人であった。二人ともパリ大学で学び、このため海外における園芸の実情について自分自身の目で見られる機会に恵まれた。彼らの著作を見てもガーデニングに関しては付随的にほんの少し触れられる程度であった。グローステスト†（1175年誕生、1253年没）はいろいろなテーマについて書いている。彼は医術に優れ、植物の持つ効能、性質に関する知識を持っていた。彼のものとされる著作は膨大であったため、すべてが彼自身のペンになるものとする可能性は極めて低いと思われるが、その名前を付するすべての著作は、死後2世紀以上にわたり読まれ、また参照され続けた。したがって農業に関する彼の著作は園芸にかなりの影響を与えたはずである。パラディウス [Palladius, 4世紀から5世紀前半の作家 ガリア人] の『農業について』*De Re Rustica* は、多分5世紀というかなり初期に書かれており、それは何世紀にもわたり、農業に関する英語のほぼすべての文献の基礎となった。グローステストのものを含めそのほとんどの文献はこの著作の単なる翻訳であったり翻案に過ぎなかったのである。『農業について』は14冊からなり、第1冊目は序言、次の12冊は順番に1年の各月に充てられ、第14冊目は接ぎ木に充てられている。様々な手法、たとえば種なしリンゴや種なしサクランボの栽培法などについて、その主張が正しいかどうかいちいち調べる手間をかけることなく人々によって受け継がれた。そして、15世紀になるとガーデニングは時代を通して盛んになり、何かもっと正確なことが書かれてもよかったであろうに、13世紀の時と同じように15世紀になっても同じことが広く信じられていた。ウォルター・ドゥ・ヘンリー [Walter de Henley, 13世紀 作家] の『農業』*Husbandry* の翻訳は、多分何かの間違いでグローステストの仕事とされている‡。原本は英語化されたノルマンフランス語で書かれていたが、この専門書は庭よりも農場を主な対象としていた*。

†参照サム・ペッグ『ロバート・グローステストの生涯』1793年 308ページ Sam Pegge, *Life of Robert Grosseteste*

‡スローン写本 686年 「農業に関する論文を書いたグロース [デ] 先生はリンカーンの司教で、彼はこの本をフランス語から英語に翻訳した」

*何種類かの写本が存在している。参照カニングガム著「ウォルター・ドゥ・ヘンリー『農業』入門」 王立歴史協会, 1890年 Cunningham, *Introduction to Walter de Henley's Husbandry*. Royal Historical Society

ネッカムはグローステストと同時代の人物であったが、より独創的な作家であった。1157年に生まれ、若い頃はセントオールバンズで過ごし、ダンスタブルの大修道院付属の学校の校長に任命され、1180年までパリ大学の特別教授を務め、1186年にダンスタブル

に帰って来た。しかし、セントオールバンズのベネディクト派を離れてすぐサイレンセスターのアウグスト派に参加し、1213年にはそこの大修道院長に選ばれ、1217年に没した。ネッカムの『称賛すべき神の知恵について』“De laudibus divinæ Sapientiae”は、10部からなる詩で、様々な花や果物を称えるために多くの行が割かれている。7番目の本は、ハーブの素晴らしさについて書かれており、その中には、ベトニー [カッコウチョロギ] betony、セントリー [ベニバナセンブリ] centaury、セイヨウオオバコ plantain、ワームウッド [ニガヨモギ] wormwood などが含まれる。8番目は果物についてであり、サクランボ、桃、セイヨウカリンなどなどである。彼は、イングランドの生産物を称賛することに止まらず、彼自身自然の状態では多分見たこともないような、テレビンノキ terebinth、シナモン、香辛料、果物について称えているのである。同様に、彼の別の著作である『諸物の性質について』*De Naturis Rerum* [*On the Nature of Things*]における「高貴な庭」はどうあるべきか、との記述は、想像上の産物である。なぜなら、この国、いやヨーロッパにおいてすら野外で栽培するにはとても不向きと思われる多くの植物が、庭にはどのような植物が植えられるべきか、というこのリストに含まれているからである。このことが簡単に説明できるのは、同時代のほかの人と同じように、ネッカムが古典の作家たちから思うがままに引用しているからである。彼が書いたところによると†「庭はバラ、ユリ、ターンソール turnsole、スマレ、マンドレイク mandrake で飾られるべきである。そこにはパセリ、コスト cost、フェネル、サザンウッド [キダチヨモギ] southernwood、コリアンダー、セージ、セイボリー [キダチハッカ] savoury、ヒソップ、ミント、ルー [ヘンルーダ]、ディタニー dittany、(野生の) セロリ、ペリトリー pellitory、レタス、コショウソウ garden cress、シャクヤク、カボチャが植えられるべきである。またタマネギ、ネギ、ニンニク、カボチャ、ワケギが植えられた畝も作られなければならないし、キュウリ、ポピー、ラップスイセン、アカンサス [ハアザミ] acanthus の多年草がないと良い庭とは言えない。そしてビート [サトウダイコン]、ヤマアイ herb mercury、オラック [ヤマホウレンソウ] orach、ソレル [スイバ] sorrel、マローなどのスープ用のハーブも必要である」。

†植物の名前の翻訳はライト編のネッカムの著作から引用したものである。

さて、ここまでは、サイレンセスターの彼の庭、あるいは当時あったほかのかなり大きな庭の中で見られたであろう単なるカタログであることは明らかである。しかし、「セイヨウカリン、マルメロ、ウォーデン梨、桃、セントルグラ梨」のほかに、オレンジ、レモン、ザクロ、ミルラ myrrh などの果物、各種香料、その他信じられない植物が加えられているのである。

時代ははっきりしないが、もう一人、古典の作家としてメイサー [Florus Mader, 1100年代に活躍『植物の力について』*De viribus herbarum*の著者] がいる。ウェルギリウスと同時代に同じ名前の人がいるが、多くの言語に翻訳された植物誌の著者は、ガレンを引用しているところから、もう少し後の時代の人ではないかと思われる。この本はハーブと香辛料を薬

用として使う場合のハーブの取り扱いのみに限定して書かれたものである。昔の翻訳が貴重なのは、ラテン語名に対応する英語名がわかるからで、メイサーの本は、ハーブ園を作ろうとする人なら誰でも、そこに書いてある、当時イングランドで見つけることができる植物をできるだけ多く集めようとしたほど、広く使われたハンドブックであった。メイサーの本の最初の翻訳者の名前は、今ではぼんやりとしてわからなくなっているが、ハートフォード校長のジョン・レラマーの手になる写本の翻訳（1373年）が残されており（*スローン, No.5 Sec.3）、またほかにもいくつか初期の翻訳が存在している。なお、この本自体は1530年頃まで印刷されてこなかった。これらのうち一つの写本は変わっていて、メイサーが書いていないのに、翻訳者あるいは転写した人が知っているということで、いくつかの植物を付け加えていることである（†1440年頃の写本、デイドゥリントン図書館蔵）。さらにメイサーは医学的な処方箋をあわせて書き加えており、それはハーブ園に通常植えられる植物の範疇を超えて書き記したものであった。次の例は伝染病を治療するための処方箋である：－「ルリハコベ *pimpernell*、セージ、ダイコンソウ、セントマリーゴールド [キンセンカ]、タンジー [ヨモギギク]、ソレルとセイヨウオダマキを用意し、ブレンドして、これらの7種のハーブをすりつぶして、その汁をエールまたは浄水に入れて飲む、そうすれば伝染病に打ち克つであろう」

当時の庭の様子についてさらに知ろうと思えば、ほかの医学関係文書から知ることができる。14世紀に英語で書かれた医学の詩がストックホルムの王立図書館の写本に保存されており、そこには花を図解したものが描かれている。品質の良いローズマリーに関して作者は次のように言う：－

「ローズマリーはハーブであるとともに木であり、暑さや乾燥に強い種で、その葉は常に緑で、医術の優れた本にあるように欠点はまったくなく、そしてサレルノ [イタリア南部、ヨーロッパ最古の医学学校] の学者が書いた本がエノー伯爵夫人に送られ、彼女は娘であるイングランドの女王フィリップにその写しを送った」（*『考古学』第30巻）。これは、もちろん、エドワード3世の王妃、エノーのフィリップ [Philippa of Hainault, 1314~69年 父は（現ベルギー領）エノー伯ギヨーム1世、母はフランス王フィリップ6世の妹ジャンヌ・ドヴァロア] のことであり、大英博物館（†スローン, No.7 Sec.5）に次のような題がついた写本があることは興味深い：－「チバーン ローズマリーの効能について、エノー伯爵夫人の命令により書かれたもので、娘であるイングランドの女王フィリップにその写しを送った」

[訳注] チバーンはイングランド北部にある中世騎士団の病院などに使われた拠点のことか。イングランドに初めてローズマリーを送ったのがエノー伯爵夫人と言われ、それまでイングランドではローズマリーは知られていなかった。

別の医学文書としては、「尊敬すべき医師、ギルバート・カイマー先生」 [Gilbert Kymer, ~1463年 ヘンリー5世、6世の侍医・オックスフォード大学総長] によるもので、グロスター公爵ハンフリー [1391-1447年] に宛てた論文であり、『健康管理のための食事』 *Dietarium de*

Sanitatis Custodia というタイトルが付けられている。カイマーは、公爵がスープに入れて安全に食べることができるハーブのリスト、および果物についての詳細な指示、すなわちどのような果物を食前に食べたらいいか、食後に食べたらいかが書かれている。このリストには、最も身近な果物のほか、ダムソン、イチゴ、イチジク、セイヨウカリン、桃そして外国の果物や香料が掲げられている。植物の名前がそれぞれラテン語、英語、フランス語で書かれたリストがジョン・ブレイ [John Bray, 1377 年頃活躍] によって作成された。ブレイは医師であるとともに植物学者であり、毎年 100 シリングの手当を最初はソールズベリー伯爵ウィリアムから、次いでリチャード 2 世から受け取った。彼の著作『植物の名前一覧』*Synonomā de nominibus herbarum* (キスローン写本、282 (24)、167 v. ページ~173 v. ページ) にはアルファベット順に並べられた名前が数多く収められている。

パラディウスについては、13 世紀に翻訳されていたのと同じくらい数多く 15 世紀にも翻訳されていたことがわかっている。英語版については、1420 年頃の写本がコルチェスター (§ 初期英語文献協会発行、T. H. ヘアテジ編) に存在しているが、その著者が誰であるかの手掛かりはない。しかし、同時期の別の翻訳者の名前と業績は残されている。それはウェストミンスターの修道士であるニコラス・ボラードと言い、パラディウスの接ぎ木、植栽、種蒔きに関連する農業関係の著作の一部を、彼自身が直接翻訳したか、あるいは翻案したか、または「ゴッドフリー」を通じて翻訳した。ロバート・サルも同じ本の一部を再発刊している¹¹。

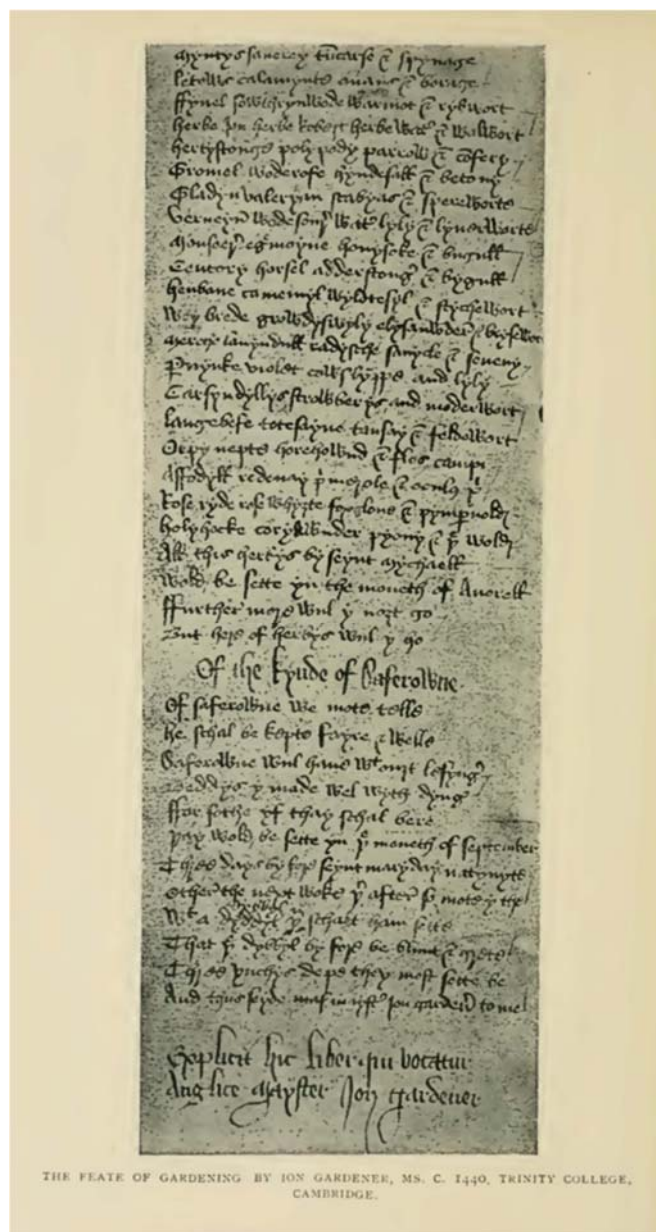
¹¹サルの著作を掲載している大英博物館が所蔵する写本は次のように結ばれている。「ここにパラディウスに関するゴッドフリーによる樹木の話は終え、ニコラス・ボラードの論文を始めることとする。」そして「木の植栽方法」と接ぎ木に関する章が続き、その末尾には「ここに農業に関するパラディウスに関するゴッドフリーの最初の部分の章を閉じる」と記されている。

もう一つ別の、ポーキントン論文として知られる 15 世紀の写本は、木の接ぎ木と植栽に数ページが割かれており、その内容は、若干の追加があるほかは、既に引用したものとほぼ同じものとなっている。著者は種なしの果物の育て方をはじめもろもろの一般的な手法すべてについて書き表しているが、加えて、サクランボの木へのブドウ、赤バラの接ぎ木の仕方について語り、また「木の根の近くに」穴を開けて、「アルメイン [ジャーマンという名前の植物か?] を確実に」差し込むことによって果物の色を青色にする仕方について語っている。あわせて、「もし自分のハーブ園に多くのバラが咲くことを望むなら」ローズヒップ (彼は「ペピンズ」“pepynes”と呼ぶが) は 2 月か 3 月に種を蒔いて「十分に水で湿らせる」べきと言っている*。

*ポーキントン写本、W. オームズビー・ゴア所蔵。1855 年ウォートンクラブ発行、本のタイトルは「初期英語雑録」、英国学士院会員 G. O. ハリウエル他編

ガーデニングに関して、英語で書かれたこれこそオリジナルなものとして知られる最も

初期の著作は、「ジョン・ガードナー先生」“Mayster Ion Gardener”なる人物による詩句で書かれた論文で、そのユニークな写本がケンブリッジ大学のトリニティカレッジの図書館に現存している（+『考古学』第54巻所収、私自身による用語集付き）。



〔図4-1〕 『ガーデニングの偉業』 ジョン・ガードナー著 写本 1440年頃
トリニティカレッジ ケンブリッジ

それは、様々な写本からなる小さな本の中に納められており、1738年にロジャー・ゲイル [Roger Gale, 1672~1744年 学者・古物収集家・政治家] によりカレッジに寄贈されたものである。この写本は一見したところ 1440年頃に書かれたものようであるが、詩句は多分も

っと早い時期のものであろう。言語的な考証を踏まえれば、作者はケント人であったと思われるが、写本作業をした人が間違っただけで、執筆時点では既に使われなくなりつつあったいくつかの単語について、作者が不案内であるかのように見えるのである。今残っているタイトル、『ガーデニングの偉業』“The Feate of Gardening”は明らかに後世の人により書き加えられたものである。この詩句の作者については確実なことは何もわかっていない。彼は専門的な庭師であったかも知れないし、あるいは単にその職業のシンボルとして、ラングランドがピアス・プラウマン [農夫] という名前で書いたのとちょうど同じように、そのような名前 [ガードナー、庭師] を名乗ったのかも知れない。ジョンという名は当時の庭師の間で極めてよく見られるクリスチャンネームだということははっきりしている。この詩句は初期の作家たちの先を行く大きな一歩であった。それは完璧なまでに実用的であったから、そこに記されている処方については成功した実例として今日においても従ってこられたのであろう。そして当時広く流布していた迷信によって惑わされることなく、架空の処方とはまったく無縁なものであった。この詩句は 196 行から成り、序詩から始まり次のような標題の 8 部から構成されている：－「木の植付けと養生 Reryng について」－「木の接ぎ木について」－「ブドウの剪定と植付けについて」－「種の苗床づくり setting と種蒔きについて」－「野菜等の種蒔きと植付けについて」－「パセリの種類について」－「その他の種類のハーブについて」－「サフランの種類について」。この著作が貴重なのはイングランドの庭に実際に植えられていた植物やその育て方について議論の余地のない証拠を示しているからであり、そして当然のことながら、ほかのいかなる翻訳物よりもこのテーマに関して限りなく信じるに値する著作なのである。この点に関し、このほかに唯一入手可能な情報源としては、初期の料理本があり、その中には庭にふさわしいハーブが列挙されている。ジョン・ガードナーの詩句に出てくる植物のリストは以下のとおりである：－

[訳注] 和名は学名から同定できるものを採用。たとえばポリジなどのハーブのように、和名として一般化している植物はその名称を優先。複数考えられる場合は / で表記、英名が or の場合は和名も or で表記。また、和名が存在しないものは英国王立園芸協会 RHS の英語名や日本のハーブ関係書籍（北野佐久子編『基本ハーブ事典』、マーガレット・B・フリーマン著 遠山茂樹訳『西洋中世ハーブ事典』、ジャパンハーブソサエティー著『ハーブのすべてがわかる事典』、副島顕子著『Plant Dictionary 植物名の英語辞典』）等を参考にして表記。なお、植物名に見られる#は小文字の l が重なる時に横棒で繋ぐ中世英語の表記法；ケンブリッジ大学出版会復刻の電子版は tt となっているがこの表記は誤解を招きやすい。

『ガーデニングの偉業』に掲載されている植物 <i>Plants from “The Feate of Gardening.”</i>	
Adderstong (<i>Ophioglossum</i>)	ハナヤスリ
Affody# (<i>Narcissus Pseudo-narcissus</i>)	ラッパスイセン
Auans (<i>Geum urbanum</i>)	ダイコンソウ
Appyl (<i>Pyrus Malus</i>)	リンゴ〔現在の学名 <i>Malus pumila</i> 〕

Asche tre (<i>Fraxinus excelsior</i>)	セイヨウトネリコ
Betony (<i>Stachys Betonica</i>)	ベトニー〔カッコウチョロギ〕
Borage (<i>Borrago officinalis</i>)	ポリジ〔ルリヂシャ〕
Bryswort (<i>Bellis perennis</i>)	デイジー〔ヒナギク〕
Bugu# (<i>Ajuga reptans</i>)	アジュガ〔セイヨウキランソウ〕
Bygu# (<i>Chrysanthemum segetum</i>)	コーンマリーゴールド〔アラゲシュンギク〕
Calamynte (<i>Calamintha officinalis</i>)	カラミント
Camemyl (<i>Anthemis nobilis</i>)	カモミール
Carsyndylls (<i>cress, and lily</i> ?)	カラシナとユリ?
Centory (<i>Centaurea nigra, or Erythraea Centaurium</i> ?)	ナツプウィード〔クロアザミ〕 or セントリー〔ベニバナセンブリ 現在の学名 <i>Centaurea erythraea</i>] ?
Clarey (<i>Salvia Sclarea</i>)	クラリーセージ〔オニサルビア〕
Comfery (<i>Symphytum officinale</i>)	コンフリー〔ヒレハリソウ〕
Coryawnder (<i>Coriandrum sativum</i>)	コリアンダー
Cowslippe (<i>Primula veris</i>)	カウスリップ〔キバナノクリンザクラ〕
Dytawnder (<i>Lepidium latifolium</i>)	ベンケイナズナ
Egrimoyne (<i>Agrimonia Eupatoria</i>)	アグリモニー〔セイヨウキンミズヒキ〕
Elysauwder (<i>Smyrnium Olusatrum</i>)	アレクサンダース
Feldwort (<i>Gentiana</i>)	ゲンチアナ
Floscampi (<i>Lychnis</i>)	リクニス〔センノウ類〕
Foxglove (<i>Digitalis purpurea</i>)	ジギタリス〔フォックスグローブ〕
Fynel (<i>Foeniculum vulgare</i>)	フェンネル〔ウイキョウ〕
Garleke (<i>Allium sativum</i>)	ニンニク
Gladyn (<i>Iris</i>)	グラディンアイリス〔ミナリアヤメ〕
Gromel (<i>Lithospermum officinale</i>)	セイヨウムラサキ
Growdyswyly (<i>Senecio vulgaris</i>)	ノボロギク
Halsel tre (<i>Corylus Avellena</i>)	ハシバミの木
Herbe Robert (<i>Geranium Robertianum</i>)	ハープロバート〔ヒメフウロ〕
Herbe Ion (<i>Hypericum perforatum</i>)	セイヨウオトギリソウ
Henbane (<i>Hyoscyamus niger</i>)	ヘンペーン〔ヒヨス〕
Hawthorn (<i>Crataegus Oxyacantha</i>)	セイヨウサンザシ
Herbe Walter (cannot identify) *	ハーブワルター (何か特定できない) *

* Herbe Water と綴られ、それは Walter と同じである (ヘンリー6世第2部、第4幕第1場参照 [訳注])。この名前は『薬草実用百科』 *Aggregator Practicus al Simplicibus* 中の写本のノートにも出てくるし、またハープロバート、ハーブイオンとともに15世紀の「科学常識の葉」Scientific Commonplace Book の写

本 (G.ヘンスロー 師所蔵) にも出てくる。また、ジョン・ブレイの植物のリスト、スローン 282 (24) では *Herba Walteri* *Herbe Water* と書かれている。これらのすべての写本にはジョン・ガードナーの詩および 1201 年のスローン写本に出てくる植物のうちの多くの名前が掲載されている。

[訳注] Folger Shakespeare Library の注釈によると、エリザベス朝時代の発音では l は発音されなかったので、Walter は water のように聞こえた。

Hertystonge (<i>Scolopendrium vulgare</i>)	コタニワタリ [hart's tongue fern の現在の学名 <i>Asplenium scolopendrium</i>]
Holyhocke (<i>Althæa rosea</i>)	ホリホック [タチアオイ]
Honysoke (<i>Lonicera Periclymenum</i>)	ハニーサックル [ニオイスイカズラ 以下、単にスイカズラとする]
Horehound (<i>Marrubium vulgare</i>)	ホアハウンド [ニガハッカ]
Horsel (<i>Inula Helenium</i>)	エレカンペイン [オオグルマ]
Hyndesall (? " <i>Ambrosia.</i> " <i>Teucrium scorodonia</i> ?)	? <i>Ambrosia</i> は「ブタクサ属」、 <i>Teucrium scorodonia</i> はウッドセージ?
Langbefe (<i>Helminthia echioides</i> [or] <i>Echium vulgare</i>)	ハリゲコウゾリナ [or] シベナガムラサキ
Lavyndull (<i>Lavandula vera</i>)	ラベンダー
Leke (<i>Allium Porrum</i>)	リーキ [セイヨウネギ]
Letows (<i>Lactuca sativa</i>)	レタス [チシャ]
Lyly (<i>Lilium candidum</i>)	マドンナリリー
Lyverwort (<i>Anemone Hepatica</i>)	ミスミソウ / ユキワリソウ
Merege (<i>Apium graveolens</i>)	セロリ
Moderwort (<i>Artemisia vulgaris</i>)	マグワート [オウシュウヨモギ]
Mouseer (<i>Hieracium Pilosella</i>)	ハイコウリンタンポポ
Myntys (<i>Mentha</i>)	ミント類
Nepte (<i>Nepeta Cataria, or a turnip</i>)	キャットニップ [イヌハッカ] or カブ
Oculus Christi (<i>Salvia Verbanaca</i>)	ミナトタムラソウ
Orage (<i>Atriplex hortensis</i>)	オラック [ヤマハウレンソウ]
Orpy (<i>Sedum Telephium</i>)	ムラサキベンケイソウ
Owynys and Oynet (<i>Allium Cepa</i>)	タマネギ
Parrow (<i>mistake for Yarrow</i>)	ヤロウ [セイヨウノコギリソウ] の間違い
Pelyter (<i>Parietaria officinalis</i>)	ペリトリーオブザウォール [ヨーロッパヒカゲミズ]
Percely (<i>Petroselinum sativum</i>)	パセリ
Pere (<i>Pyrus communis garden varieties</i>)	セイヨウナシ

Peruynke (<i>Vinca major & minor</i>)	ツルニチニチソウとヒメツルニチニチソウ
Primrole (<i>Primula vulgaris</i>)	プリムローズ〔イチゲサクラソウ〕
Polypody (<i>Polypodium vulgare</i>)	オオエゾデンダ
Pympernold (<i>Poterium Sanguisorba</i>)	サラダバーネット〔オランダワレモコウ〕
Radysche (<i>Raphanus sativus</i>)	ラディシュ〔ハツカダイコン〕
Redenay (Red Ray <i>Lolium perenne</i>)	ペレニアルライグラス〔ホソムギ〕
Rewe (<i>Ruta graveolens</i>)	ルー／ヘンルーダ
Rose (<i>Rosa, red and white</i>)	バラ 赤と白
Rybwort(<i>Plantago lanceolata</i>)	ヘラオオバコ
Saferowne (<i>Crocus sativus</i>)	サフラン
Sage (<i>Salvia officinalis</i>)	セージ
Sanycle (<i>Sanicula europæa</i>)	サニクル〔ウマノミツバの一種〕
Sauerey(<i>Satureja hortensis</i>)	セイボリー〔キダチハッカ〕
Scabyas (<i>Scabiosa</i>)	マツムシソウ
Seueny (<i>Brassica alba</i>)	ホワイトマスタード〔シロガラシ〕
Sowthrynwode (<i>Artemisia Abrotanum</i>)	サザンウッド〔キダチヨモギ〕
Sperewort(<i>Ranunculus Flammula</i>)	マツバキンポウゲ
Spynage(<i>Spinacia oleracea</i>)	ホウレンソウ
Strowberys (<i>Fragaria vesca</i>)	イチゴ
Stychewort (<i>Stellaria Holostea</i>)	アワユキハコベ
Tansay(<i>Tanacetum vulgare</i>)	タンジー〔ヨモギギク〕
Totesayne (<i>Hypericum Androsæmum</i>)	タッツアン〔コボウズオトギリ〕
Tuncarse (<i>Lepidium sativum</i>)	ガーデンクレス〔コショウソウ〕
Tyme(<i>Thymus Serpyllum</i>)	ワイルドタイム〔ヨウシュイブキジャコウソウ 以下、単にタイムとする〕
Valeryan(<i>Valeriana officinalis</i>)	バレリアン〔セイヨウカノコソウ〕
Verueyn (<i>Verbena officinalis</i>)	バーベイン〔クマツヅラ〕
Violet (<i>Viola odorata</i>)	ニオイスマレ〔以下、単にスマレとする〕
Vynys and Vyne tre (<i>Vitis vinifera</i>)	ブドウ、ブドウの木
Walwort(<i>Sedum acre</i>)	オウシュウマンネングサ
Warmot (<i>Artemisia Absinthum</i>)	ワームウッド〔ニガヨモギ〕
Waterlyly (<i>Nymphæa alba</i> or <i>Nuphar luteum</i>)	白スイレン or セイヨウコウホネ
Weybrede (<i>Plantago major</i>)	セイヨウオオバコ

Woderofe (<i>Asperula odorata</i>)	クルマバソウ
Wodesour (<i>Oxalis Acetosella</i>)	コミヤマカタバミ
Wurtys or Wortys (<i>Brassica oleracea</i>)	ヤセイカンラン
Wyldtesyl (<i>Dipsacus Fullonum, or sylvestris</i>)	チーゼル〔オニナベナ 学名の種小名は 両方使用〕
Ysope (<i>Hyssopus officinalis</i>)	ヒソップ〔ヤナギハッカ〕

料理本の最初に掲載されているハーブのリスト、15世紀 スローン写本 1201年

『庭に必要なハーブ アルファベット順』 *Herbys necessary for a gardyn by letter*

A.

Alysaundre (<i>Smyrnum Olusatrum</i>)	アレクサンダース
Avence	セイヨウダイコンソウ
Astralogia rotunda (<i>Aristolochia</i>)	ウマノスズクサの一種
Astralogia longa	ウマノスズクサの一種?
AHa	〔和名未同定〕
Arcachaff (<i>Angelica?</i>)	アンジェリカ?〔セイヨウトウキ〕
Artemesie mogwede	マグワート〔オウシュウヨモギ〕
Annes (<i>Pimpinella Anisum</i>)	アニス
Archangel (<i>Lamium album</i>)	オドリコソウ

B.

Borage	ポリジ〔ルリヂシャ〕
Betes (<i>Beta vulgaris</i>)	ビート／フダンソウ
Betyñ	ベトニー〔カッコウチョロギ〕
Basilicañ (<i>Ocimum basilicum</i>)	バジル
Bungle	アジュガ〔セイヨウキランソウ〕
Burneti	バーネット〔ワレモコウ〕

C.

Cabage	キャベツ
CherveH	チャービル
Carewey	キャラウェイ〔ヒメウイキョウ〕
Cyves	チャイブ〔セイヨウアサツキ〕
Columbyn	コロンバイン〔セイヨウオダマキ〕
Clarey	クラリーセージ〔オニサルビア〕
Colyaundr'	コリアンダー

Colewort e	コールウォート〔ハマナ類〕
Cartabus	ベニバナ
Cressez	クレス〔カラシナ〕
Cressez of Boleyn	〔和名未同定〕
Calamynte	カラミント
CamamyH	カモミール
Ceterwort〔? <i>Ceterach officinarum</i> 〕	? チャセンシダ類〔現在の学名 <i>Asplenium ceterach</i> 〕

D.

Daysez	デイジー〔ヒナギク〕
Dytayñ	ディタニー〔ハクセン／ハナハッカ類〕
Daundelyoñ	セイヨウタンポポ
Dragaunce (<i>Arum Dracunculus</i>)	ドラゴンアルム
Dylle	ディル〔イノンド〕

E.

Elena campana (<i>Inula Helenium</i>)	エレカンペイン〔オオグルマ〕
Eufra (<i>Euphrasia officinalis</i>)	アイブライト〔ユーフラジア、ヤクヨウ コゴメグサ〕
Egrymoyn	アグリモニー〔セイヨウキンミズヒキ〕

F.

FeneH	フェンネル〔ウイキョウ〕
Foothistell	〔和名未同定〕
Fenecreke (<i>Trigonella Fœnum-græcum</i>)	フェヌグリーク〔コロハ〕

G.

Gromett	セイヨウムラサキ
Goldez (<i>Calendula officinalis</i>)	キンセンカ
Gyllofr' (<i>Dianthus Caryophyllus</i>)	クローブピンク〔オランダナデシコ〕
Germaundr'	ジャーマンダー〔ニガクサ類〕

〔訳注〕 Gyllofr'=gillyflower は、一般的には、「香りのある花」で、「特にアブラナ科のアラセイトウ stock などのアラセイトウ属やナデシコ科のカーネーション carnation など」(『Plant Dictionary 植物名の英語辞典』97 ページ) を指すが、ここで記載されている *Dianthus Caryophyllus* は、クローブピンク〔オランダナデシコ カーネーションの原種に近いもの〕を指す。本訳では gillyflower (類似の表記を含む。) と記述されている場合は、種を特定できないので、単にジリフラワーと表記する。

H.

Hertez tonge	コタニワタリ
Horehound	ホアハウンド〔ニガハッカ〕
Henbane	ヘンペーン〔ヒヨス〕

I.

Isope	ヒソップ〔ヤナギハッカ〕
Iertin	〔和名未同定〕
Iryngez (<i>Eryngoes</i> ?)	エリンジウム?〔ヒゴタイサイコ類〕
herbe Ive (<i>Plantago</i>)	オオバコ類

K.

Kykombre, yt. bereth apples (<i>Cucumis sativus</i>)	キュウリ
--	------

L.

Longdebeff	ハリゲコウゾリナ／シベナガムラサキ
Lekez	リーキ〔セイヨウネギ〕
Letuce	レタス〔チシャ〕
Love ache (<i>Levisticum officinale</i>)	ラビッジ
Lympons	〔和名未同定〕
Lylle (<i>lilium</i>)	ユリ
Longwortz (<i>Pulmonaria officinalis</i>)	ラングワート〔プルモナリア ヒメムラサキ〕

M.

Mercury	ヤマアイ
Malowes	マロー〔ウズベニアオイ〕
Mynt	ミント類
Mageroñ	マジョラム〔ハナハッカ〕
Mageroñ gentyle	マジョラムの一種
Mandrake	マンドレイク
Mylons	メロン

N.

Nept	キャットニップ〔イヌハッカ〕／カブ
------	-------------------

Nettle# rede	ネトル〔イラクサ〕／レッドデッドネトル red dead-nettle〔ヒメオドリコソウ〕
Nardus capistola	甘松〔ナルド／スパイクナード〕
[訳注] Nardus はコウスイガヤ〔イネ科〕 <i>Cymbopogon nardus</i> を指すこともある。	
O.	
Orage	オラック〔ヤマハウレンソウ〕
Oculus Christi	ミナトタムラソウ
Oynons	タマネギ
P.	
Persely	パセリ
Pelytor	ペリトリーオブザウォール〔ヨーロッパヒカゲミズ〕
Pelytor of Spayñ,	スパニッシュカモミール
Pulia# royall (<i>Mentha Pulegium</i>)	ペニーロイヤルミント〔メグサハッカ〕
Pyperwhite	コショウ(白)
Pacyence (<i>Rumex patentia</i>)	ガーデンパティエンス〔スイバ類〕
Popy whit'	ポピー(白)
Prymerose	プリムローズ〔イチゲサクラソウ〕
Purselane	スベリヒユ
Philipendula	シモツケソウの一種
Q.	
Qvyncez	マルメロ
R.	
R.Rapes (<i>Brassica Napus</i>)	セイヨウアブラナ
Radyche	ラディシュ〔ハツカダイコン〕
Rampsons (<i>Allium ursinum</i>)	ラムソン〔クマニラ〕
Rapouncez (<i>Campanula Rapunculus</i>)	ランピオン〔ラプンツェル／カブラギキョウ〕
Rokette (<i>Hesperis matronalis</i>)	ダムズバイオレット〔ハナダイコン〕
[訳注]「ロケット」はルッコラを指すことがあるが、ここでは学名を優先し、ダムズバイオレットとした。	
Rewe	ルー
S.	

Sauge	セージ
Saverey	セイボリー〔キダチハッカ〕
Spynache	ホウレンソウ
Sede-wale (<i>Valeriana pyrenaica</i>)	カノコソウの一種〔学名は capon's tail grass のこと〕
Scalaceh (? <i>Sinapis arvensis</i>)	?ノハラガラシ
Smalache (<i>Apium graveolens</i>)	セロリ
Sauce alone (<i>Erysimum Alliaria</i>)	アリアリア〔ガーリックマスタード <i>Alliaria petiolata</i> の学名もある〕
Selbestryne	ヨーロッパシヤク〔cow parsley <i>Anthriscus sylvestris</i> 〕か
Syves (<i>Allium Schoenoprasum</i>)	チャイブ〔セイヨウアサツキ〕
Soreth	ソレル〔スイバ〕
Sowthisteth	ケシアザミ〔ノゲシの一種〕
Skabiose	マツムシソウ
Selia	セリナム
Stycadose (<i>Lavandula Stæchas</i>)	フレンチラベンダー
Stanmarch (? <i>Smyrniun Olusatrum</i>)	?アレクサンダース〔学名は <i>Alysaundre</i> (A.の項 前掲) と同じ〕
T.	
Tyme	タイム
Tansey	タンジー〔ヨモギギク〕

V.

Vyolette	スマイレ
Wermode	ワームウッド〔ニガヨモギ〕
Wormesede (<i>Erysimum cheiranthoides</i>)	エゾスズシロ〔学名は treacle mustard のこと〕
Verveyn	バーベイン〔クマツヅラ〕

[訳注] 学名が表記されているものは、上記同様学名から同定。学名の表記がないものは、推定できるもののみ和名掲載。

『これらのうちスープ用のハーブについて』 *Of the same Herbes for Potage*

Borage	ポリジ〔ルリヂシャ〕
Langdebefe	ハリゲコウゾリナ／シベナガムラサキ
Vyolette	スマイレ

Malowes	マロー〔ウスベニアオイ〕
Mercury	ヤマアイ
Daundelyoñ	セイヨウタンポポ
Avence	ダイコンソウ
Mynte	ミント類
Sauge	セージ
Perceley	パセリ
Goldes	キンセンカ
Mageroñ	マジヨラム〔ハナハッカ〕
FeneH	フェンネル〔ウイキョウ〕
Caraway	キャラウェイ〔ヒメウイキョウ〕
RednettyH	ネトル〔イラクサ〕／レッドデッドネトル〔ヒメオドリコソウ〕
Oculus Christi	ミナトタムラソウ
Daysys	デイジー〔ヒナギク〕
CherveH	チャービル
Lekez	リーキ〔セイヨウネギ〕
Colewortes	コールウォート〔ハマナ類〕
Rapez	セイヨウアブラナ
Tyme	タイム
Cyves	チャイブ〔セイヨウアサツキ〕
Betes	ビート／フダンソウ
Alysaundr'	アレクサンダース
Letyse	レタス〔チシャ〕
Betayñ	ベトニー〔カッコウチョロギ〕
Columbyñ	コロンバイン〔セイヨウオダマキ〕
AHа	〔和名未同定〕
Astralogia rotunda	ウマノスズクサの一種
Astralogia longa,	ウマノスズクサの一種
Basilican	バジル
Dylle	ディル〔イノンド〕
Deteyñ	ディタニー〔ハクセン／ハナハッカ類〕
Egrymoñ	アグリモニー〔セイヨウキンミズヒキ〕
Hertestong	コタニワタリ
Radiche	ラディシュ〔ハツカダイコン〕
White pyper	白コショウ
Cabagez	キャベツ

Sedewale	カノコソウの一種
Sbynache	ハウレンソウ
Coriaundr'	コリアンダー
Foothistyll	〔和名未同定〕
Orage	オラック〔ヤマハウレンソウ〕
Cartabus	ベニバナ
Lympons	〔和名未同定〕
Nepte	キャットニップ〔イヌハッカ〕／カブ
Clarey	クラリーセージ〔オニサルビア〕
Pacience	ガーデンパティエンス〔スイバ類〕

『これらのうちソース用のハーブについて』 *Of the same Herbes for Sauce.*

Hertes tonge	コタニワタリ
SoreH	ソレル〔スイバ〕
Pelytory	ペリトリーオブザウォール〔ヨーロッパ ヒカゲミズ〕
Pelytory of Spayñ	スパニッシュカモミール
Detey	〔和名未同定〕
Vyolette	スマイレ
Perceley	パセリ
Mynte	ミント類

『次に、これらのうち飲用のハーブについて』 *Also of the same Herbes for the copp.*

Cost	〔和名未同定〕
Costmary	コストマリー〔バルサムギク〕
Sauge	セージ
Isope	ヒソップ〔ヤナギハッカ〕
Rose mary	ローズマリー
GyHofr'	クローブピンク〔オランダナデシコ〕
Goldez	キンセンカ
Clarey	クラリーセージ〔オニサルビア〕
Mageroñ	マジュラム〔ハナハッカ〕
Rue*	ルー

*Rue は薄いインクで付け加えられている

『次に、これらのうちサラダ用のハーブについて』 *Also of the same Herbes for a Salade.*

Buddus of Stanmarche,	アレクサンダースのつぼみ
-----------------------	--------------

Vyolette flourez	スマレの花
Percely	パセリ
Redmynte	レッドミント／ジンジャーミント
Syves	チャイブ〔セイヨウアサツキ〕
Cresse of Boleyn	〔和名未同定〕
Purselañ	パセリ
Ramsons	ラムソン〔クマニラ〕
Calamynte	カラミント
Prime Rose buddus	バラのつぼみ
Dayses	デイジー〔ヒナギク〕
Rapounses	ランピオン〔ラプンツェル／カブラギキョウ〕
Daundelyon	セイヨウタンポポ
Rokette	ダムズバイオレット〔ハナダイコン〕／ルッコラ
Red nettel	ネトル〔イラクサ〕／レッドデッドネトル〔ヒメオドリコソウ〕
Borage flourez	ポリジの花
Croppus of Red Fenel	赤フェネルの茎葉
Selbestryn	ヨーロッパシヤク〔cow parsley <i>Anthriscus sylvestris</i>] ?
Chykynwede	ハコベ

『次に、蒸留用のハーブ』 *Also Herbez to Styllē.*

Endyve	エンダイブ〔キクヂシャ〕
Red Rose	赤バラ
Rose mary	ローズマリー
Dragans	ドラゴンアルム
Skabiose	マツムシソウ
Ewfrace	アイブライト〔ユーフラジア、ヤクヨウコゴメグサ〕
Wermode	ワームウッド〔ニガヨモギ〕
Mogwede	マグワート〔オウシュウヨモギ〕
Betayn	ベトニー〔カッコウチョロギ〕
Wylde Tansey	ワイルドタンジー
Sauge	セージ
Isope	ヒソップ〔ヤナギハッカ〕

Ersesmart (*Polygonum Hydropiper*). ヤナギタデ

『次に、香り付けと飾り付けのためのハーブ』 *Also Herbes fo[r] Savour and beaute.*

Gyllofr' gentyle	クローブピンク〔オランダナデシコ〕の一種
Mageroñ gentyle	マジヨラムの一種
Basyle	バジル
Palma Christi	トウゴマ
Stycadose	フレンチラベンダー
Meloncez	メロン
Arcachaffe	アンジュリカ〔セイヨウトウキ〕
Scalaceley	?ノハラガラシ
Philyppendula	シモツケソウの一種
PopyroyaH	ポピーの一種
Germaundr'	ジャーマンダー〔ニガクサ類〕
Cowsloppus of Jerusalem	ブルモナリア〔ラングワートと同じ〕
Verveyñ	バーベイン〔クマツヅラ〕
Dyll	ディル〔イノンド〕
Seynt Mar' Garlek*	ガーリックの一種?

*“Seynt Mar' Garlek”は別人により加えられている

『次に、庭に植える根物類』 *Also Rotys for a gardyñ.*

Persenepez	パースニップ〔オランダボウフウ〕
Turnepéz	カブ
Radyche	ラディシュ〔ハツカダイコン〕
Karettes	ニンジン
Galyngale	ガリンゲール〔ニオイカヤツリグサ〕
Tryngez	〔和名未同定〕
Saffroñ	サフラン

第5章 チューダー朝初期の庭園

“Sure gates, sweete gardens, stately galleries しっかりした門、かぐわしい庭園、堂々とした展望台
Wrought with faire pillowes and fine imageries; 美しい円柱と精巧な彫像に飾られていた；
All those (O pitie !) now are turned to dust これらすべての物が（残念なことに！）今や塵となり
And overgrowne with black oblivion’s rust” そして真っ黒な忘却の錆が蔓延るままになっている
Spenser, *Ruins of Time* スペンサー 『時の廃墟』

[2行目 pillowes は正しくは pillors か]

15世紀末にかけて新しい影響がこの国に持ち込まれ、その結果多くの変化が始まった。エドワード4世〔在位1461～83年〕の妹とブルゴーニュ公爵との結婚、その同盟を通じたフランダースとの交流の増加により社会生活に様々な変化がもたらされた。バラ戦争の終結に伴う比較的平和な時代により、国内の建築では新しいスタイルが広がり、快適な赤レンガの館が古い城にとって代わった。庭園はもはや要塞化した城壁の中に閉じ込められておく必要はなくなった。新しいスタイルの館は丘の上に建てられることはなく、普通はその下に広がる土地に建てられ、堀によって囲まれていた。堀の中にはちょっとした小さなスペースがあり、そこは庭園に充てられたり、中庭には植物が少しばかり植えられた。平和が続いたことにより堀の防衛線の内側にすべての財産を置いておく必要性は減り、堀の外側に庭園を持つことが一般化していった。そして堀の外に庭園が造られなかった場合でも、城壁の中にあった時に比べれば、堀の内側により広い空間ができることが多くなったため、この増えたスペースを利用して楽しいことを考える余裕が生まれ、そして間もなく、デザイン上のいくつかの変化が生み出されるに至った。

最初のイノベーションの一つが柵で囲われた花壇 the railed bed、すなわち格子状 trellis-work の低い垣根で囲われた花壇であった。これらの格子状の柵はチューダー期〔1485～1603年〕を迎える直前から流行り始めたが、何年もの間その人気は続いた。ヘンリー8世〔在位1491～1547年〕が1533年、ハンプトンコート庭園の大改造に取り組んだ時、長方形の形をした花壇が国王の新しい庭園にお目見えした。それらの花壇はチューダーの色彩である緑と白に塗られた柵で囲まれており、それはヘンリー8世を描いた原画の中に見ることができるであろう。92ページの図〔本誌95ページ 図5-7〕はその絵の一部である。ハンプトンコートの1533年の支出には、これらの柵の購入に関する数限りない記載がなされている。



〔図 5-1〕 柵で囲われた花壇 バラ物語のフランス写本 1450 年頃
大英博物館 EGERTON 2022

「[ロンドンの塗装屋ヘンリー・ブランクストン] に対する塗装代の支払い、すなわち 96 本の平らな柱を白と緑に油性塗装すること、この柱は前述の庭園の柵を両側で支えるもので古典風に仕上げられ、1 本当たり 12 ペンス、計 4 ポンド 16 シリング。さらに同人に対する塗装代の支払い、すなわち前述の庭園の長さ 960 ヤードの柵を白と緑に油性塗装すること、1 ヤード当たり 6 ペンス、計 24 ポンド」(*王室会計文書, 国庫歳入, その他事項帳簿 No.237。これはヘンリー8 世第 24 年のハンプトンコートにおける支出に関する大冊である。Exchequer, Treasury of Receipt, Miscellaneous Books)

これらの項目はその呼び方を変えながら繰り返し記載されている。柱と柵は「古典風な油彩の白と緑」に塗られていた、とか「平らな柱」は“flat pownchens”の代わりに“flat posts”という具合にである。

もう一つの新機軸として、チューダー朝初期に導入され、すぐにあらゆる庭園に広がり人目を引く特徴的な存在になったのはトピアリー、“opus topiarum”である。すなわち、木や茂みを変った形に刈る技法のことである。この技法は、イングランドでは目新しかったが、その起源は極めて古く、ローマ人たちには早くから知られていた。ただイングランドではこの時代まで実際に使われたという記録はなかった。この新しいアイデアはこの国で大人気となり、これらの木の怪物を作るには大変な時間と手間がかかったものの、2 世紀以上にわたりこの趣向は様式として残り続けた。リーランド [John Leland, 1506?~52 年古

美術研究家]はその『旅行記』*Itinerary*において、16世紀初期の頃の、目を見張るトピアリーの実例が見られそうな場所について紹介している。「ウスケル村、チュートンから1マイルほどのところにあるこの村には、トピアリーの遊歩道が設けられた感じの良い果樹園がある」。また「レスヒル城」では、その果樹園のことを「トピアリーが施された高台は、貝の渦巻きのようにぐるぐると回って簡単にてっぺんに到達できる」と描いている。そしてこの話はもう一つの変ったものについて語ることに繋がっていくのだが、それはこの時代に大いに発達した「高台」、すなわちレスヒル城にあったようなもので、リーランドが刈り込まれた木々を見た場所である。13世紀、いくつかの修道院の中には庭の壁に向かって土の「マウンド」を作り、壁越しに外の世界を見ることができるようにしたものがあった。その後の何世紀か単純な構造の「マウンド」や「高台」が庭園にしばしば見かけられるようになったが、チューダー朝時代に至り、「高台」は以前に比べはるかに重要なアクセサリとなった。これは通常、土で作られそこには果樹やその他の木が植えられた。そしてこの高台は果樹園の「あちらこちらのコーナー」に築かれ、「貴重な職人技による階段」、あるいはらせん状の小径で登ることができるようになっており、その小径の両側には、変わった形に刈り込まれた茂みや甘い香りのするハーブや花が植えられていた。ロッキンガムには実例となる高台の一つの姿が残されている。土でできた大きな階段状の高台で、芝生と数本の木で覆われており、庭園を取り囲む高い壁の一部に向かって高くなっており、壁の後ろには以前には砦が立っていた。高台の頂上からは変わった形に刈り込まれたイチイの木が植えられた庭園越しに、遠く広々と広がる田園の素晴らしい景色が見渡せたから、この高台は初期の段階では、「見張り」すなわち監視塔として機能した。庭園や果樹園が狩猟場の中にあるような場合には、鹿の一群が壁近くで草を食べる時には、この高台は「雄鹿を撃つこともできる」ポイントとしても有用であった。高台のてっぺんにはあずまやが作られることもよくあり、それは格子状の低い垣根につる植物 creepers が配されたものであったり、あるいはもっとしっかりした建物であったりした。おそらくこの種の装飾の最も素晴らしい見本はハンプトンコート「高台」であり、数々の資料によりそれがどういうものであったかはっきり知ることができるのである。それは「国王の新しい庭園」の南端に位置しており、この庭園は1533年、エドワード・グリフィンという名の庭師が工事監督をしたものであった。



[図5-2] 高台 ロッキングガム

高台が煉瓦の基礎の上に作られたことは、「ロンドンの煉瓦職人であるジョン・ダレン」に対する支払いがあったことでわかる。「25万6000個の煉瓦を新しい庭園の周りの壁の上に積み上げた代金。庭園は国王の宿泊所とテムズ川の間であり、高台の基礎はテムズの横に設けられ、1000個に対し14ペンス、合計14ポンド18シリング8ペンス」。そして土が盛り上げられ生垣用の灌木サンザシ quicksets が植えられた。合計54シリング8ペンスがキングストンのローレンス・ヴィンセントとジョン・ガディスビィに支払われたが、これは生垣用灌木4台分、1台につき3000本分のセットが入っており、「国王の新しい庭園の横に高台を作るため」に使われた。その他の支出項目としては、「生垣用灌木を結わえて垣根を作るためのセイヨウトネリコの柱」とそれらを「結わえるためのヤナギ wyly の棒2束」；そして「高台に植える梨の木3本」がある。



〔図5-3〕 昔のイチイの小径とロッキンガム高台

「南あずまや」は高台の上にあったものがそうであると思われる。しかし「西あずまや」の会計簿にも記載がなされており、それは大変よく似通っていたようで、両方のために同じものが購入され、「鍛冶屋組合のジョン」に対し、「南あずまやの屋根の格子模様（フレツ）用に釘 300 本を 100 本 12 ペンスで 3 シリング」、また国王御用達のガラス屋ガリオン・ホーンに対し、なにがしかの額が支払われ、以下はその実例である。「庭園の高台のアイテム 48 の照明、上の階の各照明は 4½ フィートの大きさ、下の階の各照明は 4½ フィート 3 インチの大きさに、これら合計 211 フィート、1 フィートあたり 5 ペンス、〔合計〕 4 ポンド 7 シリング 11 ペンス」。これによりあずまやがいかに大きかったか、またいかに入念に作られたかが少しはわかるであろう。さらに会計簿からは「南あずまや」が西あずまやと壁沿いに走る展望回廊（ギャラリー）で結ばれており、それは木製のポールと格子垣で作られていた。このような展望回廊は 15 世紀終わりから 16 世紀初期の庭園の特徴に彩られており、そのデザインはいくつかの昔の文献から知ることができる。その典型は、クリスピン・ドウ・パ [Crispin de Pas (or Passe), 1564~1637 年 フランドル・オランダ系] 著の『花の庭園』*Hortus Floridus* であり、1615 年に英訳された。これらの展望回廊はヘンリー 8 世

が手を加える以前にはハンプトンコートに実在しており、キャヴェンディッシュがウルジーの生涯を韻文で描いた伝記の中に登場してくる。

[訳注] ジョージ・キャヴェンディッシュ George Cavendish 1497~1562 年 ウルジーの伝記作家として有名。トーマス・ウルジー Thomas Wolsey 1475?~1530 年 枢機卿。ローマ教皇からヘンリー8世の離婚許可が得られず大逆罪に問われた。

“My galleries were fayre, both large & longe	私の展望回廊は美しく、大きくて長くて
To walk in them when that it liked me beste	そこに歩いて行くのはそこに一番行きたい時
* * * * *	* * * * *
With arbours & alleys so pleasant & so dulce	あずまやと小径はすごく楽しくすごく心地よく
The pestilent airs with flavours to repulse.”	有害な空気を香りで追い払う



[図5-4] 展望回廊のある庭園 「花、果物、動物、鳥、飛ぶ虫の第2巻」 1650年

ここに描かれているような展望回廊やあずまやが存在していることを示す実例を私は一つとして知らない。それらは滅失しやすい材料で作られており、たとえばつる植物、ブドウ類、バラやスイカズラ honeysuckle が植えられた木製の格子垣などは、たとえ意図的に取り壊されたのでなくとも時が経つにつれとっくの昔に壊れてしまっていたに違いない。加えて大変残念なことに、そのような実例は、英語で書かれた絵入りの本には少数の例外

を除きほとんど残されていない。これに対し、当時の外国の写本、特にフランスやフランドルのものには多数の絵が載っているのである。英語の実例が少ないのは、宗教改革の時、宗教的な本が抹殺されたことが一因であることは間違いない。これらの絵は主に祈祷書の冒頭に描かれているカレンダーの中に見つけられる。祈祷書、あるいは時祷書 [Books of Hours, 祈祷時間に読むべき聖書からの文選・指示の記載された本] には、5月という月の彩飾画としてしばしば庭園が描かれ、あるいは聖なる題材の説明として、当時の庭園というものが引き合いに出された。展望回廊は庭園の外の壁に沿って走り、一面は壁、他方は木の柱が形作る連続するアーチが続き、そして壁と柱の間の通路はつる植物と木製の枠組みで覆われているか、あるいはもっとしっかりしたものを使って、隠れ場としてよりふさわしいものが作られた。時には展望回廊はぐるっと三面を壁で囲まれることもあったが、一面だけというのがより一般的なやり方であったようで、館からあずまや、あるいは高台に向けて目隠しされた通路としての役目を果たすことが多かった。

バッキンガム公爵エドワード・スタフォード [Edward Stafford, 1478~1521年] は、16世紀初期の頃、グロスターシャー州ソーンベリーに広大な庭園を造る計画を開始したが、その計画を実行する前に、反逆罪に問われ死刑となってしまった。当時の国家文書の中に、1521年5月、彼の土地の調査があり、その中に次のような抜粋がある。それは「庭園」という見出しが付けられ、展望回廊の様式についての説明がされている。「(城の) 内側の南側にはきちんとした庭園があり、その周りには美しい展望回廊が、主たるあずまやから礼拝堂と教区教会の両方へ向かって上ったり下ったりしながらつながっている。この展望回廊の外側は石で要塞化され、内側は木造でスレートで覆われている。この城あるいは荘園の館の東側には、歩くと気持ちのよい庭園があり、そこは高い壁で囲まれ、要塞化している。あちらへ行くには上り下りしながらつながっている展望回廊か、または別の私用の通路 *privy ways* を通って行く。その専用庭園 *privy garden* の脇には大規模で美しい果樹園が広がり、そこに溢れる若い木々の枝は、果物、たくさんのバラ、その他もろもろの楽しみでたわわとなっている。そしてその同じ果樹園には、のびのびと歩くための多くの美しい小径がある。そしてその果樹園をぐるっと回るとちょっとした高い所に出て、イバラ *thorne* とハシバミ *hasel* で完璧に覆われた休憩所のある別の美しい小径につながっている。そしてその外、この果樹園の外側の部分は丸太の柵で取り囲まれ、溝や灌木生垣はない」・・・「この果樹園から外に出ると、新しく造られた美しい庭園に好きな時に行って入るためのいろんな裏門がいろんな場所に作られている」。この館と庭園は、エリザベス女王 [在位 1558~1603年] の時代以降、廃墟になるまま打ち捨てられ、昔の庭園の面影は一つも残されていない (*外側の城壁だけは残されており、そして再建され、現在の庭園は 50 年ほど前に、現在の所有者スタフォード・ハワード氏によって造られた)。



〔図 5-5〕 庭園の館 ラウズリ

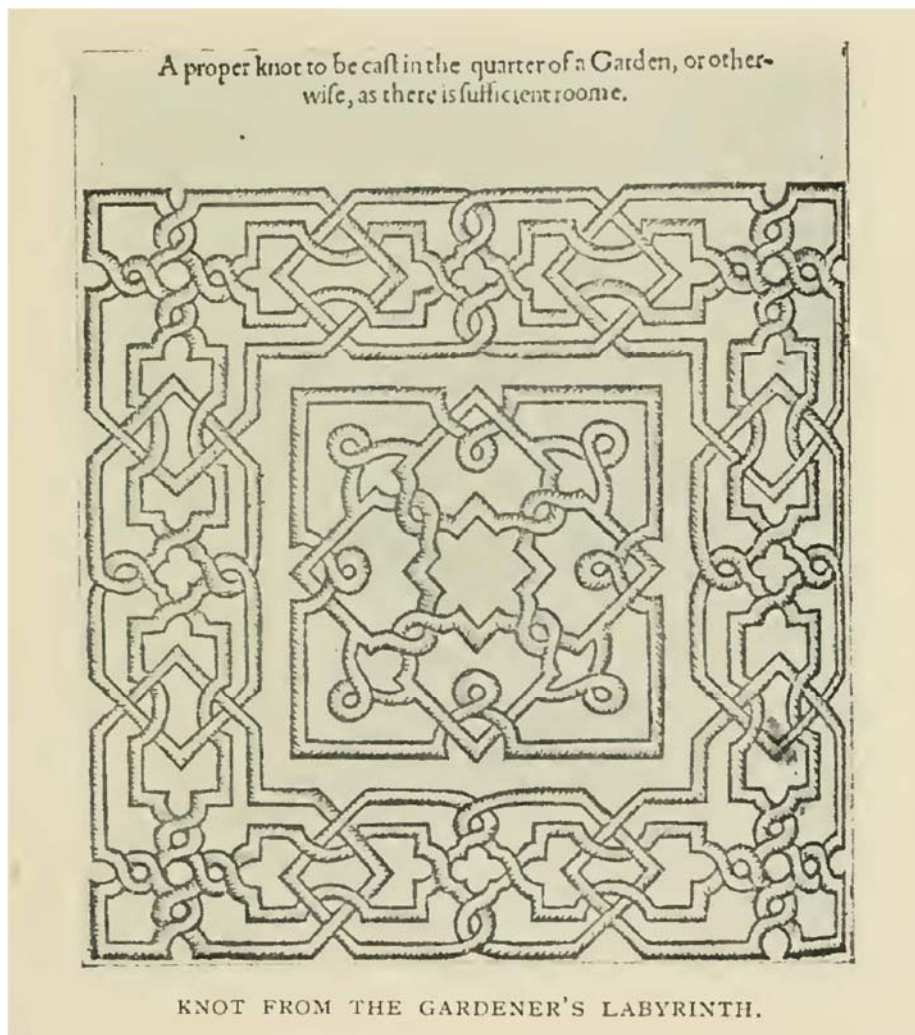
あずまや、あるいは「休憩所」の別の事例として、ヨークのエリザベス [Elizabeth of York, ヨーク家リチャード 4 世の長女、ランカスター家ヘンリー 7 世の女王に迎えられバラ戦争が終結] のために作られたものがある。「1502 年 7 月 10 日、ウィンザー城の事務係のヘンリー・スミスに支払われた項目として、あずまやを作るためにどこそこの労働者に彼が支払ったお金。このあずまやはウィンザーの小さな庭園にあり、女王の祝宴のためのもの、4 シリング 8 ペンス」。さらにヘンリー 7 世の第 18 年、5 シリングがロンドンのベイナード城にあるあずまや一つを作るために支払われた (*衣装掛会計簿)。

通常見られるあずまやは、チョーサーが以前描いたものと今もなお変わらず、芝生の腰掛があって、登攀性植物に覆われた格子垣を備えたものであった。このようなあずまやについて、チューダー朝時代の詩人はこう残している (†スケルトン『月桂冠』 Skelton, *Garlande of Laurell*): -

“The clowdis gan to clere, the myst was rarifiid	雲は晴れ、霧は薄れ
In an herber I saw, brought where I was,	連れて行かれたあずまやで私の見たのは
There birdis on the brere sange on euey syde :-	そこにはイバラの上で歌う鳥たちがそこかしこに :-
With alys ensandid about in compas	小径には砂がぐるりと敷かれ
The bankis enturfid with singular solas	土手は芝で包まれ、それはこの上ない喜び
Enrailed with rosers, and vinis engrapid ; -	バラで囲まれ、ブドウで覆われ ; -
It was a new comfort of sorowis escapid.”	それは悲しみから逃れる新しい楽しみであった

そのほかの休憩所は庭園の壁沿いに用意されており、それは木陰の隅のような所に腰掛用として盛土を草で覆ったものを設けるといった形をしていた。それはモアが『ユートピア』 *Utopia* の中の一文で「私たちはみな私の家へと向かい、庭園に入ると緑の盛土に座り、お互いに会話を楽しんだ」と書いたようなものであった。あずまや、すなわちガーデンハウスは、煉瓦や石で壁に作り込まれた小塔のように建てられたこともあった；このようなあずまやの初期の例がサリー州ラウズリに現存している。もとは4つの館があり、庭園の壁の各コーナーに1つずつあったが、今はそのうち3つが残っている。この時期のもう一つ興味深い庭園として、ハートフォードシャー州ハダムの宮殿のものがある。これは何百年もの間、ロンドンの司教たちの所有に属していた。ここはヘンリー5世の未亡人キャサリンが、オウエン・チューダー [Owen Tudor, 1400頃~1461年チューダー家の祖] と [事実上] 結婚した後の居所でもあり、ヘンリー7世の父エドモンドが生まれたのはこの場所であった。現在の庭園は壁により両面が囲まれており、別の面はイチイの高い生垣で3ヤードの分厚いもので守られている。

16世紀の初めに、垣根の手すりが真っすぐな花壇 *straight-railed beds* とあわせて、新しい花壇が取り入れられた。すなわち「結び目花壇」“*knotted bed*”あるいは結び目 *knot* である。それは奇妙で複雑な幾何学模様の形をしていた。具体的には1520年までにはこのスタイルは広く使用され、ほとんどのイングリッシュガーデンでこの目新しい結び目花壇と言うべきものがお披露目されることになった。キャヴェンディッシュはハンプトンコートのことを「あまりにも結ばれているため表現できないほど」と書いた。結び目の中の土は少し盛り上げられ煉瓦やタイルの縁取りでその位置が保たれるようにしてあるか、あるいはこちらの方が数が多かった方法としては、通路と同じ高さにしてツゲ *box*、アルメリア [ハマカンザシ] *thrift* などにより区切るというやり方であった。一般的には、この花壇ではその分厚い縁取りの内側に、装飾的な花や小さい低木が植えられ、いわば「絨毯花壇」“*carpet beds*”のようにレイアウトされた。ただし、時には植物の代わりに様々な色彩の土が敷き詰められることもあった。1502年のバッキンガム公爵の家計簿には3シリング4ペンスの支払い記録があるが、これは「庭師ジョン・ウィンドが公爵の庭園の結び目を根気強く丹念に作ったこと」に対する支払いであった。そして同年、ノーサンバランド第5代伯爵 [Henry Percy, 1477~1527年ヘンリー7世、8世の廷臣] の会計簿の中に、一人の庭師が「1時間ごとに庭園に出てハーブを植え、結び目を刈り込むこと、そしてこの庭園を1時間ごとにきれいに掃き清める」ために雇われたことが記載されている。これらの結び目のデザインは非常に多種多様であった。それは幾何学模様であったり、動物の奇抜な形であったりした；一番人気があったのが言うまでもなく複雑に入り組んだ幾何学的デザインであり、本にも一番頻繁に取り上げられている (図版参照)。



[図5-6] 結び目花壇 『庭師のための迷宮ガイド』
(庭園における正しい結び目の作り方)

次の詩はこれとは違ったスタイルのデザインを描いたものである*：-

“Then we went to the garden glorious
Like to a place, of pleasure most solacious
With Flora painted and wrought curiously
In divers knottes of marveylous greatness
Rampande lyons, stode by wonderfly
Made all of herbes, with dulset swetenes
With many dragons, of marveylous likenes
Of diuers floures made full craftely
By Flora couloured, with colours sundrye.”

そして我われは栄光に満ちた庭園へと向かった
最も官能的な喜びの場所にも似て
女神フローラが繊細に描かれ加工され
驚くほど見事に咲き乱れる結び目花壇には
ライオンが後ろ脚で美しく立ち上がる
すべてハーブで作られ、心地よい甘さを放ち
多くのドラゴンが、驚くほど本物のように
色とりどりの花で技を尽くして作られ
様々な色で彩られたフローラの横に

*『大いなる愛と美しき乙女との物語、楽しい気晴らし』ステイーヴン・ホーズ 編 1554年 [騎士の教育のための寓意詩] *The Historie of Graunde Amoure and la bell Pucell, called the Pastime of Pleasure.*

Stephen Hawes

以下に列記する花の数々は、チューダー朝時代の結び目花壇やボーダー花壇 [帯状に細長い花壇でイングリッシュガーデンの特徴の一つ] で栽培されたものであり、当時の作家により取り上げられたものである。アカンサス [ハアザミ] *acanthus*、ツルボラン *asphodel*、プリムラアウリキュラ [アツバサクラソウ] *auricula*、アマランス [イヌビユ] *amaranthe* or “blites” [*Amaranthus blitum*]、バachelor’s buttons、ヤグルマギク [blue bottle という別名もある] *cornflowers* or “bottles”、カウスリップ [キバナノクリンザクラ] *cowslips*、ラップスイセン、デイジー、「フランスエニシダ」*French broome*、ジリフラワー類 3種 *gilliflowers*、タチアオイ *hollyhock*、アイリス、ジャスミン、ラベンダー、ユリ、スズラン、キンセンカ、スイセン (黄色と白)、サンシキスマイレ *pansies*, or *heartsease* [RHS では *wild pansy* または *heart’s ease*]、シャクヤク、ツルニチニチソウ *periwinkle*、ケシ類、プリムローズ *primrose*、ハナダイコン *rocket*、バラ、ローズマリー、キンギョソウ *snapdragon*、ストック [アラセイトウ] *stock gilliflowers*、アメリカナデシコ [ビジョナデシコ] *sweet william*、ニオイアラセイトウ *wall flowers*、ホオズキ *winter-cherry*、スマイレ、そしてこれらのほか、ミントやマジョラム *marjoram* などの甘い香りのするハーブがある。

さてチューダー朝時代の庭園の主な特徴、すなわち柵で囲われた花壇、結び目花壇、高台、あずまや、そして展望回廊について概観してきたが、ここからはどのような庭園が造られたかだけでなく、この時代の前半において存在していた古い庭園はどうなったのか、について考えることとしよう。これまでの章において、修道院の庭が全国各地においてどういう立場に置かれたかについては若干見てきたところである。今私たちは宗教改革の時代に至り、この大きな運動が庭に影響をどのように与えてきたか、その展開をさっと見ておかなければならない。修道院に対する立入検査とそれに続く弾圧は 1534 年に始まった。規模が比較的にな大きな修道院が最初に攻撃され、続いて小さいものに移っていった。この動きは素早く次々と実行され、1536 年、北部地区では 88 の修道院が 2 週間のうちに通報され*、202 の修道院は 1538 年から 40 年の間に弾圧され、あるいは降伏した。

*ガスケット『ヘンリー8世とイングランドの修道院』*Gasquet, Henry VIII. and Eng. Mon.*

[ヘンリー8世による] 修道院解散 [Dissolution, 1536~41年] の時点では王国全体にわたり 700 を超える宗教施設が点在していた。これらの修道院のすべてがそれぞれに庭を所有していたとは言えないのは、町中にあったものはスペースが極めて狭かったのと、修道会の中には農業にまったく関心のないものもあったからだ。数から言うと、ベネディクト修道

会とシトー修道会が圧倒的であり、多くの場合、彼らは大地主であり、自分の土地を持った農民であり、園芸の技術に優れていた。しかし、ファウンテンズ [遺跡は世界遺産]、ジェーヴォーズ、またはネトレイ、グラストンベリー、セントオールバンズ、またはウィットビーその他立派な修道院や威厳のある修道分院の庭はどれ一つ残っていない。時には、庭に関する記録が残されている場合もあるが、これは立入検査に来て価値のあるすべてのものを収用してしまった王室の役人の手によるものであった。オックスフォードではアウグスティノ修道会の修道士が木を全部切り倒してしまったことを役人たちは悔やんだが、フランシスコ修道会は「肥沃な土地、森林と可愛いらしい庭」を所有していた。ウェイヴァリーのシトー修道会の修道士たちは当時大変貧しくて、大修道院長は「彼の修道院の資産が依拠している農業の調査をすること」の許可を与えられた。古い修道院の庭の面影はほとんど残されていない。ウェストミンスターには立派な庭があり、そこはダムソンの木が有名で、病院の横の庭では病人の修道士たちが散歩できた。この一部はカレッジ所有の庭園の中に残っているが、前世期の初めに新しいカレッジが建設された時に、そのいくばくかは建築敷地になってしまった。エリザベスが即位した時、大修道院長のフェクナム [John Feckenham, 1515 頃~84 年] を呼出した。彼はメアリー [1 世 在位 1553~58 年「流血のメアリー」] の治世の時にウェストミンスター寺院に復権を果たしていた。彼は召喚を受けた時、庭にニレ elms の木を植えていたところであり、その仕事を終わる前に女王の前へ出た。院長は囚われの身のまま生涯を終え、彼の修道院は間もなくカレッジへと作り変えられたが、その植えたニレの木、その子孫は今日まで残っている。

古い修道院の中庭があったその場所で、破壊を免れ、現代の庭園に生き続けているものの中で一番多いものは養魚池である。ただし、これらの池は厳密に言うと、修道院の庭の一部をいつも構成していたとは言えないものであった。しかしながら、それは有用であると考えられ、風景庭園の庭師たちによってさえも、壊すよりは手を加えようということで残されることが多かった。サイレンセスターにある現在の教区教会は見事な建物だが、その横にある大修道院の教会は、その昔、あまりにも大きくなりすぎその建物を覆い隠すまでになってしまった。そうであったのに今や大修道院の教会と隣接する建物群は完璧なまでに消え去ってしまい、修道院時代のほとんど唯一の痕跡は、同じ敷地に建てられた家の敷地にある小さな水たまり、昔の養魚池の名残だけになってしまった。ハーリー・オン・テムズ川では、修道士の魚の生け簀は現存しており、また 1 マイルしか離れていないビシヤム大修道院では、庭は 3 方が堀で囲まれ、修道士たちの時代の遺跡となっている。ヨークシャー州のハックネスでは、修道士の池は今は湖に作り変えられたが、ノッティンガムのニューステッド大修道院では池がそのまま残されている [第 1 章図 1-5 参照]。イチイの古木の影が落ちる生け簀があり、その水は疑いもなく黒衣托鉢修道士の時代から生き延びてきたものである。水底からは真鍮製の鷲の聖書朗読台が発見された。そこには修道院に関する貴重な事績が多く刻まれてあり、修道院解散の時に修道士たちによってそこに隠されたものであった (31 ページ図参照 [本訳 29 ページ])。シュロプシャー州のハットング

レインジでは、ビルドワズ大修道院の独居房があった場所に、修道士により作られた当時のままに池も残されている。そこの4つの池は大修道院長、煉獄、地獄、そして水浴びプールという昔の名前を今に残している。これらは一連のもので、幅広い土のダムにより区切られ、地中深く掘られて、土手は急斜面となっている。このようにして最初に造られた庭は消え去ったが、修道院の土地は当時の名門一族へと与えられた。これらの土地が現世の人々の手に渡ったことにより、堂々とした館が建てられ、そして以前とはまったく違った性格ではあるが美しい庭園が造られ、昔の大小の修道院があった場所を今美しい景観としているのである。ウォーバン [17世紀にベッドフォード公爵のために改築、造園家レプトンによる鹿園がある]、ウェルベック、バーリー [セシル家の大邸宅]、サイオン [ノーサンバランド公爵の旧邸]、バトル、ビューリ、ラムゼー、オードリーエンド、そのほか多くのものがこれに含まれる。

サリー伯爵 [Henry Howard, 1517?~47年 ソネットの父と言われる詩人] は、ノリッジ近くの聖レオナルド修道院があった場所に館を建てその周りに広大な庭園を造り、そこをサリーの山と呼んだ。この頃になると、いくつかの共有地で囲い込みが行われた結果、かなりの暴動が起き、1549年にはサリーの山のリンゴ園の木がすべて切り倒され、テントや小屋を建てるために使われた。この例は、宗教的施設があった場所に設計された重要な庭園の最も初期のものの一つであり、ほかの多くの新しい所有者たちがこの真似をするようになるのは、ガーデニングを楽しむ趣味がさらにずっと一般的になる次の世代になってからであった。

ハンプトンコートについては、チューダー朝の庭園の特徴を述べた箇所でも、既に触れたところである。これらの庭園を造るにあたって要した費用に関しては、ウルジー枢機卿とヘンリー8世の指示のもと、完璧な形で会計簿が残されているので、正確な計画というものとはわからないものの、それらがどのようなものであったかについては、極めて明確な姿というものを浮かび上がらせることができよう。ウルジーが建物用、庭園、狩猟地（パーク）として確保した土地は2000エーカー [約800ha] に及んだ。この土地の南西の角には古い荘園の館があったが、枢機卿はその周りに庭園と果樹園を配置し、そこを煉瓦の壁で仕切って、壁の外側には狩猟地を設けた。彼は荘園の館の庭園の一部を残しておいたが、これは「古い庭園」として何回か出てくることからわかる。この当時、ジョン・チャップマンが庭師頭で、1529年に枢機卿が失脚させられその土地を国王が自分のものにした時にも、年収12ポンドの給料でその地位に留まった。この庭園はその後もなく大幅に拡張された。新しい果樹園が古い庭園の北側に造られ、梨、ダムソン、セイヨウカリン、サクラランボ、リンゴ、キュウリ、メロンが栽培され、43ブッシュェルのイチゴが一度に植えられた。女王にバラを届けるためにフラワーガーデンがあり、キッチンガーデンでは「国王の食卓用のハーブ」が栽培された。これらの庭園の一部は1533年に新しい庭園が造られた時に取り壊された。そしてその土地には肥料がまかれ、慎重に測った上でいくつかの区画に区分され、それぞれが煉瓦の壁によって囲われた。一番大きな区画が国王の新庭園であ

り、そこは今「王室専用庭園」“Privy Garden”と呼ばれている。ここには砂利が敷き詰められた園路、そして小高い盛り土の上には日時計が置かれ、園路と園路の間には、柵で囲われた花壇が芝生の中に作られた。柵にはバラが絡まり、イチイ、イトスギ cypress あるいはセイヨウネズ juniper の木が各花壇の中央に植えられた；一方、壁沿いにはリンゴ、梨、ダムソンの木が植えられ、その下には「スマレ、サクラソウ、アメリカナデシコ、ジリフラワースリップ gillifer slips、ミント、その他甘い香りの花」が咲き、さらにこの庭園の中には高台とあずまやが設けられた。もう一つの区画は「池の庭園」であり、そこには池だけがあったようで、飾りと言えば「動物」のみ、なぜならそこに花が植えられたとは一言も書かれていないからである。



PICTURE AT HAMPTON COURT SHOWING THE RAILED BEDS AND BEASTS.

[図5-7] 絵画 ハンプトンコート所蔵 柵で囲われた花壇と動物を描写

また「小さな庭園」というのもあり、67本のリンゴの木が「ロンドンの商人、庭師ウィリアムから1本6ペンス」でこの庭園用に購入されたということ以外、あまり知られていない。ハンプトンコートに関し、ほかのすべての庭園と際立って違っている特徴として当時私たちが知りうるものがあるとするれば、それは「動物」と「日時計」である。「風見」が彫られた動物、そして真鍮製の日時計は庭園と果樹園の至る所に置かれていたようである。動物は柵で囲われた花壇に沿って一定間隔で置かれるとともに、高台の周りと池を一周して置かれ、これらに関する記載は会計簿の中に極めて頻繁に出てくる（*ヘンリー8世第25年（1533年）王室会計文書、国庫歳入、その他事項帳簿 No. 238）。

「加えてウェストミンスターの時計屋ブライス・オーガストンに対する支払い、国王の新庭園用の真鍮製日時計を20個製作分、1個4シリング4ペンスで4ポンド6シリング8ペンス。－国王の新庭園用の木彫りの動物を製作分、－キングストンの石工エドモンド・モアに対する支払い、国王の新庭園に設置する国王と女王の動物159個の切り出し・成形・彫刻する費用として1個20シリング・・・159ポンド」

（1530年）「ウェストミンスターの時計屋アントニー・トランスイリオンに対する項目、王室専用果樹園に置く日時計7個を購入分、1個4シリング4ペンスで30シリング4ペンス－王室専用果樹園の柱の上に動物を置く建具屋ヘンリー・カーラーに日当8ペンスで4シリング；ジョン・カーペンターに日当6ペンスで3シリング。王室専用果樹園の国王の動物の塗装代・・・そのいくつかは国王の紋章をつけた風見を持っている」

（1534年）「国王の新庭園の動物を金メッキし塗装する費用－ロンドンのヘンリー・ブランクストンに対し（以下の各種合計）、雄ジカ11頭、ライオン13頭、グレーハウンド16頭、雌ジカ10頭、ドラゴン17頭、牡牛9頭、アンテロープ13頭、グリフィン〔ワシとライオンの姿をした怪獣〕15頭、ヒョウ19頭、ヤーレ yalys 11頭（別の箇所では jalls 2頭）、雄羊9頭、および高台の頂上にライオン1頭、加えて風見」〔訳注〕ヤーレとは角と牙を持つ架空の動物。

（1535年）「前述のあずまや（＝南と西のあずまや）の項目として、国王と女王の副紋章25個、価格は1個3シリングで3ポンド15シリング。同じあずまやの項目として、国王と女王の紋章8個、価格は1個4シリングで32シリング。キングストンの彫刻師ハリー・コラントに対する支払い、国王と女王の動物38個を加工が容易な軟石を使って製作、設置する費用として、1個26シリングで49ポンド8シリング。これらの動物は国王の紋章と女王の紋章がついた楯を持っており、言い換えればドラゴン4頭、虎6頭、グレーハウンド5頭、雄ジカ5頭、アナグマ4頭が池の庭の中の池の周辺に並べられた。」

今日見られる「池の庭園」の噴水は、数多くの動物が並べられていた「池の庭園」のおそらく名残であろう。ヘンリー8世の時代にはこの池にはいささか風変わりな方法で水が供給されていたが、それは会計簿に「夜中にテムズ川から水を引いて池を満杯にする労働者に対する」代金が記載されていることからわかる。

このほかにも王室の庭園はいくつかあり、そのために購入された物や、庭師たちの賃金に関する項目がヘンリー8世の国王手許金の支出1530－32年、およびメアリー女王の

1536-37年に出てくる。グリニッジのことが会計簿にはしばしば書かれており、ヘンリーと娘たちにとってお気に入りの夏のリゾートの一つであったようである。支払いは主にウォルシュという名の庭師頭に対してなされ、これは「草取りと穴掘り」および「庭園の中の片づけ」作業をした労働者の賃金であった。この庭園は、グロスター公爵ハンフリーにより宮殿が建てられた時には、おそらく既に造られていたと思われ、それはヘンリー6世の治世の初期で、当時この宮殿は「プラセンシナ」とか「プレサンス」という名称で通っていた。1519年当時、その庭師頭はラヴルと言い、年収60シリング8ペンスをもらっていた。その少し後、彼はリッチモンド庭園に転職し、給料は4半期で3ポンドへと上がった。彼は国王の食卓に「ダムソン、ブドウ、ヘーゼルナッツ、桃、リンゴなどの果物、そして花、バラなどのスイートウォーター」を提供した。

ビューリ [エセックスにあるヘンリー8世の宮殿]、別名ニューホールには「小庭園」と「大庭園」の2つの庭園があったようである。小さい方はキッチンガーデンで「国王の食卓」を「ハーブや根菜 roots、イチゴ、アーティチョーク artichoke、レタス、キュウリ、サラダ用ハーブ」で彩った。1532年の大きな庭園の管理人はジョン・リードであった (*国家文書 State Papers, ヘンリー8世 公文書館)。

ロンドン塔の壁の内側の庭園とベイナード城の庭園はヘンリー8世の時代には引き続き維持されていた。会計簿への記載がしばしば見られることから、王室の庭園がワンステッド (ロバート・パーリーが1532年には庭師でいた) (†同書)、ウェストミンスター、ウォルサム、ウッドストック、オウトランズにあったことがわかるが、これらは国王が好んだリゾートに比べるとそのスケールはそれほど大きくはなかったようである。同時代においてはウィンザーは他の王室の庭園に比べると注目されることは少なかった。ウィンザーの庭園は現在ではまったく違った形に改造されてしまったので、昔の庭園がどこにあったかという場所すらはっきりとは特定することはできない。1472年、エドワード4世によりルイ・ドゥ・ブリュのレセプションがウィンザーで開かれた時、それを目撃した人の手になる会計簿がある。彼らは狩りに出かけ、夕方遅く帰ってきた。「その時はすでに夜に近かったのに、国王は自分の愉楽の園である庭園とブドウ畑へと客人を案内し、そして再び城に入っていった」。この庭園とブドウ畑はおそらくヘンリー8世の治世下においては手つかずのまま残っていたと思われるのは、その改造に関することが一切触れられていないからだ。ヨークプレイス、後のホワイトホール宮殿の庭園はウルジーにより特別の趣向で注意深く設計され、ハンプトンコートと同様に、この場所も国王のものとなった。

ヘンリー8世の治世も終わりになる頃、ハンプトンコートの改造を終えた国王は、サリーのユーエルの近くにあるノンサッチの土地の設計と美化を考えるようになった*。カディントン村の土地を1538年に買ってそこに宮殿を建てた：-

“Which no equal has in art or fame 芸術性や名高さにおいて比べようもないもの
Britons deservedly do Nonsuche name.” 英国民にふさわしいその名はノンサッチ

*聖職者の会計簿、ヘンリー8世の第31-32年、No.10 サー・ラルフ・サドラー [Ralph Sadler, 1507~87年 枢密顧問官] は荘園の執事として「庭園、リンゴ園および敷地」“Gardinorum, Pomariorum et ortorum”の管理に対し1日4シリングを受領した。

当時の別の作家は、この宮殿を描いて、このように言った。「宮殿そのものと言え
ば、鹿で一杯の狩猟地から、気持ちのよい庭園、格子垣で飾られた茂み、新緑に包まれた
空間、木々で深く囲まれた小径に至るまで大きく広がっており、それは「健康」とともに
住む場所で偶然に「喜び」と出会ったような場所のように思えた」(ニコルス『エリザベス
女王の行幸』Nichols, *Progress [es] of Queen Elizabeth*)。

ヘンリー8世はノンサッチを最後まで完成させることはなかったが、王のデザインを引き
続き実行したアランデル公爵ヘンリー・フィッツアラン [Henry FitzAlan, 1512~80年 廷臣・
オックスフォード大学総長] の時代までは宮殿は存続した。エリザベス女王、ジェームズ1世
のアン女王そしてヘンリエッタ・マリア [Henrietta Maria, チャールズ1世の妻] はみな宮殿を
訪れたが、長くは滞在しなかった。1650年、議会による宮殿と庭園の調査によると、壁で
囲まれたいくつかの庭園があり、それらは分厚い棘のある生垣で区分され、そして小径や
野原 wilderness、また王室専用庭園、大きなキッチンガーデンなどが存在していた。館の
前には階段状のテラスもあり、「しゃれたボウリング用の芝生」があった。全体的なスタ
イルとしてはむしろイタリア的であり、数多くの噴水と彫像が見られた。チャールズ2世
[在位1660~85年] はこの宮殿をクリーブランド公爵夫人 [Barbara Palmer, 1640~1709年 チ
ャールズ2世の悪名高い愛人] に与えたところ、彼女はそれを取り壊し、さらにその孫グラフ
トン男爵により、木は切り倒され狩猟地は潰され、かつては壮大さを誇ったこの宮殿を完
全に破壊してしまったのである (キカムデン『ブリタニア』ガフ編纂1806年)。

花壇の飾りやレイアウトについては、以上のような進歩が見られつつあった一方、果樹
園およびキッチンガーデンがまったくもって放置されたままということではなかった。既
に広く利用されていた果物に加えて、ほかのものが持ち込まれ、そして元からこの国にあ
ったものには品種改良がなされた。イチゴは広く栽培され、注意深く育てられた：－

“If frost do continue take this for a lawe	もし霜が本当に続くなら普通はこうする
The strawberries look to be covered with strawe	イチゴは麦藁で覆われることになる
Laid overly trim, upon crotchis and bows	きちんと敷いて、枝の分れや垂れたところにも
And after uncovered as weather allows.”*	そして後で天気がよくなれば覆いはずす

*Tusser, *Five Hundred Pointes of Good Husbandrie* *タッサー『農業で成功する500の要点』

次の詩句から、9月の農作業では、どこからイチゴの苗を調達していたかが明らかである：－

“Wife unto thy garden and set me a plot	女房は庭に入り私に小さな場所をくれた
With strawberry rootes of the best to be got.	イチゴの苗で手に入る一番いいものを持って
Such growing abroade, among thornes in the wood	野外に生えている、森の中のイバラの中にある
Wel chosen and picked prove excellent good.”	上手に選んで摘めば、とびっきり上等とわかる

野生のイチゴの苗が集められたのは、一般民衆のためだけではないというのは、既に何回も引用されてきたハンプトンコートの会計簿の中に、国王の庭園用に森から採ってきたイチゴの苗に対し支払いがなされた記載が何箇所もあるからである（↑新しい庭園用のイチゴの苗、スマレ、プリムローズの苗の購入－アレス・ブルーアーとマーガレット・ロジャーズへの支払い8シリング6ペンスは、34ブッシェルのイチゴの苗、プリムローズ、スマレを1ブッシェル3ペンスで採集してきたことに対し。キングストンのマシュー・ガレットへの費目は前述の苗および花を20日間で植え付けたことに対し、1日3ペンスで5シリング）。

ラズベリー [ヨーロッパキイチゴ] raspberryはこの時代までは無視されてきたようなものだったが、現代になってもそんなに広く栽培されてきているようには見えない。ターナー [William Turner, 1509/10～68年 英国植物学の父] は1548年にこのように言っている。「英語ではラスペス raspeses とかヒンドウベリー hyndberies と言われる野生のラズベリー *Rubus idaeus* は、東フリースラント [オランダ北部] の森でとても数多く生い茂り、……イングランドのいくつかの庭園でも栽培されている」、そして続けて「その味は酸っぱい」とも言う。1516年にはヘンリー8世の庭園のいくつかでは植えられていた。グーズベリー [セイヨウスグリ] gooseberry は初期の庭園には出てこないが、この時代になると栽培されていた。1516年にはヘンリー8世の庭園のうち何箇所かでは植えられていた。ターナーはそれを「グロウザ groser [グーズベリーの方言] の茂みとかグーズベリーの茂み」と呼び、グーズベリーについて「私がイングランドで見たことがあるのは庭園の中でだけであるが、海外のドイツでは外の茂みの中の野原で見たことがあった」と言っている。この一節が奇妙に思われるのは、以前よりグーズベリーがはたしてこの国に自生している植物かどうかをめぐって、しばしば議論されてきていたからである。タッサー [Thomas Tusser, 1524頃～80年 詩人・農民] はこれは9月に植えるべきだと述べている：－

“The Barbery, Respis, and Gooseberry too	バーベリー、ラズベリー、そしてグーズベリーも
Looke now to be planted as other things doo.	今がその植え時か、そのほかのものと同じように
The Goosebery, Respis, and Roses, al three	グーズベリー、ラズベリー、そしてバラ、この3つは
With strawberries vnder them trimly agree.”	その下のイチゴときれいにお似合いで



[図5-8] 庭園の古い壁沿いのアプリコットの木 リトゥルコウト

栽培されている果物の仲間として新しく加わったもので何が一番素晴らしかったかと言えば、それはアプリコット [アンズ] apricot で、16世紀半ば以前に持ち込まれたことは確実で、おそらくヘンリー8世の庭師ウルフにより1524年頃持ち込まれたのであろう。ターナーはその2つの著作において、アプリコットについて *Malus Armeniaca* の名称で取り上げ、英語名として Abrecok、あるいは Abricok と名付けた。もっとも自分としては「早生の桃 *an hasty peche* という名称の方がより適切で、ふさわしいと思うが、この木は広く知られているから、どういう名称にしたらよいかについてはあまりこだわらない」として、その考え方は変えなかった。彼がこのような名称を付けた理由は、この果物が桃よりもずっと早い時期に実るからである。この同じ発想はアプリコットという用語に表れており、それはラテン語の *præcoqua* あるいは *præcocca* に由来している。ターナーは1548年に「わが国においてはこれらの木はまだほんの少数しか植えられていない」と言い、1551年には「この種類の木はドイツではたくさん、イングランドでは何本か見たことがある」と言っている。パークシャーのリトゥルコウトの美しい古い庭園には、この国に初めてア

プリコットの木が持ち込まれた時に植えられと思われ、今もなお実をつける木が2本植えられている。

タッサーは1573年、1月に植えるか移植されるべき果物のリストを書き添えており、そこにはアプリコット、彼の呼び方ではApricocksが含まれている。

そのリストとは次のようなものである。

- | | |
|---|--|
| 1. 各種のリンゴの木 | 17. 各種の梨の木 |
| 2. アプリコット Apricocks | 18. Perare plum (‡ = pear-plum) 黒と黄色 |
| 3. バーベリー [セイヨウメギ] Barberies | 19. マルメロの木 |
| 4. ブリース [ダムソンの一種 bullace]
Boollesse 黒と白 | 20. ラズベリー [セイヨウキイチゴ]
Respis. |
| 5. サクランボ 赤と黒 | 21. レーズン (スグリ的一种か) Reisons |
| 6. 栗 | 22. 小さなナッツ Small nuts |
| 7. セイヨウサンシュユ Cornet plums
(* = cornel plums = cornel cherries) | 23. イチゴ 赤と白 |
| 8. ダムソン 白と黒 | 24. オウシュウナナカマド Seruice の木 |
| 9. ハシバミの実 Filbeards 赤と白 | 25. クルミ |
| 10. グーズベリー [セイヨウスグリ]
Goose berries. | 26. ウォーデン梨 白と赤 |
| 11. ブドウ 白と赤 | 27. Wheat plums |
| 12. セイヨウスモモの一種 [greengage
か] Greene or grasse plums | 28. そしてツゲと月桂樹、サンザシとセイヨウイボタ prim [privet の別名] を植えるとよかろう、小綺麗な生垣用に。 |
| 13. ワートルベリー [セイヨウスノミノ
キ] Hurtillberies († = whortleberries) | |
| 14. メドラー [セイヨウカリン]
Medlars or marles | |
| 15. クワの実 | |
| 16. 桃 白と赤 | |

この時代以前に、庭園の中にレッドカラント [アカフサスグリ] red currants [*Ribes*] の居場所があったかどうかを証明することはできない。と言うのもそういった形ではまったく書かれていないからである；ジェラード [John Gerard, 1545頃~1612年 植物学者 ロンドンに大ハーブ園を所有] でさえ、1597年の時点で、そのような名前では呼んでおらず、「棘」のないグーズベリーのとても小さい仲間、色は真っ赤とその特徴を述べている。ただ、こ

のリストでは、“Reisons”というものが、スグリの何らかの種類を示そうとしているように見受けられる。

タッサーは12月の農作業の中で、果樹園にどのようにして木を植えるべきかについて引き続き述べている：－

“Good fruit and good plentie doth well in the loft	美味しい果物と豊饒の女神は物置の棚で共に過ごす
then make thee an orchard and cherish it oft:	それから汝に果樹園を作り頻繁に世話をする：
For plant or for stock laie aforehand to cast	植えるか蓄えるか 種を撒く前はそのままにして
but set or remoove it er Christmas be past	だがクリスマスが終る前に植えるか移植すること
Set one fro other full fortie foote wide	一つ一つの間は幅 40 フィートを十分に取って
to stand as he stood is a part of his pride”	元あったように植えることで樹木も誇らしげである



[図5-9] 『庭師のための迷宮ガイド』より

果樹園に関しては、その他の大きな変化はなかった。梨の種類の中ではウォーデン梨が、リンゴの仲間では大きなリンゴのコスタード種が依然として重要な地位を占めていた。桃の改良は進まなかった。海外の果樹について語ったターナーは「私の見る限りイングランドで桃は大事な果樹とは言えず、リンゴは熟すれば柔らかくて実が分厚いが外側は黒ずんでくる」と続けた。ヘンリー8世の国王手許金からの支出を見ると、ロング氏の庭

師から国王への桃の献呈が特に記載してあり、国王はその他の機会にも、サクランボ、リンゴ、梨、ウォーデン梨、マルメロ、セイヨウカリン、ダムソン、ヘーゼルナッツ、メロンを献上されて受け取っていた。

花を育てるためだけに別に庭園を造って楽しむなどということは大地主だけに許された贅沢であった。王国内の小さな荘園や農家の庭は基本的には実用のためであった。フィッツハーバートはその著書『農業書』*Book of Husbandry* (1534年)の中で、主婦が一般的にやるべき仕事について列挙しているが、その中に庭のことも忘れずに入れている。「3月初めあるいはもう少し早く、その時期が来たら主婦は庭づくりを始めること、飲み物用と食べるために必要な分の数だけ良い種やハーブを用意すること、そして必要に応じて頻りに草取りをすること、そうしないと雑草がハーブを枯らしてしまう」。これらのハーブはその前の世紀に見られたものとほとんど同じだったが、当時書かれた本には、それまでのリストにはなかったようなものも取り上げられている。そして、アスパラガス、メロン、タラゴン taragon、ホースラディッシュ [セイヨウワサビ]、そしてアーティチョークなどがこの頃王室の庭園で初めて育てられた。タッサーは詩の中で豆 beans とエンドウ豆 peas について何行か書いている。1月には—

“Good gardiner mine	腕のいい私の庭師さん
Make garden fine	庭を上手に作ってくださいね
Set garden pease	エンドウ豆を植えてくださいね
and beans, if ye please.”	それと豆を、もしよかったら

そしてまた

“Dig garden, story* mallow, now may ye at ease 庭を掘って、マローを抜けば、ホッとすることも
And set (as a dainte) thy runciull pease.” そして汝ランシヴァル豆を植える (喜びの印として)
*おそらくリズムをとるためにしばしば使われる表現。すなわち、草取りをする、すなわち普通よくある雑草である野生のマローを駆除する (=weed, or destroy, wild mallow, a common weed)

さらに

“Sowe pease (good trull †)	エンドウ豆を蒔きなさい (よい子たち)
The moone past full	月は満月を過ぎた
Stick bows a rowe	敵に棒の添え木をすること
where runciuals growe”	そこはランシヴァルが育つところ
“Set plentie of bows among runciull pease	ランシヴァル豆の間にたくさんの棒を立てること
to climber thereon, and to branch at their ease.”	ツルがそれに絡まり、枝が楽に広がるように

† = good girl, or lass

これらの引用からわかるのはランシヴァル豆 *runcival peas* が人気の高いごちそうであったことである。それは一種の大きなエンドウ豆で、その名前はピレネー山脈のロンセスバリュース [778年にシャルマーニュ軍が敗れた峠が近くにある村] に由来していると思われる。タッサーは豆の収穫方法についても説明を加えている－

“Not rent off, but cut off ripe beane with a knife 実った豆はむしり取らないで、ナイフで切りなさい
For hindering stalke of hir vegetive life 植物の命の茎を痛めるから
So gather the lowest, and leauing the top そして一番下の豆から集めて、一番上は残して
Shall teach thee a trick, for to double thy crop.” あなたに教えてあげよう、収穫を倍にするコツを

日常生活の中では、庭のために何かを買うということはほとんどなかった。なぜなら毎年毎年、種は貯蔵され、植物は友人の間で分けられ交換されたからだ。

“Good housewife in sommer will saue their owne seedes 賢明な主婦は夏に自分の種を貯蔵する
against the next yeere, as occasion needes 来年のために、それが必要な時期だから
One seede for another, to make an exchange 一つの種を別の種に、近所の人と交換する
With fellowlie neighbourhood seemeth not strange” それは変なこととは見られない

この結果、古い会計帳簿には庭園に種を蒔くために買われた物の記載はあまり見られない。ただし、こんなにも数多くの立派な新しい庭園を造っていたということは、そこを彩るための植物に対する需要を作り出していたに違いない。新しく設計された庭園のために買われた大量の物は、本職の種苗業者や市場園芸業者（マーケットガーデナー）だけが供給できていたのであろう。たとえば、バラの木 500 本、サクラの木 600 本（*ハンプトンコート会計簿）を 100 本当たり 6 ペンスで、というような本数は個人の庭ではとても育てられなかったであろう。

エドワード 2 世 [3 世の誤りか] の治世下におけるロンドンの果物・野菜市場についてはすでに概観したが（†原文 43 ページ参照 [本訳 39 ページ]）、その時以降ガーデニングは大いに進歩し、市場も拡大するとともに、市場園芸業者が何倍にも増加したことは多分間違いないであろう。そして今と同じように市場園芸にとって好適な場所はロンドンのすぐ近郊であったが、そのいくつかは、次の引用を見るとわかるように都市のど真ん中であっても立地していた：－

「ヘンリー 8 世の治世の後半頃、イーストスミスフィールドのポートソーケン区の貧しい人々は境界の外に追い出されて、彼らのつつまじやかな住まいに代わって、賃貸するためというよりは自分の部屋を確保するための家が建てられ、そして残った空間はコースウェイという庭師により、市場にハーブや苗を売るための庭が造られた」（キストー『ロンドン概観』130 ページ 1598 年編 Stowe, *Survey of London*.)。

果樹が一番多く供給されたのはケント州テナムの果樹園からであった。それが作られた歴史は『農夫のための実り豊かな果樹園』 *The Husbandman's Fruitful Orchard* (1609年) と題された風変わりな珍しいパンフレットに記されている。作者は不明だが読者への言葉には「あなたの幸福を願う N.F.」とサインされている*。

*ロジャー・ジャクソンのために印刷, ロンドン [ウィリアム・ローソン『新しい果樹園および庭園』1623年に所収]

「ロンドンのリチャード・ハリスという者、アイルランド生まれ、ヘンリー8世の果物栽培者にして、フランスからたくさんの接ぎ木、特にピピン種のリンゴの接ぎ木を持って帰ってきたが、それまではイングランドにピピン種のリンゴは存在していなかった。またオランダからはサクランボと梨の接ぎ木のいろいろな種類を持って帰ってきた：そしてケント州テナム教区にある国王の土地の一画、大きさは約140エーカーの土地を得て：そこに果樹園を設け、外国から持ってきた接ぎ木を全部植えた。この果樹園は外国由来の果物について言えば、ケントおよび各地のすべての果樹園の母と言っても過言ではなく、またこれまでもその時々はその役割を果たしてきた。そして今述べた接ぎ木がフランスおよびオランダから持ち帰られる以前にイングランドにもいくらかは果物というものがあった訳ではないものの、珍しい果物や長持ちする果物という両方が求められていた。オランダ人やフランス人たちは、これらの果物が、特にロンドン近くの地域ではほとんど手に入らないことを知っていて、そのような果物を積んでビリングズゲート [ロンドン中心部、テムズ川北岸の市場] とその他の各地とを船で運ぶのが通例であったが、今では（神のおかげで）接ぎ木の喜びを知った様々な紳士階級等がいて、・・・ハリスが植えた果樹園、それは「新庭園」と呼ばれたが、そこから接ぎ木を持ってきて多くの果樹園に植えることとなった」。

ドレイトン [Drayton, 1563~1631年 詩人 頌詩・田園詩で知られる] が『多幸の国』 *Polyolbion* を書いた時、1619年から22年の間、この果樹園が依然として隆盛を誇っていたに違いないことは、次のようにさりげなく触れていることからわかる。

豊かなテナムはあなたの戸棚をサクランボで一杯にする — 『歌18』

“Rich Tenham undertakes thy closet to suffice with cherries” — *Song XVIII*

この果樹園はサクランボを作っていたと思われ、1540年には1000ポンドの売上があった；当時にすればとてつもない金額であり、この頃の家計簿に、サクランボの普通の価格との比較が書かれているがこれは一つの誇張のように思われる。たとえば、「項目 1549年7月9日、奥様のご指示でサクランボ2ポンド [約900グラム]、4ペンス」、そして再び「1549年7月27日、4ポンドのサクランボ、4ペンス」（+ジョンソン『イングリッシュガー

デニングの歴史』1829年56ページ Johnson, *Hist. English Gardening* フィリップス『果樹園の友』1821年編79ページ Philips' *Companion to the Orchard*).

庭の生産物に対して付けられる普通の値段を見つけることは難しい。それはもちろん季節により、また果物の品質によっても違って来るに違いない。果物を市場に運ぶことは大変だったため値段は高くなった。ある庭師がある果物をたくさん収穫したとして、そう遠くない所で同種の果物に高い値段が付いていたとしても、運搬が困難なため、この果物に対する有利な市場を活用することができないであろう。彼らができる限りの利益を上げた訳ではなかったが、取引においていつも公正であるとは言えなかったので、次のような法律が適用された：－

「(2&3 エドワード 6 世 c.15) 最近、食糧を取り扱う売り手の中には穏当で適正な利得に満足しないで、・・・不適正な価格で食糧を売る目的で互いに共謀、約束する者がいるので、そのような肉屋、醸造業者、パン屋、・・・行商人、果物屋には 10 ポンドの罰金又は 20 日間の拘留及び生命維持に必要なパンと水、再犯に対しては 20 ポンド及びさらし台の刑、3 回目は 40 ポンドあるいはさらし台及び両耳切除の刑」

果樹園数が増加することによりその法的保護が必要になったようであり、もう一つ別の変わった法律が制定された：－ (ヘンリー 8 世の第 37 年 c.6, sect.3.)

「いかなる人も悪意をもって、自ら進んで、または違法に、前述の 5 月 1 日 (1545 年) 以降、国王のいかなる臣民の片方または両方の耳を切除または切除されるようなことをした者は、法律の定める場合、正当防衛の場合、突然の乱闘の場合、予期せぬ事故の場合を除き：(6) または前述の日以降、悪意をもって、自ら進んで、または違法に、いかなる人または人々のいかなるリンゴの木、梨の木、その他果樹の木の皮を剥いだ者 (7) その時は、そのような違反者あるいは違反者どもはすべて、敗訴し弁償しなければならない。弁償の内容は、コモンローに基づき、被害者に対し、そのような一ないし複数の違反行為により生じた損害の 3 倍を支払うとともに、不法侵害行為により [生じた損害を] 原状回復しなければならない。またそれだけではなく、国王陛下およびその承継者に対し敗訴し、違法行為のそれぞれについて罰金として X ポンド・スターリングを弁償しなければならない」

サフランは引き続きよく使われそして市場で売るために育てられ、高値で売られた。ダラム修道院の会計簿には、「クロッカス」あるいはサフランがしょっちゅう出てくる。1531 年 7 月には半ポンド買われた；8 月と 11 月には同じ量が、9 月には 4 分の 1 ポンド、10 月には 1 ポンド半となっている；これらの項目により消費量について大体把握することができる。1539 年から 40 年にかけてサフランについては、ドンカスターのトーマス・フリーマンから買っており、ケンブリッジ出身の商人に対しては、6 ポンド半の「クロッカス」に 7 ポンド 8 シリングが支払われた。1538 年には「ブレイドフォースの市」で買われている。サフランは北部ではまったく栽培されておらず、前述の引用からわかる

ように、東部地域から運搬されなくてはならなかったにもかかわらず、北部の中では同じような値段がつけられた。ノーフォーク州のハンスタントンでは「1536年3月26日、サフラン1オンスは8ペンス、古いサフランは12ペンスした」（*ル・ストレンジ『家計簿』 *Le Strange, Household Books*）。

それは儲かる作物で、東部地域に住んだタッサーは農民に対しそれを忘れないように注意している：－

“Pare saffron plot	サフランの区画を準備すること
Forget it not	忘れないで
His dwelling made trim	サフランの居場所を整えて
look shortly for him	少しその出番を待て
When harvest is gone	収穫が終わったら
then saffron comes on	次はサフランの番だ
A little of ground	小さな土地に
brings saffron a pound” †	サフランが富をもたらす†

† *Five Hundred Pointes Goode Husbandrie.* – August † 『農業で成功する 500 の要点』 – 8 月

庭園の大小にかかわらずその仕事は一人の庭師頭によって監督されていたようである。庭師は庭園に関する物の売買、植付けの担当をしたが、実際の耕作の手作業は日雇いの労働者によってなされ、常勤のスタッフはしなかった。庭師頭のポストは王室のすべての庭園で極めて重要な地位を占めていた。

‡ 1532年－「また前述のエドマンド・グリフィン（庭師頭）により、当該樹木の穴掘り、収集、選別に対し12ペンス支払われた。またこのエドマンド・グリフィンに対し、前述のリンゴの木の運搬に関し15ペンス支払われた」

1530年－「庭師1人日当6ペンス」

1530年－「ジョン・ハットンに対し、国王の新庭園の花壇の造成、整地、および熊手でかき均す作業に関し、日当4ペンスで12日間、計4シリング」－『ハンプトンコート会計簿』

1540年5月8日－「クラストンに対し、ハンスタントンの庭園の草刈りに関し2ペンス」 1543年9月－「庭の穴掘りに4ペンス」

1549年12月10日－「2人に庭園の手伝いとして1週間2シリング6ペンス」ル・ストレンジ『家計簿』

1530年－「4人の庭師に4日間分の支払い－3月18日2シリング8ペンス」－『オックスフォード大学カーディナルズカレッジの収支会計簿』 *A Book of Receipts and Expenses of Cardinal's College, Oxford.*

その賃金は年間約12ポンド以上、労働者への支払いのためのすべての金は庭師頭の手を通して渡された。労働者は日当6ペンス、4ペンス、または3ペンス受け取り、食事付き

の時は2ペンスですらあった。除草は通常、女性の仕事で、3ペンスまたは2ペンスが日当の相場であった*。

*1530年－「庭園と果樹園での労働者5人と除草する15人の女性；」また「除草する20人の女性、労働者2人、草刈り2人」－除草する人の名前のリストが続き、男性は日当4ペンス、女性は3ペンスの受取
－『ハンプトンコート会計簿』

4月23日（1530年）－「2人の女性に対し、庭園の中の役に立たないハーブを根っこから引き抜く作業（*extirpantibus herbas inutiles*）に関し3日間で16ペンス」

6月6日－「マーガレット・ホールに対し、庭園の清掃代として3ペンス」

6月23日－「ジョン・フェリー、作業3日間、10ペンス」

8月19日－「アグネス・ストリンガーへの支払い、作業2日半、7ペンス」

女性の庭師に関する記載がもう少しこれらに続いている：「すべて女性である庭師たち（のための）、パン、飲み物、ニンソその他のものへの支払い、第7週の第2期の支出簿に記載されているとおり、2シリング1 $\frac{3}{4}$ ペンス」－『オックスフォード大学カーディナルズカレッジ』

「除草する3人の女性、6ペンス」－ル・ストレンジ『家計簿』

庭仕事の道具は最も早い頃から大きくは変わっていない。私たちが今使う鋤やレーキはチューダー朝の時代のものとほとんど同じである（†『農業で成功する500の要点』）。タッサーは、次の一節の中で、当時使われていた道具について列挙している：－

“Now set doo aske watering with pot or with dish さて準備をして甕か大皿で水やりを頼みなさい
new sowne doo not so, if ye doo as I wish 新しく種を蒔いた時は別だが、もし私の望むようにあなたが
Through cunning with dible, rake, mattock and spade 種苗用穴掘り具、レーキ、根掘り鋤、鋤で巧みに
by line and by leuell, trim garden is made” ラインと高さを合わせれば、庭は整う

これらの道具の価格については各種会計帳簿より知ることができる。価格は4ペンスから1シリングの間であった。

※ハンプトンコート、1533年3月。項目：国王の新庭園で使う鉄製のレーキ3本、1本6ペンス－18ペンス。項目：同じ庭園用の手斧、6ペンス。項目：新庭園の生垣の刈込み用の新品のナイフ3本、1本3ペンスで9ペンス。項目：新庭園の計測・設定に使う巻き紐6本、12ペンス。項目：鉤型の鎌2個、2シリング。項目：切断用ナイフ2本、4ペンス。項目：レーキ2本、16ペンス。項目：ノミ2本、6ペンス。項目：接ぎ木用鋸、4ペンス。項目：ノーフォークのハンスタントンで使う鋤への支払い、1538年7月7日に8ペンス、また同年12月1日に5ペンス、そして「庭園用の手斧、レーキ、裁断用鉄製器具に10ペンス、1543年3月11日」－ル・ストレンジ『家計簿』

おそらくこれらの道具の多くは手作りであった。フィッツハーバートは1534年『農業書』*Book of Husbandry*の中で「また鋤やレーキはどのように作られるべきか」について

“Good aqua composita, vinegar tart	良い薬用水、酸っぱいヴィネガー
Rose water and treacle to comfort the hart.	ローズウォーターと糖蜜は心を慰める
Cold herbs in hir garden for agues that burne	庭の冷たいハーブは激しい悪寒の時に
that ouer strong heat to good temper may turne.	強い火にかければちょうど良い温度になろう
Get water of Fumentorie, Liuer to coole	フマリア草 [訳注] の水を用意し、肝臓を静める
and others the like, or else lie like a foole	ほかも同じように、でなければ道化師のような嘘に
Conserue of the Barberie, Quinces and such	バーベリー、マルメロなどのジャム
with sirops that easeth the sickley so much.”	病人をととても楽にするシロップを入れて
[訳注] fumitory [カラクサケマン フマリア草 <i>Fumaria officinalis</i>] のことか。ケシ科薬用植物で肝臓などに薬効がある。狂ったリア王がかぶる雑草で作られた冠の最初の植物が fumiter。	

1527年、出版業者と思しき「ローレンス・アンドリュー」[“Laurens Andrewe”, 1510~37年に活動]が翻訳し、『あらゆる種類のハーブ汁の蒸留に関する実用書』*The vertuose Boke of Distyllacyon of the Waters of all manner Herbs* というタイトルの著作を出版したが、それはドイツ語の『ブランズウィックのジェローム』から翻訳されたものであった。それは全体を通じて異様な版面で図解されており、そこには驚くべきレシピが掲載されている。もし主婦がこれに従ったとしたら、病の上に恐怖を重ね、多分、彼女の友人や関係ある人々に対し、善よりも害悪を与えていたに違いない。植物の中で使用が勧められているのが黄色のユリ、紫色のアイリス *floure de luce*、ツルニチニチソウ、テクトラム [ヤネバンダイソウ] *house-leek*、赤と白のバラ、ナルコユリ *Solomon's seal*、ウッドバイン [スイカズラ] *woodbine*、シャクヤク、マリーゴールド [キンセンカ] であり、これらがイノンド *dill*、ワレモコウ *burnet*、セイヨウタンポポ *dandelion* などのハーブと、サクランボ、マルメロ、桃の葉、リンゴ、ナッツといった果物とあわせて勧められた。

ノーサンバランドの第5代伯爵の家計簿(1502年)には次のようなハーブ「蒸留用ハーブ」のリストが掲載されている。「ポリジ、セイヨウオダマキ、ビューグロス [シベナガムラサキ] *buglos*、スイバ *sorrel*、カウスリップ [キバナノクリンザクラ] *cowsloppes*、マツムシソウの一種 *scabious*、ワイルドタンジー [エゾヨモギギク]、ニガヨモギ *wormwood*、エンダイブ [キクヂシャ] *endyff*、セージ、セイヨウタンポポ *dandelion*、そしてコタニワタリ *hart's tonge*」。各家庭のハーブはこの目的だけのために育てられ、これらのスイートウォーターは薬としてまた料理用に使われた。蒸留したハーブはご近所への贈り物としてたびたび交換され、裕福な人々がより貧しい友人たちから「スイートウォーター」、「ローズウォーター」、「バラのシロップ」などのプレゼントを受け取っていたことの記録を見つけることは難しいことではない。同様に花や果物のお届け物も珍しいということではなかった。ティットサルの教区牧師はハンスタントンの大地主に梨とリンゴのプレゼントを届け、「お使いの少年」はそのお使いに対して1ペニーをもらった。別の時に

は「女の子たち」が同じ教区から彼に赤いバラを届けた（*ル・ストレンジ『家計簿』1540年）。ノリッジの司教はバッキンガム公爵にサクランボ一皿を送り、ある5月の日には「カニシャムの4人の少女たちがサンザシのプレゼントを、自分の果樹園の中にいた公爵様に届けた」（†バッキンガム公爵家計簿 Duke of Buckingham's Household Accounts.）。ここでカニシャムのこの4人の少女にまつわる可愛らしいお話をちよつとしてみたくなるかもしれない。それほどの想像力がなくても、このような単純な記録を見るだけで、楽しい光景を思い浮かべることは簡単なことであり、チューダー朝時代の家庭的な田園生活の魅力的なシーンを多数容易に描き出すことができるのである。

第6章 エリザベス朝のフラワーガーデン

“Like a banquetting house built in a garden	庭園に建てられた宴の館のように
On which the spring’s chaste flowers take delight	そこには春の純潔な花たちが咲き喜び
To cast their modest odours.”	上品な香りを漂わす
Middleton, <i>Marriage</i> .	ミドルトン『結婚』

エリザベス女王の治世〔在位 1558~1603 年〕は、イングランドの歴史における黄金の時代であり、数多くの天才が輩出した。天才たちが取り組んだ芸術、科学、産業の多くの分野の中で、ガーデニングの技術ほどこれらの偉大な人々の力から多くの利益を得たものはなかった。ベーコン〔Francis Bacon, 1561~1626 年 近代哲学の祖〕が書いた随想「庭園について」*Essay on Gardens* は広く世間に知られている。バーリー卿〔Lord Burghley, William Cecil, 1520~98 年 エリザベス 1 世首席顧問官〕は、イングランドの最も偉大な植物学者の一人であるジェラードの支援者であったし、我われにとって最も役に立つ野菜であるジャガイモは、サー・ウォルター・ローリー〔Walter Raleigh, 1552~1618 年 探検家・著述家〕がわが国に持ち込んでくれたものである。

〔訳注〕著者が引用するベーコンの *Essay on Gardens* は、正しくは『随想集』*Essays* に収められている 59 の随想の一つである「庭園について」*Of Gardens* である。

この時期、大陸のプロテスタント信者は迫害され、その多くの者がイングランドに安全な避難場所を求めた。これらの人々はガーデニングに関する外国のアイデアもいくつか一緒に持ち込んできたので、園芸の状況を改善する上で助けとなった。

エリザベス朝時代の庭園は、イングリッシュガーデンの古いスタイルとフランス、イタリア、オランダから輸入された新しいアイデアが結びあわされたものであった。その結果、これぞ国民的といえるようなスタイルが作られた。すなわちイタリアやオランダで見られる、運河や養魚池が付いているテラス式庭園の単なる模倣ではなく、この国により適したものとなった。それは昔の姿や習慣と断絶したものでも、突然の変異というものでもなかった。原始的な中世の庭がチューダー朝初期の愉しむための庭園 *pleasure garden* へと成長し、それはゆっくりとして徐々に発展するプロセスをたどった末、エリザベス時代のさらに手の込んだ庭園へと進化した。ここで「整形式」“*formal*”とか「昔風」“*old-fashioned*”が意味するところは何かと言うと、それは今述べたタイプのようなものを指す；ただし、正真正銘のまったく手の加えられていないエリザベス朝の庭園などというものは稀であるから、それは 100 年後に同じスタイルがさらに発展したものを一般的には指すことになり、それが「整形式・昔風イングリッシュガーデン」として知られることになるのである。

この時期の庭園は建物との関係を厳格に考えて配置され、建物のデザインを考えた建築

家が庭園のデザインも考えた。当時最も著名な建築家の一人であったジョン・ソープ [John Thorpe, 1565頃~1655年? 今では普遍的な様式である「廊下」を採用] が描いた、建物とそれと一体の庭園の設計図が何枚か現存している。庭園は建物の単なる付属物、あるいは緑の芝生、小径、花壇がないまぜになったものとは位置づけられてはおられず、庭園をデザインすることは、建物の計画よりもより一層の技術を要するものと考えられた；「[文明が進化する] 人間は庭園を繊細に仕上げるより前に、堂々とした建物を建てるようになる；—あたかもガーデニングにはより完全性が求められるように」(*ペーコン随想「庭園について」)。サー・ヒュー・プラット [Hugh Platt, 1552~1608年 農業、発明に関する作家] の意見 † はルールを明確にしたものとして例外であったようで、ほかのほとんどの作家たちは庭園にとって正しい姿は何かということばかりに説明を費やしていたからである。

† 『花のパラダイス、あるいはエデンの園』 1608年初版 *Floraes Paradise, or Garden of Eden*

彼は「私は読者のみなさんを庭園や果樹園の姿形やスタイルに関する奇妙なルールで煩わせることはしません。長さはどれくらいか、幅は、高さは、花壇、生垣、ボーダー花壇は、どうするかなど。すべての製図家または刺繍屋、いや（ほぼ）すべてのダンス教師がその細かな違いについてわかっているふりをする。それは彼らが求めるとても小さな発明で、そして学ぶことの少ないもののものである」と書いた。

建物の前面には普通テラスがあり、そこから庭園の全体プランというものをざっと見渡すことができるものである。トントンと続く階段と幅広い直線の園路は「直線園路」“forthrights” ‡ と呼ばれ、庭園の各部分を繋げ、また庭園と建物を繋げる役割を果たしている。

‡ . . . “here’s a maze trod indeed

Through fothrights and meanders . . .

Tempest, act iii. Scene 8.

[Scene 3.の誤り]

‡ . . . まるで迷宮です、これは

まっすぐ行ったり、曲がりくねったり . . .

『テンペスト』 第3幕第3場

[小田島雄志訳]

[訳注] 本訳では maze は迷路、labyrinth は迷宮と訳し分けるが、ここは小田島訳に従う。

テラスと並行して小径が設けられ、その間は草が植えられた区画、迷路、あるいは結び目花壇で隙間なく埋められている。「直線園路」は建物の設計に対応して作られたが、花壇と迷路のパターンは建築の細部との調和が図られた。エリザベス朝建築に数多く施されている独特な幾何学模様のトレーサリーと花壇のデザインは対となっていた。「人が一般的に好む形は正方形であり」(*ローソン『新しい果樹園』 1618年 Lawson, *New Orchard*)、この形が「円形、三角形、あるいは長方形」よりも好んで選ばれたのは「それが人の住まいに最も適していたからである」(†パーキンソン)。この正方形の庭園は普通、高い煉瓦か石の壁で囲まれていた。「彼は煉瓦塼で囲まれた庭園を持っている」(‡シェークスピア『尺には尺を』

Measure for Measure, 第4幕第1場)。トーマス・ヒル [Thomas Hill, 1528年頃～, 英語によるガーデニングの著作で知られる] の『庭師のための迷宮ガイド』 *Gardener's Labyrinth* [訳注] および『ガーデニングの技法』 *Art of Gardening* の両方の書物で使われている絵には周囲が杭で囲まれた正方形の庭園が描かれている。『庭師のための迷宮ガイド』に3回出てくる別の図には煉瓦の壁が描かれ；かたや3番目のものは、庭園は生垣で囲まれている。壁をローズマリーで覆う習慣は「イングランドでは極めて広く」行われた (§ヘンツナー『旅行記』1598年 *Hentzner's Travels*)。ハンプトンコートではローズマリーが「壁全体を覆いつくすように植えられ釘止めされた」。ジェラードおよびパーキンソン [John Parkinson, 1567～1650年 薬劑師・植物学者・造園家] はともに煉瓦の壁に向かって植栽を行う習慣について述べている。

[訳注] 本書はガーデニングの基本から、結び目、迷路など造園技法全般に関する手引きである。

ジェラードの名前 Gerard は、彼の書いた植物誌の印刷された書名のところには Gerarde と綴られているが、その序文のサインには e の文字はない。

イングランド北部では、ローソン [William Lawson, 1554年頃～1635年 聖職者・ガーデニングの著作家] によると、庭園の壁は「乾いた土」で作られており、「そこには壁の花や各種の甘い香りの植物」を植えるのが一般的であったとされる。

ベーコンはもっと荘厳な計画を持っていた：－「庭園というものは正方形であることが最善であり、四辺すべてを堂々としたアーチ型の生垣で取り囲む。このアーチは大工により作られた柱の上に設けられ、その高さはおよそ10フィート、幅6フィート、柱と柱の間隔はアーチの幅と同じ大きさにする」。このベーコンの理想的な庭園の「美しい生垣」は盛り土の上に持ち上げられ、そこには花が植えられ、生垣の上には小さな装飾用の小塔(タレット)が置かれ、さらに「鳥かご」のためのスペースも設けられる；「そしてアーチとアーチの間のすべてのスペースの上の方にちょっとした可愛いフィギュアを置いて、丸い色ガラスの大きな皿も一緒に、それは金色で、太陽の光がキラキラと輝くように」。こんな夢のような装飾が施された生垣など普通とはとても思えないが、アーチ型のアーケードのようなものは、既に見てきたところでもあり、ベーコンのまったく新しいアイデアであるなどとはとても思えないであろう。トーマス・ヒル*は庭園をめぐる様々な塀の形について語っている (*『庭師のための迷宮ガイド』1608年)。「乾いたイバラ」“drie thorne”とヤナギでできた木柵は、彼によれば「死んだ、あるいは粗雑な囲い」ということになる。トーマス・ヒルはローマ人が庭園を取り囲むために、屏の代わりに溝を掘ったという事例を取り上げているが、「一般的な方法」は「自然な囲い」、すなわち「美しく作られた白イバラ」の生垣であった。これは「まじめにやれば数年で十分に分厚く強靱に育つので、庭園の扉以外からは誰一人として敷地の中に入ってくることはできない；とは言え、種々様々な庭園の敷地では、生垣はセイヨウイボタ privet の木で縁取られている。この木は抵抗力が極めて弱い、最近では毎年頭と横の両方を剪定してやればより強くできる」とされた。彼は生垣の植栽について賢い方法を教えてくれている。庭師は野バラ、キイチゴ brambles、

白イバラ、グーズベリー、バーベリー [セイヨウメギ] *barberries* の実を集めてきて、その種を穀物の粉を混ぜたものの中に入れ、春が来るまでそのまま保存しておく、その場所は古いロープの中、すなわち「長くて使い古したロープで・・・完全に腐っているようなものの中に」。「それから春が来たら、鋤でつけた 2 本の畔の溝にそのロープを埋め込み、その深さは 1 フィート半、間隔は 3 フィートとする。・・・このようにしてきちんと埋められた種は 1 か月そこら以内に芽を出し、」 - 「それは数年もすれば庭園や耕作地にとって極めて強力な防護壁になるであろう」。このような作業を行う昔の庭師たちは自分たちのやり方を完全に信じ切っていたので、その作業に関して何か失敗するかも知れないなどという心配の欠片を見つけることなどほとんどあり得なかった！

イチイ *yew* の木は生垣として使われることも多かったが、外回りの囲いより、庭園の中の園路や隠れ家に使われる方が多かった。大きめの庭園では壁に 2、3 箇所、門が作られており、それは上手なデザインで、見栄えのよい石の柱の頭にはボールあるいは持ち主の紋章が置かれ、そして手の込んだデザインの錬鉄製のゲートが付けられていた；さもないければメインの玄関に見事な門が 1 つ設けられ、その他の門は小さくてあまり目立たないもので、単なる「木戸」“*a planched gate*” (†『尺には尺を』, 第 4 幕第 1 場)、すなわち「小さなドア」であった。庭園の最も基本的な原則は依然として「中庭」“*garth*”、囲い地 *yard*、あるいは囲われた土地 *enclosure* ということであった；実際のところ、囲われていない庭園というような考えは、まだ人々の心の中に生まれてこなかった。しかしながら、庭園が高い壁で囲まれていたため、内側の人たちは壁の外を見てみたいと思うようになり、テラスというものが考え出された。中世の時代にも見られたように、壁の向こうを見下ろせるポイントとして、壁の中に小高い所がある；そして今や我われは、高台の上からの限られた眺めでは満足しないで、壁の向こうの狩猟地と壁の中の庭園を広々と眺めるために、壁の四角形の一辺に沿ってテラスが嵩上げされた、そういう時代に到達したのである。サー・ヘンリー・ウォットン [Henry Wotton, 1568~1639 年 イングランドの詩人・外交官] は、「庭園へ最初に入る所がテラスのように嵩上げされた園路で、そこから眼下に全体の設計が幅広く見渡せるような、そんな庭園に行ったことがある」と言っている。ドゥ・コー [Salomon De Caux, 1590~1648 年 造園家・建築家 ユグノー派でフランスから帰化] はウィルトンにあるベムブルック伯爵の庭園のデザイナーであったが、そのテラスの設計にあたって、「じっくりこれらの場所を見ることができるようにはテラスを作った」(*『ウィルトンの庭園』ドゥ・コー 1615 年 *Le Jardin de Wilton*)。もう一つ別の事例としては、1575 年ケニルワースの庭園が「城壁にぴったり沿って気持ちのよいテラスが高さ 10 フィート、幅 12 フィートの大ききで作り上げられ、さらに足元には瑞々しい見事な草地在」と描かれている†。

†ロバート・レイナム, ケニルワース城の壮観さを描写した手紙 1575 年

シーヴキング著『庭園賛歌』からの抜粋 1885 年 *Praise of Gardens*, Sieveking

テラスというものは原則として幅広く見栄えのよい形をしており、その端あるいは真ん中

に石の階段が設けられている。そして庭園よりも高く、傾斜した草の土手、または煉瓦、石の壁により嵩上げされているものである。ノーサンプトンシャー州のキルビーでは、荘厳なエリザベス朝の建物、それは今や急速に荒廃しつつあるが、かつて「数々の種類の植物により飾られ」[‡]、その美しさを誇った庭園の名残と言えばテラスだけで、それは庭園の西側の壁の全長にわたり続いている。そこには今はジャガイモが植えられ、そこから見渡せた庭園は今や単なる牧草地である。

[‡]モートン『ノーサンプトンシャーの自然史』1712年 Morton, *Natural History of Northamptonshire*

スペンサー [Edmund Spenser, 1552頃~1599年 詩人] の『時の廃墟』 *Ruins of Time* 中の詩行は、もし彼がこの庭園の現状を見ていたとしたら、この庭園について書いたのかも知れないと思えるくらいである。

“Then did I see a pleasant paradize	そして私は心はずむパラダイスを見たのだ
Full of sweete flowers and daintiest delights,	甘い香りの花と最高に優美な喜びで満ちた
Such as on earth man could not more devize;	人間がこの世でこれ以上創造できないようなもの
With pleasure’s choyce to feed his cheerful sprights.	人の明るい気持ちを高揚させる愉楽の方法で
Since that I sawe this gardine wasted quite,	この庭園がひどく荒廃してしまったのを見たから
That where it was scarce seemed anie sight;	昔あった場所にその面影はほとんど見られないから
That I, which once that beautie did beholed,	かつて私は、その美しさを心ゆくまで眺めたから
Could not from teares my melting eyes with-holde.”	私の悲しむ眼は溢れる涙を抑えられなかった

ドレイトンには、エリザベス朝の建物、これはキルビーと同じ州にあるものだが、ここでは建物の正面のテラスと同様に、幅広いテラスが庭園の外の壁に対して作られており、それぞれの端には夏のあずまや（サマーハウス）が設けられている。このほかにもテラスの実例というものは存在している。

「直線園路」、すなわち庭園のデザインの中心的なラインを形作っている園路は「ゆったりと美しかった」。ベーコンは高台に上ることができるこの径の横幅についてこのように書いている。それは「4人が横に並んで歩ける十分な」幅があり、さらにメインの園路は広くて、ゆったりとした幅があり長く伸びる径は「砂利、砂または芝」で覆われている（*ローソン『新しい果樹園』1597年 *A New Orchard*）。園路には2種類あって、一つは庭園の中で頭上に何も無いオープンな場所で、路の両側に幾何学模様の花壇が配置されたもの、もう一つは囲われている園路で、背の高い剪定された生垣の間を通るものであったり、庭園を囲うメインの壁と生垣の間を通るものである：このほかにも、「覆われた園路」とか「木陰の小径」というものがあり、これらは頭上に樹木がアーチ状に組まれているものである。園路の中には、芝生が敷かれたものや甘い香りのするハーブが植えられているものもある。「空気をこれ以上ないほど心躍らせる香りで包むものは3つある。それはワレモコ

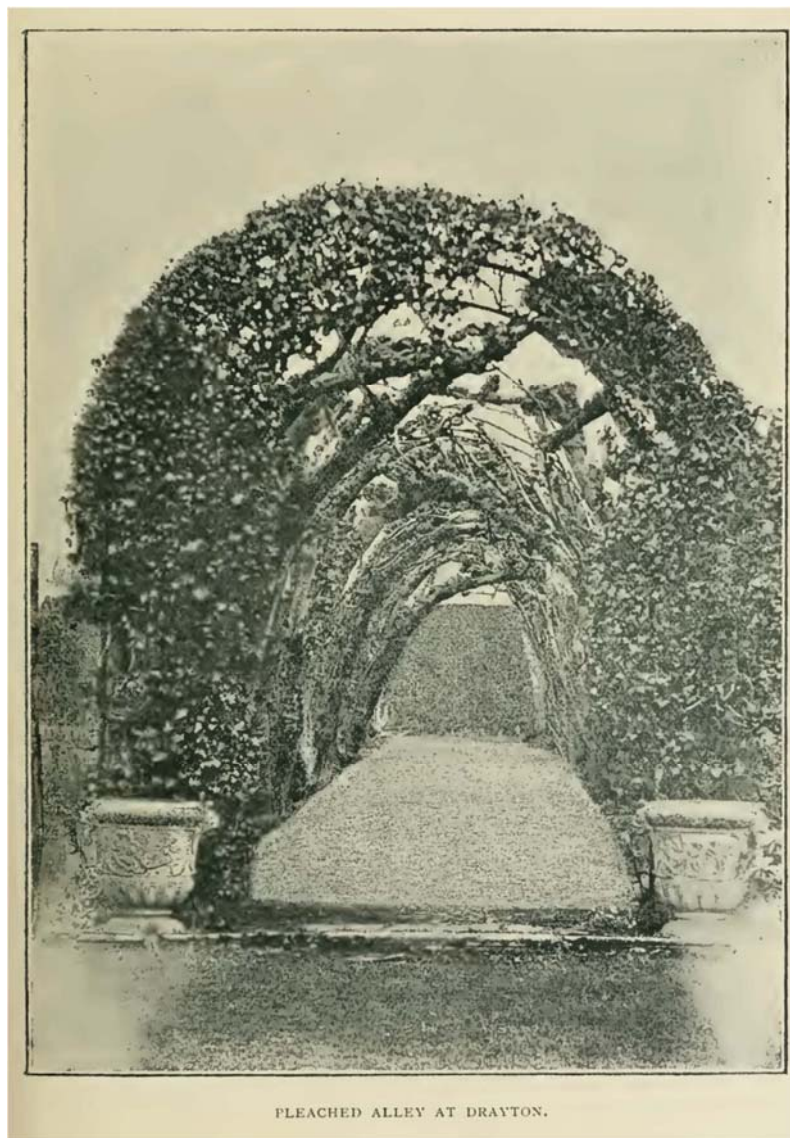
ウ burnet、ヨウシュイブキジャコウソウ wild-thyme、ウォーターミント [ヌマハッカ] water-mints である。ほかの植物が踏まれることなく通り過ぎて行かれるのと違って、これらは踏まれて潰されていくのである；だからあなたが歩いたり踏んだりして楽しむためには園路全体にこれらの植物を植えなければならない（※ペーコン「庭園について」）。シェークスピアの一節、『ヘンリー4世第1部』第2幕第4場から察するに、カモミールも同じような使われ方をしていたようである。ファルススタッフの台詞「なるほどカミツレ chamomile の草は踏まれれば踏まれるほど早く成長する；だが青春という時は浪費すればするほど早く枯れしぼむものだぞ」[小田島雄志訳]

これに対し、「近い方の園路はできるだけ丁寧に砂利を敷かなければならず、濡れるから草は植えない」（※ペーコン「庭園について」）。トーマス・ヒル（§『庭師のための迷宮ガイド』）が書いたところによると、「庭園の敷地の園路、踏みつけられた小径であっても、きっちり3から4フィートの幅になるように平らにされ、これらは川砂か海砂がきれいに撒かれている場合もあるが、それは、降ってきた雨のシャワーで、足に泥が飛んだりついたりして歩いている人が（その時に）困らないようにするためである」。パーキンソンも園路については一言あって「小径や園路が美しくまた大きいほどあなたの庭園は気品あるものになるであろうし、ハーブや花の横を通り過ぎる時、小径の横に植えられている植物の受ける被害も少なくなるであろう。またそうすれば草取りの人たちが花壇と小径をよりきれいにしてくれるであろう」と言っている。

園路の両側にある生垣はいろいろな種類の植物から作られている。すなわち、ツゲ、イチイ、イトスギ、セイヨウイボタ、イバラ、果樹、バラ、野バラ、セイヨウネズ juniper、ローズマリー、セイヨウシデ hornbeam、セイヨウサンシュユ cornel、「セイヨウオニシバリ」“misereon”、ピラカンサ pyracantha である。「誰でも自分の一番好きなものを使えばよい。セイヨウイボタだけでもよいし、スイートブライアーと白イバラと一緒に組み合わせられているものとか、そしてそれらの間にバラを1種類、2種類、それとももっとたくさんの種類を、ここに、あそこにと置いていく・・・人によってはセイヨウサンシュユの木を植え、枝を組み合わせる、あるいは生垣を作るために低くしておく；そして、低くて棘のある常緑の木、ラテンピラカンサを持ってくる人もいる」（*トーマス・ヒル『庭師のための迷宮ガイド』）。イトスギについて、パーキンソンはこう書いている：「この木が有する美しい姿形と、あわせて樹冠が常緑であることから、海外と国内の両方において、ゆったりとした園路の両側に一列に植えることは大変重要なことであり、今までもそうされてきた。この木は上に高く伸びるが横にはほとんど広がらないので、間隔を開けないで植えられなければならない。そうすれば快適で心地よい木陰を作ってくれる」。ジェラードも同じ木について書いて：「イトスギは同様にイングランドの様々な場所で育っており、ロンドン近くの、尼寺であったこともあるシオンという場所に植えられたし；またグリニッジやその他の場所でも育った；同様にハムステッドでは、女王陛下の枢密院書記の一人であるウェイド氏の庭園に植えられた」と言っている。

園路および小径の多くは「アーチ型天井かアーチ型植物により木陰が作られていた」(†同書)。ベーコンは「これらの枝組みされた小径」あるいは「覆われた」園路の目的についてこのように説明している。「しかし小径は長く続くであろうし、また1年あるいは1日の中でとても暑い時に、日差しの中を緑地を通して庭園に木陰を求めに行くようなことはするべきではないことから、木陰を通して庭園に出ることができるよう、高さ約12フィートの、大工が作った枠組みの上を植物で覆った小径を作る(べきである)」。『から騒ぎ』*Much Ado About Nothing* の中でアントニオがドンペドロとクラウディオが歩いているのを見た「分厚く枝組みされた小径」は、これと同じようなものであった。この「枝組みする」“pleach”という用語、あるいは“plash”、“impleach”はフランス語の「(生け垣を厚くするために枝などを)押し込む」“plessier”、“plexum”に由来しており、編む、包み込む、あるいは編み込むという意味である。これはシェークスピアにより、この場合のように、木を切って絡みあわせるという意味だけではなく、編んだ髪という意味でも使われている。『恋人の嘆き』*A Lover's Complaint* の中には「その髪はねじられた金属で艶めかしく編み上げられていて」と、そして『アントニオとクレオパトラ』*Anthony and Cleopatra* では、折りたたんだ腕のことを「腕を組み悄然と頭をたれ」[小田島雄志訳]とある。

これらの木陰の園路を作るために使用された植物は、ヤナギ、ライム、セイヨウニレ wych-elm、セイヨウシデ、セイヨウサンシュユ、セイヨウイボタ、白イバラであった。加えて「大きなカエデ、すなわちサイカモアカエデの木はわが国で大事に育てられているのは果樹園、あるいは木陰のある園路に限られ」・・・「この木は要するに木陰の園路のために植えられているのであり、私の知るところでは我われにとってほかのためには使われていない」(*パーキンソン『楽園』*Paradisus*)。ハンプトンコートに残っている小径の木はセイヨウニレである。ティオボルズでこの木が主に使われていたのは「一番端まで歩くと2マイルあるような散策路」というような小径であった。ノーサンプトンシャー州のドレイトンには、アーチ型枝組みの小径の代表例が2つあり、それを形作っているセイヨウニレのコブだらけの幹は、時代の証人となっている。覆いのついた小径は木製の格子垣で作られていることがあり、そこにはつる植物と一緒に植えられ、それは初期の時代に見られたものと同様に、「展望回廊のように作られ」、「全体に広がっているブドウや何か別の嬉しくなるような木で覆われている」(†ヒル『庭師のための迷宮ガイド』)



[図 6-1] ドレイトンのアーチ型枝組みの小径

高台は庭園にとって依然として重要なアクセサリとなっていた。これは憶えておかなければならないことだが、ベーコンが「真に王侯貴族にふさわしいと言える（庭園）について語る」時、高台についてはこのように描いている。「私が望むものは、真ん中に美しい高台があって、そこには3箇所上る場所があり、小径は4人が横に並んで歩けるくらいの幅がある；それは完全な円で土塁とか張り出しとかは一切あってはならない；そして高台の高さは30フィート、上には立派な宴の館（バンケットハウス）が設けられ、煙突がすっきりと立っている」。このような宴の館は何か特別な場合のためだけに作られることが多く、いつまでも残るものとの印象を醸し出すためにツタや常緑植物で飾られた。当時は壮観さを喜ぶ時代であり、このような見せ方に対する背景となっていた。このことは、同じ見せることへの愛着が創造し発展させつつあった美しい庭園よりもさらに強くここに表

れていた。何か催し事や「祝宴」があれば、お客様をお迎えするために庭園の中のあずまや、あるいは宴の館に追加的な仕掛けが施された。1554年の6月、「大枝 Bowes (= boughs) やそのほかのお楽しみの仕掛けが施されたある宴の館」がアウトランズで作られることになり、サー・トーマス・クウォーデン [Thomas Cawarden, 1514~59年] が「祝宴事務局長」として、王室からその設営を監督することを命じられた。それは彼が「この類のことに関し今までの経験が豊富」であったからである (*写本 M.モア・モリネ所蔵 ラウズリ, サリー)。以下の引用から彼の過去の経験、すなわち彼が何をしなければならなかったか、そしてその実行のための費用について、その様子の一部がわかる (+同書)。「エドワード6世 [在位 1547~53年] の第4年—宴の館2棟、一つはハイドパークのもので、長さ57フィート、幅21フィート、高座への階段がついているものが収容できる大きさと、一辺の幅が60フィート、もう一辺が40フィート、そしてその上には小塔のようなものが飾られた。もう一つの館はメリボンパークのもので、長さ40フィートのものが収容できる大きさと、隣同士が組み立てられ、木材、煉瓦、石灰で作られており、暖炉やその他必要な設備が付いていて簡単な用が足せて、そして同様の例では、そのうちの6つの施設は前述の狩猟地のどちらかにあり、すべて木製の3つは大枝や花で飾られ、そのどれもが長さ10フィート、幅8フィートのものが収容できる大きさだった***上記の仕事をするため22日間雇われ、食べたり飲んだりする時間以外は24時間」。大工と煉瓦職人は時給1ペンス、労働者は時給½ペンス—左官屋は日給11ペンス、塗装屋は日給7ペンスと6ペンス。「ハイドパークの森の大枝を切り、宴の館をこぎれいにし、イグサ、アヤメ類、ツタを集める費用」、「屋根を縫った仕立て屋など：窓のところのバスケット作製者—総費用169ポンド7シリング8ペンス。

ストーの『年代記』*Annals* では、これらの宴の館のもう一つ別のものが記されている。これは1581年、ホワイトホールに「フランスからの某大使のために」建設された。その形は円形で一周332フィート、川の近くの宮殿の南西に建てられた。キャンバスでできた屋根は雲のように描かれ、その屋根越しに「この建物はツタとセイヨウヒイラギを使って巧妙に仕立て上げられ、天井からは小枝を編んだ棒で作られたつり飾りがあり、飾り付けには月桂樹 bay、ルー、そしてあらゆる種類の変った花、それは金のスパンコールで飾られていた・・・花綱飾り *teasons (= festoons)* [花、葉、リボンなどをひも状にした飾り] で美しく飾られた、それはツタ、セイヨウヒイラギで作られ、ザクロ、オレンジ、カボチャ *pompions* [ギリシャ語で大きなメロンの意]、キュウリ、ブドウ、あらゆる変った果物と一緒に、金のスパンコールのようなものも、とても豪華に吊り下げられていた」。

もちろん、そのような宴の館は国家的行事の時だけに建てられ、また裕福な人にしかできないことであった。一般的な庭園の高台では極めて質素な姿のあずまやが乗っているくらいだった。そのような高台というのは良い眺めを確保できるポイントとして大変便利であったであろう。特に、テラスを嵩上げできるほどには庭園がそれほど立派ではなかったり大きくない場合にはそう言えよう；しかし、このような比較的控え目な庭園では、花の

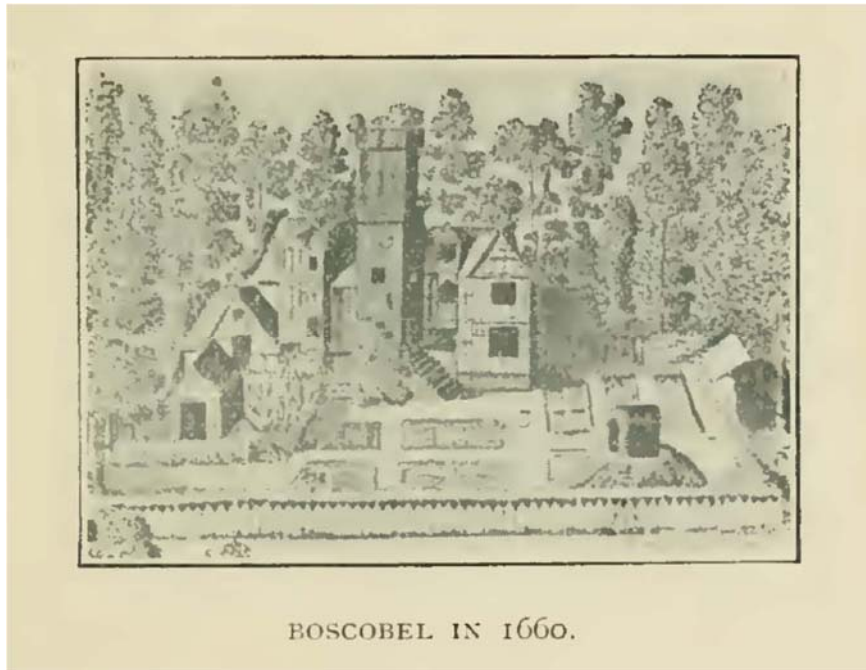
咲く植物やつる植物が植えられていない限り、高台は美的な対象とはなりえなかったであろう。そのような高台はボスコベルに今も見ることができる。これ以上質素なものを見つけることはおよそできないであろう；そしてこれは私が今話している高台の多分良い実例の一つになると思われる。もっともこれはエリザベス朝時代ほど初期のものではありえないが。この高台は建物が建てられた1620年頃、時を同じくして作られた可能性が高く、チャールズ2世がすぐそばのオークの木の中に隠れた時、その高台は今ある姿と同じ形になっていた。



〔図6-2〕 ボスコベル 1894年

ウースターの戦いは1651年9月3日水曜日に戦われた。次の土曜日、チャールズはボスコベルの「国王のオーク」に隠れて過ごし、その翌日、「国王陛下は自分の身が今や安全になったものと希望を持ち、この日曜日の何時間かをボスコベル庭園の可愛らしいあずまやで過ごした。そこはそのうち高台になり、石のテーブルとその周りに椅子が置かれるようになった。この場所で国王はしばらくの間、読書で時を過ごし、隠遁場所にふさわしいと称賛した」*。

*『ボスコベル、すなわちウースターの戦いの後の最も奇跡的な国王閣下の護持、1651年9月3日』トーマス・ブラウト著 1660年；再版 1822年。121ページの図版〔本訳 122ページ 図6-3〕はこの本からの引用。 *Boscobel, or the History of His Sacred Majesties most miraculous Preservation after the Battle of Worcester*, By Thomas Blout



[図6-3] ボスコベル 1660年

高台は庭園の中に屹立している丸っこいコブであるといつも言える訳ではなかった；それは依然として時には外の壁に対して盛り土された形のものもあったようだ。ベーコンはこのタイプのものについても書いている：「敷地の横の両端に、自分ならちょっとした高さの高台を作るであろう。囲いの壁は胸の高さにとどめ、外の野原を見渡せるようにする」と彼は書いている。高台の上に建物を建てることで、庭園の中のあまり目立たない場所にあるあずまやの利用をやめる、ということにはならなかった。「ウッドバイン [スイカズラ] woodbines が蔓延ったあずまや」(*フレッチャー『忠実なる羊飼ひ』 Fletcher, *Faithful Shepherdess*.) とか「そのスイカズラは日の光を受けて育ちながら、日の光をさえぎる」(†『から騒ぎ』第3幕第1場 [小田島雄志訳]) と描かれた枝組みで覆われたあずまやは、人が近寄らないような場所にはきつとあったに違いない。トーマス・ヒルはこのように書いている (‡『ガーデニングの技法』)。「あずまやの作り方としては、植物をそのまま這わせるか上に登らせるか、あるいはアーチ型にして頭上で閉じて、今作られているブドウのあずまやのようにすることもできよう。もしあずまやをセイヨウネズの木で作るならその後10年間は何も修理する必要はない；しかしもしヤナギの棒で作るならその後3年ごとに新しく修理しなくてはならない。あずまやの周りにバラをめぐらせようとしたり、花壇を作ろうとするなら、それは2月にしなければならぬ。・・・そしてもしジャスミン、ローズマリー、あるいはザクロのような甘い香りの木や花の種を蒔こうとする場合は、ブドウであずまやを飾る方がふさわしいと思わない限りは、同じようにすればよい」。あずまやに使われたその他の植物のいくつかはパーキンソンから学べる。「ジャスミンの白と黄色、

八重咲のスイカズラ、レディズバウワーLadies' Bowerの白、赤、紫で一重と八重咲、これらが最もふさわしい外国由来の植物で、あずまや、宴の館の横に植えられるべきものである。これらの建物は前と上の両方が開いていて、それらを包むように、また見た目にも、香りもそして喜びも与えてくれるように。「レディズバウワー」とはクレマチス・ヴィタルバ [センニンソウの一種] Clematis Vitalba のことで、あるいは「旅人の喜び」とも呼ばれ、5種類ほどのクレマチスの外国種のことである (§『楽園』392 ページ)。インゲン豆 kidney beans も使われた。インゲン豆は「簡単にかつすぐ芽が出て、ものすごい長さへと成長する；種を蒔く場所は、豆の茎を縛りつける長い棒の近くか、あるいはあずまや、宴の館のすぐ近くが良い」(*ジェラード『植物誌』1141 ページ)。

パーキンソンはライムの木の中に作られた変わったあずまやのことを描いている。彼が言うところでは、その木は「上等なあずまやおよび夏の宴の館を作るために植えられ、その下の地面では、大きな枝が非常に気持ちよくその場所を包み込む役割を果たしている。あるいは上の方に高く二重、さらに三重と積み重なっている」。そして続けて、彼の説明によると彼が目撃した中で「かつてない最高に感じの良い眺め」と言えるのは、ケントのコバムのものであり、そこではあずまやはこのようにして作られていた。歩くための板が地面から 8 フィートの高さの大枝の最初の一連の塊の上に置かれ、そこから枝が取り払われた幹が 8 から 9 フィートまた続き、そして真ん中の部分の屋根となるように 2 番目の枝の塊が覆いかぶさり、さらに 3 番目のあずまやの床部分があって、そしてそこに上るために階段が設けられている；このあずまやは「少なくとも 50 人」収容できそうである、と彼は言う (+『楽園』610 ページ)。スペンサーの『妖精の女王』*Faerie Queen* の次の一節は、エリザベス朝時代のあずまやについて生き生きとした印象を私たちに伝えてくれるものであり、多分それは放置されたままの庭園の一角に残された、崩れ落ち、草が生い茂ったあずまやの痕跡が伝えてくれるものをはるかに凌ぐものであろう：-

“And over him Art, striving to compare	そして彼の上に人間の技が、比べようとするのは
With Nature, did an arbour green dispread	自然の美しさ、あずまやの緑を広げ
Fram'd of wanton ivy, flow'ring fair	伸び放題のツタに囲まれ、花は咲き誇り
Through which the fragrant eglantine did spread	そこからスイートブライアーの優美な香りが広がり
His prickling arms, entrail'd with roses red	トゲのある枝に赤いバラがからまり
Which dainty odours round about them threw:	上品な香りをその周りにまき散らし
And all within with flow'rs was garnished,	そして内側は一面花で飾られ
That, when mild Zephyrus amongst them blew,	柔らかな西風がその間を吹き抜ける時
Did breathe out bounteous smells and painted colour shew.”	豊かな香りが漂い美しい色彩を放つ

- Book II., Cantos V. 29

第 2 巻第 5 篇 29

迷路は、今や多くの庭園で見られるようになったもう一つの特徴であった。「ラベンダ

一、コットンスパイク cotton spike、マジヨラムなどで作られた迷路、あるいはヒソップとタイム、サンザシの生垣、セイヨウイボタ、枝を組み合わせた果樹で作られた」(トーマス・ヒル)。ローソンは迷路を作る際の説明をしており、「迷路が人間の背の高さまで作られた場合、あなたのお友達はベリーを摘みながら歩き回り最後はあなたの助けなしには迷って出ることはできない」と言っている。トーマス・ヒルは迷路について2つのデザインを提案しているが、これは「庭園になくってはならないもの」というのでなく、「むしろ」・・・「自分の庭園にそのような余地があって希望するなら迷路の一つでも設けて・・・その空いている場所に・・・時々はその中で遊ぶことを唯一の目的とするために取っておくのが一番よいであろう」と述べている。



[図6-4] 迷路

多くの人は、迷路という言葉聞いて、ハンプトンコートにある有名な実例を直ちに思い浮かべるであろう。あの迷路は何千人ものロンドン市民や行楽客に多大なる楽しみを提供しているが、あれが作られるのはずっと後になってからであり、多分1700年のことだったのであろう。

風変わりな形に剪定された木を生垣の間にしばしば発見することができるが、それらは点々と配置され、木を通した眺めと園路を作るために作られているものである。ベーコンは「大きな生垣に囲まれた敷地の使い方について」・・・「そこにはあまりごちゃごちゃと、いろいろなものを詰め込まない方がいい」とアドバイスしており、言い換えると、あまり飾

り立てないということで、「自分としては、ネズとかほかの庭園の材料を刈り込んでいろいろな形を作ることは好きでない—それは子どもたち向けである。衣服の縁飾りのように丸くて、小さく低い生垣、そこには可愛いピラミッドのようなものがある、そしてところどころに美しい柱がある、そんなものが好きだ」とベーコンは付け加えている。

剪定された木は普通はイチイの木、という観念は大変広く広まっており、古い庭園に今も残っている昔のトピアリーはこの印象が正しいことを示している。ヨーク近くのヘスリントンの庭園にある剪定された木はすべてがイチイである。この庭園は、館が建てられた直後、1560年頃、設計されたものである。



[図6-5] ヘスリントン

ロッキンガムにある美しく丸く刈り込まれた生垣、エルベステックの生垣や木はこの時期の剪定されたイチイの2つの代表例である。しかし、この時代の本を見ると、イチイとは違った別の低木の方がより好ましいものとして語られている。ということは、イチイは成長が遅く、たくましい木で、常緑樹であったために、他の低木に比べイチイの方がたくさん生き残ったということのようだ。パーキンソンは「イチイを使うこと」について「果樹園のコーナーと建物の窓に面する場所、この両方の場所でイチイが植えられるのは、こ

の木が常緑であるため、木陰と飾りの両面で役立つから」と言っている。一方、セイヨウイボタについては「この植物がここまで多く、ここまで頻繁にこの国全体を通じて使われるのは、庭園その他における生垣やあずまやを作るだけの目的であるにもかかわらず、ほかの植物ではできない、どんな形にでも刈り込んだり、方向付けたり、形作ることがしやすいからで、動物であろうと鳥であろうと武具を着けた男であろうと何でも好きな形にできた：それは生垣の茂みに過ぎないのに、私はそれを忘れることはできない」と書いている。「あなたの庭師は」とローソンが 1618 年に書いたところでは「あなたの小さな森を、戦場において今にも戦いに臨もうとしている武具を着けた男の姿に形作ることができる：または足の速いグレーハウンドが鹿を追いかけたり、野ウサギを捕まえる形にできる。このような狩りなら食料、ましてやお金を無駄にはしないであろう」。



[図 6-6] コテージガーデンのトピアリーの例 ハドン

ローズマリーもまた「自分たちが楽しむために様々な形で女性たちにより植えられた。その形とは馬車、孔雀、あるいは彼女たちがふと思いついたものなどであった」*。

*バーナビー・グーグ著『農業』、コンラッド・ヘレスバッハの翻訳 1578 年 Barnaby Googe's *Husbandry*.

Translation of *Conrad of Heresbach*

花は園路や生垣に沿った縁に「そっと控え目に、木の邪魔にならないよう」(†ベーコン)、(すなわち、木の栄養分を奪い取らないように) 植えられた。とは言え、花が主に植えられたのは「結び目なしの花壇」“open beds”であり、これは複雑な結び目と対比して区別するために「オープン・ノッツ」“open knots” [結び目なし] と呼ばれた。この当時の本はすべて結び目のデザインについて触れているが、実用的であることを最重要視する庭師たちは、「この奇妙な結び目庭園」に対し好感を持たなかった(‡『恋の骨折り損』第1幕第1場)。パーキンソンは彼の読者の「希望を満足させる」ためだけに、デザインに関し1ページを割いている；彼自身は「オープン・ノッツ」の方が、花を見てもらうためにはふさわしいと考えていた。タイム、アルメリア [ハマカンザシ] *thrift*、ヒソップ *hysop*、その他何であれごちゃごちゃした模様が施されたラインの間にそのほかのものを植える余地はまったく残されていなかった。時には色のついた土でこのデザインがあっさり描かれることもあったが、そのようなやり方はベーコンがよしとするところではなかった；—「結び目や形を各種の色の土を使って作ることについて・・・それは子どもだましに過ぎず、お菓子のタルトに見栄えの良いものをたくさん見つけられるだろう」。よりシンプルな結び目は普通ツゲで縁取られており、こういうやり方はフランス人の庭師によりもたらされたものであろう。パーキンソンはこれを「フランス風またはオランダ風ツゲ」と呼び、「主として、その他のハーブに先んじて」推奨した。そうすれば、「アルメリア、ジャーマンダー [ニガクサ] *germander*、マジヨラム、セイボリー [キダチハッカ]」などのように花壇をはみ出して生い茂ったり、模様を歪めることにはならないだろうし、また「冬の霜や雪」、「夏の湯水」にそんなには悩まされずに済むと考えられたからである。コットンラベンダー [ワタスギギク] *Lavender cotton (Santolina chamæcyparissus)* は新しく輸入されたもので、これも使用されたし、また「このハーブの希少さと目新しさは、ほとんどの場合、立派な御方の庭園にあってこそ、より尊重されるとされた」 (§パーキンソン)。

仮に、ハーブやツゲが縁取りに使われない場合には、「生命のない材料」が代用された。すなわち鉛そのものか「教会の胸壁のように型抜きされた」鉛、オークの板、タイル、羊の脛の骨、これらを「地面に支柱として立て、細い方を下にして、そうするとそのうち白くなり地面を美しく見せるであろう」。別のやり方は「丸くて白っぽい、それとも青っぽい小石」を使う方法で、この手法はパーキンソンが彼のリストの一番最後に掲げているが、「その理由は、それが最新の手法で・・・結構見栄えを良くしているからである」。このような石を縁取りに使うなどというこんな簡単なことをそれまで考えつかなかったというのは考えてみれば変である。この縁取りの内側で、「オープン・ノッツ」が花で埋められ、「すべての植物がそれにふさわしいように、お互いにほどよい間隔をとって植えられ」、それが「庭園に対し、そこが多彩な光輝く色が織りなす一枚のタペストリーの如く見えるような優美さを醸し出すことになる」。パーキンソンは庭園に植えるべき花を「イングランドの花」と「外国の花」との大きく2つに分けている。イングランドの花として彼は、私たちが既に見てきた初期の時代に育てられていたようなすべての花の名前を挙げています。

たとえば、サクラソウ、デイジー、キンセンカ、ジリフラワーgillflowers、スマレ、バラ、セイヨウオダマキである。一方、外国の花、すなわち「我々にとって馴染みがない花で、その色は美しく煌びやかで、わが国に自生している多くの花に先んじて、ずっと早く我われをその喜びの虜にさらに強く引き込む・・・そのような花はほとんどあらゆる場所で、あらゆる人々、特にこの国の紳士階級の中でもより上層階級の人々とともに見られ」、「すなわち、ラップスイセン、バイモ Fritillarias、ヒヤシンス Jacinths、サフランの花、ユリ、アイリス Flowerdeluces、チューリップ、アネモネ、フランスカウスリップ [キバナノクリンザクラの一種] French cowslips あるいはプリムラアウリキュラ Bears' Ears その他同様の数々の花で、とても美しく楽しく快適なもの」であった。

「外国の」花の数は、わが国の庭園の中で急速に増加しつつあった。この時代全体を通じて花は旧世界、新世界の両方から入ってきた。以下に述べるものは輸入されたもののうち最もよく知られているもののいくつかである：－「ヨウラクユリ」the Crown Imperial のオレンジと黄色の両方の色、小さなバイモの変種、当時の呼び名では「トルコまたはギニアの花、すなわち格子縞のラップスイセン chequered daffodil」。耐寒性の（ヨーロピアン）シクラメン cyclamen (*europoeum*)；ベニバナサワギキョウ Lobelia cardinalis、トケイソウ Passion flower (*Passiflora incarnata*)、別名“Virgin climer”。クリスマスローズ Christmas rose、別名 Helleborus niger [現在の学名]、niger angustifolius and vernalis。普通の白のライラック、別名“pipe tree”、セイヨウバイカウツギ syringa (*Philadelphus coronarius*)；そして普通のコトネアスター [シャリントウ] cotoneaster およびキングサリ laburnum；マルタゴンリリー [カノコユリの一種] martagon lilies のいくつかの品種；普通の黄色のジャスミン；甘い香りのオシロイバナ marvel of Peru、メマツヨイグサ evening primrose、そして耐寒性のムラサキツユクサ spiderworts；アフリカンマリーゴールド [センジュギク] African marigold、ヒマワリ sunflowers、デルフィニウム larkspurs で単年草、多年草の両方；スノーフレーク [スズランスイセン] snowflakes、これは「球根性スマレ」“bulbous violets”！としてスノードロップ snowdrops とされたもの、およびラナンキュラス類 Ranunculus、「イリュリアのキンポウゲ」“the crowfoot of Illyria” (*R. illyrius*) とハナキンポウゲ [いわゆるラナンキュラス] asiaticus、そしてバチェラーズボタン Bachelor's buttons. (*R. plantanifolius flore-pleno and aconitifolius*)、これらは「アルプスの山から」持ってこられた；スイートサルタン [ニオイヤグルマギク] sweet Sultan, the Centaurea moschata [スイートサルタンの学名の一つ]、ハクセン Dictamnus Fraxinell；ハウセンカ Balsam impatiens；ツリガネソウの何らかの品種 campanula、セイヨウヒルガオの一種 Convolvulus minor (*C. bicolor*)。

新しい植物の中には、ガーデニングの支援者である先導的な何人かの人々の尽力によりもたらされたものがあった。バーリー卿とカルー卿 [George Carew, 1555~1629年] はイングランドでオレンジを育てようとした最初の人たちであった。ソールズベリー卿 [Robert Cecil, 1563~1612年] は海外から果樹の新種やその他の植物を調達するためにトラデスカン

ト [Tradescant, 1570~1638 年 博物学者・園芸家] を雇った。ズーシュ卿 [Edward la Zouche, 1556~1625 年] もまた園芸を推進した人の中で主要な地位が与えられるのにふさわしい人である。彼はローベル [Mathias de Lobel, 1538~1616 年 フランドルの医師・植物学者] のパトロンであり、ハクニーに立派な薬草園を持っており、それをローベルが管理していた。ズーシュ卿自身も海外から植物を持って帰ってきた。ジェラードは特に 2 点指摘している。「小さなキャンディーマスタード」“the Small Candy mustard”は「オーストリア、キャンディー [訳注]、スペインおよびイタリア」に自生しており、「それらの地域から」帰って来る時によって持ち帰られたものである。また「チョウセンアサガオ」“Thorne apple”の種は彼からジェラードに贈呈された。

[訳注] キャンディー Candy とは原産地であるクレタ島の古名 Candia が訛ったもの。キャンディーマスタード Candy mustard の別名はキャンディタフト [マガリバナ] candytuft、バーントキャンディータフト burnt candytuft は岩生のエチオネマ aethionema saxatile。

新しい植物とガーデニングに関する新しいアイデアもまた、プロテスタント難民の流入とともにフランスとオランダから入ってきた。この国に来たユグノー派の人々はほとんどすべての商工業の各分野から来ており、そして特にガーデニングの分野ではこれらの新市民の影響のもと大きく改善が進んだ。そしてこの工業分野のメンバーは 1544 年の英国籍取得状を取得した人たちであった。これらの外国人庭師の多くはサンドウィッチ、コルチェスターおよびノリッジに定住し、この地域のガーデニングを大きく改善した。近所の地主の中には外国人庭師を雇って、その庭園を改造したり設計させた。1575 年、オランダ人庭師に 3 シリング 4 ペンスが支払われたが、これは「ノリッジからヘングレイヴまで来て果樹園、庭園、園路を見てもらうための旅行に対するもの」で、40 シリングについても「オランダ人に支払われたが、これは結び目の剪定、小径の改造、土地のセッティング、ハーブを見つけること、そしてそれを縁植えることに対するものであった」*。また、「花の展示会」を初めて開催したのもこれらの外国人で、ノリッジはこの展示会で有名であった。*ユグノー協会『ノリッジにおけるワロン人と彼らの教会』1887 年 Huguenot Society. *Walloons and their Church at Norwich*. W.T.C. Moens [ワロン人とはベルギー東南部のフランス語圏の人々]

この時代に典型的な庭園では、花壇の間、テラスに沿ってあるいは園路の横にところどころ、鉛または石の器が置かれることがあり、そこには花が一杯に生けられたり、そのまま飾りとして置かれていた。美しい鉛製の器の例は今でも古い庭園のいくつかに見ることができる。ノーサンプトンシャー州ドレイトンでは、これらのサイズの異なる器が庭園全体にわたり数多く置かれている。117 ページの図 [本訳 119 ページ 図 6-1] では 2 つ置かれているようだ。その他の飾りについては、後の時代ほどには多く見られない；「偉大な君主たちは時に威厳や壮麗さを求めて彫像とかいろいろなものを付け加えることがあったが、それは庭園の真の喜びとは何の関係もなかった」(*ベーコン)。

パーキンソンによると、庭園というものは「その真ん中に噴水」を持つべきであり「そこから庭園のあらゆる場所に地下のパイプによって水を運ぶか、あるいは手作業によって運んで都合のよい場所に置かれた大きな水盤か大きなトルコ風甕に移すこと」と述べた。ベーコンは次のように書いている：「噴水、それは大いなる美しさと清涼剤；だが水たまりはすべてを台無しにし、庭園を不健康にし、ハエやカエルで溢れかえる。噴水には 2 つの性質を持ってほしいと私は思う；一つは水を一面にまき上げ、噴き出す、もう一つはおよそ 30 から 40 フィートの水の美しい受け皿で、しかしそこには魚も、ヘドロも泥もない。最初のものについては、金張りや大理石の彫像で、今使われている装飾で十分である。・・・またそこに上る階段とかその周りのきれいな敷石があると良い。もう一つのタイプの噴水については、水浴び用プールとでも呼べ、変わった趣向とか美しさをいろいろ加えることができるかも知れないが、それについてはここでは扱わないでおこう；たとえば、底が美しく石で敷き詰められ、絵模様が見える；側面も同じように彩色ガラスやキラキラ光るもので飾られ、その周りは背の低い彫像がきれいに並んで取り囲んでいる」。普通の庭園では、「水の美しい受け皿」はそれほどには飾り立てられず、単に直線的な池で石の階段が各コーナーに設けられ、その他の土手は滑らかな芝生で覆われているようなものに過ぎなかった。1595 年 11 月 25 日、サー・トーマス・セシル [Thomas Cecil, 1542~1623 年] はウィンブルドンからラウズリ出身のサー・ウィリアム・モア [William More, 1520~1600 年] 宛てに次のような手紙を書いた。「モアが大きなプールをいろいろ作ったと聞いたので、そちらにいる腕のよい職人を一人紹介して欲しいとセシルが頼んだ。なぜならその年彼が作った大きなプールの、一部の土手が未熟な職人のせいで崩れてしまったからであった」(*写本 サリー州ラウズリの手紙)。ラウズリのプールはしばらくの間存在していたに違いないと思われるが、それは 1581 年 12 月 21 日付けで、エリザベス女王の魚屋のヘンリー・スレッドがサー・ウィリアム・モアに手紙を書いて、彼の池の鯉を何匹か買いたいと申し出たからである。魚屋は大きさによって一匹 12 ペンスから 18 ペンスで買いたいと言い、「もし私が見て鯉がもっと価値があると思ったら、お値段は見直します」と付け加えている (+同書)。

一番目のタイプの噴水に関しては、ベーコンが書いた当時一番美しいとされる庭園の中に多数の事例が見出される。ヴェルテンブルク公爵フレデリック [Duke of Wurtemberg, 1557~1608 年 エリザベス女王に騎士への叙任を嘆願したドイツ人; 正しくは Württemberg] は彼がハンプトンコートで見たものについて、1592 年にこう書いている †：

† 翻訳 1602 年 - ブレンチリー・ライ著『外国人から見たイングランド』所収 1865 年 *England as Seen by Foreigners*. By Brenchley Rey

「第一主宮殿の真ん中に見事な背の高い巨大な噴水があり、そこには独創的な水の仕掛けが施されていて、もしお望みならそばに立っている淑女などに水をかけてびしょりと濡れさせて喜ばせることができる」。この同じ噴水についてノーデン [John Norden, 1547 頃~

1625年地図・地形図製作者]が1598年に書いているが、それは「エリザベス女王は最近第二宮殿に大変美しい噴水を作ること命じ、それは王宮を優美に見せ、重要で必要な時に役立つものである；噴水は1590年に、大きな変更もなく完成した」というものである。同種の別の事例は、ホワイトホール宮殿について、ヘンツナー [Paul Hentzner, 1558~1623年ドイツ人 イングランドなど欧州旅行記の著者]が1598年に書いたものがある：－「日時計のある噴水は、訪問者がそれを見ている間、庭師が離れたところから回す回転輪により送り込む一定量の水により、数多くの小さなパイプを通じ、周りに立っている人たちに大量の水を撒き散らす」。ヘンツナーはノンサッチも訪れており、そこでもいくつかの噴水に目を留めている。「王室専用庭園」には2つ噴水があって「一つがもう一つの周りに水を吹きかけ、それはあたかも嘴から水が流れ出るように小さな鳥を止まらせてあるピラミッドのようである」。「ダイアナの森」にある噴水は「女神と妖精たちに水をかけられている鹿に変えられたアクタイオン [訳注]」を模ったもの、それと「近づく者すべてに水を吹きかけるパイプがたくさん隠されている大理石のピラミッド」がある。噴水を表す“jet d'eau”という単語は、このような噴水について同時代の作家によって普通使われたが、それはフランスから持ち込まれたことを指し示しているように見える。

[訳注] アクタイオンは、月と狩の女神アルテミスの水浴姿を見たため呪われて鹿に変えられ自分の犬に八つ裂きにされたポイオティアの獵師（ギリシャ神話）。アルテミスはローマ神話ではダイアナ。

庭園に持ち込まれたほかの水の使い方としては；リトゥルコウトの果樹園を流れているマスの小川、あるいはウィンチェスターの首席司祭邸の庭園の小川があり、そこではアイザック・ウォールトン [Isaac Walton, 1593~1683年 随筆家 『釣魚大全』 *The Compleat Angler*]が魚釣りをよくした場所である。フランシス・カルー [Francis Carew, 1602~49年]の所有であるベディントン（サリー州）は、ヴェルムサ・フォン・ヴェンデンハイム [Wurmsser von Vendenheyn]により、1610年「イングランドの中でも最も気持ちがよく、そして装飾的な庭園の一つであり、美しい小川がたくさん流れている」と描かれている。ティオボルズとハットフィールドには水があった。ハットフィールドでは（*家族の写本より ソールズベリー侯爵所蔵）、デルと呼ばれる小さな谷間を流れる小川の土手が花壇や様々なあずまや、そして園路で美化され、それらは装飾的な橋により反対側の土手にあるブドウ畑と結ばれていた。この仕事はマウンテン・ジェニングスというソールズベリー第一伯爵の庭師によりデザインされ施工された。シモン・シュトゥルティヴァンという名のフランス人は精巧な水の仕掛けを計画したが、伯爵が1612年に死んだため、実施されることはなかった。サロモン・ドゥ・コー [Soloman de Caux, 正しくは Salomon]もまた同様であった。しかしながらドゥ・コーがデザインしたある噴水の値段は、113ポンドかけて作られ、ネプチューンの彫像が乗った大理石の水盤でできていた；重さ310ポンドのハンダが彫像を鑄造するのに使われ、多分後で金メッキされたのであろう。ドゥ・コーはペムブルック伯爵のためにウィルトンの庭園のデザイナーを引き受け、そこには「大理石の彫像がある4つの噴水が真ん中に」

あり、また「2つの池の真ん中にある噴水と2本の柱からは、思い切り高く水を噴き出して、そのてっぺんにある2つの王冠を動かしたり回したりしていた」。このほか、川が庭園の中を流れ過ぎていって、装飾的な橋が架けられていた。この橋は後に取り払われ、そこにはイニゴ・ジョーンズ [Inigo Jones, 1573~1652年 建築家・舞台装置家] の有名な装置が建てられた。

ティオボルズの庭園もまたヘンツナーにより1591年にこう述べられている；「展望回廊の中にはイングランド国王の系図が描かれている；ここから庭園に入るが、水で囲まれて、一人でポート遊びに行くには十分な大きさで、茂みの間を漕いで行く；ここには非常に多くの種類の木や植物が植えられており、多大な手間をかけて作られた迷宮、白の大理石でできた水盤のある噴水、そして木製あるいは他の素材で作られた柱とピラミッドが庭園のあちらこちらにあった。これらのものを見た後、庭師は私たちが夏のあずまやへと案内した。その下の階には、白い大理石で作られた12人のローマ皇帝の石像と石 truck-stone のテーブルが半円状に置いてある；上の階には鉛製の水盤が置かれておりそこにはパイプで水が流し込まれ、そうすることで魚を飼っておくこともできるし、夏には水浴びするのにも大変便利であった。別のおもてなしのための部屋は、これのすぐ近くにあって小さな橋で結ばれており、そこには赤い大理石の気品あるテーブルがあった」。

さてここでエリザベス朝の庭園のいくつかの特徴についての概観を終え、テラス、園路、小径、迷路、高台、あずまや、噴水、小川について一つずつ見てきたところである；残された課題はその全体について見るということだけである。庭園に関する次の2つの文献の中には、これらのすべての細部が織り込まれており、また両者とも同時代のものであるが、まったく違う2つの出典によるものである。一つは、美しい庭園を象徴するために作られた舞台に関する記述であり、それは『花の仮面』“Maske of Flowers”という演劇の上演に際してのものである。これは1613年の十二夜祭 [クリスマスから12日後の1月6日に行われる宗教行事の前夜祭] にあたって、ホワイトホール宮殿でグレイズインの郷紳たちによって演じられたもので、「サマセット伯爵とフランシス令嬢との結婚式、彼女はサフォーク伯爵、チェンバレン卿の娘であり、そこで演じられた戯かで壮麗極まるものであった」*。もう一つはスペンサーの『妖精の女王』からのものであり、彼が「第二の楽園」として描き出している完璧な庭園の詩行である。

*この「仮面」は1614年にN. D. によりロバート・ウィルソンのために出版された。これは極めて希少価値の高いもので、引用は、ビショップスストーフォード町ブローハッチのローリー・スミス夫人所蔵の完璧な一冊からなされている。

『花の仮面』 *The Maske of Flowers*

「ダンスは終わった、大きな音楽が鳴り響いた。幕が引かれ、栄光に満ち奇妙な美しさを持った庭園が現れ、四隅に広がり、そこには十字の園路と四隅を一周する小径。十字の

園路の中心には見栄えの良い噴水が聳え、それは4本の銀の柱の上に持ち上げられている。その上には4つの銀の彫像がまたがり、それは円周24フィートの木の幹を支え、地面からは9フィートの高さに作られ、その真ん中の銀と金の渦巻き模様の上には地球儀が置かれ、その地球儀は4つの金の仮面の頭で飾られ、そこからは水が木の幹に注ぎ込まれ、上には高さ3フィートの金のネプチューンが立ち、手には三つ又の鉾を持っている。庭園の壁は煉瓦製でそこには遠近法で人工的に絵が描かれており、壁に沿って全面に葉っぱと果物が描かれた果樹が並べられている。壁の内側の庭園には3フィートの高さで手すりが設けられ、銀の石弓によって飾られ、その合間には多彩な色彩の透明な光によって美しくなった台座が置かれ、その台座の上には銀の柱が立ち、その頂には金色の有力者たち、金色のライオン、そして銀色の一角獣が据えられている。有力者の一人一人と動物は燃える松明を掲げ、それが構造全体に光と輝きをもたらしている。4分割された庭園のそれぞれの区画はイトスギとネズの低い生垣で美しく囲われており；その中の結び目には造花がセットされている。4区画のうち最初の2つには、ピラミッドが2つあり、金と銀で飾られ透明な光できらきら輝き、ザクロ石、サファイア、そしてルビーに似る。4区画のそれぞれのコーナーにはジリフラワーの大きな鉢が置かれ、それらの背後から当てられる光のいくばくかを遮り、それにより、まばゆく見事な輝きを作り出していた。4区画の残りの2区画については、色どりも様々なチューリップ、そして中央およびこれらの区画のコーナーには、背後から当てられる秘密の光の輝きを受けて、何種類かの花の大きな塊が置かれた。庭園のさらに奥の端にはゆっくりとした傾斜で盛り上げられた高台があり、それは土地の塊にも似て、草で覆われている；その盛り土の上には、しっかりと作られた見栄えの良いあずまやが立ち、人造木、およびエグランタインバラ [スイートブライアー] *eglantine*、スイカズラなどのあずまやの花で覆われていた。あずまやは長さ33フィート、高さ21フィート、金と銀の境界柱像 [境界を示す古代ローマの境界神] で支えられていた。それは6つの二重アーチと庭園の3本の園路に通じる3つのドアにより区分されていた。あずまやの中央部には見栄えの良い大きな小塔が立ち、そしてどちらかの端には小ぶりの櫓が立っていた。高台の頂の上には、その正面に花の土手が不思議なことに後ろに描かれており、一方、アーチの中では仮面を着けた人が見られないように座っていた。庭園の後ろで、あずまやの上には人造木が置かれ、それは庭園に合体する果樹園のようであり、至る所、澄みわたる夜空のように天空が遠景の中に引き込まれていく。あずまやの下の草のシートには庭園の神様が座り、その数12体、長い緑の正装用ローブを煌びやかに装い、頭上には贅沢なタフタ [光沢のある平織り] の帽子、そして花の冠。それらの真ん中にプリマベラ *Primaura* が植えられ、舞台上に降りてきて国王の御前へと行進し、リュートとテオルボ [旧型のリュート] にあわせて歌った」。

“Fresh shadows fit to shroud from sunny ray:

Fair lawns, to take the sun in season due;

Sweet springs, in which a thousand nymphs did play;

Soft-running brooks, that gentle slumber drew;

High-reared mounts, the lands about to view;

Low-looking dales, disloign'd* from common gaze;

Delightful bow'rs, to solace lovers true;

False labyrinths, fond runner's eyes to daze.

All which by Nature made did Nature 'self amaze,

And all without were walks and alleys dight,

With divers trees enranged in even ranks;

And here and there were pleasant arbour's pight,

And shady seats, and sundry flow'ring banks,

To sit and rest the walker's weary shanks.” †

* = remote from

† *Faerie Queene*. Book IV., c.x., 24.

[正しくは 24~25]

爽やかな木陰、太陽の光から隠れるのに適した：

美しい芝生、季節が来れば陽を浴びるため；

甘い泉よ、数多くの妖精が遊んだ泉よ；

静かに流れる小川、心地よい眠りを誘う；

高くそびえる高台、周囲を見渡すための土地；

眼下に潜む谷間、人の目を避け遠く離れ；

心弾むあずまや、本当の恋人たちを慰めるため；

欺く迷宮、愚かにも急ぐ人の目を惑わすため

自然が作ったすべてが自然自らを驚かせる

そして外はぐるっと園路と小径が整えられ

そこにはいろいろな木々が同じように並べられ

そしてあちらこちらに快適なあずまやの柱

そして木陰の腰掛、と様々の花が咲き誇る土手

座って歩く人の疲れた足を休めるための †

† 『妖精の女王』 第4巻 24~25

第7章 エリザベスとジェームズ1世時代のキッチンガーデニング

“Whose golden gardens seeme th’ Hesperides to mock 彼の黄金の庭園はヘスペリデスの園も及ばぬところ
Nor these the Damson wants nor daintie Abricock そこにダムソンも美味のアプリコットも欠けることなく
Nor Pippin, which we hold of kernel fruits the king それにピピンも、我らが王者と定める果物
The Apple-Orendge, then the sauory Russetting アップルオレンジ、そして香しい赤リンゴ
The Peare-maine which to France long ere to us was knowne ベアメイン、これはフランスでは古くから知られ
Which carefull Frut’rers now haue denizend our owne. それが今や丹念な果樹栽培のおかげで国内でも

* * * * *

The sweeting, for whose sake the Plowboyes oft make warre 甘味リンゴ、若い農夫を時に頑健にするもの
The Wilding, Costard, then the wel-known Pomwater 野生種リンゴ、コスタード、名高い白リンゴ
And Sundry other fruits of good yet several taste また美味いけれど違った味の様々なほかの果物
That haue their sundry names in sundry counties plac’t.” 違った地域では違った名前を持つ

DRAYTON, *Polyolbion*.

ドレイトン『多幸の国』

[訳注] ギリシャ神話で、ヘスペリデスはヘラの金のリンゴの園を守る4人のニンフのこと。*Polyolbion* は正しくは *Poly-Olbion* か。

キッチンすなわち「料理用菜園」“cooks-garden”^{*}がどのように変化していったかは、「心楽しい花の庭園」の変遷の様子ほどには記録に残されてはいない[†]。フラワーガーデンは館の前方に広がり、「館のすべての主な部屋、最上等の部屋からよく見えるようになっていたのとは対照的に、ハーブの庭は館のどちらかの横側に配置されなければならない・・・なぜならキャベツとかタマネギとかのハーブからはいろいろな種類の匂いが立ち上るため、どこの館でも寝泊まりする部屋の香りとして喜ばれることはほとんどなかったからである」。これは確かに初期の頃の庭園との一つの違いである。あの当時はハーブは平均的な庭園のほぼ全体を覆い尽くし、その頃はノボロギク *groundsel* がネギ、タイム、レタスとともに居場所を与えられ、ツルニチニチソウ、バラ、スマイレと一緒に差別されることなく庭園のハーブの仲間として認められていた。

^{*}ピーター・ケンプからセシルへの書簡 1561年 Letter from Peter Kemp to Cecil

[†]パーキンソン

ホルンズヘッド (1580年死去) [Holinshed, 年代記編纂者] が彼の時代のイングランドについて述べたところ、野菜の生産は飛躍的に増加したと指摘し、また野菜についてこのように言っている。野菜は「エドワード1世の時代 [在位 1272~1307年] にはこの国に溢れ返り、その後、時が経つにつれ野菜は無視されるようにもなった。その結果、ヘンリー4世からヘンリー7世の末期およびヘンリー8世の初めには、野菜はイングランドではほとんど

ど、あるいはまったく有用でなくなり、野菜のことは知られないままに置かれるか、あるいは人間よりも豚や野生の動物を飼うためにふさわしい飼料と考えられた。しかるに、私の時代になると、貧しい一般庶民の間で野菜が再び利用されるようになっただけではなく、見慣れぬ国から毎年新しい種を取り寄せている上品な商人、郷紳、貴族階級の食卓に上がる高級な料理として使われた。ここで野菜というのはメロン、ポンピオン *pompions* [メロン、カボチャ、ヒョウタンなど。後出]、ヒョウタンの仲間 *gourds*、キュウリ、ハツカダイコン、ムカゴニンジン *skirets*、パースニップ *parsnips*、ニンジン、キャベツ、カブ *nauewes*、カブ *turnips* [2つのカブの違いは後述] およびあらゆる種類のサラダ用ハーブのことを意味している」。ホリズヘッドはエリザベスの治世を称賛するために書いていたから、その時代の出来事を忠実に表している年代記となっているとは言え、彼が描いている時代の栄光を際立たせるために脚色する誘惑にかられたことであろう。野菜は今や以前よりは人気がありたくさん使用されたものの、初期の庭園について我われが今まで見てきたところからすると、ホリズヘッドが我われに信じさせようとしたほどには、野菜がここまで粗末に扱われていたとはとても信じられない。パーキンソンは野菜の種の中には外国から取り寄せた方がよいものがあると勧めており、特にメロンはそうだとやっている。しかしながら、ホリズヘッドがリストアップしている「見慣れぬ国から」取り寄せた方がよいとする種の多くについて「ハツカダイコン、レタス、ニンジン、パースニップ、カブ、キャベツ、そしてネギについては・・・イングランドの種の方が海外から来るものよりもよい」と言っている。

この時期にガーデニングが成し遂げつつあった進歩を示す驚くべき証拠としては、ロンドン市内、周辺で技能者の重要性が高まっていたことであり、ジェームズ 1 世 [在位 1603～25 年] の第 3 年までには、ついに王室勅許により設立されたシティ・オブ・ロンドン同業

組合という権威ある地位を獲得したのである。その年には、すべての「シティ・オブ・ロンドンおよびその周囲 6 マイル以内に住む人々で、次のようなガーデニングの商売、手作業、熟練作業を実行し携わる人々は、ロンドン庭師組合の代表者、補佐役および組合の名において加入が認められた。すなわち植栽、接ぎ木、植付け、種蒔き、剪定、育樹、コッキング *kocking* [どのような作業か不明]、土盛り、マルチング、垣づくり、そして苗木、ハーブ、種、果樹、台木を移動したり、持ち主への運搬作業を行う人々のことである」(*本組合所有の勅許状原本による)。トーマス・ヤングが初代の代表に任命され、組合への見習い期間は 7 年であった。



[図 7-1] 庭師組合の勅許状

このようなギルドの設立により、「自分たちの顧客を騙し失うことにつながる」枯れた木や悪い種を売りつけるシティの中の庭師による詐欺行為にストップがかかることが期待された。しかし、このような不正行為はなくならなかったようで、ジェームズ1世の第14年に2回目の勅許が与えられ、組合にはさらなる特権が認められた。いかなる人も組合の「ライセンスおよび同意なくして前述の区域においてガーデニングの技術あるいは熟練作業を使用しないしは実施」(*2 回目の勅許, 1616年, 組合所有) することは許されない。また、いかなる人であっても徒弟見習いをせず、また組合から認められた特別の地位 *the freedom of the Company* を持っていない場合には、庭園の生産物を一つとして売ることが許されなかった。ただし、例外として一定の時間帯で、またシティの名誉市民の地位 [シティの中で商売をするために必要な要件 *the freedom of the City*] を持っていない部外者にも開放されているような場所や市場での商いは認められた。この組合はいかなる「植物であっても、ライセンスを持っていない人が販売用に並べているハーブあるいは苗をすべて差し押さえてそれらの者が商売しようとしていた場所に住んでいる貧しい人々に配ること」が認められていた。また、ギルドのメンバーであれば誰でも4人で「いかなる態様のものであれすべての植物、すなわち、台木、苗木、樹木、種、挿し穂、花、ハーブその他のもので、シティ・オブ・ロンドンおよびその6マイル以内のいかなる市場においても販売され、あるいは売りに出されるものを探し、検査すること」も合法的とされた。また「有害、乾燥、腐敗している、インチキくさい、無駄」とされたすべてのものを「燃やしたり、別途処分する」ことも合法的とされた。ウィリアム・ウッドが新しい勅許状の下で最初の代表に選出された。管理者は2人、補佐役は24人に増加し、世話役が任命され、組合には制服が認められ

た。組合の権利と特権は 1635 年、チャールズ 1 世 [在位 1625~49 年] により再確認された。紋章は、耕している一人の男とそれを左右から支えるサポーターである二人の女、彼女らは豊穰の角 [ゼウスに授乳したヤギ、アマルティアの角] を持っており；兜飾りは果物が入ったバスケット、そしてモットーは「汝の額に汗をした者、汝のパンを食べるべし」であった。勅許により集会のホールを持つことを許されていたにもかかわらず、そのようなものはまったく持っていなかったようである。組合は長い間特権を行使することはしなかったが、それは今も存在しており、シティのギルドの中では 70 番目の席次に位置している†。

†この組合の説明はブラッドリー [植物学者] の論文『農業とガーデニング』1726 年に掲載されている。

Bradley's Treatises on *Husbandry and Gardening*

昔から栽培されてきたすべてのハーブが今も変わらず育てられているのは、ほとんどの場合その薬用効能があるためであり、その効能は多くの場合多種多様、ありとあらゆるものを含んでいた。たとえば、「サントリソウ」[キバナアザミ] “Blessed Thistle”すなわち *carduus benedictus* の煎じ薬は、葉を粉末にするか、飲み薬にするか、葉を外用に使うなどにより、聴覚障害、めまい、記憶喪失、疫病、悪寒、腫れものや外傷、蛇や狂犬に咬まれた時、その他多数の病気を治すと考えられた。このような様々な効能書きを信じれば、「サントリソウ」がどこの庭園でも栽培されたことは驚くに当たらない。もう一つの、すべての庭園で 10 世紀以降育てられてきた植物としては、マンドレーク *Mandrake* (*Mandragora vernalis* and *autumnalis*) が挙げられる。この植物にはほかのいかなる植物とも比べようもない最もばかばかしい迷信が付きまとっている。この根っこは人間の形に似ていて、何か不思議な力を持っていると考えられたため、まがいものの根がこの形に作り上げられ、お守りとして売られたのである。大地から引き抜かれる時に金切り声を上げ、その音があまりにも恐ろしかったため、それを聞いた者は気が狂うか、死んでしまうと言われた。シェークスピアがこの迷信について触れている。

“And shrieks like Mandrakes torn out of the earth, 大地から引き裂かれたマンドレークのような悲鳴

That living mortals, hearing them, run mad.” それを聞いた人間は気が狂う

Romeo and Juliet, act iv. Scene3.

『ロメオとジュリエット』 第 4 幕第 3 場

[小田島雄志訳]

本来の植物学だけでなく、ガーデニングに関する実用書のほぼすべてが、それぞれの花が持つ「長所と薬効」を列挙している。トーマス・ヒルは「コールウォート *Colewort* すなわちキャベツの薬効および有用な秘密」について 4 ページを充てている。パーキンソンでさえ、ほとんどすべての植物に何らかの薬効があり、ほんの少数のものだけが「花そのものを鑑賞するためだけに使われる」と言っている (*ラクスパー『楽園 278 ページ *Larkspur, Paradisus*)；チューリップについてさえ「試してみた」と彼は打ち明け、砂糖の中に球根を

漬け込んだところ良い結果が得られた。「この根っこは栄養豊富で、これが疑いようもない・・・のは数人の人がこの球根を海外より友人から送ってもらったところ、タマネギと勘違いして、ポタージュあるいはスープにタマネギとして使ってしまったが、気に入らなかったということはまったくなく、何か悪い品質のものができたという感じでもなく、甘いタマネギと思ったというのである」(パーキンソン『楽園』77ページ)

キッチンガーデンに持ち込まれたもので間違いに最も重要なものはジャガイモであった。一般的に受け入れられていた考えは、ジャガイモはサー・ウォルター・ローリーにより最初にバージニアからヨーロッパにもたらされたというものであるが、この考えは疑わしい。その原産地については植物学者の間で大議論になってきた。サー・ウォルター・ローリーと彼の仲間であるトーマス・ヘリオット [Thomas Herriott, 1560 頃~1621 年 天文学者・数学者] が新世界から 1585 年あるいは 1586 年にジャガイモを持ち帰ったこと、これは事実である。しかし、1580 年から 1585 年の間にスペイン人によってもヨーロッパに持ち込まれていた。ジャガイモは野生の状態ではチリでだけ発見されているが、多分、スペイン人がアメリカに到着する前に、この植物は栽培種としてペルーやニューグラナダ [現在のエクアドル、ベネズエラ、コロンビア、パナマを含むスペイン総督領] に広がっていたであろう。そこから 16 世紀後半には現在のバージニアとかノースカロライナの米国の土地に持ち込まれ、そこでローリーによって発見された可能性が極めて高い。もっとも、もし彼がチリまたはペルーからの航海中に拿捕したスペイン船の荷物の中にジャガイモを見つけたとしたら話は違ってくるが。ジェラードはバージニアから「彼がもらった」「バージニアのジャガイモ」“potatoe of Virginia” (*Solanum tuberosum*) の絵と説明を残している。原生種は今もヨーロッパでは栽培されており、それは今栽培されている一般的な品種とはほんの少しだけ異なっている。ジェラードによる花と根の描写は正確である。彼はジャガイモを「お楽しみの食べ物」と呼んでおり、食べ方としては「残り火で炙るか茹でて、油、酢、胡椒で食べるか、あるいは上手に料理して別な味付けで食べる」としている。彼は塊茎 tuber について次のように描写している。「分厚く、ぼてっとコブのようで、普通のジャガイモと形、色、味ともあまり変わらない。ただ違いがあるのは、その根はそれほど大きくも長くもなく、ボールのように丸かったり、楕円だったりタマゴみみたいだったりするものもあり、長いものや短いものがあり、そのコブ状の根は茎に対して無数の糸のような繊維でしっかりと固定されている」。「普通のジャガイモ」と彼が言っているものは最初何だろうと思うが、実はバタータ Batata、すなわちサツマイモ Sweet Potatoe、*Ipomoea Batatas* のことを指しているのである。この原生種についてはこれもまた一つの議論的である；アメリカと東アジアの両方がそう主張をするが、新世界から伝わったとする最強の証拠があるようだ。クリストファー・コロンブスがこの植物をイサベル女王に持ち帰ったとされ、16 世紀初めにはスペインで栽培されていた。ジェラード、パーキンソンの両者とも自分の庭で育てたが、9 月末の霜でいつも枯れてしまったので花が咲いているのを見たことはなかった。サツマイモの食べ方はいろいろで、炙って、ワインに浸して、ブルーと一緒に料理する、またジャ

ムをこれで作る。サツマイモはペルーのムカゴニンジンと呼ばれることもあった。パーキンソンはジャガイモのリストの3番目の植物を「カナダのジャガイモ」と名付けた。「我われイングランドでは無知か怠け頭のせい何かで、それらをエルサレムのアーティチョークと呼んだが、それは単に茹でた根がアーティチョークの頭の下部と似たような味がしたからに過ぎなかった」。「この植物は・・・アーティチョークと何らの類似性もなく・・・エルサレムとかアジアから来た訳でもなく、アメリカから来たものだった」(*ジョンソン編のジェラード『植物誌』1633年 Johnson's Edition of Gerard's *Herbal*)。キクイモ *Helianthus tuberosus* が「エルサレム」と呼ばれることについて、これらの著者たちは誰一人として説明しようとしなかったが、この植物はヒマワリ、すなわち“Girosole”の一種であり、この後者の言葉はエルサレムが訛ったものというような説明は可能であろう。

[訳注] *Helianthus tuberosus* の英名は Jerusalem artichoke、ヒマワリに似た花で塊茎ができる。日本では帰化植物として広く見られる。別名ブタイモ。

グッディヤー [John Goodyer, 1592~1664年 植物学者] はその最初の導入状況の歴史を書いている(†同書)。「1617年私は、ロンドンのフランクエイル氏からその2つの小さな根を受け取り・・・その一つを植えて、もう一つは友人にあげ、私のものは大量の根に増え、それでハンプシャーに貯蔵した」。この使い道についてパーキンソンは「カナダのジャガイモは数がたいへん増加しているために、ロンドンの我われにとっと極めて身近な存在になっており、その結果最も庶民的な人々ですらバカにしている。一方、初めてこれが伝わった時には、女王陛下のごちそうであったが、あまりに頻繁に使用されたため、おまけに量も一杯あって安かったので、いまでは好物というよりは嫌われものになってしまった」と書いている。グッディヤーも「人間様よりも豚にふさわしい食べ物」と色分けしている。

一般的なアーティチョーク (*Cynara Scolymus*) およびカルドン *cardoon* (*Cynara Cardunculus*) の両方とも栽培されたが、後者はイングランドでは海外に比べるとまったく人気がなかった。多分これは「わが国がその楽しみ方を見つける本当の調理法がわからなかった」ためであろう(‡パーキンソン「1オンス[約28グラム]のカルドン」の種の価格は1761年に1シリング、『家計簿』ストウナウ家 *Stonor*)。イングランドのアーティチョークは最良のものと考えられ、イタリア、フランス、オランダ・ベルギー等へ輸出された。

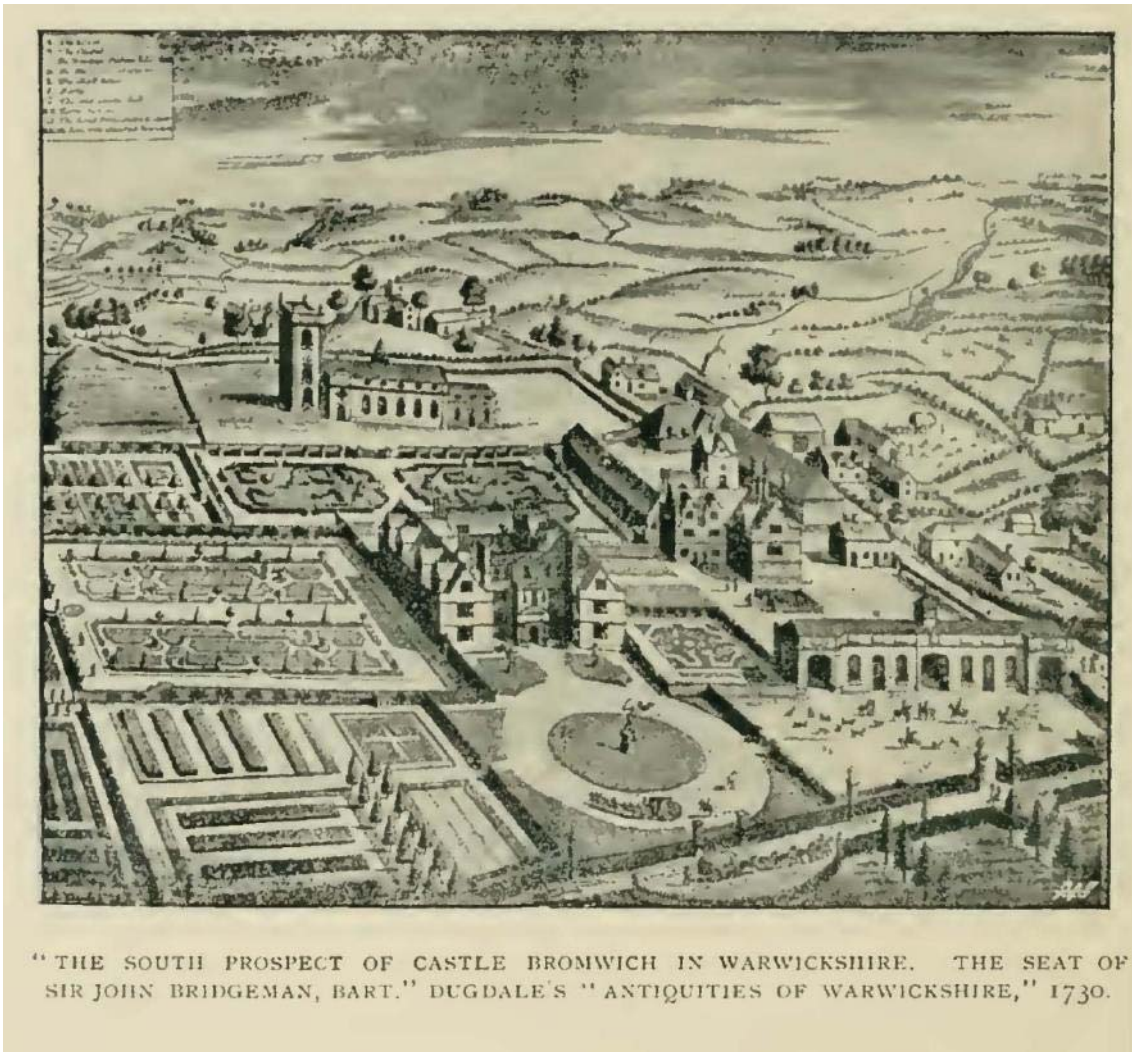
より大きな関心が払われたのはメロンの栽培である。あらゆるガーデニングの本にその栽培法について書かれているが、大きな成功を取めたとは言えないようである。パーキンソンは正直に「マスクメロンが育てられ始めている。しかし、最近この国では、多くの人々が完全なものを作ろうと試み努力しているようだが、まだそれを達成した者はほとんどいない」と言っている。種は4月に温床に植え、麦わらで丁寧に覆う；芽が出たら朝、1時間日光に当て、また覆い、そして「四つ葉をつけたら」、肥料がよく施されたなだらかな斜面に植える、そこは囲われた日のよく当たる場所で、しっかり育つまで鉢とか何かの囲いで覆う。サー・ヒュー・プラットは「メロンがテニスボールくらい大きさになった

ら、そこから先の新芽はすべて付け根で摘み取れば、メロンはとても大きく育つ」と書いている。また「ニコルソン・ガードナー氏」から学んだ方法についても書いている。「若いメロンは棟瓦の上に置くとよい、それにより地面から離し、反射熱が得られ」、あわせて種は蒔く前に24時間ミルクの中に浸しておくべきだと言う。パーキンソンによると、一番良い種はスペイン産で、フランス産ではないが、イングランドにもいくらかはあると言う。ジェラードは、「セントジェームズの女王の館」でファウル氏によって育てられた立派なメロンを見たと言ひ、サセックス卿の「ロンドンのバーマンズィ」で「たくさん」見たとも言ひ。メロンは通常、胡椒と塩で食べられ、「体に悪いといけなないのでワインに漬けておかれた」(*パーキンソン)。これらの「マスクメロン」の学名は *Cucumis melo* で、今メロンと名付けられているものと同じであり、「色は赤褐色、下は緑色、・・・深いシワと脈状・・・中の実は黄色で、そこだけが食用」である(†同書)。「メロン、すなわちポンピオン *pompions*」にはカボチャ *pumpkins* およびヒョウタンの全種類が含まれている。これらのものは、特に比較的貧困層の人々がいろいろに料理して食べた。パーキンソンによると、彼らは「上品な料理」として、種を取り出しピピンリングを詰めて一緒に焼いたポンピオンを食べた。

当時の野菜について何が好まれていたかを見ると、今の時代の評価とはまったく違ったものであった；今ではほとんど栽培されないムカゴニンジンのようなものが主役で、そのほかのものは大事にされなかった。ヒルの『庭師のための迷宮ガイド』のある章の見出しがこの事実を表していよう。「バックスホーン *buckshorne*、イチゴおよびカラシの種の蒔きと生育のためにはどのような手入れと技術が求められるか」。バックスホーンとは学名 *Plantago coronopus* [セリバオオバコ]、多くはサラダに使われ、「特に夏の季節のサラダに使われるが、それ自体は何かふさわしい役割があるとか味があるわけではない」。ヒルは続けて、イチゴを育てるのに必要なものは「ちょっとした手間だが、庭師が熱心に世話するならば素晴らしい実となり、それは生垣のキイチゴ *bramble* の実と同じくらい立派で大きなベリーを作り出す・・・夏の季節、クリームと砂糖で食べるベリーは人間にとってとても爽快だが、ワインと砂糖で食べる方がお薦めである」。カラシは種を取るためだけに栽培され、サラダ用の葉っぱを育てるためではない。酢と一緒に摺りつぶされた種は「魚であれ肉であれ、あらゆる肉というもの」と合わせて食べられた(*ジェラード)。ヒルはカラシで治せるであろう病気の長いリストを作っている。「朝の空腹時に飲むジュースはよい気分にする」。目がかすんでいる時に目に点眼することを彼は勧めるが、それはむしろ逆効果だと人々は思ったであろう。種の粉末を吸えば「頭が劇的にすっきりする」！

カブを意味するネイヴェュー *nauewes* [=navew] とターニップ *turnips* は別のものとして語られるが、この2つは同じもののようにヒルは述べている。「土地の性質によりネイヴェューがターニップに変化し、ターニップがネイヴェューに変化することはしばしばあった」。ケシは「キャベツの間の土床に種を蒔く」ことがお薦めであるとヒルは言うが、そのことはキャベツにとっては良いことではない。豆類は比較的貧困な層により依然として広く栽

培された。ただしインゲン豆については、ジェラードは 8 種類記載し、うち 2 種類はアメリカ産であり「貧しい人よりは金持ちの食卓でより多く見られた料理」であった。エンドウ豆は秋に食べるために真夏に蒔かれ、また次の春のために 8 月、9 月に蒔かれた。乾燥したエンドウ豆は「長期間の航海に出る人のため海上」で使用された。ランシバル豆は依然として多く栽培され、早い時期にできるのでヘイスティング（早生）と呼ばれる、緑と白のヘイスティング豆も栽培された。以下のものも人気のあった品種である；砂糖豆 the sugar peas、まだら豆 the spotted、グレー豆 the grey、皮なし豆、スコティッシュあるいはヒゲ豆 tufted、ローズ豆 the rose、早生のフランス豆 the early French、「これはフラム豆 the Fulham Peas とも呼ばれたが、それはその周辺の土地からはどんな量であっても一番早く出荷されたからで、ただ時には急ぎすぎて早生だったため未熟なままということがあった」（*パーキンソン）。「ヒヨコ豆」“Rams ciche” or “ciche pease” (*Cicer arietinum*) は栽培されることもあった。ターナーはイングランドではほとんど見かけなかったと言い、ジェラードは「我われのロンドンの庭園でも蒔かれたがそれほど一般的ではなかった」と言う。この「ヒヨコ豆」“Chick Pea”が人気を集めることは一度もなかった。ミラー [Philip Miller, 1691~1771 年 スコットランドの園芸家・植物学者] が 100 年後に書いたところによると、この豆はフランスとスペインでたくさん栽培されたが、イングランドでは蒔かれることはほとんどなかった。



[図7-2] 「ウォリックシャー州ブロミッチ城の南からの眺め。サー・ジョン・ブリッジマン準男爵の居城」 ダグデイル「昔のウォリックシャー」 1730年

実際の作業を行っている庭師に、果樹園の目的は、と聞けば、どの庭師も果物の十分な供給を確保することと答えることは間違いない；しかしローソンは「果樹園の主要な目的は天職たる仕事に疲れた人にとっての心からの喜びである」ということを誰も否定できないと言う；そしてさらに、彼自身一人の老人としての経験から、果樹園は「30年、40年にわたる人生の退屈さと重荷を取り除いてくれる」と言う。何とまあ魔法のような力がエリザベス朝の果樹園にはあったのであろうか！このような話を聞けば人々の関心はキッチンガーデンから離れ、ふたたびフラワーガーデンを横切り、その反対側の果樹園へと向かうであろう。果樹園の位置としては可能な限り注意深く北東側が選ばれた。その考え方は果樹の木々によってフラワーガーデンの比較的か弱い植物を守ろうとしたのである。また背の高い森の木、「クルミ、ニレ、オークとかトネリコ」が十分な距離をもってその奥に植えられたが、それは果樹園を守りながらもあまり日陰にしないためであった。このような

計画に基づいた庭園の一例がブロミッチ城のものであり、およそ 1585 年頃設計された。フラワーガーデンは館の前面にあり、その両側は背の高い赤煉瓦の壁により果樹とキッチンガーデンが見えないように隠され、その壁は今はずる植物ですっぽりと包まれている。これらの様子は古い計画図、すなわち鳥瞰図から見ることができ、また現在の姿を撮った写真からもわかる。この写真は真ん中あるいはフラワーガーデンから壁に向かって撮られ、壁はキッチンガーデンを完全に遮断している。



[図 7-3] ブロミッチ城

中央の庭園から石の階段をトントンと下まで降りると、低木の植え込みの中には、草の園路が横切り、そしてセイヨウヒイラギ、イチイ、ツゲ、シデ、セイヨウイボタの見事に刈り込まれた昔風の生垣、さらにはアーチェリー場、というか 180 ヤード続く緑の芝生の空間が広がる。果樹園は上の庭園ないしは中央の庭園の南西に位置し、キッチンガーデンと同じように庭園からは高い煉瓦の壁で切り離されている。

果樹園の周りを全部壁で囲うとその費用は膨大になる。それは「果樹園の範囲というのは庭園に比べはるかに大きく、費用も余計にかかるので誰でもができるという訳ではない」、ということで煉瓦の代わりに土壁、木製の柵、あるいは灌木の生垣などが代用された。ただし、パーキンソンは費用がかかるとしても煉瓦または石の壁を推奨している。その理由は「土地の有効利用と壁際に植えられる果樹からの利益によりその費用は短期間に回収できるであろうから」。「南の壁には最も弱く、最も早く実がなるアプリコット、桃、ネクタリン、5 月の早生のサクランボを植えるべきである。東と北、そして西には、プラ

ムとマルメロが壁の上に広がりそして留め金とか何らかの方法で壁にしっかりと固定する。これは太陽の反射光を直接浴びることができるようにするためである」(*ローソン『新しい果樹園』1618年)。このような壁の配置は南部地域にのみ当てはまることである。ローソンは彼の地域(ヨークシャー)では、栽培するのに一番適した果物は「リンゴ、梨、サクランボ、ヘーゼルナッツ、赤と白のプラム、ダムソンおよびブリス」であり、さらに注意すべき点として「我われはアプリコットとか桃とかは扱わないし、マルメロに至ってはほとんどいじらないのは、我われのこの寒い土地が好きそうでないからである」と付け加えている。壁沿いに果樹が仕立て上げられている雰囲気は当時の詩や演劇の中に出てくる。マーロー [Marlowe, 1564~93年 劇作家・詩人] は壁のサクランボのことに触れ、ベン・ジョンソン [Ben Jonson, 1572~1637年 劇作家・詩人] は『癖者ぞろい』 *Every Man in his own Humour* (第1幕第1場) において、ウェルブレッドからエドワード・ノウエル宛の手紙でこう書かせている。「北西の壁にある緑のアプリコットを夜昼なく数えることは、寝ずの番をしているあなたの父上だけにまかせてはいかがか」。このように果物を育てるといふ発想は最近になってからのことである。サー・ヒュー・プラットが1600年に書いたところでは「壁際で成長し、太陽の光を一杯に浴びて、冷たい風から守られているマルメロは、食べると実に美味しい」と言っている。ダーシー卿 [Thomas Darcey, 1467頃~1537年 修道院解散に反対し処刑] がイタリアから持ち帰ったこの秘密について問うなら、これはほかのすべての果物に当てはまるだろうか？

壁に対して仕立て上げられた、あるいは外側の生垣と平行して走る木々の前には小径があり、この小径は低く仕立てられた果樹の列によって仕切られていた。「セイヨウサンシユ cornelian cherry の木の低い生垣、あるいはグーズベリー、カラントの木、あるいは同様の木」または「ピピン種のリンゴ、白リンゴ、その他の品種のリンゴ」が横の径に沿ってずっと「植えられていた」。園路のコーナーにはあずまやがあり、休憩するためのカモミールや甘い香りのハーブの土手があった。小径には砂がきれいに敷かれ、木の下には「緑の草が美しく刈り込まれていた」。小径の脇のラズベリーとカラントの間の土地は「イチゴで点々と飾られて」いなければならない、とローソンは言う。実際のところ、果樹園はこうあって欲しいと思う形にすべてが整えられ、「人間の精神をリフレッシュさせる」のにふさわしく作られた。あずまやは庭園にあるものとほとんど同じようなものであり、しばしば高台の上に作られたのも同じであった。[シェークスピア『ヘンリー4世第2部』の中で] シャロウが、グロスターシャー州の彼の果樹園にある、そんな風に作られたあずまやで、ファルスタッフに対し「私自身で接ぎ木したピピン種の去年のリンゴを食べる」よう、堅皮リンゴ *Leathercoates* の一皿とともに勧める場面がある。堅皮リンゴは「大きくはないが、味がキリッとしてとても美味い優れた冬のリンゴである」(+パーキンソン)。

ピピン種のリンゴを長期間保存するには十分なまでの管理が必要だった。ローソンはその収穫法と保存法について次のように説明している。「軽いモミの木でできた長い梯子と収穫用のエプロン、それはリンゴを入れる体の前のポケットのようなものだが、あるいは

枝にぶら下げる頭陀袋、または底がネットになったバスケット、・・・枝を手前に引き寄せるためのフックを用意しなさい」。保存法については、リンゴと梨は「乾燥した屋根裏部屋で・・・山積みにして 10 日ないしは 14 日間甘くなるまで」置いておくこと。そして「きれいな柔らかい布で」拭いて乾かして、その後で麦わらを敷いた中に置くこと。サー・ヒュー・プラットが教えてくれる「皺のないリンゴの保存」法とは「聖ミカエル祭 [9 月 29 日] 後の満月まではピピン種リンゴは収穫しない；そうすれば 1 年中しぼむことなく保存できるだろう；これはブドウをはじめほかのすべての果物について言える」というものである。

「わが国の果樹園は」とホリズヘッドが書いているが「現在のようには良い果物に恵まれておらず、種類も多くなかった」。ほとんどすべての果物の品種の数は栽培によって増やされていった。リンゴの品数は「無限」であり、ジェラードとパーキンソンが当時栽培されていたすべての品種の名前を述べることは不可能だと言ったように、ジェラードが木版で作ったカタログを今さら作ろうと試みることは無用というものであろう。その木版カタログには「白リンゴの木」“Pomewater tree”、「ベーカーのディッチリンゴの木」“The Baker’s ditch apple tree”、「王様リンゴ」“the King of Apples”、「女王リンゴ」“The Quining, or Queene of Apples”、および「夏リンゴ」“the Sommer”、「冬のペアメイン」“Winter Pearmain”が掲載されている。パーキンソンは女王リンゴには 2 種類あり、両方とも「大きくて、美しく、赤く、とても味わい深い」と言い、かくてベン・ジョンソンはこの同じリンゴについてこう述べる：－

“Only your nose inclines

あなたの鼻が向かうのはただ一つ

That side that’s next the sun to the queene apple.”

太陽の光が当たる側 女王リンゴの方へと

パーキンソンは「ゴールドディングピピンはあらゆるピピン種の中で最高で一番」と書いている。そして夏リンゴ Summer、フレンチ、赤リンゴ類 Russet、斑点入り、黄色のピピンについても「素晴らしく、優良で、とても味わい深いこのようなピピンを知らない」と付け加えている。ほかの種類のリソゴについてここまで賛辞を惜しまないということはなく、「パラダイスリンゴ」“The Paradise Apple”については「薦めない」、「20 種類の甘いリンゴ、どれ一つとしてよくない」としている。フランス産のリンゴのいくつかを取り上げ、それらを全部一括りにして「ランビュルスリンゴ Rambures、カパンダリンゴ Capandas、カルアルリンゴ Calual、これらはみんなフランス産の美しく立派なリンゴである」とした。以下のものは、彼が「とても良い」、「美しい」、「立派」、「良い」、「とても味わい深い」とした中から選んだものの名前である。「ペアメイン、赤リンゴ類、ブロードディング Broadening、ケントの花 Flower of Kent、デイヴィー Davie、ジェントル Gentle、コスタードハーヴィー、ドゥザン、別名アップルジョン Deusan or Apple-John [2 年間持つ、しなびてか

らが食べ頃]、ケントのカドリン Kentish Codlin [料理用の細長いリンゴ]、そしてウースターリンゴ」。どのようなリンゴが最もよく知られかつ人気があったかは、当時の様々な文献から手軽に集めることができる。たとえば、

“In July come ginnitings and quadlings.” 7月には早生のリンゴ、青リンゴが出回る
- Bacon, *Essay on Gardens*. ベーコン『随想 庭園について』

“Ripe as a pomewater.” 白リンゴのように熟しておりました
- *Love’s Labour’s Lost* act iv. scene 3. 『恋の骨折り損』第4幕第2場
[scene 2.の誤り]

“I am withered like an old Apple-John.” こうしなびちゃあ、まるでしまい忘れた古リンゴだ
- *1st Henry IV*. act iii. scene 3 『ヘンリー4世第1部』第3幕第3場

“Pippins, caraways and leathercoat.” ピピンリンゴ、ヒメウイキョウの種、堅皮リンゴ
- 2nd *Henry IV*. act v. scene 3 『ヘンリー4世第2部』第5幕第3場

“And after pleasing gifts for her purvey’d
Queen-apples, and red cherries from the tree.”
Faerie Queene, Canto VI., fragment of Book VII. そして彼女が喜ぶ贈り物が用意され、それは
女王リンゴと、もぎ立ての赤いサクランボ
『妖精の女王』第7巻断章第6篇

“Tho’ would I seeke for Queene Apples unripe.” まだ熟していない女王リンゴを探し求めてみても
Shepherde’s Calendar, June 『羊飼の暦』6月

“Not yet old enough for a man, nor young enough for a boy: as a squash
is before ’tis a peascod, or a codling when ’tis almost an apple.”

一人まえの男としては幼すぎるし、子供にしては大人すぎる。

豆になる前のサヤエンドウ、色づく前の青リンゴ

Twelfth Night, act i. scene 5.

『十二夜』第1幕第5場

[訳注] シェークスピア作品は小田島雄志訳

料理用のリンゴは焼かれたり、炙られたり、そのほかいろいろ調理され、最上等の品種が今と同じように食事の最後にデザートとして出された。

“I will make an end of my dinner ;
There’s pippins and cheese to come.”
Merry Wives of Windsor, act i. scene 2.

わたしは ^ず 食事を完結すてくる。
まだデザート^ずのリンゴとチーズがあるはずだ。
『ウィンザーの陽気な女房たち』 第1幕第2場
[小田島雄志訳]

「最高の種類のリンゴが食事の最後のコースとして、立派な身分の家ではほとんどの場合テーブルに並べられたが、もしその家で何か珍しい、あるいは飛び切りの果物を育てているとしたら、それはみんなの前にお目見えし、味わわれることとなった (*パーキンソン)。リンゴ酒は依然として大量に作られており、最大規模の果樹園はリンゴ酒用リンゴのもの

であったが、実はこの果物は別の使われ方もされた。「リンゴの柔らかい果肉と豚の脂そしてローズウォーター」から化粧クリームが作られ、「美顔のために使われ」、「店ではポマードと呼ばれた」(†ジェラード)。

マルメロは今ではほとんど完全に無視されているが、当時は大変に注目されていた。ヒュー・プラットは、マルメロは「セイヨウカリンに接ぎ木するのがよいであろう」と言っている(セイヨウカリンをマルメロにではない、というのはヒル氏によって証明されている)。ジェラードは3品種を示し、パーキンソンは6種だが、「この国においてこれほど多くの素晴らしい用途のある果物はほかにない」と書いている。

梨の品種の多さときたらリンゴよりもさらにもっと多かった。ジェラードが言うところでは彼は「60種類もの梨を栽培している」人間を知っているとし、「それらはとても良いもので；疑う訳ではないが、もしその人間が数の多さを求めているとすれば、品質の悪いものも同じ数くらい一緒に栽培することになってしまうのではないか、・・・その梨を一つずつ別のものとして描写するには、智恵の使いであるフクロウをアテネに飛ばすか、番号なしの梨に番号を付けるようなものとなろう」。彼が考えていた8品種とは次のようなものである：「ジェニティンク Jennetting、セントジェームズ Saint James、ロイヤル Royall、ベルガモット Burgomot、クウィンス Quince、ビショップ Bishop、キャサリン Katherine、そして冬の梨 Winter Peare」。キャサリン梨は人気の高い品種で、「みんなに知られていた」が、それはサー・ジョン・サックリング (John Suckling, 1609–1641年) 作「結婚式にあたってのバラード」“A Ballad upon a Wedding”の次のような字句からよくわかる：－

“Her cheek so rare a white was on,	彼女の頬はとても白く
No daisy makes comparison;	どのようなデイジーも及ばぬほどに；
Who sees them is undone;	それを見た者は我を忘れた；
For streaks of red were mingled there,	赤の筋がそこに混ざっていたから
Such as are on a Catherine pear	それはキャサリン梨の表面のように
The side that’s next the sun.”	太陽の光が当たる側の

[訳注] 1641年、ボイル男爵とサフォーク伯爵の娘、マーガレット・ハワードの結婚を祝した詩。

いろいろな種類の「ボンクレティエン」“Bon Cretien”は中でも一番栽培された品種である。パーキンソンが10ポンドの重さの梨とかサイオンの「ボンクレティエン」として言及しているある種類のものが「そのように呼ばれているのは、接ぎ穂を取りに行かせた使者がほかに何も持ち帰らなかったもので、使者の経費をかけて取り寄せたことが主人にとってとても高くついたからである」。

[訳注] ボンクレティエンとはフランス語で善良なるクリスチャン。サイオンとはエルサレムにある神聖な丘、天国。

同じ梨がどの地方にも向いていたということではなく、ある地域でほかの所よりもよりよく育つというような種類のものもあった；たとえば、アランデル Arundell とロバート Robert はノーフォークとサフォークで特によく育った。ウォーデン梨は料理用の梨としてこの時代でも一番高く評価されていた。パーキンソンは「焼いたエルサレムの梨が一番良いウォーデン梨と同じくらい赤い、とエセックスのウィリアム・ウォード氏は私に断言した。彼はホワイトホールの王室穀物倉の主任管理係である」と記している。パーキンソンのリストにはおよそ 65 種類掲載されており、それをざっと見ると、その中には既に引用されたものもあるが、19 世紀になっても馴染みの深い名前も見られる。たとえば、ボンクレティエン、ベルガモット、ウィンザー、「ガーゴネル梨」“Pear Gergonell”などである。梨のいくつかの品種については、現在大英博物館に所蔵されているドドエンス [Rembert Dodoens, 1517~85 年 フランドルの医師・植物学者] 著『植物誌』*Herbal* の中にライト [Henry Lyte, 1529 頃~1607 年 植物学者・古物収集家] によって記録されており、そこには彼の注釈が加えられ、かつ翻訳にあたって彼が加えようとした変更が残されている。彼が手書きした梨の名前のリストはその子孫によっても保管されており、それを見るとどれほど彼がこの果物に注目していたかがわかる。ブレイン [William Bulleyn, 1515 頃~76 年 医師] は、その健康に関する著書*において、「ノリッジ市で栽培されている梨の一種、これは黒衣托鉢修道士の梨と呼ばれ大変美味しく心地よく、そして有益そのものである」と述べている。「同市の医師であるマルセイドゥ先生の考えでは、それらの梨はイングランドのどこの土地のものとも比べても飛び抜けて一番優れているということであった」。

*『健康の管理と題された新しい本』ウィリアム・ブレイン 1558 年 *A newe Book entituled the Governement of Healthe*

ブレインはノーフォークで栽培されるサクランボについても所見を述べている。「ケント地方では多くの果物が栽培されている。それはノリッジの近くのケトゥレンハム（+ケタリングム）という町でも同様である」。果物栽培の改良、とくにサクランボの改良が進められたのはこれらの 2 つの地方のユグノー教徒の影響と言えよう。また、この頃から人気が高まりつつあったホップ栽培の進展もこれらの外国人のおかげと考えられよう。サクランボについては何品種かのものが栽培され、中でも一番よく知られていたのはフランダース Flanders あるいはケント Kentish、スペイン Spanish、「ギヤスコイン」“Gascoigne”、モレロ Morello [クロサクランボ]、加えて「イタリアから初めて持ち込んだ人の名にちなむルーク・ウォード Luke Warde のサクランボ」（キジェラード）と呼ばれる品種であった。パーキンソンは 35 種類の名前がつけられた品種について書いている。エリザベス女王がベディントンのサー・フランシス・カルーを訪れた際、サー・ヒュー・プラットが彼のことを「あのよく気がつく騎士の気配り」と言い表した理由を説明している。サー・フランシスはサクランボの木を湿ったキャンバス地のテントで覆い、果物が熟するのを遅らせ、「女王陛下の来訪が確定したらテントを」初めて撤去することとしたのは、「イングランドで

サクランボの季節がすべて終わった少なくとも 1 か月後でも、女王陛下がサクランボを召し上がることができるようにするためであった」。

「プラムの」庭園あるいは栽培用の土地には「多様な種類が植えられており、白いもの、黄色のもの、黒いもの、栗色のもの、明るい赤あるいは澄んだ赤色のもの；大きいもの、小さいもの；甘く乾燥しているもの、瑞々しくキリっとしているもの、そしてそれぞれに名前がつけられている。野生のプラムにはそういうことはまったくなく、スローズ *slose*、ブリーズ *bullies*、スナッグス *snagges* と呼ばれた」 (§ ライト『植物誌』 *Herbal*)。プラムの数が大幅に増えていたことはこのような記述から見ても明らかである。ジョン・トラDESCANT はすべての果物と同じくプラムを大々的に栽培していた。彼 (II パーキンソン) は「耳にするすべての一番珍しい果物を手に入れるためなら驚くほど労を惜しまなかった」；さらに「オールド・ストリートに住んでいるジョン・ミレン氏は、ジョン・トラDESCANT やその他の人々が良い果物を持っており、そこから一番良いものだけを自分自身のところに貯蔵し、どのようなものであっても十分に供給できた」。ジェラードによると、プラムの品種が一番多いのはトゥイッケナムのヴィンセント・ポインター氏の庭園であるが、「私のところにもそれらの珍しくて上等なものがない訳ではない」とも付け加えている。ミラベル *Mirabelle* [セイヨウスモモ]、すなわち「ミロバロンスモモ」“*Myrabolane*”が栽培された。パーキンソンは 61 種類の名前を挙げているが、そのすべてを推奨しているのではない；いくつかはぎりぎり「まあ良い味」、別のもは「水っぽい」、そして「マーゲイト *Margate* プラムは 100 の中で最低」という具合である。リストの中には「マスル」プラム“*Mussel*”が含まれており、これは今で言う「マスル」“*muscle*”で接ぎ木に多く使用され、それとダムソン、「ペルディゴン」“*perdigon*”が含まれていた。この「ペルディゴンは上品で立派なプラムで、早生、黒っぽく、大変味が良く」、ペルディゴンヴィオレットアティフ *Perdigon violet Hâtif* などの親であることに疑問の余地はない。

アプリコットは既に見てきたように、チューダー朝時代にこの国にもたらされ、「イングランド全土にわたり多くの郷紳の庭園で」栽培された。「グレートアプリコット」およびパーキンソンの 2 種類のマスコリン *Mascolines* は今なおよく知られているタイプである。彼は全部で 6 種類に分類している。アルジェアプリコット *Argier apricock* は「ムシュムシュ」“*Musch Musch*”タイプのものである。これはジョン・トラDESCANT が「1620 年、海賊退治に派遣された艦隊とともに自ら志願して行ったアルジェリアの航海からの帰り」に持ち帰ったものである (*パーキンソン “*Argier*”=*Algiers*)。サー・ヒュー・プラットはこの果物の栽培についてたくさんのヒントを与えてくれている。彼によると「接ぎ木したアプリコットが一番よいが、実生からでもそれなりのアプリコットが穫れる」と書いた。また：「牛糞と馬糞を十分腐らせたものを、細かい土とクラレットワインの酒粕をほぼ半々にしたものと混ぜて、1 月、2 月、3 月に木の根をむき出しにして；それからこの混合物をアプリコットの根に与え、そしてそれを普通の土で覆う。このようにして、今まで実がつかなかったアプリコットの木もたくさんの実をつけることになった。・・・これがアンドリュ

ー・ヒル氏の手法であった」。アプリコットに関する彼のもう一つの観察も記録しておく価値がある。「1本のアプリコットの周りをプラムが取り囲むように、プラムの木々の真ん中にアプリコットを植える・・・そして、適切な季節になってプラムの木の間で育ったら、アプリコットの木の枝を1本か2本、プラムの木1本ずつに接ぎ木し・・・穴を適度に練ったローム土でふさぐ：・・・次の年、アプリコットから枝を切り離し・・・プラムの木の頭を適切な時期に取り払い・・・そうすれば一本の木から数多くのアプリコットの木を得たことになる」。後になって「アンドリュー・ヒル」は再び引用されるが、彼のアドバイスは木を東側の壁際に植え、その木を「大きな帆布で・・・夜とか寒い天気の時」は守ることというものである。プラットは、少し普通ではないがとしながら、「サー・フランシス・ウォルシンガム [Francis Walsingham, 1532頃~90年 エリザベス女王の重臣] は各種のアプリコットを南側の壁際に植えること、その枝も、ブドウと同じやり方によって、壁に対して持ち上げること、それによりプラムが3週間から4週間ほかのものより早く熟す」と述べている。1611年には「ハンプトンコートにある国王陛下の蒸留酒製造所と庭園の管理人であるウィリアム・ホーガンに100ポンドが支払われたが、これはその庭園の壁際に見事な実のなるアプリコットの木、桃の木、プラムの木、ブドウを植えるための支払いであった」*。

*ジェームズ1世, 王室会計支出文書, F. デヴォンによる, 1836年 Issue Rolls of the Exchequer, By F. Devon

ジェラードは4種類の桃を描いている。「白桃で白い種の周りに果肉があるもの；赤桃で果肉が見事な赤色で、味はワインのようだから飛び切り嬉しいもの；果肉が金色のドーアン桃 D'auant；最後に黄色の桃、外側が黄色で中側も同じく黄色・・・この種のほかのものに比べ最高に嬉しいのと味も最高」。彼はネクタリンのことを一言も触れていないが、パーキンソンの頃にはとてもよく知られるようになっていた。6種類のものが一つの章に記述されており、ただ「これらは知られるようになってからそんなには長くは経っていない」と言っている。彼は20種類の桃を示し、そのうち6つについては木版画に描かれている；そのうち2つは同じ皿に乗っているアプリコットよりもかなり小ぶりである。プラットは、ナッツ類に接ぎ木した桃は種なしになるであろうと言う一方、次のような話はまったく信じていなかった。すなわち、自分自身でその方法を書いておきながら、花が咲く頃、3日間ひっきりなしにヤギの乳で水やりがなされた桃の木にはザクロがなるという話である。桃の栽培に関し彼のその他の観察はおおむね実用的かつ正確である。彼によると、桃は粘土の土壌を好み、根が水浸しになると枯れてしまうと言う。桃は実生からも育ち、「標準的な桃」がなるが、プラムの台木に接ぎ木すると一番よく育つ。ベーコンはネクタリンについて、「桃やメロコトン melocotones」と一緒に9月にできると述べている。パーキンソンはこの後者のメロコトンは「黄色のきれいな桃であり・・・ほかの桃よりも味が良い」と書いている。

唯一の「カラント」“curran”、とジェラードがそう呼んだものは、小さなブドウすなわ

ちコリント産のカラントであり、ブドウの仲間である。赤いカラントはグーズベリーとかフラベリー-Flaberries の名で出てくる。しかしながら、パーキンソンはこれに1章を充て、これと「八百屋で売られている」ものとの違いを説明している。彼は、赤、白、黒の種類について書き記して、白いものが「より好ましく・・・なぜならより上品で一般的でもないから」と言っている。ラズベリーの赤と白は「夏の季節、健康な人と同じように病人にとってその味覚を喜ばせてくれる午後の食べ物として」食された (*パーキンソン)。セイヨウサンシュユ cornel tree あるいは Cornelian Cherry (*Cornus mas*) はこの頃もたらされ、果樹園の中で、バーベリー [セイヨウメギ]、サービスベリー [ザイフリボク] service berry、アーモンドの木と並んでその居場所を確保した。

この時代の果物を足早に振り返ってきた最後に、ブドウ畑とブドウについていくつか述べなければならない。多くの大規模な庭園にはブドウ畑と一緒に作られていた。バーナビー・グーゲはブドウは例外なくきまって庭園の西側に植えられたと言う。そして『尺には尺を』第4幕第1場の中に出てくるブドウ畑の場所がまさにそのようになっていることがわかるのは興味深いと言える。

“He hath a garden circummured with brick,	あの邸には煉瓦塀で囲まれた庭があり
Whose western side is with a vineyard back'd;	その西側は葡萄畑に接しております。そして、
And to that vineyard is a planced gate,	葡萄畑に入るには木戸を通らねばなりません、
That makes his opening with this bigger key.	それはここにもっております大きな鍵で開きます。
This other doth command a little door,	またこちらの小さな鍵で、その葡萄畑から
Which from the garden to the vineyard leads.”	庭に通じる門を開けることができます

[小田島雄志訳]

ジェラードは彼が言うところの「耕された」あるいは「肥料が施された」ブドウの5枚の絵を載せている。彼のアドバイスは「根のあたりに出ている隆起部を削ぐことで豊かな実りが得られる」というものである。パーキンソンのリストには23種類の名前が載っている。彼によると、トラデスカントは20種類栽培したというが、「それらをどう呼んだらよいか、どのような名前でも呼んだらよいか全然わかっていなかった」。「普通のブドウ、白と赤の両方とも、ヴァージュースの材料として野生リンゴより優れており、我われにとってワインとしては適していない」このブドウは、おそらくブドウ畑で通常栽培されていたものであり、優良な品種は特別な庭園でだけ見ることができた、とこれらの昔の作家たちは言うであろう。パーキンソンのリストには黒と白の「マスカダイン」“Muscadine”と「フロンティニヤン」“Frontignack”が載っており；そのほかの名前としては「クラレットワインのブドウ」、「ラインワインのブドウ」などが挙げられる。プラットはブドウを保存するための何種類かの方法を示している一砂で覆われた壺の中に、リンゴに突き刺した棒の端に房を吊り下げておく；あるいは油紙で房を包んでブドウの木で保存することもで

きると彼は言う。彼は繰り返しブドウ畑のこと、およびどのようにそれを「管理し」植えるかについて言及している。彼が果樹園とブドウ畑の両方を一緒に分類しているところを見ると、ブドウ畑が一般的ではなかったとはとても言えない：「ポインター氏がアナウサギを果樹園で飼っているのは、草が高く伸びないようにしておくだけのためであった；・・・ブドウ畑においても、草が伸びてくるたびに浅い鋤が地面を掘り起こすために使われたが、果樹園やブドウ畑で草が生えないようにすることは、費用がかかり過ぎないのであれば、はるかに望ましいと私は思う」。プラットは、イングランドのワインが大陸のものほど良くはないとすべき理由は何もない、との意見を持ち続けた。彼はイングランドでワインがうまくいかなかった原因をブドウの剪定のやり方のまずさに求めており、「失敗の全部の責任とまでは言わないが、自分自身に向けられた最大の責任をきちんと取り除くべきところ、まったくもって理由なく土壌のせいだと不当な非難を加えるという、このわが国民のとんでもない怠慢と鈍感による無知」を非難している。

ウィンザーとウェストミンスター王室庭園に付属するブドウ畑はまだ隆々たる姿を誇っていた。1618年にはウェストミンスターの「ブドウ庭園」の中に養魚池が作られ、これは「国王の鵜、ミサゴとカワウソを飼うためであった」（*ジェームズ1世, 王室会計支出文書, F. デヴォンによる, 1836年）。サリーのアウトランズにもブドウ畑があったようで、それは1619年、そこにある国王の庭園に「新しく珍しい果物、花、ハーブ、樹木を植えること」および「ブドウの木の剪定、管理」のための支払いが行われていることからわかる（+同書, 7月23日, 1619年）。ソールズベリー第一伯爵はハットフィールドでブドウ畑を作っていた。それはリー川の北側の土手の南向きの斜面にある土地の一画であり、セイヨウイボタとスイートブライアーの生垣で囲まれていた。ハットフィールドは1607年、ジェームズ1世によりセシルに与えられていたが、これは国王が格別に気に入っていたティオボルズと交換されたものである。ハットフィールドがこのような形で所有権が変更されたのはこれで2回目のことであった。ノルマン征服以前には荘園はイーリー大修道院の所有であり、イーリーが司教職になった後、ヘンリー8世の時までは司教はハットフィールドに居を構えた。ヘンリー8世もこの場所を所有することを望み、司教と土地の交換を実行した。イーリーは昔ブドウで有名で、何世紀にもわたりハットフィールドにもブドウ畑が存在していたことは疑う余地はない。そこは教会の土地であったから、セシルのブドウ畑は決して新しい実験ではなかった。フランス大使の妻であるドゥ・ラ・ボデリ夫人が新しいブドウ畑に植えるために3万本のブドウの木を送ったが、そのことはセシル宛の次の手紙の中で述べられている（*ソールズベリー侯爵所有の私家文書より）：・・・「昨日の閣下の演説、すなわち閣下のブドウの木に関し、ドゥ・ラ・ボデリ夫人に感謝の贈り物をされようとされていることを踏まえ、閣下がどの程度の御礼されるかについては、自ずとそれにふさわしい榮譽の程度というものがありますので、私がおの価値をたったの40ポンドと査定して、この事柄を思いもかけず低く評価したことによってご判断を誤らないようにしなければなりません。手遅れになる前に閣下にお知らせした方がよいと思われまはすのは、私が2万本につい

て 1000 本当たり 8 クラウンと数え間違いしており、実は運搬その他を除いて約 50 ポンド・スターリングになります。昨日大使より彼の部下であるドステル氏を通じ、さらに 1 万本が閣下のために私宛に送られるよう手配したという伝言がございました」。この本数はブドウ畑に植えられる数を越えていたので、種苗園で保管しておいて後で「問題があったり死にかけている」仲間の場所に移植することとされた。マスカットなどほかのブドウは、それまでイングランドでは栽培されておらず、トラデスカントによりパリから持ち帰られた。彼は当時セシルの庭園の管理者であり、彼もまたフランスの女王より 500 本の木を受け取った；多分このプレゼントを持ってきたと思われるピエール・コリンとジャン・ヴァレは終生ブドウ畑の植栽と管理に携わった。このブドウ畑は長い期間管理されていなかったようで、これに関する一家の所蔵文書における一番最後の記録は 1638 年の日付となっており、その年にハットン夫人がブドウの切り枝を送っている。

17 世紀初期の作家たちの努力にもかかわらず、ワイン文化はイングランドでは実際のところまったく復活することなく、ブドウ畑は段々と作られなくなった。その後のブドウ畑というものは散発的で数も限られていた。ブランデーは 19 世紀にビュリーで製造されたと言われ、またフェアチャイルドは 1722 年、ホクストンに立派なブドウ畑を所有していた。これらはワイン文化への真剣な取り組みとしては多分最後に近いものであったであろう。

この時期の著作を見ると、か弱い植物を保護し守るためのアイデアが書かれていることにまず気がつく。これは少し経つとオランジェリー [オレンジの温室栽培室] や温室へと発展し、最終的には暖房温室へと発展した。サー・ヒュー・プラットは特に、その著書『エデンの園』 *Garden of Eden* の第 2 部で、これは 1660 年まで出版されなかったが、家の中で植物を育てる可能性、ジリフラワーとカーネーションを早咲きさせるために部屋の中で火を使う可能性についてたびたび述べている。「私はジェイコブ氏を前から知っているが、彼はガラス張り温室を持っていて、温室の火に近い部屋を利用して冬中カーネーションを咲かせている」と書いている。ホリンズヘッドは当時の果樹園を称賛するかたわら「ここでケイパー [セイヨウフウチョウボク] capers、オレンジ、レモンを見たし、また野生のオリーブが栽培されていると聞いた」と言ったが、寒さからどのようにして保管されているかについては語っていない。ジェラードもオレンジとレモンのことを説明しているが、彼は正直なのでこれらがイングランドで育つと言いきるようなことはしなかった。ただし、オレンジは少数ながらこの国においても栽培するのに成功した。パーキンソンは果樹園に関する論文の中で次のように書いている。「皆さんに考えて頂きたいのは、オレンジだけは、シトロンとかレモンの木のことでなく、各地で我われが得た経験に照らして、オレンジの木は尋常でない世話をして大事にすれば残るが、一方ほかの 2 つのどちらも、どのような方法によっても長期間はもたない」。さらに続けて、「オレンジの木は大きな四角い箱」の中に入れて「横の鉄製のフックであちらこちらへと持ち上げ・・・冬の間家の中あるいは囲われた回廊の中に置かれなければならない・・・ただし、テントとか粗末な囲い

などでは保存できないであろう」。プラットが勧めるところでは、もし凹面の形をした壁で、表面を反射するように鉛とか錫で覆った壁があれば、それに沿ってオレンジを植えれば「わが国の寒い気候でもうまく実をつけるかもしれない。あえて問うなら、もしこれらの壁が都合よく、たとえば台所の火でいつも暖められているように作られているならば；煙突につながる構造のように作られているならば、実が熟す上で少ししか役に立たないということもないであろう」。

レモン栽培の実験は、バーリー卿 [ウィリアム・セシル] によって試みられた。木がどのように調達されたかの歴史が書き残されている興味深い手紙が現存している。セシルは当時パリにいたトーマス・ウィンダバンク [Thomas Windebank, 1538~1607 年] への手紙、1561-62 年 [原文のママ] 3 月 24 日・25 日付けで、次のように書いた。自分の息子トーマスから聞いたところ、カルー氏 [Carew, Caroo, Caro] が何本かの木を本国に送らせるように段取りしているところで、「私はすでにオレンジの木を 1 本持っており；もし値段がそれほど高くないなら、レモンとザクロとマートル [ギンバイカ] myrt の木を 1 本ずつ手に入れるようお願いできますでしょうか；そしてカルー氏の木と一緒にロンドンの本国宛てに送っていただけるようご助力いただけますでしょうか；あわせてその前にこれらの木の使い方、管理の仕方、手入れの仕方について書面で詳しく教えていただけますでしょうか」。この手紙へのパリからの返事は、1562 年 4 月 8 日付けで：－「閣下、貴殿のご指示に従い、カルー氏の使用人を通じ、彼のご主人の木と一緒に、貴方のもとへ、レモンの木 1 本とギンバイカ myrte の木 2 本を 2 つの鉢に入れてお送りしました。その値段は 2 本で 1 クラウン銀貨、レモンの木は 15 クラウン銀貨です。この値段について、閣下、貴方が多分最初に思っておられたものより高いと思われるとしたら、そうではなく、手に入るものの中では一番安く、ほかのフランスの貴族が同じ所から買ったものと比べても安く、彼らは 6 本の木に 120 クラウン銀貨を支払っております。・・・さてこれを買われた結果、もし木が元気に育つなら・・・お金を払って損したと思われることはないと思います。もしそうでない場合には、このようなことにこれ以上お金を失いたくないという気持ちにさせるでしょう。この木は私の大使閣下とカルー氏が選びました」。その上で木の「手入れ」の仕方について示しており、それは夏の間は囲われたような場所に置き、9 月から 4 月までの寒い時期には家の中に持ち込むことというものであった。もし桶に土が一杯になっていれば、「桶の箍^{なご}が外れて土がこぼれないように注意して、この 2、3 年は」植物はその中に植えたままにしておくことができる。レモンは「すでに 2 回接ぎ木され 4 年目なので、今年は実がなることが期待されよう」。これらの特定の木がどのように元気に育ったかは知る由もないが、バーリー邸の一番古くからある建物の一部は「オレンジコート」と名付けられ、それは多数の大きな窓のついた長い部屋で、木はそこで冬の間、守られていた。



ORANGE COURT AT BURGHLEY HOUSE. FROM A PICTURE AT BURGHLEY.

[図 7-4] バーリー邸のオレンジコート バーリー所蔵の絵画

以上がオレンジとレモンがわが国に持ち込まれた最初の事例であるが、これらの木は何年も先になるまで、この国において極めて希少な木であった。手紙の中に出てきたカルー卿は最初にこれらの木を所有した人と言われている。1604年4月19日の日曜日、ジェームズ1世はホワイトホール宮殿でカスティリャ王国の大臣のための祝宴を催した。「最初に国王がしたことは大臣にメロンと鮮やかな緑の枝についたオレンジ6個を進呈し、これらはイングランドに移植されたスペインの果物ですと話した」・・・「そこで大使はメロンを半分にして両陛下と分かち合った」*。

*大英博物館所蔵のスペイン写本の翻訳 ブレンチリー・ライ著『外国人から見たイングランド』所収

ジェームズ1世は絹の産業振興の観点から、クワの栽培を推進しようと試みた。彼はフランスから木を輸入した。これらの木は遡ること100年ほど前にイタリアからプロヴァンスに持ち込まれたもので、アンリ4世(1589-1610年)の治世下でオルレアン地方に持ち込まれた。ジェームズ国王は1609年11月、イングランドのすべての地方の州知事に御触れを出し、次のような発表を公にするよう命令を下した。すなわち翌年3月にクワの木1000本が各地方の町に送られるから、可能な者は全員その趣旨を言い含められた上で木を買わなければならないこと、その値段は1本あたり3ファージング銅貨[1/4ペニーの英国硬貨]、100本で6シリングとされた。彼はまたクワの栽培に関する論文を出版させたくわ。国王は見本となるよう、ウェストミンスター宮殿の近くの4エーカーの土地にクワの木を植えた。935ポンドという巨額の費用が、その土地を堀で囲い、土地をならし、木を植えるために使われた(†ジェームズ1世,王室会計文書,F.デヴォンによる)。ハットフィールドの写本の中に、クワの木の輸入に関する1606年のものとされる特許状の下書きがある：-特許状の保有者は「白クワ white mulberryのみ、そして白クワの植物自体で、別の種類の接ぎ木ではなく、一年経ったもの」を持ち込むことが許されていた。国王は毎年最低100万本を輸入する計画で、それを植えさせて管理させ、1本あたり1ペニー取ることは考えていなかった。セシルは国王の計画をさらに進めて、彼自身1608年にはフランスより500本の木を買い求めたが、それがどこに植えられたかはわかっていない。1608年の王室会計文書には蚕のための木と植物が100ポンド計上されており、1618年には「50ポンドがティオボルズの庭園の管理者に対し、国王の蚕のための場所づくりとクワの葉を与えた対価として」計上されている。クワの木だけがまとまって植えられている姿はイングランドの多くの地域の庭園に広く見られるが、これはクワの木を人々に知ってもらうための努力が行われている時に植えられたことによるものであろう。ただし、何本かの木は、これよりさらに古く、今なお存在している。ハットフィールドの西庭園にある4本の木は、伝統に従いエリザベス女王によって植えられたものである；サイオンハウス[ロンドンにあるノーサンバランド公爵の旧邸；テムズ川をはさんでキュー植物園の西側にある]の庭園にある1本はこの場所がまだ修道院であった頃植えられたものであり、ヨークシャー州リブストンにある見事な古い木は、テンプル騎士団またはそれを引き継いだエルサレム・セントジョ

ン騎士団 [ホスピタル騎士団] の所有であった頃に遡る。シェークスピアはこの果実について2回触れている：－

“Volumnia·· thy stout heart	ヴオラムニア…お前のかたくなな心も
Now humble as the ripest mulberry	やわらいでくる－熟しきったクワの実のように
That will not hold the handling.”	もちあつかえないほどやわらかに－
<i>Coriolanus</i> , act iii. Scene2.	『コリオレーナス』 第3幕第2場

[小田島雄志訳]

もし彼にとってこの果実が馴染みがなかったならば、その天才的なペンをもってしてもこの変わった果実について一度では描き切れなかったであろう。

イグサ (*Juncus* の様々な品種) を床に敷く習慣は中世においては極めて一般的なことであった。イグサに対する支払いの記録は頻繁に見ることができ、たとえばヘンリー3世の第10年、1226年には「男爵の寝室に敷く藁とイグサに12 シリング」、またサー・ジョン・ハワード [John Howard, 1425 頃～85 年初代ノーフォーク公] の家計文書には、1464年に「寝室のイグサに16 シリング支払い」という項目がある。メアリー女王が滞在中の寝室はイグサが敷かれ、エリザベスの寝室も同様であったが、そこには豪華なトルコ絨毯が加えられていた。エリザベス王女の会計簿の1551-2年には、「イグサの担当に対し」少額の記入がなされている。客用の寝室は常に新しいイグサが敷かれた：－

“So here a chamber . . . ,	そう、ここは寝室 . . . ,
* * *	* * *
I shall warande fare strewed	私は床がきれいに敷かれることを約束しましょう
It should not else to you be showed.” *	そうでなければ、それはあなたには見せられない*

* 『タウンリー・ミステリー』 *Towneley Ministry* [Mysteryの誤りか。The Towneley Cycle of the Mystery Plays, or the Wakefield Cycle: Thirty-Two Pageants の略。タウンリー・ミステリーとは中世イングランドの聖書に基づく演劇。ミステリーの語源は専門職業 *mestier* (metier or trade)。タウンリーは写本所有の一族の名]

『じゃじゃ馬ならし』ではペトルチーオが、結婚直後、グルーミオのところに使用人を送り、花嫁のために家を整えさせる場面がある。グルーミオの到着が遅れ、急いで声を掛け「料理人はどこ？夕食の準備はできているか？家はきちんとなっているか？イグサは敷かれたか？蜘蛛の巣は掃除したか？」これは長い間の習慣であったが、ヘンリー8世の治世になり単にイグサを敷くことだけでなくそれを改善することが流行となり、甘い香りのハーブや花が付け加えられた。エリザベスの時代になるまでには、この方法が大いに流行った。1516年までには「花とイグサ」がヘンリー8世の「寝室のために」買われた。1552年、

エリザベス王女の会計簿にはトーマス・ブリスリー何某に対し「同じ目的のために花とハーブが彼により納入された」数多くの支払い記録がなされている。1565年と1567年には合計10ポンドがロバート・ジョーンズに対し、枢密院の会議室を飾る大枝と花を用意するために支払われた（*枢密院議事録, 新シリーズ第7巻1893年 Acts of the Privy Council. New Series）。エリザベス女王は、床に敷き詰めるための花が常に用意されていることを大変好んだため、お付きの侍女を固定給で雇い、花をいつも準備させておいた。この官職は1713年まで廃止されることはなかった。それは「女王のためにハーブを敷き詰める」官職にあったアリス・ブリザード宛の手紙が国立公文書館に現存しているのでわかる。パーキンソンは、どのような花が結び目花壇にふさわしいかを書いている中で、ニガクサ Germander とヒソップ Hyssop の両方について語っており、「これらは切って何らかの形で一定の分量を手元に置いておかなければならず、切花は家に敷くハーブとしてたくさん使われ、そうすれば家はきれいで甘い香りがする」。

家というものは多くのハーブと花により香り豊かであったに違いなく、それは床に敷かれただけでなく部屋の花瓶にも生けられた。ラウズリ会計簿の1556年には「花用の青い壺1シリング」という項目がある（†『考古学』第36巻）。パーキンソンはイチイおよびツゲの両方とも「冬の間、家を飾る」ために使われると言う。花は壺や花瓶に生けられただけでなく、多くの花が小さな花束に上手にまとめられたり、個人的な飾りとして身に着けられた。花輪や花束、よい香りの花束に使われたスマレは「見た目に楽しく、香りも気持ちがいい」（※ジェラード）。「プリムラアウリキュラはその一つ一つがそれ自身でまさに香りのよい花束のようであり……可愛い甘い香りに包まれていないものはなく、それは喜びをさらに大きく膨らませ、それを身に着ければ飾りとなる」（§パーキンソン）。またポタン穴にさすもう一つの珍しい飾り花はバイモであり、パーキンソンは「この花の喜びを愛する物好きな人々」により「海外では身に着けられた」と言っている。

花の中には特定の意味が持たされているものがあり〔原文 attached はミスプリか、第1版では attached〕、そのため特別な機会にはその花が身にまわれ、今もその習慣がすべて死に絶えたという訳ではない。そのような昔の習慣が残っている興味深い例として、秘密結社オッドフェロー（マンチェスター統一団）の会員が、仲間の葬式においてタイムの小枝を運び、それを墓の中に投げ入れるというものがある。その昔は、ローズマリーが葬式に持って行かれたものである：－

“There’s rosemary, that’s for remembrance,”

ローズマリーよ、それは思い出の花

〔『ハムレット』第4幕第5場〕

とオフィーリアは言い、そして不思議なことにそれは結婚においても身に着けられた。クリーブスのアン〔Anne of Cleves, ヘンリー8世の4番目の妃〕が花嫁としてグリニッジに到着した時、彼女は「ローズマリーの枝が一杯設えられた、ゴールドと宝石で作られた小さな冠を頭に」被っていた。エリザベス女王が確かにその目で見たケニルワースでの田舎の結婚式では、「各人が緑のエニシダ broom の枝を左腕（そちら側が心臓に近いので）に結びつ

けていたが、それはローズマリーがその地では少なかったからである」。

“Down with the rosemary and bays	追憶のローズマリーと月桂樹ではなく
Down with the mistletoe;—	我慢のヤドリギではなく
Instead of Holly, now upraise	用心深いヒイラギに代わって、さあ称えよ
The greener box, for show.	緑深まるツゲ、これを見よとばかりに
* * *	* * *
When yew is out and birch comes in,	悲しみのイチイが去り、光のカバノキが来る時
And many flowers beside	そして多くの花たちが加わり
Both of a fresh and fragrant kin	瑞々しくそして香しい仲間
To honour Whitsuntide.	聖霊降臨祭を称えまつるため
Green rushes then, and sweetest bents*	そして緑のイグサ、甘い香りのベントグラス*
With cooler open boughs,	涼やかに広がる枝
Come in for comely ornaments	中に入って美しい飾りを作るために
To re-adorn the house.”	家を飾り直すため
HERRICK, <i>Candlemas Eve</i>	ヘリック『聖燭節の前夜』
*A sort of grass. (<i>Agrostis</i>)	*芝草の一種 (ベントグラス)

パーキンソンは、ニオイアラセイトウ wall flowers のことを書いている時、再び家の中の花のことを述べている。「花の甘い香りゆえ、香しい花束と家を飾るために使われることが一般的である」と言う。「大型のアイリス」“greater flag”も同様の目的のために使われる。植物は家の中でも育てられ、プラットは、どのような植物が栽培するのに一番適しているかを示す長文の一節を書いており、水のやり方、空気と光の与え方について教えてくれている。窓に置く植木箱もまた使用された：「どの窓も鉛かあるいは中をピッチでしっかり覆われた木の板の四角い育苗箱を作る；そこに上質な土を入れ、あなたが最もお気に入りの花とかハーブとかの植物を植える」。部屋の中で比較的日陰になるような所には、ローズマリー、スイートブライアー、月桂樹、ニガクサがお薦めであると言う。そして続けて「夏には煙突はコケの塊り、・・・あるいはムラサキベンケイソウ orpin や「トキワバナ」“everlasting”と呼ばれる白い花 [乾燥しても形や色が変わらない花] で飾られるかもしれない。そして両方の端に花かローズマリーの鉢の一つを置く。・・・屋根の中とか部屋の横あたりに、大麦の中でどっぷりと発酵させた小さなポンピオンあるいはキュウリをぶら下げたのもよいかもしれない。・・・壁の外にブドウを植えるというのもよかろう。そうすることで少し問題になるかも知れないが、窓の横と部屋の天井全体を伝い走るかもしれない。同じくアプリコットの木とかほかのプラムの木を植えて、窓側に向かって枝を広げさせることもできる」。

家庭の装飾のために花を育てるといふこの大きな喜びは、この時代のイングランドの生

活の際立った特徴となった。オランダ人旅行者であるレヴィミユス・レミニユスは医者でズイーリックゼーの生まれであり、1560年にイングランドを訪問した。彼はイギリス風の安らぎに魅了され、このように書いた*：－「彼らの寝室と部屋は甘いハーブが全体に敷かれていて新鮮な驚きを覚えた；－様々な種類の香りの花を使って見事に組み合わせられた香しい花束は、彼らの寝室と私的な部屋の中で、その気持ちのよい香りで私を奮い立たせ、私のすべての感覚を完璧に喜ばせてくれた」。

*トーマス・ニュートンによる翻訳『気質の基準』1581年の中で出版 Thomas Newton, *The Touchstone of Complexions*－ブレンチリー・ライ著『外国人から見たイングランド』の中に復刻

[訳注] 本書は肉体的、精神的病気の原因となる生理学上の体質の違いに関するガレンの理論に基づき、それはヒポクラテスの4つの体液の組み合わせが肉体的、精神的状態を決定するという認識に遡る。

ることができる。特にターナーは庭園の歴史の中で一つの地位を占めるのにふさわしいと思われるのは、植物学だけではなくガーデニングについても大きな仕事をしたからである。彼はキューに自分自身の庭園を所有しており、その著作の中で当時の庭園のいくつかについて紹介している。彼はノーサンバランドのモーペスで 1510 年から 15 年の間に生まれた。ケンブリッジに学び、そこでラティマー [Hugh Latimer, 1485?~1555 年 宗教改革者] とリドリー [Nicolas Ridley, 1500?~55 年 宗教改革者] と友達であった。ターナーは宗教改革論者であったため、彼の本は 2 度発禁となり廃棄を宣告された。彼はイタリア、ドイツ、オランダを旅行しイタリアで医学博士号を授与された。イングランドに帰国後、教会のいくつかの役職に登用された。ウェルズの司祭であったが司祭の職を解かれ、メアリー女王の治世時に追放された。ただエリザベス女王の即位に伴いしばらく復権し 1568 年 7 月 7 日にこの世を去った。彼の書いた『植物に関する小冊子』*Libellus de Re Herbaria* は 1538 年に出版され国王に捧げられた。1548 年の「ハーブの名前」“The Names of Herbs”は彼の支援者である護国卿サマセット [サマセット公爵エドワード・シーモア Edward Seymour, 1500~52 年 エドワード 6 世の摂政] に捧げられ、その序文の日付はサイオンにある彼の家におけるものとなっている。サイオンは 1539 年のブリジット修道会 [1415 年ヘンリー 5 世の時代に設立、ヘンリー 8 世の修道院解散まで存続] の鎮圧に際してサマセットに与えられた。彼の著作全体を通じてその庭園についてしばしば言及がなされている。ターナーの『植物誌』*Herbal* は 1551 年に出版され、その「第 2 部」は 1562 年に出版された。

トーマス・タッサーは農業に関して広く知られた本の著者である。1523 年から 25 年頃にエセックスのライヴンホールで生まれた。幼い頃は歌手としての訓練を受け、セントポール寺院合唱団で歌っていた。それからイートンではニコラス・ユードル [Nicolas Udall, 1505~56 年 学者・翻訳家・劇作家] の指導を受け、1543 年にケンブリッジで学び、パジェット卿 [William Paget, 1506~63 年 政治家] の部下として裁判所で働くまでケンブリッジにいた。裁判所生活を 10 年した後、引退してキャッティウエイドの農場暮らしを始めた。そこは、エセックスとの境界にあるサフォークのブランタム教区にあった。彼が『農業で成功する 100 の要点』*One hundred Pointes of Good Husbandrie* という詩を書いたのはこの農場であり、それは 1557 年のことであった。その後すぐに彼はこの農場を去り、何年かはあちこちと動き回った。イプスウィッチ、ノーフォークのウェスト・デラム、ノリッジ、エセックスのフェアステッド、ロンドン、そしてケンブリッジに行き、1580 年にロンドンで亡くなった。彼は最初の本を増補して、1573 年には『農業で成功する 500 の要点』*Five Hundred Pointes of Good Husbandrie* 初版を出版した。タッサーは善良で実用的、素朴であった。詩の中で庭園栽培のために役立つヒントが述べられ、それは各月ごとに書かれた農業の要点の中にガーデニングについても触れる形をとった。その他の「要点」としては農業に関するあらゆる分野が含まれており、家事に対するアドバイスのほか、クリスマスにはどうするか、奥さん、子供、使用人、友人とどうつきあうかなどがある。農業に関する彼の指示についてすべて従おうとする人はほとんどいないかも知れないが、この最後の

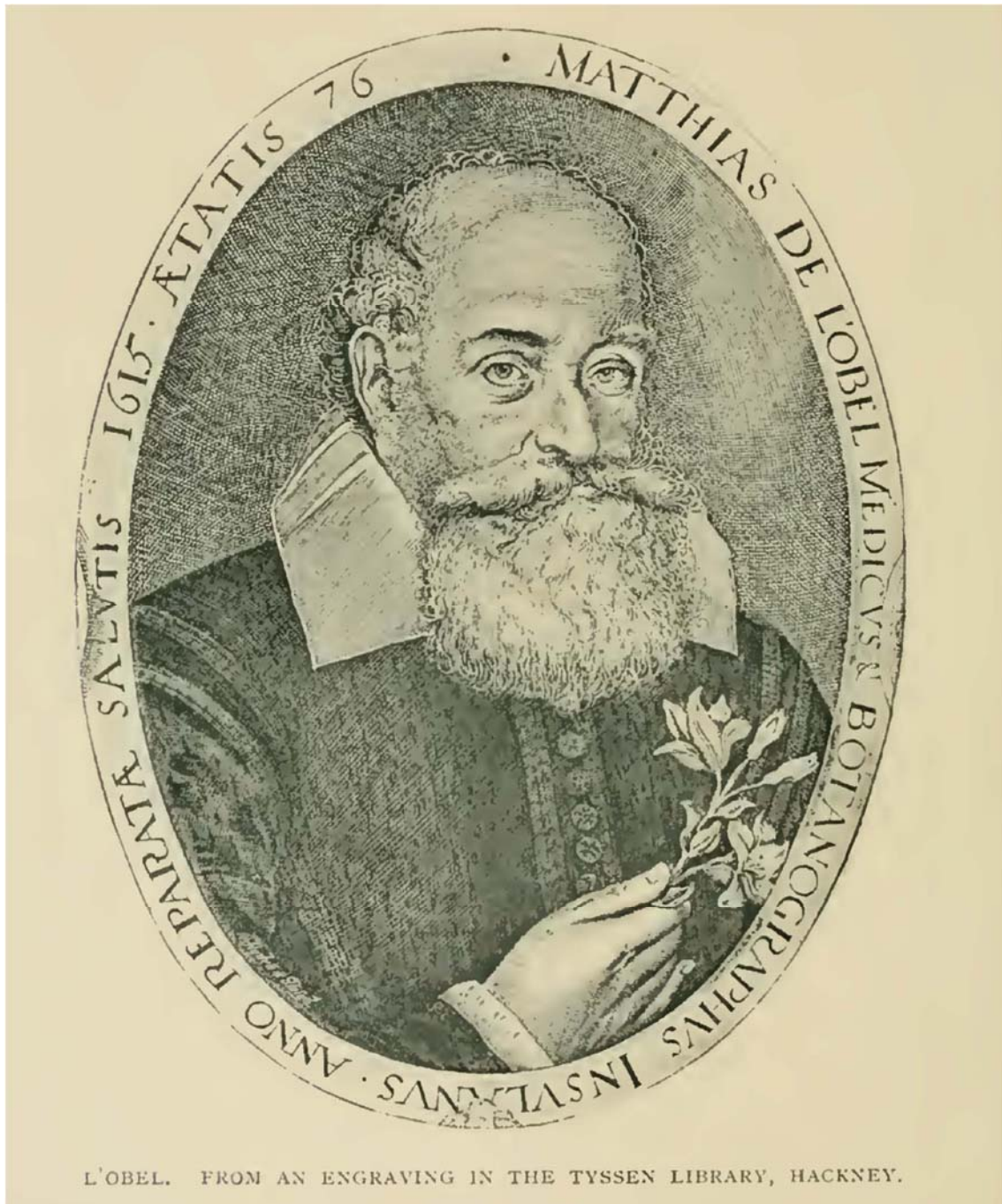
忠告は今でも十分通用するものであろう：－

“Good friend and good neighbour that fellowlie gest 良い友人と良い隣人とは、親しく受け入れて
With hartilie welcome, should have of the best.” 心から歓迎してくれる、そういう人が一番

ウィリアム・ブレインは学識深い医師であり、『健康の管理』*The Government of Health* (1558 年) を著した。薬に使うハーブについて書かれたものとは言え、ガーデニングについて興味深い情報もこの本から拾い集めることができる。

この時代の植物学の歴史はやや入り組んでいる。それはあまりにも一つの本から別の本へと過度に引用がなされ、同じ図版がいくつもの本に使われたりしたからである。どの国の作家たちも古代の著者から自由に引用し、特にディオスコリデスとカリヤメラ [Lucius Junius Moderatus Columella, 4~70 年頃 ローマ帝国における農業に関する作家] は広く引用された。前者のディオスコリデスは、学識豊かな植物学者で医師であるイタリア人、マッティオリ [Pietro Andrea Mattioli, 1501~77 年頃] により、1544 年にイタリア語に翻訳され、多くの注釈が加えられた上で出版された。もう一人の 16 世紀の偉大な植物学者であるドドエンスは、ディオスコリデスからたくさん引用しているが、1517 年にメヘレン [ベルギー北部の都市] で生まれた。彼はアントワープで 1554 年に『植物の歴史』*A History of Plants* を出版し、これはオランダ語で書かれていたが、クルシウス (シャルル・ド・レクリューズ) [Carolus Clusius (Charles de l'Excluse), 1526~1609 年 フランス生まれのフランドルの医師・植物学者] によりフランス語に翻訳され、1557 年にアントワープで出版された。このクルシウスの仏語訳をヘンリー・ライトが英訳し、アントワープで 1578 年に出版され、この 3 つの言語とも同じ木版が使われ、これらの本のそれぞれが版を重ねた。そうこうする間に、ドドエンスは元の著作を大幅に増補して、30 巻からなる新しい著作『植物図譜六部』*Stirpium Historiae, Pemptades sex* として集大成を図った。この偉大な植物学の書はプリースト博士により英訳されたが、博士はその翻訳の出版を見ることなく亡くなった。

ジェラードの『植物誌』*Herbal* (1597 年) は、端から端までドドエンスの著作に拠っており、その一部は翻訳そのものであった。ジェラードは、「他の言語で書かれた様々な植物学を熟読した」と明言しているものの、こんなに広範に引用したとは認めていない。ジェラードの『植物誌 5』第 2 版、これはジョンソン [Thomas Johnson, 1644 年死去 英国野外植物学の父 王党派] によって訂正が加えられ増補されたものであり、その「読者への序言」の中でこの事実が指摘されている。さらにそれだけでなく、プリースト博士による翻訳について、ジェラードは失われたと言っていたが、実はジェラードはそれを手に入れて大幅に使用しており、それはジェラード自身にはラテン語の知識が十分に備わっていなかったからだ、とジョンソンは断言しているのである。ジョンソンは「著者がこのことを読者に隠そうとしたことは誉められたものではない」と書いている。



[図 8-1] ローベル ハクニーのティッセン図書館所蔵版画

ローベルとギャレット [James Garret, フランドルの薬剤師 ロンドン在住] の両人は、この植物誌の印刷が進行している中で、そのラテン語の誤りを正す手伝いをした。ローベル自身は植物学の本『植物に関する覚書』*Stirpium Adversaria* (1570 年) の著者である。本書は、彼がモンペリエで勉強していた時、知己を得たペーター・パナの助けを借りた。マチアス・ドゥ・ローベルことローベル [Mathias de Lobel, or L'Obel, 1538~1616 年] は 1538 年リールの

生まれで、ヨーロッパ各地を旅行し、アントワープとデルフトで医師として働き、そしてイングランドへと渡った。久しくハクニーのズーシュ卿所有の庭園の管理をまかされ、「国王の植物学者」（ジェームズ 1 世）の地位を占めた。よく知られている「ロベリア」“lobelia”は彼を称えてプリュミエ [Charles Plumier, 1646~1704 年 フランスの植物学者] により、そう名付けられた。科学的な分類の最初の兆しが彼の業績の中には見られ、その意味で、そのような試みをしようとしなかったドドエンスよりも優れていると考えられている。彼はマッティオリのことを研究し、しばしばそのことに触れており、学識者からは高く評価されていたが、ラテン語で書かれ一度も翻訳されることがなかったので、英語で書かれた同時代のジェラードのように人気を博すことはできなかった。ジェラードの『植物学』は花に関する文献の中ではいつでも突出した位置にあり、その第 2 版はトーマス・ジョンソンの極めて巧みな編集により、その業績は物凄く人気と価値が高まった。

ジョン・ジェラード [Gerard または Gerarde とも書く] は 1545 年、チェシャー州ナントウィッチに生まれ、1607 年 [1612 年頃の誤りか] にこの世を去った。彼は医師で「薬草」の専門家であるだけでなく、実践的な庭師であり、彼が住んでいた当時はロンドン郊外であったホルボーンで自分自身の薬草園を栽培していた。彼の最初の著作は、彼の庭園の植物のカタログであり*、そこには在来、外来の 1100 種ほどが載せられていた。

*この本の大変珍しい 1 冊が大英博物館に所蔵されており、D. ジョンソンにより復刻編集された。

20 年間にわたりバーリー卿の庭園を監督し、彼の偉大な著作をこの支援者に捧げた。ジェラードの『植物誌』はオリジナルなものと言い張ることはできなかったとは言え、翻訳者、翻案者としては、独自の業績と言える不滅の足跡を残した。彼が書いた花が育っている土地ごとの状況に関する記述は独特のものであり、また植物の贈呈を受けた友人たちや彼らに関する情報の紹介の仕方も独特なものと言える。たとえば、次のような記述がほとんど各ページに出てくるのである。「シベリペジウム [アツモリソウの一種] *Cypripedium Ladies' Slipper*。私のとても仲が良い友人である薬屋のギャレット氏よりもらって庭に植えてある」、「ゴールデンモスヴォルト the golden Mothwort、別名カッドウィード [ハハコグサの一種] *Cudweed (Helichrysum)* は・・・盛りが過ぎる前あるいは萎む前に採取すれば、その後長い間美しさを保つことは、私自身が実際この目で見たところである。私が見たのは、女王陛下顧問弁護士の事務員の一人であるウェイド氏が持っているものでバドヴァから・・・彼に送られたものであった」。



〔図8-2〕ジェラード 著書『植物誌』扉のページ 1597年

「コタニワタリ的一种 finger Hart's tongue・・・私はこれをエセックスのマッチダンモウにあるクランウィック氏の庭園で見つけ、彼は私の庭のためにそれを一つくれた」。ジェラードを援助したこれらの友人の数は膨大であり、そのほとんどの人物については、たとえば「ロンドンの学識深い商人であるジェームズ・コール氏、植物の愛好家で植物の知識に関して極めて熟練している」とジェラードが簡単に紹介している以上にはまったく知られていない。「ガース氏は尊敬すべき紳士で、かつ珍しい植物をととても喜ぶ人だが、彼はとても気持ちよく私に」クルシウスから受け取ったナルコユリの一種 Solomon's seal を「分けてくれた」。ただし、何人かの人々の名前はしょっちゅう出てくるので、彼らに関

してはもう少し詳しいことがわかっている。トーマス・ヘスキース [Thomas Hesketh, 1548～1605年政治家] の名は繰り返し出てくるが、これは彼が主としてランカシャーおよびイングランド北部におけるある種の植物の収集家であって、またジェラードの庭で栽培するように見本を送ってきたからである。エセックスのトーマス・エドワーズも植物学者であってイングランドの野生の花の収集家であった。ロンドンの商人、ニコラス・リート氏は、自分自身でイングランドとフランスで花を探しただけではなく、「珍しくて美しい花や植物をこよなく愛した。・・・彼は用心しながらシリアに人を送りアレppoでその使用人を雇って収集をしたので、私自身を含め全国の同じような人々が彼に大変恩義を感じるようになった。そしてこれはその他の多くの国でも行われた」。彼がこの国に持ち込んだ植物の一つにキャベツがある。それは「青みがかった緑色の」「しわの寄った葉っぱ」であった。ジェラードはポーランドから黄色のジリフラワーを手に入れたことにも触れており、彼のコレクションの幅広さを表している。彼はまたウィリアム・マーシャルというお抱えの収集家を「地中海に派遣し」そこからプラタナスの種とウチワサボテン prickly pear、すなわち「棘のあるインドのイチジクの木」を持って来させた。

ジェームズ・ギャレットは、熟練の庭師で特にチューリップの栽培に長けていたことが他の資料からもわかっている。彼は「ロンドンの学識深い薬屋」で、優秀なラテン語の学者、そしてジェラードやクルシウスに知識を教え、植物を与えるような寛容な人だった。ジェラードが取り上げた友人すべてを列挙するととんでもない数になりうんざりするほどである。これらの手助けをしてくれた友人のリストは、1633年版を見れば、さらに大きく増えることになる。それを見ると、ジョンソンの知り合いもジェラードと同じように著名な人たちであることがわかる。これらの昔の植物学者たちが互いに手紙をやりとりし、助け合った姿を知ると爽やかな気分になる。ジョンソンはジェラード以上に他の植物学者、医者と協調して仕事をし、希少な花を探すために一緒に探検旅行に出かけた。彼は、友人たちと行ったイングランド南部、西部への旅行のことを描いたラテン語の論文を何本か書き、その『植物学』の中では仲間の収集家と歩き回った様子が繰り返し述べられている。一種の草について書いた時、「一度だけこれを見たことがあるが、それはロンドンの薬屋のトーマス・スミス氏とジェームズ・クラーク氏と一緒に珍しい植物を探しにウィンザーの森に馬で出かけた時のことであった」と言っている。

トーマス・ジョンソンはヨークシャーのセルビーに生まれたが、彼自身はロンドンの薬屋であり、スノウヒルに店を構えていた。このスノウヒルの店こそ、イングランドで最初にバナナが並べられた所である。ジョンソンはアージャント博士がバミューダで手に入れた果物の束を受け取った。ジェラードはアレppoから送られてきたピクルスにした品種しか目にしたことがなかった。ジョンソンはこの果物の束をそれが熟すまで店内にぶら下げておいた。彼が言うところ：「これを見てある人たちは禁断の木の実と判断した；別の人は聖地からモーゼにもたらされたブドウだと思った」。ジョンソンは当代きっての一番有名な植物学者であり、兵士として何回かその勲功を表彰された。彼は王党派の大義の

ために戦うべく軍隊に志願し、ベイジングで負傷したことがもとで1644年に死去した。ジョンソンの最も重要な友人でかつ助手であったのはジョン・グッディヤーであった。彼は多くの在来植物を最初に発見したのと、彼の植物学に関する知識が群を抜いていたと思われるのは、ジョンソンおよびパーキンソンの両者によって彼のことが取り上げられている様子からうかがえる。このほかトーマス・グリッ [Thomas Glynn, 17世紀 植物収集家] とジョージ・ボウルズの二人も収集家であり、彼らの名前も決して忘れられてはならないものである。

ラルフ・タギー [Ralph Tuggy, ~1632年 種苗・花卉栽培者] の名は今でもあまり覚えられていないが、当時しばしば引き合いに出されたことから見て、ガーデニングの発展に大いに寄与したに違いないもう一人の人物である。ジョンソンによると、タギーはパーキンソンやトラデスカント一家とほぼ同じくらいに有名で、ウェストミンスターへの彼の庭園には当時希少であった多数の植物が植えられていた。彼はナデシコ類 pinks、カーネーション carnations、プリムラアウリキュラで特に有名で、彼が亡くなったのは1633年より前であったが、その死後も夫人が庭園を維持し続けたようである。ジョンソンはジェラードより約800以上多くの植物について記述し、多くの図版を付け加えた。植物学の完成版には2717種が収められており、この長大なフォリオ判のページ数は1600ページ以上に達した。

ジェラードの『植物学』の初版と第2版の間に、パーキンソンが『日のあたる楽園、地上の楽園』 *Paradisi in sole Paradisus terrestris* を出版した。これは当時最も人気のあったガーデニングの本であった。この本の中に薬用効能に関する記述があるのは、植物に関するすべての初期の頃の本と同じであるが、その性格は他の植物学の本とは大きく異なっている。この本のタイトル自体、自分の名前の言葉遊びであるパーク・イン・サンズ (パーキンソンの) 地上の楽園 Park-in-Sun's Earthly Paradise となっており、この風変わりな新鮮で独創性溢れるタイトルはこの本全体の特徴を表している。パーキンソンは花に対する愛情とその美しさに対する感情でもって読者を感激させる力を有しており、数世紀を経た後もなお、『地上の楽園』 *Earthly Paradise* を熟読することにより、彼の技に心を洗われ勇気づけられることのない造園家は一人としていないと思われる*。

*この本が子どもたちの心に呼び覚ますであろう感動は『メアリーの草原』 *Mary's Meadow* にとても可愛らしく書かれている。ジュリアナ・ホレイシア・ユーイング著 Juliana Horatia Ewing



PARKINSON. FROM THE TITLE-PAGE FOR HIS "PARADISUS."

[図8-3] パーキンソン 著書『楽園』扉のページ

パーキンソンは1567年生まれ、既に登場したすべての植物学者と同様に薬屋であった。ロンドンに住み、素晴らしい庭園を所有しており、彼もまた旅行したということは彼の著作を読めばわかる。彼は「ジェームズ国王の薬剤師」であり、チャールズ1世により「王室首席植物学者」に任命された。彼はその著作『楽園』をヘンリエッタ・マリア女王に献呈した。彼の死亡した正確な日付ははっきりしないが、それは1640年に『植物の劇場』

Theatrum Botanicum [英名：The Theater of Plantae, or An Herball of Large Extent] と題した本を出版した直後だった。この本はガーデニングよりも植物学そのものの本であり、ジェラードの本よりもっと多い種類の植物について書かれていたが、分類については特に改善された訳でなく、その配列は主に医薬上の性質に従ったものであった。フランスの植物学者、ジャンとガスパール・ボーアン兄弟 [Jean Bauhin 1541~1613 年, Gaspard ~1560~1624 年 スイス生まれ 植物学者] による著作はジェラードの『植物学』の後に出版され、パーキンソンはこれらをローベルのものと同様に活用した。パーキンソンの図版の原版はイングランドで作られた*。ジェラードとジョンソンの図版は、ターナーの図版の大半がそうであったように、海外で作られたものであった。

*これらの木版の歴史については『バルトニー著 概説植物学の進歩』1790 年第 12 章参照 *Pulteney's Sketches of the Progress of Botany*

ジェームズ 1 世とチャールズ 1 世の時代の最も多忙な研究者、収集家は 3 世代にわたるトラDESCANT一家であった。祖父はオランダ人で、多分ジェームズ 1 世の時代の早い頃にイングランドにやって来た。次のジョン「父」はソールズベリー第一卿・大蔵卿の庭師であり；次いでウォルトン卿、バッキンガム公爵、1629 年にチャールズ 1 世の庭師に任命された。彼ら一家は皆ヨーロッパ中を旅行し、父はバーバリー諸国 [アフリカ北部地域] にも行き、孫はヴァージニアにも渡航した。旅行中、彼らは珍しい物を集め、「トラDESCANTの館」“Tradescant's Ark”という名の博物館を設立し、そのカタログは『トラDESCANT博物館』*Museum Tradescanteanum* として 1656 年に出版された。最後のトラDESCANTが 1662 年に死んだ時、彼は博物館をアシュモール氏 [Elias Ashmole, 1617~92 年 古物収集家] に残し、それはオックスフォード大学に遺贈された。博物館のほか、ランベスの自宅には立派な庭園があり、輸入した植物の多くをここで栽培していた。ここには国王、女王が訪れ、あらゆる階層の学識者のリゾートとなった。この庭園の名残は 1749 年には存在しており、その年に、サー・ウィリアム・ワトソン [William Watson, 1715~87 年 医師・自然哲学者] がこれを描写する論稿を王立学士院 [† *Phil. Trans.* 第 46 巻, 160 ページ] のために書いた。彼は 2 本の大きなアービュタスの木 [イチゴノキ] *arbutus trees* のことに気づいたが、これらの木は「この種のほとんどの木が枯れた」1729 年と 1740 年の厳しい寒さに耐え抜いたものだった。「果樹園には」高さ 20 フィート、直径約 1 フィートの「一本のクロウメモドキ」“*Rhamnus Catharticus* (Buckthorn)”があった。ワトソンは、トラDESCANT一家が持ち込んだ落葉樹のラクウショウ [落羽松 ヌマスギ]、「落葉性のアカシアに似た葉を持つアメリカのサイプレス」“*Cupressus americanus acacia foliis deciduis*” (*Taxodium distichum*) についても書いている。ユリノキ *tulip-tree* も彼らが持ち込んだものの一つである。イーヴリン [John Evelyn, 1620~1706 年 日記作者・造園家] はこのように書いている：「ヴァージニアのポプラ、それはジョン・トラDESCANTにより、チューリップの木という名前で（花の形が似ていたので）、初めてもたらされたと思うが、わが国の植物学者の

誰一人として大した注意を払うことはなかったと思う。私はもっとこの木が欲しいと思ったが、その背丈を高く育てることは当初難しかった」*。

*最も古いユリノキの一本がエセックスのウォルサムにある。「今まで見られた中で客観的にも主観的にも最大のもので、英国の中ではピーターバラ卿の1本を除けば最大である」－ファーナー著『ウォルサムの歴史』1735年 *History of Waltham*, Farmer

彼らが持ち帰ってきた他の植物の中には、トラデスカントの名前が付いているおかげで、彼らの記憶を今に伝えてくれているものがある。トラデスカントのラップサイセン、これはパーキンソンの本では「大バララップサイセン」“the great rose daffodil”と呼ばれたが、八重のことであり、今でも「すべての八重のラップサイセンの中で最も大きく、濃い黄色のラップサイセン」と言われる。トラデスカントのアスターは今もなお彼らの名前を付しており、トラデスカンティアス、すなわちオオムラサキツユクサ spiderworts [*Tradescantia virginiana*] は、属の名称として広く知られている。旅行中にトラデスカントは彼の支援者であるソールズベリー第一伯爵のための買物をし、その時の請求書の一部がハットフィールドに保存されている。それらの多くの品目は興味深いものであり、既に知られている植物の値段がわかるだけでなく、彼が最初に紹介することとなった新種についても示されている。

以下はこの興味深い記録からの抜粋である（※ハットフィールドにあるオリジナルな写本より、ソールズベリー侯爵のご厚意による許可を得て）：－

「1611年1月3日－ジョン・トラデスカントの請求書、これは伯爵のため彼が買った花の苗、種、樹木、苗木のもの：オランダでは－オランダのライデンで－バラの苗と風変わりな珍しい低木3ポンド－加えてオランダのハーレムでセイヨウサンシュユの一種 *Cornellis Helin* の早生の熟したサクランボのような実のついた木32本を1本4シリングで計6ポンド8シリング－アネモネと呼ばれる花を5シリング－プロバンスローズを16本8シリング－クワの木2本6シリング－大きなアカフサスグリ *great red currants* 6本1シリング－ネズコ *arbor vita* 2本1シリング－バイモ 40本、1本3ペンスで10シリング。1611年1月5日、ブリュッセルとオランダで購入・・・早生の熟したポルトガル *portingall* マルメロの木1本6シリング－ライオンのマルメロ *lion's quince* の木3シリング－ナボリの大きなセイヨウカリンの木2本5シリング－ハーレムでチューリップの球根100個10シリングで800個4ポンド－大きなクロスグリ [カシス] 1ダース *on(e) dussin* 1シリング－ボアチェリー *the boores cherye* と呼ばれるとても大きなサクランボ12シリング－白アプリコットと呼ばれるアプリコットの木6シリング－加えて大公庭師からペアブドウ *peere vyens* と呼ばれる10種類6シリングで購入－大公サクランボ *Archedukes cherye* と呼ばれるサクランボの木12シリング－さらにジョン・ジョカット氏から、八重咲きの *Echatega* 白とオレンジ色のポンポンマルタゴンリリー *the martygon pompone blanche*, *the martygon pompong orang coller*、カルセドニーアイリスおよびササヤナアイリス [クロアヤメ] *the Irys calsedonye and the Irys susyana* を2ポンドで購入。1611年1月5日－フランスで購入－パリで購入。ザクロの木を根元にある多数のその他の小さな木と一緒に6シリング－スパニッシュゴース [ヒトツバエニシダの一種] *genista hispayca* の束2シリング－

オレンジの木で接ぎ木した1年物、8鉢を1鉢10シリングで4ポンドーセイヨウキョウチクトウ *ollyander* の木6本、1本ハーフクラウンで15シリングーギンバイカ *myrtil* の木7本、1本ハーフクラウンで17シリング6ペンスー別の籠に入ったイチジクの木2本、白イチジクと呼ばれるもので多数のその他の珍しい低木と一緒に、ロビンス氏が私にくれたもの4シリングーまたマスカットと呼ばれるブドウ2束4シリングービガンドレ [甘い紅白混じりのサクランボ、フランスではビガロー] *Biggandres* と呼ばれるサクランボ1本2シリング、24本で2ポンド [8シリング?]ーイトスギ *Sypris* の木1本1シリング、200本で10ポンドー黒クワの木1本2シリング、17本で1ポンド14シリングー桃 *the troye* の木4本、1本2シリングで8シリング (およびアルベルグ [果肉が枝に密着した桃] *alberges*、マルコットン *malecotton* 桃も同じ値段で)、八重咲き白のアラセイトウ (ストック) *stok gilliflower* の鉢および別の種類のアラセイトウに3シリング]。

これらの請求書の合計は110ポンド8シリング9ペンスに上ったが、それは植物の代金であり、これに加えて植物の荷造り用の籠、南京錠と蓋の付いたヤナギ細工の籠の代金として数シリング；ー運搬費用は別にかかる。またサー・ウォルター・コープ [Walter Cope, 1553頃~1614年] から送られてきた38ポンドの最初の請求書についての覚書もあった。これは明らかに、ソールズベリー卿と同じ時に彼のために購入した木に対する請求書であった。「ロビンス氏」とトラデスカントが呼んでいるのは、フランスの有名な植物学者でかつ「植物園」の初代園長であるジャン・ロバン (Jean Robin, 1550-1629年) であった。彼はジェラードが「パリのロビニウス」としばしば言及した人物である。「ハリエンジュ [ニセアカシア]」“*Robinia*” [*Robinia pseudoacacia*] という属名は彼の名にちなんだものである。

トラデスカント一族の墓石はランベスの教会墓地に今も見ることができる。それは内陣の北東に位置し、1662年に息子ジョンの未亡人によって建立されたものである。趣のある墓碑銘は次のようなものである：ー

「ここを通り過ぎる訪問者よ、行く前に知るがよい、この墓石の下に
眠るはジョン・トラデスカント、祖父、父、息子
息子は若くして亡くなり；ーほかの二人は
人為と自然の世界を歩き尽くすまで生き通した；
それは彼らの選り抜かれたコレクションからうかがえるように
陸、海、空の珍しいものの
彼らが (一言で言えばホメロスのイリアスのように)
不思議に満ちた世界を一つの部屋に閉じ込める。
これらの有名な古物収集家たちはずっと
バラと女王ユリ双方の庭師であったが
今は自分自身を移植し、ここに眠る、そして
天使がそのTRANPETTで男たちを目覚めさせる時

そして炎が世界を清める時、彼らは起き上がり
この庭園をパラダイスに変えるであろう」

サー・ヒュー・プラットは、土壌と肥料に関し、当時最も学識の深かった人物と言える。彼はこの問題について 1594 年に出版し、あわせて『人為と自然の宝庫』*The Jewel House of Art and Nature* という本も出した。ガーデニングに関する彼の業績として注目すべきものは、初め 1600 年に『花のパラダイス』*The Paradise of Flora* というタイトルで出版され、次いで 1660 年に第 2 部を付け加えて『エデンの園』*The Garden of Eden* というタイトルで出版された本である。この最後の版はプラットの死後しばらくして世に出たが、チャールズ・ベリンガムという彼の「親族により」編纂されたものであった。「あの学識深い偉大な観察者」であるサー・ヒュー・プラット、「リンカーンズイン [世界で最も名高い法曹協会] の騎士、郷紳」は、自分自身の庭園をロンドンに持ち、そして広大な屋敷をセントオールバンズの近くに持っていた。また彼の著作の参照部分を見ると、サー・トーマス・ヘネッジ [Thomas Henneage, 1532~95 年 政治家・エリザベス 1 世の廷臣] 所有の、エセックスのカプトホールで過ごすこともあったようである。彼は当時の庭師頭の全員と親しく、いかなる情報であってもそれを教えてくれた友人のおかげであることを示すという点で誠に良心的であった。したがってトゥイッケナムのアンドリュー・ヒル氏、タバナー氏、ポインター氏のこと、菓屋のギャレット、庭師のピゴット、庭師のニコルソンほかについて、その名前、あるいはイニシャルでしばしば言及しており、彼らは全員、読者にとって、このテーマに関する権威として言うまでもなくよく知られた人たちばかりであった。彼は植物ごとに、また土壌の一般的改良を図る観点から、様々な種類の肥料を勧めた。冬の間、シダ類が地面に広がり、そこでそれを掘り込んで「シダ類の灰は優れている」そして「煤は土地を肥やす」、「角を削ったもの」も同様に。「タマネギと天日塩を混ぜて蒔けばとてつもなく成功した」。彼は注意深くどの植物にはどの肥料が一番適しているかを特定している。『人為と自然の宝庫』の扉のページの裏側には、異常に大きな大麦の穂の絵を載せており、その説明として「ミドルセックスのビショップの丘で 1594 年に育ったもの、土地はソープ灰で施肥された」とある。

この当時のもう一人の植物愛好者で記憶に留められるべき人物はペニー博士である。彼の生涯について多くは知られていない。彼は医師で海外及びイングランド国内を旅行し、多数の植物を収集した。彼は当時最も著名な植物学者の友人であり、クルシウス、ゲスナー [Conrad von Gesner, 1516~65 年 スイスの博物学者・医者]、ターナー、ローベル、ジェラードなどがいた。今やペニーの名前を覚えている人はほとんどいないが、これらの著者による言及のされ方を見ると、当時は有名であったに相違ない。ジェラードは彼のことを「トーマス・ペニー、ロンドン在住、医学博士、植物に関する非凡な知識をもってその名声は高く、第二のディオスコリデスとして有名・・・最近亡くなったが私を含め多くの人がある死を嘆き悲しんだ」と話した。ジョンソンも「名声が高く立派な医師であり熟練の植物学

者」と同じように語っている。ペニーは何種類かの植物を新しく紹介するとともに、在来種のいくつかについての最初の発見者であった。クルシウスはマジョルカセントジョンズワート [オトギリソウの一種] *Hypericum balearicum* を彼の名にちなんで「ペニー」“Pennaei”と名付けたが、それは彼がマジョルカから最初に持ち込んだからだった。ゼラニウム・テュバロスム [フウロソウの一種 tuberous-rooted cranesbill] *Geranium tuberosum* も彼にちなんで名付けられた：この植物はターナーによってイングランドに持ち込まれたが、クルシウスがペニーからそれを受け取っていたので、ターナーは「ペニー博士に捧げる」こととした。

この頃の時代のガーデニングに関するその他の著作家は既に引用されてきたところであるが、彼らの生活については、その著作から知ることができる以上のものは、ほとんどわかっていない。果樹園と果樹を論じたウィリアム・ローソンは、北の地方の出身で自分自身の経験に基づいて書いた。トーマス・ヒルは、自分のことをディディマス山と自称し、何冊か出版したが、それらについて自分で書いたとは明言せず、「ガーデニング、農業、医学に関して最高と認められている著作者の中から集めた」としている (*『庭師のための迷宮ガイド』1751年)。その他の著作者については名前すらわからないものもある。1608年と1609年に果物について優れた論文を書いたN.F.が誰であるかは特定できていないし、他の著作者により引用されている多数の名前のどれにもこのイニシャルは該当しない。ただ、ジェラードによると、セントジェームズのエリザベス女王の庭園の「熟練の管理者」にファウルという人物がいて、その庭園で栽培したマスクメロンによって有名であったとされる。そのファウルはNで始まるクリスチャンネームを持っていた。

第9章 17世紀

“ retired leisure

That in trim gardens takes his pleasure.”

Milton

“That is the walk, and this is the arbour ;

That is the garden, this the grove”

George Herbert

. . . . 引退後の自由時間

それは手入れされた庭園を楽しむこと

ミルトン

あれが小径、そしてこれがあずまや；

あれが庭園、これが木立

ジョージ・ハーバート

これから概観するこの時代は当然のことだが3つに区分される。まずチャールズ1世の治世、2番目に共和国時代、3番目に王政復古の時代である。この3つの時代におけるガーデニングの発展を見るとそれぞれが際立った特徴を持っている。園芸の世界における発展の歩みはゆったりとしながらも着実に進んでいたが、庭園のデザインは第3番目の時代まで大きくは変化しなかった。共和国の時代には果樹園と市場園芸（マーケットガーデン）の改善に向けての動きが見られ、チャールズ2世の治世下ではガーデニングのあらゆる分野で大いなる先祖返りが目撃された。初期の頃はジェームズ1世の時代のガーデニングの単なる延長に過ぎず；今まで引用してきた人々、すなわちパーキンソン、ジョンソン、トラデスカント一家はまだ生きており、エリザベス朝とのつながりが形成されていた。サー・ウィリアム・テンプル [William Temple, 1628~99年 政治家・随筆家] とジョン・イーヴリンの名は王政復古時代の庭園の歴史と深く関わっており、彼らは二人とも同じような形でその時代が17世紀末の輝かしい庭園の日々であったことを描いている。

これに続く各世代の造園家たちは、先人たちの能力について誠に低い評価を下しており、その一方、自分たちの庭園の素晴らしさは誰にも負ける訳がないなどと思っていた。ホリonzヘッドはエリザベス朝時代の庭園のようなものはかつて存在していない、との意見を変えなかったが、17世紀半ばまでにはガーデニングは著しく進化したのでエリザベス朝の初期は原始的な園芸の時代と言っても差支えないと顧みられるようになった。これには多分誇張があるので、それを大きく割り引いたとしても、事実として残るのは、ガーデニングの発展状況というものが、当時の作家たちが肌で感じ取ることができるほど十分に際立っていたということである。レイ [John Rea, ~1681年 園芸家] は1665年、『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』 *Flora Ceres and Pomona* の「読者に向けて」のページで、この本を出版する理由についてこう述べている。「パーキンソン氏の著書にある心を楽しませる花の庭園について真剣に考え、また私自身のコレクションと私がそこに見たものとを比べた時、彼の本には最近出回っている数多くの立派なものを付け加える必要があると感じました。またそこに示してある多くのものが既に陳腐化しており、すべての立派な庭園には不要な価値のないものと思いました」。レイは愉楽の庭園について書いているが、ハートリブの書簡 [Samuel Hartlib, 1600頃~1662年 大知識人 各分野の人々との膨大

な書簡が残されている]の中の一人、おそらくダイモックと思われる人物が、10年前に種苗園芸について同じように書いている。

ハートリブはポーランド生まれでチャールズ 1 世の治世の早い時期にイングランドに移住した。彼は年間 100 ポンドの年金をクロムウェルから受け取り、農業の発展に大いに寄与した。彼の書いた『農業の遺産』*Legacy of Husbandry*は、多分クレシー・ダイモック、ロバート・チャイルド [Robert Child, 1613~54 年 医師・農学者]、ガブリエル・プラッツ [Gabriel Plats, 1600 頃~1644 年 農学者 正しくは Plattes] たちによる農業に関する書簡を集めたものである。彼らは種苗園や果樹園の数を増やすことが大事であると考え、ガーデニングは適切に運営されれば十分採算に合うことを主な根拠として議論を展開した。「ガーデニングは、土地からとんでもない収益をもたらすことから簡単にわかるように土地を素晴らしく改良するよう見えるだろう。その収益とは 1 エーカー当たり 40 シリングから 9 ポンドにもなり、また土地を掘り起こし、耕し、肥料を与えれば出費は大きく嵩む・・・にもかかわらず 2 ないし 3 エーカーの土地で自分自身とその家族を養い、作業のための他人を雇っている人がいることを知っている；したがって目を見張るほど収穫が増える必要があり、そうでなければ費用を賄うことができなくなるであろう；—ただ、このような仕事には多くの欠点があると思われるのは、これはイングランドではまだほんの数年の出来事であるため、深く根付いている訳でもなくまた十分に理解されている訳でもないからである。50 年ほど前、イングランドで初めて発明が花開いた頃、ガーデニングのこの技術がイングランドの中で、サンドウィッチとサリー、フラムその他の場所に広がり始めた」。ハートリブによると、サリーの老人たちは、キャベツ、カリフラワー *coleflowers* を植え、カブとニンジンの種を蒔いた「最初の庭師たち」のことを覚えていたと続け；「庭師たちは 1 エーカー当たり 8 ポンド支払ったが郷紳は自分の土地が利用され掘り返されて台無しになるのではないかと心配し満足しなかった・・・イングランドの多くの地域はまったくもって何も知らなくて・・・ガーデニングとか鋤を使った耕作の名称すらほとんど知られていない・・・ガーデニング用具も（ロンドン周辺を除けば）数が十分でなく安くもない・・・この国にはリンゴ、梨、サクランボ、ブドウ、栗、アーモンドその他の苗木を育てる場所も十分にはなく：郷紳たちは苗木を求めて数 100 マイル離れたロンドンに使いを出す必要があった」。さらに続けてハートリブは、ケント、ロンドン周辺、グロスターシャー州、ヘレフォード、ウースターには「多くの立派な果樹園」があると言うが、これらの果樹園は彼が 50 年前からと述べたそのはるか前から存在していたことを我われは知っている。ケントとサリーではプラムは普通「地代の少なからぬ割合の支払い」に充てられたと彼は付け加えている。果樹園の改良に熱心だったのは清教徒派だけではなく。熱烈な王党派の中にもこの仕事に目覚ましい足跡を残した一族がいた。今日でも、ヘレフォードシャー州ホウムレイシィにはイチイの生垣が沿道に配置された当時と同じ長い緑の園路が見られるが、ここはチャールズ 1 世がネーズビーの戦い [1645 年] に敗れた歴史に残る年に、スクードモー卿 [John Scudamore, 1601~1671 年] のところに滞在した時に歩いた路で

あるかも知れない。国王の死後もスクードモーは忠誠を尽くし、ロシエルのフランス人ユグノーを救うための遠征に参加し、ハウムレイシィに帰ってからは、リンゴの木の植付けと接ぎ木に精を出した。彼は赤筋ピピン Red Streak Pippin を持ち帰り、これを使って最上等のリンゴ酒を作った。アンブローズ・フィリップス（1671–1749年）はこの事実をその詩「果実の女神ポモナ」“Pomona”の中で称えている。彼はマスクリンゴ Musk apple を称賛し、そして付け加えて：－

<p>“Yet let her to the Red-streak yield, that once Was of the sylvan kind, uncivilized, Of no regard, 'till Scudamore's skilful hand, Improv'd her, and by courtly discipline Taught her the savage nature to forget－ Hence called the Scudamorean plant, whose wine Whoever tastes, let him with grateful heart Respect that ancient loyal house.”</p>	<p>だがそのリンゴを赤筋リンゴへと変え、それは昔 森にあったもので、洗練されておらず 見向きもされず、スクードモーの巧みな手腕が そのリンゴを改良するまでは、そして上品な作法で 残酷な自然を忘れることを教え 故にスクードモーの植物と呼ばれ、そのワインを 味わう人は誰も、感謝の心で その古き忠実な館を敬うことになる</p>
---	--

ハウムレイシィの果樹園は今もその姿を残し、その庭園にはわが国で一番を競う美しい「コルドン仕立て」の果樹 [1本の幹から横に広がる剪定法] の壁が今もある。ウォルター・ブライス [Walter Blith, 1605～54年 農業関係の著作家] は 1649年発行『イングランドの改良者あるいは農業新概観』*The English Improver, or a New Survey of Husbandry* の著者であり、かつ自らそう名乗っていたように「発明愛好家」でもあった。彼は同胞の人々に対し果樹を植えることを強く訴え、イングランドの他の地方の人々に対してイングランド西部で行われていることを真似するよう、また「ブドウ、プラム、サクランボ、梨およびリンゴ」を植えることを促した。彼はまた「キャベツ、ニンジン、タマネギ、パースニップ、アーティチョーク、カブをもっと植えること」を勧めた。

これらの人たちが途を開き、他の農学者たちがこの良い手本に従い、その著作の中で産業としての市場型ガーデニング（マーケットガーデニング）に刺激を与えようと試みた。ラルフ・オースティンは 1653年に果樹に関する論文を書き、ハートリブにそれを献呈した。彼の著作の最初の部分は、ガーデニングと果樹栽培を支持する議論で溢れているが、それは聖書の権威に基づき、かつ聖書の一節がちりばめられている、当時の典型的なピューリタンのスタイルと言える。彼の別の著書『果樹園または果樹の庭園の宗教的活用』*The Spiritual use of an Orchard or Garden of Fruit Trees* では、このスタイルが過剰なまでに推し進められ、接ぎ木、移植などすべての手順がキリスト教徒の人生におけるいずれかの場面と比較されているものの、ガーデニングに関する情報がほとんど見られないほどである。このピューリタンの精神はアダム（別名アドルフアス）・スピード [Adam (Adolphus) Speed, 活動時期 1647～59年] が 1659年に書いた本の『エデンの園から追放され

たアダム』 *Adam out of Eden* という書名にも見てとれるし、書名が書かれた扉のページの残りの部分にはこれらの作家たちの実用的な側面が示されている。それはこのようなものである：－「その他数ある中でもとりわけ、ラビによる土地改良が書かれている。それは年間 200 ポンドの地代から、すべての費用は控除して毎年 2000 ポンドの利益までというものである」。しかし、立ち入る必要もないことだが、どのようにしたらこのような芸当が実行可能になるのだろうか！

共和国の時代には、ガーデニングはより実用的な点から取り扱われた。何を栽培したら一番儲かるかが考えられた。そしてどうしたら土壌を一番改良できるか、そしてより収穫が上がるであろうかと。新しく造られた庭園は多くはなく、また既存の庭園は戦争中に被害に遭い、特に王室庭園はひどい目に遭った。ノンサッチとウィンブルドンは売られ、ハンプトンコートは売るための調査が 1653 年に行われたが、「議会在次の通知を出すまでそのままに」との命令が出され、手つかずのまま残された。大規模な新しい庭園が造られなかったことは、王政復古の後、設置されたと思われる数と比べるとより浮き彫りになる。

この中間の時期においては、経済的な観点からの植物栽培の進展はあったが、庭園のデザインとかフラワーガーデンに関する前進というものは見られなかった。あわせて植物にまつわる古くからの多くの迷信が明らかにされた。オースティンは昔ながらの考えを否定するために数ページを埋め尽くし、たとえば桃とかアーモンドの種に字を書いてそれを植えるとその木の熟した果実と同じ字が現れるのを待つというような話を「間違い発見」と彼は書いた：－「種のあるすべての果物を、あなたが美味しいと思う味にするためには、なって欲しい味のする酒に種を漬ける」とか「赤いリンゴを作るためにはカワカマスの血に接ぎ木を浸しておく」。これらの方法を彼は次のようにまとめて：－「こんなことは不可能だ」。「実用上の間違い」を直すことをあわせて追求した彼は、果樹の植付け、移植に関し、大変優れた考えを示した：－「多くの人が果樹を冬ないしは春近くに移植するがその作業は 9 月ないしはその頃に行うべきである」。もう一つの間違いは「木の植付けの時、木の間隔が近すぎる：リンゴの木、梨の木は 10 から 12 ヤードが適切な間隔であり、サクランボ、プラムの場合は 7 から 8 ヤードである」。多くの人々は「果樹園に古すぎる木」を植えるし、「また移植する前の場所と同じかそれより良い土壌の場所に植えることに気を遣わないで忘れる」。オースティンはこのような本に、こういう間違いが書かれていることがわかったと何冊かの本の名前を挙げている。「1640 年の『田舎暮らしの人のレクリエーション』 *The Countryman's Recreation* にはこのような絵空事が満載されている」し、同じく「ディディマス」と自称したトーマス・ヒルの本、およびガブリエル・プラッツの『田舎の農場』 *The Country Farm* の著作の中にも見受けられる。このような間違いを論破する必要があったということは、とりもなおさず多くの庭仕事をする人たちの考えというものが、まだどれほど未熟であったかを示すものである。フランシス・ドロップ [Francis Drope, 1629?～71 年 樹木栽培専門家] が 1672 年に書いた果樹に関するちょっとした本には非合理的なことは書かれていないが；アダム・スピードがオースティンの本より数年後に書いた本

は、オースティンにより「発見された」間違いと同じくらい見るからに馬鹿げた間違いだらけであり、このことから「暗闇から夜明け」までの道のりはゆっくりしたものであったことがわかる。それを示す実例としてはスピードの厳粛なる主張を 2 つ引用するだけで十分であろう：－「白いユリを赤くするには、ユリの根に穴を開けて何でもいいから赤色のものを詰めること」および「[黄色い花をつける] エニシダの間にバラの根を植えれば黄色のバラが咲くであろう」。彼はノゲシ *sow thistles* を植えるべきと勧めているが、それは「子牛、子羊、豚・・・何百万ものウサギ」を「ノゲシが養う」からであり、キクイモ *Jerusalem Artichokes* は「家禽と家畜化された豚の餌になる」からである。ただし、彼の意見の中には、少しはまともなものもある：たとえば、ジャガイモについて「ジャガイモから上質なパン、ケーキ、それとパイができるであろう・・・ほんの少しの労働でできるジャガイモをもっと大量に増産するとよい；ジャガイモは薄く切って、地中に埋めれば、どれも同じように驚くほど成長してどんどん大きくなるであろう」と彼は見ている。

野菜のパイやタルトは珍しいことではなかったようである：マーカム [Gervase Markham, 1568 頃～1637 年 詩人] は『イングランドの主婦』 *The English Housewife* 1637 年、の中で何種類かのレシピを書いており、その一つが「ハウレンソウのタルト」であり、シナモン、ローズウォーター、砂糖で香り付けされ、もう一つがハウレンソウ、ソレル、パセリ、卵を使うものであった。あわせてこの本の中では各種サラダの長いリストが示されており、「料理サラダ」として、たとえば「茹でたニンジン」、ハツカダイコン、ムカゴニンジン；－「シンプルなサラダ、タマネギ、レタス、サムファイア *samphire*、豆のさや *Beanecods*、アスパラガス *sparagus*、またはキュウリ」、これらはオイル・酢・砂糖とともに供される；そして「盛り合わせサラダ」、これは「普通は大きな祝宴や王侯の食卓に出されるもので；」その中身は「初めに若芽とハーブの取り合わせ」、たとえば「赤セージ、ミント、レタス、スマレ、キンセンカ、ハウレンソウ」・・・ほかに「キュウリ、カラント、オレンジ、レモン、オリーブ、イチジク、アーモンドと合わせたキャベツ」。ニンジン は料理を飾るために使われ、「楯、紋章、鳥や動物」の形にカットされた。マーカムのお勧めは、ラムとマトンの料理の付け合わせはプルーンかカラント、魚料理にはバーベリー、とするものである（*バーベリー 1 ポンドの支払い価格は 1618 年時点では 3 シリング ール・ストレンジ『家計簿』）。

果樹の様々な種類の数量については、前の章でいくつかの事例を紹介したところだが、その中から、オースティンは一番良いものを選んでる。リンゴについて彼のお勧めは、夏および冬のパーメイン、小さいピピン、ハーヴェイ *Harvey*、クイーンそしてジロフラワー *Gilloflour* である。400 から 500 種類ある梨については、「ウインザー」と「サマーベルガモット」*Sommer Bergamot* を彼は選んでいる。「しかし、コンスタントに実がなる点からはキャサリン梨ほど良いものはないと思う」；－「グリーンフィールドは優れており・・・いつも変わらずに良い、たくさん実がなる」；－「チョーク梨、ペリーの特別な種類とされるが、食べるにはまったく不向き」。「フランダースチェリーはここイン格蘭

ドでは広く植えられている。ブラックハートチェリーは大変特別な果物である。「一番良いネクタリンはローマンレッドである。ただしこれを繁殖させるのはとても難しい。それは接ぎ木しようとしてもどの木も受け付けず、ほんのわずかだけ植付けられるからで、これが我われにとってこの木がすべての植物の中で最も貴重なものとなっている理由であると思われる；」「ナツメグとニューイントンの一番素晴らしい桃；とても大きく立派な果物である。「ここで熟れるイチジクとしては一種類しか知らない：キャサリン梨と同じくらい大きい大ブルーイチジク the great Blew-fig である。この木はオックスフォードのいろいろな箇所の庭園で育っており、南側の壁に向かって植えられ、釘と革紐で横に広げられている」。オースティンは果樹に関する当時の最大の権威者であった*。

*果樹に関する優れた論文の写本は、おそらくジョシュア・チャンドラー [Joshua Chandler] により 1651 年頃書かれたもので、完全にオースティンに依拠するものであり、その一部はオースティンの著作より翻案されたものである。なお、聖書に関する彼の言及は省かれている。この写本はウィルモット女史の所有である。

イングランドの古い庭園は時が流れ、季節が移り変わる中でその姿を失っていったが、それ以上に容赦のない人間の手により破壊されていった。とは言え、それぞれの時期の庭園の面影は今も残されている。17 世紀の終わりにかけて復活した「王侯らしい」庭園というものは、17 世紀中頃には一つも造られなかったものの、多くの古い荘園領主の館の庭園がこの頃から造られることになった。本書は「庭園」の歴史の本ではないから、イングランドの隅々に現存する美しい古い庭園の完全なリストのようなものを提供することは不可能であり、いくつかの典型的な事例を紹介することにより、各世紀ごとの流行や計画の説明に役立つことでよしとするほかない。テラス、ボウリング用芝生、刈り込まれた木で彩られたケントのチルハム城の庭園は 1631 年に造られた。ウォリックシャー州ビルトンの庭園には、見事なセイヨウヒイラギとイチイの生垣があり、1623 年が使い始めの年であった。ノーサンプトンシャー州のブルウィックには、階段状の坂道、池、そして立派な錬鉄製の門があり、同じ頃設計され 1674 年に完成した。またノーサンバランドのミットフォードでは、荘園の館（1637 年完成）自体は廃墟になっているが、庭園の古い壁に囲まれたその中には絡み合ったバラ、甘いハーブ、そして古いリンゴの木、さらには日時計が今に至るまで残されている。この日時計はあつと言う間に過ぎ去った 250 年間の時を忠実に刻んできた。そして、このような実例はイングランドのどの地域にも見つけることができるであろう。



BULWICK.

[図 9-1] ブルウィック

家計簿によりこのような庭園の管理方法について垣間見ることができる。ハンスタントン所在のル・ストレンジ家の興味深い一連の家計簿には、次のような項目が記載されている：－

「1628年11月6日、果物を家に持って帰る袋に1シリング。ボウリング用グラウンドを造るためショウブ類 flaggs を掘り起こした男1人に4シリング。庭園の扉に使う65フィートのオーク板に7シリング。

1629年、ヒーチャム果樹園の溝掘りと生垣作りへの支払い、2人の男を7日間、1ペイス [peice 重量単位、peis の異綴り] 当たり7ペンス、庭園からきれいに刈り取って掘り出す作業に11シリング8ペンス [訳注：140ペンス、2人×7日＝日当10ペンス]

1630年、手押し車6台に1ポンド、庭園の館の棟飾りに1つ2シリング8ペンスで1ポンド18シリング、堀の壁の棟飾りに16ペンスで12ポンド2シリング5ペンス、庭園の入口の小部屋に30ペンス、そのドアの上の棟飾り

1631年10月16日、庭園用鋤3シリング

1632年、庭師に4半期分の賃金、2週間分未払いで2ポンド

1635年、庭園用の大きな籠2つ4シリング

1637年、庭園用のポンプとパイプ2ポンド4シリング。クリークの庭師に挿し木と種の代金2シリング」

これに加えてハンスタントンの家計簿が大いに興味をそそられるのは、そこに記載されている堀の内側にある庭園の一部は、その当時よりほとんど手が加えられていないということである。ボウリング用芝生は今もそこに残されており、館の正面にある、分厚い低い生垣がある庭園の四角い一面はほとんど昔のままである。ケントのバラムのヘンリー・オクセンデン [Henry Oxenden, 1609～70年 詩人] の筆記帳には1638年から1668年までの (*『系図学者』*The Genealogist*, 1891年7月および10月－1892年1月) 興味深いガーデニングに関する記載が多数なされている：－

「1635年2月11日、メイデケンの庭園にタイマイ梨 hawksbill pares を植える。

「1635年、大メイデケンのサクラランボ園に植樹。

「1652年2月14日、バーリング氏にリンゴの木4本と梨の木、すなわちジャコウ梨 musk pare1本あげる。

「1652年2月10日、いとこのヘンリー・オクセンデンにイチイの木を送る・・・そして彼に石のローラーを貸す。

「1647年11月16日、庭園に25本の梨の木を植える。庭園は壁で囲まれており、大メイデケンにて私の息子のトーマスとホバートが確認。

「1654年11月、メイデケンの種苗場からマルメロの木1本、ウォーデン梨の木2本、その他の梨の木3本をバイトンに植付け、そして梨の木1本をバン焼き場の窓に向かって植え、さらにセイヨウカリンの木1本とナツメグ桃の木を庭園に植えた。

「1655年2月19日、一番優れた梨であるキャプテン・メリウェザーを南バラムの館の脇にある木の上に

接ぎ木した；その上で交配させ；これは2月に食べられることになる。

「1639年、彼（サー・バズル・デキシヴェル、在ブーム）はホールへの後ろのドアに向いている果樹園に植えた。

「1647年2月7日、ホブデイ中尉がリンゴの木10本を彼の庭園の横の果樹園に植えたが、それは私があげたものであった。

「1665年、エドワード・エイディの未亡人であるエイディ夫人は庭園とグリーンコートの周りに笠石を新しく乗せた。



〔図9-2〕 ハンスタントン

サー・トーマス・ハンマー [Thomas Hanmer, 1677~1746年 下院議長] の筆記帳*にはこの当時の彼のベティスフィールドの庭園にあった果樹についてのメモが残されている：-

*「フリントシャーにおける教区とハンマー家の回想録」ジョン・ハンマー卿 著-自家出版 1877年
A memorial of the Parish and Family of Hanmer in Flintshire, by John Lord Hanmer

「南側の壁に向かってレイ氏（†『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』の著者）からもらったアプリコット1本、ロンドンから到来のアプリコット3本、フランス産の種の桃1本、ベティスフィールド 1660 で育てられたもの、トレヴァリン産のサクランボ（レッドハートチェリー）red-heart cherries² 本が植えられている。芝生の園路の隣の隅にはボウエンからもらったベルガモットと思われる梨の木1本がある。そこの西側の壁に向かっては、南側の壁からドアへと、ジェフリー大佐からもらったプラム全種類、ただし二重咲のサクランボ1本を除いて、そしてドアの隣にモロッコプラム1本がある；ドアの反対側には、最初のところにブレンプラム bullen plum [ダムソンのことか]、次いでトルコプラム、そしてキングプラム、そしてカタロニアプラム、そしてデュークチェリーDuke cherry [甘いサクランボとすっぱいサクランボの交配種]、セイヨウサンシュユ。北側の壁に向かっては、トレヴァリン産プラム、すなわちアプリコットプラムとオレンジ、そしてジェフリー大佐からもらったプラム1本が植えられている。大庭園の東側の壁に向かっては、サクランボ、カーネーションチェリーが壁の真ん中あたりに、デュークチェリーは端に、北側の壁の近くには、レイからもらったセイヨウサンシュユがほどよく混ぜ合わせられ、そしてレイからもらったトルコプラム・・・小さい庭にはベイト氏からの桃の木3本、すなわちモリルMorills・・・ニューイントン・・・そしてペルシャ桃がある・・・小さな庭園の東側の壁に向かっては、南側の壁から始まって、まず3本の桃、ベティスフィールド 1660 で育てられたもの、フランス産の種から、そしてポーピーチ peach de Pau、そしてサボイピーチがある」。

これらの小さな細々したことが面白くないということは決してない。これらは情熱的な騎士党员 [チャールズ1世時代王党派] である一人の人間が、あの混乱した時代を生き抜く中で、どのようにして庭園に向き合ったかを示しており、それは王政復古に至るまで動きがなく待つだけの年月をやり過ごすためのものであった。彼がガーデニングに取り組んだのは単なる時間つぶしではなく、真剣に能力と時間をつぎ込み、庭園技術を完全にマスターしようとしたことは、彼が自らのペンで書いた詳しいノートを見れば明らかだ。もう一人の王党派でガーデニングの偉大なパトロンの一として知られるカペル卿 [Arthur Capel, 1631~83年] は、1648年に処刑されたカペル卿 [1608~49年? 王党派支持] の息子である。彼は1661年にエセックス伯爵を授けられ、1683年にロンドン塔で死んだ。彼はカシオベリに庭園を造り、それは17世紀で一番美しい庭園の一つにしばしば数えられている。彼の弟であるサー・ヘンリー・カペル [Henry Capel, 1638~96年] も造園家であり、「フランスから何種類かの果物」*を持ち込んだ。

*スウィツァー『田園の設計』1718年 Switzer, *Ichnographia Rustica*

彼はキューに庭園を持っており、そこには「変わったグリーン」があった；それは「ロンドン周辺のものと同じくらいきちんと管理されており」彼の「花や果物は」「中でも一番」であった（†ギブソン『ロンドン周辺の庭園』1691年 Gibson, *Gardens about London*）。サー・ヘンリーは1692年、チュークスベリのカペル男爵を授けられ、それゆえ二人とも造園家であっ

たことから、カペル卿に関する様々な事柄に関し混乱らしきものが生じがちになった。エセックス伯爵の方は、自分の庭園の管理の主なところを、有名な造園家で果樹に関する本の著者であるクックにだけに任せていたようだが、ただ、イーヴリンの評するところでは（*イーヴリンの日記 Evelyn's Diary）、「この高貴な伯爵ほど自分の家の周りに熱心に植物を植える人はかつていなかったということで、その家は園路、池、その他の田園的な気品で飾られていた・・・カシオベリの庭園は極めて貴重で、それ以外にはありえないくらいで、優れた技術を持つ芸術家クック氏により見事に管理されていた。彼は技術的な面において、数学の門外漢ではなく、占星術もわかっているようだった」。サー・ヘンリーの方はこのような助力は得ていなかったようであり；－「彼の庭園にはイングランドで栽培されている中で最上等の果樹が植えられていたが、それは彼が最も熱心でそのことをよく理解していたからである」（†同書）。

もう一人の著名な王党派の造園家はジョン・イーヴリンである。彼の森林の樹木に関する偉大な著作は、本当は我われのテーマではない。それは英国学士院（イーヴリンはその創設期の会員）のために書かれたものであり、狩猟場、森、森林地帯に植林する時の実用的な参考になることを念頭に置いており、庭園という狭い範囲を大きく超えるものであった。ただ、庭園についても、次の引用に見られるように、折に触れ述べられている。彼はシーダーcedars の耐寒性を高く評価し、あまり育てられていないことを残念がった。多分これは彼の助言によるものであろうが、1683年にチェルシーの薬用庭園にシーダーが植えられた。トキワガシ *ilex* もまた、彼が耐寒性であることを実証したが、それは、ホワイトホールの王室専用庭園には「かつて80年以上も立派な木が元気に育っており」その一本の名残からわかったものである。「フィリリア *Phillyrea* [モクセイ科の常緑低木] は十分耐寒性があり、そのことで私はどうしてフィリリアの一種 *angustifolia* がケースの中に植えられ、オレンジやレモンの間のストーブの近くに極めて注意深く置かれているのか不思議に思った」。イーヴリンは「4本の丸い」フィリリアを持っており、それらはデットフォード [テムズ川南の地域] のセイズコートにある彼自身の庭園で「なめらかに刈り込まれている」（ギブソン『ロンドン周辺の庭園』1691年）。セイヨウシデ *Hornbeam* の下で、イーヴリンは「ハンプトンコートやニューパーク」、「ロチェスター伯爵のとても気持ちのよい別荘」にある「称賛すべき」生垣についてあれこれ注目している。「これらの生垣は剪定向きであるが、15から20フィートの高さで揃えておくには・・・4フィートの長さの大鎌を使ってきちんとした状態にしておくことになる。その大鎌はほんの少しだけ鎌の形をしていて長い柄、すなわち真っすぐな棒に固定され、剪定作業をきれいに捗らせるものである」。・・・これらの生垣は「我らのオレンジの木、マートル、その他の貴重な多年草や外来植物を保護する上で役に立つこと」この上ないものである。月桂樹は同じ目的で広く使われており、イーヴリンは「生垣を作ることに宿命づけられているようにさえ見える」と言う。セイヨウヒイラギのことも庭園の生垣として彼は熱っぽく称賛する：－「この世におよそ長さ480フィート、高さ9フィート、幅5フィートの鉄壁の生垣以上

に栄光に満ち気分を爽やかにさせるものが存在するであろうか。セイズコートにある（モスクワ大公国皇帝の仕業により）今は荒れ果てた私の庭園の中に、棘のあるつやつやした葉っぱのこの生垣を年中いつでもお見せすることができる」。これは『森林樹木』*Sylva* の重版からの引用で、庭園の「荒れ果てた」という意味は、ピョートル大帝〔在位 1682～1725 年〕がイングランドを訪問した時（1698 年）、デットフォードに近いセイズコートに滞在中に与えた被害のことを指している。言い伝えによると、大帝は面白がって後先を考えず手押し車で庭園中、ボーダー花壇を越え生垣の中を走り回ったという。1698 年 6 月 8 日の彼の日記にイーヴリンはこう書いている：－「私は、この 3 か月間大帝が私の家を宮廷として使った結果、私の家がどれほど悲惨なことになっているかを見るためにデットフォードに行った。私は国王鑑定士であるサー・クリストファー・レン〔Christr. Wren, 1632～1723 年 建築家 セントポール大聖堂などの設計〕と彼の庭師であるロンドン氏にそこに行ってもらい修理の見積もりをしたところ、彼らは大蔵卿に 150 ポンドとの報告を提出した」。

イーヴリンは自分自身の庭園についての関心だけではなく、ほかの庭園の設計も手助けした。サリーのウォットンにあるイーヴリン一家の居所は「イングランドで手に入る最も壮麗なものの一つであり、確かにその後大いに流行した優美さの実例の一つとなっていた」と彼は言っている。しかしながら、彼は 1652 年、彼の兄弟がいろいろ手を加えるのを手伝った。イーヴリンのような優れた造園家に対する大いなる敬意を持ちつつも、時間が経った今の時点から見ると、彼が加えた変更がはたして全部、改善と言えるかどうかは疑わしいと言っても差し支えなからう。そこには「高台」や「山」があり、そして館の庭の内側には堀があった。その部分は「山を掘り崩しそれを速い流れに放り込み・・・堀を埋め尽くし、その立派な場所を平らにして今は庭園と噴水がある」。1658 年、彼は「オルバリー（Alburie, ギルドフォードの近くの Albury）に庭園の進捗状況を見に」行ったが、「私の行った設計と計画どおり正確に進んでいることを確認した。そこには狩猟地の山を通して長さ 30 パーチ〔1 パーチ=約 5m〕の地下道があり、このようなパウスリッペ〔ナポリ近くの古代ローマ地下道トンネル〕に似たものは、ここのほかイングランドのどこにもない。水路は今掘られておりブドウ畑が植えられている」。この変わった丘の切通しは今も存在しており、このほか昔施された造作の名残やとても美しいイチイの生垣も存在している。イーヴリンはここでもまた、生垣にはセイヨウヒイラギをと熱心に唱えており、そのことをここに引用した彼の日記の抜粋の中で自ら明らかにしている：－「1672 年 9 月 25 日、私はジョン・バークレー卿〔John Berkeleys, 1602～78 年 王党派〕の屋敷で食事・・・それは彼の新しい館というか宮殿であったが・・・ほかには前方の中庭は上品で、馬小屋も同様に、特に庭園は、土地の起伏と愛らしい水浴池のおかげで比較しようもなく上品であった。テラスのセイヨウヒイラギの生垣は私が植えることを勧めたものである」。焼け落ちたバークレーハウスは、今はヘイヒル、バークレースクエアおよびランズダウンハウスの敷地となっている場所に建っていた。

イーヴリン自身も海外から新しい品種の種や植物を手に入れようと努力し、また彼が

『森林樹木』の中で主唱した樹木を増やそうとした；なぜならプラタナス Plane やセイヨウトチノキ [マロニエ] Horse-chestnut など多くの樹木がこの国ではまだ一般的ではなく、また中でもカラマツ Larch、ユリノキ Tulip tree、シーダーはほとんど手に入らなかった。1686年、彼がサミュエル・ピープス [Samuel Pepys, 1633~1703年 海軍大臣 王政復古期の貴重な第一次資料である日記で知られる] に宛てて書いた次の手紙を見れば、その著作*の中で示した彼の強い関心というものがわかる。

*ハクニーのアムハースト夫人所有の写本

サミュエル・ピープス宛てのジョン・イーヴリンの手紙、セイズコートより、1686年9月1日付け

ピープス大臣宛て 海軍省 ヨークビルディング

拝啓 先日閣下にお目にかかり食事をご一緒した時、そこにいた艦長（多くの人々の習慣と国々を見てきた人 multorum mores hominum qui vidit et urbes [訳注]）はニューイングランドにおいて軍隊を指揮することになっておられますが、この方が大変ご親切にも、その地方にある植物の中で珍しくて貴重なものと思われるものを私のために何でも入手してくれる、という私への助力を申し出て下さいました。紳士としての率直さと並々ならぬ勤勉さ：そのことを私は閣下が彼について語った性格から、そして私自身が短時間のうちに観察できたことからわかりました；閣下ご自身への彼に対するご関心とあわせて；この覚書を閣下より彼の手に渡していただける、このような絶好の機会をみすみす逃すようなことはしたくないと思い：植物の王国に自生するこれらの（あるいは別の）ものを収集するという寄り道が、かの地における彼の任務の範囲内であるとするなら：（私を彼にご推薦いただいた最初の方である）閣下より彼に対し、収集したものをご尊名のもとに、送付し、引き渡す許可を与えていただければとお願い申し上げます。 敬具

J. イーヴリン拝

セイズコート 86年9月2日

[訳注] ホラティウス『詩論』141行。ホメロス『オデュッセイア』の翻案ラテン語訳。標準的な Teubner 版では qui mores hominum multorum vidit et urbes。都市 urbs はギリシャの都市国家

ニューイングランドおよびヴァージニアの植物で以下の名前で知られるもの：
ニューイングランド

1. The White Cedar	ヌマヒノキ	種だけ
2. Cedar of N: England	ニューイングランド産シーダー	種
3. Larch-tree	カラマツ類	種と苗木
4. Lime-tree	シナノキ類	種と苗木
5. Hemlock-tree	ベイツガ類	種と苗木

6. Poplar or Tulip tree	ポプラまたはユリノキ	種と苗木
7. Filbert Tree	ハシバミ類	木の実と苗木
8. Firrs of all kinds	あらゆる種類のモミ類	種
9. Pines of all kinds	あらゆる種類のマツ類	木の実
10. Wall Nutts of all kinds	あらゆる種類のクルミ類	木の実
11. Plums of all sorts	あらゆる種類のプラム類	種（核果）と苗木
12. Sarsaparilla	サルサパリラ	苗木
13. The Scarlet Nut: Wallnut と呼ばれることもバージニア	スカーレットハシバミ〔Scarlet Filbert か?〕	木の実と苗木
14. Benjamin Tree	ベンジャミン	種と苗木
15. Gumme Tree	ゴムノキ	種と苗木
16. Sugargas Tree	砂糖の木〔サトウカエデか?〕	種と苗木
17. Date plum:	マメガキ	種（核果）と苗木
18. Pappaw-tree	ポポーノキ	種と苗木
19. Chinquapine	チンカピン栗	木の実と苗木
20. Piekhickers	ヒッコリー	木の実と苗木
21. Sumac trees, 3 kinds	ウルシ類 3 種	苗木
22. Cedar of Virginia	エンピツビャクシン	種
23. Maple tree bearing keys of crimson color	クリムゾン色の翼果を持ったカエデの一種	種と苗木
24. Peacock taile tree	オウコチョウ?	種と苗木
25. Oakes, 6 kinds	オーク類 6 種	ドングリと苗木

種は紙に包むのが最上の保存方法：名前をその上に書き、箱に入れる。植物の実は乾いた砂の入った樽の中に入れ：品種ごとに名前を書いた紙に包む。木は根を苔で包み樽に入れる：植物も木も小さいほどよい；さもなくばむしろでくるむのもよいが；樽が一番よく、それと名前入りの各品種に付ける紙のラベルがすべて入るくらいの小さな容器。

送られてくるヴァージニアの植物のほとんどはニューイングランドでも育つであろう：あなたのたいなるご親切と寛大なお申し出により、（ピープス大臣の表書きと推薦により）このカタログをお預けいたします。 敬具 J. イーヴリン

セイズコート デットフォード近くの

86年9月1日

覚書 このコピーはニコルソン艦長の手に渡された 86年9月3日

1664年イーヴリンは『造園家年鑑』 *Kalendarium Hortense* すなわち *Gardeners' Almanac* を発行し、これは大人気のため改訂を重ね、『森林樹木』の最終改訂版とともに、1705年出版され、その年の末にイーヴリンは亡くなった。そこには植えなくてはいけない花やすべき仕事が毎月ごとに丁寧に書かれている。また花の寒さに対する弱さの比較表も作られ、花が3つに分類されている。すなわち、「最も寒さに耐えられない」もので「まず最初に温室に入れるなり何らかの保護をしなければならない」もの、「第2段階の寒さには耐えられ」、寒さ次第で「温室の中で守られなければならない」もの、第3クラスは「死ぬことはないが極端に寒い時は最後に温室に入れるか、マットレスとかちょっとしたカバーの下に置いて守ってやる」ものである。何種類かの植物に関しては彼の分類はちょっと変わっている。まず最初は、エジプトアカシア *Acacia Aegyptica* (= *A. vera*)、リュウゼツラン *Aloe American* (= *Agave americana*)、そしてハケイトウ *Amaranthus tricolor*、しかしこのリストには、耐寒性のエゴノキの一種 *Styrax Colutea*、別名ボウコウマメ *bladder senna*、および白いライラックが含まれている。

[訳注] *Styrax* はエゴノキ属のこと。ボウコウマメ *bladder senna* の現在の学名は、*Colutea arborescens* でマメ科の植物

一方、オレンジ、レモン、セイヨウキョウチクトウ *oleander*、「キソケイ」“Spanish jasmine” (*J. odoratissimum*) は第2番目のクラスに「クロアヤメ」“*Suza Iris*” (*I. susiana*)、「ヨーロッパシクラメン」“summer purple cyclamen” (*C. europoeum*)、「キバナジギタリス」“*Digitalis Hispan*” (*lutea*) とともに分類されている。最後のリストはザクロ *pomegranate*、パイナップルをマルバノヒゴタイサイコ *Eryngium planum*、キバナセツブンソウ *winter aconite* と一緒のクラスに分類している。

レイの『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』には庭園のおおよその大きさが書かれている。その寸法は、ベーコンの「王侯らしい庭園」に比べればはるかに控え目であり、貴族の庭園は80平方ヤード [約64m²、1平方ヤード=0.8m²] の果樹園と30平方ヤードのフラワーガーデン、「一般の紳士階級は40平方ヤードの果樹園と20平方ヤードのフラワーガーデンで十分；周囲の煉瓦壁は9フィートの高さ、そして果樹園とフラワーガーデンを隔てる5フィートの壁、または煉瓦色に塗装された杭の境界。大きな正方形の花壇は塗装された木の柵か、ツゲまたは低木 (矮樹) *dwarf trees* 用の柵で囲まれていること」とされた。彼が示すデザインのほとんどが正方形で、T字かL字型の花壇は庭園の壁の角にあわせて壁沿いに作られ、そしてこれらのボーダー花壇はおおよそ3ヤードの幅とされた。各花壇の隅には「最上のヨウラクユリ *crown Imperials*、マルタゴンリリー *lilies Martagon* など背の高い花」を植え、「正方形の花壇の真ん中にはシャクヤクの大きな茂み、そしてその周りにはいろいろな種類のシクラメン、(花壇の) そのほかの部分にはラッパスイセン、ヒヤシンスなどの花を植えるとよい。最高級のチューリップには直線的な花壇がふさわしく、その様子は記録しておくともよからう。ラナンキュラス類とアネモネ

にも特別な花壇を用意する必要があるが—それ以外の所には、普通のチューリップやバイモ、球根性アイリスその他あらゆる種類の球根植物が一面に植えられてもよからう・・・フラワーガーデンの片側の真ん中に格好のよい八角形の夏のあずまやを作ることも忘れてはならないだろう。そこは全体に屋根で覆われ、その屋根には風景その他の装飾がきれいに描かれ、家具としては椅子とテーブルが真ん中に置かれている。このテーブルはお楽しみや気晴らしのためだけのものではなく、ほかにも実用的な使い道は数多くある。たとえば、チューリップやその他の花の根っこを掘り出して、テーブルの上で、名前が書かれた紙に乾燥するまで乗せておき、そして包んで箱の中にするために使われる。選り抜きの1年生植物を育てるため、あるいは多様な種類の新しい品種を育てるためには、毎年温床を作らなくてはならない。このような庭園は苗圃なしには維持されないであろうし良好な状態で管理されないであろう。可愛らしい庭園の情景をたくさん作り出すためには、花や実生の苗木の苗圃と同じように果樹の親木についても苗圃が必要である」。

レイの記述を読めば、球根、なかんずくチューリップの球根の栽培について、平均的な小さな庭園においてどれだけ大きな注意が払われていたかがわかる。「チューリップ熱」は最高潮に達し、イングランドではオランダほどの熱狂には至らなかったものの、チューリップの花は当然のことながら人気が高かった。アウグスブルクで初めて(1559年)チューリップがお目見えして50年経って、その花はドイツ、オランダ、イングランドにおいてよく知られ、そして広く栽培された。およそ7つのはっきり異なった種類のものが栽培され、そこから際限なく新しい種類が増え続け、新しい色を求める熱狂は造園家たちを夢中にさせた。レイの義理の息子であるサミュエル・ギルバート [Samuel Gilbert, ~1692年? 聖職者・花卉栽培の著作家] は、彼の著作『花卉栽培者必携便覧』*Florist's vade mecum* (*第2版1683年)の中でチューリップのための庭園の図面を提案している。花壇は正方形に区切られ、50までの番号が付けられ、一区画ごとに違った品種のチューリップが植えられるようにしたものである。

チューリップのプレゼントは大変喜ばれたり、友人の間での交換が行われ、そして新しい品種は大切にしまっておかれた。次の注意書きはサー・トーマス・ハンマーのポケットブックに書かれている：「1654年サー・ジョン・トレバー [J. Trevor, 1637頃~1717年 ウェールズ出身 下院議長] に送られたチューリップはペルシヨ Peruchot1本、アドミラルエンチュイセン Admiral Enchuysen1本、私のアンジェリカ Angelicas の1本、コミセッタ Comisetta1本、オウメン Omen1本、私の持っている最上のダイアナス Dianas から1本、これらすべてが大変立派な球根を持っており、私の妻がホルトンから送った」「1655年ランバート卿 [Lambert, 1619~83年 清教徒革命の議会派軍人] に私はローズ [庭師ジョン・ローズのことか] を通じアガトハンマー Agate Hanmer のとても立派な母体となる球根を送った」。これはベティスフィールドの自分の庭園で育てているチューリップで、その色は紫がかったグレー、深紅色と白であった。サー・トーマス・ハンマーはその栽培法についてもノートを残している。「9月の満月の頃、約4インチ間隔で4インチ弱の深さで地中に植える。

早咲きのものは春の太陽の熱い日差しがよく当たるような場所に植える。遅咲きの品種については真昼の太陽の日差しがあまり強くない場所に植える。土は野原から取ってきた肥えた土か、木が積んであった場所のもので、4分の1かそれ以上の砂と混ぜる。花壇を作るには、この肥えた土を少なくとも半ヤードの厚みとする。チューリップはそれだけを植えた方がよく育つが、少しくらいのアネモネなら花壇の外側に、土を高く丸く盛り上げれば、一緒に植えることもできよう。チューリップは12月と1月には芽を出し、早咲きのものは3月下旬、4月上旬に花が咲き、そのほかはその2週間後かその後に咲く。母体となる球根は単独で植え、若い子どもの球根はそれだけで別に植える。チューリップの新しい品種は種を蒔いて作るが、種からできた実生のもものは花が咲くまで最低5年かかるであろう。古くて強い球根は種を採るため保存しておくが、そのような品種としてはたとえば、青い花卉のものと紫のチャイブ風、また純白の縞の入ったもの、そして淡紅色、紫がかったグレー、クワの実色のもの。青い花卉または底の単色のものと紫のチャイブ風はほとんどのものが縞入りになり、球根が古い場合は2年間移植しないで植えたままにしておくのがよからう」

1660年当時のベティスフィールドのフラワーガーデンにある花のカタログをさらに見ていくと、そのほとんどがチューリップのリストである。花壇の一つ一つについて言及されており、球根が植えられている各列が別々に取り上げられ、各球根の名前が、13もの種類に丁寧に並べられている。そのほかの花についても居場所はあるが、そのための花壇というものは用意されていない。これはベティスフィールドにおける別の花壇の話であるが、「この花壇の真ん中に八重のヨウラクユリが1本ある。端にはレイが種から育てたアイリスの列が6列ある；—そしてポリアンサス *polyanthus* とラップサイセンも。この2番目の花壇の4つの隅にはきれいなアネモネの球根が4つ植えられている」。1つの隅にはサイセンの大群があり、それはすべて「ベルデュヴァルナルシス *Belle du Val narcissi*、全部黄色」・「ベルセルマンナルシス *Belle Selmane narcissi*、とても愛おしいもの」などと説明されている。「大庭園の南壁の下のボーダー花壇はきれいなアネモネが一杯咲いており、ジャコウバラ *musk-rose* の近くにはレイからもらったコンスタンチノーブルのラップサイセンの球根2つとマルタゴンリリー類 *Martagon pomponium* が植えられている」。これらの抜粋からわかることはトーマス・ハンマーは造園家であつた作家であるレイと友達だったということである。彼は「何とか我われの気候に耐えるような」優良な植物のカタログを作ったが、そこには「薬用としての品質についてとやかく言わないで、これらの保存と繁殖のための指示」が短く添えられていた。これらの覚書はレイに渡され、レイはそれを自分の本に活用したと信じられている。

サー・トーマスはイーヴリンとも友達であり、彼の植物に関する知識の一部はイーヴリンとも共有された。1668年8月22日、彼はイーヴリンに手紙を書き、何らかの書類を同封している：「これらはほんの単なる観察に過ぎないが、真実であり、花の改良に関して広く知られる秘密なるものは正しくないと証明できよう」。1671年には彼は再び手紙を書

き、この時はイーヴリンにいくつかの植物を送っている：－

ベティスフィールドにて 1671年8月21日

「拝啓 ここに何種類かの球根類をお送りします：ベアズイア（プリムラアウリキュラの別名）とアネモネとラナンキュラス類はとても良いものですが、チューリップは（アガトハンマーとアリアナ Ariana、それといくつかのものを除いて）特別というほどではありません；まったくもって、私の庭園には昔持っていたような珍しいチューリップの多様な品種というものが今はないのです；私の持っていた一番良いものはこの場所に住むようになった最初の年にほとんど枯れてしまい、その後、新しいもので飾ることをしていません。なぜならこの空気も土もそれらに向いていないと思うからです。あなたのフラワーガーデンは新しくてもそれほど大きくはないと思いますので、今回はあまりたくさんのは送れません。ベアズイアはあなたが受け取る前に乾きすぎないとよいのですが；それらはデットフォードに着く前に最低 2 週間は経っているでしょうから、できるだけ早く植え替えて、3日間から4日間水をたっぷりやって（もし雨が降らないようでしたら）、そして日差しが強すぎないところに定植して下さい。私はかつてジリフラワーに挑戦してみようと思ったことがあって、2年前種からそれは見事なものを育てましたが（このようなことは今までやったこともなければまたやろうとも思いません。なぜならイングランドの湿気はオランダやフランダースに比べて種が熟するのを妨げるからです）、ロンドン周辺には至るところに優れたものがあるのであなたにあえてご覧頂くほどの自信がありませんでした：－そのような遠くまで送ることで枯らすことにならないかどうか心配しました。イーヴリン様、私としましては、このようなつまらないことか、あるいはもっと重要な場面で一層のお役に立てればと願っております：私は即座に大いなる喜びをもって、私の本当の気持ちをお伝えするあらゆる機会をとらえることを誓います、

あなたの心からの忠実なるしもべであることを

トーマス・ハンマー

「私ども夫婦は謹んで令夫人および貴殿に対し、また私の気高き友人サー・リチャード・ブラウン [Richard Browne, 1605頃～1682/83年 王党派 イーヴリンがセイズコート of 彼の屋敷を購入] に対し私どもにできるお手伝いをいたします。この手紙と箱を私の息子トム・ハンマーの手であなたにお届けします。息子はインナーテンブル法学院内のフィッグツリーコート of 自分の事務室に定期的に通っており、あなたのご指示があればいつでも私に伝えることができます。箱の中にはプリムラアウリキュラのととても良い種が入れてありますが、あなたの方が種蒔きと育て方について私が申し上げるよりもよくご存じのことと思います」。

ジェラードとパーキンソンによって珍しいとされたそのほかの花は世間一般に幅広く知られるようになっていた。このことはユリの仲間についてはっきりと言える：－「赤いユ

リ [カナダユリなど] red lily (* = *Lilium canadense rubrum*, or *L. croceum* or *L. pompomium*) はひどく派手な花なので、国中どの女でも、簡単な説明をすれば、それがどんな花なのか初めての人にもわかります・・・次に来るのがマルタゴンで、つる性で巻きつく花は花瓶に生けるか煙突にしか向いておらず、植えるべき場所はボーダー花壇の横か生垣の下である」(†ギルバート『花卉栽培者必携便覧』)。カーネーションは依然として人気の高い花であった：- 「カリオフランスホルテンシス *Caryophyllus hortensis* 7月の花と呼ばれ、チューリップが春の誇りであるように、確かに夏の栄光を体現していた・・・やや上品なものはオランダの7月の花、一般大衆的にはカーネーションと呼ばれ、オランダやその他海に面した地域で種から育てられ、そしてわが国にもたらされたものである」(‡同書)。[訳注]カーネーションの現在の学名は *Dianthus caryophyllus*

繊細な植物であるオジギソウ *Planta Mimosa*、傷つきやすく控え目な「植物」はチャールズ 1 世の時代に新しく入手されたものである。種は「毎年アメリカから持って来られた」 (§レイ)。これはか弱い一年草の一つと言え、このために温床が用意されたようである。もう一つ、これと同じような方法で育てられたのがタバコで、「クリスマスの後、できるだけ早く温床に種を蒔く」とシャロック [Robert Sharrock, 1630~84 年 聖職者・植物学者] は書き、「次に南側の壁の下、そうでなければ厳しい天候から守るために生垣のところ、あるいはヨシの塀のところに植える」 Ⅱ。

Ⅱ最初にタバコのことを英語で書かれたのは 1580 年、『新発見された世界からの楽しいニュース』 *Joyful News from the Newfound World* と題された本であり、それはモナルデス [Monardus, スペインの医師・植物学者] のスペイン語を J.フランプトンが翻訳したものであった。そこには「タバコとその大きな効用」の説明とその植物の版画が載っている。

アステカリリー [ツバメスイセン] *Jacoboea marina* (= *Sprekelia formosissima*) は北米から 1658 年に持ち込まれた。マデイラ諸島からのジャスミン (= *odoratissimum*) も同じ頃、そしてその他多くの植物が持ち込まれた。

今日では花の改良を推奨するために、展示会、品評会、賞金など極めて多彩な手段が用意されていることから、その昔、改良のための努力が自発的に行われていたと理解することは難しい。花の栽培を奨励する活動(花のプレゼントに対するお礼はもっと早い時からあったので、もちろんこれは除いて)について、私が知りえた中で一番早い記録はバルトニー [Richard Pulteney, 1730~1801 年 医師・植物学者] が述べたものであり (*『植物のスケッチ』 1790 年 *Sketches of Botany*)、「レイ氏の情報によると、ノリッジの人々は美しい花の栽培、生産に昔から優れており、その当時(1660 年頃)花屋さんたちが毎年祭りを開催し、一等賞の花に賞金を贈呈したということである」。

外国のか弱い植物を持ち込んだことで温室、暖房温室が徐々に発展することにつながった。前の方の章で、冬の間における繊細な植物の保護についてサー・ヒュー・プラットが示したいくつかのヒントについて注目したところだが、1660 年初版の彼の本の第 2 部にお

いて、彼は保護することを考えるだけでなく、その後長い間発展しなかった技術、すなわち促成栽培についておぼろげながら考えていた。彼は「あえて問うが、もしエンドウ豆、マメ類 beans、カボチャ、マスクメロンその他のマメ類 pulse の種を小さな鉢に入れ・・・穏やかなストーブ温室あるいは火により簡単に暖められる都合のよい場所に置いて、そして3月か4月に種蒔きすれば、早く芽が出てくるであろうか」と書いた。さらに「どうして植物（すなわちアプリコットやブドウ）を暖かい台所の壁の近くに植えてその火を活用しないのだろうか。あるいは恒常的に火を使っているビール醸造人、染物屋、石鹼製造業者、砂糖精製業者はその火による蒸気の熱を（このような火はもうまったく見られなくなったが）、隣接する果樹を置いておく個人の部屋に簡単に供給することができるであろうになぜ活用しないのだろうか」と書いている。

今やオレンジを育てることに注意が向けられ、これらの樹木を保護するために建てられたハウスは、温室の一番の先駆けと言えるものである。それは近代のガラス構造とはまったくかけ離れた、大きな窓のある大きな部屋のようなもので、極寒の時にはストーブか暖炉で暖められ、「ストーブや嵩上げした炉床がない場合は炭火を入れた火皿で温度調節をしなければならなかった」（ナレイ 『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』 1665年、シャロックにも同様の記述）。オレンジは鉢植えにされ、夏の数カ月は外に持ち出されて庭園を彩ったが、「間もなく温室の中に収容」された。庭園は「選り抜かれた緑のコレクション」なしには庭園とは言えなくなった。チャールズ1世の時代に既に果樹園はいくつか存在していた。ウィンブルドンはその一番見事なものの一つで、ヘンリエッタ・マリア王妃のお気に入りのリゾートであった。



[図 9-3] オランジェリーと運河 ユーストン
 エドモンド・プリドーのスケッチ 1716 年頃*
 *チャールズ・グリーン・プリドー・ブルン氏所蔵

オレンジ庭園は「4つの結び目」で構成され、それはツゲで囲われ、周りを歩けるような芝生地が作られた。この中に容器に植えられたオレンジが夏にはずっと立ち、そして果樹園の中には、冬に42本の木をしまっておくガーデンハウスが作られていた。議会がこの場所を売る前に調査した時、これらの木の評価額は420ポンドとされた。これらの土地の調査により、当時の庭園に関する完璧な姿を知ることができ、様々なテラス、樹木、散策路、夏のあずまやその他すべてそこにあるものは丁寧に書き留められ鑑定評価された*。

*『考古学』第10巻所収 1789年。本書の補遺に、公文書館にある写本のオリジナルを復刻。議会調査報告 No. 72

王政復古の後、温室はさらに一般化し、当時の著作家の中にはそれに注目する者も何人かいた。「か弱い植物」を受け入れるためにオックスフォードの植物園にハウスが建てら

れ、後にチェルシー薬草園にも建てられた。ストランド通りのエセックスハウスの庭園には「最上の植物」の素晴らしいコレクションがあり、当時最も名高かった庭師の一人、ジョン・ローズがその世話をしていた。ケースに入れられた植物を彼がどう取り扱ったかについては、レイがこのように引用している：－「春と秋にはケースから土の一部を取り出し、残りをまた鍬など適当な道具で掘り起こし・・・また肥えた土と十分腐らせた堆肥化した糞を2の割合で埋め戻さなければならない」。



〔図9-4〕 チズウィックのオランジェリー
ロックの版画 1736年

このような状況ではあったが、オレンジの木は当時でもまだ大変珍しいものと考えられたことは、ピープスの日記の次のような抜粋から見てとれよう：－「1666年6月25日、ペン夫人がハックニーの2つの庭園（私が日に日にますます好きになっているもの）に我われを案内してくれた。ドレイク氏所有のものは、庭園は魅力的で、また館と眺めも称賛に値するものであった。もう一つはブルック卿 [Robert Greville, 1607～43年 過激な清教徒活動家] 所有のもので庭園は格段に素晴らしかったが、館は良いとは言えず、眺めは全然良くなかった。しかし、庭園は素晴らしく、ここで私は初めてオレンジが育っているのに出会った。オレンジの果実は緑のもの、半分緑、4分の1緑、そして完全に熟れているものが同じ木になっており、同じ木に実がなるのは毎年だったり2年ごとだったりする；私は小さな実をこっそりもぎ取り（とてつもなくこの果実に好奇心があった者として）そして食べたが、その味はほかの小さな緑のオレンジとまったく同じで－その大きさは私の小指の先の半分くらいであった。ここにはほかにも外来の植物が何種類もあって、迷宮もいくつか、また可愛らしい鳥の檻もあった」。彼は前にもこの庭園に来る機会があり、1654年5月8日この庭園についてこう言っている：－「イングランドにおいて最も上品で称賛される庭園の一つである」。ただし、オレンジはその時そこになかったのか、あるいは彼が見なかったのかどうか、オレンジのことは書かれていない。

造園家たちは一定量の空気が植物の生存のために必要であるということは理解していた

ようだが、光の力についてはまったく気がついていなかったように思える。シャロックは、このテーマについて書いて、次のような結論に達した。「外の冷たくてピリッとした空気により・・・新鮮な緑が生まれる」、これを証明するために、彼はたとえば花を部屋の中に閉じ込めると、葉の色が薄くなり、「アーティチョーク、エンダイブ Endive、マーリスチコリ Mirrhis Cichory、アレクサンダース Alexander などの植物の葉が白くなる現象は、これらの植物を温かいけれど涼しい新鮮な空気を遮断した場所に置くことで現れた」と書いている。不思議に思われることは、冬の間中、繊細な植物を暗い場所で保護していて、どうやってその植物を生かしておくことができたのかということである。「人によっては、マートル、ザクロなどのか弱い植物を、ミツバチの巣のように麦藁でハウスを作ったり、板（太陽光が差し込む窓があったり、なかったりするが）で作ったりして守った。天気がとても寒い時には保護するために馬小屋の敷き藁がハウスの周りに置かれた」。

ル・ノートル [André Le Nôtre, 1613~1700 年 フランスの造園家 ヴェルサイユ宮殿などを設計] がチャールズ 2 世によりイングランドに招かれ、その招請を受け入れた彼のデザインと監督のもと、セントジェームズパークが造成され、同様にハンプトンコートとホホワイトホールの改良も行われたと広く信じられている。1661 年、エイドリアン・メイと称する者が王室勅許状により「ホホワイトホール、セントジェームズパーク、ハンプトンコートで雇われているフランス人庭師を監督する者として請求書の検査等を行い、また彼らがしかるべく満足しているかどうか見るため」に任命された。これにより、フランス人たち、たとえル・ノートル自身ほど大物ではないにしろ、ペローあるいは彼の弟子とかが雇用されていたことが事実であることがわかる。スウィツァー [Stephen Switzer, 1682~1745 年 造園家 風景式庭園の初期主唱者] は 1718 年にペローがイングランドを訪問したことに言及しているが、ル・ノートルが来たことは一言も言っていない。ジャン・ドゥ・ラ・カンティーニ [Jean de la Quintinye, 1626~88 年 ルイ 14 世の植物学者] は偉大なフランス人造園家であるとともに果物栽培者であり、ル・ノートルを主任庭園設計者として彼がイングランドを訪問していたことは確かである。そして流行を追いかけ庭園の愛好家であるイングランドの主要な上流階級の人々に対しカンティーニは助言し、書簡の交換をしていた。彼の著作はイーヴリン、ロンドン、ワイズにより翻訳され、イングランドにおいては極めて標準的な本とされた。挿し木や剪定の仕方に関する彼の説明図は称賛に値するものである。ローズは実技の面では当時随一の庭師と考えられており、エセックス伯爵は彼をヴェルサイユで勉強させるために派遣し、帰国後チャールズ 2 世により王室庭師に任命された。このようにしてイングランドではフランスの影響を強く受け、貴族が所有する最も大きな邸宅の豪華な庭園は、古い様式の荘園領主の館の庭園とは違い、フランス風に設計されたのである。

なぜ大きな庭園だけでこのスタイルが採用されたかと言えば、ル・ノートルのような壮大な構想を実現するには空間が必要だったからというのが一つのもっともな理由である。樹木は、より長く、より大きく、より大胆な並木道に植えられた。彫像、噴水、人工の滝で飾られた広い散策路とテラスが設けられた。フランスの庭園の絵画のすべてには、たく

さんの腰掛と、石造りのあずまやが見られ、その背景には、壁面のくぼみであるアルコーブやアーチの形をした格子垣あるいは剪定された木がある。ハンプトンコート半円形の庭園もチャールズ 2 世の治世下にル・ノートルの監督のもとに造られた。彼は並木道と水路を設計し、1662 年には「ほぼ完成」していたが、庭園は数年後には何かしら手が加えられた。チャールズ 2 世の時には、ファレリの手になる、海の精セイレーンと彫像で飾られた大きな中央噴水が存在していたが、ウィリアム 3 世 [在位 1689~1702 年 オレンジ公ウィリアム] の時に 12 の小さな噴水とともに取り除かれた。王政復古になるとすぐ作業は開始されたが、それはヴェルサイユの絢爛豪華さを見たばかりのチャールズが新鮮な気分で帰って来た時で、多分ルイ 14 世の壮大さと競うつもりだったのであろう、多額の支出を行った。噴水の間には幾何学模様の花壇と芝生が配置され、その一つ一つの真中に円錐状のイチイが植えられた。これらのイチイのいくつかは、もはや窮屈なまでに刈り込まれてはいないが、今も目にすることができる。

ハンプトンコートに手を加える仕事を手伝ったフランス人の庭師の一人がボーモントであり、彼はウェストモーランドにあるレベンズ的设计をした。もっとも彼がそこでした仕事はル・ノートルのスタイルとは違っていたことは確かである。レベンズには彼の肖像画があり、そこには「ジェームズ 2 世の庭師 M.ボーモントとジェームズ・グレーム大佐」と刻まれている。グレーム大佐はジェームズ 2 世 [在位 1685~88 年] の忠実なる支持者で、1689 年の名誉革命の後、政治的な理由で、北部に住むことが一番安全と考えた。そこで新たに購入した広大な土地に、ボーモントの監督のもと庭園を造ったが、彼の時代に造られたその庭園は現在に至るまでほぼ当時の形を変えないままで残されている。したがって、この庭園は当時のオランダ風庭園の最も完璧な実例を提供していると言える。



[図 9-5] レベンズ Geo. S. エルグッド画

この時代のどの庭園にも明らかに見られた一つの特徴はボウリング用グリーンあるいはレーンで、100 年前から流行になっていた。ボウリング遊びは宗教施設の構内においてすら許されていたが、それは修道院が抑圧される前、1593 年に書かれたその施設の説明の中に、ボウリング用レーンがダラムの修道院教会の所有である旨の掲示があることからわかる。「右側には、回廊から出て診療所 *Fermery* (or *Infirmary*) の中へ入る時、コモンハウスとその管理者がいて・・・そのコモンハウスには庭園とボウリング用レーンが付属している。それは今述べたハウスの裏手の池の方に向かって作られており、見習い僧たちが時々気晴らしをするためのものであるが、彼らが治療を受けた時、先生は彼らが良くなったかどうか見るために横に立っていた」(*『ダラムの儀式』サーティーズ協会 75 ページ *Rites of Durham*)。レベンズにはベリンガムの紋章のついたボウルがいくつか今も残っており、グレアム大佐がこの場所を 1687 年にベリンガムから買った時には、その何年か前からこのボウリング用グリーンはあったに違いない。昔のボウリング用グリーンの事例は今もなお数多く残っている：-ケントのチルハム城には誠に見事なものがあり、それは長さ 207 フィート、幅 126 フィートのものである。このほかにもヨークシャー州のカスワースとブラマム、ヘレフォード州のハウムレイシィ、ボウイス城など多くの場所に代表的な事例が残されている。これらの形と大きさは様々で、一般的には嵩上げされたベンチやテラスが広々とした芝生の片側に作られ、場合によっては別のサイドにも作られ、多くの場合、見物人が試合を見るパビリオンが作られた。一方、ボウリング用レーンは、これとは反対に、覆

いかぶさる樹木の陰にすっぽりと隠されていた。ウォリックシャー城にあるボウリング用グリーンは1673年にこのように描写されている：「門の内側には・・・立派な中庭があり、その中には淡くこじんまりと優美なボウリング用グリーンが広がり、その周りには月桂樹、モミの木など珍しい木で囲まれている」*。

*トーマス・バスカビルによるポートランド公爵のジャーナル写本, 歴史写本レポート 13号 Thomas Baskerville's Journal MSS. of the Duke of Portland, Hist. MSS. Report 13.

また1681年、ノリッジ近辺のノーフォーク公爵の庭園についても同じ著者、トーマス・バスカビル [Thomas Baskerville, 1630~1720年 地誌作者] によって「水上からこの都市を眺めて楽しもうということで舟に乗ったら、船頭がノーフォーク公爵の美しい庭園へと案内してくれた。そこには水面に降りおしゃれな階段があって、私たちはそれを使って庭園へと上がった。そして見事なボウリング用グリーンと何本もの美しい小径を見た」と描かれている。バスカビルは、どのような小さな町にでも、誰でもが使えるパブリックのボウリング用グリーンがあることに注目し、それらは彼が滞在した宿屋の多くに付設されていたのであるが、そのことをすべてのジャーナルの中に書き留めている。そして、彼の筆によると、ポンテフラクト城について「今では地面から2ないし3ヤード盛り上げられた壇と壁の根元の台が残るばかりであるが、それにもかかわらず、そこが立派なものと思えるのは、見事な庭園とボウリング用グリーンとつながっているからであり、そこで好みの美味しいワインを飲めるのであろう」。またベドフォードには「昔の城の遺跡があり、その中には美しいボウリング用グリーンがある」。中でも彼が目にするのはサフランウォールデンの「町の外にあるとても立派なボウリング用グリーン」であり、またノーフォークの小さな町ワットンについて彼は、「ジョージイン」のところに小さくて特筆に値する、見事な新しいボウリング用グリーンがあると言っている。これらの見事な芝生の区画は庭園の美しさをいやが上にも増大させたに違いなく、また小さな町では公開庭園（パブリックガーデン）としてまたレクリエーションの場所として活躍したに違いない。

また、どこの庭園にも一つもしくは複数の日時計が置かれた。それは通常、庭園のデザインの中心をなし、それ自体が庭園にふさわしい飾りであった。日時計は昔の庭園の名残がすべて消し去られた中で、多くのものが破壊を免れて生き残った。ラトランドシャー州のエックストンでは、昔の日時計が燃え尽きた建物の前に置いてあり、これが以前、窓の前に広がっていた庭園のほとんど唯一の痕跡である。サフォークのユーストンの場合のように、日時計の中には所有者の紋章が針を作る際に使われていたり、一族のモットーが日時計の周囲に刻まれている場合もあったが、これは建設された年代を特定する時に大いに役立つことが多かった†。

†日時計に書かれた説明およびモットーについては、『日時計の本』参照 *The Book of Sundials*, アルフレッド・ガティ夫人により収集されたもの, 1872年

時には、庭園全体が日時計のように設計され、時計の数字にはツゲやイチイが植えられた。このようなデザインによって作られた日時計の典型的な実例がステインバラのウェントワースにあり、これは 1732 年に作られ、文字はツゲで、日時計の針はイチイで作られている。オックスフォードとケンブリッジについてのロガン [David Loggan, 1634~92 年 版画家・画家] の風景画、特にオックスフォードのニューカレッジ、ケンブリッジのクイーンズとペムブルックカレッジの図版の中のもの、このタイプの日時計の優れたデザインを描いている*。

*『ケンブリッジおよびオックスフォード図版集』デイヴィッド・ロガン 1675 年 *Cantabrigia and Oxonia illustrata*. Dav. Loggan。ここに描かれているツゲとイチイの日時計は、最近レオポルド・ロスチャイルド氏が所有する、レイトンバザード近くのアスコットの庭園に植えられた。



[図 9-6] 日時計 ユーストン アーリントンの紋章付き 1671 年頃

すべての時代を通じて庭師たちが相手するのに大変な苦勞をしてきたのが庭園の有害な小動物を根絶することであった。彼らはモグラどもを抑え込むための仕掛けを工夫することに主に心を砕いてきた。1591年5月、エリザベス女王のティオボルズ訪問にあたって、バーリー卿が女王に敬意を表して宮廷仮面劇を準備し、女王の御前で台詞が朗読された。その台詞はジョージ・ピール [George Peele, 1556~96年劇作家・詩人] が書いたもので、この庭園を造る過程を描きながら、その美しさを女王の徳になぞらえるものであった。最初の台詞は「モグラ捕り」の台詞で、それはこのように始まる：－「私は結び目花壇や迷路について語ることはできませんが、はっきり言えるのは、地面があまりにもモグラの穴でボコボコだったのでそれを見た庭師たちは驚いたということと、もしモグラ捕りの私がいなかったなら、曲がった木 a cammock (*=a crooked tree) から真っすぐな棒を作ることは、あの [モグラだらけの] 囲い地から庭を造ることと同じくらい容易 [すなわち困難] だったであろうということです」†。

†「R. グリーンおよび G. ピールの演劇と詩の作品」ダイス編, 1861年 Dramatic and Poetical Works of R. Greene and G. Peele. By Dyce

普通のモグラ捕りは捕まえたモグラの数により支払いがなされ、一般的には「大人のモグラを捕まえると1ダース12ペンス、若いモグラは1ダース6ペンス」であった。そしてわざわざモグラ捕りを呼んで家や庭とかにいたるモグラを1匹捕まえることを人が頼んだ場合、モグラを捕まえたならそれに対し2ペンス未満、時には3ペンス未満ということはほとんどなかった。と言うのは支払いは捕まえた数に対してだけで、捕まえ損なった時はその損は自己負担だったからだ（‡『ヨークシャーにおける地方経済』1641年.*Rural Economy in Yorkshire*, サーティーズ協会, 1857年）。このような覚書を作ったイースト・ライディング・オブ・ヨークシャーの農民であるヘンリー・ベストは、モグラ捕りに彼自身が支払った記録もあわせて残していた。「1628年4月28日、荷車の中でモグラを殺処分したことに対しジョン・パーソンへの支払いは、大人のモグラ1ダース半で13½ペンス、若いモグラ2ダースで6ペンス」などなど。昔のガーデニングの本には奇妙なモグラ殺しの方法がいくつか載っている。シャロックは次のような「モグラに対する対策」を書いている（§『ガーデニング技法の改善』ロバート・シャロック著第3版1694年 *An improvement in the Art of Gardening*）：

－「水を撒けばモグラは溺れる、あるいは狭い所に追い込めば簡単に捕まえることができよう。ブリス氏はある春、3月頃モグラ捕り1人とその少年を頼んで、約10日間、90エーカーの土地で、大人、若いのをあわせて3ブッシェル [約100リットル分] のモグラを捕まえた」。スピード氏の覚書の中にはこんな方法も書いてある：赤いニシンを用意し、細かく切ってモグラ穴の山の上でそれを燃やすか、それともニンニクかネギをモグラ穴の入り口に突っ込んでやるとモグラどもは土から出てくる。私はこれらの方法を試していないので、読者は信じるか疑うか、自分自身の方法を試してみて」。

そのほかの庭園の厄介者を退治するため、同じくらい妄想じみた多くの対策が流行した。ローソンは手で全部のイモムシをつまみ上げて「足で踏みつぶす」ことを勧める。「私は自分の木の間を煙がくすぶるのは好きでない」、「不自然な熱は自然の木にとって決して良いことではない」と彼は言う。彼は庭園を「動物ども」から遠ざけておくために必要なことを列挙し、「外の強固なフェンスに加え、立派な足の速いグレーハウンド犬、石弓、鉄砲、そして必要なら、鹿には鉤をつけたリンゴ、野ウサギ用の罠」、そしてクロウタドリ、ウソなどの小さな鳥に対しては、「一番のここでの対策は石弓、石のつぶてである」。庭園概論を書こうとする者は、蜂のことを語らないで済ますことはできないであろう。蜂の巣はどこにでも見つけることができ、その管理をすることは庭師の数ある義務のうち必要なものと考えられており、ガーデニングのテーマについて書く作家は一般的には一章を蜂に充てたものである（*トーマス・ヒル『蜂の正しい飼い方』 *The right ordering of Bees*）。

チャールズ 1 世の時代の記念すべきイベントの一つがイングランドで初めて造られた植物園であり、それは1632年オックスフォードに造られた。これはヨーロッパで最初のもので、パドバで設立されてからわずか 100 年後のことであった。ダンビー伯爵のヘンリー [Henry Danvers, 1573~1643 年] が創設し寄付したもので；彼は 5 エーカーの土地を与え、温室も作り、庭師のための建物も建てた。素晴らしい玄関の入口通路はイニゴ・ジョーンズがデザインしたもので、創設者を称える日付と銘文が掲げられていた。ヤコブ・ボーバート [Jacob Bobart, 1599~1680 年 植物学者] はドイツ人でブランズウィック出身、初めこの責任者であったが、彼の息子、同じくヤコブにより引き継がれた。

湿地帯植物の沼地、これは現在はキューやほかでも見ることができ、「自然庭園」（ワイルドガーデン）の愛好家たちが誉め称えるものであるが、これは何も新しいものではない。ボーバートはオックスフォードに一つ作り、ロバート・シャロックにより次のように記された（†『ガーデニング技法の改善』第3版 1694 年）。「人工的な湿地は固い粘土に穴を掘って、湿地から取ってきた同じような土で埋めることで作られる・・・、ここオックスフォードの庭園ではボーバートにより作られた人工的な湿地があり、それは湿地帯植物を保存するため、時々水をやることで、自然状態の時と同じように 1 年から 2 年でこれらの植物は成長する」。この庭園のカタログには約 1600 の品種と変種が掲載されており、1648 年にボーバートにより出版された。このカタログは小さな本であり、花について記載するスペースはない。それは単なる名前リストであり、第 1 部はラテン語-英語、第 2 部は英語-ラテン語となっている。リストには、樹木の仲間としては「モミの一種」“*Abies mas*”、英名“*male Firretree*”、「イチゴノキ」“*Arbutus*”、英名“*Strawberry tree*”、「セイヨウハナズオウ 別名ユダノキ」“*Arbor Judae*”、英名“*Judas tree*”、「セイヨウトネリコ」“*Ash tree*”などである。花の仲間としては約 20 種類のバラ、その中には「ヨークとランカスター *York and Lancaster*、プロバンス *Provence*、オーストリア *Austrian*、そしてシナモン *Cinnamon*、11 種のスマイレ *violas*、9 種のクレマチス、7 種のコルチカム [イヌサフラン] *Colchicum*、9 種のクロッカス、二重と一重のシャクヤク、4 種のジギタリス、10 種のセンノウ

Lychnis、マンテマ Campian、ビーオーキッド [オフリス] Bee orchis、セラピラス [ランの一種] orchis serapius」などである。さらにこのリストには「タバコ」“Nicotiana, English Tabacca”、「ユッカ、インディアンブレッド」“Yucca, Indian Bread”、「セイヨウイラクサ」“Stinging nettle”、そして4種類のコケ、「ジョウゴゴケ類、ヒカゲノカズラ類、ハードシー [未同定] そしてフロウソウ [コウヤノマンネンゴケの一種]” “cup, club, hard sea, tree mosse”も含まれている*。植物の名前はそれぞれアルファベット順になっており、いかなる分類もされていない。在来種と外来種を区別する最初の試みはウィリアム・ハウにより、『英国植物学』 *Phythologia Britannica* (1650 年) という題名の彼の著作の中でなされた。

*拡張された第2版は、オックスフォードの植物学者であるフィリップ・スティーブンスとウィリアム・ブラウンの両者の協力のもと、1658年に出版された。これは第1版を大幅に改良したものであって、ジェラードとパーキンソンへの言及がしばしばなされている。

本書は植物学の進化の歴史を扱うものではないが、リチャード・パルトニーによって立派に成し遂げられた仕事は、1世紀以上も前なのに年代順に正確なものであり、科学がこんなにも密接にガーデニングと結びついていたことを示すものであるから、それに触れないうで済ますことはできないものである。それは、もし体系的な分類方法がなかったとしたら、現在栽培されている数限りない植物について、どのようにしたら理解、認識できるであろうか？この分野での2人の偉大なパイオニアはジョン・レイ [John Ray, 1627~1705年博物学者] とロバート・モリソン [Robert Morison, 1620~83年スコットランドの植物学者・分類学者] である。どちらの功績が大きかったかは議論のテーマとなることがあった。二人とも同じ時期に分類体系を作り始めていた。レイは自分の分類の概要について、1668年、ウィルキンズ司教の『真性のすなわち普遍的な文字』 *Real or Universal Character* の中の一覧表に示していた。

[訳注] ジョン・ウィルキンズ, 1614~72年 聖職者・自然哲学者。ウィルキンズは『真正の文字および哲学的な言語に向けての随想』 *An Essay Towards a Real Character and a Philosophical Language* の中で、たとえば、動物 Zi、犬類 Zit、犬 Zita のような分類法を普遍的言語として提案。

モリソンの最初の着想は、1669年の彼の著書、『ブローア王立庭園』 *Hortus [Regius] Blesensis* の中に組み込まれており、また1672年の『セリ科植物分類』 *Plantarum Umbelliferarum Distributio* および1680年の『植物の歴史』 *History of Plants*†の中でさらに展開されていった。

†『植物の歴史 オックスフォード大学第2部』 *Plantarum Historiæ Universalis Oxoniensis, par secunda* 第1部は一度も出版されなかった。1680年

レイの著作、『植物の新手法』 *Methodus Plantarum [Nova]* の中で示した彼の全体の分類

体系は、1690年に書いた『英国の植物概要』*Synopsis* [Synopsis of British Plants] の2年後まで公表されず、1703年に『植物の新手法』の改訂版が出版された。モリソンはその分類体系を完全に自然を観察して作り出したと明言したが、レイは多分こちらの方が正直だと思うが、カエサルピヌス [Andreas Caesalpinus, 1524~1603年 イタリア人の医師・植物学者] ほか外国の著作家、さらにはモリソンまで含めて、彼らのおかげであると言っている。単子葉植物と双子葉植物を最初に区別したのはレイであり、これにより現在では普遍的に使われている「自然分類体系」の基礎を築いた。レイ (1628~1705年) [1627の誤り?] は、エセックスのブレイントゥリー近くの鍛冶屋の息子で；そのグラマースクールで教育を受けて、1644年、ケンブリッジに行き、そこですぐさま自然史、特に植物学の歴史に傾倒し、1660年にはケンブリッジ周辺の植物のカタログを出版した。彼はイングランド中を旅行しまくり、また彼の友人とともに3年間海外留学をした。この友人とはフランシス・ウィラビイ [Francis Willoughby, 1635~72年] であり、彼もまた自然学者であった。レイは1667年英国学士院の会員になり、その「会報」に多くのものを寄稿した。1679年、彼は自分の生まれ故郷に近い場所に居を定め、そこで残りの人生を書斎で過ごし、自然史と植物学に関する偉大な著作を生み出した。モリソン (1620~1683年) はアバディーン出身で忠実な王党派であり、戦争が始まった時に彼は軍隊に参加し、国王側の大義が敗北してフランスへ渡った。そこで彼は自然史を学び、大変優れた植物学者になったので、1650年、ブロワにあるオルレアン公爵の立派な庭園の管理者に任命された。王政復古の時、チャールズ2世は彼をイングランドに呼び戻し、王室庭園の監督を任せた。1669年オックスフォードの植物学の教授に任命され、医術博士を取得し、そこで講義をするとともに、『植物の歴史』*Historia Plantarum Oxoniensis* の著述に精魂を傾け、それは1683年に事故で亡くなるまで続いた。これらの二人によって発展した分類体系はそれまでの植物学者のものとは違っていた；それは彼らが初めて植物を果実や花の持つ実際上の外観で分類したことに見られ、生育の習性や場所の類似性だけから分類したものではなかったことによる。モリソンは草本性植物を15に分類したところ；レイは25に、樹木と低木を8つに分類した。これらの分類体系は、ジュシュー [Antonie Laurent de Jussieu, 1748~1836年 フランス人植物学者] やロバート・ブラウン [Robert Brown, 1773~1858年 スコットランドの植物学者] たちのために、言うなれば道筋をつけたようなものであり、それが一番必要とされた時に登場したのであった。東から西から、旧世界から新世界から、植物が年を追うごとに数を増やして流れ込んでおり；これらの新しく手に入れた宝物の分類の必要性が植物学者の最優先の仕事であった。

ついでに書いてある。「そこには世界で一番素晴らしい水の仕掛けの数々が備えられていた」。ノーサンプトンシャー州ボートンの庭園はこの時代に造られたが、それは初代モンタギュー公爵ラルフ [Ralph Montagu, 1638~1709 年] により館が建て直された時であった。その庭園は広大で、100 エーカー以上の広さがあり、「贅沢な水の仕掛け」で目を見張らせるものであった。そこには「彫像のバルテール [装飾花壇、道などが装飾的に配置された庭園の構造、幾何学式庭園等に用いられる]、水盤のバルテール、水のバルテールという庭園の構造になっており、その中には円周 216 ヤードの八角形の水盤、その真ん中には高さ 50 フィートの噴水、その周りには小さな噴水が取り囲んでいる・・・それらすべての下にある運河は長さ約 1500 ヤードで 4 本に分かれており、それぞれ直角に流れ込んでいる。その一番下流には非常に気品あふれるカスケード [人工的な滝] が設けられ・・・花瓶と彫像で飾られている。カスケードは 5 段の滝からなっている。垂直面は 7 フィートの高さである。13 番目の噴水の高さのラインあるいは範囲はカスケードの頂点にそろえられている・・・また水盤の下にもいくつかの噴水が作られている。さらに規則正しい姿の小島のような結び目が水生植物によって飾られている」(トマス・モートン著『ノーサンプトンシャーの自然史』1712 年)。このようなカスケードは極めて格式高いもので、すべてしっかりした石工細工で作られており、後の時代に見られるようなミニチュアの滝「カスケード」とは似ても似つかぬものであった。ボートンの庭園はフランス流であったが、この時の庭師頭はオランダ人のヴァンデルトマーレンという人物であった。

シーリア・ファインズによって描かれた庭園にはすべて同じように砂利と草の園路、刈り込まれた木の木陰の小径、「あずまやのような園路もあれば、木陰のもの、広々したもの、砂利の道、草の道」などがあった。標準的なイトスギないしイチイが「いくつかの形に刈り込まれ点在していた」。セイヨウヒイラギ、月桂樹、ツゲの剪定された生垣により庭園は区切られていた：たとえば、「最大の噴水がある正面の庭園は」「花木、あらゆる葉物野菜」から区切られ、あるいは「草原の区画」はボウリング用グリーンから区切られていた。「見事なグリーン」や「矮樹」(ドウウォーフ) (*=小さく剪定された果樹) またはオレンジやレモン；隠れ家や温室についても述べられることもあった。あるいは、石の階段のある幅広いテラス；マツの木が植えられた野趣に富む区画；通り抜けの小径が作られた茂み；池、運河、美しい門構え、これら様々なものがおそらく彼女の旅の物語を膨らませ、彼女が思い出す情景に真実味を加えているのである。スタッフォード近くのテトウィン氏のところでは狩猟地の「素晴らしい並木」、「スコットランドとノルウェーのモミの木の仲間とピカンサ picanther」を愛でている。コーンウォールのトライゴシでは庭園へと開かれている客間について「その庭園は砂利道の園路が庭園の周囲とそれを横切る形に設けられているが、広場はゲーズベリーと茂みの木で埋め尽くされ、まるでキッチンガーデンのようにすら見える」と感想を述べている。ワークソップ近くのブライスについて、「私はそこで美味しいフルーツを食べた」と言い、ウィルトシャーにあるブルック夫人の家で初めてオレンジの木に出会った。「ここには見事な花と緑があり、ドウウォーフ仕立ての木、

さらに列植されたオレンジとレモンの木には花と果実が同時に見られ、中には熟しているものもある。これらのオレンジの木は私が今まで見たことがなく初めて見たものであった」。

彼女が一世代前の庭園より、新しいフランス流やオランダ流の庭園の方を称賛しているのは明らかである。ハドンの通りすがりに、ざっと見ただけだが「それは立派な古い屋敷であり、丘の上に総石造りの館が立っており、その後ろには立派な高木の茂みと庭園があるが、今の流行に比べれば取り立てて興味を惹かれるものではない」と述べている。また、ヘレフォード近くの「ストークと呼ばれるポール・フォーリー氏の居所」について、「それは立派な木造の古い館であるが時代遅れであり、また庭園も十分な広さがあるが、いずれも昔の形の流行りであり、フォーリー氏は新しい館と庭園を造るつもりである。私が見た庭園はボウリング用グリーンを壁の内側に抱え込み、その中のサマーハウスもみんな新しいものである」と書いている。ヨークシャーのバームストーンでは、「庭園は大きく、すごく美しくできる可能性があるが、今は昔の流儀のままに放置されている」と記している。ハンティンドン近くでは、サンドウィッチ卿が新しい庭園を造成させようとしていた。「庭園と手を入れない区画と温室は完成した暁には、ドゥウォーフの樹木と砂利の園路とあわせてとても素晴らしいものになるであろう。大きな噴水や水盤はホワイトホールの王室庭園のものに似せて作られ、館の正面に置かれるであろう。高いテラスの園路は道を見下ろすことになる」。

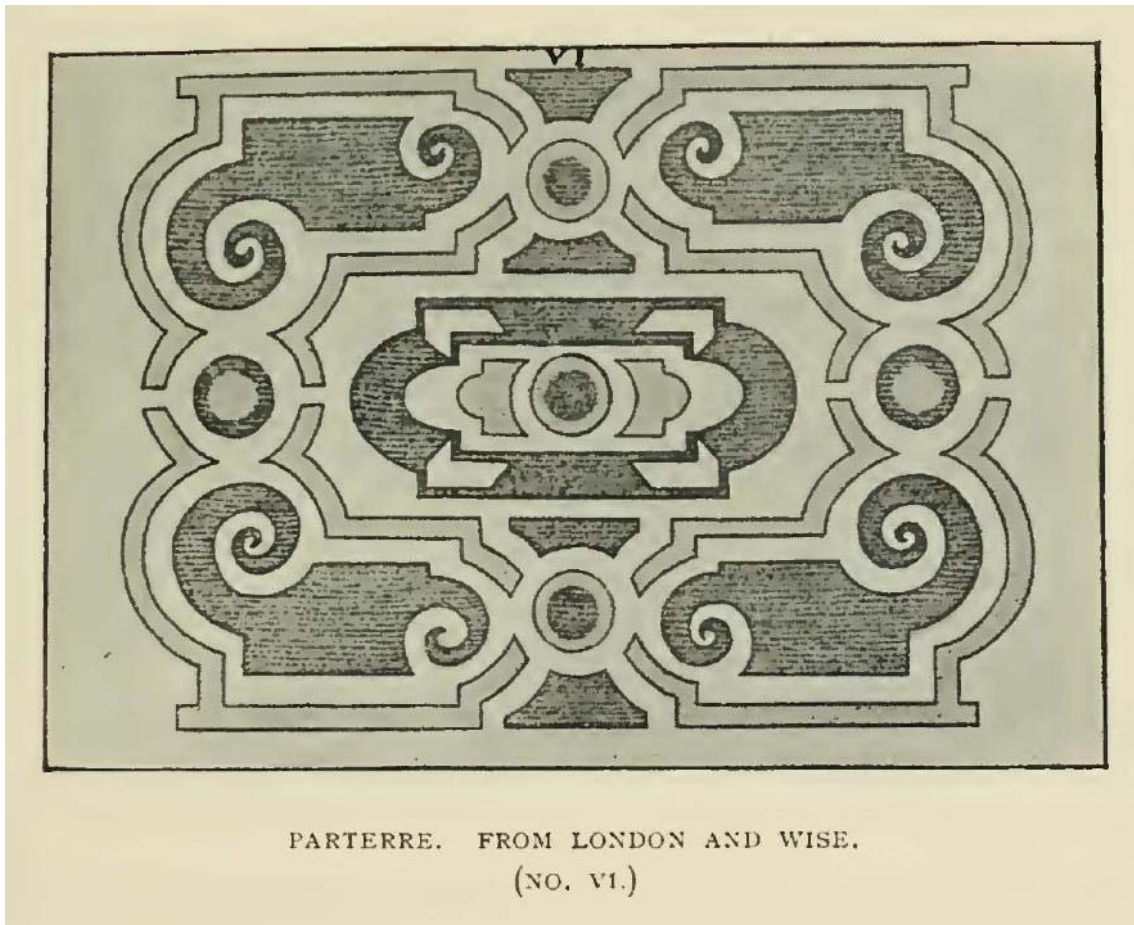
ラムゼー近くにあるサー・ジョン・セントバーブ [John St. Barbe, 1655 頃~1723 年 政治家] の館では新しい庭園も造られつつあった。「まだ完成はしていないが大変素晴らしいものができるであろう。大きな門が向こうの敷地の方へと開かれており、そこには木が植えられている所もある」。「見通せるように格子が何箇所か」設けられたような壁は、庭園を見渡せることを求める最新の動向に対応したものであり、これは既に見てきたように初期の頃にあった様式である。このような壁の中に門とか鉄格子によって、空間を作る設計は 18 世紀初めの庭園の眺めとして常に目にするものであった。眺望をさらに広げたいというこの願望は、狩猟地と並木道の計画にあたって、庭園の園路の横あるいは奥のオープンスペースとうまく調和するように計画することにつながった。庭園を周辺と調和させようとする試みは、壁が取り払われてしまう時代に至るまで徐々に広がり、「風景」式“landscape” style が古い形式に取って代わることになった。デザインの変化を研究するにあたって、突然「庭園の壁を跳び越える」ということはなかったように思われる。風景式の始まりは、ゆっくりした変化や古い形式流派の衰退の中に見い出されなければならない。ウィリアム 3 世により持ち込まれたオランダ様式は昔からの樹木の刈り込み方法の一つの極端な様式である。イチイ、ツゲ、その他の「樹木」のトピアリー（動物や鳥などの形に刈り込む）剪定はやり過ぎなくらいまで行われ、庭園が刈り込まれた樹木で溢れ返ったので後世の笑い物になるくらいであり、その結果自滅してしまったのである。

「結び目」という用語がこの当時の本にしょっちゅう出てくるといようなことはなく、

代わりに出てくる「パルテール」という用語について少し説明する必要がある。ミーガー [Meager, 1624 頃~1704 年 造園家] は 1688 年『イングランドの庭師』*English Gardener* の中で、「結び目を作るのに向いている」ハーブのリストを掲げており、そのうち「オランダ、フランスのツゲが育てるのに最も見栄えが良く丈夫で安い」としている。加えて同じ章において、読者に対し、本の最後にある図版を参照するよう勧めているが、その図版で彼は「庭園用の種々の形や小画地を視覚的に提示」している。1697 年にミーガーはパルテールを語っており、彼のデザインは極めて同じようなものである。サー・トーマス・ハンマーも、ガーデニングに関して彼が提案した仕事についての覚書で、2 つの言葉を使っている：「もし敷地が広ければ、隣り合わせの区画、すなわちパルテールとフランス人が呼ぶ区画は、美しい芝生で作られることが多いが、ボウリング用のどのグリーンとも同じくらい低くする；花やアラベスク唐草模様の形、動物や鳥、葉飾りの刺繍となるよう珍しい形に切り込み、小さな小径や隙間を何色かの砂と土で美しく埋め、ただしそのような結び目には花はほんの少しだけ植え、その花も刺繍の美しさを損なわないように成長しても背丈が極めて低いものだけにする」。パルテールはミラーの辞書（1724 年）にはこのように説明されている。「敷地の水平分割。その大部分は南向きで館の正面にあるのがベスト、一般的には緑の芝生と花で飾る。パルテールには何種類もあり、ボウリング用グリーン、普通のパルテール、そして刺繍のパルテール・・・普通のパルテールは芝生のおかげでイングランドでは一番美しく、控え目な上品さと変わることのない素朴さが目を楽しませる；そのほかのものは巻貝や渦巻き模様に切り取られ、その間は砂の小径となり、イングランドで一番美しいパルテールづくりと評価されている」。

ルイ・リージェ [Louis Liger, 1658~1717 年 フランスの農学者・著作家] のフランス語をロンドンとワイズが翻訳した『引退した庭師』*Retired Gardener* の中では、11 種類以上のパルテールが描かれているが、これらはすべて芝生、花壇や切込み、渦巻き模様や葉飾りのパターン、あるいは「布の上に施された刺繍」のデザインを変えたものに過ぎなかった。以下の 2 つは、彼が描いたものの事例である：

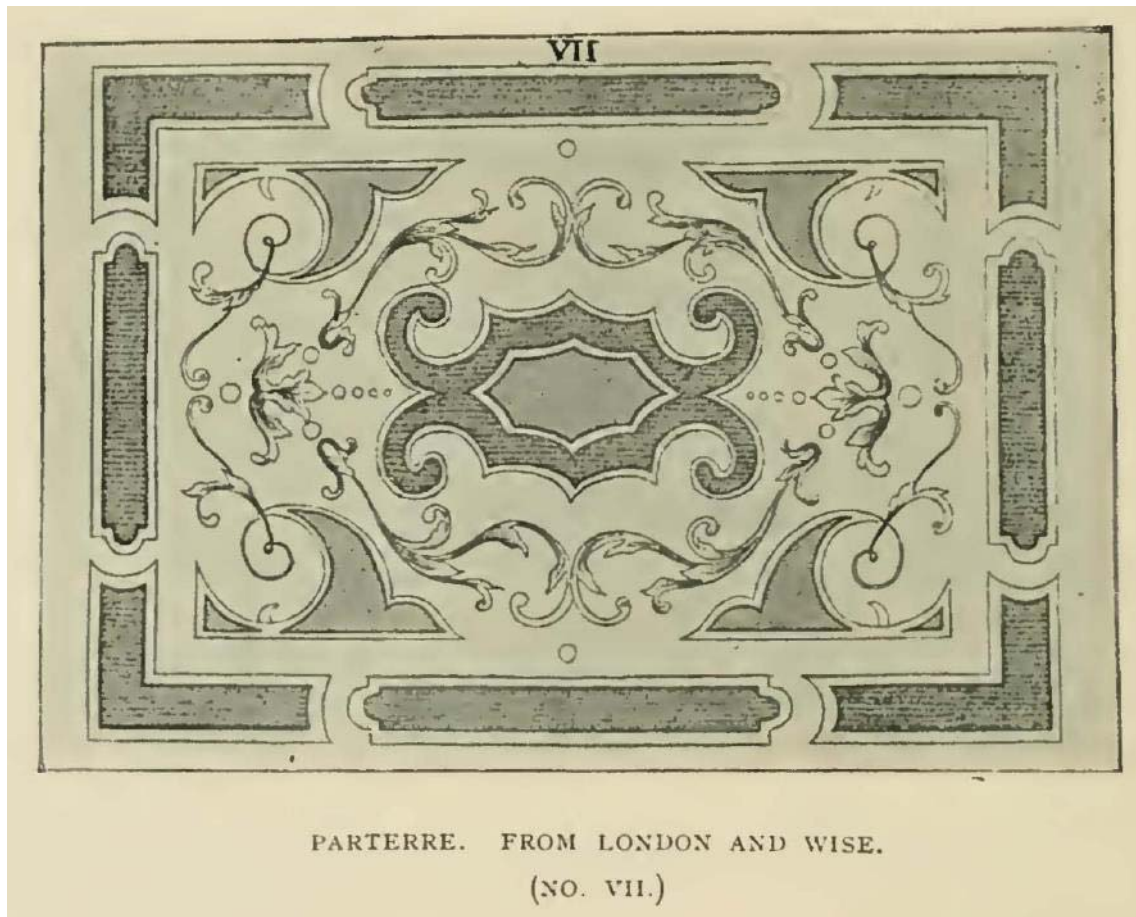
No. VI 「一部は切込み、一部はボーダー付きの緑の芝生のパルテールの形。これらのパルテールは彼らのデザインと対称性に従っていると考えられる。これらは大きな庭園での見栄えが大変素晴らしく、小さな庭園でも同様であり、季節ごとに違った姿で区画を埋め尽くす芝生の青さ、花のエナメル色は目にもうっとりするほど魅力的な眺めを提供してくれる。これらのパルテールは、私が前に述べたような植木鉢（すなわちオランダ甕）で区切って飾ったり、あるいはオレンジの木や自然風のほかの低木を入れた箱で囲うのもよいかも知れない」。



[図 10-1] パルテール ロンドンとワイズ (NO. VI.)

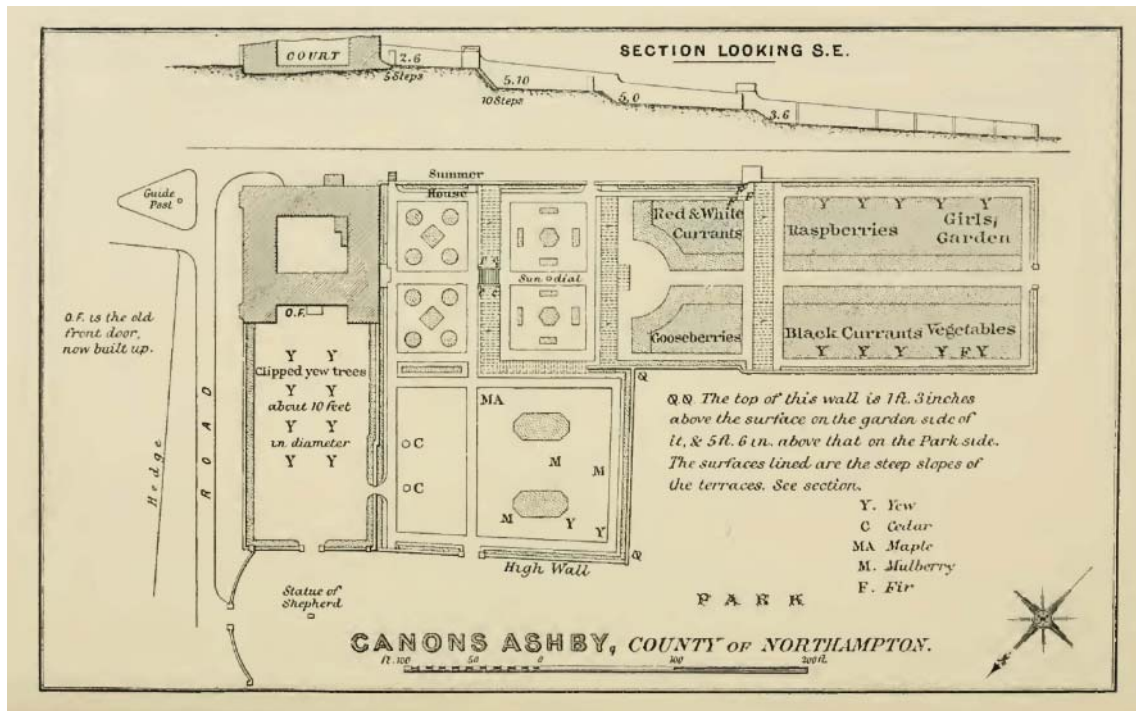
VII. 「芝生の切込みと真ん中に刺繍があり、外側には芝生のボーダーがあるパルテールの形。このタイプのデザインは庭園にとって極めてふさわしく、また素晴らしい飾りの役割を果たすが、特に、芝生の管理がしっかりしていてツゲも整然としており、芝生が上手に刈られている庭園に向いている；またそれをさらに一層美しくするには、装飾曲線部と分枝部を黒い土で一杯にすることで、散策路や小径が黄色や白の砂で覆われていれば、違った色遣いによりパルテールを一段と見栄えよくするのに役立つことになる」。場合によっては、敷地は一つのデザインで作られたが、その他の場合は 4 つの区画に区切られ、その一つ一つの区画に同じパターンが繰り返された。

パルテール同士の間にはボーダー花壇が作られ、その形状は、砂が敷かれた散策路の両側に芝生または花の細長い列があるもの、あるいは所々に低木が配置されているものどちらかであるが、「一番普通の」ボーダー花壇と言えば「中央が高く盛り上がった作りで、まるでロバの背中のような形でイチイ、低木、花で飾られたものである」。



[図 10-2] パルテール ロンドンとワイズ (NO. VII.)

今日見られるキャノンズ・アッシュビーは当時の庭園の格好の事例であり、現在の所有者であるサー・ヘンリー・ドライデン [Henry Dryden, 1818~99年 考古学者・古物収集家] のご厚意により作成された図面にあるとおり、パルテールは当時どこの庭園にでも見られたであろうものと同じであった。もっともそのデザインはほかの多くの庭園のものよりも、多分さらにシンプルだったかも知れない。この庭園は、元々は 1550 年に造られ、1708 年に改造され、2 世紀近くにわたりその様式の変化というものを拒んできた。それはまさに、シーリア・ファインズが「気持ちよく管理され、きれいな砂利の園路と芝生の区画があり、花木、そしてあらゆる種類の葉物野菜と果樹の宝庫である庭園を越えている」と描いた庭園そのものと言える。



[図 10-3] キャノズ・アッシュビー

ファインズは彼女の雑誌の中で、都会のガーデニング（タウンガーデニング）についても注目してあわせて書いている。煤煙というとんでもない大問題に対処しなくて済む前は、都会の庭園は田舎の庭園と同等以上の手間をかける必要はなく、多くのタウンハウスには見事な庭園が付属していた。それらが簡単で、小さく、囲われていた時は、広々とした田舎と同じように、町中でも心地よく囲われたものを造ってはいけない、という理由はまったくなかった。今でも大聖堂のある町や市場のある大きな町の中には、昔風の庭園を見つけることができるが、そこでは煤煙と過密により庭園が破壊されることがなかった。しかし、まともな各家庭に庭園があったずっと昔には、町の様子は随分と違っていたに違いない。公開狩猟地（バブリックパーク）と庭園は、霧や煤煙、そして昼なお暗いというあらゆる不利な条件をものともせず、近年さらに大幅に改良されたとは言え、決して新しい発明とは言えない。カウリー [Abraham Cowley, 1618~67 年 詩人・随筆家] の詩から想像できるように、きっと煤煙公害は 19 世紀末と同じように 17 世紀半ばでも同じように面倒なことであったであろう：－

“Who that has reason and a smell	理性と嗅覚のある人は
Would not among Roses and Jesamine dwell	バラとジャスミンの間に住むことはないであろう
Rather than all his spirits choak	むしろ彼のすべての精神が窒息してしまう
With exhalations of dust and smoak,	吐き出される塵と煤煙、
And all the uncleanness which does drown	そして汚い物すべてで それは確実に溺死させる

リーズは、現在のリーズと比べると当時はほんの村にすぎなかったが、シーリア・ファインズによって次のように描かれている：－「大きな町、大きな街路が何本か走り、清潔でよく整えられており、すべて石造りの良好な住宅。中には立派な庭を持っている家もあり、庭から家に上がる階段があり、その前には壁がある」。ベッドフォードについて彼女は：－「それはウーズ川に洗われる古い建物・・・とても良い魚に恵まれ、川岸に庭を持つ者は魚を置いておく籠のようなものを持っており、それぞれの庭の土手の横に鎖で繋いである。それ（川）は見事なボウリング用グリーンとなっている敷地の横を流れ・・・その中には腰掛と夏のあずまやがきちんと整えられている」と書いている。ニューカッスルでは：－「この地域では至る所、この石炭だらけでその硫黄が空気を汚染し外来者にとっては強い臭いがする・・・ここは気高い町でイングランドのいかなる場所よりロンドンに一番似ている。・・・気持ちのよいボウリング用グリーンがあり、町からちょっと外に歩いて出るとその周りには大きな砂利道があり、両側には 2 列の並木がある・・・木陰の横には可愛らしい庭園があつて、それは紳士淑女が夕刻に散歩するスプリングガーデンのようなものである；－庭園には温室がある」という発見をしている。

スプリングガーデンとして彼女がここで述べている庭園は、ロンドンにおける流行りの人気リゾートとして選ばれたものである。これらの庭園は今世紀の第 1 四半期以降、その姿を現し、元々はセントジェームズ王立狩猟場の一部であり、その記録が王室会計文書の中の項目として残っている：－

1617 年「穴掘りと植栽ほか：(セントジェームズ) パークのスプリングガーデンのバラの・・・庭師たち、草取りの女性たち：スプリングガーデンで・・・スプリングガーデンのキジと野生のフクロウ」
しかしながら、世紀半ばまでにはそこは公開庭園（パブリックガーデン）となり、今はその名前がつけられた通りによりそこが庭園であった場所であることがわかる。

ロンドンではその頃既に多くの古い庭園が消えつつあり、そのことをシーリア・ファインズが日記にこう記している：－「シティには以前大きな庭園と離れのある貴族の館がいくつあつて大勢が集まったが、最近では取り壊されて街路や広場に作り変えられ、その貴族の名前で呼ばれている；－そして 1、2 の例外を除いてほとんどすべてこのやり方で、王室にすら及んでいる。ノーサンバランドおよびベッドフォードハウス、モンタギュー卿・・・そして王室庭園と有名な噴水のあるホワイトホール」。ロンドン近辺の庭園に関するギブソンによる 1691 年の描写が残されている*。

*『考古学』1794 年所収、ヘイズリット『昔の庭園文献選集』の中に最近、再版。Hazlitt: *Gleanings in Old Garden Literature*

彼は 28 の庭園を列挙し、そのうち 5 つは種苗園である－ブロンプトン種苗園、マイルエントの「クレメンツ」、リケッツ、パーソン、ダービー、このうち 3 つはホックストーンにあ

る。庭園の中にはロンドンから離れたところにあるものもあり、たとえばハンプトンコート、キューにあるサー・ヘンリー・カペルのもの、シーンのサー・ウィリアム・テンプルのものである。イングランドで最初にオレンジの木がカルー一家により植えられたベディントンでは、非常にていねいに管理されてきたため、この国のオランジェリーの中で最も主要な地位を今もって有している。このオランジェリーは長さ 200 フィート、木の高さは約 13 フィート、そして年間 1 万個のオレンジが収穫できる。ギブソンによると、皇太后はハンマースミスに立派な温室を持っているが、それは「珍しい植物や花」のためではない；しかし、彼女の庭師、ハーモン・ヴァン・ジーン氏はオレンジとレモンの木を育て、それを「処理」しなければならなかった、というようなことも言っている。アーリントン庭園は「美しい場所」であった。ハクニーのサー・トーマス・クック [Thomas Cooke, 1648 頃~1709 年 政治家] の庭園は大変大規模なものであったにもかかわらず、さらに拡大が図られつつあった†；

†ラムズ礼拝堂は 1723 年、この庭園の敷地の一部に建てられた。1704 年 7 月 20 日付けの不動産譲渡証書の中には、礼拝堂当局の所有の中に、2 棟のサマーハウスに関する記載があり、そのうち 1 棟は教会の部屋として使われている。

ラネラ卿 [Richard Jones, 1641~1721 年 政治家] の庭園は「ほんの最近造られたもの」だが「優雅にデザイン」されていた。ランベスの大主教はその頃その庭園の改造を進めており、温室を作っていたが、それは「部屋が 3 つあって真ん中の部屋の下にはストーブを入れた；各部屋の前面はほとんどすべてガラス張りで、屋根は鉛で覆われていた」。ギブソンは 1691 年 12 月に訪問した庭園についてのみ言及しており；その他の同じくらい有名な庭園については省いている。彼はスピタルフィールズとホワイトチャペルの間の大規模な種苗に気づいていない。この種苗の所有者はミーガーが「私の大親友であるキャプテンカール」と呼ぶ人物であり、彼が示した果樹に関する長大なリストの中のどの木であっても、「ほかの様々な珍しい選り抜きの植物」とあわせて、この友人は「入手する」ことができた (*レナード・ミーガー『イングランドの庭師』1688 年 60 ページ *The English Gardener*)。

彼はまたストランドのエセックスハウス、およびサマセットハウスについても書いていないし；1683 年に首を刎ねられたウィリアム・ラッセル卿 [William Russell, 1639~83 年 政治家] がデザインした庭園のあるサザンプトンハウス、ブルームズベリーについても書いていない。フラムの庭園、これはエリザベスの時代にギョリュウ tamarisk を持ち込んだグリンダール主教 [Grindal, 1519 頃~83 年] によって有名になった庭園であるが、この時代になるとコンプトン主教 [Compton, 1632~1713 年] によりさらなる改良が加えられ、彼が植えた素晴らしいヒッコリー hickory をはじめとする木々が今もなおそこに行くと見ることができる：「彼はストーブ温室と庭園に数多くの外来植物の品種を持っており、庭園では昔ならこの寒い気候では弱すぎると思われた植物も多数、順化させていた。彼は人生の後半の日々に至るまで、年間数日を除き、自ら自分の庭園に出て、樹木や植物の移植や場所替えの指

示や監督を続けた」(ナスウィッター『田園の設計』1718年 *Ichnographia* コンプトン主教 1632年生まれ、1713年没)。

個人所有の庭園のほか狩猟地が存在したことで、ロンドン周辺の田園地帯は当時であってすらその美しさに一層磨きがかかった。セントジェームズパーク、そして「もう一つもっと大きなハイドパーク、これは乗馬用であったが、ほとんどの場合馬車で回れるような馬場が作られており、そこは手すりでも囲まれ砂利が敷かれている・・・狩猟地の残りは緑地で鹿が一杯いて、魚や鳥がいる大きな池がある」(シリア・ファインズの日記)。ハイドパークの向こうにはウィリアム国王お気に入りのケンジントン宮殿があり、そこにもウィリアムが始めてアン女王〔在位1702~14年〕のもとで完成した立派な庭園があった。そこで雇われていた造園家は有名なロンドンとワイズで、彼らはすぐ近くのブロンプトンに大規模な種苗園を持っていた。この種苗園は当時一番優れたものであり、植物の膨大なコレクションを保有していた。ケンジントンの庭園自体にも素晴らしいコレクションがあったが、ブロンプトンの種苗園のものとは「まったく比肩する余地」(*ギブソン 1691年)はなく、寒さに弱い植物は冬の間ブロンプトンで保管された。

ジョージ・ロンドンはブロンプトン種苗園の中心的な創設者であり、ジョン・ローズの弟子であり、一時コンプトン主教の庭師を務めていた。彼は種苗園を作る前と後に海外を旅行し、リズウィックの和平〔1697年レイスウェイク条約 大同盟戦争の終結〕の後、ポートルランド伯爵〔Portland, 1649~1709年オランダ人でオレンジ公ウィリアムの側近〕とともにフランスに行った際、ヴェルサイユを訪問している。ロンドンは1713年に亡くなった。種苗園は「ジェームズ2世の治世にほかの庭師と共同して彼が始めたものである。すなわち、カンオベリーのエセックス伯爵の庭師であるクック、サマセットハウスの皇太后の庭師リューカー、そしてストランドのベッドフォードハウスのベッドフォード伯爵の庭師フィールドたちである」(ナスウィッター『田園の設計』1718年)。これらのパートナーたちはロングリートの庭園をデザインし、その敷地を「この4人が代わるがわるに造り始めた」(同書)。リューカーとフィールドは亡くなり、そしてクックは引退し、そしてロンドンがヘンリー・ワイズを仲間に入れた。ジョンソンによると(§『イングリッシュガーデニングの歴史』1829年123ページ)、それは1694年のこととなっているが、ギブソンは1691年にその種苗園のことを「ロンドン氏とワイズ氏の所有であるブロンプトンパーク庭園」と表している。したがって最初の4人が長い年月一緒であったようには見えない。この2人の庭園師はとて有名になり、それはブロンプトンの園芸のおかげだけではなく王国全体にわたって彼らがデザインした庭園のおかげであった。ロンドンは王立庭園の監督およびメアリー女王の宮廷掛に任命された。彼らはケンジントンで国王のために仕事をしただけでなく、ハンプトンコートについても相当規模の改造を行った。そこで行われたちょっと変わったある作業は、半円状の運河沿いに作られたライムの並木道の一行を移植したことであった。北側の土手にあった木が取り除かれ、それまで一番南側であった列の南に移植された。「403本のライムの木で、その直径は4フィート3インチから3フィート、これらの木を取り除

き、次の場所に運び、直径 10 ないし 12 フィートの穴を掘り、1 本ごとにおよそ手押し車 5 杯分の土を持ってくると、その費用は 1 本当たり 10 シリング、合計 201 ポンド 10 シリング」。この移植は最初に木が植えられてから 30 年ほど経っていた。その他の変更は「山の庭」と「王室専用庭園」に加えられ、ニレの枝組で覆われた「メアリー女王の私室」には木が植えられ、昔の果樹園は野原へと変わり、川沿いにテラスが設けられ、そしておそらく迷路が同じ頃作られた。あわせてワイズは宮殿と噴水庭園の間に宮殿の前面全体に沿って走る「広い道」を計画した*。

*この仕事の見積もりでは、道は 650 ポンド 13 シリング、そして横の芝張り、ボーダーの植栽と形成にそれぞれ 490 ポンド 10 シリンと 210 ポンド。－『国庫文書』63 巻 48 他 *Treasury Papers*

ブレナム庭園はもう一つの彼らの偉大な業績であり、完成するまでに 3 年を要した。彼らのスタイルの優れた見本をダービシャー州のメルボルンに今もなお見ることができる。エセックスのワンステッドにあるサー・リチャード・チャイルド [Richard Child, 1680~1750 年政治家] の庭園、ブッシィパーク、クランボーン、そしてハワード城にある庭園も彼らの手によるほかの事例である；これらのうち一番最後のハワード城で、彼らは「自然で丁寧なガーデニングがかつて辿り着くことができた一番の高み」に達したとスウィツァーは言った。アン女王の即位に際し、ワイズは王室庭園の管理を任せられ、ロンドンは田園地帯の仕事に主に特化していった。彼はしばしば偉大な庭園を巡ることに時間を費やし、仕事の途中にしばしば 1 日 50 から 60 マイルの距離を馬で行ったと言われた。

モーゼス・クック [Moses Cook(e), 17 世紀後半造園家] は元からのパートナーの一人であり、果樹に関する本を出版したが、ロンドンとワイズは仲間の中では人気作家であり庭園デザイナーでもあった。彼らがフランス語から翻訳した 2 冊の本は、ジャン・ドゥ・ラ・カンティエニの『完全な庭師』*Complete Gardener* (初編 1699 年) およびルイ・リージェの『引退した庭師』であり、ル・ジャンティの『孤独な庭師』*Solitary Gardener* もあわせて翻訳された。彼らは自分自身の豊富な経験も付け加えた。そして情報は一人の紳士と庭師との間の問答形式ですべて綴られている。その紳士とは田舎に住む場所を買って「田舎生活の甘美さを味わおう」としている人物が想定された。その紳士がたとえば「海外から私宛に箱が送られてきたとして・・・それを受け取った時、地面が霜で覆われていたら・・・どうしたらよいでしょうか？」と尋ねたとする。庭師：－「木を受け取って、その根の回りには苔が巻いてあってケースに入れて送られてきたとしたら・・・地面にそれを植えることができるまで貯蔵室に置いておかなければならない・・・ケースから根を取り出して、それをきれいに揃えて・・・その根を 1 日水に深く沈めて、そして植付ける・・・あなたがこのルールに従えばあなたの木を一本も失うことはないであろう、たとえば全部で 3 から 4 カ月土に植えておこななくても」という具合である。ロンドンとワイズの経験が続いて述べられるが、むしろ矛盾している：「1698 年、フランス到来のアーモンドの台木に接ぎ木した桃を何本か持っている・・・土から出て 3 か月経って、必要な世話は

すべてしたにもかかわらず、全体 100 本のうち 10 本は助けることができなかった」。別の章では海外から取り木〔若枝を地中に取り込み、根が生えてから切り離す増殖法〕や接ぎ木の苗を輸送する時には、初めに蜂蜜でそれらをこすって、それから湿った苔で包むか、あるいは「蜂蜜で練り込んだ陶土」の中に突き刺し、苔で回りを包むことが推奨されている。この作業では、人工的にキノコを育てることが推奨されている。極めて時間のかかる苗床を準備するプロセスが述べられており、完了するのにほぼ 1 年近くかかるものであった。ジャン・ドゥ・ラ・カンティーニの仕事は果樹栽培に限られており、特に果樹、立木づくり（スタンダード仕立て）、垣根仕立てのエスパリエ、壁際に垣根仕立てにした果樹の正しい刈り込み方についての記述が詳しかった。『引退した庭師』の大きな割合を占める「花の歴史と起源」というタイトルにはガツカリさせられるが、それは、たとえばジギタリス foxglove の起源のように、これが現実離れも極まれりというような神話や伝説の単なる寄せ集めに過ぎないからである。ユノ〔ローマ神話で女性の最高神で結婚の女神であるジュノ〕はある日働いていて指ぬきを失くした。ユピテル〔神々の王で天の支配者であるジュピター〕は彼女を慰めようとして、指ぬきを花に変えてしまったと言って、そこでジギタリスが現れた。オーニソガラムは甘やかされた子どもで、卵の白味だけで育てられ、それは虚弱になり死にかけてまで続いたが、ヴィーナスが可哀そうだと思って、彼の名前を付けた花に彼を変えた、とかそんな話ばかりが延々と書かれていた。ロンドンとワイズは一風変わった植物のリストを作っており、それはどのようにすれば「身の回りのフラワーガーデンで普通に育っている」植物を増やし、あるいは「元気で長持ち」できるかというものであった。アネモネは歯状の芽fangsによって長持ちし、ツルボラン Asphodils は塊茎 tubers によって、プリムラアウリキュラ、セイヨウオダマキ、ジリフラワー、トケイソウ Grenadil 別名パッションフラワー Passion-flower、ラベンダー、マツムシソウ、ヒマワリ、タイムなどは宿根 roots によって；ヨウラクユリは根で作られる吸枝 suckers によって、ランキユラスは爪部 claws〔花卉の細くなった基部〕、ヘメロカリス Day-lily は球根 bulb で、デイジーとハマカンザシ〔アルメリア〕 sea-thrift は花茎 tufts で、ゲッカコウ〔チューベローズ〕 Tuberose はその吸枝によってなどなど。

レナード・ミーガーが書いた『イングランドの庭師』は人気の高い本であり版を重ねた。ただし、著者についてはほとんど知られることはなく、同時代の人々に比べるとずっと古風であった。この本は静かな語り口で果樹や菜園づくりの実用的な情報を多数示しており、「花のカタログ」“Catalogue of Flowers”は、「たとえば花が育ってその場所を飾ること、あるいは香りのよい花束とすることだけを目的としており」、それはイーヴリンやロンドン、ワイズよりもパーキンソンを思い出させるものであった。彼は花の名前を故郷イングランドの名前で呼んだ。たとえば、コベントリー・ベルフラワー（フウリンソウ *Campanula Medium*）、メランコリー・ジェントルマン（ハナダイコンの一種 *Hesperis tristis*）、ヤギのルー（ガレガソウ *Galega officinalis*）、ノンサッチあるいはブリストルの花（アメリカセンノウ *Lychnis chalconica*）、そして王様の槍、黄色と白（ツルボランの一種 *Asphodelus*）。

ミーガーは彼の本の1688年版の扉のページで彼自身のことを「ガーデニングの技法について30年間携わった実務家」であったと言っている。本の献辞からすると、彼は長年、ノーサンプトンのウォークワースのフィリップ・ホルマンの庭師であったことがうかがえる。ホルマン一家は古き良き一族で、1669年に亡くなったフィリップはミーガーの仕事を励ましていたようで、ミーガーは実際のところ「きちんと農作業に取り組む気持ちが少しでもあり、努力している彼の使用人」すべての者を援助した、と自ら書き加えている。ミーガーはイングランド全体にわたり、静かな昔ながらの「整然とした」庭園の一つの姿を見せているのかも知れない。



[図10-4] ネザトン エドモンド・プリドーのスケッチ 1727年

コーンウォールのネザトンのちょっと変わった眺めは、1727年頃この類の庭園を描いたエドモンド・プリドーのスケッチから拝借したものである。デヴォンシャー州のコリトンパーク（*マーウッド・タッカー師の所有）は現存している格好の実例である。この庭園は1680年頃造られ、1756年に改造された時、昔の庭園はキッチンガーデンとして残され、今も手が加えられずに残っている。上の方の新しい庭園と下の昔の庭園を区切る昔からの壁は、変わったジグザグの形をしている；庭園のほかの場所は単純な線でできており、これはミーガーの本に基づくものと思われる。そのデザインは、周回する散策路、2つの大きな四角のバルテール、そして2つの小さなバルテール、そこの2つのコーナーは曲線になって

おり池や噴水の周りに散策路を通すための空間が作られており、そしてそれぞれの区画の中心を横切って、刈り込まれたイチイの垣根がその同じ曲線に沿って、砂利道の端まで続いている。この散策路にはイトスギ、2つの彫像、日時計があり、噴水の反対側には外の壁に向かって旧庭園の館やオランジェリーがある。

このような計画はもはや時代遅れとなりつつあり、当時の傾向としては、整形式のやり方で維持するには大きすぎる庭園を造る傾向にあった。サー・ウィリアム・テンプルは1685年にその危険を見抜き次のように書いた。「庭園の規模については、おそらくのうち我われから見れば贅沢と思える大きさになるだろうが、4ないしは5から7エーカーが通常の紳士階級の人々が求めるデザインになると思う」。シーンにある彼自身の庭園は大きくはないが、見事に管理されていた；これについてイーヴリンは1688年に次のように書いた。「壁際の果樹の木々は誠に優美にきちんと整列しており、それは私が見たどれよりも極めて優れていた」。彼の晩年におけるサリーの「隠遁所」をムーアパークと呼んだが、これは彼が青春時代に愛したハートフォードシャー州のムーアパークにちなんだもので、そのことを彼は、それは「私が今まで見た庭園の中で完璧な姿」†であった、とまで嬉しそうに言い表した。

†サー・ウィリアム・テンプル『エピクロス庭園あるいは1685年のガーデニングの庭園について』、彼の『雑録』所収 *Upon the Garden of Epicurus or of Gardening in the year 1685*, printed in his *Miscellaneous Works*.

新しいムーアパークでは彼はオランダ式の庭園を造った。それが何の不思議でもなかったのは、三国同盟〔1668年フランスに対しイングランド・スウェーデン・オランダ間で締結〕の交渉にあたった政治家としてフランス風よりオランダ風を好んだのは当然であった。ただし、彼は心が広がったのでフランスからも良いものは取り入れた。彼は4つのブドウの新種をイングランドに持ち込んだことを誇りに思っていた：-1. 「フランシュコンテ産のアルボアーズ Arboyse、これは小さな白ブドウで・・・我われの気候によく適している・・・マスカット以外のすべてのブドウの中で一番おいしい。 2. ブルゴーニュ、これはグレーまたは薄い赤色で、すべての品種の中で我われの気候のもとで確実に実る、したがって、ほかのすべての品種が失敗する中で、この15年間のひと夏たりとも失敗したことがない；また東側の壁でとてもうまくいった。 3. 黒マスカット、これは皇太后と呼ばれ、一般的な白ブドウと同じくらいに実る。 4. グレーのフロンティニャック Grizelin Frontignac、イングランドで私が口にしたいすべてのブドウの中で最も高貴なものだが、とても良いものを収穫するには、最高に熱い壁と最高に角ばった粒の砂利が必要で、そして夏にも恵まれていなければならない」*。

*このブドウは今やほとんど見かけない。シュルーズベリー近くのベリックに（ガラスのもとで育てられている）木が1本ある

誇り高き「黒チューリップ」 Tulipe noire の所有者、あるいはブッドレア Buddlea†をめぐって争ったアルフォンス・カール [Alphonse Karr, 1808~90 年フランスの作家・ジャーナリスト] の狂気じみた年老いた取り巻きたちとは違い、テンブルは実に鷹揚に彼が持ち込んだブドウの木を広く配った。その理由についてこう書いている：「この種のことはすべて広く一般的になればなるほど良くなるものだと自分は常に思っている」

† オレンジ色の丸い花をつけるブッドレア Buddlea globosa, 1774 年に持ち込まれた [フジウツギの一種]。

テンブルの主たる関心は果樹栽培に向かった。花についてはこう言っている：「私は花を見たりその香りをかいだりすることは好きだが、その世話をすることは好きではなく、それは男の仕事というより女の仕事である」。おそらく彼は自分の庭園の花に関する仕事は彼の素敵な夫人ドロシー・オズボーンに任せていたのであろう。長年続いた彼らの婚約期間中に彼女がテンブルに書いた喜び溢れるばかりの初々しく機知に富んだラブレターの中に、彼女自身がガーデニングに興味を抱いていたことを十分に示す下りがある。1654 年に彼女は、ベッドフォードシャー州チックサンズにおける隣人であるサー・サミュエル・ルークについてこう書いている：「ところで最近、サー・サムが何で私に贈り物をくださったりして親切になられたのかがわかりません。それはこの庭園の中に彼が欲しいと思っている何かのためなのでしょう。その上、彼の庭園のものを差し上げると言ってくださり、それを私は大変な好意の印として受け取りました。その理由は、彼が素敵な花の栽培者だからです」。

またブドウの木を配ることでブドウの栽培を推奨するのを手伝ってくれた別の庭師は、チャールズ 2 世の庭師で、『イングランドのブドウ畑の弁護』 *The English Vineyard Vindicated* の著者であったローズであった。彼は「わが国の土壌と気候の中で十分検証されたすべての最上のブドウの苗と苗木を適切な値段で希望するすべての人々」に対し提供した (*果樹園およびブドウ畑に関する書簡, ジョン・ビール, 1676 年)。そしてジョン・ビール [John Beale, 1608 頃~83 年] は、ローズの例にならい、ブドウの苗木を「小作人」に与えることを申し出たが、その多くの者は「不躰にもブドウなんかに関わりたくない」と答えた；ところが彼が数年のうちにそのブドウは市場でいい値が付くだろうと説明したところ、「彼らはすぐに感謝の気持ちを持つようになった」。

1658 年 6 月 10 日の日記でイーヴリンは次のことを書いている：「とても有能な植物学者であるモーガンのもとで豊富な品種を集めているウェストミンスター¹の医薬用庭園を私は見に行った」。ヒュー・モーガンについては、ジョンソンが編纂したジェラードの『植物誌』の中で「女王の薬剤師」、「珍しい薬草を保存している面白い人」として 2 回名前が出てくる。そしてジョンソンは「ロンドンのコールマン通り」に近いモーガンの庭園に「エノキ」“Lote or Nettle” tree が育てられていることを知っていた。このモーガンなる人物は、おそらくイーヴリンが訪問したウェストミンスターの庭園の持ち主と同じ人物であると思われるが、彼がこの庭園をどれくらいの期間持ち続けていたかは確かではない†。

†「ウェストミンスター庭師のモーガン氏」および「ハウ博士、ウェストミンスターの薬用庭園の管理人の一人」のことは、コールズの『薬草の使用法』1657年 *Art of Simpling* の中で触れられている。

ウェストミンスターの薬用庭園、おそらくこのことであろうが、これが薬剤師組合により1676年6月に購入された時、それは他の人の所有物であったと思われるのは、組合はゲープ夫人から、植物をチェルシー庭園に移してよいとの了解のもとに賃借権を購入しているからである（※フォークナー『チェルシー』第2巻174-176ページ *Faulkner's Chelsea*）。チェルシーの薬用庭園は1673年に創設され§、数年後にはウェストミンスターのものにとって代わった。

§『薬剤師の庭園の歴史』ヘンリー・フィールド著1820年 *History of the Apothecary's Garden, By Henry Field*



[図 10-5] 薬剤師組合の庭園 チェルシー (1894年)

チェルシーの土地をチャールズ・チェイン（後のチェイン卿）[Charles Cheyne, 1625~98年政治家] から借りる契約は1673年8月29日にサインされ、その期間は61年、賃料は年間5ポンド、そして翌年庭園の周りに壁が建設された。初代の庭師はピゴットで1677年にリチャード・プラットに引き継がれた。これらの庭師は年間30ポンドを受け取り、さらにその後継者であるジョン・ワットは1679年に50ポンド受け取った。庭園は21人の助手、30人の同業組合員および20人の自由農民からなる委員会によって管理された。彼らは温室を作り、その費用は1680年で138ポンドであった。2年後、ライデンのヘルマン博士がこの庭園を訪れ植物をいくつか交換しないかと申し出た。これを実行するため、ワットがオランダに派遣された。1685年の庭園の費用はワットの給料以外に130ポンドに達し、このため組合としてはこの水準で庭園を維持することはできないと考え、ワットに年間100ポンドを与え、その中で彼が庭園を管理すること、また果物や植物を売ることも認めるという取り決めを行った。同じような取り決めはその後彼の後継者であるドゥーディ [Doody, 1656~1706年] ともなされた。ドゥーディは優秀な植物学者で、かつ隠花植物を中心とした自生植物の有名な収集家であり、1693年にこのポストを与えられた。1722年、この庭園を含むチェルシーの土地を買ったサー・ハンス・スローンは薬剤師組合に、いつまでも薬用庭園とすることを条件にこの土地を提供し、フィリップ・ミラーが園長に登用された。サー・ハンス・スローンのもう一つの条件は、学士院（彼が院長）に対し毎年50種類の新しい植物を、2000種になるまで寄付することであった。この毎年の寄付は、実際のところ、1773年まで続き、総数は2550品種となった。

サー・ハンス・スローンは長年にわたり庭園について並々ならぬ関心を寄せ続けた。1684年彼はレイに彼が訪れた庭園の様子を書いている（*レイ『哲学的な書簡』1718年 Ray's *Philosophical Letters*）。「先日チェルシーに行って、ワット氏が施した巧みな工夫が彼の植物を保存する上で極めて効果的であることを認識しました。それはこの厳しい冬の中で彼の素晴らしい植物はほとんど枯れなかったくらいです。私が一つ大変驚いたのは、レバノンスギ *Cedrus Montis Libani* が・・・本当にすくすく育っていることで、鉢や温室なしで、春には取り木で繁殖できることである。昨秋蒔かれた種も今のところ大変元気に育っている」。1683年に4本のシーダーが植えられ、うち2本は1820年時点で元気であり、1本は1894年にも生き残っている。この庭園を今回訪問する前に、数多くのほかの庭園にも行っていたはずで、彼の植物の研究の大半はそこで行われ、彼のことをレイは励ました援助した。スローン（1660年生まれ）は海外に行き、1598年以来続いている植物園があるモンペリエで医学の勉強をした。薬剤師たちに土地を渡すずっと以前から、彼は自然史に関する熱心な研究によって有名であった。ジャマイカおよび西インド諸島に関する彼の偉大な業績の第1巻は1707年に出版された。総督であったアルベマール公爵の医師としてジャマイカにいたスローンは、公爵が現地でも急死したため、イングランドに帰国し、その時15カ月間で多数の珍しい物、そして800種は下らない品種の植物を集めて持ち帰った。彼は後半生のすべてをチェルシーで過ごし、そこで1752年に没した。自然学者としての名声は

医師としての名声に比肩した。あの偉大なリンネ [Carolus Linnaeus, 1707~78年 スウェーデンの植物学者] が若い頃彼に会うために 1736年 イングランドにやって来た。どういう時であっても彼は庭師を励ます人、庭師の友人であった。以下の手紙はその良い実例である：－

サー・ヘンリー・グッドリックからサー・ハンス・スローンへ

ヨークシャー バラブリッジ近くのリブスタンにて 1712/13年

拝啓

貴殿からいただいたご親切のおかげで、お手紙を差し上げてご迷惑をおかけすることも顧みずお手紙を書くことにしました。また貴殿は好奇心を膨らませることを愛される方であると知っておりますので、私の手紙の内容が貴殿にとりまして、ほかのものに比べそれほど不愉快なものではなかろうと期待しております。貴殿にお願い申し上げますのは、貴殿がお持ちの珍しい植物の中で海外産の希少な樹木、特に耐寒性のものの種子、ナッツ [木の实]、あるいは果実の種をいくつかお持ちでしたら、温床でそれらを育て細心の注意で保存することは私の喜びとするところであり、心からの感謝を込めてそれを買わせていただければと思います；そして私は貴殿がたくさん持っていていらっしゃるもの以外を奪おうとするつもりはありません。もし何か貴殿のものに事故などがあった時に、すぐにまた持ってきてくれる人に補充を頼めるほど多くあるものから結構です。ここでは自分の珍しい木は私自身が中心になって世話をしていますが、貴殿のものは私たちに比べよりロンドンの近くにあると思っています。私はまだ本当のロトスの木 (*Zizyphus Lotus* ナツメの一種) を手に入れることができず、カラマツもまだですが、イーヴリンによると両方ともわが国の気候でも十分よく育ち、また種から育てることもできるかも知れないと言われています；これらの種子やその他の外来植物については育てることに疑いを持っておりません。なお、お願いしているのは木のことでして、小さい植物は私が世話をするには数が多いと思われれます；もし貴殿がこれらの種類の小さな木をそれぞれ 1本ずつ私に入手可能とさせていただければ、貴殿に感謝申し上げます。深謝 敬具

H. グッドリック

リブストーンには現在 3 から 4 本のとても素晴らしいカラマツの木が根付いており、多分これらこそがこのお願いに対する返事として送られたものであろう。サー・ヘンリー・グッドリック [Henry Goodricke, 1677~1738年] はかの有名なリブストーン・ピピン [リンゴ] を持ち込んだ人物で、彼はノルマンディーから 1707年頃 3本のピピンを送ってもらい、その 1本が成長して元祖リブストーン・ピピンの木となった；この木は 1839年に風で倒されたが、その根から出た吸枝がかなり大きな木となっており、時には今も実をつけている。

第 11 章 風景式庭園の夜明け

“Shade above shade, a woody theatre

木陰に重なる木陰、森の劇場

Of stateliest view ……”

その荘厳な眺め

MILTON, *Paradise Lost*

ミルトン『失樂園』

“Shower every beauty, every fragrance shower

ふり注げ美しさのすべてを、すべての香りをふり注げ

Herbs, flowers and fruits; …”

ハーブよ、花よ、そして果物よ

THOMSON, *Seasons*

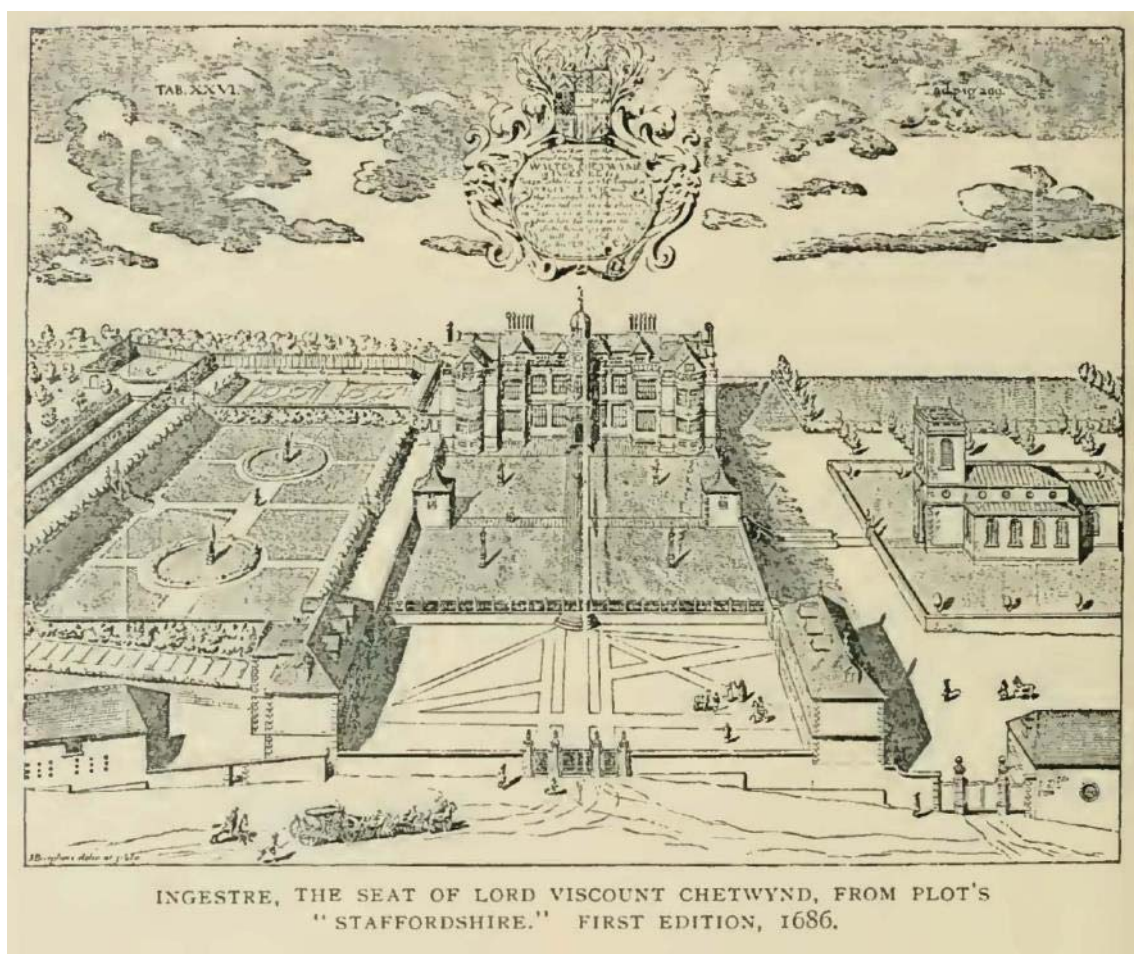
トムソン『季節』

庭園のデザイン、そして植物の栽培、植栽に関してロンドンとワイズに追随した庭師たちとしてはスティーブン・スウィツァー、その後にはブリッジマン [Bridgeman, 1690~1738 年 庭園デザイナー] がいた。これらの男たちは整形式庭園が衰退していく中であって忙しかった。アディソン [Addison, 1672~1719 年 随筆家・詩人・政治家] とポープ [Pope, 1688~1744 年 詩人・風刺家・風景デザイナー] が最初に古いスタイルを笑い物にし、「自然の模倣」を流行に持ち込もうとしたのはアン女王の時であった。しかし、昔の庭園への反発と破壊は後に至るまで開始されることなく、彼らの理論が広がるには時間がかかった。この時期に庭園に関する見解やデザインがなかった訳ではなかった。それらは郷土史 [訳注] の中に見出すことができ、たとえばプロット [Plot, 1640~96 年 自然史学者] のスタッフォードシャー州、アトキンス [Atkyns, 1647~1711 年 地誌学者・古物収集家・政治家] のグロスター、そしてダグデイルのウォーウィックシャー州の郷土史であり；また 1707 年にライデンで出版されたバーヴェレル [Beeverell] の「大ブリテン島とアイルランドの最高の楽しみ」“*Les Dèlices de la Grande Bretagne et de l'Irlande*”、キップ [Kip, 1652/53~1722 年 オランダ人 製図家・版画家] による数多くの眺望図が載せられた 1709 年『図説ブリテン』*Britannia Illustrata*、このほかにも同様の出版物があった。

[訳注] 古代イングランドの地方区分ごとの歴史地勢誌。16 世紀以降、古物収集家により編纂される。

もしこれらの本の著作者たちが、こんなにも多くの庭園が全滅すると予見していたなら、最大限の注意を払ってそのデザインを保存したことであろう。しかし、これらの絵のほとんどは頭の中で作られたものようで、館、庭園、そして周囲の景観の鳥瞰図が、型にはまった見取り図として遠近感のない形で描かれていた。多くの場合それは忠実な描写であったが、それを見ると整形式庭園はすでに詩情をすべて失っていた。春のブナ beech の垣根の優しい若葉の淡い色あい、冬のイチイの囲いの柔らかな緑、あるいはつる植物が巻き付いたあずまやも白黒の固い線で落とし込まれるとすべての魅力を失ってしまうのである。インゲストリーの庭園のことは、キャバシャム出身の一人の旅行者、ジョン・ラヴデイ

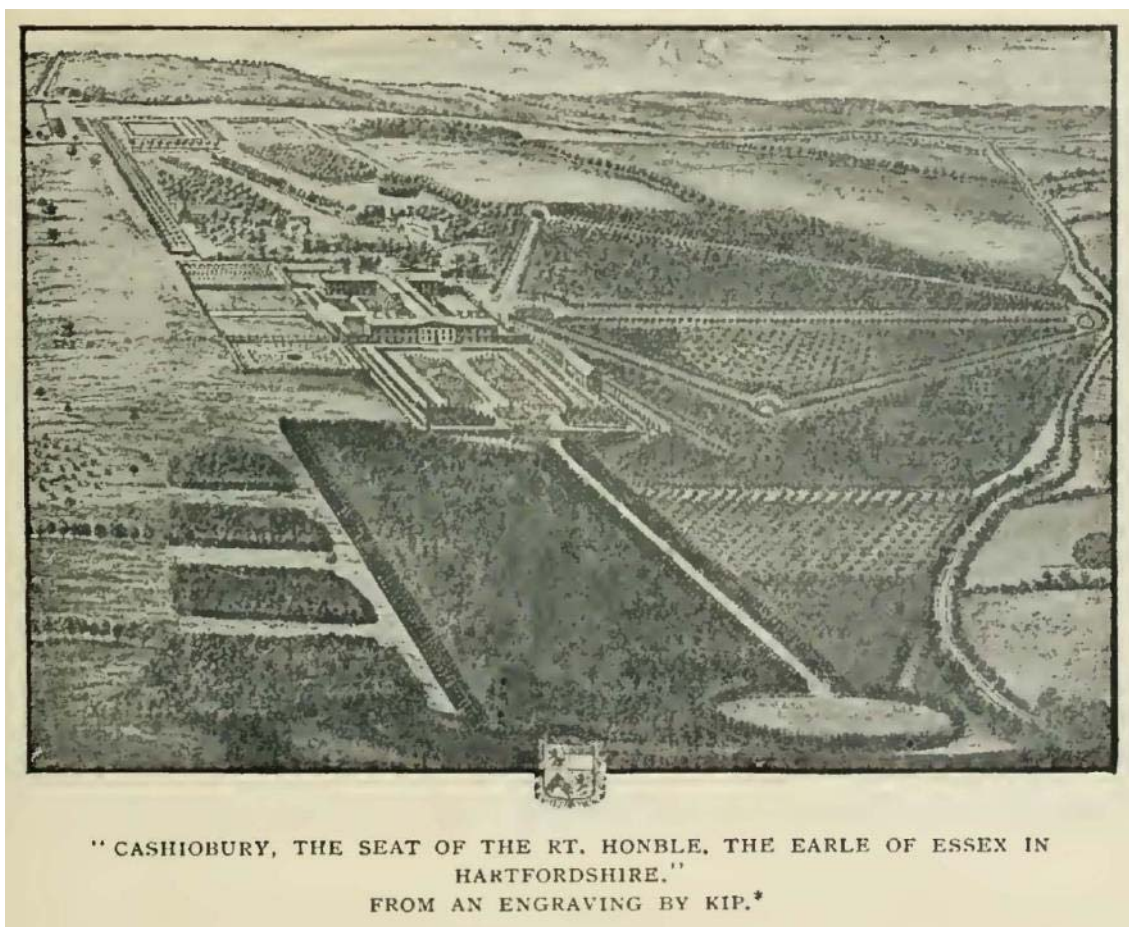
〔John Loveday, 1711~89 古物収集家〕により 1732 年に描き出されている。館は丘の横に位置し、「庭園は高いところにあり、広くて一想像の限り堂々とした樹木の間を通る立派な園路の中に配置され、木が生い茂る庭園あたりには野ウサギがたくさんいて、建物は眺望を得るために高い所に建てられ・・・これは教会とともにプロットの 299 ページに掲げられている」。ラヴデイが言及している絵はここに復元されているが、これを見ると、これらのデザインがオリジナルな美しさの一端を伝える上でいかに不適切なものであるかを衝撃的な形で示している。



〔図 11-1〕 イングストリー チェトウィンド子爵閣下の居所
プロットの「スタッフォードシャー」第1版 1686年

そのことは、自らの衰退をもたらした整形式の技術の退廃であると言われてきたが、アン女王の時代の庭園の中にはこれ以上魅力的なものを想像することは難しいものもある。その主要な特徴とは刈り込まれた木々の間を通る長い園路が普遍的に使われていたことで、これらの木々とは厳密には生垣のことではなく、木が一定の高さにまで刈り込まれていて、自然な形で上が先細になっているものである。この最も珍しい実例はエセックスのダウン

ホールで見ることができる。



[図 11-2] 「カシオベリ エセックス伯爵の居所 ハートフォードシャー」
キップの版画 (*189 ページ参照 [本訳 186 ページ])

木は 60 か 70 フィートの高さに刈られ；その間の散策路は 15 フィートの幅で、長さは 780、そして一番端はハットフィールド・ブロード・オークの眺めで終わっている。この庭園はこの場所が詩人のプライアー [Matthew Prior, 1664~1721 年 詩人・外交官] とオックスフォード卿ハーリー [Robert Harley, 1661~1724 年] の共同所有地であった時に造られた（†現在はルークウッド卿の土地）。プライアーはこのダウンホールを初めて訪れた時に、この場所を「デリー ダウン ダウン、おーい デリー ダウン」と呼んだユーモラスな詩を書いた。

[訳注] デリー-Derry とは、古い歌謡に見られる繰り返し文句や合唱。

彼がそこで見つけることを期待したのは、

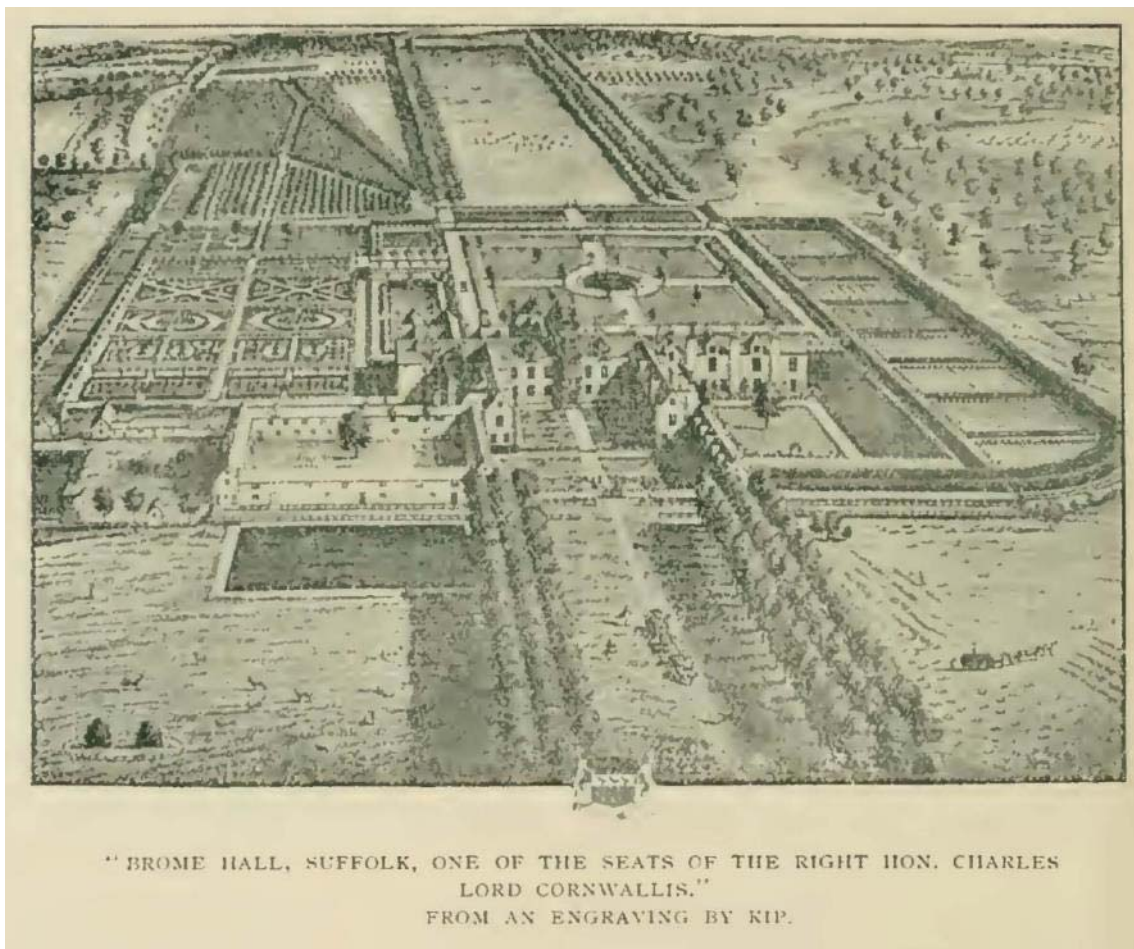
“...gardens so stately, and arbours so thick, ...庭園はととても威厳に満ち、木々はこんもりとし
A portal of stone, and a fabric of brick” 石でできた門、そして煉瓦の壁

しかし、目的地に着くや、詩人がその友人に叫んだのは、

“O Morley, O Morley! if that be a hall おおモーリー、おおモーリー！もしこれがホールなら
The fame with the building will suddenly fall.” 建物の名声はあつと言う間に消え失せるだろう

これに対し彼が得た答えは、

“I show'd you Down Hall; did you look for Versailles?” ご覧に入れたのはダウンホール、ヴェルサイユでも探しておられたか？



[図 11-3] 「ブロムホール サフォーク チャールズ・コーンウォール卿閣下の居所の一つ」 キップの版画

プライアーはここに長年住み、新しい庭園をデザインした。オックスフォード卿が加えたこれらの改造の中には現在の主庭園も含まれており、そこにはオランダ風のツゲの生垣と刈り込まれたシデ hornbeam の長い壁が作られていた。別の魅力的な実例としてはヨークシャー州のブラマムのもがある（*レイン・フォックス氏所有）。庭園の基本計画はスウィツァーの本に描かれているものと同じようなものである。



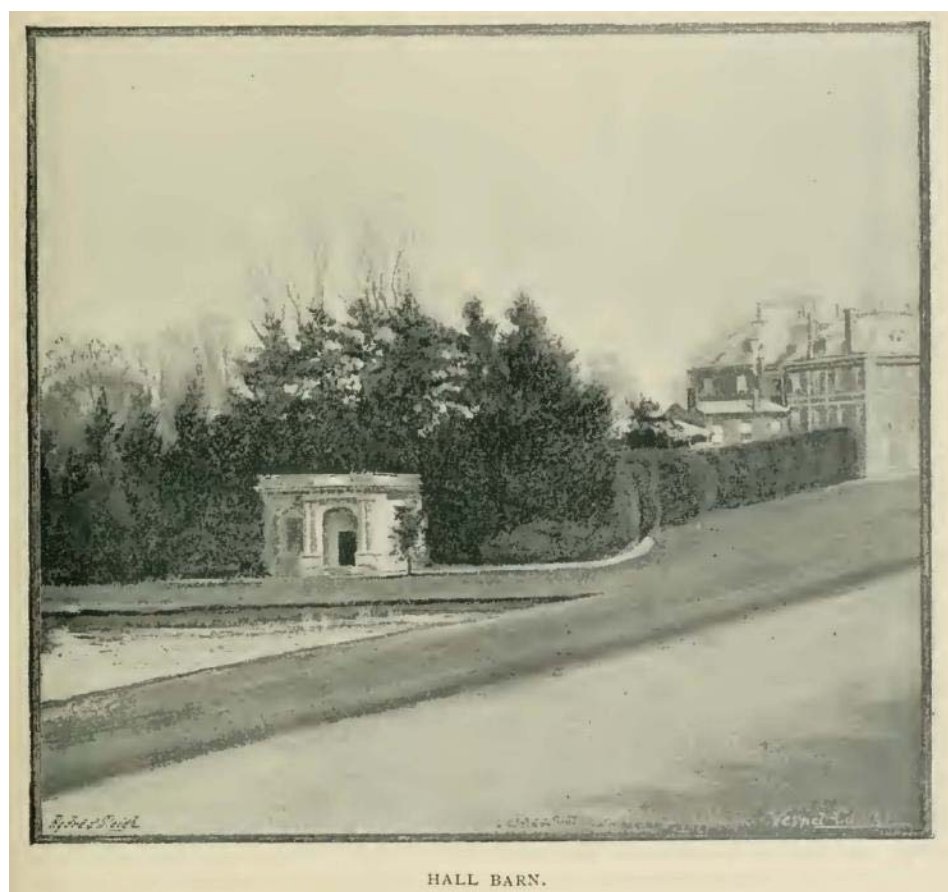
[図 11-4] ブラムム

館は何年も前に燃えてしまい、修復されることは一度もなかったが、庭園はベンソン氏 [Benson, 1676 頃~1731 年 枢密院・大蔵卿] によって造られた当時のまま、元の姿を残して維持され続けた。彼は駐スペイン大使であり、アン女王はブラムムムーアの土地を彼に下付した；彼が館を建てその周りに庭園を造った後、女王はそこを訪れ、ビングレイ卿の爵位を与えた。館に沿ってテラスがあり、その前面には芝生のバルテールがあった。そこからはブナとシデの森を通してその向こうに遠くを眺めることができた。テラスの北の端からは刈り込まれた高い生垣の間を真っすぐな園路が西に向かって延びており、そして園路がすくと向かう先はこの上なく魅惑的な迷路で、そこからは長い園路が放射状に等角度で広がっている。それらのうち何本かの行き着く先には小さなサマーハウス、腰掛、あるいは彫像や記念碑がある。中心から一番遠い園路の端からは広々とした田園地帯越しに眺望が広がる。庭園は狩猟場より高い所に設けられ、このため二つを隔てるテラスの壁がちょうど隠れ垣根（サンクフェンス）[眺望を損なわないように掘って作られた溝。別名ハーハー-ha-ha、または ha-hah。造園学用語集ではハハア] の役割を果たしている。とは言え、一番心躍る部分は多分、並木道が横にさらに広がり、園路が運河の端を巡り、高い木が静かな水面に影を落としている所であろう。「フランス風庭園」として設計されたオープンスペースがある。この場合、それは楕円形の芝生の斜面で、そこには大きな規則的な形をした花壇があり；サマーハウスがこの庭園を見下ろし、そしてサマーハウスの背後には大きなボウリング用グリーンがあり、それは木で囲われ、その間を園路が通っている。楕円形の庭園の反対側の端には、水盤と「人工滝カスケード」があり、そこからちょっと離れた所で散策路

は館の前のテラスに、その南端で合流する。ブラマムのこの庭園の趣は、ある晴れた秋の日、夕日の傾く日差しの中で、木々の金褐色の葉に輝く遠景を通して現れる時、誠に美しく、決して忘れることができぬ印象を与えた。

このような庭園に関する現代における描写としてはパーシヴァル卿 [Parcival, 1683~1743年 初代エグモント伯爵] が義理の兄弟、ダニエル・デリングに書いた手紙の中に見出せる (*エグモント卿所有の写本)。この手紙はオックスフォードから 1724 年 8 月 9 日付けとなっている：－

「金曜の朝、ベコンズフィールド出発；我々はウォラー氏の館であるホール・バーンを見るため半マイル進んだ－この 7 つの窓があらゆる方角に開いている館は私がロンドン・ボックスとでも言いたくなるようなものである。彼は狩りに出かけていて、私たちは館の中に入らなかったが、これは特に珍しいことでもなく、私たちはたっぷり 1 時間半庭園を見て歩いた。このことは、彼らが私たちにヴェルサイユの庭園を思い出させてくれているのだと思えば結構なことであると言えよう。



[図 11-5] ホール・バーン

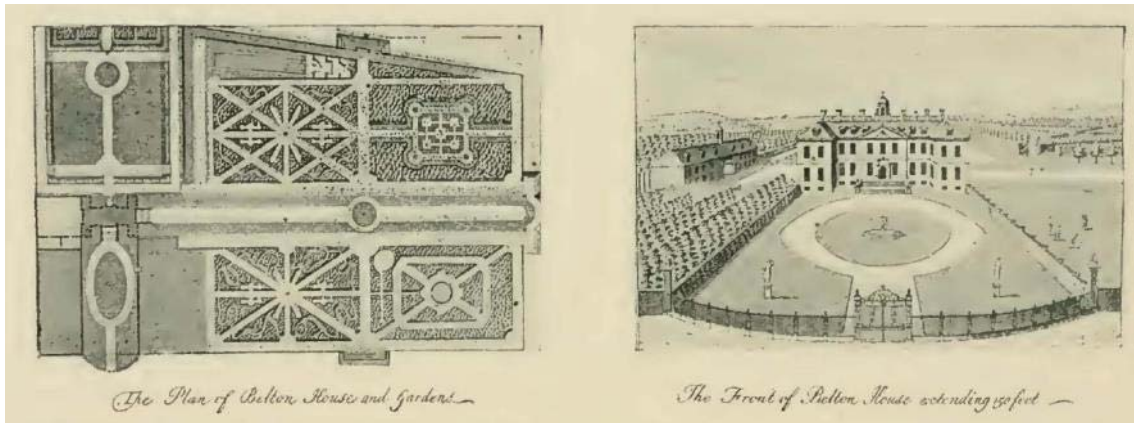
ここの庭園と森は 80 エーカーの広さだが、森は庭園の一部と思えるくらい見事に管理され

ている。パルテールからはテラスと砂利が敷かれた園路があり、それは森までそして森の中へと続いており、森の中では主要な一本道を何本かの小さな道が横切り、それらの道幅はまちまちだがすべてきれいに砂利が敷かれ、そのほとんどが両脇を緑の芝で覆われている。森は高いブナと分厚い下生えで構成されており、高さは少なくとも 30 フィートはある。その中に切り開かれた狭く曲がりくねった園路と散歩道の数は数えきれないくらいである；どこから見ても健康そのもののご婦人でもすべての道を歩くことはできないので、私の妻はヴェルサイユのものと似たようなウィンザーチェアに座って運んでもらった。ただ、だからと言って見る価値のあるものを見逃すということはまったくなかった。園路の終点はハーハーであり、そこから先は、日の光を遮る狭い曲がりくねった園路の一番端に来るたびに、美しい田園と様々な眺めを見ることになる。ヴェルサイユは確かに噴水が優れており、ここの庭園には一つとして噴水はない；しかしここには魚が一杯いるとても気品ある水面が 2 つあり、その横は美しく植樹され段々となっている。森の中には深い底となっていて、まるでドラゴンの棲みかのように、恐ろしい気持ちで降りて行く場所がある；しかしそこは高い木々が周りを取り囲み木陰を作っており、その木々を通して光がかすかに輝いており、それにより精気を取り戻し、ドラゴンはもっと人目につかない場所を探すだろうと正気にさせてくれる。この場所はギリシャ神話の牧羊神パンあるいはローマ神話の森の神シルヴァヌスの寺院とも呼べそうな所で、そこにはいくつかの部屋、アーチ門、回廊などがあり、とても芸術的に刈り込まれた高く生い茂るイチイでできている。内側の円形あるいは中庭の真ん中、と呼んでもよいような場所には石の台座に据えられた罪深きサテュロス [ギリシャ神話で酒と女が好きな半人半獣の森の精] の像が立っている・・・ボウリング用の芝生そして館の周囲の大規模な植え込みを横切る。この植え込みはまだ日の浅いものだが、有名な詩人エドモンド・ウォラー [Edmund Waller, 1606~87 年 詩人・政治家] のベンチあるいは腰掛を忘れてはならない。これは今では古くなっているが非常に大切にされているので決して取り除かれることはなく、サー・フランシス・ドレーク [Francis Drake, 1543 頃~96 年 海賊・海軍提督] の船のように定期的に修繕されている。現在のウォラーは彼の孫である。これらすべての素晴らしい改良は彼自身あるいは岳父のエイズラビー [Aisleby, 1670~1742 年 大蔵卿] の手で成されたもので、岳父はこの館とその周辺の土地を、妻との合有財産の権利のもとに所有していたが、南海バブル事件の年 [訳注] に義理の息子に譲渡した。この庭園についてはまだやるべきことが多く残されており、そのための費用は巨額になると見込まれたが、この紳士は結婚により南海株と父親譲りの土地でもって好きなようにすること [ができた]。このような魅力的な話の後に、ホール・バーンがほとんど手を加えられずにいること；また今日に至るまで詩人の名前を冠した居所が残っていることを発見することは嬉しいことである。

[訳注] 1720 年に起きた南海会社の株価急騰と暴落による大恐慌、南海バブル事件。当時造幣局長官であったニュートンは大損を被り、ヘンデルは大儲けをして王立音楽アカデミーを設立。

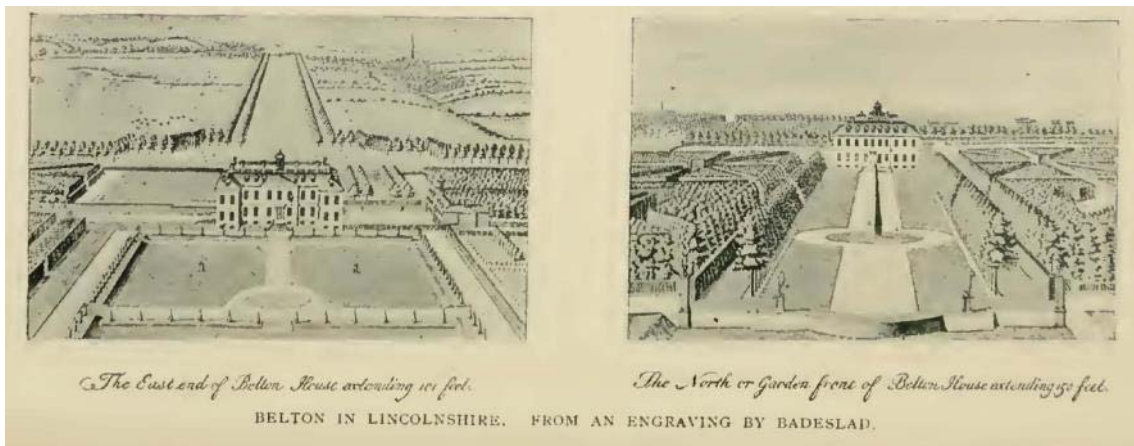
パーシヴァル卿は第一級の手紙の書き手であり、ダニエル・デリング宛ての数通の手紙には1723年にイングランドを旅した時見た庭園の印象というものが綴られている。すなわち：－「ウィッカムへと向かう、シェルバーン卿の所まで7マイル [と我われは思ったが]、彼はこの時まで既にそれなりの庭園を造り、あるいは周辺の丘を覆う森の中に見事な園路を切り開いていたが、私たちはまったくもって失望させられた；森は手入れがされていない；わずか4エーカーばかりの庭園は趣がなくまた手入れもされていない、また館はブラックヒースのビダルフ夫人のものより40倍悪い」「ショットオーバーと呼ばれるティレル大佐のもの（オックスフォードの近く）は [さらに] 2マイル先にあり・・・館の周囲には森と水が豊かであり、両方とも規則正しく美しく庭園の巡回路へと導かれている。西側には大きな八角形の水盤があり、東側には運河が2本走っている；園路、パルテール、テラス、そして並木道が立派なオーク、ブナとニレの木の茂みで心地よく分けられている；一言で言えば、彼の庭園は既に完成しており、かつそれでも彼は自分の素晴らしい感性を満足させるために前進しているのである」。パーシヴァル卿がサー・ウィリアム・テンプルの甥の友人であったことが明らかなのは、その他の手紙の中で甥の名前をしばしば出しているからである。ムーアパークの庭園の歴史を紐解いてみることは興味深いことである。次の手紙は1724年8月25日付けのものである：－「ファーナムから1マイルの所に住んでいるジャック・テンブルを訪問・・・そこは有名なサー・ウィリアム・テンブルに買われたもので、彼はここが大層気に入って庭園の一部を造ったが、彼の甥であるこの紳士はそこに大きく手を加え、実に素晴らしく快適な居場所へと変えた。ワイ川の支流という条件に恵まれ、そこから彼の庭園の真ん中に川が引き込まれ、2つの美しいカスケードに水を供給している。パルテールには若きパピリウスとその仲間のバックス、そしてダイアナという4つの古い像が立っている」。

同じ年パーシヴァル卿はノーフォークとサフォークへ行った。彼はユーストンを訪れ、このように書いている：－「どの庭園もまだ注目に値するとは言えない。まだほんのできたばかりで、木も十分には育っていない。そこにはとても立派な運河があり、それが一方の端の境界となっており、砂利の園路の一番奥には大きな水盤があり、その向こうに湖がある」(*201ページの図参照 [本訳196ページ 図9-3])。そしてオックスフォード卿の場所については、「チップマン、ニューマーケットの北3マイルには、庭園は50エーカーあり、とても変化に富んでおり、見事なボウリング用の芝生、遠くまで眺められる刈り込まれた極めて高い生垣の列、細長い土地と園路、そこからは立派な並木道を通して何マイルも向こうの田園地帯まで眺められる。T字型で長さ1000フィート、幅70フィートの運河がある」。これもまたブラマムに今も存在している庭園の記述か、それともスウィツァーの計画の一つなのかもしれない。ベルトンもこの時代の庭園のもう一つの魅力的な実例であり、その一部はいくらかは変更が加えられているが、これらの計画に見られるいくつかの特徴を今も備えている。



ベルトンの館と庭園の計画

ベルトン館の正面 150 フィート上る



ベルトン館の東端 101 フィート上る

北側あるいはベルトン館の庭園側 150 フィート上る

〔図 11-6〕 リンカンシャー州ベルトン ベイズラッドの版画

スウィツァーはロンドンとワイズの弟子であり、庭園に関するポープのアイデアの称賛者であることを公言していた。彼の考えのすべては1715年の『貴族、紳士及び庭師の気晴らし』*The Nobleman's, Gentleman's and Gardener's Recreation*に書かれており、1718年に書き加えられて『田園の設計』*Ichnographia Rustica*として再版された。「このタイトルの意味するところは、田園邸宅の一般的デザインと配置を庭園、木立ち、狩猟地、放牧地などの中に取り入れるということである。したがって著者はこれを森林式ガーデニング、あるいは簡単に、田園式ガーデニング Rural gardening と呼ぶこととする」。これこそ整形式庭園の終りの始まりであった。この「雄大な方法」“Le grand Manier”とは、彼が続けて述べるところでは「我われがどこでも見るような、癖をつけたり、小さく惨めなやり方とは対極にある方法で・・・これらのデザインの骨頂と言え、刈り込まれた植物、花やほかのくだらない飾り・・・それは町中の小さな庭にしか似合わないもので、田園の広々とした土地にはふさわしくない」。ほかの箇所では（*1718年編）、さらに一步踏み込んで、彼

の仕事は「土地全体を美化すること」であると言っている。土地は「きれいに並木道や生垣で区切られ・・・小さな園路やさらさらと流れる小川・・・なぜ平らで歩きやすい砂利や砂が敷かれ木陰のもと小麦畑や牧草地を通り抜ける園路は、人が考えることができる最も荘厳な庭園の中の一番大きな園路と同じくらい楽しいことではないと言うのか？そしてなぜ大邸宅からかなり離れた所の小さな庭園や水盤は、近くのものほど有用で目を見張らせるものではない（そして本当になぜそれ以上ではない）と言うのか？」もっとも、ここに私が引用した庭園、そして彼自身の計画は、小麦畑を含むまでには至らなかったが、庭園というものが囲まれた土地である、ということには終止符が打たれ、既に狩猟地そして周辺の田園にまで食い込みつつあった。この動きは当初は疑いなく好ましいものであり、それはオランダ式の庭園が到達した不自然な様式や硬直性をいくばくかでも捨て去ることであった。フランス式を模倣して造られた庭園には、作業が必要なスペースが広大で経費も膨大なものであったがため、大きなデザインに役立てるため、そしてできるだけ経費を節減するために周辺の自然が活用された。

それから数年後には風景式の先駆者たちがその乱用を咎められるべきとされるが、私はそうとは思わない；それは本当のフラワーガーデン、花が咲き誇る「この世のパラダイス」が次第に追放され、そして狩猟地に庭園が食い込んでいくのではなく、狩猟地が館の方まで押し寄せてきてフラワーガーデンがほぼ消え去った時であった。人々はあれほど長い間人気のあった「トビアリー」式に飽きつつあった。刈り込まれた垣根、小径、茂み、そして何本かの真っすぐな立木の代わりに、庭園は刈り込まれた茂みでごちゃごちゃに溢れ返っていたから、自然の美しさを知る人なら誰でも、森や野原に現れる自然を、野生のままに優美な形で手つかずで育っている木を時には見たいものだど、いずれにしろ強く望んでいたとしてもまったく不思議ではなかった。アディソンが書いたところによると（*『スペクテイター』414号 1712年6月25日 *Spectator*）、「我われ英国の庭師たちは」「自然を手なずけるのではなく、できるだけ自然から離れることを愛した。我われの木は円錐形、球形、ピラミッドの形に育てられた。すべての木と茂みにはハサミの跡が見える。私は自分の意見が特異なものかどうかはわからないが、自分自身の立場からは、幾何学的な形に刈り込まれ整えられているよりは、大枝小枝が思いきり豊かに生い茂り形も様々な木を見る方が好ましいと思われる。そして完璧なまでのバルテールの中のすべての小さな迷路よりは、花の咲いている果樹園の方がどこまでも喜びに溢れていると想像せざるを得ないのである」。

翌年（1713年）ポーブはこの自然庭園の訴えを追隨する記事を『ガーディアン』に書いた。それは「緑の彫像」の流儀に関し、さらに辛辣な調子で述べたものであった。「男、女、子どもたちの家族を木を刈り込んで作るという完璧な境地に到達した」「名の通った町の庭師さん」が販売用の緑のカタログをポーブに送ってきたと仮定する。大変気の利いた木のリストは次のようなものである；その中には「イチイの木でできたアダムとイヴ、大きな嵐のため知恵の木が倒れて少し取り乱しているアダム；イヴと蛇、とても意気盛んな。ツゲの木でできたセントジョージ、彼の腕は十分な長さとは言えないが、来年の4月

までにはドラゴンを支える状態にはなっていそうなもの；同じく緑のドラゴンでカキドオシ ground-ivy の尾が今のところ付いている（注意－これら2つは別々には販売されない）。月桂樹でできた様々な著名な近代の詩人、少し枯れかけていて安く処分されそう。枝が延びてヤマアラシ [porcupine, 古フランス語 porc 豚+ espin とげのある] になってしまった豚の形の生垣、雨天の中1週間放置されたため」。以上の話が記述されている随筆の頭の方で、ポーブはホメロスの『オデュッセイア』に描かれているアルキノオスの庭園の描写を引用し、その一節を自ら翻訳し掲載している：－

[訳注] アルキノオスはパイアケス人の王で、難破したオデュセウスから放浪の話を聞いた。

<p>“Close to the gates a spacious garden lies, From storms defended and inclement skies; Four acres was the allotted space of ground, Fenc'd with a green inclosure all around. Tall thriving trees confess the fruitful mold, The red'ning apple ripens here to gold. * * * * * Beds of all various herbs, for ever green, In beauteous order terminate the scene.”</p>	<p>門の近くにはゆったりとした庭園が広がる 嵐から守られ、そして風雨が吹きすさぶ空； 4 エーカーが割り当てられた土地の範囲 周りはすべて緑の垣で囲いがめぐらされ 高く元気な木々は実り豊かな姿を見せ 赤くなったリンゴはここで金色へと熟す * * * * * あらゆる種類のハーブの畑は、いつも青々と 美しい整然とした姿で一画をなす</p>
--	--

仮にこのようなものがポーブの理想的な庭園であるなら、彼があれほど熱心に持ち込むことを支援した風景式とはほとんど共通点はないことになる。「この単純さに比べると現代のガーデニングの手法は何と正反対にあるものか！」と彼は続ける。「自然から距離を置くこと、すなわち最も規則的で整形的な姿に木をいろんな刈り込む時だけでなく、技術の限界を超える途方もない試みにおいてすら、これを我われは目標にしているように思える。我われは彫像に出くわし、そしてなお、木々が人間や動物の最も本来の形であるよりも、その最もぎこちない姿になっている方を喜んで」。整形式庭園の一番熱心な推進者であったとしても、ポーブとアディソン側に言い分があることは誰も否定できない。とは言え、もう一方の極端に走って、庭園の中に計画性がまったくなく、いかなる直線もまったくないなどというようなことはありえない。ポーブがトゥイッケナムに落ち着いて2年後、その邸宅は彼が称賛する単純なスタイルとはかけ離れたもので、あらゆる種類の田園風景の模倣が複雑に絡み合った代物であった。彼は計画と植栽に天井知らずとも言える労力を注入した。「私は神に感謝します」と友だちへの手紙に書いた。「すべての雨の日、そしてすべての霧に対し、それが私の頭痛の原因だが、私の仕事は捗っている」。彼の有名な洞窟は、「大理石、スパー [方解石、螢石など]、宝石、金や鉾物でできており」、彼の晩年のお楽しみであった。それは間違っても「自然」であるとは認められないが、それはこれ以上夢のようなものは想像できないからである。もっともこの洞窟についてポーブ自身

が書いたところでは、彼は初めての人にこうするように言っている：－「近づくのだ！偉大な自然をじっくり見るのだ」



〔図 11-7〕 ストウのパラディオ様式の橋

アディソンは一時、ウォーリックシャー州ビルトンに住んでおり、そこの彼の庭園も「自然式」とは言えないものである。その庭園の一部は1623年に遡る；その何箇所かは今世紀初期に手が加えられたが、アディソンによって使われたあずまやは今もなおそこにある。建物は古典的な「アン女王」スタイルの建築様式で、そこには真っすぐなベンチがあり、庭園を眺めるようになっており、そして田園的なものは何もなかった。それでもなお、庭園の中には古い刈り込まれたイチイのあずまやが2つあり、またきれいなイチイとセイヨウヒイラギの生垣もある。

この時代の別のデザイナーであったブリッジマンは、これら二人の作家の考え方を踏襲したが、彼自身はスウィツァーのような物書きではなかったから、彼の考え方というのは、彼のした仕事を見なければわからない。ウォルポール [Walpole, 1717~97年] は何年か後に、ブリッジマンのことを高く評価して書いている。彼は王立庭園の責任者としてロンドンとワイズの後継者であり、前任者たちより「はるかに高潔」であったとウォルポールは書いている。「彼は計画を拡大し、すべての部分とその反対側と合致することを嫌った。そして高く刈り込まれた生垣がある真っすぐな園路に彼はまだ多くの愛着を持っていたが、それは大きな線だけに限られ；残りはわざと手を入れないで多様性を加え、また園

われた生垣の内側ではあったがオークのぼさぼさとした茂みを作った。私が観察したところ、ハートフォードシャー州ガビンスの、故サー・ジェレミイ・サムブルック [Jeremy Sambrooke, 1703 頃~40 年] の居所の庭園の中には、現代的な趣向の夜明けを強く示す様々なアイデアが数多く見られた。ブリッジマンの改革がその地歩を固めるにつれ、彼はさらに大胆となり、リッチモンドの王室庭園の中に耕作地を取り入れ、加えてちょっとした森の風情すら持ち込んだのである。もっともこれは、厳格な対称性から解き放つ別の革新者たちが新たに出現してからのことであった」。

風景式造園家（ランドスケープ・ガーデナー）の何人かの名前はバッキンガムシャー州のストウとの関連で知られており、それぞれの人物が代わるがわるこの場所に何かしらかのものを付け加えた。この流派の庭園デザイナーたちによって、庭園は完璧さの極致そのものと見られるようになった。風景式庭園の諸原則に関するポープの記述はたった一つの言葉にまとめられる、それはストウ：－

“Still follow Sense, of ev’ry art the soul,	さらに感覚に従い、すべての人為の本質
Parts ans’ring parts shall slide into a whole;	部分が答えであり、部分が全体の中に滑り込む
Spontaneous beauties all around advance,	自然に生まれる美しさがすべてに行き渡り
Start ev’n from difficulty, strike from chance,	困難ですらそこから始まり、偶然から生み出す
Nature shall join you; time shall make it grow,	自然があなたと結ばれ；時がそれを育てよう
A work to wonder at – perhaps a STOW.”	驚くべき仕事－多分それはストウ

サー・リチャード・テンブル [Richard Temple, 1634~97 年 政治家] は 1697 年に亡くなったが、彼はストウの館の再建を始め、そしてその息子のコバム卿 [Cobham, 1675~1749 年] はそれを引き継ぎ、さらに庭園を造り始め、それは 1755 年までずっと手が加えられ続けた。その頃までには 500 エーカーの大きさにまで広がっていた。ブリッジマンが最初のデザイナーで、その後はケント [William Kent, 1686~1748 年 建築家・造園家] であり、その間、サー・ジョン・ヴァンブラ [John Vanbrugh, 1664~1726 年 劇作家・バロック様式の建築家] により寺院、記念碑のいくつかが建設された。ストウについての数限りない描写の中から一つ、彼が実施した最後のデザインとしてピラミッドが特に触れられている (*『ストウ リチャード閣下コバム子爵卿の庭園』1732 年 匿名 *Stow. The Garden of the Rt. Hon. Richard, Lord Viscount Cobham*)：－

“ ascends	. . . 上る
The pointed pyramid; this, too, is thine	先の尖ったピラミッドへ；これもまた汝の
Lamented Vanbrugh! this thy last design,	惜しまれるヴァンブラ！これは汝の最後のデザイン
Among the various structures, that around,	数々の構造の中で、その周りに
Formed by thy hand adorn this happy ground.”	汝の手で形作られこの幸せの大地を称える

この庭園は当時の理想的な庭園であったため、今もこれに関するガイドや記述がいくつか公刊されている。より小さなものもこの真似をし、同じように寺院や庭園、眺望を寄せ集めているので；それらの特徴について詳しくおさらいをしておく必要があるかと思ひ、あの心はずむ手紙の書き手であるパーシヴァル卿から義兄弟のデリングに宛てた手紙を余すところなく書き写してみた。そこには1724年に彼がその庭園を訪問した時の彼自身の印象が綴られている：（+エグモント卿所有の写本 セントジェームズブレースにて）

「ブラックリー 1724年8月14日 金曜日夜

7時

「親愛なるダニエル

昨日我われはコバム卿の館を拝見しました。この館は最近5年の間にイングランドで一番素晴らしい居所であるとの名声を博するようになりました・・・庭園は園路の巧みな仕掛けにより実際より3倍広いように思われます。たったの28エーカーなのに2時間もかかりました。庭園は完全に新しく、ほんの11年前に改造が始まったのに今やほぼ完成しています。下の方の端から多数の階段（ただしいくらか距離があつて）をバルテールまで上つて、そこから館までもう少し上ると、館はそこに堂々と立っており見事な眺めを楽しめる。一直線に26マイル先まで見える。この庭園について正確にその姿をお伝えすることは不可能だが、その様子を手短かに言うところな具合である。サマーハウスのところで終わる何本もの園路があり、そして様々な構造をした異教徒の寺院、それは古代様式を模した彫像で飾られている。ここにはアポロの神殿、そこには凱旋門。ヴィーナスの庭園は心はずませる；彼女は自分の神殿の中に立っており、そこは水をたたえた上品な水盤の頂のあたりで、その反対側には神々や女神の像を備えた円形劇場がある；この水盤は園路と茂みに囲まれており、相当の高さからコンポジット式の高い柱により見下ろされている。その柱の上には礼服に身を包むジョージ皇太子の彫像が立っている。館から延びる砂利の園路の端には、2¼エーカーの広さの水面に丸く囲まれた異教徒の2つの寺院がある。その真ん中にはジュリオすなわちピラミッドがあり、その高さは少なくとも50フィート、その頂上からは中を通したパイプにより運ばれた水が流れ落ちるように設計されている。この園路の半ばにはもう一つの見事な水盤があり、その中には高さ30フィートのピラミッドが建っていて、館に近い方には40フィートも噴き上げる噴水がある。交差する園路の終点は遠景の中、門のアーチ、彫像へと続き、また茂みを切り開いた秘密の園路は心地よい。もう見るものはないと20回思い、そして今見終わって称賛し立ち去った庭園なのに、突然、新しい庭園や園路にいる自分を発見する。全体としてこれほど不規則なものはなく、部分においてこれほど規則的なものはない、一つのは別のものとまったく違うものとなっている。これは神の素晴らしき趣味を示しており、また神がどれほどこの場所を好きであったかはその注ぎ込んだ代償の大きさを見ればわかる。趣味のよい庭園を造ることがどれほど責任の大きいことか誰もが知っている；突然それを造ることはなおさらである；しかしな

がら、これほど多くのサマーハウス、寺院、柱、ピラミッド、そして彫像、その大半は切り出された見事な石で作られ、残りは金箔を施された鉛製とくれば、大金持ちの財布も使い果たされるであろうし、彼の妻の莫大な財産の大半もその中へと沈んでいったであろうと疑わざるを得ない。園路のうちの 1 本の端にあるピラミッドはエジプトで最も有名なもののミニチュアの模倣で、イングランドではこの種の唯一のものだと思う。ブリッジマン*が敷地の設計をし、全体の計画も作成したことで、彼はこのビジネスで間違いなく名声を得ることになった。

*余白にある註釈：－「ブリッジマン氏はその後国王の主任庭師へと任命された」

この庭園の美しさをさらに高めることになったのは、庭園が壁で仕切られることなく、ハーハーで仕切られたので、美しい森の田園地帯を眺めることができるようになり、高く植樹された園路がどこまで続くのか気にしなくてよくなったことである」。

かくて庭園はハーハーにより狩猟地の中に溶け込みつつあった。多くの場合、実際に造られた庭園は、狩猟地の中により大規模な庭園を造るために疎かにされた。バウトンにおける改造、それはジョージ 1 世の治世下 [在位 1714~27 年] であったが、それは当時の典型的なものであった；すなわち、広範囲にわたる水の修景施設は取り払われ、手が入られない部分が広げられ、何マイルにもわたる並木道に木が植えられた。

「誰がバサースト [Bathurst, 1684~1775 年 政治家] の庭園のように植栽するか」とポーブは書いた。ポーブは植栽についての流行のリーダーであったから、バサーストの手法は当時の典型的なものとして間違いのないであろう。サイレンセスターで彼が植栽を施したのは庭園ではなく狩猟地であり、そこには何マイルもの並木道が巧みに計画され、しかも館からは遠く離れ、小さな庭園からはほんの少し見えるだけであった。ポーブが過ごし植栽の美しさを楽しんだサマーハウスは、館から 1 マイル以上も離れたところで 7 本の並木道が分かれる場所であった。さらに眺めの良いポイントは、そこからさらに 2 マイル離れた 10 本の並木道が集まるところであった。同じ発想はバドミントンでも実行され、そこでは何本もの並木道が田園地帯へと何マイルも続き、遠くの一点で交わった*。これは庭園の範疇をはるかに越えており、したがって私の主題の範疇も越えているが、ウォルポールによると「ケントが垣根を飛び越え、すべての自然が庭園であると見た」という時代に到達した今、その広がりにも少し触れざるを得ないのである。

*キップの意見を参照、ブルームフィールドとトーマス『整形形式庭園』*Formal Garden* に復刻されている。

花を愛する人々にとって、庭園とは庭園以外の何物でもない、決まりきった話である。彼らの保護の下、園芸と植物学は着実に進歩を遂げ、それは庭園を狩猟地と一体化しようとする新しい熱狂にも負けなかった。ガーデニングの実用的な分野で働いた人々の数は多い。リチャード・ブラッドリー、フィリップ・ミラー、トーマス・フェアチャイルド [Thomas Fairchild, 1667~1729 年 造園家]、そしてジョン・ローレンス [John Lawrence, 1668~

1752年 聖職者] はその中でも一番有名な人々であった。ブラッドリーは自然史、ガーデニングおよび植物学に関する膨大な著作を残した。彼は植物の成長、樹液の移動、受精に関する様々な問題に取り組んだ。「植物の樹液は動物の体内の体液と同様に循環する」と書いた。受粉に関しては「パリの紳士とサミュエル・モーランド氏から多くのヒント……どのようにして花粉（すなわち雄しべの花粉）が子房の中の胚珠を受精させるか」を得たと言っている。おそらくこの「パリの紳士」とはセバスチャン・ヴァイヤン (Sebastien Vaillant, 1669—1722年) と思われる。彼はこのテーマについて書いており、グルー博士およびトマス・ミドルトン、レイほかによって初めて提起された植物の生殖に関する理論について賛意を表していた。サミュエル・モーランドは1703年学士院向けに論文を書いた；彼の理論は、花粉が子房に達するプロセスにおいて、ほかの人とほんの少しだけ異なっていた。科学者たちは自分の理論を証明するために植物を使って実験をし、それを現場の庭師が迷うことなく手伝った。その自然な成り行きとして、ほどなくよく知られている品種の改良や種類を増やすことに成功した。ブラッドリーは品種の交配の例を示して、たとえば、プリムラアウリキュラやチューリップの色を変えたり、またフェアチャイルドの庭園の中のある植物がカーネーションの種にアメリカナデシコの花粉を受精させて育てたものであることを見せた。

ホクストンにあるフェアチャイルドの庭園は多くの実験が行われる場所となった。ブラッドリーはしばしば彼のことを、自分が知っている中で技術的に最も優れた庭師であると語っている。フェアチャイルドは『都市の庭師』*The City Gardner*の著者である。この著作には常緑樹、木や花のリストが載っており、これらは「ロンドンの庭でも一番よく育つであろう」とされるが、それは「石炭の煙のせいで……何でもが育つわけではないからである。しかし……」と続き「私が見るところ、仕事上、年がら年中、町中にいなければならぬほとんどの人々が庭らしきものを何とかして持とうとすることがわかる。一般の市民の人たちがガーデニングのことを広く愛好していると想像でき、自分の部屋や寝室を花を生けた水盤や大枝を入れた壺で飾るのを見ると、たとえ目の前に庭らしきものがなくてもそう思われるのである」。この本の中で、当時(1722年)ロンドンの様々な場所で元気に育っている何種類かの木について書き留められている；トキワガシ、レダマ Spanish broom、カンボク guelder rose、ハシドイ、ライラックはソーホー広場に；梨の木はバービカン、オールダースゲート、ビショップスゲート辺りの何本かの「特定の小路」に見られる。美味しそうな実をつけているブドウの木はレスター広場に；イチジクはチャンセリーレインのロール庭園とクリップルゲートのベネット博士の家に見られる；スズランノキ lily of the valley (tree) はギルドホールの背後の狭い場所に；プラタナスは「東の聖ダンスタン」通り沿いに、高さ40フィート以上もあり、このほかにもウェストミンスターと「川の近くのロンドン各所」では、あらゆる数々の植物が完璧な姿で育っているのを見ることができる。あまりにもたくさんの珍しい植物をこの情熱的な庭師はホクストンの自分自身の庭園で育てていたので、正しく世話をすればほとんどあらゆるものが町中で育

つであろうと思っていたようである。そのリストの締めくくりに「オリーブだってロンドンで上手に育つであろうと説得されそうになる」と彼は言っている。

フェアチャイルドの名前は彼が住んでいたロンドン内の地区では今でも記憶されている。「フェアチャイルド講演会」は彼の残した遺産に従い、毎年シヨアディッチのセントレナード教会で開催されている。聖霊降臨祭〔復活祭後第7日曜日〕の翌々日の火曜日で話される説教のテーマは「創造における神の素晴らしい業」または「死せる者の復活の疑いのない事実について、創造における動物および植物の分野で変化するものがあることで証明されている事実」のいずれかである。ロンドン主教により任命される説教師は説教壇から創設者の考え方を今も述べることになっている。

フェアチャイルドは庭師協会 Society of Gardeners の会員であり、そのリーダー的役割を果たしていたようで、それは彼の名前がフェアチャイルドの死後彼らにより出版された本の序文の最後に掲げられているメンバーのリストの一番最初に出ていることでわかる*。この本はとても興味深いものの一つである。その一部だけが出版され、もしそれが十分に好評であれば残りも出版される予定であったが、そうでなかったことがとても残念に思われる。次に掲げる庭師たちが共著者であった人物である：－

トーマス・フェアチャイルド	Thomas Fairchild	ジョージ・シングルトン	George Singleton
ロバート・ファーバー	Robert Furber	トーマス・ビッカースタッフ	Thomas Bickerstaff
ジョン・アルストン	John Alston	ウィリアム・フード	William Hood
オバダイア・ロウ	Obadiah Lowe	リチャード・コール	Richard Cole
フィリップ・ミラー	Philip Miller	ウィリアム・ウェルステッド	William Welstead
ジョン・トンプソン	John Thompson	ベンジャミン・ウィットミル	Benjamin Whitmill
クリストファー・グレイ	Christopher Gray	サミュエル・ハント	Samuel Hunt
フランシス・ハント	Francis Hunt	ジョン・ジェイムズ	John James
サミュエル・ドライバー	Samuel Driver	スティーヴン・ベーコン	Stephen Bacon
モーゼス・ジェームズ	Moses James	ウィリアム・スペンサー	William Spencer

*『植物カタログ 樹木、低木等のカタログ：ロンドン近辺の庭園の販売用』庭師協会発行 1730 年
Catalogus Plantarum. A catalogue of Trees, Shrubs, Etc : for sale in the Gardens near London
 大英博物館の本はフェアチャイルドの名前となっている。452, h.2.



TITLE-PAGE OF CATALOGUE OF THE SOCIETY OF GARDENERS, 1730.

[図 11-8] 庭師協会のカタログの扉 1730 年

これらの人たちの大半は種苗園の庭師であり、全員ロンドン市内あるいは郊外に住んでいた；－アルストン、ミラーとトンプソンはチェルシーに；ロウとコールはバタースィーに；フェアチャイルド、ウィットミルとベーコンはホクストンに；フランシスとサミュエル・ハントはプットニーに；グレイはフラムに*、ジェームズはランベスに、ジョージ・シングルトンはニートハウスに；そしてウィリアム・フードはハイドパークコーナー近くのウィートシーフに。

*タイサンボク *magnolia grandiflora* が最初に植えられたのはグレイの庭園であった。ジョンソンの『イングリッシュガーデニングの歴史』202 ページ参照

毎月、5、6 年の間、この協会はチェルシーにあるニューホールのコーヒーハウスや別の便利な場所で会合を開いた。各会員が自分が育てている植物を持って来て、それについて集まった庭師で議論をした。それらの名前と外見の様子が丁寧に登録された。5、6 年経った最後に、彼らがカタログ化した全部の植物について「絵の上手な人に描いてもらって色を付けて」もらうことを決定した。この目的のため、ヤコブ・ファン・ホイズアム [Jacob van Huysum, 1688~1740 年 北部オランダの植物画家] と契約した；彼は優れた画家で、花を描く有名なオランダの画家の弟であった。彼らは膨大な絵のコレクションを一堂に会し、最後はそれを出版することで合意した。耐寒性の灌木を掲載している最初の部分だけが出版された。続編としてより弱い外国の植物、そして「愉楽の庭園のための花」、また果樹に関する部分が出版される予定であった。この今我われが目にする、出版された部分からわかる重要な価値というものは、同じ植物についてすべての異名について記述し、また過去の多くの著作家たちについてそれぞれの植物を同定するために述べ、さらにいくつかの新しい品種についてそれが持ち込まれた歴史について示している；スイカズラについての専門的記述は数ページを占めておりとても価値が高いものである。またロンドンのいくつかの有名な庭園に植えられている樹木の見事な標本についても触れている。以下はその一例である、サービスツリー *service trees* (= *Pyrus Sorbus*) [ナナカマドの一種、現在の学名 *Sorbus Domestica*] : 「かつてはサウスランベスのジョン・トラデスカントの所有であった庭園には、そして希少で普通には見られない樹木の風変わりな収集家であるハンマースミスのマーシュ氏の庭園にも同様に、この両方の場所には、毎年大量の果樹、完全に熟しているものを生産しているこれらの樹木がある」。ここにも「アメリカサイカチ *Three Thorned Acacia*、別名ハニーロウカスト *Locust Tree*」 (= *Gleditschia triacanthos*) の描写に対して注釈が加えられており、「本年 1729 年、フラムのロンドン主教の庭園でさやの実をつけた」とある。博物学者のケイツビー [Catesby, 1682~1749 年] のことも、何種類かの植物を持ち込んだ人物としてしばしばこれらのページの中で言及されている。以下はその中のものである：－「アメリカビグノウニア」 *Bignonia Americana* [ノウゼンカズラの一種]、キササゲ *Catalpa* は 1730 年にイングランドでは花が咲かなかった；黄色の実をつけるサンザシ (= *Crataegus flava*) はカロライナから 1724 年に送られてきた；カロライナト

ネリコ Carolina ash (= *Fraxinus caroliniana*) は「ケイツビー氏により種から育てられサウスカロライナから 1724 年に送られてきた；アメリカシナノキ *Tilia Caroliniana* (= *T. americana*) は 1726 年に；カロライナインゲン豆の木 [アメリカフジ] (= *Wistaria frutescens*) は 1724 年に、この花がようやく咲いたのは (1730 年で) ロバート・ファーバーのケンジントンの庭園においてであった；緋色の花を咲かせるアカシアと「ウォーターアカシア」Water Acacia [棘のないアメリカサイカチ] (= *Gleditschia triacanthos inermis*)、この両者は 1723 年に本国に送られた。

マーク・ケイツビーは著名な博物学者であった。彼は最初ヴァージニアで収集活動を行い [1712~19 年、いったん帰国したが]、科学の大義のためにアメリカに戻ってさらに収集活動をするのをサー・ハンス・スローンなどに勧められたので、ふたたび 6 年から 7 年間アメリカに渡り、その滞在期間中に折を見ては種を本国に送った。1726 年帰国するや、彼の偉大なる著作である『カロライナ、フロリダおよびバハマ諸島における自然史』*Natural History of Carolina, Florida and the Bahama Islands* に取り掛かり、その最初の部分が 1731 年に出版された。ケイツビー *Catesbaea* 属、すなわちリリーソーン lily-thorn [訳注：アカネ科でユリのような花を有する] は彼にちなんで、同時代のオランダの博物学者 Gronovius [Gronovius, 1690~1762 年] により名付けられた。

この庭師協会の最も名高い会員はフィリップ・ミラーであり、彼はチェルシー葉草園の管理人で、かつ広く知られている庭師事典 *Gardener's Dictionary* の著者であった。この本の初版は 1731 年に出版され、大変人気があったので第 7 版が 1759 年に出て、オランダ語、ドイツ語、フランス語に翻訳された。版を追うごとに科学としての植物学の進展の状況と外国の植物の数が膨大に増加していることがわかる。第 7 版においてミラーはリンネの分類法を採用している。ミラーがこの偉大なスウェーデン人の知己を得たのは、彼が 1736 年にイングランドを訪問した時であった。リンネの最初の偉大な業績、すなわち分類に革命をもたらした『植物の属』*Genera Plantarum* が世に出たのはその翌年のことであった。ミラーは彼の行った仕事に大変向いていた人物であった；彼は実務的であるとともに科学的であった；彼は初めトゥルネフォール [Tournefort, 1656~1708 年 フランスの植物学者] の分類法、次いでレイの分類法に従ったが、学識が十分深かったのと時代の流れと歩む見通しの良さを備えていたので、リンネの改良された学名を採用した。流入が続く新しい植物の量が多かったので上手に育てることが必要とされただけでなく、注意深く並べて分類することが求められ、フィリップ・ミラーはその両方について多大な貢献をした。

植物はアメリカから持ち込まれただけでなく、新しい宝物はイングランドを目指して旧世界の他の地域からもやって来た。ウィリアム・シェラード [William Sherard, 1659~1728 年] は学識深い植物学者でレイやスローンの友人であり、ケイツビーの支援者であった。彼は 1702 年にスミルナ [現在のトルコのイズミール] の領事に任命され、1718 年までそこに滞在している間、ギリシャや小アジアの植物の収集にほとんどの時間を費やした。彼の弟のジェームズはケントのエルトムに有名な庭園を所有しており、ウィリアムが送って来る新し

い珍しい植物を数多く栽培した。外国からの持ち込みに加え、国内の庭師たちは交配実験や、八重咲き品種、特に斑入りの植物を創り出すことにより栽培植物の数を増やしていた。斑入りの「銀の縞入り」または「金のまだら」のライラック、ハシドイ、セイヨウイボタ、フィリリア *phillyrea* やカエデ類などは大変な人気を博した。

温室と暖房温室の暖房、建築方法が改善したことで「か弱い外来植物」を保護したり果物を育てることが可能となったばかりでなく、野菜の促成栽培が可能となった。ブドウの促成栽培も試みられ、ベルヴォワールのラトランド公爵により実験が行われた。ブラッドリーとスウィツァーはその手順について「壁の背後からある程度離れたところにかまどを作り、そして 1 月から日光の力が十分に強くなるまで壁を温め続ける、日光の力が強くなれば壁に向かって植物が成長を維持できる・・・壁の横では最新の品種のブドウが 7 月か 8 月頃には普通に熟すことになる」と記している。ブラッドリーは一点、現代的なブドウ畑に必要なもう一歩進んだ注意事項について「気をつけなければならないのは、寒い季節の間、これらの果物が季節外れに促成で発芽させる時には、植物は霜による被害のおそれを防ぐためにガラスで覆われなくてはならない」(*ブラッドリー『自然の営み』1721年 *Works of Nature*) と付け加えている。リバプール近くのノウズリーホールにあるダービー卿の所では、早生のブドウを収穫するために壁を温める別の手法があり、旅行者により 1732 年、次のように記されている：－「このブドウのための熱い壁は、中に空洞が設けられ、と言うか 2 枚の壁が平行して走って両端で閉じられていると言ってもよいが、そこに石炭をくべるストーブがあって壁の中間に煙突がある；毎晩火がつけられる」*。

*『旅行日記』1732 年 著者キャバシャムのジョン・ラヴデイ、彼の孫による編纂 ロクスバラクラブ 1890 年 *Diary of a Tour, by John Loveday of Caversham*

[訳注] ロクスバラクラブは 1812 年設立、愛書家のクラブで会員数は 40 名限定。

フィリップ・ミラーによるアプリコットとサクランボの促成栽培の方法は、板でできた衝立の南面に木を釘付けし、前方はガラスで覆い、板の後ろには温床を積み上げるというやり方である。

ローズはイングランドでパイナップルを育て、それをチャールズ 2 世に献上したと言われるが、それは何年もの間ユニークな手本となり誰も真似できない偉業であり続けた。この時代に至るまでパイナップルの栽培ということは理解されなかった。ヘンリー・テレンデはリッチモンドのサー・マシュー・デッカー [Matthew Decker, 1679~1749 年 商人・経済学者] の庭師であり、「我われの気候で楽しむためにアナナスすなわちパイナップル」を初めて持ち込んだ人物であった (†ブラッドリー『植物事典』1728 年 *Dictionarium Botanicum*)。ほどなく何人かの栽培者がパインに目を付け 50 年以内にその栽培だけのことを書いた本が売られるようになった[‡]。

‡『アナナス、パイナップルに関する論稿』ジョン・ジャイル著 1767 年 *Ananas, a Treatise on the Pine Apple*, by John Giles, 『アナナスに関する論稿』アダム・テイラー著 *A Treatise on the Anana*, by Adam

Taylor, 『パイナップルに関する論稿』 W.スピーチリー著 1779 年 *Treatise on the Pine Apple*, by W. Speechley

ホクストンのフェアチャイルドとブレントフォードのグリーンが所有していた果樹園は、果樹園の中でも最も優れた二つであり、特に後者のイチジクは極め付けに最高だった。しかし、もっと特別に大きな進展が図られたのは野菜栽培であった。過去においても長らくイングランドでは野菜は十分に供給されてきた；しかし、何か特別な時、あるいは早めにとか、季節外れの時に、大きなお祝いごとの時に必要になったら、海外から、主にオランダから輸入することになった。しかし起業意欲のある庭師たちは、18世紀初頭には青物野菜とサラダ用野菜、アスパラガス、キュウリの促成栽培を試し始めた。冬に収穫するためキュウリを秋に育てることを最初に始めたのはファウラーで、彼はストーク・ニューイントンのサー・N・グールド [Nathaniel Gould, 1661~1728 年 政治家] の庭師を務めていた。彼は1721年の正月にジョージ1世に見事なキュウリ2本を献上した。サミュエル・コリンズは1717年にメロンとキュウリの栽培について論文を書き、保護のために必要な様々なガラスやフレームを提案した。以下、ブラッドリーからの引用で、そこには初期の促成栽培の先駆者の何人かの名前が示されている：－「健全な農産物および各種のハーブを供給するキッチンガーデンでヨーロッパのいかなる菜園（ガーデン）よりも早い一番乗りは、ウェストミンスター、タトルフィールズ近くのニートハウスの菜園で、そこはサラダ用の早生のキュウリ、カリフラワー、メロン、冬アスパラガス、そして食卓に合ったほとんどあらゆるハーブが豊富であった；そして私が思うに、ここほど料理用の庭づくりを行う庭師にとって素晴らしい学校はない；もっともバタシーは最大規模の地穫りアスパラガスと一番早いキャベツを供給するが。またハンマースミス周辺の菜園に戻ると、そこはイチゴ、ラズベリー、カラント、グーズベリーなどの類で有名である；そして早生の果物をお望みなら同じ近くのノースエンドのミラー氏の菜園がサクランボ、アプリコット、その他同じように珍しいものを、普通の季節よりも数カ月早く提供してくれる」。ロンドン近辺のもう一人の優良な種苗業者はチズウィックのニコラス・パーカーであった。彼はローレンスが強く勧める人物で、同業者の中でこれ以上の人はいないと、その「誠実さ、手腕と高潔さ」によってすべての人に知られていた。同業者たちはともすると騙したり、お客さんが注文したものの代わりに劣った品種の果物を送り出したりしがちであった。たとえば、「元祖ニューイントン桃」の代わりに「乾燥して鮮度の落ちたネクタリンであったり、あるいは芳醇なフレンチ梨の代わりに砂のようなチョーク梨 choak-pear やウォーデン梨であった」

(*『聖職者の気晴らし』 ジョン・ローレンス ノーザンプトンシャー州イェルヴァートフトの教区牧師 *The Clergyman's Recreation*.)。

スウェーデンの偉大な園芸家であったカルム [Kalm, 1716~79 年]、彼にちなんでカルミア属が命名されたが、彼が1748年アメリカに行く途中にイングランドに立ち寄った時、市

場向け菜園（マーケットガーデン）と早期栽培の野菜を見て衝撃を受けたと言われる。彼が記録したところによると、菜園の苗床は盛り土になっており、太陽に向かって少し傾斜がつけられ、「その多くはこの時期（2月）ガラスフレームで覆われており、それは好きな時に取り外せるようになっていた・・・これらの上にはロシア式マットで覆われ、その上に4インチの厚さで藁が敷かれた。これらによりカリフラワーが4インチの高さで包まれた。残りの平地では「鐘型ガラス器」が置いてあり、それぞれの下にカリフラワーの苗が3から4本植えられていた。前述した苗床の横にはアスパラガスの細長い苗床があった。それらの高さは地上2フィート；その頭にはガラス、マット、藁によって同じように覆われており、日中はこれらの覆いはすべて取り払われていた。覆いの下のアスパラガスは高さ1インチでかなり太くなっていた」（†『カルムのイングランド訪問』ジョセフ・ルーカス翻訳1892年 *Kalm's Visit to England*, Translated by Joseph Lucas）。ハツカダイコンも同じ菜園で栽培されており、苗床はマットで覆われていた。彼によると、5月になるとロンドン周辺では野菜は大量に出回り、それらは豆、エンドウ豆、いろんな種類のキャベツ、ネギ、チャイブ、ハツカダイコン、レタス（サラダ用）、アスパラガス、ホウレンソウであった。チェルシーについては「そこには果樹園か野菜の市場向け菜園、そして販売用のあらゆる種類の幼木が一杯に植えられている大規模な平地以外のものはほとんどない」と書いている。

このように野菜栽培の分野で大きな進歩が見られたことがわかるであろう。しかしながら、いくつかの点においては、庭師たちは依然として極めて原始的なアイデアしか持ち合わせていなかった。1729年、1本のアロエ（*Agave*）が「ホクストンのカウエル氏の庭園」で花を咲かせた時、どのようにして冬を過ごさせたらよいかをめぐり大きな興奮が巻き起こった*。その植物の背丈はその時点で20フィート、それを覆うものが木材とガラスで建てられ、外側にはストーブを置いてパイプによって「適量の熱」を注ぎ込み、さらに「予想外にこの有名な植物が成長」した時に対応できるように、必要ならばその構造物を高くできるような準備もされた。ところが、間もなくこの花だけでなくこの植物全体がほとんど枯れてしまうことになってしまい、このようなすべての配慮と経費がほとんど役に立たなかったと分かった時、彼らの失望たるや如何ばかりかと思われる。

*『ホクストンのカウエル氏の庭園で今、花を咲かせているアメリカアロエまたはアフリカアロエに関する正しい説明・・・それと同じものはイングランドでは今まで一度も見られたことがない』1729年

これらの市場向け菜園で作られた野菜の大半はロンドン市内の道端で売りさばかれた。手押し車の行商人たちのいろんな呼び声はロンドン生活の際立った風物であった。この絶え間ないコーラスの数多い繰り返しの中の一つがアディソン（†『スペクテイター』251号）によって記憶に留められ、こう書いた：「私は1年の中でディル *dill* [イノンド 伝統的なハーブの一種] とキュウリを収穫するのにふさわしい、その決まった時が来るのがいつも嬉しかった。しかし 何と言うことか！この呼び声、ナイチンゲールの歌のようなあの声が2カ月以上も聞かれていないとは」。よく知られた呼び声のいくつかは初期の古い歌、と言

ってもいつかははっきりしないが、その中に残されている。そこから一部を引用すると次のような調子である♯：－

♯「ロクスバラ バラード」1560－1700年 『ロンドンの呼び声の歴史』チャールズ・ヒンドリー著
第2版1884年 “Roxburghe Ballads” *History of the Cries of London*

“Here’s fine rosemary, sage and thyme Come buy my ground ivy Here [’s] fatherfew, gilliflowers and rue Come buy my knotted marjoram ho! Come buy my mint my fine green mint Here’s fine lavender for your cloaths Here’s parseley and winter savory And heart’s-ease which all do choose Here’s balm and hissop and cinque foil All fine herbs it is well known Let none despise the merry merry cries Of Famous London Town.	ここに見事なローズマリー、セージ、そしてタイムがあるよ 来て買っておくれよ 僕のカキドオシ ここにナツシロギク、ジリフラワー、そしてルー 来て買っておくれよ 僕のマジョラムの束さ！ 来て買っておくれよ 僕のミント、僕の見事なグリーンミント ここに素敵なラベンダー、あなたの洋服にぴったりの ここにパセリと冬セイボリー そして野生パンジー、みんながきつと選ぶはず ここにバーム [ヤマハッカ類] とヒソップとキジムシロ どれもこれも見事なハーブさ 誰もがご存じの みんな嫌がらないでおくれ この愉快な愉快な呼び声を 有名なロンドン街の呼び声を
--	---

“Here’s penny royal and marygolds Come buy my nettle-tops Here’s water-cresses and scurvy-grass Come buy my sage of virtue ho! Come buy my wormwood and mugwort Here’s all fine herbs of every sort Here’s southern wood that’s very good Dandelion and houseleek Here’s dragon’s-tongue and wood sorrel With bear’s-foot and horehound Let none despise the merry merry cries Of Famous London Town.	ここにメグサハッカとキンセンカ 来て買っておくれよ 僕のイラクサの葉っぱ ここにクレソンとトモシリソウ 来て買っておくれよ 美德の印、僕のセージさ！ 来て買っておくれよ 僕のニガヨモギとヨモギ ここにあらゆる種類の見事なハーブ ここにキダチヨモギ すごくいい奴 タンポポとヤネバンダイソウ ここにリュウノシタとコミヤマカタバミ クリスマスローズとニガハッカも一緒に みんな嫌がらないでおくれ この愉快な愉快な呼び声を 有名なロンドン街の呼び声を
--	---

“Here’s green coleworts and brocoli Come buy my radishes Here’s fine savorys and ripe hautboys Come buy my young green hasitings ho! * Come buy my beans right Windsor beans	ここに緑のキャベツとブロッコリー 来て買っておくれよ 僕のハツカダイコン ここに見事なセイボリーと熟れたシロバナヘイチゴ 来て買っておくれよ 僕の柔らかい緑のヘイスティング豆さ！* 来て買っておくれよ 僕の豆、正真正銘ウィンザーの豆
--	--

Two pence a bunch young carrots ho!	一束 2 ペンス 柔らかいニンジンさ！
Here's fine nosegays ripe strawberries	ここに見事な香りの熟れたイチゴ
With ready pickled salad also	ピクルスにしたサラダも一緒に
Here's collyflowers and asparagus	ここにカリフラワーとアスパラガス
New prunes twopence a pound	初物のプルーン 1 ポンドで 2 ペンスだよ
Let none despise the merry merry cries	みんな嫌がらないでくれ この愉快的な愉快的呼び声を
Of Famous London Town.	有名なロンドン街の呼び声を

“Here's cucumbers spinage and frinch beans	ここにキュウリ、ホウレンソウとサヤインゲン
Come buy my sallery	来て買っておくれよ 僕のセロリ
Here's parsnips and fine leek	ここにパースニップと見事なネギ
Come buy my potatoes ho!	来て買っておくれよ 僕のジャガイモさ！
Come buy my plumbs and fine ripe plumbs	来て買っておくれよ 僕のプラム、見事な熟れたプラム
A goat a pound ripe filberts ho!	1 グロートで 1 ポンドの熟れたヘーゼルナッツさ！
Here's corn-poppies and mulberries	ここにヒナゲシとクワの実
Goose berries and currants also	グーズベリーとカラントもあわせて
Fine nectarines peaches and apricots	見事なネクタリン、桃そしてアプリコット
New rice two pence a pound	新米は 1 ポンドで 2 ペンスだよ
Let none despise the merry merry cries	みんな嫌がらないでくれ この愉快的な愉快的呼び声を
Of Famous London Town.”	有名なロンドン街の呼び声を

*ヘイスティング豆 142 ページ参照 [本訳 142 ページ]

[訳注] ナツシロギクは *fatherfew* の学名 *Pyrethrum Partheium*。feverfew の異綴り、解熱効果のある伝統的薬用ハーブ。セロリ sallery は celery、サヤインゲン frinch beans は french beans の異綴り。

*バティ・ラングリー『ガーデニングの新原則』1728年 Batty Langley, *New Principles of Gardening*

†『現代のガーデニングに関する随想』ホーラス・ウォルポール著 1785年 *Essay on Modern Gardening*

ここにケントが追い求めた理想が示されている。自然を模倣すること、それが新しい主義の目標であった：－「自然は直線を嫌う」、これがケントの基本的な原則の一つであり、したがって、並木道と真っすぐな園路と生垣は目障りであり、この嫌悪の感情は他の風景式造園家によっても共有された。バティ・ラングリー [Batty Langley, 1696～1751年 庭園デザイナー] は「モスクワからペテルブルグ方面へと通じる有名なビスタや、あるいはインドのアグラからラホール方面へのビスタなどに沿って進むのを強いられることは、ガレー船を漕ぐのを強いられると同じくらい嫌なことであったに違いない。それは D_ 卿の高く刈り込まれたイチイの生垣の間を、閉じ込められたまま、たったの数分でも歩く時に感じる気持ちのようなものではないかと私は想像した」と書いた。これは新しい主義の造園家たちが、彼らの先人たちの仕事に対する軽蔑の気持ちを表現するための誇張された言葉遣いの見本の一例に過ぎない。

自然を模倣しようとするこの情熱は、当時広まりつつあった一般的な反応の一部であり、これはガーデニングの世界だけではなく、文学やファッションの世界でも見られた。極端に人工的なフランス趣味は長い間、ヨーロッパ文明の進展をリードしてきたが、今やその誇張された様式主義の足枷を振りほどこうとする動きが生まれた。当時の詩人たちもこの自然主義の先駆者であった。ダイアー [Dyer, 1699～1757年 ウェールズ人の詩人・画家・聖職者] はその詩「グロンガーヒル」“Grongar Hill”において、またトムソンは『季節』*Seasons* において、当時の造園家や建築家とその景観計画の中で真似しようと追い求めていた情景というものを呼び覚ましてくれた。その考え方は、詩人が称賛し、クロード [Claude Lorrain, 1600頃～82年 フランスの風景画家] がキャンバスの上で永遠の生命を与えた景観というものを創り出すことであった。しかしながら、自然美の愛好者たちは間もなく規則や理論により絶望的なまでに型にはめられてしまい、それはかつて整形形式を重視する流派のデザイナーたちと同様な状態になってしまった。彼らが設計した庭園は見る人に型にはまった印象を与えるように計画された：－詩人のシェンストーン [William Shenstone, 1714～63年 詩人・風景式庭園の初期実務家] は「庭園の情景は崇高さ、美しさ、哀愁やもの悲しさに多分分割されているのであろう」と書き*、さらに続けて「技術は自然の領域ではその足場を見つけることを決して許されない」とする。にもかかわらず、これらの造園家たちはあらゆる人為を駆使して見る人に押し付け、またその景観というものを真実の姿とはかけ離れたものへと作り変えているのである。

*『ガーデニングに関する断想』ウィリアム・シェンストーン *Unconnected Thoughts on Gardening*

シェンストーン自身も並木道が実際の距離よりも長く見せられるかもしれない方法について提案している。「並木道の手前側を広くしてそこにイチイの木を植える、そしてモミの木、

そして段々と小さく消えていくような木を、最後のセイヨウタチヤナギ almond willow [Salix triandra] かコリヤナギ類 silver osier のところまで植える；そうすると大変驚くほどの目の錯覚が生まれる」。リザーズにある彼自身の庭園はこの「ガーデニングの技術」を実行するすべての人々によりこの様式の完全な手本と考えられた。そこには湖があり、小川があり、カスケードがあり、そのことをジョージ・メイソン [George Mason, 1735~1806 年 政治家・書籍収集家・大地主] は「生きている噴水」と記したが、これらのものは「完璧さの極みへと達した」と言っている。これらの小川の一つを見下ろす腰掛には、小川を称える詩が刻み込まれていて、それは次のように終わる：－

“Flow, garden stream, nor let the vain	流れよ、庭園の小川よ、虚栄をして
Thy small unsullied stores disdain:－	汝の小さきけがれなき宝を辱めさせるな：－
Nor let the pensive sage repine	物思いに沈む賢人をして悲しませるな
Whose latent course resembles thine.”	その隠れた道筋は汝がものとそっくりだ

庭園全体を通じて、峡谷の中、あるいは曲がりくねった園路の脇には、腰掛、洞窟、廃墟や飾り壺が予期せぬ場所に現れ、そこにはどこかの友人に宛てた言葉が刻まれていたり、何かしら自然の美しさを称えた歌が歌われていた。

新機軸の中で最も突出していたのが装飾的に広がる水面の扱いの変更に関するものであった。「石の水盤」、大理石の噴水、直線運河は捨て去られるか、あるいはミニチュアの滝、曲がりくねった小川、人造湖へと作り変えられた。コールブルック近くのリスキンズのバサースト卿は*、庭園の中に曲がりくねった小川を作った最初の人物であるが、その効果はあまりにも尋常ではなかったので、友人のスタフォード卿はそれが意図的に作られたものとは信じられず、経費節約のためかと思い、「小川の流れを真っすぐにしたら本当のところどれくらい余計にかかるのか」と尋ねたくらいだった。

*『ガーデニングの進歩』バリントン著 『考古学』第5巻 *Progress of Gardening*, By Barrington

ちょうどこの頃キャロライン女王 [1683~1737 年] が「ハイドパークの一群の池をつなげて現在サーペンタイン川と呼ばれる一つの池を作った」。簡潔さを追及して行われた、これらの改革と呼ばれるものが結果的にはより硬直的、様式ばったものとなってしまった事例が多数見られたが、これはそれらのほんの一例に過ぎなかったのである。中国式ガーデニングがこのデザイン流派に与えた影響を考えれば、これは何ら不思議なことではなかった。この新しい部類の造園家の一人であるサー・ウィリアム・チェインバーズ [William Chambers, 1723~96 年 スウェーデン生まれの建築家] は、若い頃中国に旅行しそこから『東洋のガーデニングに関する論文集』 *Dissertations on Oriental Gardening* と題する本で展開することになるアイデアを持ち帰ってきた。彼が設計したキューのバゴダはこの一時的に流行したよく知られた記念碑である。中国人作家リエン・チェンは自らの手で中国のガーデ

ニングの基本原則を書き留めている†：－「庭園設計の手法というものは、その地域の自然を模倣することで本物と思わせてしまうような方法で、外観の楽しさ、成長の豊かさ、木陰、寂しさ、そして静けさを組み合わせる工夫の中に宿っている」。イングリッシュガーデンと中国の庭園とが似ているかもしれないと思ひ起こしながら、オリバー・ゴールドスミス [Oliver Goldsmith, 1728～74年 アイルランドの小説家・劇作家・詩人] は「イングランドではガーデニングの手法において中国と同じ完成度には未だ達していないが、最近になって中国の真似をし始めた。今や昔に比べると自然に対し多くの配慮が払われ尊重されるようになってきている：木はあらん限りの勢いで自由に伸びることができる；－小川はもともとの流れから無理やり曲げられることはなく谷間を好きな方に流れることができる：花は型どおりのパルテールの場所や短く刈られ光り輝く野原に自由に咲いている」と書いた。

†『庭園賛歌』シーヴキング著 17 ページ *Praise of Gardens. By Siveking*

バティ・ラングリーは、何人かの風景式造園家に対して道案内となる基本原則を示した主唱者の一人であった。その主なものは28の原則として示され、そのいくつかは次のとおりである：－「建物の堂々たる正面は広々と優雅な芝生に開かれていること、そこには彫像が飾られ、その両端はさえぎるもののない茂みへとつながっていること」「園路を遠くまで延長できない場合、その終点は、森であったり林、ゆがんだ形の岩、奇妙な崖、山、古い廃墟、立派な建物などであること」「何もない原っぱやパルテールのいかなる部分も決まりきった常緑とはしないこと」「どの芝生やパルテールにもボーダー花壇を作ったり渦巻き模様の刈込みをしないこと」「庭園というものはすべからく堂々と、美しく、そして自然であること」「木陰の園路の樹木や茂みはすべからくスイートブライアー、白ジャスミン、スイカズラと一緒に植えられなければならない。そして木の根元には矮性のアラセイトウ Dwarf stock、マガリバナ Candy tuft、ナデシコの仲間です小さく輪を作って囲むこと」、「今まで自然の丘や谷間がない場合には丘や谷間を人工的に作ること」、「園路が交わるところには彫像で飾ること」、そして「細い小川、鳥籠、洞窟、カスケード、岩、廃墟、窪み、運河、養魚池」を正しく作るための同様の多くの原則が示されている。彼はまたそれぞれの場所に最もふさわしい彫像はどのようなものであるかの長いリストも示している：－果樹園には果樹の女神ポモナ、静寂の神ハルポクラテスは茂みにとこである。「彫像を使うことはガーデニングにおいて危険な試みである、成功することは不可能ではないとは言えるが：ウィルトシャー州にあるスタワーヘッド（サー・リチャード・ホアーの庭園）の川の神の位置は何と不思議なほど巧みであろうか！・・・私はハグリーにある彫像を覚えており（*リトルトン卿による設計）、それは茂みの小径越しに見ることを思い描くのだが・・・ただその台座が隠れている方がよいのにと考えた」とジョージ・メイソンは書いている。これらの彫像、壺、記念碑は、それらを初めて見つけた時に、見る者に特別の印象を伝えるために配置されていた。シェンストーンは一つの壺により醸し出される感覚について語っており、その結論として「荘厳さというものが多分その狙いであり、その周りの

状況というものがそれをさらに助けているのだろう」と述べた。「それらは大きくて素朴なほどより荘厳となる」。木立、湖あるいは手が入っていない場所は「崇高で」、「美しく」、「絵のようで」、「荘厳で」、「堂々としており」、「威厳があり」、「優雅で」なければならなかった。森は「ざっくりと重厚に」植栽が施され、「茂みは美しく」、洞穴すなわち洞窟は「ゾッとするような恐怖や身がすくむような恐怖」を起こさせるものとされた。「遠くの教会の偽物の尖塔とか本物ではない橋、それは水が途切れることを装うために」（*ホーラス・ウォルポール『現代のガーデニングに関する随想』）が「景観を改善する」ために持ち込まれた。これらのデザイナーたちは形だけでなく色彩についても注意を払い、「荘厳な茂み」には暗い色の葉をした木を植えなければならず、そして景観への効果を考えて所々に明るい色のタッチが加えられた。「地味な色合いの物体が思わぬ拍子に太陽の光を浴びて金色に輝く、それはまるで深刻な表情が微笑みで突然明るく変わるように、白く輝く物体は道化師が永遠ににっこりと笑うように」（+サー・ユーヴドール・プライス『絵画的な美しさについて』 Sir Uvedale Price, *On the Picturesque*）と、この話題について権威ある一人の人物が語った。このような野心的なアイデアはこれらの庭園デザイナーたちにインスピレーションを与えた一方、自然の美しさを再現しようと努力するうちに、これ以上想像できないほどの人工的なシステムに陥ってしまったのである。ウィリアム・メイソン [William Mason, 1724~97年 詩人・聖職者・造園家] の詩、「神々しい簡潔さ」を目指す「イングリッシュガーデン」は、これらの「改革者たち」を導く精神が特徴であり、そのことについてサー・ウォルター・スコット [Walter Scott, 1771~1832年 スコットランドの詩人・小説家・歴史家] はそれは「簡潔さではなく簡潔に見えるように苦勞する情熱である」と言った。

多くの場所がケントによるこの新しい計画に基づき設計された。イーシャーの庭園、

「そこはケントと自然がペラムの愛を得ようと張り合ったところ」

そしてクレアモントは彼の最高の作品と考えられた；またカールトンハウスはプリンスオブウェールズのために彼が設計したものであった。ウォルポールは「ケントのすべての仕事の中で最も魅力的であり」、最も「優雅で昔風」なのはオックスフォードシャー州のロウシャムであると考えていた。ケントは馬車製作者の徒弟として働き始めた；友人の助けを借りてイタリアに行き、絵画を勉強した。もっとも、この芸術については一度も良い結果を得ることはなかったが、建築家としては絵画よりはうまくいき、庭園用に寺院や廃墟を設計した。彼の支援者であるバーリントン卿 [Burlington, 1694~1753年 建築家・政治家] の助力により、女王の目に留まり王室御用達の建築家、次いで画家に任命された。彼はそのアイデアの発案者として、また風景式庭園流派の創始者として彼に追随した庭園デザイナー全員から尊敬された。ある時には、自然のままでありたいという気持ちから、「その情景をさらに本当らしく見せるために」ケンジントンガーデンに枯れた木を植えるということまでやってみたことがある。もっともウォルポールは「こんな極端なことをすればすぐ

に笑われる」と言った。フィリップ・サウスコウト [Philip Southcote, 1698~1758 年 軍人・風景式造園家] はケントの「理想郷の情景が自分自身の領域をよくしようという気持ちを高めた」と最初に考えた人々の一人であったようで、「(サウスコウトがデザインした) ウーバンファームの優雅さは並外れていたのが欠点ですら印象的であった」*。

*ジョージ・メイソン『ガーデニングにおけるデザインに関する随想』*Essay on Design in Gardening*
チャーティー近くのウーバンファームは 1829 年時点でもはや存在していなかった。-G.W.ジョンソン『イングリッシュガーデニングの歴史』

サリー州のペインズヒルは、ほぼ時を同じくしてチャールズ・ハミルトン [Charles Hamilton, 1704~86 年 政治家] により始められたが、それは「この流行の完璧な実例」であった(†ウォルポール)。リトルトン卿が設計したハグリーは同じスタイルのもう一つの庭園、あるいは「装飾的な農場」“ferme ornée”であり、「木陰の新しいモデルづくり、そして細い小川からの解放」を称賛する同時代の著作家たちによりしばしば言及がなされた(‡ジョージ・メイソン)。この場所に関して多くの人々から寄せられた溢れんばかりの誉め言葉にもかかわらず、ギルピン [William Gilpin, 1724~1804 年 聖職者・作家] §による評価は「確かにこれらの広々とした庭園には美しい眺めが多く見られる」が、「とは言え我われは同じような敷地は容易に考え出すことができる・・・もっと全体を高貴なものに創造できるように組み合わせて」というものであった。ウースターシャー州のハグリーはリザーズからほんの近くの距離に位置しており、既に述べたように、このタイプの庭園としては多分一番称賛されたものであった。詩人である所有者が生きている間にこの場所を見たゴルドスミスをはじめとした人々は、シェンストンの死後ほんの数年のうちに、この庭園を損なうような変化や荒廃が進んだことを嘆いた。ライト [Wright, 1711~86 年 天文学者・数学者・建築家・庭園デザイナー] はこの風景式流派のもう一人別のデザイナーであり、ケントの後継者であった。彼は計画を作りデザインのスケッチは描いたが、自分自身では実際の工事の監督はしなかった。

§『絵画的美しさについての 1772 年の考察、特に山と湖について』ウィリアム・ギルピン著
Observations on Picturesque Beauty made in 1772, Particularly the Mountains and Lakes By Wm. Gilpin

風景式庭園との関係で最も高くそびえ立つ名前と言えばブラウン [Lancelot Brown, 1715~83 年 造園家] の名前である。彼はどのような場所であっても、改良することを頼まれたり、新たに設計することを頼まれたりした時の口癖で、ここは「とても素晴らしい潜在的な可能性(ケイパビリティ)」があると言ったので、「ケイパビリティ・ブラウン」“Capability Brown”という名前でも有名になった。一時期彼は庭園デザイナーの中で一番人気があった。彼は 1715 年ノーサンバランドに生まれ、キッチンガーデンの庭師として、最初はウッドストック近くの小さな所で、次いでストウで仕事を始めた。そしてその地位のまま 1750 年までコバム卿のところに留まり、庭園のデザインなるものに挑戦するのは、グラフトン公爵

[Grafton, 1735~1811 年 首相] の庭師頭になってウェークフィールドロッジの湖を計画、施工してからであった。この仕事により世間に注目されるようになり、そしてコバム卿の影響によりハンプトンコート王室庭園師に任命され、「そこに 1796 年にあの名高いブドウを植えたのは彼であった」(*ロンドン『ガーデニング全書』*Encyclopædia of Gardening* ハンプトンコートのブドウの親株はエデン氏により 1758 年、エセックスのヴァレンタインハウスに植えられたブラックハンブルグ Black Hamburg であった。フィリップス『果樹』1820 年 *Pomarium*)

次に彼はブレナムで雇われ、そこで作った湖の設計手法により彼の名声が確立し、そのうちすぐに、敷地を変えたいと思っている人、あるいは新しく庭園を造りたいと思っている人はみんなブラウンに仕事を頼んだ。彼はクルーム、ルートン、トレンタム、ニューナム、バーリー、その他多くの場所を設計し、国内の庭園の半分に何らかの形で手を加えた。彼は売れっ子となり、イングランドで庭園について何か考えている人はほとんど誰でもが彼に相談した。もしブラウンが新しい風景や庭園を造ることだけに専念していたなら、後世の人たちは彼に対する恨みというものをあれ程までには抱くことはできなかったであろう。しかし実際は、彼の成し遂げたデザインを研究する時、偏見なしに彼の仕事を見ることは困難であった。と言うのも彼の創り出した成果が称えられる前に、彼が一掃してしまった美しさを嘆く気持ちで一杯になってしまうからである。

“Improvement too, the idol of the age	改良もまた、時代のアイドル
Is fed with many a victim. Lo he comes!	多くの犠牲のもとに育てられる。それ、彼が来るぞ!
The omnipotent <i>magician</i> , Brown, appears!	全能の魔術師、ブラウンが現れる!
Down falls the venerable pile, the abode	由緒ある大建築群は引き倒され、それは住まい
Of our forefathers. . . .	ご先祖様の. . . .
He speaks – The lake in front becomes a lawn;	彼は言う – 目の前の湖は芝生になる;
Woods vanish, hills subside, and valleys rise.	森は消え、丘は沈み、そして谷は高くなる
And streams, as if created for his use	そして小川は、まるで彼が利用するために作られ
Pursue the track of his directing wand.”	彼の杖が示す先へと流れる
COWPER, <i>The Garden</i>	クーパー 『庭園』

イングランド各地の古くからの庭園はブラウンによる変革の影響を被る前に消え去っていたが、幸運なことに何年も経たないうちに反動が起き、そうでなければ庭園が一つでも生き残ったかどうか疑わしく思える。ユーヴドール・プライス卿 (*サー・U. プライス『絵画的美しさについて』) は、見事な古い並木道を通して「15世紀初めに建てられた由緒ある城のような大邸宅」へアプローチする喜びを語っている。「私は大いに傷ついた」と彼は続ける。「その主人から聞いたことには、私はこの並木道とそれが醸し出すロマンチックな

雰囲気と別れを告げるであろう。なぜなら死刑執行令状にサインがされてしまったからと言うのである。これらの由緒ある並木道の多くが破壊されるということは、現在のような過剰な直線をもたらすおぞましさが最期を迎えるということである。これらの木の何本かを助けたとしても、十分な効果があるとは思えない；それらは昔の道がここにあったといつも思い出させ、その場所は消えてしまった並木道の亡霊が彷徨うことになる……チェシャーにある紳士の家にはオークの並木道がある。ブラウン氏は徹底的にそれを非難したが、それは今、持ち主が感じた自然な感覚の方が、改良を職業とする人間による狭量で機械的な考え方よりも勝っていた、その高貴な記念碑として立っている」。少数の人々があのパワー全開のブラウンに抵抗するだけの強い心を持っていたことに感謝の気持ちで一杯である。

水の扱いはブラウンの長所と考えられていた。彼が設計した水景の好例がアシュビー城のものである（＋ノーザンプトン侯爵所有）。そこは今は「時の経過により改善されている」ものの、ブラウンに対する最も厳しい批判者であっても、それを見て喜ぶこと間違いないものである。しかし、ここにおいてもブラウンの手により、改善とともに破壊が行われており、1699年頃植えられた並木道の1本の一部を構成していた樹木が2列、彼の命令により切り倒された。彼は自分自身が作り出した川や湖にぞっこん惚れ込んでしまった。そんなある仕事を完成した時、テムズ川を凌ぐほどの成功を成し遂げたと思った彼は興奮して叫んだと言われている：－「テムズよ！テムズよ！お前は私を決して許さないであろう！」。



[図 12-1] アシュビー城

ハンプシャー州のハックウッドパーク（*ボルトン卿の居所）で、ブラウンは様々な変更を加え、そのことを数年後にこう語った：－「相当規模にわたる改造」が、特に館の南面に対して実行された。そこはかつては「古いスタイルの、一続きの階段で上ってくるテラスがあって、台座に乗った彫像で飾られ、大きなため池、斜めの塁壁などがある」というような庭園であった；館からの眺めもまた、長くて整形式の並木道に沿った高いイチイの生垣で遮られていた。自然は今その権利を取り戻した；並木道は取り壊され、散策路や草地へと変わり、遠くの景色も見えるようになった。これらの風景式造園家にとっては、並木道やイチイの垣根はそれ自体美しいオブジェとは考えもしなかったようである。それはあたかもノーフォークの娘がスイスに行って、山があつて景色が見えない！と不満を言っているのとほとんど同じである。ブラウンが提案したもう一つの見境なく荒し回る計画は幸運にも実行に移されなかった。彼はポウイス城が建っている岩の部分、そこは最初のテラス、すなわち「日時計のテラス」となっている部分の岩を吹き飛ばしそこを平らな芝生にするという提案をした。この変更がもし実行されたならば、素敵な庭園の残りの部分とまったく調和のとれないものとなっていたであろう。この庭園はウィリアムとメアリーの時代に、この屋敷を数年間所有していたオランダ人のロッシュホフォルト卿により造られたものであった。ブラウンがバーリーで行った改造というものも彼の典型的な手法であった。彼は

壁と生垣を取り払い、館の脇の斜面に作られた階段状のキッチンガーデンを一掃し、そしてその場所に木を植えた；彼自身が創り出したこの木立の丘の向こう側、昔の整形式庭園があった場所の正面に、彼は湖を作った。「この由緒ある建物の周辺のおしゃれな配置、そこの土地にブラウン氏が手をつけたのだが、それがどれほどその様式と昔からの付属物と調和していたか、私があえて言うことはしない」とギルピンが書いたのは、ブラウンの仕事が完成した数年後であった。「疑問に思うのは」と彼は続けて「並木道やパルテールの昔の装飾は飾りのスタイルとして最もふさわしいものではなかったのか。しかしながら、これはなかなか良い疑問であり、どちらの側からも成立しうる議論を数多く呼び起こすものであったであろう」。



[図 12-2] バーリー ブラウンのデザインによる寺院

ギルピンはロッシュ大修道院を訪問した際、そこでブラウンが実施した改造のご都合主義的な手法についても疑問を呈している。言われているところによると、ブラウン自身は線を引くことはできなかつたし、芸術的な訓練や歴史的な関心、あるいは彼が改良しようとしている情景の自然美を理解するに足るだけの教育も一切受けていなかった。したがって、よりふさわしい風景を創り出す努力の過程で、彼が何回も見事に失敗したことは驚くに当たらない。「多くの現代の場所について」「彼は装飾を加え美化した。しかし、廃墟を活かした新しいアイデアはあったものの、そのことについて彼は十分に考慮したのか疑問

に思う。ブラウンはロートン尖塔を臨む溪谷の一つを仕上げた：それを湖とともに浮かべ、大変美しい情景へと作り上げた。しかしながら、それは大修道院の廃墟と調和する付属物としてはあまりにも荘厳であり、またあまりにも人工的であると危惧した」とギルピンは書いた*。

*ギルピン『絵画的美しさについての考察、1776年、特にスコットランドのハイランドについて』*Obs. on Picturesque Beauty, Particularly the Highlands of Scotland.*

彼は昔の大修道院の周りの土地をみんな平らにしてしまった。「小綺麗なボウリング用グリーン」の中に建っている壁と柱は残したものの、大きすぎる廃墟のかけらやマウンドは残らず取り除いたが、これらは建物の昔の壁面線を示していたものであった。そして川にダムを作り、滝の効果を出すために大修道院から石を取ってくることまでやった。ギルピンは最大の皮肉を込めて「もしブラウン氏がさらに一歩踏み込んで、廃墟を引き倒し、そして優雅な大邸宅を建てることになったら、すべてが正しいということになるであろう」と述べた。廃墟に関しブラウンが施した細工のいくつかは、最近になって取り除かれ、可能な限り昔の状態に復元された。

以下はブラウンとスカーブロー卿 [Scarborough, 1725~82年] との間で、これらの改造に当たったの合意事項である（+スカーブロー伯爵のご厚意に基づく許可により、サンドベックの写本原本からコピーしたもの）：-

スカーブロー卿と「ケイバビリティ・ブラウン」との間の合意 1774年：-

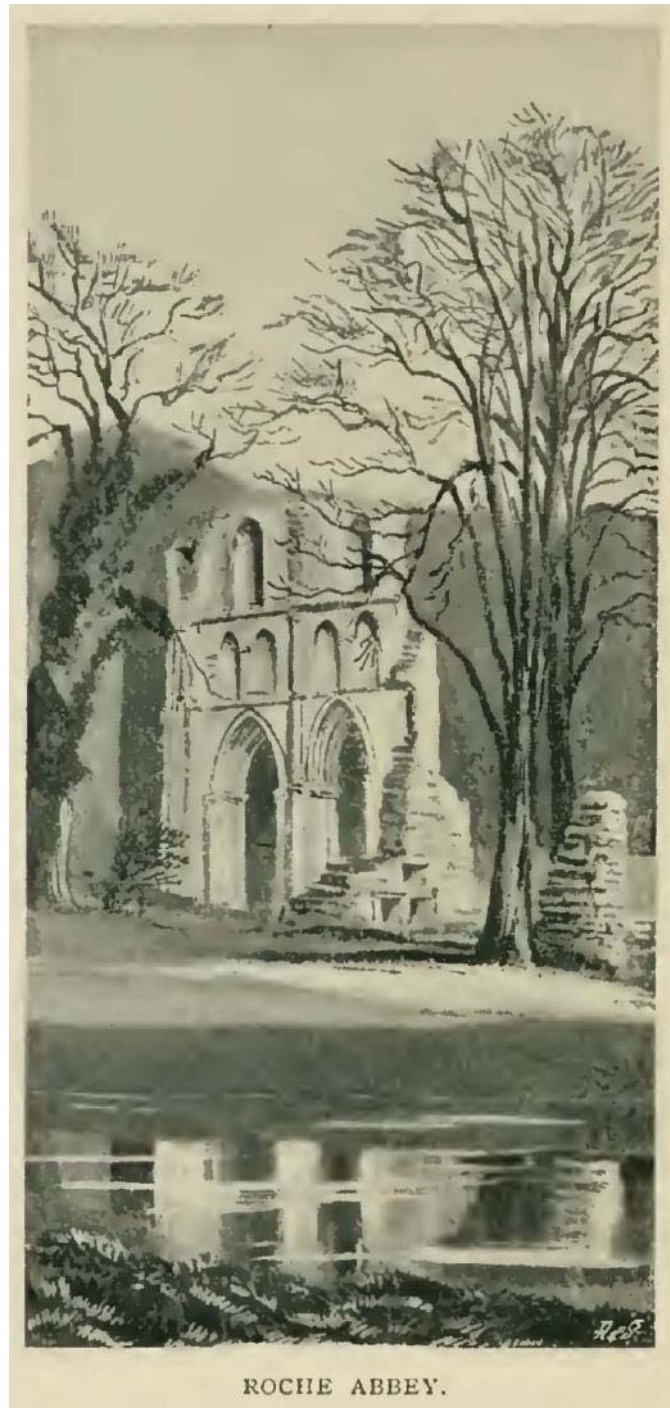
1774年9月12日

上記日付けにてスカーブロー伯爵を一方の当事者とし、ランスロット・ブラウンをもう片方の当事者として、ヨーク地方サンドベックにおいて実行されるべき仕事に関する条項について同意され、結ばれた合意事項（すなわち）：

第1条 狩猟地と農場を分離する隠れ垣根を完成すること、およびその中に壁を建設すること、隠れ垣根の下部を乾燥状態に置くため適切な排水をあわせて作ること

第2条 芝生地にあるすべての古い池を潰すこと、および地面を平らにしてすべての土地の排水をすること

第3条 上記隠れ垣根と第2条に書かれた古い運河の間のすべての土地の排水と地面を平らにすること。本条に書かれている空間における装飾のために必要と考えられる木はいかなるものであっても植えること、そして排水、地面を平らにしたりは隠れ垣根を作ることにより芝生が消失したりは傷んだところはいかなる場所であっても草の種およびシロツメクサ Dutch Clover を敷地全体に蒔くこと



[図 12-3] ロッシュ 大修道院

第 4 条 馬小屋の使用のための良好な池を作り維持すること

第 5 条 ロッシュ大修道院のすべての溪谷のあらゆる部分を完成すること、スカーブロー卿とともに（詩人の感覚と画家の目でもって）決定したアイデアに従って、ハンマー池の端に始まりロートン（別名モーンのロートン）に向かう溪谷に沿って下り：スカーブロー

一卿の土地が続く限り、川を延長し溪谷を整えること、それは現在の農家の横を通り、新しい農場の境界として定めた分岐点に至るところまでとする。注意点：森の中の散歩道はこの記載に含まれ、建物以外のすべての事柄も同様である。当事者ランスロット・ブラウンは彼自身、彼の相続人、執行人および管理人が彼あるいは彼らの能力の最善の限りを尽くして、本日から 1777 年 12 月までの間、上記 5 条に書かれていることを実行することあるいは実行されるようにすることを固く約束する。上記 5 条に書かれていることが適切に実行された場合、スカーブロー伯爵は彼自身、彼の相続人、管理人および執行人が同意された支払い時期に 2700 ポンドをイングランドの適法通貨にて支払うことあるいは支払われるようにすること、およびこの合意に先立ってサンドベックの貴族のためにブラウンが作った計画および手間を勘案しおよびその対価として 300 ポンドを支払うことあるいは支払われるようにすることを固く約束する。スカーブロー卿は粗びき木材、4 頭の使える馬、荷車、そのための馬具、手押し車および厚板を、樹木および低木とあわせて調達すること。

支払い時期は

1775 年 6 月	800 ポンド
1776 年 2 月	400
同 6 月	400
1777 年 2 月	600
仕事の完成時に	800

3000 ポンド

(署名) スカーブロー
ランスロット・ブラウン

注意深くデザインされよく管理されてきた昔の庭園に代えて、ブラウンは硬直的で本物らしくない「自然風景」に置き換えたが、それに取り囲まれた堂々とした館のいくつかは物憂い眺めを醸し出した。そのことはナイト [Knight, 1751~1824 年 古典学者・考古学者・政治家] により次のように描かれている*：－

*「風景」The Landscape、第 3 巻中の教訓的な詩、ユーヴドール・ブライス宛て R. P. ナイト著 第 2 版 1795 年

「しばしば独りぼつんと邸宅らしきものが建っているのを見た時
改良者のみじめな手から離れたばかりで
刈り込まれた芝生の真ん中に、それは遠くその周囲に這い回る
一つの永遠の起伏に富んだ土地の広がりの中で；
そして点在する低木の茂み、それはお互いにうなずきながら
それぞれがぎこちなく自分の正式な兄弟に手を振っている：

大きく広がる情景に飽きて、こんなにも退屈でからっぽで
神に対し心から私は祈りを捧げた；
再び苔むしたテラスを高くし、
そして迷宮の悩ましい迷路を押し広げる；
どんな形にもできるイチイを同じ高さに元に戻し
そして昔の並木道をもう一度植える。
いくつかの特徴はそれから、少なくとも、我われは手に入れるべき
この平坦で面白味のない波打つ野原に印をつけるために：
いろいろな色合いや形がいくつか入って来るであろう
この画一的で、永遠の緑を切り開くために」

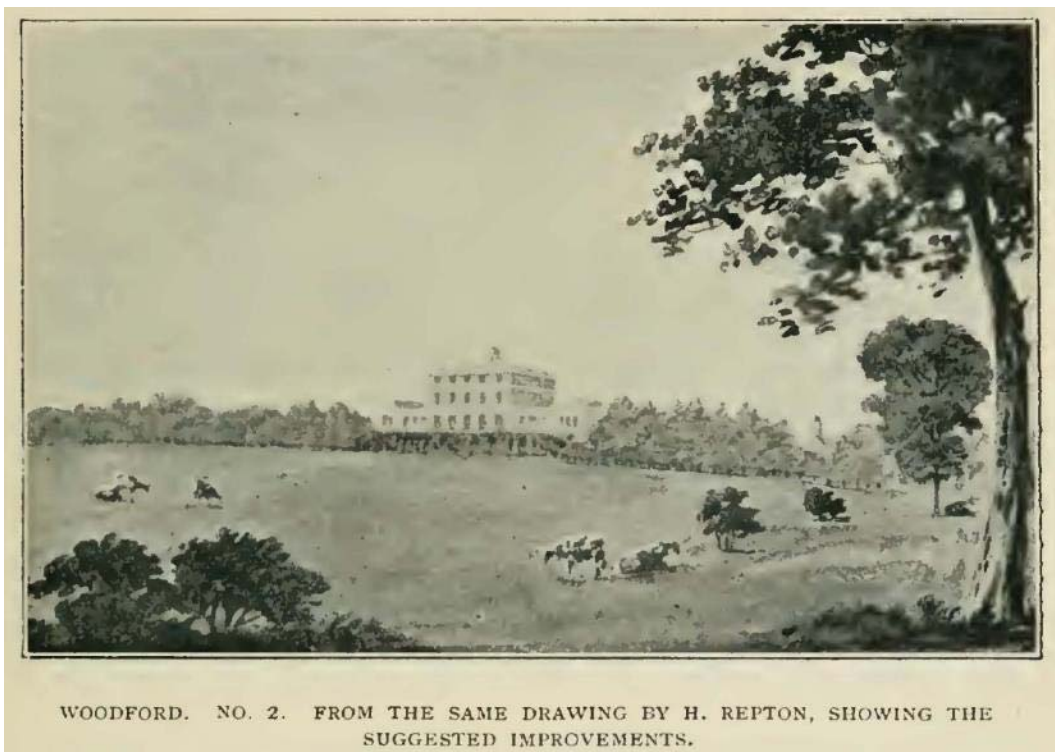
ブラウンはギルピン、プライス、ナイト、メイソンによって激しく批判されたが、信奉者や模倣する者もたくさんいた。その中で一番よく知られているのはレプトン [Humphrey Repton, 1752~1818年造園家] である。彼はブラウンの仕事の崇拜者であり、同じスタイルでデザインの仕事に取り組んだ。しかしながら人々は今やブラウンの失敗というものに気がつき、また昔の場所や歴史的な遺跡を彼が破壊したことを反省し始めていたので、レプトンはブラウンがやったような全部一変させてしまうような改造をあえて提案することはほとんどできなかった。レプトンはブラウンに批判的なことを書く人々とは表では対峙したが、批判者の考え方は明らかに彼の判断に影響を与えた。彼は何か付け加える前に、ある場所で見つけたものすべてを常には変えようとはしなかった；また何から何まで「風景式」にこだわることはしなかった。彼は次のような考えをもち続けた「フラワーガーデンはその場所の全体的な情景から切り離された別個の対象であるべきである；それが大きかろうと小さかろうと、多様性のあるものか整形式であるかにかかわらず、野ウサギや小動物たちから内側のフェンスで保護されるべきである；この囲われた中では、あらゆる種類の珍しい植物の栽培が奨励されるべきであり、植物の分類ごとに土壌や日照、風通しなどの生育条件が整えられなければならない。アメリカの植物には湿地花壇が用意されなければならない：水生植物の中にはとてもきれいなものもあるが、水面あるいは水際で栽培しなければならない。数多くの種類の岩生植物にはごつごつした石の花壇を用意しなければならないが、土から自然にできた石のように見せかけたものはいけない；ただし、特に、匍匐性植物の仲間は、そのように仕向けて技術的に支えてやれば、自分たちで自然に優雅な花綱飾りを作るので、そのための棒とか輪がなければならない」(*レプトン『風景式庭園に関する観察』1803年 *Obs. on Landscape Gardening*)。これはフラワーガーデンに関するレプトンの考え方であるが、これはデザインのほんの小さな一部分に過ぎず、そしてそれが存在すること自体で彼は弁明をしなければならなかったようである。彼は、花のための小さな整形式庭園を時々デザインしたとは言え、「無用の長物と化した庭園を鹿や羊のために、それらが本来あるべき姿に何エーカーも修復した」と自慢している。ヘーウェルグリーンジに

ある「オランダ庭園」は彼の提案に基づき造られた（✦写本レプトンの「レッドブック」ウィンザー卿所有）。この庭園は半円状で、刈り込まれたシュージャ Thuja [ヒノキ科クロベ属 ニオイヒバやコノテガシワ等] の生垣で囲まれており、直線部分は高い煉瓦の壁となっている。内側の花壇はツゲで縁取られ、花壇の間には細い砂利道があり真ん中はタイル敷きとなっていて、庭園の真ん中には日時計がある。あわせて彼は芝生とロックガーデンのデザインを行い、昔からあるフランス庭園はイチイの刈込み生垣で近づいて行けるが、そこには彼は手を付けなかった。「まったくもって自然の情景と調和が取れていない」（✦写本レプトンの「レッドブック」1793年、ノーサンプトンシャー州ファインドン、マックワース・ドルベン夫人所有）として並木道のことを嫌ったが、時には「大昔の威厳の思い出の類」を大事にした。ファインドンでは牧師の家と教会により景観が「阻害」されており、庭園の壁、麦芽製造所、鳩小屋、さらには村の一部は「取り除かれるべき」と言ったものの、「聖なる道」と呼ばれる並木道は残した。

ある場所をどう改善したらよいか助言を求められた時、レプトンは「レッドブック」“Red Book”と彼自身が呼ぶ本を用意しており、そこには、現在の庭園の計画と眺め、それとそれに対する提案が描かれていた。彼はこれらの「レッドブック」を集めたものを拡張し、彼自身の風景式庭園に関する見解の説明を加えて出版した。これらの見解がいかなるものであったかを理解する一番の早道は、これらの「レッドブック」を研究することであり、その多くが今でもなお出版されていない。以上の説明は、エセックスのウッドフォードの彼の写本「レッドブック」から引用したものである（§コートネー・ワーナー氏所有の写本の原本より複製）。この本の最初のスケッチは当時の館を、地面から眺めたものを表しており、「キッチンガーデンが片方に広がり、もう一方には村がむき出しのまま見える。前者は取り除かれなければならない、後者は木を植えて隠す、という当たり前の改善なので私自らが提案する価値があるというほどのものではない」。2つ目の眺望はこれらのデザインが実現されたならこの場所はこうなるであろうというものである。その他の改造というものは主に館からの眺めをもっと楽しいものにするを目的としており、耕作地に木を植えたり芝を張ったり、「芝地を水際まで広げて水面と一体化させる」というような改造であった。



[図 12-4] ウッドフォード NO.1 H. レプトンの図



[図 12-5] ウッドフォード NO.2 H. レプトンの同じ図
改善の提案を示している

レプトンはブラウンを称賛、激賞するこの流派の最後の人物だった訳ではなく、ほかにも情熱的な言葉で語る人たちはまだいた：－

「自然を称えるために生まれ、自然の仕事は完成する
美しく、崇高で偉大なすべてをもってして
ミューズの女神が一人一人彼のために月桂樹の冠を花輪で包む
そして不滅のブラウンの名声に捧げる」*

*「植栽に関する現在の嗜好の起源と進展」チャールズ・アーウィン子爵卿への書簡－1767年 ギルドホール所蔵写本 “The Rise and Progress of the Present Taste of Planting”

1835年になってもまだデニス [Dennis, 1776?～1846年] は彼のことを偉大な「イングランド風（テイスト）の改良者」と言っている（†『風景式造園家』J. デニス著 1835年 *The Landscape Gardener*）。本書の著者もブラウン自身が誇りに思っていたかもしれないいくつかの変化に対して称賛するところの者である、もし彼の功績が彼が一掃した物量によって評価されるとするならばであるが。セントジェームズパークの改変について「最もうまく並木道を除去した」とブラウンは言ったが、「除去は達成された・・・ものの、その結果、見事なニレの木が途方もないほど破壊されたのであった。確かに、オランダ運河を美しい流れの川に作り変え、土手は内側に曲げられ、その終点の一方は植栽が施された島で、もう一方は半島とした驚くべき創意に対し、これらの改良を企画した者に対してはかなりの功績が認められる」。これはエイトンにより「計画され実行された」。バッキンガム宮殿の敷地は大体この頃、ケンジントンとキューの王室庭園師で、『キューの植物』*Hortus Kewensis* の著者の息子であるウィリアム・エイトンにより設計された。デイヴィスはこの流派のもう一人の造園家であり、同時代の人からは「自分の趣味をかなりの程度誇示」した人物と言われた。特に、ロングリートで彼が担当した改変ではこれが顕著であり、ノーフォードの2つの眺め（284ページ）[本訳269ページ]は整形形式から風景式庭園への変化がどれほど徹底しうるかを示している。このカスケードの池は1716年から1724年の間にエドモンド・プリドーによりスケッチされたものであり、彼はコーンウォールのプリドー出身で、その時ノーフォークに旅行で来ていた。2枚目の眺めは1894年に、なるべく同じ地点に近いところからの眺めとなるように撮影された写真から持ってきたものである。70エーカーの広さの湖は1842年頃に作られ、硬直的な池の痕跡はすべて消え失せてしまっている。初期の風景式の可愛らしい事例としてはロンドンの近くのガナズベリーに見つけることができる*。



[図 12-6] ガナズベリーパーク 庭園の寺院

*レオポルド・ロスチャイルド氏の所有であり、現在ではガラスの中での果樹栽培が大変完璧に行われていることで特に有名である。

元の館はイニゴ・ジョーンズあるいはその弟子のウェブ [Webbe, 1611~72年建築家] により 1663年にサー・ジョン・メイナード [John Maynard, 1604~90年] のために建てられたが、今はなくなってしまった。庭園は主にケントにより 1750年頃設計され、その後、1761年にこの場所を買って大金を庭園に投じたアメリア王女 [1783~1810年] により手が加えられた。彼女によって建てられた壁、寺院のいくつか、水浴びのサマーハウス、そして模造のゴシック廃墟は今もなお残っており、多くの見事な材木用樹木、特にシーダーも残っている。

18世紀末までには風景式庭園はイングランドの国民スタイルと認識され、フランス、イタリア、ドイツの大陸諸国でも真似された。「イングリッシュガーデン」は流行となり、海外においてもイギリス風を称賛し、他の国でも真似するよう勧める本が書かれ*、そして昔からの庭園は取り壊され、新しいスタイルに取って代わられた。しかしながら、大陸においては一点欠けている点があった。それは、これらすべての風景において欠点を補うも

の、すなわち緑の芝生であった。イングランド以外のどの国にも草地がこれほど美しく緑色のところはなく、風景式造園家たちはこの偉大な長所に対し感謝した。

*『イギリス風庭園の手法』ミラノ 1801 年 *Del' Arte dei Giardini Inglesi*, 『イギリス風の庭園の計画』ジャン・ルイ・マンサ コペンハーゲン, 1798 年 *Plan de Jardins dans le gout Anglais* Ob. Folio, &c.

この流派の書き手たちが、自分たちの好みを最初に作った人としてミルトンとベーコンを名指しするのはおかしな話である。彼らの主張によると、ベーコンは彼が理想とする庭園の一節を「自然な野生状態」に充てるとともに、「きれいに刈り込まれた緑の草地」を称賛しているからであり、またミルトンは天国ではこのようだと書いているからだ：－

“Flowers worthy of Paradise, which not nice art 楽園にふさわしい花々を、立派な技術によってではなく
In beds and curious knots, but nature boon 花壇や奇妙な結び目の中の技術ではなく、豊かな自然が
Poured forth profuse on hill, and dale, and plain.”† 丘や谷や野原にとうとうと注ぎ込んだもの†

† *Paradise Lost* – Book IV

† 『失楽園』第 4 巻

にもかかわらず、これらの二人の人物がどれほど風景式造園家の全体的な発想に反していたことであろうか。ベーコンは緑の草地を愛していたとは言え、彼は自分の庭が 1 年を通して毎月花がいっぱい咲いていることを望んでいたから、「庭園が・・・広々とした芝生と調和しないから芝生の品位を下げている」というような考えや、あるいは「フラワーガーデンは館の窓からは決して見えてはならない」などと言われればショックを受けたことであろう。サー・ウォルター・スコットは、風景式庭園に関する魅力的な文章の中で、ミルトンは新しく創造された楽園における自然の美しさを描き出したものの、彼の時代の「端正な庭園」を非難する意図はまったくなかったと指摘している（※『四季報』*Quarterly* 第 37 巻 1828 年および『批評』第 5 巻 *Criticism*）。スコットは昔の庭園をあんなにたくさん破壊してしまった大きな間違いというものをよく理解していた。彼はエリザベス朝の庭園が館とどれほど完璧に調和していたかを見ており、「怪物の形にイチイを剪定したオランダ人のつまらない模倣」について擁護することはできなかったが、「ロンドンとワイズ、そしてオランダ風に土地を設計した人々の仕事に関しては、完全に破壊するよりは修正を加えた方がよほどましである」庭園が存在することについては認識していた。彼は見事なテラス、一続きの階段、手すり、イタリア風の庭園の壺、フランスの噴水や水の仕掛けを称えた。

サー・ユーヴェル・プライスは合理的な風景式ガーデニングのチャンピオンであったが、彼が認めたのは「噴水」“jet d'eau”だけであった。その理由は、噴水は間欠泉の形で見られるようなものであったからだ。サー・ウォルター・スコットはもっと広い心の持ち主だったので、「水を空中に吹き飛ばし、霧のシャワーとして降り注ぐ荘厳な噴水の」美しさを手に入れることは、それ自体で十分に意味があると確信していた。これらの人々が、整

形式庭園にもそれなりの美しさがあり、その様式のすべてを容赦なく破壊することの大きな愚かさを指摘したので、破壊の進行は徐々に食い止められた。



[図 12-7] ナーフォード NO.1 エドモンド・プリドールのスケッチ
1761年頃

好みには修正が加えられ、その後の改良のための試みにあたっては、それまでのような悲惨な結果はもたらされなかった。間違いが犯されつつあった時最初にそれに気づき、その流行がそれ以上広がることを止めようとした勇気ある人々に感謝しなければならない。「自然流派」に反対のアピールを最初にした何人かが書いたものは、ほんの数年前に整形式の乱用者が用いた言葉と同じくらい強い言葉で語られていた。



〔図 12-8〕 ナーフォード NO.2 1894 年

レプトンと対立したナイトが書いた以下の数行はその良い例である：－

「だから、だから！あの狂暴な悪魔はどのように呼ばれようと
 からっぽではげた瘦せて貧弱な天才
 汝のシャベルと根掘り鍬はここにごろんところがり
 そして汝の好きなブラウンの墓へと向かっている：
 汝の好きなブラウンは、その革新的な腕前でもって、
 手始めにこの豊かな土地への汝の呪いを相手にする」*

*『風景』R.P.ナイト 1795年 *Landscape*

風景式スタイルで、ミニチュアの芝生、「低木の茂み、樹木の細長い列」が備わった小さな邸宅の庭園を造ろうとする、その非合理性はラウドン [John Claudius Loudon, 1783～1843 年 スコットランドの植物学者・造園家] により指摘されたところである*。彼は風景式の代わりに整形式スタイルの方のデザインを推奨し、「幾何学的スタイルで」設計された6エーカーの敷地の邸宅の計画およびそれと最近の流行を組合わせたものを提案している。リー

ジェントパークはこの世紀の初期に造られ、ラウドンは彼の理論を説明するためにそれについて語っている。「官有地監督官、故フォーダイス氏の壮麗なデザインは、今（1812年）メリルボンファームで実施中であり、数年のうちには植栽に関する過去と現在のスタイルの調和の貴重な実例を提供することになるだろう」。

*『庭園および愉しみの土地を造るためのヒント』J.C.ラウドン著 1812年 *Hints on the Formation of Gardens and Pleasure Grounds*

ここに至り再びフラワーガーデンが一層脚光を浴びることとなった。フラワーガーデンは低木の植え込みとは別のもの、あるいは整形式の影を薄めたものとして考えられ、同時にそこは遠方の狩猟地とは明らかに別のものとして再び管理されることになった。フラワーガーデンの外側の土地の植栽も大いに改善された；堅苦しい低木の茂みと樹帯は分解され、そして木々はより装飾的に配置された。アラントン出身のサー・ヘンリー・スチュアート [Henry Steuart, 1759~1836年スコットランド地主農業改良者・軍人・古典学者] が書いた『植物栽培者ガイド』*The Planter's Guide* については、サー・ウォルター・スコットによる書評が前述の『四季報』に掲載された。彼は植栽の分野ではかなりの権威者で、彼自身の栽培場あるいは彼の著作を通じて樹木の管理および状況に応じた適切な樹木の選び方について有益なヒントを提供した。

このようにして庭園と庭園を取り巻く周辺の取り扱い方について、ガーデニング技術と好みをより生かせる形が復活した。その他のスタイルについても現在では併用されているが、風景式はその特徴を改善した上で今もなおファンがいて、また高い技術のデザイナーも活躍している[†]。建築家たちは庭園のデザインをむしろ研究のために行い、そして芸術家、造園家たちもまた、風景式スタイルというものは注意深く扱えば、館と調和させることは可能であることを多くの実例を通じて示した。それはこの国と気候によく適した形で、情景が持つ最も心地よい効果を生み出した。

†『風景式ガーデニングの技術と実技』ヘンリー・アーネスト・ミルナー著 1890年 *The Art and Practice of Landscape Gardening* By Henry Ernest Milner

第 13 章 19 世紀

“Hence through the garden I was drawn,
A realm of pleasance, many a mound,
And many a shadow-chequeréd lawn
Full of the city’s stilly sound;
And deep myrrh thickets blowing round
The stately cedar, tamarisks,
Thick rosaries of scented thorn,
Tall orient shrubs and obelisks,
Graven with emblems of the time.”

LORD TENNYSON

そして庭園の中へと私は引き込まれ
そこは一つの王国、そこには遊歩道、多くの丘
そして縞模様の影を落とした芝生の広がり
都会の静かな音で満ち溢れ；
そして深いミルラの茂みは風に揺れている
堂々たるシーダー、ギョリュウ
芳しい棘を持つバラのこんもりとした花園
背の高いオリエントの茂みとオベリスク
時の紋章が刻み込まれて

テニスン卿

過去 100 年間のガーデニングの発展は極めて著しく、かつ急速であったため、そのあらゆる分野についてさっと概観するだけでもほとんど際限のない仕事となる。植物学と分類方法の飛躍的な進歩、栽培方法の改良、熱帯気候からの数限りない宝物を保存するための膨大な数の温室とストーブ、フラワーガーデンを彩るために世界各地から集められた無数の植物、そして年々改良され付け加えられ次々と現れる花の数々、これらすべてのことが重なり合って 19 世紀の庭園を今ある姿にしているのである。私たちは先人たちの庭園を称賛し、またその中にどれだけ多くの敬服し模倣すべきものがあるかを既に見てきたが、近年付け加えられてきた多くの花という宝物が私たちの庭園から奪われることを想像することは難しい。多くの花があまりにも身近になってしまったので、花のない庭園など思い描くことは難しいが、今ほとんどどこでも見ることができる植物の数々は 100 年前にはわが国の海岸には到達していなかった。このような変化をもたらすために、多くの人々がそれぞれの持ち場で働き、それぞれがガーデニングの進歩に何らかの貢献をしてきた。現場の庭師や種苗業者、偉大な植物学者や学識と大胆さを持った人々、科学の大義のために命を危険にさらし、彼らの勇気と忍耐のおかげで我われは現代の庭園のこんなに多くもの宝物を手に行っている。



ARLEY, A GARDEN LAID OUT FIFTY YEARS AGO IN THE OLD FORMAL STYLE.

〔図 13-1〕 アーリー 昔風の整形形式で 50 年前に設計された庭園

風景式庭園に対する人気が頂点に達していた時、静かに園芸の仕事に精を出している現場の庭師たちが大勢いた。このような一人がアーバクロンビー [Abercrombie, 1726~1806 年 スコットランドの園芸家] であり、彼の書いたものは何年間にもわたり人気が高かった。彼はエディンバラ近くで [野菜、果物、花を生産する] 市場向け近郊農家 (マーケットガーデナー) の息子であり、1726 年に生まれた。プレストンパンズの戦いは父親の庭の壁のすぐ近くで戦われ、その時彼はそこにいた。庭師としての最初の勤めはサー・ジェームズ・ダグラスのところであり、後に彼は前の雇い主の親戚と結婚した。1770 年にはマイルエンドとハクニーの間の土地に家族とともに居を定め、そこで種苗園を始めた。家族には 2 人の息子と 16 人の娘がいた。彼の最初の本『誰でもが自分の庭師』*Every Man his own Gardener* は 1767 年に出版されたが、彼は失敗することを極度に恐れたのでリーズ公爵 [Leeds, 1713~89 年 政治家・裁判官] の庭師のモーに 20 ポンド払って、本の扉のページに彼の名前を使うことを了承してもらった。このため本書は、アーバクロンビーが全部ひとりで書いたのにモーとアーバクロンビーの著作として知られることになった。彼のこのほかの著作である『素人のためのガーデニング』*Amateur Gardening*、『園芸愛好家のための日々の友』*The Gardener's Daily Assistant* などの本も同じく人気を集めた。ウィリアム・ハンベリー [Wm.

Hanbury, 1725~78年 聖職者] が書いた当時の別の本にも数多くの木、低木、多年草・一年草の耐寒性の花、および温室・暖房温室の植物の栽培について詳しい方法が述べられている (*『植栽とガーデニング全解』ウィリアム・ハンベリー1770年 2巻フォリオ版 *Complete Body of Planting and Gardening*)。これらの本の中で取り上げられている植物の中には、新しく持ち込まれたばかりの植物がたくさん含まれていることがわかる。たとえば、ロードデンドロン・ポンティカム [ムラサキセキナン] Pontic Rhododendron、ピンクアザレア *Azalea nudiflora* [現在の学名 *Rhododendron periclymenoides*]、あるいはハンベリーが「アメリカスイカズラ」“American upright honeysuckle”と呼んだものなどである；ヒメシャクナゲ *Andromeda polifolia*、クロバナロウバイ類 Allspice (*Calycanthus*) の各種、ウルシ類 Sumach (*Rhus*) やタイサンボク類 *Magnolia (grandiflora)* など、ハレシア [スノードロップツリー] (*Halesia*)、アジサイ類 *Hydrangias*、シモツケ類 *Spireas* などの耐寒性植物である。半耐寒性および暖房温室の植物についても多くの新しく追加されたものがあった。アフリカハマユウ *Crinum capense*、別名「ツルボランユリ」lily *Asphodel*、そしてもっと寒さに弱いベラドンナユリ [ホンアママリス] *Belladonna lily (Amaryllis Belladonna)*。スカバーバラユリ *Scarborough lily (Vallota purpurea)* はこの頃登場した；ガンジーユリ [ネリネ] *Guernsey lily (Nerine sarniensis)* の原種については、1659年頃日本から来た船が難破し、そこから岸に流れ着いた球根からガンジー島で育ったと言われたが、これと同様にその原種について同じような話が語られている。ツバキ、別名「日本のバラ」(*Camellia japonica*) は18世紀半ばまでには栽培されていた。「クチナシ *gardenia*、別名ケープジャスミン *Cape Jasmine (Gardenia florida)* [学名は *Gardenia jasminoides* も使用されている]、アカマツリ [ルリマツリの一種] *Plumbago (rosea)* とその他「ルリマツリ属の寒さに弱い品種」、グロリオサ [キツネユリ] *Gloriosa superba*、およびアラマンダ [アリアケカズラ] *Allamanda (Allamanda cathartica)* はストーブ温室を飾る登攀性植物の仲間であった。

植物の科の中には特に注目を集めた結果、その植物に関する特別の文献が書かれるものまで出てきた。ゼラニウムとヒース [エリカ類] はアンドルーズ [Andrews, 活動期 1794~1830年 植物学者・植物画家・版画家] によって、メセン類 *Mesembryanthemums* はハワース [Haworth, 1767~1833年 昆虫学者・植物学者] によって、プロテア *Proteæ* はナイトによって扱われた。果樹園に関する文献も有能な書き手によって書かれた。ポートランド公爵 [Portland, 1738~1809年 首相・オックスフォード大学総長] の庭師であるスピーチリー [Speechly, 1735~1819年] は松とブドウの木の論文の筆者であった。彼はウェルベックで栽培されているブドウの50の品種について書き、当時イングランドで見ることができる多くの立派なブドウの木についても触れている (*『ブドウの木の栽培』ウィリアム・スピーチリー著 1790年 *Culture of the Vine*)。エセックスのヴァレンタインにおけるブラックハンバーはハンプトンコートにブドウの親株であり、大変多くの実をつけたので庭師は房を売ることによって1年間に100ポンド得ることも珍しくなかった。館の外のノーサラートンにおけるブドウ栽培は1789年時点で137平方ヤードの壁を覆っていた†。

†ファウラー博士が私に述べたところでは、家の壁を覆っているとても大きなブドウの木は現在もノーサラートンに存在しており、それがここで言及されているものであるのかも知れない。

彼はバースの近くのブドウ畑のこと、それにサマセットのサー・ウィリアム・バセット [William Basset, 1628~93年 地主・政治家] 所有のブドウ畑のことも書き記している。サマセットの畑では毎年、数ホッグズヘッドのワインを作っており、ペインズヒル (有名な風景式庭園) のチャールズ・ハミルトン閣下は「ブルゴーニュ」と「ブラッククラスト」のブドウからワインを作り、ボトル1本7シリング6セントから10シリングで売られた。スピーチリー自身もウェルベックで、有名なブドウの房を栽培しており、1781年にその重さは19½ポンドあり、直径は20インチあった。それはポートランド公爵によりロッキンガム侯爵 [Rockingham, 1730~82年 首相] のもとに人の手によって運ばれ、それは約束の地から帰って来るスパイたち [訳注] のようであった。この世紀の初期においてはブドウは海外から持ち込まれ、ヨークシャー州のキャノンホールに植えられたので、その後その名前を付して有名になった品種を生産し続けた。ハインズはイチゴ、グーズベリー、ラズベリーについて書いた。イチゴは品種改良が大いに進み、新しい大粒の品種がヴァージニア種と19世紀初頭に持ち込まれたチリ種とを掛け合わせることで生産された。昔式の庭園では依然としてシロバナヘビイチゴ *hautboy* (*Fragaria elatior*) を植えていたが、今はほとんど見られることもなく、粒の大きいアメリカ種に完全に席卷されてしまった。

[訳注] 旧約聖書中の民数記に、約束の地カナンの偵察に行った帰りにブドウの房を持って帰ったが、あまりに大きくて二人がかりで運んだという話がある。なお、ヘブライ語の訳語としてスパイ spy はやや不正確、偵察を意味する scout とか observer が適切とされる。

果樹に関する優れた著作としては、描写の優れたカラー図版付きのブルックショー [Brookshaw, 1751~1823年 挿絵画家] による『英国の果樹』*Pomona Britannica* 1817年がある。この本は主にハンプトンコート王室庭園で栽培されている果物を描いたものである。本書においては、当時極めて新しかったいくつかの品種のほかに、昔好まれた多くのものの絵が掲載されている。「キャサリン梨」の絵には8月に熟す、「甘くてジューシーで、ややジャコウの香りもする：しかしよく言っても普通の梨としか思われていない」と記されている。「昔のニューイントン桃」、「公爵サクランボ」、「ノーフォークビーフィンリング」、「赤縞ピピン」ほか多くのものがまだ好まれており、トラデスカントのサクランボについてブルックショーはこう書いている：「これより優れたブラックチェリーがわが国にあるかどうか私は疑問だが、それは大変希少でまたほとんど知られていないので、これを探し出すことは最も難しい仕事となるだろう。これはチャールズ2世の庭師であったサー・ジョン・トラデスカントにより栽培されていたサクランボであり、ほかのブラックチェリーと比べると違った形をしており；その香りはほかのサクランボとは似ていなかった；そして6月20日頃に熟した」。このような多くの果物と野菜に関する歴史は、このテーマにつ

いて何冊か貴重な本を書いてきたフィリップスにより伝え継がれてきた*。

*『英国の果樹園』 *Pomarium Britannicum*, 1820年、『栽培野菜の歴史』 *History of Cultivated Vegetables*, 1822年、『花の咲く木の森』 *Sylva Florifera*, 1823年、『花の歴史』 *Flora Historica*, 1824年ほか すべてヘンリー・フィリップス著

主として果樹に対して注意を向けたもう一人の庭師はウィリアム・フォーサイス (William Forsyth, 1737—1804年) であった。彼はミラーの後任としてチェルシー庭園の園長を引き継ぎ、その後ケンジントンの王室庭園師に任命された。彼の果樹に関する、また木の仕立て方や刈り込みの最善の方法に関する著作は何回も版を重ねた。果物栽培の改良について、ナイトはフォーサイスの木の取り扱い方について賛成しない点もいくつかあったが、ほかのどの庭師よりも多くのことを成したと言われている。トーマス・アンドルー・ナイト [Thomas Andrew Knight, 1759~1838年 園芸家・植物学者] は園芸協会の会長であり、彼自身、果物、特にリンゴの改良者であった。1802年には黄金色ピピンとオレンジピピンの掛け合わせでグランジェリンゴを創り出した。ガーデニングの歴史学者であったジョージ・ジョンソンはナイトに著作を献呈し、ナイトのことを「ガーデニング作業を支える最も完全な科学知識をガーデニング作業の知識へと結びつけた」人物であると情熱的な言葉で語った (†『イングリッシュガーデニングの歴史』ジョージ・W・ジョンソン著 1829年)。「この優れた野菜生理学者」のおかげで園芸協会 Horticultural Society [1861年王室勅許により英国王立園芸協会 RHSへ改称] が創設された。1759年、ヘレフォードシャー州に生まれ果樹園の中で育ったナイトは幼い頃より木々の成長を観察し、実験することを始めた。彼は園芸に対して何か刺激が足りないと感じ、「あらゆる分野で園芸の改良を目的とするような」*協会の設立がその役に立つであろうと考えた。

*『英国王立園芸協会に関する本』アンドルー・マリー著 1863年 *The Book of the Royal Horticultural Society*, By Andrew Murray

その結果、サー・ジョーゼフ・バンクス [Josef Banks, 1740~1820年 博物学者・植物学者] の協力を得て、ナイトは園芸協会を組織し、1804年3月7日創立のための会議が開かれた。初代会長はダートマス伯爵 [Dartmouth, 1755~1810年 アメリカ独立戦争当時の政治家・慈善事業家] で、ジョン・ウェッジウッド [John Wedgwood, 1766~1844年 園芸家] が第一会計担当、またクリーブが第一事務局長であったが、すぐに R. A. ソールズベリー [Salisbury, 1761~1829年 植物学者] に取って代わられた。リンネ協会の事務局員であったプライスは同時に新園芸協会の事務局員でもあった。1809年4月17日、団体設立の設立勅許状が国王ジョージ3世 [在位 1760~1820年] の署名を得た。翌年『会報』 *Transactions* 第1号が発行された。これらの4つ折り版の本は豪華に仕上げられ、とんでもなく費用がかかったので1830年までにそのための費用合計は25,250ポンドに達した†。

†現在の協会事務局長補のジョン・ウェザー氏のご厚意により提供された覚書より

ダートマス伯爵の死に伴い、1811年、トーマス・アンドルー・ナイトが会長に選ばれた。彼の精力的な会長としての働きにより協会の活動は大いに進展した。1818年には最初の実験的庭園がケンジントンとイーリングで開始されたが、4年後協会がチズウィックの庭園を長期賃借してそこで実験を進めたので、最初の実験は途絶えることになった。

時を同じくして、協会はその最大の仕事を始めることになる。それは海外から植物を受け取るだけでなく、収集家を派遣することであった。フジ *Wistaria* (*Wistaria sinensis*) の最初の木はリーヴズ氏 [Reeves, 1774~1856年] により中国から1818年に送られてきた。そのオリジナルな品種は今もチズウィックにあり、またその他の中国の植物—シャクヤク、バラ、菊—も海外から受け取ったものであった。最初に派遣された収集家はジョージ・ドン [George Don, 1798~1856年] で、1822年から23年にかけて西アフリカ、さらに南アメリカに行った。ジョン・フォーブス [John Forbes, 1798~1823年] は同年東アフリカへ派遣された；彼はザンビアを旅行中に亡くなったが、それは新品種を母国へ送ってしまった後だった。ジョン・ポッツは中国と東インド諸島に植物を探しに行き、彼も気候の影響で亡くなった。ジョン・ダンピア・パークスは彼について中国に行き、ジェームズ・ロウはアメリカとサンドウィッチ諸島 [ハワイの旧称] での探索に成功した。有名な収集家であるデイビッド・ダグラス [David Douglas, 1799~1834年 スコットランドの植物学者] も園芸協会に雇われた。彼は1799年スクーンに生まれ、子どもの頃に、当時グラスゴー大学教授であったサー・ウィリアム・フッカー [William Hooker, 1785~1865年 植物学者・植物画家] の目に留まった。フッカーは彼を協会事務局長のジョーゼフ・サビーネに推薦し、ダグラスは北アメリカとカリフォルニアに派遣された。そこで彼が発見した木や花の植物の宝庫は前例のないほどのものであった。彼が本国へ送った針葉樹 *conifers* の数は途方もないものであり、ある時フッカーに「私が勝手にマツを製造していると思い始めていらっしゃるかも知れない」と書いた。よく知られているダグラスマツ (*Abies Douglasii*) [学名からはモミの仲間ダグラスファー、一般的にはダグラスファーはベイマツ (トガサワラ属) を指す] のほかにも、多くのマツの木の仲間がこの国を豊かにした。たとえばサトウマツ [シュガーパイン] *Pinus Lambertiana*、モントレーマツ *Pinus insignis*、ポンデローサマツ *Pinus ponderosa*、サビンマツ [グレイマツ] *Pinus Sabiniana*、ノーブルファー *Picea nobilis*、グレートファー *Pinus grandis*、美しいセコイア *Taxodium sempervirens*、さらにもっと多くのものがイングランドのあらゆる場所のマツ林や森を飾っている。ドロップモアでは園芸協会からグレンヴィル卿 [Grenville, 759~1834年 首相] に1827年に渡された種から育てられたマツがある。この木は1830年に苗床から地面に移植され、1886年には高さ124フィート、周囲15フィートの木となった。これらの素晴らしい針葉樹のほかにも、ダグラスのおかげと言える多くの植物というものがある (*植物については『北アメリカの花』 *Flora Boreali Americana* や『植物マガジン』 *Botanical Magazine* にフッカーによる記述がある)。現在ではごく普通になった赤い花をつけるスグリ類 *Ribes* を本国に送った；またカロコルタス [バタフライチューリップ]

Calochorti、クラーキア [サンジソウ] Clarkias、テンニンギク Gaillardias、ゴデチア [イロマツヨイ] Godetias、コリンシア Collinsias、ルピナス Lupines、ハナビシソウ Eschscholtzias、ミゾホオズキ Mimuli および ペンステモン [イワブクロ類] Pentstemons も送られた。ダグラスはアメリカで何年もの間探索した後、さらなる宝物を求めてサンドウィッチ諸島へと向かい、1834年にそこに到着してしばらくして大変悲惨な死を迎えた。彼は現地人が野生の動物を捕まえるために掘った深い穴に落ち、その中にいた動物により殺された。これほど多くの貢献をした人物が悲劇的な最期を遂げたにもかかわらず、異国において命懸けで植物探しをする人々の足を止めることにはならなかった。カリフォルニアではテオドール・ハートヴェック [Theodor Hartweg, 1812~71年] によりさらに多くのマツの仲間が収集された。ベントミアナマツ *Pinus Benthamiana*、ミチョアカンマツ *Pinus Devoniana* などである；またルピナス、セイヨウメギ Berberries、フクシア Fuchsias、それと何種類かのアキメネス [ハナギリソウ] *Achimenes* が彼により発見された。

おそらくすべての冒険的な収集家の中で最も成功した人物と言えればロバート・フォーチュン [Robert Fortune, 1812~80年 スコットランドの植物学者・プラントハンター] である。彼は1813年 [?] に生まれ、1880年に亡くなった。最初エディンバラの植物園に入り、その後チズウィックの温室の管理者になった。1842年彼は中国へと出発し、それからの数年間、手に入れたばかりの宝物を本国に絶え間なく送り続けた。庭園の花として一番知られているいくつかの花は彼のおかげによるものである：シュウメイギク *Anemone japonica*、タイツリソウ [ケマンソウ] *Dielytra* (or *Dicentra*) *spectabilis*、ヤマブキ *Kerria japonica*、各種のサクラ類 *Prunus*、ガマズミ類 *Viburnum*、シモツケ類 *Spirea* その他多くのツツジ類、キク類、ガーデニア [オオヤエクチナシ] *Gardenia Fortuniana*、ジンチョウゲの一種 *Daphne Fortuni*、ホソバヒイラギナンテン *Berberis Fortuni*、シナレンギョウ *Forsythia viridissima*、タニウツギの一種 *Weigela rosea*、オウバイ *Jasminum nudiflorum*、フジの白い品種、そしてその他多くの貴重な植物である。彼の最大の功績は中国人に変装して廬州 Loo Chow [Luzhou, 現在の安徽省合肥市] に行き、そこで八重咲きの黄色のバラと、彼の名前を付けた扇形の葉をしたシュロ *Chusan palm* を手に入れたことであった。その時以来、こういう発見の仕事は専門家の手によって行われてきている。ロブ兄弟の二人はヴィーチ商会のために20年以上収集を続け、多くの新しいものを持ち込んだ。トーマス・ロブ [Thomas Lobb, 1820~94年 植物学者・プラントハンター] は旧世界、インド、ビルマ、フィリピン諸島に調査を限定し多くの新種のランを発見した。ウィリアム・ロブ [William Lobb, 1809~64年 プラントハンター] は主に南アメリカとカリフォルニアで仕事をし、新種の発見、特に自分の名前を付したクロベ類 *Thuia* に加えて、ダグラスが発見した針葉樹の多くの球果（松かさ）と種をはじめて大量に本国に送った。あわせてラパゲリア [ツバキカズラ] *Lapageria rosea*、エスカロニア [イスカノキ] *Escallonia macrantha*、スパイニー・デスフォンテイニア [チリヒイラギ] *Desfontainea spinosa*、ダーウィンメギ *Berberis Darwinii* など、今はよく知られている数多くの新種の植物を入手することに成功した。シッキムシ

ヤクナゲ Sikkim Rhododendrons や多数のヒマラヤの植物はサー・ジョセフ・フッカー [Joseph Hooker, 1817~1911 年 植物学者・探検家] のおかげである。F. C. バービッジ氏 [Burbidge, 1847~1905 年 探検家] は多くの宝物、特にボルネオのものに光を当てた；エドワード・ウィットタル氏 [Edward Whittall, 1851~1917 年 商人・アマチュア植物学者] はスマルナで小アジアの魅力的な耐寒性の球根をたくさん送り、この科学の分野ではまだ極めて多くの人々が活発に働いていた。

我われの庭園のバラの数は今や無限にあり、その極めて大きな割合のものが今世紀になってこの国で知られるようになったに過ぎないのである。昔からの品種、フランス Gallica、ダマスク the Damask、サルファレア Sulphurea、スコッチ Scotch、オーストリア Austrian、モス Moss、センバヴィレンス Sempervirens そして ジャコウ Musk に加え、現在では数限りない交配種のほかに多くの品種というものが存在している。新品種のほとんどが東アジアからわが国にやって来た。小さなモッコウバラ Banksian Rose は中国から 1807 年に、より小さいフェアリーローズ Fairy Rose は 1810 年に到来した；お茶の香りのバラはほぼ同じ頃、コウシンバラ [オールドブラッシュ] Monthly Rose は 1789 年に、ノイバラ multiflora [rose] は 1822 年という具合である。そこから多数の品種が付け加わり、ブルソール Boursault's、ノワゼット Noisette、ポリアンサ Polyantha [*Rosa polyantha*]、ブルボン Bourbon などである。有名な種苗業者であったハクニーのロディジーズの 1826 年のカタログには、「1393 を下回らない品種と変種のバラ」が、彼らの種苗には番号を付けて植えてあり、またハンマースミスのリーのところにもたくさんあった。それ以来バラの品種は毎年どんどん増え続けていった。1861 年から 2 年にかけてポール [William Paul, 1882~1905 年 園芸家・著作家] *は 62 もの新品種を持ち帰り、そして次の 10 年間の間にさらにもっと付け加え、その中にはマレシャルニエル Marechal Niel、ルイファンハウテ Louis Van Houtte、ポールネイロン Paul Neyron のような人気のある品種が含まれていた。このおびただしい数の新しいバラは今も毎年付け加えられてきており、これにより甘いモスローズ Moss Rose やダマスクのような昔のバラの多くが消え去ってしまった。これらは交配種の四季咲きバラやティーローズ teas [香りのするバラの総称。19 世紀中国からもたらされた品種類] と同じく、然るべき居場所があってもよいと思われるのにである。

*『バラの庭』ウィリアム・ポール著 第9版 1888年 *The Rose Garden*

ダリアはメキシコの原生種で、最初は 1789 年にスペインからビュート夫人により持ち込まれたが失われてしまい、1804 年にホランド夫人により再び持ち込まれ、20 年後にこれらの花に対する熱狂が最高潮に達した。フクシアは 1825 年までにはこの国に姿を現していたが、フックス [Leonhart Fuchs, 1501~1566 年 ドイツ人 医師・植物学者] にちなんでブリュミエが名付けたのは 100 年ほど前のことであった。お話としては、ワッピングの、ある小さな家の窓にフクシアの植物があるのをリー [Lee, 1715~95 年 スコットランド出身 植物学者・種苗業者] がどのように見たかが語られている。彼はその花にいたく感動したのでその家に

入り、持ち主である老婦人に売ってくれないか聞いた。しかし彼女はそれを手放すことを最初は断った。と言うのもそれは船乗りである彼女の夫から送られてきたものであったからであるが、彼が 8 ギニーを差し出し、彼が育てて最初の 2 株を彼女にあげることを約束したので婦人は説得されて彼の所有物にすることに同意した。彼は約 300 本の挿し木用の挿し穂を根づかせることに成功し、老婦人に彼女の取り分をあげ、残りは上品なハンギングフラワーにして、彼の種苗園を訪れる人たちを驚かせた。これにより彼は 300 ポンドばかりの利益を得た (**N. and Q.* 1894 年 9 月)。

† 名前はスウェーデンの植物学者ダール Dahl にちなんで名付けられ、サミュエル・デイル博士 Dr. Samuel Dale (1659~1739 年) にちなむデイリア Dalea [マメ科の植物 プレーリークローバー] とはまったく別物である。

15 世紀の庭師が、もしほんの僅かでも見る事ができたら多分最も驚くであろうと思われるのはランの温室であろう。今日見られる数多くのランのうち、ほぼすべてのものが過去 50 年間に輸入されたものである。まだ探索がなされていない国の地帯というものは残されているが、地球上でランが育っている地域の大半はくまなく探し終えられ、これらの栄光に満ちた植物は何千も包まれてこの国へと送られ、場合によっては原生種の生育地を裸地にしてしまうこともあった。地区全体からこれらの宝物がすっかり持っていかれた様子の記録がある；たとえば、ある土地では昔はミルトニア *Miltonia vexillaria* の生育地であったところがひどく略奪されたため、近くの森が「きれいさっぱりと取り除かれてしまった」。ある時オドントグロッサム *Odontoglossum crispum* を探している最中に、1 万の植物が収集された時には、それを入手するため 4000 本の木が切り倒され、探索者たちのキャンプはその付近の植物を採り尽くすたびに毎週移動した†。この栄光に満ちた豊かな花園の光景はこれまで多くのランのハンターを喜ばせてきたが、今後もし収集家たちが新旧両世界の手付かずの林に対してもっと控え目な態度でその欲望を抑制しない限り、このような花園の光景は未来の世代にとっては手の届かないものになるであろう。

† 『ランのハンターの旅と冒険』 アルバート・ミリカン著 1891 年 *Travels and Adventures of an Orchid Hunter*, By Albert Millican

この国で初めて開花した熱帯のランはブレティア・ベレクンダ *Bletia verecunda* という品種であり、1731 年にバハマ諸島の一つであるプロヴィデンス島からピーター・コリンソン [Peter Collinson, 1694~1768 年 植物学者・商人] 宛てに送られたものであった († W. B. ヘムスリー『庭師年代記』1887 年 W. B. Hemsley, *Gardener's Chronicle*)。ミラーの辞書には 2、3 の熱帯のランの記述があり、彼自身の手でチェルシーで育てられたものもあった。「ニュースペインのカルタヘナ」から彼の元へ送られてきたバニラ *Vanilla* について彼が語ったところでは「この植物はチェルシー庭園で花開いたものの、正しく手入れされなかったので 1 年しかもたなかった」。1778 年、医師ジョン・フォザギル [John Fothergill, 1712~80

年 医師・植物コレクター] が中国から 2 品種持ち帰り、そのうちの一つ、ファイウス [カク
チョウランの一種] *Phaius grandifolius* はヨークシャー州アパリーブリッジに住む彼の姪
であるハード夫人のストーブ温室ですぐに開花した。1787 年、エピデンドラム・コクレア
ツム *Epidendrum cochleatum* がキュー王室庭園で開花し (*『ラン科植物のマニュアル』第 10
部 ジェイムズ・ヴィーチ商会著 1894 年 *A Manual of Orchidaceous Plants*, By James Veitch and Sons)、
エピデンドラム・フラグランス *Epidendrum fragrans* は次の年に開花した。今世紀初頭間
もなく、ハクニーのロディーズにより何品種か販売用に栽培され、この商会は何年にも
わたりランの栽培家の間では特に名の知られた場所となった。1812 年までにはモンテ
ヴィデオからもたらされたオンシジウム *Oncidium bifolium* という植物を育て、同じ頃バ
ンダ類 *Vandas*、エリデス類 *Aërides*、デンドロビウム類 *Dendrobium* が初めてインドから
医師ロクスバラ [Roxburgh, 1751~1815 年 スコットランドの外科医・植物学者] により送られて
きた。多くのラン科の植物が 1830 年までの間にこの国にやって来たが、それらの原生地
やその生育環境についてはほとんどわからなかったため、その栽培というものは困難を
極め、ランの栽培家は常に失敗に見舞われた。キューではそのために別の温室が用意さ
れ、園芸協会のリンドリー [Lindley, 1799~1865 年 植物学者・園芸家・ラン研究者] もまた、ラ
ンの習性を注意深く研究することで正しい育て方を発見しようと努めた。最も早い時期
に作られた個人所有のランの温室で、ウェントワース・ウッドハウスにあるフィッツウ
ィリアム伯爵のものがその一つであり、ミルトニア属は彼に敬意を表して名付けられた。
彼の庭師であるジョーゼフ・クーパーはその栽培に初めて成功した一人であった。1833
年チャッツワースのランのコレクションが始まった。デヴォンシャー公爵は東洋から植
物を調達し、当時の彼の庭師バックストンは多くのものを栽培するのに成功し、彼が編
集した『植物マガジン』*Magazine of Botany* に興味深い記録を公表した。それ以来成功し
たランの栽培家は数限りなく名前を挙げることもできない。サー・トレヴァー・ローレ
ンス [Trevor Lawrence, 1831~1913 年 外科医・園芸家・政治家] やシュレーダー男爵 [Schroeder,
1825~1910 年 ドイツ生まれ 銀行家] のコレクションのようなものは 19 世紀の不思議の一つ
である。

これらのランの多くが持ち込まれた歴史は胸躍る冒険物語かおとぎ話を読んでいるよう
である。失われたラン、カトレヤ・ラビアータ・ヴェラ *Cattleya labiata vera* の話はすべて
のラン愛好家に知られている。この植物は、元はと言えばブラジルから本国に、W. スウェ
インソン [Swainson, 1789~1855 年 鳥類学者・昆虫学者・博物画家] からリンドリー博士宛てに、
1818 年、地衣類の周りのパッキングとして送られたもので (†『ランについて』フレデリッ
ク・ボイル著 1893 年 *About Orchids*. By Frederick Boyle)、リンドリーはそのことを記し、偉大な
園芸家カトレイ氏 [Cattley, 1788~1835 年 商人・園芸家] の思い出としてその名前を付けた。
その後何年間も本物のラビアータを求めて時は過ぎたが、「ヴェラ」“vera” [=本物という意
味] はもはや栽培されていないこと、そしてその原生地が忘れられてしまったことが発
見されるまで、ほかの品種が本国に送られ続けた。50 年間にわたりこの宝物を再び発見す

ることがすべてのコレクターの目的であった。偶然ついに 1889 年に、パリの M. モローのところに何某かの植物が送られたが、そのモローからサンダーズ商会はその生育地について学び、それを探しに人を送り出し、そして間もなくすべてのラン栽培家が自分たちのコレクションに長い間失われていた宝物を付け加えることができたのであった。この世のものとも思えない花を求めて、数多くの実りのない航海が行われ、そしてコレクターがまったく期待していない時に、ついに求めているものに出会うということがしばしばあった。アツモリソウの一種 *Cypripedium Curtisi* という一つの植物がペナンからカーティス氏 [Curtis, 1853~1923 年 植物学者] により 1882 年に本国に送られてきて、その後コレクターたちがこれを見つけることを完全に諦めるまで一つも出てこなかった。そしてついにエリクソンがスマトラのある山を登っていて、小さな小屋で休みをとることにした。するとその壁に、そこで休憩した旅行者たちの名前が書いてあり、その中に彼は自分が探していたまさにその花の絵が描かれているのを見つけた。その下には「この建物の飾りとして C. C. の贈り物」と書かれていた。彼は直ちにその近辺でその花を探す仕事に取り掛かり、諦めて家に帰ろうとしたまさにその時に、ついにとてもありそうもない場所にその花を見つけたのであった。このような話が無限に存在するように思えるのは、毎年コレクターたちがこれらの植物を求めるために苦痛に満ちた遠征を続けていたからである。一つの会社、セントオールバンズのサンダーズ商会だけが、常時 20 人ものコレクターが働いていることが珍しくない会社と言える。1894 年の春には、ブラジルに 2 人、コロンビアに 2 人、ペルーとエクアドルに 2 人、メキシコに 1 人、マダガスカルに 1 人、ニューギニアに 1 人、インド、ビルマ、海峡植民地 [シンガポール、ペナン、マラッカなど] に 3 人派遣していた。イングランドで現在栽培されているランの数の推計を行うためには、すべての熱帯地方から本国に送られてくるそれらの品種に加え、数多くの交配種を勘定に入れなければならない。交配種については、ヴィーチ、ブル、あるいはロウと言った大きな園芸業者からのものと、個人のコレクションからのものが毎年生み出されている。

ガーデニングのあらゆる分野で変化は急激になってきていた。現在花屋で見える様々な品種というものは今世紀の初頭には知られていなかった。それはベゴニア、グロキシニア [[オオイワギリソウ] *Gloxinia*、ゼラニウム、シクラメン、シネラリア、プリムラ、ストレプトカーパス [ウシノシタ] *Streptocarpus*、カーネーション、アキメネス、菊、ヴィオラ、ダリア、アスター、バーベナなど多くの似た品種である。ドナルド・ビートン [Donald Beaton, 1802~63 年 スコットランド生まれの庭師] は 1854 年に、庭師としての彼の若い頃の人生の思い出を書いているが、マンチェスター近くのロウアーポートンで、この国で一番最初に開花したペチュニアを見たこと、エプサム種苗園で初めて見たカルセオラリア [キンチャクソウ] *Calceolaria* のことをいかによく覚えているか語っている。展示会と功績表彰という仕組みが花卉栽培者のエネルギーを刺激し、新品種の生産を推進した大きな効果について疑う余地はない。カーネーションなどの花の栽培に関する 1820 年のトーマス・ホッグ [Thomas Hogg, 1777~1855 年] の論文で、イズリントンとチェルシーの 2 つの

「花卉栽培者協会」のルールを示している。それは数年前に始められたもので「プリムラアウリキュラ、ナデシコ類およびカーネーション」の栽培を推進するためのものであった。彼の言によれば「ロンドン近辺には同じ種類の協会はほかにもいくつかあるが、この2つは会員数が最も多いだけでなく、その構成会員に関して最も名声が高い」ものである。会費は年間1ポンド11シリング6ペンスで、全部で6つある賞金は、展示会当日、受賞した候補者に贈呈された。指定された日に晩餐会が開かれ、各会員はプリムラアウリキュラ、ナデシコ類およびカーネーション展のディナーチケットを買わなくてはならなかった。花の審査は出席者の中から選ばれた3人の会員により行われ、全員が晩餐のため座っている中を花がテーブルに回された。「各人がその花をはっきりと見ることができるよう、まず会長の右から始まり、そして左側に戻って来るように回される」。それ以来多くの協会が創設されたが、それはいろいろと異なる種類の花を育てる花卉栽培者の品種の多様性をテコ入れするためであった。これらの中で多分最も目覚ましい協会はバラに関するもので、より最近では菊に関するものがあり、両者は現在、全国協会を組織するまでになっている。全国菊協会 National Chrysanthemum Society はストーク＝ニューイントンがその発祥の地である。ロンドンのその土地柄は、ローベルとフェアチャイルドの時代以来、そしてロディーズに至るまで、何世紀にもわたり庭園のたまり場で、その古き伝統というものを忘れることがなかった；霧と煤煙の真ただ中であってさえ、ロンドン東部の住人たちは花を栽培しようとした。彼らの大いなる関心は菊で、彼らが菊の栽培に成功したことは地方展示会を見ればわかることである*。園芸協会が初めて「催し」を開催したのが1831年で、その後しばらくして定期的な展示会が開始された。それ以来彼らの展示会や植物協会 Botanical Society のもの、イングランドのあらゆる町や村の地方協会のものが年中行事になり、それどころかほとんど毎週の行事になり、これらの組織により推進された花卉園芸への刺激というものは誰の目にも明らかであったに違いない。ロンドン植物協会は1839年に設立された。植物の科目を説明するために割り当てられた敷地の部分は、当時事務局長であったサワビー [Sowerby, 1757~1822年 博物学者・博物画家] とその父 F. J. フェイン博士とシグムンド博士により設計された；そして植物科学の研究者の努力を支える準備が完了した（†『フレデリック・J・フェイン博士回顧録』1886年 *Memoirs of Dr. Frederic J. Fane*）。

*ドールストンおよびドウボヴォワールタウン・アマチュア菊協会の展示会は毎年開かれ、世話をし関心があれば何が可能かの実例となっている。

園芸の進歩について速足で振り返ってきた中で、キュー王室庭園の際立った位置づけについて十分な指摘がなされてこなかった。この庭園は1760年頃、ジョージ3世の母であるプリンセスオブウェールズにより創設されたものである。大変優雅でオリジナルな詩「植物園」1791年において、エラスムス・ダーウィン [Erasmus Darwin, 1731~1802年 医者・自然哲学者・詩人] はキューの持つ夢のような魅力について、いつもの誇張した詩句で仄めかしている：-

“So sits enthroned, in vegetable pride,
Imperial Kew by Thames’ glittering side;
Obedient sails from realms unfurrow’d bring
For her the unnam’d progeny of Spring;
Attendant Nymphs her dulcet mandates hear,
And nurse in fostering arms the tender year;
Plant the young bulb, inhume the living seed,
Prop the weak stem, the erring tendril lead;
Or fan in glass-built fanes the stranger flowers,
With milder gales, and steep with warmer showers.
Delighted Thames through tropic umbrage glides,
And flowers antarctic, bending o’er his tides;
Drinks the new tints, the sweets unknown inhales,
And calls the sons of Science to his vales.”

王座に座るように、野菜は盛りを迎え、
テムズのきらめく側に広がる王室キュー庭園は；
耕されぬ王国から忠実なる風がもたらすものは
お庭のために名もない春の子どもたちを；
お供の妖精たちはその甘美な役目を耳にし、
そして抱える腕の中でか弱き季節を慈しむ
若い球根を植え、生きている種を埋め、
か弱い茎を支え、はみ出た巻きひげを導く；
それともガラスの神殿の珍しい花に風を送るは、
柔らかいそよ風で、そして暖かい雨を注ぐ。
喜び溢れるテムズは熱帯の日陰の中を流れ、
南極の花は、その流れの上に覆いかぶさる；
新しい色調を飲み、知らない喜びを吸い込む、
そして科学の息子たちをその谷間へと呼ぶ。

キューの重要性はウィリアム・エイトンの管理のもと徐々に増大していった。この有能な庭師は1731年に生まれ、フィリップ・ミラーの影響のおかげでキューの植物管理責任者に任命された。彼は1789年キューで栽培されている植物のカタログを発売した。それぞれの植物には原生地、持ち込まれた時期、それと彼自身の記憶に基づくチェルシーでフィリップ・ミラーの手で栽培されていた植物の記録が付記されていた。エイトンは彼の息子ミカエルの助けを得て、どれがピーター・コリンソンが持ち込んだ植物であるかを明らかにした；ハンマースミスのジェームズ・リーおよび、ジェームズ・シェラードの庭師であったノウルトンたちもどのような情報が渡せるか伝えた。植物はリンネの分類に従い配置され、5000から6000の品種が含まれていたが、この数は第2版では1万1000種にまで増やされた。この第2版にはドライアンダー [Dryander, 1748~1810年 スウェーデン 植物学者] と R.ブラウンが多大な貢献をし、1810年から13年にかけて若い方のエイトンによって出版された。ウィリアム・エイトンは1793年に亡くなり、彼の息子、ウィリアム・タウンゼント・エイトンがその後を引き継いだ。それ以来、そこに関わった多数の有能な植物学者のもとで、キューはますます世界の植物関係の組織の中で第一等の地位を占めることとなった。今世紀の著名な植物学者、すなわちリンドリー、フッカー、ブラウン、スミス、ラウドン、ヘンスロウ [John Stevens Henslow, 1796~1861年]、サワビー、そして偉大なダーウィンその人自身、その他大勢の人々の業績に関して語ることは不可能であるが、これらの人物こそが今世紀の素晴らしい進歩をもたらした人々である。そして今この19世紀の終わりにあって、イングランド国内だけではなくその帝国全体を通じて、現場の庭師から敬意と称賛の眼差しで尊敬されているまだ健在の人々については言うまでもない。

イングランドでは最も質素な家にも庭が造られてきたように思える。早くもチューダー朝時代には、農民は自分の小さな家（コテージ）の入口付近に何種類かの植物を育てようとした；多くの古いコテージは何世紀もそこに立っているブドウの木で今も覆われており、また多くのリンゴの木が毎年毎年邪魔されることなく赤い実を稔らせてきたが、一方、すぐ近くにある壮大な大邸宅の庭園は消え去ってしまった。最近では、見捨てられた昔ながらの植物をまた育てたいという気持ちから、コテージの庭にそれを探しに行く人がたくさん出てきており、その結果、今まで長い間、目立たない場所に隠されて残されてきた宝物が数多く発見されている。コテージの住人によって今育てられている果物や野菜は、金持ちだが腕の劣る隣人にとってお手本となっていることも多い。一番寒い冬にコテージの窓際に明るい花が一杯あるのを見ることは素晴らしい。町の中にあっても貧しい人が「自然の存在を知る手掛かり」として手元にちょっとした植物を置くことに努めているのである。

<p>“Mark the dim windows ye shall pass And see the petted myrtle here; While there upraised in tinted glass, The curling hyacinths appear.</p>	<p>汝らが通り過ぎるほの暗い窓に注意せよ そしてここに大事にされているギンバイカを見るがよい； そちらには彩られたガラスの中に高く持ち上げられた、 らせん状に巻き上がるヒヤシンスが現れる</p>
<p>The gay geranium in its pride Looks out to kiss the scanty gleam; And rosebud nurslings by its side, Are gently brought to share the beam.</p>	<p>明るいゼラニウムは今が盛り 外を見晴らすのはかすかな光に口づけるため； そしてその横のバラの蕾の宝物は、 日の光を浴びるためやさしく持ち出される</p>
<p>Hands with their daily bread to gain May oft be seen at twilight hour, Decking their dingy garret pane With wreathing stem or sickly flower.”</p>	<p>毎日のパンを得た労働者たちは 夕暮れ時に見かけられることも多かるう、 彼らのすすけた屋根裏の窓ガラスを飾るのは 花輪を作る茎や弱々しい花でもって</p>
<p>ELIZA COOK</p>	<p>エリザ・クック</p>

今世紀半ばまでは広く見られたイタリア風のデザインは、当時急拡大していた新しい花卉栽培者の花にふさわしいように容易に改造できた。「ベッディングアウト」“bedding out” [季節ごとの植え替え作業] として知られる流行が始まり、何世紀にもわたり我われの庭園の主演であった昔風の植物はこれらの新参者に席を譲るため消し去られた。モリスが1825年に書いた風景式庭園に関する随想で（*『風景式庭園に関する随想』リチャード・モリス著 1825年 *Essay on Landscape Gardening*. By Richard Morris）、彼は次のような計画を主張したが、これは当時大変新しいものであった。「フラワーガーデンの美しさは、夏の季節には自由に咲き乱

れる若くて元気な温室の植物を花壇に植えることで高まるかもしれない。温室に一定の広がりがあれば、この目的のために、十分な量の植物が毎年栽培されるべきであり、5月半ばあるいは5月末頃までに花壇に植えられなければならない。以下は、この品種の最も美しいものの仲間である：アナガリス・グランディフローラ [ルリハコベの一種] *Anagallis grandiflora*、アナガリス・モネリー [同] *Anagallis Monelli*、キダチルリソウの一種 *Heliotropium grandiflorum*、フクシアの一種 *Fuchsia coccinea*、ロベリア・エリヌスとユニデンタータ *Lobelia Erinus and unidentata*、ヘミメリスの一種 *Hemimeris urticifolia*、アルストロメリアの一種 *Alstroemeria peregrina*、ブバルディアの一種 *Bouvardia triphylla*、各種ゼラニウム、スイセンノウ *Lychnis coronaria*、キバナアマ *Linum trigynum*。これらはモリスの提案であるが、その他の植物であるペチュニア、ジニア [百日草類] *Zinnias*、ベゴニア、アゲラタム *Ageratum*、カルセオラリアなどさらに多くのものが現在ならリストに付け加えられるであろう。このほかにも、外国の植物、コリウス *Coleus*、エケベリア [ベンケイソウ類] *Echeverias*、セラステウム [ミミナグサ] *Cerastiums*、ドラセナ *Dracœnas* などがあり、あわせてアルテルナンテラ [ツルノゲイトウ類] *Alternanthera* などの絨毯花壇に使われる背の低いものがある。現在では色彩の選択、植物の配置に今まで以上の技巧が使われ、その結果優れた効果がこれらの組み合わせにより生み出されている。優美で羽飾りとも言える植物が昔ながらの花壇の植物の間に植えられ、それはたとえば単色のヴィオラ *self-coloured viola* のような下地のところに、背の高い支柱で支えられたアイビーゼラニウム、ドラセナ、カンナ *Canna* あるいはハゴロモノキ *Grevillea robusta* を植えるようなものである。当初のベッディングアウトとは、できる限り大きな炎の色を生み出すために単に花壇を花で埋めることが本来のねらいであった。トレンタム庭園は1859年に「驚くべき量のゼラニウムとカルセオラリア」として描かれており、このことだけが多くの場所での庭師たちの目標であった。

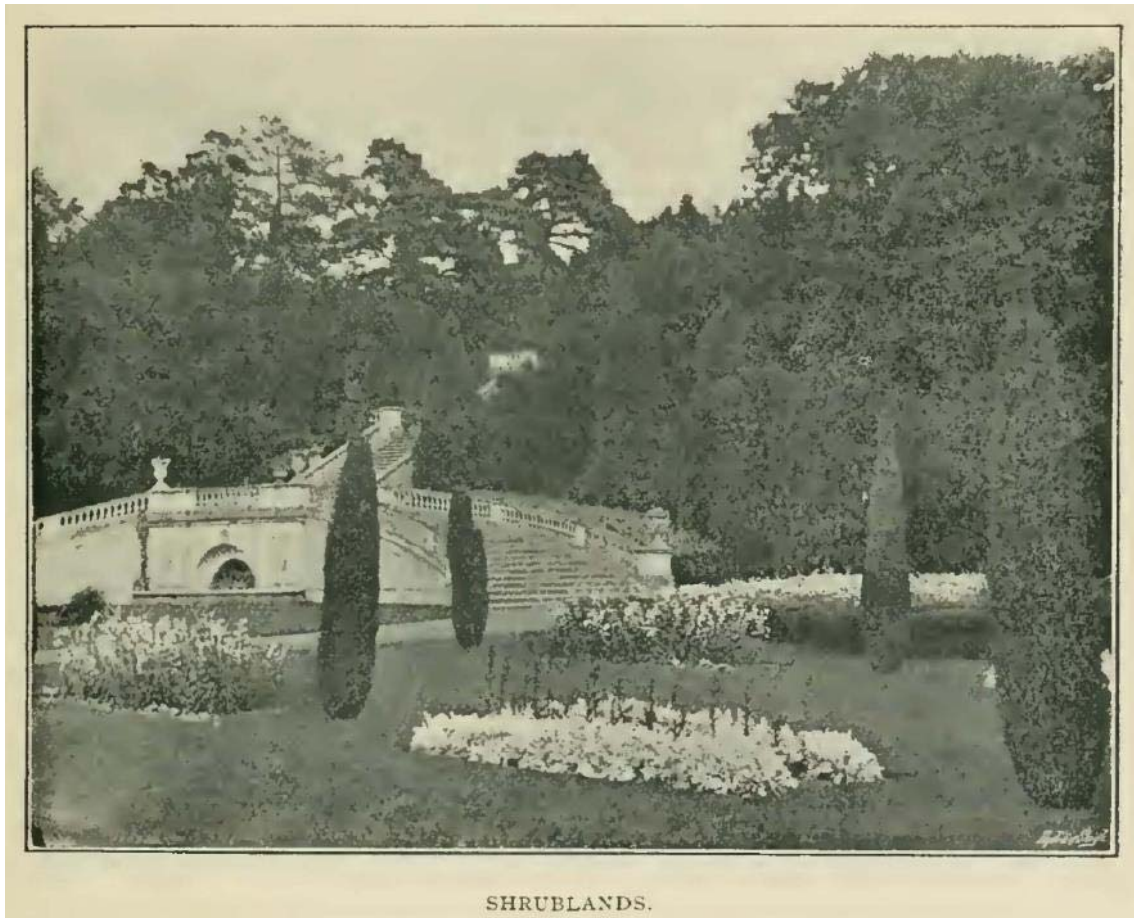
A. E. ブルック [Brooke, 1821~1910年 画家 イニシャルの A. E.は E. A.の誤りか] 著のとても大きなフォリオ版の本には、イングランドで当時一番優れた庭園と考えられるものはどういうものが示されている (*『イングランドの庭園』A. E. ブルック著 1858年)。そのほとんどがイタリアのデザインで、花壇は派手ではあるが枯れる花で埋められている。彼が説明する中には、ウォーバン、ワーズレー、イートン、トレンタム、ハワード城、そしてテドズリーについて触れられ、これらはネスフィールド [Nesfield, 1793~1881年 風景設計者] がデザインし、すべて1845年から1858年の間に設計されたものである。サー・ジョーゼフ・パクストン [Joseph Paxton, 1803~65年 造園家・建築家・政治家] はチャッツワースのデヴォンシャー公爵の造園家であり、『植物マガジン』の編集者としてよく知られていた。彼は大博覧会 [1851年ロンドンのクリスタルパレスで開かれた世界初の万国博覧会] の建築設計者であり、その功績によりナイト爵位を与えられた；その後シデナムにクリスタルパレスが移転し構造物が再建築された時、パクストンはシデナムの庭園をイタリア風に設計した。しかし好みというものはこの大雑把な事例からだけで判断されてはならない、と言うのも格式ばっ

たイタリア風デザインだからと言って魅力的な庭園はいくつも存在しているからである。既に引用した庭園のほかにも、優れた実例としてヘアウッドがある。それはヘアウッド夫人により計画され、噴水と石の手すりのデザインはサー・チャールズ・バリー [Charles Barry, 1795~1860年建築家] が行った。



[図 13-2] ヘアウッド

シュラブランズ（サフォーク、ドゥ・ソーモレズ卿の所有）の設計は 1830 年頃サー・ウィリアム・ミドルトンの手により開始された。シュラブランズの館の正面にはヘアウッドのものと同じような花壇のある広いテラスがあり、ただし噴水はなく、そこからは長い階段が下の方の半円状のテラス庭園へと続いている（図を参照）。



SHRUBLANDS.

[図 13-3] シュラブランズ

このスタイルのすべての庭園がそうであるように、ここも以前は夏が来るたびに「ベッドアウト」された。これによりどれだけ膨大な費用が掛ったかはすぐわかるし、またこのような状態で庭園を維持していくことがいかに困難なことかも容易にわかる。と言うのも、花壇が1年間のうち4カ月以外は何もないということでもない限り、春にはヒヤシンス、クロッカス、チューリップなどの花壇がなくてはならず、同じく夏になればゼラニウムなどの花壇がなければならないからである。

現在では膨大な種類の耐寒性多年草植物が栽培されており、それらはほんの少しの世話をするだけでこの国で十分生き延びるものであろう。また、もしこの中から賢明な選択がなされるならば、花壇はもっとデリケートで、初霜にちょっと触れただけで枯れてしまうような植物で夏には明るくすることができるであろう；そして庭園の美しさを相当程度長続きさせることが可能となろう。ヴィオラとか「タフテッドパンジー」 tufted pansies [スマイレを改良した小型のもの] のようなものを植えれば、早春から晩秋まで色彩の広がりが見られることになろう。シュラブランズの庭園はこのような考えのもとに、W. ロビンソン氏 [Robinson, 1838~1935年アイルランドの庭師] の提案に従って造られ、大きな成功を収めた。

花壇はバラ、ナデシコ、カーネーション、そして多くの耐寒性植物で埋められ、色彩の広がりも巧みに配置された。図版に示された一つの花壇は真ん中にベニバナサワギキョウ *Lobelia cardinalis*、縁取りにはシルバーナップウィード [銀白色 (シルバー) の葉を付けるヤグルマギクの種類] *Centaurea ragusina* を配し、これは 1 年の遅くまで衝撃的な効果を生み出した。「ベッディングアウト」への熱狂が盛り上がった時、消滅させられ、また多くの場合容赦なく引きちぎられ捨て去られた多くの耐寒性植物を、今我われの庭園に連れ戻したことは 19 世紀末の最大の改良である。それらは再び自分の適切な居場所を取り戻し、またわが国の寒い気候に耐えるような植物のリストを毎年膨らませているあらゆる新しい品種と一緒に、40 年前の堅苦しい花壇の植物の時に比べれば、はるかに素敵な効果を生み出すことが可能となろう。しかしながら誰もこれらの半耐寒性の植物をすべて捨て去ってしまうことなど望みはしないであろう。我われの温室、球根ベゴニアやその類の花により明るい色彩の強い輝きは、素晴らしい光景であり、現場の目から見ても、夏の間、この中のいくつかを外に植えることで温室の中に余地を生み出すことはよい計画である。このやり方は、庭園全体を一杯にするためガラス温室のすべてをゼラニウムの育成に注ぎ込むのとはまったく違うものである。ベーコンの目的は 1 年中すべての月で庭園に花を咲かせることで、彼はその随想の中で、一つひとつの季節について花の名をいくつか挙げている。確かにあれから 3 世紀が経った今、我われとしては彼の目標を達成できなければならず、またどの月も輝かしい花がないなどということがないようにしなければならない。

“The daughters of the year

One after one through that still garden passed,
Danced into light and died into the shade.”

SHELLEY

1 年を織りなす娘たちは

一つまた一つとあの静かな庭園を通り過ぎ、
光の中に踊りそして影の中へと消える

シェリー

近年持ち込まれた多くの植物のうち、高山植物の仲間が非常に大きく取り上げられてきた。もともとの自然の生育地が岩の上であったり、石の割れ目であったような極めて多数の植物を今我われは手にしている。原生地の丘と同じ生育環境をここイングランドにおいても、できるだけ近い形でこれらの植物に与えようとするのは実に合理的なことである。この結果、何箇所かロックガーデンが造られたが、それは昔風に石を積み上げて、ロックガーデンの名のもとで出回っていたものとはまったく違うものである。これらの新しいロックガーデンはあらゆる点でうまくいっており、この国では育つのはほとんど難しいと考えられた珍しい高山植物が今はすくすくと育てられていることからわかる。典型的なロックガーデンの図版はバツフォード (グロスターシャー州) のとても大きなロックガーデンの一部であり、これはここ数年内にミットフォード氏 [Mitford, 1837~1916 年 外交官・収集家] により造られたものである。



〔図 13-4〕 ロックガーデン バツフォード

キューのロックガーデンもよく知られた事例である。毎年そこでは興味深い新しいものを見ることができる。世界のほとんどすべてと言ってよい山岳地帯で採集された植物をロンドン市内から数マイルという自国内で完璧な姿で見るといのは素晴らしいことである。

最近数年間において展開されてきたもう一つのガーデニングは亜熱帯ガーデニングである。ロビンソン氏のご親切にも私に指摘してくれたのは、20年ほど前にパリからここにやって来たこの種のガーデニングは、「ベッディングアウト」の堅苦しさを何かしら救ってくれた、ということであった。もっとも耐寒性の花を目指す新しい動きに比べるとそれほど重要な改良とも思えないが。カンナ、カラディウム *Caladiums* などのような仲間が花壇にあると、あまり堅苦しくならなくて済むのに役立つ。また夏の数カ月はより耐寒性のある種類の木生シダ〔ヘゴ〕 *tree fern* やヤシを外に移植することで優れた結果が得ることができる。ただし一番優れたタイプの亜熱帯庭園は常設的な庭園である。イングランドの一番寒い地区においてさえ、熱帯的な様相を示す数多くの植物が育つことであろう*。

*『亜熱帯庭園』W. ロビンソン著 第2版 1879年 *The Sub-tropical Garden*. By W. Robinson

『竹の庭』バートラム・フリーマン・ミットフォード著 1896年 *The Bamboo Garden*. By Bertram Freeman Mitford

ノーフォークとサフォークでは遅霜が庭づくりをする人々にとって大変やっかいなことであるが、様々なタケ類 *bamboos* が元気に育っている；ヤダケ *Bambusa Metake*、メダケ

Simonii、ベニホウオウチク *viridiglaucescens*、それとモウソウチク *edulis* は完璧に耐寒性であり、そのほかにもメギ類 *Berberis*、タラノキ類 *Aralias*、グンネラ [オニブキの一種] *Gunnera scabra*、アリストロキア *Aristolochias*、バイカルハナウド *giant Heracleums*、ダンチク *Arundo Donax*、ウルシ類 *Rhus* とシモツケ類 *Spirea* の何品種、イタドリ *Polygonum cuspidatum*、ギョリュウ *Tamarix*、ユッカ *Yucca*、アマドコロ *Polygonatum multiflorum*、Solomons seal [*Polygonatum multiflorum* のコモンネームは Solomons seal となっており重複]、タケニグサ *Bocconia cordata*、そしてアカンサスの何種類など多くのものがあり、加えてニワウルシ *Ailanthus glandulosa* のような背の高い木とイロハモミジ *Japanese maples* がある：これらのものは、小さなシダや草などと一緒に草の上に集められると大変熱帯的な効果を醸し出した。こういう植物からなる緑の庭園というものは明るい花が咲く植物とはまた違った心地よい気分転換になるだろう。イングランドのより暖かい地区ではこれはもっと簡単に実現できるだろう。耐寒性に優れたヤシの中にはよく育っているものもあり、一般的なイングランドの木に混じってまるで自分の家に見えるものもある。

<p>“But fair the exiled palm tree grew Midst foliage of no kindred hue; Through the laburnum’s dropping gold Rose the light shaft of orient mould, And Europe’s violets faintly sweet Purpled the moss-beds at its feet.</p>	<p>しかしながら国外追放されたヤシの木は見事に育った 親戚の顔が一つもない葉っぱの中であって； キングサリの垂れ下がる金色を通して バラ 東洋の型をした軽い茎 そしてヨーロッパのスマイルはかすかに甘い香り 紫色に染まりその足元には苔の花壇</p>
--	--

<p>Strange looked it there! the willow streamed Where silvery waters near it gleamed; The lime-bough lured the honey bee To murmur by the desert tree, And showers of snowy roses made A lustre in its fan-like shade.”</p>	<p>そこでは風変わりに見えた！ ヤナギはなびき その近くで銀白色の水が輝いていた場所で； ライムの大枝はミツバチをおびき出した 砂漠の木の脇で木の葉がざわめく そして雪のようなバラのシャワーが作るのは 扇のような木陰の中の輝き</p>
---	--

Mrs. HEMANS

ヘマンズ夫人

コーンウォールの一部は気候がとても温和で多くのものがよく育つので、それらはイングランドのほかの場所では温室の植物であると考えられている。この地域には、他の恵まれない地方から来た庭師たちが腰を抜かすような庭園がいくつかある。ペンゲリック、メナビリー、ヘリガン、トレゴスナンそしてカークルーはコーンウォールの庭園の中で優れたものに属している。ツバキは立派な木に育ち (*ハンブシャー州およびその他いくつかの南部、西部の地方でも)、シッキムシャクナゲは外で開花し、ツバキカズラはツタのように雨風の当たらない壁の上に育つであろう。カークルーではシャクナゲのトムソン *Rhododendrons*

Thomsoni、ホッジソン Hodgsoni、キャンピロカルパム *campylocarpum*、アルゲンテウム *argenteum* そしてその他多くの寒さに弱い品種が昨春は花で覆われた。その庭園では多くの面白い植物がよく育っており、これらはイングランドでは普通温室に植えてあるものである。メキシカンオレンジ *Choisya ternata*、ノトロ *Embothrium coccineum*、セラリートップパイン *Phyllocladus rhomboidalis*、ボックスリーフアザラ *Azara microphylla* がその仲間で、ベンタミア *Benthamias* の種子は最初、サー・アントニー・ブラー [Anthony Buller, 1780~1866 年 法律家・政治家] によりセイロンからイングランド本国に送られ、元気に育った：それらが最初に植えられたヘリガンの庭園には、今もなおオリジナルなものの何本かが育っている。さらにもっと好ましいのがシリー諸島の気候で、最近ではこの優位性を生かしてスイセンが栽培されてきている。ドリエン・スミス氏はその栽培を始め、この10年間のうちにこの商売は着実に拡大し、何千もの切り花がロンドン市場に送られている*。島では2月に何エーカーものスイセンが開花し、これらは摘まれてロンドンに送り出される。下の図版はクチベニスイセン *Poet's Narcissus* の畑であり、そこにはかなりの数のフサザキスイセン *polyanthus* の仲間も栽培されている。ラップスイセンは最近人々の注意を特に引くようになった花である。それぞれのタイプが目を見張るほど改良されてきており、新しいラップスイセン *Trumpet* の仲間には特別に美しいものもある†。

*「35トンの花、主としてスイセン、あるいは4849個の箱に入れられた325万8000個の花、昨日シリー諸島からペンザンスに到着」—デイリーテレグラフ 1896年2月26日

†『スイセン、ラップスイセンの花』バー著 1884年 *Ye Narcissus, a Daffodil Flower* By Barre



[図 13-5] シリー諸島のスイセン
ギブソンによる写真より ペンザンス

春の庭園は今や数本のチューリップとヒヤシンスが花壇で咲いている時代ではもはやなくなって、こういったスイセンやその他多くの球根植物、たとえばシベリアツルボ *Scilla sibirica*、チオノドクサ [雪解ユリ] *Chionodoxa Luciliae* またはワイルドチューリップ *Tulipa silvestris* などが土着化できて、草の上、林間の空き地、あるいは芝生の縁に大量に植えられれば、夏の花が現れる前に鮮やかな効果をもたらすであろう。そして花が終わってもし必要ならば残っている草とともに刈ってしまうこともできる。球根栽培はイングランド北西部の工業地帯で人気のある娯楽である。このような嗜好はフランドルの織工たちが向こうから携えてきたと思われており、その昔、彼らが初めてイーストアングリア、エセックスおよびケントに移住した時、これらの植物への愛好心を低地帯国 [現在のオランダ・ベルギーなど] から一緒に持ってきたことに遡る。加えてベルボワールにも極めてうまく運営されてきたこの類の春の庭園がある。花壇は「ワスレナグサ」“Forget-me-nots”、ミニアイリス *Iris reticulata*、シベリアアイリス *Iris sibirica*、マンテマ類 *Silenes*、ヴィオラ、ニオイアラセイトウ、ヒューケラ [ツボサンゴ] *Heuchera sanguinea*、オーブリエチア [ムラサキナズナ] *Aubretias*、セラステウム [シロミミナグサ] *Cerastium tomentosum* のような花で満たされていただけでなく、多くのプリムラ、アネモネ、リンドウ類 *Gentians*、シクラメンがあり、また各種の高山植物が広大なロックガーデンに土着化されている。

低木の植え込み、草で覆われた土手とか自然の中に植物を土着化させる考えは、19世紀後半の新しい出発点でもあった。W. ロビンソン氏は、その著書『自然式庭園』 *Wild Garden* および『イングリッシュフラワーガーデン』 *English Flower Garden* を通じて、誰よりもこの趣向を取り入れるために尽力した人物である。花をこのようにして自然体で分類することにより、美しい絵のような効果を得ることができる。これは「風景式庭園」と逆のやり方で、風景式庭園が狩猟地のような外観の緑の起伏を館のところまで持ってきて、フラワーガーデンを潰してしまうのに対し：こちらはフラワーガーデンを周辺の田園の中にまで広げていくものである。自然式ガーデニングの技法を現場で実施するにあたって、すなわち、自生種ではないがわが国の気候の中で耐寒性があり、そしていったん植えられたら自生する植物を土着化すると、「整形式庭園」を消してしまう必要はなくなることになる。整形式庭園は確かに館の近くでは最もふさわしいと言えるかもしれないが、庭園のデザインは建築と調和すべきである。このような庭園は、もし寒さに弱い植物や特別な世話、処置が必要な植物を育てる時には必要である。しかし、この整形式庭園の向こう側に、何らかの適当な囲いによってそこから分離された場合、自然式庭園は、賢明な方法で植栽が施されれば今後続く面白さと喜びの源となる。ここに掲載したおよそ10フィートの高さに及ぶ何本かの巨大なユリの図版はこのような「自然式庭園」が生み出すことができる多くの効果の一つを提示している。このユリは森の中に植えられ、一面に広がりつつ元気に成長し、周りによく溶け込んでいるように見える。背景の低い茂みはゴジアオイ *cistus* の

仲間でサリーの雑木林にすべてうまく馴染んでいる（*ミスジケルの庭園、マンステッド、ゴ
ダルミング）。



[図 13-6] 自然式庭園のユリ

小川や湖の土手、さらには水そのものの中にすら、自然式ガーデニングにとっては大きな展望が開けている。マリアック [Marliac, 1830~1911年 フランス人 法律家・園芸家] によりフランスで育てられた新交配種のスイレンがフランスからこの国に来て、庭園にとって最新の仲間の一つとなり、数年のうちにその価値が認識されるようになった。日本から輸入されたユリの数々は19世紀の庭園にとって一味違う別の性格を付け加えた。耐寒性のシャクナゲとツツジの仲間は、東から西から集められ、現在ではほとんどあらゆる庭園や公開狩猟地（パブリックパーク）で強烈な絵姿を生み出しており、イングランドにこのような宝物がなかった時代を思い浮かべることがほとんど不可能なくらいである。

† バラスイレン? *Nymphaea rosea*、オトメスイレン *N. sulphurea*、ニオイスイレン *N. odorata*、マルリアケアスイレン *N. Marliacea*、その仲間、桃色 *rosea*、赤色 *rubra*、紅色 *carnea* 等 [スイレンの品種]

最近では整形形式庭園に好意的な動きが出てきており、庭園に関する昔の仕事を研究することが当然のことながらこれを増やす傾向へとつながっている。アスコットの庭園は§、ここ15年間のうちに設計されたもので、一部は整形形式となっており、昔の刈込まれたイチイとツゲの木の素晴らしいコレクションがある。これらのうち何本かは近所のコテージの庭から移植されたが、多くはオランダから持ち込まれた。その他の整形形式庭園は今世紀中にイングランドで造られてきており、これらは昔のものとその美しさは変わらない。ケント州のペンスハースト、チェシャー州のアーリー、ノーフォーク州のブリックリング、そしてサマセットのモンタキュートは広く知られた事例であるが、すべてスタイルが異なっており、またその美しさにより、整形形式庭園が持つ多くの優れた点について、文字で書かれたどんな議論も及ぶことができない明確な証言となっている。

‡ 『整形形式庭園』 *The Formal Garden* ブロムフィールドおよびトーマス共著 『庭園の技法 昔と今』

§ レイトンブザードの近く、レオポルド・ロスチャイルド氏所有

|| P.エガートン・ウォーバートン氏所有 288ページ図参照 [本誌273ページ]

庭園は家の付属物であると常に考えられ、常にそうでなければならぬと考えられたので、もし見た目をよくしたいならば、庭園は家と調和していなければならない。誰もイタリア風の館の正面にエリザベス朝の庭園を造りたいとは思わないであろうし、また逆に最新型の郊外の別荘の正面にある昔風の整形形式庭園はふさわしいとは見えないであろう。とは言え、何を選ぶかは建築、情景、気候ほか様々なことに左右されるから、様式に関して厳格で不動のルールは作ることはできない。

多くの美しい庭園がイングランド全体にわたり存在しているので、知らないとの言い訳の余地はない。庭園の設計に関わった者なら誰でも、どの様式であろうとその実例を目にすることができる。ノウル、ハム、ブロミッチ城、レスト、メルボルン、ハドンそしてレベンズなどの場所が存在しており、インスピレーションを欠くなどということはいえない。他の芸術におけるのと同じく、現代はガーデニングの発展の時代であり、もし庭園の

デザインについて丹念に研究されるならば、また傷つきやすい植物と同様に耐寒性の植物が適切に利用されたなら、19世紀の最新の庭園は、かつてイングランドで見られたどの庭園をも容易に凌駕するであろうと思われる。

(参考資料)

1. 図版一覧*

	ページ	
1. 図 1-1	カンタベリー修道院の配置図の一部	8
2. 図 1-2	カンタベリー修道院の果樹園とブドウ畑	9
3. 図 1-3	ブドウを剪定する人 アングロサクソン写本 11世紀	22
4. 図 1-4	アシュリッジ 写真	28
5. 図 1-5	ニューステッド大修道院の鷺池・鏡池 写真	29
6. 図 2-1	町なかの庭 フランスの写本 15世紀後半	35
7. 図 3-1	接ぎ木 植栽と接ぎ木の技術 レオナード・マスカル著 1592年版	50
8. 図 3-2	庭園の壁に囲まれた芝生の腰掛 バラ物語 フランダース写本 15世紀後半	51
9. 図 3-3	あずまや 同じ写本より	53
10. 図 3-4	噴水 英語写本 "Speculum" 1450年頃	55
11. 図 3-5	庭園 バラ物語のフランダーズ写本 15世紀後半	61
12. 図 4-1	『ガーデニングの偉業』 ジョン・ガードナー著 写本 1440年頃 トリニティカレッジ ケンブリッジ	68
13. 図 5-1	柵で囲われた花壇 バラ物語のフランス写本 1450年頃	83
14. 図 5-2	高台 ロッキンガム ハワード・カーター画	85
15. 図 5-3	昔のイチイの小径とロッキンガム高台 写真	86
16. 図 5-4	展望回廊のある庭園 「花、果物、動物、鳥、飛ぶ虫の第2巻」1650年	87
17. 図 5-5	庭園の館 ラウズリ ハワード・カーター画	89
18. 図 5-6	結び目花壇 『庭師のための迷宮ガイド』	90
19. 図 5-7	絵画 ハンプトンコート所蔵 柵で囲われた花壇と動物を描写	95
20. 図 5-8	庭園の古い壁沿いのアプリコットの木 リトゥルコウト ハワード・カーター画	100
21. 図 5-9	『庭師のための迷宮ガイド』より	102
22. 図 5-10	接ぎ木に使われた道具	109
23. 図 6-1	ドレイトンのアーチ型枝組みの小径 写真	119
24. 図 6-2	ボスコベル 1894年 写真	121
25. 図 6-3	ボスコベル 1660年 昔の印刷画	122
26. 図 6-4	迷路 ガーデニングの技法	124
27. 図 6-5	ヘスリントン	125
28. 図 6-6	コテージガーデンのトピアリーの例 ハドン ウィリアム・セシル卿夫人画	126

29. 図 7-1	庭師組合の勅許状	137
30. 図 7-2	ウォリックシャー州ブロミッチ城の南からの眺め	142
31. 図 7-3	ブロミッチ城 写真	144
32. 図 7-4	バーリー邸のオレンジコート バーリー所蔵の絵画	156
33. 図 8-1	ローベル ハクニーのティッセン図書館所蔵版画	165
34. 図 8-2	ジェラード 著書『植物誌』扉のページ 1597 年	167
35. 図 8-3	パーキンソン 著書『楽園』扉のページ 1629 年	170
36. 図 9-1	ブルウィック 写真	182
37. 図 9-2	ハNSTANTON マーガレット・アマースト令夫人画	184
38. 図 9-3	オランジェリーと運河 ユーストン エドモンド・プリドーのスケッチ 1716 年頃	196
39. 図 9-4	チズウィックのオランジェリー ロックの版画 1736 年	197
40. 図 9-5	レベンズ Geo. S. エルグッド画	200
41. 図 9-6	日時計 ユーストン アーリントンの紋章付き 1671 年頃 エセル・フィッツロイが写真から描いた絵	202
42. 図 10-1	バルテール ロンドンとワイズ	211
43. 図 10-2	バルテール ロンドンとワイズ	212
44. 図 10-3	キャノンズ・アッシュビーの計画 サー・ヘンリー・ドライデン作	213
45. 図 10-4	ネザトン エドモンド・プリドーのスケッチ	219
46. 図 10-5	薬剤師組合の庭園 チェルシー (1894 年) 写真	222
47. 図 11-1	インゲストリー チェトウィンド子爵卿閣下の居所 プロットの「スタッフォードシャー」より 1686 年	226
48. 図 11-2	カシオベリ エセックス伯爵の居所 ハートフォードシャー」 キップの版画	227
49. 図 11-3	ブロムホール サフォーク チャールズ・コーンウォール卿閣下 の居所の一つ キップの版画	228
50. 図 11-4	ブラマム ヴァーネット・カーター画	229
51. 図 11-5	ホール・バーン ヴァーネット・カーター画	230
52. 図 11-6	リンカンシャー州ベルトン ベイズラッドの版画	233
53. 図 11-7	ストウのパラディオ様式の橋 写真	236
54. 図 11-8	庭師協会のカタログの扉 1730 年	242
55. 図 12-1	アッシュビー城 写真	258
56. 図 12-2	バーリー ブラウンのデザインによる寺院 写真	259
57. 図 12-3	ロッシュ 大修道院 マーガレット・アマースト令夫人が 写真から描いた絵	261
58. 図 12-4	ウッドフォード NO.1 H. レプトンの図	265

59. 図 12-5	ウッドフォード NO.2 H. レプトンの同じ図 改善の提案を示している	265
60. 図 12-6	ガナズベリーパーク 庭園の寺院	267
61. 図 12-7	ナーフォード NO.1 エドモンド・ブリドーのスケッチ 1761 年頃	269
62. 図 12-8	ナーフォード NO.2 1894 年 写真	270
63. 図 13-1	アーリー 昔風の整形形式で 50 年前に設計された庭園 写真	273
64. 図 13-2	ヘアウッド 写真	287
65. 図 13-3	シュラブランズ 写真	288
66. 図 13-4	ロックガーデン バツフォード 写真	290
67. 図 13-5	シリー諸島のスイセン 写真	292
68. 図 13-6	自然式庭園のユリ 写真	294

*原書本文の図版には番号が付されていないが、本訳では便宜上各章ごとの番号を付した。
この図版一覧には本文の図版キャプションに加えて、「写真」、「画」などの出典が付記されている。なお、原書の図版一覧は目次の後に置かれている。

2. 人名一覧

歴代国王・女王（即位年）

<前史>

ケルト部族（ローマ人はブリトン人と呼んだ）

ローマ人の時代（およそ 43～410） 5 世紀半ばよりアングロサクソン人が侵入
七王国時代

<イングランド王国>

871 アルフレッド大王（～899）：デーン人を撃退

939 エドモンド王

946 エドレッド王

955 エドウィー王（あるいはエドウィッグ王）

1016 カヌート王（～35）：デンマーク王でイングランド王を兼ねる

1066 ウィリアム 1 世：征服王 <ノルマン征服>

1087 ウィリアム 2 世：赤顔王 ウィリアム・ルーファス

1100 ヘンリー 1 世：ウィリアム征服王の末子 ノルマンディー公（1106～）

1135 スティーブン・オブ・ブロア：内戦が絶えず<無政府時代>と呼ばれる

1141 モード皇后：イングランド初の女性君主 ヘンリー 1 世の子

対立王位請求者 戴冠式は行わず在位は数カ月

1154 ヘンリー 2 世：ヘンリー 1 世の孫 <プランタジネット朝の始祖>

1189 リチャード 1 世：獅子心王

1199 ジョン王：失地王 <マグナカルタに署名 1215 年>

1216 ヘンリー 3 世：ジョン王の子

1272 エドワード 1 世：ウェールズを征服、スコットランド征服は失敗

1307 エドワード 2 世

1327 エドワード 3 世：フランスの王位継承権を主張 王妃はフィリッパ・オブ・エノー
<100 年戦争 1337～1453 年>

1377 リチャード 2 世：エドワード 3 世の長男、黒太子エドワードの子

従兄弟のヘンリーにより廃位に追い込まれ、バラ戦争の発端に

1399 ヘンリー 4 世：ランカスター家（赤バラ）初代 エドワード 3 世の三男の子

1413 ヘンリー 5 世：武勇に優れ仏軍に大勝するが若くして急逝

1422 ヘンリー 6 世：1 歳で即位 ランカスター家最後の王

*スコットランド国王のジェームズ 1 世 [在位 1406～37 年] ウィンザー城に幽閉

<バラ戦争 1455～1485 年> ヨーク公リチャード（白バラ）の反乱

- 1461 エドワード 4 世
- 1483 エドワード 5 世：叔父のグロスター公（次のリチャード 3 世）に王位を奪われる
- 1483 リチャード 3 世：ヨーク家最後の王
- 1485 ヘンリー 7 世：ランカスター家ヘンリー・チューダーが勝利 <チューダー朝>
エドワード 4 世の長女、ヨークのエリザベスを王妃に迎え両家の争いに終止符
- 1509 ヘンリー 8 世：カトリック教会と決裂、修道院解散。イングランド国教会創設
- 1547 エドワード 6 世
- 1553 メアリー 1 世：「流血のメアリー」プロテスタントを火刑に
- 1558 エリザベス 1 世 <エリザベス朝> シェークスピア（1564~1616）
- 1603 ジェームズ 1 世 <スチュアート朝>
処刑されたスコットランド女王メアリー・スチュアート（1542~87 年）の子
- 1625 チャールズ 1 世：王妃ヘンリエッタ・マリア
<1649 清教徒革命 共和国樹立>
- 1660 チャールズ 2 世 <王政復古>
- 1685 ジェームズ 2 世（イングランド&アイルランド）・4 世（スコットランド）
<1688 名誉革命>
- 1689 ウィリアム 3 世：オレンジ公ウィリアム オランダ貴族（母はチャールズ 1 世の娘）
女王メアリー 2 世と 1694 年まで共同統治（メアリーの父はチャールズ 1 世の息子、
ジェームズ 2 世）二人の間に子がなかったので妹のアンが王位に
- 1702 アン女王：ジェームズ 2 世の子 スチュアート家最後の王
<1707 イングランドとスコットランドの連合法>
- 1714 ジョージ 1 世 <ハノーバー朝>
- 1727 ジョージ 2 世：キャロライン女王（1683~1737）オーストリア継承戦争
- 1760 ジョージ 3 世
- 1820 ジョージ 4 世：キャロライン女王（1763~1821）
- 1830 ウィリアム 4 世：ジョージ 4 世の弟
- 1837 ヴィクトリア女王： 同 孫
- <本書出版以降>
- 1901 エドワード 7 世
- 1910 ジョージ 5 世
- 1936 エドワード 8 世：シンプソン夫人との「王冠をかけた恋」で退位
ジョージ 6 世
- 1952 エリザベス 2 世
- 2022 チャールズ 3 世

ガーデニングに関する作家等（五十音順）

- ①姓：名、生没年、主な職業等を記載。出身地の記載がない人物はイングランド出身。人物像については本書から適宜引用。
- ②同姓の場合は、名の五十音順。王侯貴族の称号のうち、英国の卿（Lord）は見出し語に含めるが、一代限りのサー（Sir）は省く。姓の前のフォン（von）、ドウ（de）などの小文字で表記される一種の称号は見出し語からは省く。
- ③見出し語の配列については、朝倉書店『世界地名大辞典』を参照し、清音（ヒ）、濁音（ビ）、半濁音（ピ）の順に配列、促音（ヒッ）・拗音（ヒャ）を含む小字は直音の後に置いた。長音（ヒー）の符号は無視、ただし、同音の場合は符号のないものを優先。

（ア行）

アシュモール Ashmole：Elias～, 1617～92年 古物収集家

アシュレイ Ashley：Sir Anthony～, 1551～1628年 枢密院書記長 ドーセット州
イングランドで最初にキャベツを植えた人物

アディソン Addison：Joseph～, 1672～1719年 随筆家・詩人・政治家
『スペクテイター』 *Spectator* 414号（1712年6月25日）

アトキンス Atkyns：Sir Robert～, 1647～1711年 地誌学者・古物収集家・政治家
The Ancient and Present State of Glostershire（1712年）

アーバクロンビー Abercrombie：John～, 1726～1806年 スコットランドの園芸家 造園
技術の革新に貢献 『誰でも自分の庭師』 *Every Man his own Gardener : Being a New ,
and Much More Complete, Gardener's Kalendar Than Any One Hitherto Published*
Thomas Mawe との共著 『素人のためのガーデニング』 *Amateur Gardening* 『園芸愛
好家のための日々の友』 *Gardener's Daily Assistant*

アプレイウス Apuleius：紀元4世紀頃の人物
『植物誌』 *Herbarium* はディオスコリデスとプリニウスの著作を基礎

アランデル公爵 Duke of Arundel：Henry FitzAlan：1512～80年 廷臣・オックスフォード
大学総長 ヘンリー8世が手掛けたノンサッチ宮殿のデザインを実行

アール Earle : John~, 1824~1903 年 オックスフォード大学教授 (アングロサクソン語)
『植物の (初期) 英語名』 (*Early-English Plant Names from the Tenth to the Fifteenth Century*) (1880 年)

アルフリック Ælfric : 955~1020 年 大修道院長・文法学者 『文法』 *Grammatica*

アレクサンダー3世 Alexander III : 1105?~81 年 ローマ教皇
1175 年の教皇勅書は果樹園が早くから存在していたことの証明のためよく引用される。

アンセルム Anselm : 1033 頃~1109 年 カンタベリー大司教

アンドリュウ Andrewe : Laurens~, 1510~37 年に活動 カレー出身 (当時はイングランド
が支配) の翻訳家・出版業者 『あらゆる種類のハーブ汁の蒸留に関する実用書』 *The
vertuose Boke of Distyllacyon of the Waters of all manner Herbs* (1527 年)

アンドルース Andrews : Henry Cranke ~, 活動期 1794~1830 年 植物学者・植物画家・版
画家

イーヴリン Evelyn : John ~, 1620~1706 年 日記作者・造園家
『森林樹木』 *Sylva or A Discourse of Forest-Trees and the Propagation of Timber*
『造園家年鑑』 *Kalendarium Hortense, Gardeners' Almanac* (1664 年・1705 年)

ヴァイヤン Vaillant : Sebastien ~, 1669~1722 年 フランスの植物学者

ヴァージル Vergil : Polydore ~, 1470 年~1555 年 イタリア生まれ人文学者・歴史家・聖
職者 1502 年にイングランドに渡り「イングランドの歴史の父」
『発明と起源の歴史』 第 2 巻 *De rerum Inventoribus, Lib.II.* (1499 年)

ヴァンブラ Vanbrugh : Sir John ~, 1664~1726 年 劇作家・バロック様式の建築家
喜劇『じらされた女房』 *The Provok'd Wife*

ウィットル Whittall : Edward ~, 1851~1917 年 オスマン帝国生まれの商人・アマチュア
植物学者

ヴィーチ Veitch : John ~, 1752~1839 年 スコットランドの園芸家 ヴィーチ園芸 Veitch
Nurseries の設立 息子 James ~, 1792~1863 年 その息子 James Junior ~,

John Gould ~, 1839~70年 園芸家・プラントハンター（富士山の植生分布調査）
『ラン科植物のマニュアル』第10部 ジェイムズ・ヴィーチ商会著 1894年
A Manual of Orchidaceous Plants, part x, By James Veitch and Sons

ウィラビイ Willoughby : Francis ~, 1635~72年 博物学者

ウィリアム（マームズベリーの） William of Malmesbury : 1090頃~1143年頃 年代記編者
『現代史』 *Historia nouvella*

ウィリス師 The Rev. Robert Willis : 1800~75年 機械工学・音声学・建築史 M.A. 英国学士院会員 F.R.S. (Fellow of the Royal Society)
『カンタベリー・クライストチャーチ修道院の建築の歴史』 *Architectual Hist. of the Mon. of Christ Church, Canterbury.*

ウィルキンズ Bishop Wilkins : John Wilkins, 1614~72年 聖職者・自然哲学者。ウィルキンズは *An Essay Towards a Real Character and a Philosophical Language* の中で、動物 Zi、犬類 Zit、犬 Zita のような分類法を普遍的言語として提案

ウィルキンズ Wilkins : David ~, 『宗教会議』 *Concilia*
『大ブリテン及びアイルランド宗教会議』 *Concilia Magnae Britanniae Et Hiberniae*
ジョージ2世のためにウィルキンズが編纂か 1780年までにはウィンザー図書館所蔵

ウィンダバンク Windebank : Thomas ~, 1538~1607年
バーリー卿ウィリアム・セシルと親しく、レモン、マートルの木をパリから送る。

ウェッジウッド Wedgwood : John ~, 1766~1844年 園芸家 陶器製造のジョサイア・ウェッジウッドの長男 園芸協会の創始者の一人

ウェブ Webb(e) : John ~, 1611~72年 建築家

ウェルギリウス Virgil : 紀元前70~19年 古代ローマの詩人 『農耕詩』 *Georgics*
『アエネーイス』 *The Aeneid*

ヴェンデンハイム Vendenheyen : Johann Jacob Wurmsser von Vendenheim, 1552~1610年
[1610年ヴェルテンブルク公爵フレデリックがイングランド等を訪問、グローブ座でオペラの観劇、その旅行の様子をフランス語で記録]

ウォートン Wharton : Henry ~, 1664~95 年 著作家 『イングランドの聖職者』 *Anglia Sacra*. 1691 年 [イングランドの archbishop、bishop の生涯を描いた]
『ロンドンの聖職者の歴史』 *Historia de Episcopis (=bishop) et Decanis(=dean) Londiniensibus* (1695 年)

ウォットン Wotton : Sir Henry ~, 1568~1639 年 詩人・外交官

ウォラー Waller : Edmund ~, 1606~87 年 詩人・政治家

ウォルシンガム Walsingham : Sir Francis ~, 1532 頃~90 年 エリザベス女王の重臣
アプリコットの育て方について

ウォールデン Walden : Roger de ~, 1406 年没 大蔵卿 ロンドン司教

ウォールトン Walton : Isaac ~, 1593~ 1683 年 随筆家 『釣魚大全』 *The Compleat Angler* (1653 年初版)

ウォルポール Walpole : Horace [ホーラス] ~, 1717~97 年 政治家・小説家 初代首相ロバート・ウォルポールの 3 男 『現代のガーデニングに関する随想』 *Essay on Modern Gardening* (1785 年)

ヴェルテンブルク公爵 Duke of Wurtemberg : Fredrick ~, 1557~1608 年 エリザベス女王に騎士への叙任を嘆願したドイツ人 [正しくは Württemberg]

ウルジー Wolsey : Thomas ~, 1475?~1530 年 枢機卿 ローマ教皇からヘンリー 8 世の離婚許可が得られず大逆罪に問われた。ハンプトンコート、ヨークプレイス (後のホワイトホール宮殿) の庭園の設計に関与

エアドメア Eadmer : 1060 頃~1126 年頃 歴史家・神学者 『イングランドの新しい歴史』 *Historia novorum in Anglia*

エイズラビー Aisleby : John Aislabie または Aslabie, 1670~1742 年 大蔵卿の時、南海泡沫事件 (1720 年) があり失脚。父ジョージがヨークシャー、リボンに近い Studley Royal の資産家 Mary Mallory と結婚、1693 年に母方の資産を相続、1716 年頃からイングランドで初めて自然な風景式庭園を造る。

エイトン Aiton : William ~, 1731~93年 スコットランドの植物学者 ケンジントンとキューの王室庭園師 『キューの植物』 *Hortus Kewensis*
息子は William Townsend Aiton : 1766年生まれ 植物学者

エグモント卿 Lord Egmont, Earl of Egmont : アイルランドの貴族 初代はパーシヴァル子爵 (1733年)、2011年に途絶 ストウ庭園を描写した手紙

聖エセルドゥレーダ St. Etheldreda : 679年没 元はイーストアングリアの王女
イーリーの創設者・女子修道院長

エドワーズ Edwards : Thomas~, 植物学者、イングランドの野生の花の収集家

エリス Ellis : Sir Henry ~, 1777~1869年 大英博物館主席司書
『ドゥームズデイ・ブック概説』 *A General Introduction to Domesday Book* (1816年)

オクセンデン Oxenden : Henry ~, 1609~70年 詩人

オースティン Austin : Thomas ~, 『2冊の15世紀料理本』 *Two Fifteenth Century Cookery Books*

オースティン Austen : Ralph ~, 1612頃~76年 ガーデニング・農業の作家
リンゴ酒を飲み物として広めた。『果樹園または果樹の庭園の宗教的活用』 *The Spiritual use of an Orchard or Garden of Fruit Trees*

オックスフォード卿 1st Earl of Oxford & Earl of Mortimer : Robert Harley, 1661~1724年
アン女王の晩年、政権を率いユトレヒト条約を締結 デフォー、スウィフトのパトロン
エセックスのダウンホール庭園の共同所有者

(カ行)

カイマー Kymer : Gilbert ~, 1463年没 ヘンリー5世、6世の侍医・オックスフォード大学総長 『健康管理のための食事』 *Dietarium de Sanitatis Custodia*

ガウアー Gower : 1330?~1408年 詩人

カウリー Cowley : Abraham ~, 1618~67年 詩人・随筆家

カエサルピヌス Caesalpinus : Andreas~, 1524~1603 年 イタリア人の医師・植物学者

カクストン Caxton : William ~, 1422 頃~92 年頃 商人・外交官・作家
イングランドで初めて印刷機を導入、本の小売りを始めた最初のイングランド人

ガスケット Gasquet : Francis Aidan, 1846~1929 年 カトリック枢機卿 歴史学者
『ヘンリー8世とイングランドの修道院』 *Henry VIII. and the English Monasteries*
(1888 年)

カスバート Cuthbert : 635 頃~87 年 ノーサンブリアの聖人

カーティス Curtis : Charles ~, 1853~1923 年 植物学者 ヴィーチ商会からマダガスカル、
ボルネオ、スマトラ、ジャワ、ペナン等へ植物収集のため派遣

ジョン・ガードナー Ion Gardener : 実践的な詩人 『ガーデニングの偉業』 *The Feate of Gardening*

カトレイ Cattley : William ~, 1788~1835 年 商人・園芸家
世界各地から植物を収集し、特にランを愛好した

カニングガム Cunningham : William ~, 1849~1919 年 「ウォルター・ドゥ・ヘンリー『農業』入門」 Introduction to Walter de Henley's *Husbandry*.

ガフ Gough : Richard ~, 1735~1809 年 古物収集家 『キャムデン』の編纂 (1806 年)

カペル卿 Lord Capel : Arthur~, 1631~83 年 王党派でガーデニングの偉大なパトロンの人。1648 年に処刑されたカペル卿 [1608~49 年? 王党派支持] の息子
その弟サー・ヘンリー・カペル, 1638~96 年 造園家

カリヤメラ Columella : Lucius Junius Moderatus~, 4~70 年頃 ローマ帝国における農業に関する著作家

カール Karr : Alphonse ~, 1808~90 年, フランスの作家・ジャーナリスト
1855 年ニースに転居、花を偏愛し、リビエラで切り花の商売を開始

カラム Kalm : Pehr ~または Peter~, 1716~79 年 フィンランドの探検家、植物学者、農業
経済学者、リンネの伝道者 1747 年スウェーデン王立科学アカデミーにより北米に植物
収集のため派遣

ガレン Galen : 130?~199? 年 ギリシャの医学者

キーツ Keats : John~, 1795~1821 年 ロマン主義の詩人

キップ Kip : Johannes "Jan" Kip : 1652/53~1722 年 オランダ人 製図家・版画家
『ブリタニア・イラストラータ』 *Britannia Illustrata* (1709 年) 別名 *Views of Several of
the Queens Palace and also of the Principal Seats of the Nobility & Gentry in Great Britain*

ギブソン Gibson : 『ロンドン周辺の庭園』 *Gardens about London* (1691 年)

キャヴェンディッシュ Cavendish : George~, 1497~1562 年 ウルジーの伝記作家

カムデン Camden : William~, 1551~1623 年 古物研究家・歴史家

ギャレット Garret : James~, フランドルの薬剤師 ロンドン在住 熟練の庭師
ジェラードの『植物誌』の校正の手伝い、特にチューリップの栽培に長けていた。

ギルバート Gilbert : Samuel~, 1692 年? 没 聖職者・花卉栽培の著作家
『花卉栽培者必携便覧』 *Florist's vade mecum* (*第 2 版, 1683 年)

ギルピン Gilpin : William~, 1724~1804 年 聖職者・作家 旅行記で有名 風景画をもと
にピクチャーレスクの発案者の一人
『絵画的美しさについての 1772 年の考察、特に山と湖について』 *Observations on
Picturesque Beauty made in 1772, Particularly the Mountains and Lakes*
『絵画的美しさについての考察、1776 年、特にスコットランドのハイランドについて』 *Obs.
on Picturesque Beauty, 1776, Particularly the Highlands of Scotland.*

クック Cook : Eliza~, 1818~89 年 著作家・詩人 政治改革を目指すチャーチスト運動
に関与。女性の政治的自由の主唱者として、イングランド、アメリカの労働者階級から
人気が高かった。

クック Cook(e) : Moses~, 17 世紀後半に活躍した造園家 *The Manner of Raising, Ordering,*

and Improving Forest and Fruit-Trees , How to Plant, Make and Keep Woods, Walks, Avenues, Lawns, Hedges, etc. (1676年初版)

グーゲ Googe : Barnaby ~, 1540~94年 田園詩人・翻訳家

グッディヤー Goodyer : John ~, 1592~1664年 植物学者

クーパー Cowper : William ~, 1731~1800年 詩人 『庭園』 *The Garden*

グリッ Glynn : Thomas ~, 17世紀 植物収集家

グリーン Green : Everard ~, 1844~1926年, 英国紋章院 F.S.A. [ロンドン古物収集協会フェロー]

グリーン Greene : Robert ~, 1558~92年 当時の人気劇作家
『狂えるオルロランドの歴史』 *The History of Orlando Furioso*

グリンダル主教 Bishop Grindal : Edmund ~, 1519頃~83年 エリザベス朝の聖職者
ロンドン主教、ヨーク・カンタベリー大主教 フラムの庭園にギョリュウを持ち込んだ。

クルシウス Clusius (シャルル・ド・レクリューズ Charles de l'Excluse) : Carolus~, 1526
~1609年 フランス生まれのフランドルの医師・植物学者
オーストリアの植物を研究するために、高山に登った最初の植物学者

クレサン Crescens : Pierre de' ~, 1230~1320年頃 イタリア・ボローニャ出身
イタリア農学の父 [イタリア語では Pietro de' Crescenzi]
『田園および田舎の恵み』 編纂 *Livre des profits champetres et ruraux* または *Rustican*

グローステスト Grosseteste 司教 : 1175~1253年 神学者・聖職者

グロノヴィウス Gronovius : Jan Frederik ~, 1690~1762年 オランダの博物学者
リンネの支援者

ケイツビー Catesby : Mark ~, 1682~1749年 博物学者
北米の植物相 flora・動物相 fauna について初めて出版 『カロライナ、フロリダおよび
バハマ諸島における自然史』 *Natural History of Carolina, Florida and the Bahama Islands*

(1729 から 1747 年の間)

ゲイル Gale : Thomas ~, 1635 頃~1702 年 古典学者 『ブリテンの歴史』 *Hitoriaæ Britannicæ* (1691 年)

ゲイル Gale : Roger ~, 1672~1744 年 学者・古物収集家・政治家
1738 年に写本をトリニティカレッジに寄贈

ゲスナー Gesner : Conrad von~, 1516~65 年 スイスの博物学者・医者
『動物史』 *Historia animalium* は動物学の草分け

ゲラルド Guérard : M. Benjamin ~, 1797~1854 年 フランス 歴史家
『サンジェルマン・ドゥ・プレ大修道院長イルミノン土地台帳』 *Polyptyque de l'Abbé Irminon* (1844 年)

ケント Kent : William ~, 1686~1748 年 建築家・造園家

ケンブル Kemble : John Mitchell ~, 1807~57 年 歴史学者 アングロサクソンの歴史、古英語の研究 『(アングロサクソンおよびノルマンの) 法律行政公文書』 *Codex Diplomaticus Aevi Saxonici*

コケイン Cockayne : Thomas Oswald ~, 1807~73 年 聖職者・言語学者
『初期イングランドの薬草および植物知識』 *Leechdom and Wortcunning of Early England* (1864 年)

コットン Cotton : Sir Robert Bruce ~, 1571~1631 年 写本収集 (現在は大英博物館が所蔵)

コバム卿 Lord Cobham : Richard Temple, 1675~1749 年 コバム男爵・子爵
父はリチャード・テンプル準男爵 ブラウンがストウ庭園のキッチンガーデンの庭師として働いた。

コリンソン Collinson : Peter ~, 1694~1768 年 植物学者・商人

コールズ Coles : William~, 1626~62 年 植物学者 『薬草の使用法』 *The Art of Simpling* (1656 年) 薬草 (simples) に関する「薬の使用法の教義」で有名。この教義はディオスコリデス、ガレンの時代に遡り、体の各部に似た薬草をその部位の治療に使うとい

うもの。コールズにより、それは神が人間に示されたものという神学上の正当化がなされた。

ゴールドスミス Goldsmith : Oliver ~, 1728~74年 アイルランドの小説家・劇作家・詩人
田園詩 *The Deserted Village* (1770年)

コンプトン主教 Bishop Compton : Henry ~, 1632~1713年 ロンドン主教 植物学者でもあった。ノザンプトン伯爵家の生まれ、ケンブリッジ、オックスフォードで学ぶ。

(サ行)

サウスコウト Southcote : Philip ~, 1698~1758年 軍人・風景式造園家

サックリング Suckling : Sir John ~, 1609~1642年 イングランドの宮廷でもてはやされた
王党派の指導者・詩人・劇作家 ; *Aglaura* (1637年) *Fragmenta Aurea* (1646年)
「結婚式にあたってのバラード」 A Ballad upon a Wedding

サーティーズ Surtees : Robert ~, 1779~1834年 歴史家・ダラムの古物収集家
Surtees Society (サーティーズ協会) サーティーズを顕彰して 1834年に設立された文書
出版協会

サリー伯爵 Earl of Surrey : Henry Howard, 1517?~47年
イングランドのソネットの父と言われる詩人 刑死

サル Salle : Robert ~, 15世紀における接ぎ木の権威

サワビー Sowerby : Charles ~, 1757~1822年 博物学者・博物画家

サンダース Sander : Henry Frederick Conrad ~, 1847~1920年 ドイツ生まれ 種苗業者
ランの輸入、販売で有名 一時期 23人の植物採集者を雇用

シーヴキング Si(e)veking : Albert Forbes ~, 1857~1951年
『庭園賛歌』 *The Praise of Gardens*

ジーケル Jekyll : Gertrude [ガートルード] ~, 1843~1932年 園芸家・庭園デザイナー・
著作家 英国、ヨーロッパ、米国で 400以上の庭園を設計

シャロック Sharrock : Robert~, 1630~84年 聖職者・植物学者

『ガーデニング技法の改善』 *An improvement in the Art of Gardening*, 第3版 (1694年)

ジュシュー Jussieu : Antonie Laurent de~, 1748~1836年 フランス人植物学者

シェークスピア Shakespeare : William~, 1564~1616年 劇作家・詩人

本書で引用されている作品：『テンペスト』、『ウィンザーの陽気な女房たち』、『尺には尺を』、『恋のから騒ぎ』、『恋の骨折り損』、『じゃじゃ馬ならし』、『十二夜』、『ヘンリー4世第1部』、『ヘンリー4世第2部』、『ヘンリー6世第2部』、『コリオレーヌス』、『ロメオとジュリエット』、『ハムレット』、『アントニオとクレオパトラ』、『恋人の嘆き』

シェーファー Schœffer : Peter~, 1425頃~1503年頃 ドイツ・マインツの印刷業者

『薬草実用百科』 *Aggregator Practicus di Simplicibus* の出版 (多分1475年~80年の間)

シェラード Sherard : William~, 1659~1728年 当時ジョン・レイに次ぐ優れた植物学者

ジェラード Gerard : John~, 1545~1612年頃 植物学者、ロンドンに大庭園を所有

『植物誌または植物の一般史』 *The Herball or General Historie of Plantes* (1597年)
通称ジェラードの『植物誌』 *Gerard's Herbal* バーリー邸の庭園を管理

シェリー Shelly : Percy Bysshe~, 1792~1822年 ロマン派詩人 ベジタリアン

シェンストーン Shenstone : William~, 1714~63年 詩人・風景式庭園の初期実務家

『ガーデニングに関する断想』 *Unconnected Thoughts on Gardening*

イニゴ・ジョーンズ Inigo Jones : 1573~1652年 建築家・舞台装置家

初期英語文献協会 Early English Text Society (E. E. Text Soc.)

1864年創設 印刷出版されていない初期の英語の文献の翻刻、出版を目的とする協会

ジョンソン Johnson : George William~, 1802~86年 ガーデニングに関する著作家

『イングリッシュガーデニングの歴史』 *A History of English Gardening, Chronological, Biographical, Literary, and Critical* (1829年)

ジョンソン Johnson : Thomas~, 1644年没 英国野外植物学の父 王党派

ジョンソン Jonson : Ben ~, 1572~1637 年 劇作家・詩人

『癖者ぞろい』 *Every Man in his own Humour*

スウィツァー Switzer : Stephen~, 1682~1745 年 造園家 風景式庭園の初期主唱者

『田園の設計』 *Ichnographia Rustica* (1718 年)

スキート Skeat : Walter William~, 1835~1912 年 言語学者・辞書編纂者；中英語の研究者；*A Concise Dictionary of Middle English* (1888 年)

スケルトン Skelton : John~, 1463 頃~1529 年 桂冠詩人・ヘンリー8世の王子時代の家庭教師 『月桂冠』 *Garlande of Laurell*

スコット Scott : Sir Walter ~, 1771~1832 年 スコットランドの詩人・小説家・歴史家

ズーシュ卿 Lord Zouche : Edward la~, 1556~1625 年

園芸を推進、ローベルのバトロンでハクニーの薬草園をローベルが管理

スタンレー主席司祭 Dean Stanley : Arthur Penrhyn ~, 1815~81 年

『カンタベリー歴史記録』 *Historical Memorials of Canterbury* (1855 年)

スチュアート Stuart : Sir Henry ~, 1759~1836 年 スコットランド地主 農業改良者・軍人・古典学者 『植物栽培者ガイド』 *The Planter's Guide* (1828 年)

ストウ Stowe (または Stow) : John~, 1525 頃~1605 年 歴史家・古物収集家

『年代記』 *Annals* 『ロンドン概観』 *Survey of London*. Ed. (1598 年)

スピーチリー Speechly : William ~, 1735~1819 年：ポートランド公爵の庭師頭 パイナップルとブドウの栽培で有名 『ブドウの木の栽培』 *Culture of the Vine* (1790 年)

スピード Speed : Adam (別名 Adolphus) ~, 活動時期 1647~59 年

『エデンの園から追放されたアダム』 *Adam out of Eden* (1659 年)

エドマンド・スペンサー Edmund Spenser : 1552 頃~1599 年 詩人

『妖精の女王』 *The Faerie of Queene* (初版 1590 年 第1巻~第3巻；再版 1596 年 第4巻~第6巻を追加) 『時の廃墟』 *Ruins of Time* (1591 年 詩集 *Complaints* 所収)

スローン Sloane : Hans ~, 1660~1753 年 アイルランドの医師・収集家
コレクションを政府に遺贈し、大英博物館の元になる

ソープ Thorpe : John ~, 1565 頃~1655 年? 今では普遍的な様式である「廊下」を採用。
それまでは enfilade (縦列: 部屋などを向かい合わせに平行して規則的に配置)

ソールズベリー Salisbury : Richard Anthony (誕生時は~ Markham) ~, 1761~1829 年 植
物学者 リンネの分類法に反対 信頼のおけない人物とされる

(タ行)

ダイアー Dyer : John ~, 1699~1757 年 ウェールズ人の詩人・画家・聖職者
「グロンガーヒル」 “Grongar Hill”

ダイス Dyce : Alexander ~, 1798~1869 年
「R. グリーンおよび G. ピールの演劇と詩の作品」 Dramatic and Poetical Works of R.
Greene and G. Peele. ダイス編 (1861 年)

ダイモック Dymock : Cressy ~, ハートリブ [1600~62 年] と同時代。ハートリブ著『農
業の遺産』の中にその書簡を所収

ダーウィン Darwin : Erasmus ~, 1731~1802 年 医者・自然学者・詩人
チャールズ・ダーウィンは孫

タギー Tuggy : Ralph ~, 1632 年没 17 世紀初頭にウェストミンスターで活躍した有名な
種苗・花卉栽培者

タキトゥス Tacitus : 1~2 世紀頃 ローマ帝政時代の歴史家・政治家

ダグデイル Dugdale : Sir William ~, 1605~86 年 中世の歴史の学問の発展に寄与
『イングランドの修道院』 *Monasticon Anglicanum, or, The history of the ancient abbies,
and other monasteries, hospitals, cathedral and collegiate churches in England and Wales*

ダグラス Douglas : David ~, 1799~1834 年 スコットランドの植物学者

タッサー Tusser : Thomas~, 1524 頃~80 年 詩人・農民
『農業で成功する 100 の要点』 *One hundred Pointes of Good Husbandrie* (1557 年)

『農業で成功する 500 の要点』 *Five Hundred Pointes of Good Husbandrie* (1573 年)

ダートマス伯爵 Earl of Dartmouth : George Legge, 1755~1810 年 初代園芸協会会長
アメリカ独立戦争当時の政治家 慈善事業家

ターナー Turner : William ~, 1509/10~68 年 英国植物学の父
『植物に関する小冊子』 *Libellus de Re Herbaria* (1538 年)
「ハーブの名前」(1548 年) 『植物誌』 *Herbal* (1551 年) 「第 2 部」は 1562 年

ダール Dahl : Anders ~, 1751~89 年 スウェーデン 植物学者 リンネの弟子

ダンキン Dunkin : John ~, 1782~1846 年 地誌作者
『オックスフォードシャー州、ブリントンおよびプラウリー村の歴史と古物』(1823 年)
Oxfordshire, the History and Antiquities of the Hundreds of Bullington and Ploughley

ダンビー伯爵 Earl of Danby : Henry Danvers, 1573~1643 年
オックスフォード植物園を創設し寄付

チャイルド Child : Sir Richard ~, 1680~1750 年 政治家
パラディオ式の豪勢な館、ワンステッドハウスの建築で知られる。

チャイルド Child : Robert ~, 1613~54 年 医師・農学者

チェインバーズ Chambers : Sir William ~, 1723~96 年 スウェーデン生まれ 建築家
キューガーデンのパゴダ、サマセットハウスの設計 18 世紀イギリス建築に大きな影響
ロイヤルアカデミー創設メンバーの一人 『東洋のガーデニングに関する論文集』
Dissertations on Oriental Gardening

チェトウィンド Viscount Chetwynd : Walter ~, 1678~1736 年 ウィッグ党政治家
アイルランドの貴族の称号 (1717 年) イングストリホールは 17 世紀ジャコビアン様式の
邸宅

チョーサー Chaucer : Geoffrey ~, 1340 頃~1400 年 詩人
『カンタベリー物語』 *The Canterbury Tales* 『バラ物語』 *Romaunt of the Rose*
『鳥の会議』 *Assembly of Fowles*

ディオスコリデス Dioscorides : Pedanius~, 40 頃~90 年頃 古代ローマの薬理学、薬草学の父。小アジアのキリキア出身 皇帝ネロの時代のギリシャ語著作家・ローマ軍医
On Medical Materials 『薬物誌』(『ギリシア本草』とも)をまとめた。「理論より事実を、書物より自分の観察を重視して編集した」と記している通り、非常に明快で実用的な本草書。扱っている植物は東地中海のギリシャ語を話す地域に限られているからこの地域の外には旅行しなかったのでは。

ディズレイリ D'Israeli : Isaac ~, 1766~1848 年 著作家・歴史家 ディズレイリ首相の父
『文学の楽屋裏』 *Curiosities of Literature*

デイル Dale : Samuel ~, 1659~1739 年 博物学者・医師

デニス Dennis : Jonas, ~ 1776?~1846 年
『風景式造園家』 *The Landscape Gardener* (1835 年)

テニスン卿 Lord Tennyson : Alfred ~, 1809~92 年 桂冠詩人

テラフラストス Theophrastus : BC372?~286? 年 ギリシャ逍遥学派の哲学者・植物学者

テンプル Temple : Sir William ~, 1628~99 年 政治家・随筆家

ドゥ・アシェリ D'Achery : Jean Luc ~, 1609~85 年 フランス人聖職者 中世写本の研究・出版
『拾遺集』 *Spicilegium* [落穂拾いの意] (1723 年パリ)
Spicilegium, sive Collectio veterum aliquot scriptorum qui in Galliae bibliothecis, maxime Benedictinorum, latuerunt" (1655-1677 年パリ)

ドゥ・コー De Caux (Isaac de Caus) : Salomon~, 1590~1648 年 造園家・建築家
ディエップ Dieppe (ノルマンディー、英仏海峡に面した港町、Caux は地名) 生まれ、ユグノー、イングランドには 1620 年代に来て 1634 年に帰化
『ウィルトンの庭園』 *Le Jardin de Wilton* (1615 年)

ドゥーディ Doody : Samuel ~, 1656~1706 年 植物学者 チェルシー薬用庭園の管理

トゥルネフォール Tournefort : Joseph Pitton de ~, 1656~1708 年 フランスの植物学者
花の形を基準とした植物分類法を確立

ドドエンス Dodoens : Rembert~, 1517~85年 フランダルの医師・植物学者
『植物の歴史』 *A History of Plants* (1554年)
『植物図譜六部』 *Stirpium Historiae*, *Pemptades sex* 30巻として集大成

トムソン Thomson : James ~, 1700頃~48年 スコットランド生まれ 詩人・劇作家
『季節』 *The Seasons* (1730年) [英国の愛国歌“Rule Britannia!”1740年 ミュージカル『アルフレッド』の中の歌]

ドライアンダー Dryander : Jonas Carlsson ~, 1748~1810年 スウェーデン 植物学者

ドライデン Dryden : Sir Henry ~, 1688~1700年 考古学者・古物収集家 第7代準男爵
1687年に19歳でキャノンズ・アッシュビー (2500エーカーの土地と館) を相続

トラDESCANT Tradescant : John~ the elder, 1570~1638年 博物学者・園芸家、海外から多くの植物を英国に移入。その子 John~, 1608~62年 博物学者・園芸家

ドレイトン Drayton : 1563~1631年 詩人 頌詩・田園詩で知られる
『多幸の国』 *Polyolbion*

トレヴァー Trevor : Sir Lawrence ~, 1731~1813年 外科医・園芸家・政治家

トレヴィサ Trevisa : John ~, 1342~1402年 著作家・翻訳家 コーンウォール出身

トレヴェリス Treveris : Peter ~, 1525~32年頃活動
図版入りとしては初めて英語で書かれた『大植物誌』 *Grete Herball* を出版

ドロップ Drope : Francis ~, 1629?~71年 樹木栽培専門家

ドン Don : George ~, 1798~1856年 スコットランドの植物学者・植物収集家

(ナ行)

ナイト Knight : Thomas Andrew ~, 1759~1838年 園芸家・植物学者 第2代園芸協会会長

ナイト Knight : Richard Payne ~, 1751~1824年 古典学者・考古学者・政治家
絵画的な美しさに関する理論で知られる 『風景』 *Landscape* (1795年)

ニコルス Nichols : John ~, 1745~1826 年 出版業・作家

『エリザベス女王の行幸と町なかの行進』 *The Progresses and Public Processions of Queen Elizabeth* (1788 年) 『イングランドの国王と女王の意思』 *Wills of the Kings and Queens of England* (1789 年編) 『イングランドにおける風習と支出の実例…教区委員会計簿等から』 *Illustrations of the Manners and Expenses in England…deduced from Accounts of Churchwardens, Etc.* (1797 年)

ニュートン Newton : Thomas ~, 国教会の聖職者 レヴィミユス・レミニユス 『気質の基準』 *The Touchstone of Complexions*, 1581 年の翻訳

ニール Neale : John Mason ~, 1818~66 年 英国国教会聖職者・学者・賛美歌作者；有名なキリスト降臨節の賛美歌「おお来たれ、おお来たれ、エマニュエル」“O come, O come, Emmanuel”の翻訳

ネスフィールド Nesfield : William Andrews ~, 1793~1881 年 風景設計者

ネッカム Nequam : Alexander ~, 1157~1217 年 イングランドの神学者・学者 Neckam, Nequam と綴る 『称賛すべき神の知恵について』 *De laudibus divinæ Sapientiæ* 『諸物の性質について』 *De Naturis Rerum* [*On the Nature of Things*]

ノーデン Norden : John~, 1547 頃~1625 年 地図・地形図製作者

(ハ行)

バー Barre : Peter Barr, 1826~1909 年 スコットランドの種苗業者 スイセンで有名 『ナルキッソス、ラッパズイセンの花』 *Ye Narcissus, a Daffodil Flower* (1884 年)

パ Pas (または Passe) : Crispin de ~, 1564~1637 年 フランドルーオランダ人 『花の庭園』 *Hortus Floridus*

ハウ How : William ~, 『英国植物学』 *Phythologia Britannica* (1650 年)

パーキンソン Parkinson : John ~, 1567~1650 年 薬剤師・植物学者・造園家

『日のあたる楽園、地上の楽園』 *Paradisi in sole Paradisus terrestris* (1629 年) [植物の正確な栽培法が書かれた美しい園芸書] 『植物の劇場』 *Theatrum Botanicum* (1640 年) [英名 : The Theater of Plantes, or An Herball of Large Extent. 当時の英語の本草書]

(医薬に関する書)としては、最も完全で美しいと言われる]

パクストン Paxton : Sir Joseph ~, 1803~65年 造園家・建築家・政治家

1851年ロンドンで開かれた世界初の万国博覧会のクリスタルパレスの設計 イギリスで初めて公園の設計、建設をした

バサースト Bathurst : Allen ~, 1684~1775年 初代バサースト卿 政治家 ポープなど詩人、学者と親交 グロスターシャー州サイレンセスターの庭園

パーシヴァル卿 Lord Percival : John ~, 1683~1743年 初代エグモント伯爵 Catherine Dering と結婚、彼の日記は1730~40年代初頭の議会の歴史を知る上で貴重な史料

バスカビル Baskerville : Thomas ~, 1630~1720年 地誌作者

ハートヴェック Hartweg : Karl Theodor ~, 1812~71年 ドイツの植物学者 コロンビア、エクアドル、グアテマラ、メキシコ、カリフォルニアで数多くの植物の新品種を収集

バトフィールド Botfield : Beriah ~, 1807~63年

『風習と家計支出』 *Manners and Household Expenses in the Thirteenth and Fifteenth centuries: Illustrated by the Original Records* (1841年) の編者 ロクスバラクラブ Roxburghe Club へ贈呈

(Household roll of Eleanor, countess of Leicester, A. D. 1265.--Accounts of the executors of Eleanor, queen consort of Edward I. A. D. 1291.--Accounts and memoranda of Sir John Howard, first duke of Norfolk, A. D. 1462, to A. D. 1471)

ハートリブ Hartlib : Samuel~, 1600頃~1662年 大知識人 各分野の人々との膨大な書簡が残されている 『農業の遺産』 *Legacy of Agriculture*

バートン大修道院長 Abbot Burton : Thomas ~, 『メルサ大修道院年代記』 *Chronicle of Melsa* (1151年創建、1539年ヘンリー8世により閉鎖)

出典 : [de Burton, Thomas](#) (1396), [Bond, Edward A.](#) (ed.), "*Chronica Monasterii de Melsa, a Fundatione Usque ad Annum 1396, Auctore Thoma de Burton, Abbate. Accedit Continuatio ad Annum 1406*", *Rerum Britannicarum mediæ aevi scriptores (Chronicles and Memorials of Great Britain and Ireland during the Middle Ages)* (in Latin and English), Longmans, Green, Reader and Dyer

ハーバート Herbert : George ~, 1593~1633年 聖職者・詩人

バービッジ Burbidge : Frederick William Thomas ~, 1847~1905 年 探検家 ヴィーチェ
種苗園のために多くの熱帯植物を収集 [本文中イニシャル F. C. は F. W. の誤りか]

ハミルトン Hamilton : Charles ~, 1704~86 年 ペインズヒルパークは 18 世紀ヨーロッパ
で最も重要な風景式パーク

パラディウス Palladius : Rutilius Taurus Aemilianus~, 4 世紀から 5 世紀前半の作家
ガリア人 『農業について』 *De Re Rustica*

バリー Barry : Sir Charles ~, 1795~1860 年 建築家 国会議事堂の設計

バリントン Barrington : Daines ~, 1727~1800 年 法律家・古物収集家・博物学者
『ガーデニングの進歩について』 *On the Progress of Gardening*

バーリントン卿 Lord Burlington : Richard Boyle, 第 3 代伯爵 1694~1753 年 アングロ・
アイリッシュ系 建築家・政治家 枢密顧問官 パラディオ式建築を英国とアイルラン
ドにもたらした

パルトニー Pulteney : Richard~, 1730~1801 年 医師・植物学者 『植物のスケッチ』
Sketches of Botany (1790 年)

ハーレイ Harley : Robert ~, 1661~1724 年 ハーレイ写本 Harley manuscript は息子 Edward,
1689~1741 年とによるコレクション。Sir Robert Cotton、Hans Sloane のコレクション
とあわせて大英博物館の写本の基礎をなす

ハワース Haworth : Adrian Hardy ~, 1767~1833 年 昆虫学者・植物学者

バンクス Banks : Josef ~, 1743~1820 年 博物学者・植物学者

ハンベリー Hanbury : William ~, 1725~78 年 聖職者 (レスターシャー州セントピーター
教会ラングトン) 『植栽とガーデニング全解』 *Complete Body of Planting and
Gardening* (1770 年)

ハンマー Hanmer : Sir Thomas ~, 1677~1746 年 下院議長
ベティスフィールドの庭園にあった果樹についてのメモ

ヒグデン Higden : Ranulf ~, 1280 頃~1364 年 年代記編者・修道士

『ポリクロニコン：万国史』 *Polychronicon*

ビートン Beaton : Donald ~, 1802~63 年 スコットランド生まれの庭師 特に花壇の移植 bedding の実験で有名

ピープス Pepys : Samuel ~, 1633~1703 年 王政復古期の貴重な第一次資料である日記で知られる。

ヒル Hill : Thomas ~, 1528 年頃~ 英語によるガーデニングの著作で知られる

『庭師のための迷宮』 *Gardener's Labyrinth* (注)、『ガーデニングの技法』 *Art of Gardening* 『蜂の正しい飼い方』 *The right ordering of Bees*

(注) it contains 'instructions for the choice of seedes, apt times for sowing, setting, planting, and watering, and the vessels and instrumentes serving to that use and purpose' and sets forth 'diuers herbers, knots and mazes, cunningly handled for the beautifying of gardens'

ビール Beale : John ~, 1608 頃~83 年 聖職者・作家

ピール Peele : George ~, 1556~96 年 劇作家・詩人

ファインズ Fiennes : Celia ~, 1662~1741 年 旅行家・作家

『女座りで馬上から見たウィリアムとメアリーの時代のイングランド』 *Through England on a side-saddle in the time of William and Mary, Being the Diary of Celia Fiennes* (1888 年)

ファントム Fantosme : Jordan ~, ~1185 年頃 アングロノルマンの歴史学者・詩人 イタリアからイングランドへ渡る

フィッツシュテファン FitzStephen : William~, ~1191 年

フィッツハーバート Fitzherbert : Anthony~, 1470~1538 年 裁判官

『農業書』 *Book of Husbandry* (1534 年)

フィリップス Philips : Ambrose ~, 1671-1749 年 詩人 「果実の女神ポモナ」 Pomona

フィリップス Phillips : Henry ~, 1779~1840 年 植物学者・作家・風景式造園家
『果樹園の友』 *The Companion for the Orchard*. 『英国の果樹園』 *Pomarium Britannicum*
(1820 年) 『栽培野菜の歴史』 *History of Cultivated Vegetables* (1822 年) 『花の咲く
木の森』 *Sylva Florifera* (1823 年) 『花の歴史』 *Flora Historica* (1824 年)

フィールド Field : Henry ~, 1755~1837 年 薬剤師
『薬剤師の庭園の歴史』 *History of the Apothecary's Garden*, 1820 年

フェアチャイルド Fairchild : Thomas ~, 1667~1729 年 造園家
リンネと交流し植物の性の存在を証明する実験を手伝う。1717 年、科学的に人工交雑種
を作ることに成功。アメリカナデシコ Sweet william とカーネーションピンク Carnation
pink を掛け合わせた Fairchild Mule で有名 『都市の庭師』 *The City Gardner*

フェクナム Feckenham : John ~, 1515 頃~84 年 ウェストミンスター寺院大修道院長

フォーサイス Forsyth : William ~, 1737~1804 年 スコットランドの植物学者
園芸協会の創設メンバー

フォザギル Fothergill : John ~, 1712~80 年 医師・植物コレクター

ロバート・フォーチュン Robert Fortune : 1812~80 年 スコットランドの植物学者・プラ
ントハンター 250 種の新種を中国、日本から収集
「日本人の国民性の著しい特色は、庶民でも生来の花好きであることだ。花を愛する国民
性が、人間の文化的レベルの高さを証明する物であるとすれば、日本の庶民は我が国の
庶民と比べると、ずっと勝っているとみえる」『幕末日本探訪記—江戸と北京』

フォーブス Forbes : John ~, 1798~1823 年 植物学者

フッカー Hooker : Sir William Jackson ~, 1785~1865 年 植物学者・植物画家
グラスゴー大学教授 バンクスの友人

フッカー Hooker : Sir Joseph Dalton ~, 1817~1911 年 植物学者・探検家
父ウィリアムの後任としてキューの園長を 20 年間務める ダーウィンの親友

フックス Fuchs : Leonhart ~, 1501~1566 年 ドイツ人 医師・植物学者 「ドイツ植物
学の父」の一人

フラー Fuller : Thomas ~, 1608~61年 『教会の歴史』 *The Church - History of Britain*
(1655年 ロンドン)

プライアー Prior : Matthew ~, 1664~1721年 詩人・外交官

ブライス Blith : Walter ~, 1605~54年 農業関係の著作家
『イングランドの改良者あるいは農業新概観』 *The English Improver, or a New Survey of Husbandry* (1649年)

ブライス Price : Sir Uvedale ~, 1747~1829年 男爵 ヘレフォードシャー州の地主 1790年代の「ピクチャーレスク論争」の中心 『絵画的な美しさについて－崇高さと美しさと比較して』 *Essay on the Picturesque, As compared with the Sublime and the Beautiful* (1794年)

ブラウト Blout : Thomas ~, 1618~79年 難解語辞書の編纂
『ボスコベル、すなわちウースターの戦いの後の最も奇跡的な国王閣下の護持、1651年9月3日』 *Boscobel, or the History of His Sacred Majesties most miraculous Preservation after the Battle of Worcester, 3 Sep., 1651* (1660年 再版1822年)

ブラウン Brown : Lancelot ~, 1715~83年 造園家 通称 Capability Brown

ブラウン Brown : Robert ~, 1773~1858年 スコットランド生まれの植物学者
ブラウン運動で有名

プラッツ Plats : Gabriel ~, 1600頃~1644年 農学者 『田舎の農場』 *The Country Farm*

プラット Plat : Sir Hugh ~, 1552~1608年 農業に関する著作家
『人為と自然の宝庫』 *The Jewell House of Art and Nature* (1594年)
ガーデニングに関する業績は『花のパラダイス』 *The Paradise of Floral* 1600年に初版
1660年には第2部を付け加えて『エデンの園』 *The Garden of Eden*

ブラッドリー Bradley : Richard ~, 1688~1732年 植物学者
『農業とガーデニング』 *Husbandry and Gardening* (1726年) 『自然の営み』 *Works of Nature* (1721年)

プリースト Priest : Robert~, ドドエンス 『植物図譜六部』の英訳

ブリスノダス Brithnodus : 12世紀 イーリーの筆頭大修道院長 植栽と接ぎ木の技術で有名

ブリッジマン Bridgeman : Charles~, 1690~1738年 風景式庭園のパイオニア

プリドー Prideaux : Edmond~, 1693~1745年 法律家・建築画家

大プリニウス Pliny the Elder : 23~79年 古代ローマの将軍・博物学者

フリーマン Freeman : Edward Augustus~, 1823~92年 歴史家・政治家
『ウィリアム・ルーファス』 *Wm. Rufus*

プリュミエ Plumier : Charles~, 1646~1704年 フランスの植物学者

ブルック Brooke : Edward Adveno~, 1821~1910年 画家 [本文中イニシャルの A. E. は E. A.の誤りか]

ブルックショー Brookshaw : George~, 1751~1823年 花と果物の版画家
『英国の果樹』 *Pomona Britannica* (1817年)

ブレイ Bray : John~, 活動期 1377年頃 医師・植物学者

ブレイン Bulleyn : William~, 1515頃~76年 医師 『健康の管理』 *The Government of Healthe* (1558年) *A newe Book entituled the Gouvernement of Healthe.*

フレッチャー Fletcher : John~, 1579~1625年 ジェームズ1世時代の代表的な劇作家
『忠実なる羊飼ひ』 *Faithful Shepherdess*

プロット Plot : Robert~, 1640~96年 自然史学者・オックスフォード大教授 (化学)

皇帝プロブス Probus : Marcus Aurelius~, 232~82年 パンノニア出身 軍人皇帝
西暦280年頃、英国におけるブドウ畑の栽培を推奨

ブロムフィールド Blomefield : James Charles~, 1786~1857年

『ビスターの歴史』 *History of Bicester*. 『ノーフォークの歴史』 *Hist. of Norfolk* (1775年)

ヘイズリット Hazlitt : William~, 1778~1830年 随筆家・文芸評論家

『昔の庭園文献選集』 *Gleanings in Old Garden Literature*

ベーコン Francis Bacon : 1561~1626年 イングランドの哲学者 近代哲学の祖

『随想集』 *Essays* 「庭園について」 *Of Gardens*

ヘスキース Hesketh : Thomas~, 1548~1605年 政治家 植物の収集家

ベータ Bede : Saint~, 673?~735年 アングロサクソン期の聖職者・歴史家・神学者 ; 通称 the Venerable~, 『イングランドにおける教会の歴史』 *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* (*The Ecclesiastical History of the English People*) (731年)

ペッグ Pegge : Samuel~, 1704~96年 古物収集家・聖職者

『ロバート・グローステストの生涯』 *Life of Robert Grosseteste* (1793年)

ペニー Penny : Thomas~, ロンドン在住、医学博士、植物に関する非凡な知識をもってその名声は高く、第二のディオスコリデスとして有名 (ジェラード)

ヘムスリー Hemsley : W.B.~, 1843~1924年 植物学者 『庭師年代記』 *Gardener's Chronicle* (1887年)

ヘリオット Herriott : Thomas~, 1560頃~1621年 天文学者・数学者

ヘリック Herrik : Robert~, 1591~1674年 王党派の叙情詩人

『ヘスペリデス』 *Hesperides* (1648年)

ヘレスバッハ Heresbach : Conrad of~, (Konrad Heresbach) : 1496~1576年 カルバン派人文主義者 ドイツ生まれ バーナビー・グーゲ著『農業』、コンラッド・ヘレスバッハの翻訳 1578年 Barnaby Googe's Husbandry. Translation of Conrad of Heresbach

ヘンスロウ Henslow : John Stevens~, 1796~1861年 聖職者・植物学者・地質学者 チャールズ・ダーウィンの友人・先生

ヘンツナー Hentzner : Paul~, 1558~1623年 ドイツ人 イングランドなど欧州旅行記の著者

『旅行記』 *Travels* (1598 年)

ヘンリー Henley : Walter de ~, 13 世紀 作家 『農業』 *Husbandry*

ボーアン兄弟 Jean and Gaspard Bauhin : 兄ジャン 1541~1613 年、弟ガスパール 1560~1624 年 スイス生まれ 植物学者

ホイズラム Huysum : Jacob van ~, 1688~1740 年 北部オランダの植物画家 兄 Jan van Huysum 1682~1749 年

ボイル Boyle : Frederick ~, 1841~1914 年 作家・ジャーナリスト・ラン愛好家
『ランについて』 *About Orchids* (1893 年)

ホウムズ Holmes : Thomas Scott ~, 1852~1918 年 『ウッキーの教区および荘園の歴史』
History of the Parish and Manor of Wookey (1885 年)

ボウルズ Bowles : George ~, 17 世紀 植物収集家

ホーズ Hawes : Stephen ~, 1523 年没 当時は人気があった詩人
『大いなる愛 Graunde Amoure と美しき乙女 la bell Pucell との物語、楽しい気晴らし』
The Historie of Graunde Amoure and la bell Pucell, called the Pastime of Pleasure

ホッグ Hogg : Thomas ~, 1777~1855 年 スコットランド 植物学者 『カーネーション、ナデシコ、アウリキュラ、ポリアンサス、ラナンキュラス、チューリップ、ヒヤシンス、バラ、その他の花の栽培に関する実践的論稿；あわせて土壌および肥料に関する論述ならびに花ごとに最も評価の高い品種のカタログ』 *A practical treatise on the culture of the carnation, pink, auricula, polyanthus, ranunculus, tulip, hyacinth, rose, and other flowers: with a dissertation on soils and manures, and catalogues of the most esteemed varieties of each flower* (1839 年)

ボーバート Bobart : Jacob ~, 1599~1680 年 ドイツ人植物学者

ポープ Pope : Alexander ~, 1688~1744 年 詩人・風刺家・風景デザイナー
ガーディアン (1713 年 9 月 29 日) に On Gardens という風刺を寄稿
オックスフォード引用事典にシェークスピアに次いで多く引用される。

ホメロス Homer：紀元前 9～8 世紀頃 古代ギリシャの詩人 叙事詩『イリアス』 *Iliad*
『オデュッセイア』 *Odyssey*

ボーモント Beaumont：庭師 ウェストモーランドにあるレベンス Levens の設計

ボラード Bollard：Nicholas~, ウェストミンスター修道士の
パラディウスの接ぎ木、植栽、種蒔きに関連する農業関係の著作の一部を翻訳、翻案

ホリズヘッド Holinshed (ホリンシェッドとも)：Raphael~, 1520?～80 年? 年代記編
纂者 *Chronicles of England, Scotland and Ireland* (1577 年) シェークスピアなどが活用

ポール Paul：William~, 1882～1905 年 園芸家・著作家

(マ行)

マーカム Markham：Gervase~, 1568 頃～1637 年 詩人
『イングランドの主婦』 *The English Housewife* (1637 年)

マーシャル Marshall：William~, ジェラードのお抱え収集家
地中海からプラタナスの種とヒラウチワサボテンを持ち帰る。

マッティオリ Mattioli：Pietro Andrea~, 1501～77 年頃 植物学者・医師 イタリア人

マリー Murray：Andrew~, 1812～78 年 スコットランド生まれ 法律家・植物学者・動物昆虫学者
ダーウィンの自然淘汰説に反対 『英国王立園芸協会に関する本』 *The Book of the Royal Horticultural Society* (1863 年)

マリアック Latour-Marliac：Joseph Bory~, 1830～1911 年 フランス人 法律家・園芸家

マーロー Marlowe：1564～93 年 劇作家・詩人

ミーガー Meager：Leonard~, 1624 頃～1704 年 造園家
『イングランドの庭園師』 *English Gardener* (1688 年)

ミットフォード Mitford：Bertram Freeman~, 1837～1916 年
初代リーズデイル男爵 外交官・収集家 幕末から明治初期 (1866～70 年) 日本に滞在

グロスターシャー州バツフォードの屋敷に禅宗風の植物庭園 Batsford Arboretum を作庭。その際、世界各地から 20 種類以上の竹を集め、その学術的成果を『竹の庭』1896 年 *The Bamboo Garden* としてまとめた。赤穂浪士を紹介した『昔の日本の物語』 *Tale of Old Japan*

ミドルトン Middleton : Thomas ~, 1580~1627 年 詩人・劇作家 *Marriage*.

ミニャ Migne : Jacque Paul ~, 1800~75 年 フランス人聖職者 教父学 patrology [教父 the Fathers of the Church の著作、教理の研究] 『教父学全解』 *Patrologiæ cursus completus* (Complete Course of the Teaching of the Church Fathers)

ミラー Miller : Philip ~, 1691~1771 年 スコットランドの園芸家・植物学者
The Gardeners Dictionary (1731 年初版) チェルシー薬草園の主任管理者

ミリカン Millican : Albert ~, 『ランのハンターの旅と冒険』 *Travels and Adventures of an Orchid Hunter* (1891 年)

ミルトン Milton : John ~, 1608~74 年 詩人 『失樂園』 *Paradise Lost* (1667 年)

ミルナー Milner : Henry Ernest ~, 1845~1906 年 土木技術者・風景設計者 『風景式ガーデニングの技術と実技』 *The Art and Practice of Landscape Gardening* (1890 年)

メイサー Macer : Floridus ~, 1100 年代に活躍 『植物の力について』 *De viribus herbarum*
『植物誌』 *Herbal* の翻訳は 1530 年頃

メイソン Mason : William ~, 1724~97 年 詩人・聖職者・造園家

メイソン Mason : George ~, 1735~1806 年 『ガーデニングのデザインについての随想』
An Essay on Design in Gardening

トーマス・モア Sir Thomas More : 14781~1535 年 政治家・人文学者 ヘンリー8 世を
国教会の長とすることに反対し、大逆罪で斬首 『ユートピア』 *Utopia* (1516 年)

モートン Morton : John ~, 1612~1726 年 聖職者・博物学者
『ノーサンプトンシャーの自然史』 *Natural History of Northamptonshire* (1712 年)

モートン司教 Bishop John Morton : 1420 頃～1500 年 大法官 オックスフォード大学総長

モナルデス Monardus : Nicolás Monardes, 1493~1588 年 スペインの医師・植物学者

『新発見された世界からの楽しいニュース』 *Joyful News from the Newfound World*
(1580 年) [最初にタバコのことを英語で書かれた本、スペイン語を J.Frampton が翻訳]

モリス Morris : Richard ~, 『風景式庭園に関する随想』 *Essay on Landscape Gardening*
(1825 年)

モリソン Morison : Robert ~, 1620~83 年 スコットランドの植物学者・分類学者

『ブローア王立庭園』 *Hortus [Regius] Blesensis* (1669 年)、『セリ科植物分類』
Plantarum Umbelliferarum Distributio (1672 年)、『植物の歴史』 *History of Plants, Historia Plantarum Oxoniensis (Plantarum Historiæ Universalis Oxoniensis, par secunda*. 第 1 部は一度も出版されなかった。1680 年)

モロー Moreau : パリ在住 昆虫学者、ランの栽培も。輸出用の昆虫探しのために北ブラジルに派遣された探検家から 50 株のカトレア・ラビアータが送られてくる。そこに偶然サンダースが訪問し、長年探し求められていたランであることがわかる。

(ヤ行)

ユーイング Ewing : Juliana Horatia ~, 1841~85 年 英文学史上、最初の優れた子ども向け小説の作家

ユードル Udall : Nicolas ~, 1505~56 年 学者・翻訳家・劇作家

(ラ行)

ライ Rye : Brenchley ~, 1818~1901 年 大英博物館書籍係

『外国人から見たイングランド』所収 *England as Seen by Foreigners* (1865 年)

ライト Wright : Thomas ~, 1711~86 年 天文学者・数学者・建築家・庭園デザイナー

ライト Wright : Thomas ~, 1810~77 年 古物収集家・著作家

『わが国の古物に関する図書に見られる語彙集』 *Vocabularies in a Library of National Antiquities* (1857 年) (正式名) *A Volume of Vocabularies: Illustrating the Condition and Manners of Our Forefathers, as Well as the History of the Forms of Elementary Education and of the Languages Spoken in this Island from the Tenth Century to the*

Fifteenth, A Library of National Antiquities; I - II

ライト Lyte : Henry~, 1529 頃~1607 年 植物学者・古物収集家 『植物誌』 *Herbal*

ライマー Rymer : Thomas~, 1643 頃~1713 年 詩人・歴史家・古物収集家
『協定』 *Fœdera* [1101 年以降のイングランド王室と諸外国とのすべての協定、条約、
同盟等を集大成したもの]

ライリー Riley : Henry Thomas~, 1816~1878 年 翻訳家・辞書編集者・古物収集家
『ロンドン生活回想録』 *Memorials of London and London Life, in the XIIIth, XIVth, and
XVth Centuries* (1868 年)

ラヴデイ Loveday : John~, 1711~89 年 古物収集家 キャバシャムの生まれ (当時はオ
ックスフォードシャー州) オックスフォード大学モードリンカレッジ

ラウドン Loudon : John Claudius~, 1783~1843 年 スコットランドの植物学者・造園家
風景デザイナー

ラ・カンティニーニ La Quintinye : Jean-Baptiste de~, 1626~88 年 ルイ 14 世の植物学者・
造園家・果物栽培者 『完全な庭師』 *Complete Gardener* (初編 1699 年)

ラクスパー Larkspur : 『楽園』 *Paradisus*

ラトランド公爵 Duke of Rutland (1702 年創設) : John Manners, 初代 1638~1711 年、第
2 代 1676~1721 年、第 3 代 1696~1779 年 居所はダービーシャー州ハドンホールとレ
スターシャー州ベルヴォワール、双方とも風景式邸宅 landscaped estate のモデル

ラングランド Langland : William~, 1330?~1400 年? 詩人
寓意詩 (ペンネーム) ピアス・プラウマン Pierce Ploughman

ラングリー Langley : Batty~, 1696~1751 年 庭園デザイナー
『ガーデニングの新原則』 *New Principles of Gardening* (1728 年)

リー Lee : James~, 1715~95 年 スコットランド出身 植物学者・種苗業者
1730 年代発行のリンネの新分類法 (*Philosophia Botanica*) を 1760 年に初めて英訳
『植物学入門』 *An Introduction to Botany, containing an explanation of the theory of that*

science, extracted from the works of Dr. Linnaeus

リーヴズ Reeves : John ~, 1774~1856 年 博物学者 茶の知識が買われて英国東インド会社に勤務、中国から庭園用植物を収集

リージェ Liger : Louis ~, 1658~1717 年 フランスの農学者・著作家
『引退した庭師』 *Retired Gardner* (ロンドンとワイズが翻訳)

リート Lete : Nicholas ~, ロンドンの商人 シリアの珍しい植物収集、キャベツを持ち込んだ

リドゲイト Lydgate : 1370?~1450 年? 宮廷詩人・修道士

リトルトン Lyttleton : George ~, 1709~73 年 男爵 政治家・文人 18 世紀風景デザインの発展に貢献

リーランド Leland : John~, 1506?~52 年 イングランドの古美術研究家
『旅行記』 *Itinerary*

リンネ Linnaeus : Carolus ~ (ラテン語名), Carl von Linne, 1707~78 年 スウェーデンの植物学者 近代の植物分類法を確立 『自然の体系』 *Systema Naturae* (1735 年)
『植物の属』 *Genera Plantarum* (1736 年)

ル・ジャンティ Le Gentil : François~, 1726 年没 『孤独な庭師』 *Solitary Gardener*

ル・ストレンジ Le Strange : ノーフォーク州ハンスタントンの一家
ル・ストレンジ 『家計簿』 *Le Strange, Household Books*

ル・ノートル Le Nôtre : André~, 1613~1700 年 フランスの造園家 ヴェルサイユ宮殿などを設計

レイ Ray : John ~, 1627~1705 年 博物学者 エセックスの Braintree 近くの鍛冶屋の息子。グラマースクールで教育を受けた後、1644 年、ケンブリッジで自然史、特に植物学の歴史に傾倒し、1660 年にはケンブリッジ周辺の植物のカタログを出版
『植物の歴史』 *History of Plants Plantarum Umbelliferarum Distributio* (1680 年)
『植物の新手法』 *Methodus Plantarum [Nova]* (1692 年公表) 改訂版 (1703 年)

『英国の植物概要』 *Synopsis [of British Plants]* (1690 年)

『哲学的な書簡』 *Philosophical Letters* (1718 年)

レイ Rea : John ~, 1681 年没 園芸家

『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』 *Flora Ceres and Pomona*
(1665 年)

レイナム Laneham : Robert ~, 16 世紀の人 ロンドンの呉服商 ケニルワース城の壮観さ
Pageants を描写した手紙 (1575 年) 『庭園賛歌』 *Praise of Gardens*

レジナルド Reginald of Durham : 1190 年頃没 ベネディクト派修道士 聖人伝作者
聖カスバートの死後の奇跡を描いた長編 (Libellus とは小冊子の意) *Reginaldi
Monachi Dunelmensis Libellus de Admirandis Beati Cuthberti virtutibus*

レプトン Repton : Humphrey ~, 1752~1818 年 造園家 ブラウンの弟子
『風景式ガーデニングに関する観察』 *Obs. on Landscape Gardening* (1803 年)

レミニユス Leminius : Levimus [レヴィミユス] ~, 1505~68 年 オランダ人旅行者・医者
ズィーリックゼーの生まれ、1560 年にイングランドを訪問

レラマー Lelamour : John~, ハートフォード校長 メイサーの写本の翻訳 (1373 年)

レン Wren : Sir Chrstr. ~, 1632~1723 年 建築家 セントポール大聖堂などの設計

ロガン Logan : David~, 1634~92 年 プロイセン (現ポーランド・グダニスク) 生まれ
両親はイングランド人、スコットランド人 版画家・画家 『オックスフォード図版集』
Oxonia illustrata 『ケンブリッジ図版集』 *Cantabrigia illustrata*

ロクスバラ Roxburgh : 1751~1815 年 スコットランドの外科医・植物学者 長くインド
で働き、インド植物学の父

ロジャーズ Rogers : James Edwin Thorold ~, 1823~93 年 経済学者・歴史家・政治家
『農産物価格の歴史』 *Hist. of Agricultural Prices [A History of Agriculture and Prices in
England from 1259 to 1793]*

ローズ Rose : John ~, 1619~77 年 王室庭園師 Royal Gardner (チャールズ 2 世)

エセックス伯爵によりヴェルサイユに派遣

ローソン Lawson : William ~, 1554 頃~1635 年 聖職者・ガーデンニングの作家
第1部『新しい果樹園および庭』 *A New Orchard and Garden* (1618年)、第2部『農村の主婦の庭』 *The Countrie Housewives Garden* (1617年) からなる著作。1623年の版にはサイモン・ハワードによる『植物の繁殖法』 *Art of Propagating Plants* と『農夫のための実り豊かな果樹園』 *The Husband-man's Fruitfull Orchard* を加えた4部作、そこに [I.H. for Roger Jackson, 1623] と付記されている。

ローソン Lawson : Thomas ~, 1630~91年 ハーバリスト・植物学者
『新しい果樹園』 *New Orchard* (1618年)

ロック Rocque : John (もとは Jean) ~, 1704 頃~62年 フランス生まれ英国の測量士・地図製作者 ロンドンの詳細な地図を作製

ロディギーズ Loddigies : Joachim Conrad ~, 1738~1826年 ドイツ生まれ、イギリスに渡り最も有名な園芸業者に。世界各地の珍しい植物を供給
息子 George ~, 1786~1846年

ロバン Robin : Jean ~, 1550~1629年 フランスの薬剤師・園芸家。アンリ3世、アンリ4世、ルイ13世に宮廷庭師として仕えた。植物園 *Jardin des Plantes* の初代園長

ロビンソン Robinson : William ~, 1838~1935年 アイルランドの庭師
『自然式庭園』 *Wild Garden* 『イングリッシュフラワーガーデン』 *English Flower Garden* 『亜熱帯庭園』第2版 *The Sub-tropical Garden* (1879年)

ロブ Lobb : William ~, 1809~64年 プラントハンター 種苗業者ヴィーチ商会のために植物収集

ロブ Lobb : Thomas ~, 1820~94年 植物学者・プラントハンター 種苗業者ヴィーチ商会のために植物収集

ローベル Lobel : Mathias de ~, 1538~1616年 フランドルの医師・植物学者
『植物に関する覚書』 *Stirpium Adversaria* (1570年)

ロラン Lorrain : Claude ~, 1600 頃~82年 フランスの風景画家

ローリー Raleigh : Sir Walter ~, 1552~1618 年 探検家・著述家

エリザベス 1 世の寵臣であったがジェームズ 1 世の時代に反逆罪で死刑

ローレンス Lawrence : John ~, 1668~1752 年 ノーザンプトンシャー州イェルヴァートフ

トの教区牧師 『聖職者の気晴らし』 *The Clergyman's Recreation*

ローレンス Lawrence : Sir Trevor ~, 1831~1913 年 外科医・園芸家・政治家

28 年間、英国王立園芸協会 RHS 会長を務める

ロンドン London : George ~, 1640 頃~1714 年 種苗業者・庭園デザイナー

(ワ行)

ワイズ Wise : Henry ~, 1653~1738 年 造園家

ワトソン Watson : Sir William ~, 1715~87 年 医師・自然哲学者

3 . 植物名索引 （作成中）

4. 参考文献

- Alicia Amherst, *A History of Gardening in England* 第2版 1896
同 (Cambridge University Press 復刻版 2013)
- Bacon, *Essays*
- Chaucer, *The Canterbury Tales A Selection* (Signet Classics)
- Alan Mitchell, *The Trees of Britain and Northern Europe* (Harper Collins 1989)
; illustrated by John Wilkenson
- Margaret Erskine Wilson, *Wild Flowers of Britain, Month by Month* (Merlin Unwin Books 1999)
- 加用信文 『イギリス古農書考 (増訂版)』 (お茶の水書房 1989)
- 北野佐久子編 『基本ハーブ事典』 (東京堂出版 2005)
- シェークスピア 小田島雄志訳 (白水社)
『テンペスト』、『ウィンザーの陽気な女房たち』、『尺には尺を』、『恋のから騒ぎ』、
『恋の骨折り損』、『じゃじゃ馬ならし』、『十二夜』、『ヘンリー4世第1部』、『ヘンリー4
世第2部』、『ヘンリー6世第2部』、『コリオレーヌス』、『ロメオとジュリエット』、
『ハムレット』、『アントニオとクレオパトラ』、『恋人の嘆き』
- シェークスピア 大場健治訳 (研究社) 『ロメオとジュリエット』
- ジャパンハーブソサエティー 『ハーブのすべてがわかる事典』 (ナツメ社 2018)
- 白幡洋三郎 『庭園の美・造園の心』 (NHK 人間大学 1998)
- スペンサー 『スペンサー詩集』 和田勇一他訳 (九州大学出版会 2007)
『スペンサー詩集』 福田昇八訳 (筑摩書房 2000)
『妖精の女王』 福田昇八訳 (筑摩書房 1994)
- 副島顕子 『Plant Dictionary 植物名の英語辞典』 (小学館 2011)
- 竹歳誠 「田園都市は誤訳か～農地としての garden に関する覚書～」 (『新都市』 2001)
「名著『イングランドにおけるガーデニングの歴史』を読む」 (『都市緑化技術』
2020~2022)
- 中山理 『イギリス庭園の文化史ー夢の楽園と癒しの邸園』 (大修館書店 2003)
- マーガレット・B・フリーマン 遠山茂樹訳 『西洋中世ハーブ事典』 (八坂書房 2009)
- ベーコン 『随筆集』 成田成寿訳 (中公クラシックス 2014)
- ミルトン 『失楽園』 平井正穂訳 (岩波文庫 2004)
- マーガレット・ロバーツ 『ウォーデン梨の起源』 *The Original Warden Pear*

(辞書・辞典)

『グランドコンサイス英和辞典』(三省堂 2001)

『オックスフォード英語大辞典』Oxford English Dictionary

『中世英語便覧』 Middle English Compendium Michigan University

『ジェフリー・チョーサー全著作の語彙集』A Glossary for the Works of Geoffery Chaucer

英国王立園芸協会 RHS ホームページ <https://www.rhs.org.uk/plants/>